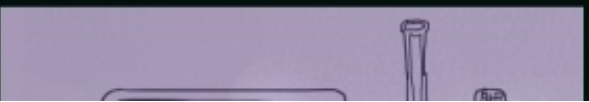
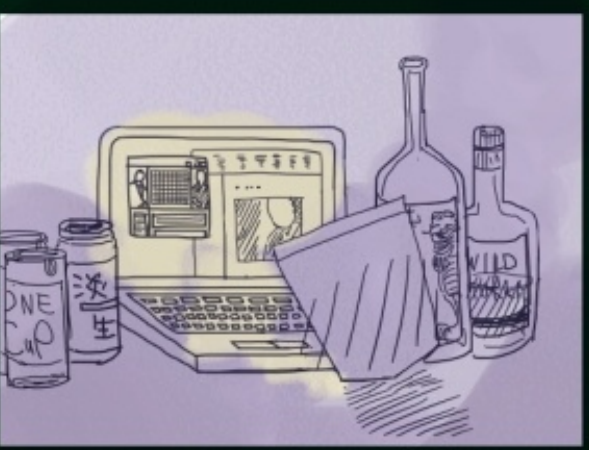
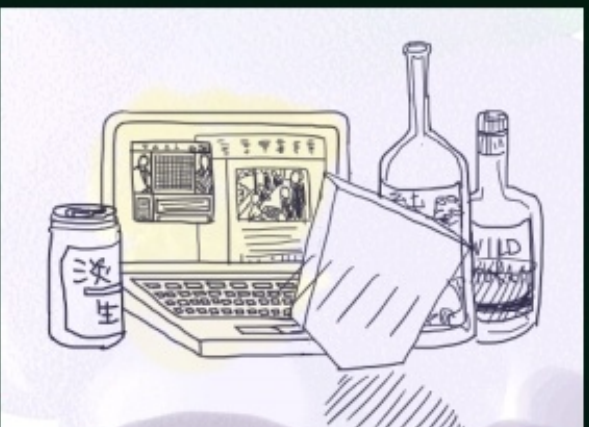


ものぐさ将棋

観戦ブログ集成

著 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇



ネット棋界では「巨匠」のブログとして知る人ぞ知る「ものぐさ将棋観戦ブログ」の電子書籍版である。このブログの昨年の四月二日にこんな一行の記事が載ったことがある、「この度、本ブログを書籍化するつもりでしたが、全出版社に拒否されました」。エイプリルフールの記事とはいえ、一日遅れだったから、半分は本音がまじってるんだらうな、と思った。「書籍化するつもり」の部分である。ブログと旅の恥は、かき捨てだ。どれほど読者がたくさん居ようと、古い記事は地中の古代文字と変わらない。読んでもらえないのである。八年間も内容の濃い記事を書き続けて、それでは釈然としないではないか。「ものぐさ将棋観戦ブログ」は記録性が高いのだ。折々の対戦結果や小ネタに一喜一憂するタイプのよくあるブログと同じ扱いをされてほしくない。ネット文化の実力の一端を示す試みとして、このたびの電子書籍化を喜ぶ。編集の手が加わったおかげで、ネットで古い記事をたどるよりも、ずっと読みやすくなった。

「巨匠」は梅田望夫の言う「観る将棋」の人である。そして、棋譜より棋士に惹かれている。棋士は特殊な稼業だ。善人では勝てない、悪人では伸びない。ブログ記事によれば、棋士とは「善と悪の大きい振幅を内面に抱え込んでいながら、結果的に全体としては、総合力の高さ、大きさや魅力を感じさせる人間」(「棋士という人間についての漠然とした話」)なのである。短い記事でそれがよく描かれた例として、「名人戦第一局「せんす事件」をめぐって」を挙げておこう。いつもは「何かに耐えているという風情の森内俊之」と「茫洋とした感じの郷田真隆」が、対局中に開閉する扇子がうるさい、ということで口論になった一幕だ。実のところ、筆者が書きたいのは善悪ではない。抑制と暴走でもいい。自尊と自棄でもいい。なんであれ、両極端な二面性が一個の人格内部でせめぎあい、それを職場で発散させて一流でいられるという幸福である。

新聞、雑誌、テレビ、書籍、いろんなところで棋士たちは惜しげもなく二面性を披露してくれる。「ものぐさ将棋観戦ブログ」でも大活躍の加藤一二三などその代表だ。けれど、それらを伝える記者や司会者、ナレーターは、どうしても一面のみを強調しがちである。その方がわかりやすい。無難でもある。そうしないと読者も視聴者もついてこない。けれど、それでは棋士の本当の魅力は伝わらないのだ。そのもどかしさを私は「ものぐさ将棋観戦ブログ」を読むことで解消してきた。このブログは、なんと言っても羽生善治である。あの天才を、二面どころか多面的に、その狂気、放心の表情、あどけない笑顔においても語ってくれる。これは自由なネットでなければ、ディープな個人ブログでなければ、なかなか成立しない観点ではないか。

二〇一二年五月、戎棋夷説亭記。

# 目次

---

(カッコ内は PDF ページ数)

序 「戒棋夷説」亭主 ( 2)

目次 ( 3)

目次 (詳細) (4)

書きおろし ( 10)

2008 年竜王戦七番勝負観戦記 (18)

羽生善治 (64)

渡辺明 (95)

加藤一二三 ( 103)

棋士論 (123)

梅田望夫 (197)

将棋界の一番長い日 ( 242)

書評 ( 264)

エッセイ (278)

コンピューター将棋 (295)

お笑い、ネタ ( 313)

囲碁 (325)

チェス (334)

観戦記 ( 339)

解説 Zeirams ( 448)

あとがき (461)

(この本の読み方)

インターネットにつないだ状態だとリンク先を開くことが可能です。

ページを飛ばしたい時には PDF ファイルの際には上部にあるページ欄に数字を入れると便利です。

ePub だと目次にリンクがはられていてすぐそのページに飛べるので便利です。

## 目次 (詳細)

---

序 「戎棋夷説」亭主

目次

目次 (詳細)

書きおろし

羽生善治小論

加藤一二三先生のこと

2008 年竜王戦第七局第二日 渡辺と羽生の伝説の一日

Shogi 百花繚乱

2008 年竜王戦七番勝負観戦記

羽生と渡辺の物語が長い中断を経て今再び始まる 2008 年 09 月 13 日

いきなり世代対決=将棋思想対決に-竜王戦第一局 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008 年 10 月 20 日

渡辺の現代後手矢倉 竜王戦第二局第一日 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008 年 10 月 30 日

渡辺終盤の錯覚 竜王戦第二局第二日 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008 年 11 月 01 日

死刑執行台のエレベーター、じゃなくて封じ手 竜王戦第三局第一日 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008 年 11 月 13 日

将棋の勝ち方教室 by Dr.Habu 竜王戦第三局 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008 年 11 月 15 日

やはり羽生の銀はよく動く 竜王戦第四局第一日 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008 年 11 月 26 日

歴史は繰り返す -竜王戦第四局第二日 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008 年 11 月 28 日

「ウルトラアキラ」 竜王戦第五局第一日 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008 年 12 月 04 日

大局観でもやり返した? - 竜王戦第五局第二日 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008 年 12 月 06 日

すべては聖地、天童へ-竜王戦第六局第二日 渡辺竜王 vs 羽生名人 (追記あり) 2008 年 12 月 12 日

石を投げあってる? 竜王戦第七局第一日 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008 年 12 月 17 日

竜王戦第七局をめぐる幻想 渡辺明と羽生善治に捧げる 2008 年 12 月 19 日

囲碁将棋ジャーナルの羽生善治 2008 年 12 月 22 日

正直者の強靱な勝負師 「情熱大陸」の渡辺明 2008 年 12 月 29 日

羽生善治

将棋世界バックナンバーの羽生、森内、渡辺のインタビュー 2007 年 09 月 01 日

プロフェッショナル/仕事の流儀「最強の二人、宿命の対決-名人戦 森内俊之 vs 羽生善治」 断章 2008

年 07 月 28 日「百年インタビュー 羽生善治」感想 2008 年 10 月 03 日  
羽生善治の毎日新聞夕刊「想創」コラム 2009 年 08 月 20 日  
考える「羽生」 - 大逆転将棋 2010 2010 年 01 月 02 日  
インタビュー「ドラマを伝える将棋 ~ 名人・羽生善治氏に聞く」 2010 年 06 月 22 日  
羽生善治・吉増剛造「盤上の海、詩の宇宙」を再読して 2010 年 07 月 01 日  
「NHK 杯将棋トーナメント 60 周年記念・歴代優勝者が選ぶ名勝負十局」感想 2010 年 12 月 26 日  
羽生善治「結果を出し続けるために」感想 2011 年 01 月 07 日  
「新潮」対談「人間の理を越えて 朝吹真理子 + 羽生善治」雑感 2011 年 03 月 28 日  
第 70 期名人戦開幕前夜 2012 年 04 月 09 日

## 渡辺明

時代が動いた日（渡辺新竜王誕生！） 2004 年 12 月 29 日  
「竜王は二十歳」連載第四回について 2005 年 01 月 28 日  
渡辺明「頭脳勝負」 2007 年 11 月 11 日  
渡辺明「永世竜王への軌跡」（日本将棋連盟） 2009 年 08 月 06 日

## 加藤一二三

加藤一二三九段 1000 敗の不滅の金字塔記録に寄せて 2007 年 08 月 25 日  
JT 杯日本シリーズ決勝 2004 年 11 月 28 日  
君は囲碁将棋ジャーナルの加藤一二三を見たか？ 2005 年 03 月 19 日  
加藤一二三@まるごと 90 分 2007 年 12 月 01 日  
名人戦第三局 BS 中継の加藤一二三 2008 年 05 月 15 日  
NHK 杯、石田&加藤の魂の感想戦。アレッ、でも加藤先生は対局者じゃないし、北浜先生タジタジだし、  
感想戦の名局でした 2008 年 06 月 23 日  
加藤一二三@週刊！将棋ステーション 2010 年 12 月 22 日  
加藤一二三@囲碁将棋ジャーナル 2011 年 01 月 18 日  
NHK 杯 羽生 vs 佐藤康 2011 年 02 月 20 日  
加藤一二三@名人戦ニコ生、学習院講演、達人戦、新著 2012 年 05 月 09 日

## 棋士論

藤井感想戦システム 2009 年 12 月 14 日  
鰻職人タケシの冒険 2010 年 09 月 06 日  
「鰻職人タケシの冒険」関連？将棋人物・用語集 2010 年 09 月 08 日  
藤井猛@週刊将棋ステーション 2011 年 05 月 22 日  
NHK 杯 藤井 vs 深浦 2011 年 01 月 24 日  
藤井 vs 三浦 兄弟弟子の仁義なき戦い 東急将棋祭編 2011 年 08 月 23 日  
鰻職人タケシの帰還 2012 年 7 月 9 日  
三浦八段のこと 2010 年 04 月 26 日

4 タテをくらった挑戦者が主役だった不思議な名人戦ー名人戦 2010 第四局羽生名人 vs 三浦挑戦者  
2010 年 05 月 20 日  
三浦弘行の奇跡 「大逆転将棋 2011」より 2011 年 01 月 02 日  
木村一基八段のボヤキ節独演会 2009 年 11 月 17 日  
朝日杯 木村 vs 佐藤和俊一名局と名実況 2009 年 12 月 25 日  
勝又清和「突き抜ける！現代将棋」 2010 年 02 月 15 日  
勝又教授による桂の歴史ー「突き抜ける！現代将棋」 2010 年 10 月 08 日  
勝又清和「突き抜ける！現代将棋」(将棋世界 2010/11 から 2011/04 について) 2011 年 03 月 04 日  
真部一男の絶局投了図 2007 年 11 月 26 日  
真部一男「升田将棋の世界」(日本将棋連盟) 2007 年 12 月 03 日  
NHK 杯 郷田と糸谷の感想戦より 2008 年 11 月 06 日  
怪物糸谷、渡辺竜王をふっとばす 2010 年 03 月 08 日  
竜王戦第四局番外編 深浦 vs 山崎の掛け合い解説@BS 中継 2008 年 11 月 29 日  
竜王戦第四局番外編 深浦 vs 山崎の掛け合い解説@BS 中継 2008 年 11 月 29 日  
銀河戦、郷田 vs 山崎 2009 年 07 月 19 日  
豊川語録 2009 年 04 月 09 日  
噂の豊川のミル・マスカラスを説明しよう 2009 年 06 月 02 日  
豊川孝弘@週刊将棋ステーション 2011 年 07 月 24 日  
NHK 杯解説の福崎文吾 2008 年 07 月 21 日  
囲碁将棋チャンネル 村山聖没後 10 年特別番組「まっすぐに生きて」 2008 年 09 月 01 日  
資本論を読む先崎少年 2005 年 02 月 15 日  
「勝負師 命がけの一手 ~ 升田幸三・大山康晴~」を見て 2009 年 08 月 22 日  
佐藤康光さんの或る一人のファン 2008 年 06 月 18 日  
小野修一八段 2008 年 06 月 30 日  
広瀬章人の神の寄せ(追記あり) 2009 年 07 月 13 日  
中田宏樹の一言  
有吉道夫九段引退 2010 年 02 月 06 日  
NHK クローズアップ現代「学びをあきらめない 74 歳老棋士・最後の闘い」感想 2010 年 07 月 23 日  
大内延介九段引退 2010 年 03 月 15 日  
山田久美@ I's show time 2008 年 02 月 11 日  
I's show time の山田久美後編 2008 年 02 月 24 日  
里見香奈さんのこと 2009 年 01 月 27 日

梅田望夫

観戦記について 2007 年 06 月 04 日  
棋聖戦第一局 梅田望夫氏のネット観戦記 2008 年 06 月 12 日  
Let's take in Shogi ! 梅田望夫の竜王戦特別観戦記 2008 年 10 月 21 日  
「観る」という行為は実は恐ろしく深いのだー梅田望夫「シリコンバレーから将棋を観る」 2009 年 04 月  
25 日  
(書評の続き) 生きながら観るー梅田望夫「シリコンバレーから将棋を観る」 2009 年 04 月 26 日

羅針盤のきかない世界ー梅田望夫「シリコンバレーから将棋を観る」書評3 2009年05月07日  
観ること、楽しむこと、努力することー梅田望夫「シリコンバレーから将棋を観る」書評4 2009年05月08日  
「将棋マニアバージョン」梅田望夫さんの棋聖戦ウェブ観戦記感想1 2009年06月10日  
「将棋マニアバージョン」梅田望夫さんの棋聖戦ウェブ観戦記感想2 2009年06月11日  
コンピューターの感覚と人間の感覚ー棋聖戦第五局梅田望夫観戦記 2009年07月18日  
金子金五郎の加藤一二三分析 2009年12月21日  
再度金子金五郎の加藤一二三分析について(追記アリ) 2009年12月22日  
羽生のアガペーと深浦のエロスー相思相愛問題をめぐって 2010年06月09日  
書評 梅田望夫「どうして羽生さんだけが、そんなに強いんですか？」 現代将棋と進化の物語 2010年11月30日

## 将棋界の一番長い日

将棋界の一番長い日の佐藤康光 2008年03月04日  
将棋界の一番長い日2009 スケッチ 2009年03月04日  
ドキュメント 将棋界の一番長い日(追記あり) 2010年03月29日  
将棋界の一番長い日2010 2010年03月03日  
将棋界の一番長い日2011 2011年03月03日  
「ドキュメント2011 将棋界の一番長い日」感想 2011年03月29日  
将棋界の一番長い日2012 2012年03月03日

## 書評

中平邦彦著 「棋士・その世界」 2005年01月12日  
「純粹なるもの」「戦う将棋指し1、2」「生きてこそ光り輝く」 2005年03月17日  
河口俊彦「新対局日誌1から8」をまとめ読み 2008年01月05日  
「ヒカルの碁」感想 2010年06月27日  
中原誠編 山田道美将棋著作集第八巻 随筆 評論 詰将棋 2012年02月28日  
中原誠編 山田道美将棋著作集第七巻 日記 2012年03月01日  
里見香奈「好きな道なら楽しく歩け」(双葉社) 2010年08月03日

## エッセイ

棋士という人間についての漠然とした話 2005年02月21日  
小林秀雄「感想」から 将棋の記憶・イメージ能力に関連して 2008年01月07日  
現代将棋とモダンアートについての雑談 2008年08月05日  
maro\_chronicon さんの名人戦第二局大盤解説会記事 2008年06月27日  
Soccer and Shogi ーイビチャ・オシム 朝日新聞インタビュー 2009年03月31日  
「将棋と時間 将棋に見る有限性の考察」について 2010年06月21日  
Zeirams 大師とものぐさ居士の禅問答 2011年03月30日

朝吹真理子さんの日経新聞王座戦郷田 vs 村山観戦記 2011年04月24日

## コンピューター将棋

保木邦仁・渡辺明「ボナンザ VS 勝負脳」 2007年08月18日

将棋における人間とコンピューター雑感 2008年07月14日

コンピューター将棋選手権の解説 by 勝又教授@囲碁将棋ジャーナル 2009年05月30日

世界コンピューター将棋選手権雑感 2009年05月14日

続・将棋における人間とコンピューター雑感 2010年12月18日

囲碁将棋チャンネル特番「コンピュータからの挑戦清水市代女流王将 vs あから 2010」感想  
2011年01月17日

将棋ソフトのボンクラーズが米長永世棋聖を破る(第1回将棋電王戦) 2012年01月15日

## お笑い、ネタ

ご主人様王手ツッコミ、中井さんの名言等雑記 2007年11月24日

昨日の記事のコメント欄より 2008年04月25日

「声に出して読みたい手筋」を勝手に真似してみよう！ 2008年10月06日

モテる将棋女子力を磨くための4つの心得「王手飛車をかけられない女をアピールせよ」等 2011年04月29日

ものがたり「天空の城ファンタ」011年12月24日

ドリフコント もしもローラが将棋番組の聞き手をしたら・・・) 2012年03月28日

## 囲碁

張栩@トップランナー 2009年07月20日

藤沢秀行と坂田栄男の封じ手をめぐるせめぎあいーNHK「迷走～碁打ち・藤沢秀行という生き方～」より 2009年12月17日

藤沢モト「勝負師の妻ー囲碁棋士・藤沢秀行との五十年」 2010年02月25日

## チェス

羽生二冠、チェスで仏チャンピオンと引き分け 2011年11月01日

チェスで羽生善治がナイジェル・ショートと引分け 2012年04月26日

## 観戦記

名人戦第一局「せんす事件」をめぐって 2007年04月12日

名人戦第六局、「おどろきました」(森下卓先生の口調で 2007年06月16日

祝 森内第18世永世名人誕生！ 2007年06月30日

一二三ブラヴォー！！！！ 2007年08月26日



東西対抗ネット戦 羽生 vs 谷川 (解説 渡辺) 2007年10月21日  
NHK杯 羽生 vs 中川 2007年10月16日  
週刊将棋を読んで 再度王座戦第三局 4七銀をめぐって 2007年10月10日  
女流王位戦第五局 石橋女流四段が女流王位を奪取 2007年11月06日  
竜王戦第六局 (ジャーナルを見てやっとすごい名局だったと理解した私) 2007年12月15日  
羽生二冠 vs 長沼七段 2008年02月03日 NHK杯  
名人戦第三局 羽生マジックという有名すぎるが誰も本当の意味を知らない言葉 2008年05月10日  
名人戦第六局 羽生善治が名人位を奪回し第19世永世名人の資格を取得 2008年06月19日  
竜王戦決勝トーナメント 羽生名人 vs 深浦王位 2008年08月16日  
竜王戦決勝トーナメント 羽生名人 vs 丸山九段 2008年08月21日  
「出雲のイナズマ」記念すべき初戴冠 倉敷藤花第二局 清水倉敷藤花 vs 里見女流二段 2008年11月24日  
NHK杯決勝 羽生名人 vs 森内九段 2009年03月23日  
名人戦第七局 羽生名人 vs 郷田九段 2009年06月25日  
竜王戦第三局渡辺竜王の名手 7九銀周辺のコンピューターソフトの読み 2009年11月19日  
里見香奈女流名人誕生 2010年02月12日  
NHK杯決勝 羽生 vs 糸谷、大和証券ネット女流最強戦中井 vs 矢内 2010年03月22日  
久保利明が「トリプル・ルッツ」で王将位奪取ー 2010王将戦 2010年03月19日  
名人戦 2010 第三局 羽生名人 vs 三浦八段 2010年05月08日  
2010 竜王戦挑決第一局 羽生三冠 vs 久保二冠 2010年08月17日  
2010 王位戦 深浦王位 vs 広瀬挑戦者 第四局までを振り返って 2010年08月23日  
深浦との死闘を制して広瀬新王位誕生ー千日手続きの激闘 2010年09月03日  
熊八ご隠居のみた王座戦第二局 羽生王座 vs 藤井九段 2010年09月23日  
竜王戦が終わってー 2010 竜王戦第六局 渡辺竜王 vs 羽生名人 2010年12月16日  
木村朝日誕生！朝日杯準決勝決勝 2011年02月12日  
羽生善治三連覇で九回目の優勝 NHK杯 羽生 NHK杯 vs 糸谷五段 2011年03月27日  
久保二冠堅持 王将戦第六局 vs 豊島挑戦者 棋王戦第四局 vs 渡辺挑戦者 2011年03月22日  
名人戦第七局 森内名人復位 2011年06月23日  
2011 棋聖戦第二局 羽生棋聖 vs 深浦九段 2011年06月26日  
羽生が王位奪還 2011 王位戦第七局 広瀬 vs 羽生 2011年09月14日  
渡辺が王座を奪取 2011 王座戦第三局 羽生 vs 渡辺 2011年09月28日  
将棋世界 2011 / 11 王座戦第一局観戦記 2011年10月04日  
2011 JT将棋日本シリーズ決勝 羽生 JT杯 vs 渡辺竜王 2011年11月30日  
渡辺竜王八連覇 2011 竜王戦第五局 渡辺竜王 vs 丸山九段 2011年12月03日  
加藤桃子が女流王座を獲得 2011年12月13日  
2012 王将戦第一局 久保王将 vs 佐藤九段 2012年01月10日  
2012 棋王戦第二局 久保棋王 vs 郷田九段 2012年02月26日  
2012 NHK杯決勝 羽生 NHK杯 vs 渡辺竜王 2012年03月18日  
森内名人が防衛 2012 名人戦第六局 2012年06月14日  
羽生善治棋聖が防衛、タイトル獲得数 81 の新記録を樹立 2012 棋聖戦第三局 2012年07月06日

解説 Zeirams

あとがき

## 書きおろし

---

せっかくなので何本か書きおろしてみましたがなかなか思うようにいかず、正直過去の自分の記事の方がまだマシだと思うので是非そちらを読んでいただきたい・・・。

「彼が七段のころ、B級一組の順位戦で対戦したことがあった。対局がはじまってまもなくのことだった。盤の向こうで突然、羽生さんがあたかも空気を切るかのように、袈裟がけに手刀を切りはじめた。それも、何度も何度も繰り返して……。」

(加藤一二三「名人戦血風録」より)

若い頃の羽生の話だと思うのだが、羽生の対局での異常なまでの集中ぶりを伝えるエピソードだ。ほとんど「アブナイ」人である。

羽生の対局時のそういう類の話は多い。将雑誌にも完全に日常空間から隔絶したこわいくらいの羽生の表情の写真が掲載されることがある。

ある時、佐藤康光とテレビで脳内対局をした際には、佐藤のインタビューを完全にシカトして額に手をあてて集中しようとする羽生の姿が忘れがたい。また、柳瀬尚紀は観戦記担当で対局室にいる際に、何も悪いことをしていないのに羽生に猛烈に睨まれたと述懐している。対談相手の吉増剛造に触発されて、対局中に垣間見る「狂気」の世界をウツカリ、あるいは嬉々として語ってしまったこともある。

対局時の非日常の羽生善治。

一方、普段の羽生はビックリするほどフツである。明朗快活。誰とでも気さくに話をしてよく笑うという。ある時は、民放番組に出演して、今時の若い女の娘の長谷川潤に「かっこいいー」と言われて大照れでいい笑顔を見せていた。

あまりにフツすぎる日常の羽生善治。

どちらが本当の羽生か？勿論、両方とも偽りのない羽生の姿である。

吉増剛造の対談の際だったか、羽生というのは種子島に多い姓だという話が出で妙に忘れられない。鉄砲伝来の地としての種子島。

いわば、「外」と「内」の接点、境界線としての種子島。偶然だが、なんとなく羽生にふさわしい。

羽生の将棋自体、決して常識外れなものではない。基本的には従来の将棋の伝統を踏襲、継承した上で正統的に自然な指し手を積み重ねていく。あくまで「内」の世界の知恵の蓄積を尊重した将棋である。

「羽生マジック」と言われても、それは突飛な将棋文法に外れた手ではない。「内」の常識にとらわれない柔軟な発想ではあるが、よく調べるときちんとした着実な論理に基いている。「内」にありながら「外」を排除しない発想。

例えば佐藤康光は、かなり最初から「外」の要素が大きい。その革新的で斬新な発想による指し手にプロ皆が感服しながらも、残念ながら誰も真似しようとはしない。あまりにも「内」の常識と乖離しているからだ。勿論、これは佐藤康光に対するリスペクトとして言っているのだが。

一方、羽生の場合は「内」と「外」との絶妙なバランスが特徴である。将棋のあらゆる歴史・伝統を意識してそれを背負いながらも、そこから軽やかにサッと距離を置く敏捷さ。

対局においても、完全に没我の状態で、ほとんど狂気スレスレの世界に足を踏み込みかけながらも、決してあちらの世界に転落してしまわない。本当にギリギリなところでの「内」と「外」との緊張関係。

人間は基本的に「内」の世界に生きている。その方が安全だから。しかし、あまりに「内」の論理にドップ

り身を浸しすぎと、その伝統や習俗の重さに身動きがとれなくなり惰性に流されて生きてしまう。

かといって、「外」に救いを求めるのも安易な道だ。自分では「外」のつもりでいても、実は「内」の閉塞から逃れようとする意識の反映に過ぎず、「内」の世界から全く逃れ去ることが出来ていない。あるいは、単なる外の狂気に落ち込んでしまう。

羽生善治が将棋でしていることは、「内」の論理を徹底的に追求しながら、そこから「外」に安直に逃げることなく、「内」の閉じ込められた論理を崩壊される道、いや究極的には「内」と「外」の二項対立を無化させようとする一番難しく、なおかつ人間にとって恐らく唯一の希望の道のように思える。

今言ったのは、あくまで羽生の将棋の世界での話だ。私は羽生善治個人を神格化するつもりは全くない。最初に述べたように羽生は、ごくごくフツーな人である・・・、と私は思う。だから我々と同じく色々間違いも犯すだろうし、むしろ常人より「外」への感性が鋭敏なだけに間違いをおかしやすいのかもしれない。羽生は将棋という「職業」に真摯に取り組むことを通じて、人間がもしかすると現代では忘れ去っているかもしれないことを行っている人だと思う。

羽生は明らかに非凡な存在だけれども、「将棋」以外ではごくごくフツーである。私には、それが羽生の一番素晴らしいところに思えてならない。

私自身、凡庸な人間なので、羽生の将棋の勝ち負けに一喜一憂しているが、実はそんなことはどうでもいいとも思っている。

## 加藤一二三先生のこと

---

将棋ファンは皆加藤一二三が大好きだ。あの純粹無垢な熱血と、エピソードの宝庫ぶりと、どうしても憎めない人間性と。

しかし、普通のファンは、例えば羽生善治のことを尊敬するのとは、ちょっと違うニュアンスで加藤と接しているところもあるかもしれない。愛すべき人物だけれども、自分がそうあるべき、或いはそうなりたいというのではなく、ある種の変わり者として。

加藤のカトリックとしての信仰は有名だが、それについても距離を置いて、人間加藤を愛するというのも一般的だろう。

ご本人の真摯な信仰の問題なので語りにくいところがあるけれど、すこし書いてみる。

加藤のように(キリスト教に限らず)信仰を公言して実行している人間は日本人の中では少数派だ。漠然とした無神論、無宗教が大勢である。しかしながら、本当に筋金入りの無神論者も実は驚くほど少なく、意識的或いは無意識的な「宗教的」なものへの自然な受け入れがある。日本的な柔軟、あるいは中途半端な「宗教的なもの」に対する寛容。

加藤がわりと率直にキリスト教に対する信仰を綴った「老いと勝負と信仰と」(ワニブックス新書)を読むと、その信仰内容と共に、その純粹で一途な心のありようがよく伝わってくる。我々日本人一般の妙に「大人」な世間智とは対照的な、子供のままの澄み切った心。但し、加藤の場合、(別に彼の信仰がどうこうということではなく)少し現実そのものを客観的に受け入れる側面が欠如しているようにも思える。純粹だけれども、きわめて主観的。

一方、現代の日本人一般は「現実」を突に冷徹でシビアな世間智で見つめることは得意かもしれないが、つい冷笑的な現実主義に陥って、本来の人間の理想や純粹さを失ってしまっている。或いは、そういう態度を「大人」として嘯く。

しかし、そういう日本人も心の底では、そういう自分の姿の醜さに気づいている。だから、加藤一二三のような存在に接すると、意識的には面白いと思いつつも、心の深いところでは共感してしまう。少なくとも、加藤的な人間存在を受け入れる心の柔らかさは残しているのだと思う。

加藤一二三は、日本人一般が見失っている何かを感じさせる存在なのだ。加藤一二三の面白さを笑いながら、それを深いところで我々は感じている。多分、それはキリスト教とかとは関係ないレベルの話である。加藤一二三本人の言うところによると、加藤は赤ちゃんを抱くと皆泣くこともなく気持ち良さそうに静かにする、しかも「大きな丸いお腹に気持ちよくスヤスヤ眠るのではなく、赤ん坊はパッチリ目をあけて私を見上げている」そうである。また、年に何度も動かない深海魚が加藤が水槽の前に立ったら加藤の方を振り返ったことがあるそうだ。小動物にも概して好かれる、猫は言うまでもない。

人間のオーラに敏感な赤ん坊や動物たちほどではないにしても、我々大人も加藤のそういう深い部分を感じている。そして、多分それは我々現代日本人が一番見失っているものであるような気がする。

改めて過去記事を見て、この第七局の二日目についてだけ具体的に将棋について書いていたない。(あまりのことに私は小説を書いている。)

当時の棋譜中継、将棋世界 2009/3 の渡辺自戦解説、渡辺明「永世竜王への軌跡」等を参考に、二日目の流れを私なりにまとめておいた。

封じ手局面では、まだまだ難しそうだった。渡辺は第一日目の夜に 4 時間以上考えたそうである。

羽生の 9 二金が、いかにも羽生流の手渡しの手。控え室で藤井猛が「これでは間に淡路」と軽口を叩いていたが、実はこれが好手。羽生はこれしかないと考えていたが、渡辺も実は同じように考えていた。当然だが、この二人の実戦での読みのレベルは別次元である。

渡辺も前日の 4 時間の読みでこの辺りは深く読んでいたが、羽生の 5 二香成を軽視していた。これで先手が優勢に。

2 四歩では、5 二金も有力だったが、やはりそんなに簡単ではない。以下、そのように「どちらを選んでも簡単ではない」という状態が延々と続く奇跡のような将棋である。

羽生の 6 二金が逸機で、ここでは 6 二銀成りとして以下飛車を捕獲すれば先手勝ちだった。木村一基の指摘で、一度銀不成りにしたのを成るのが盲点になりやすい。

以下混戦模様になるが、渡辺の 6 五桂も羽生の 6 六金も最善である。この混戦でも二人は恐ろしく深く正確に迅速に読んでいる。

今度は渡辺勝ちになったが、6 四歩が今度は渡辺のミス。6 六角が詰める逃れの詰める。渡辺はこれを完全にウっかりしたそうである。

ここまで逆転の上の逆転では決着がつきそうなものだが、本局はまだまだ終らないのが恐ろしいところだ。渡辺もギリギリまで時間を使って予定変更して 5 九飛成と予定変更。つらい手だが、こういうところで他に簡単に負けになる手を指さないのが渡辺の強さだと今にして思えば感じる。

5 五歩が羽生を悩ませた好手だったが、ここでも 7 四銀との二択があり、この将棋を事後に深く調べつくした宮田敦史によると、こちらでも難解だったそうである。またしても、「どちらでも難しい。」

羽生の 2 四飛が疑問で、ここでは 4 八飛として以下 5 二金 5 三歩が詰めるで後手自信なしというのが渡辺の感想。しかし、これも実際に指してみないとわからない。どこまで行っても「分からない」将棋。

しかし、さらに渡辺の 6 四歩に対して 7 五玉なら難しかったというから驚きだ。先手玉が詰みそうで詰まない。これも宮田が深く研究したが結論は「超難解」。ここでもまだ真相は藪の中なのである。

羽生が 5 五玉だったために渡辺の勝ち筋に入る。というのはあくまで結果論で、この辺りではもう観戦している側は混乱のきわみに達していた。ツイッターの当日の騒乱が懐かしい。現地の控え室も同様である。

阿久津主税が悲鳴をあげる。

「まだわからない。発狂します。」

しかし、渡辺は焦りつつも最善の一手 1 四歩を発見する。これが決め手。

渡辺は他の指し手ではダメだと読んで、この 1 四歩以下の手を数秒しか読まずに自分の直感を信じて指したそうである。

「今振り返っても、読みに一秒でも無駄があったら、この手は選べなかった。『勝ちたい』という強い気持ちが生んだ極限の集中力がこの手を選ばせてくれたのかもしれない。」

(渡辺明「永世竜王への軌跡」より)

かくして勝敗は決した。まさしく数秒単位のギリギリ決断、指運によって結果が決まった稀に見る激闘、名局であった。

そして、振り返ったとおりに水面下の変化で「いつまでも終らない」可能性を秘めた一局、一曲であった。最後にグレン・ゲールドがバッハの「ゴールドベルク変奏曲」について述べたことを紹介しておく。

「換言すれば、これは始まりをも終わりを考えない音楽、いかなるクライマックスをもいかる解決をも持たない音楽、ポートルの恋人たちの如く「そよ風の翼の上に軽やかに憩う」音楽なのである。」

この将棋は、もっと激しいドロドロした劇的な音楽のように聞こえるかもしれないが、今時間を経て棋譜をゆっくり調べると二人の名手の奇跡的な共同作業によって紡ぎ出された軽やかな天上の響きのようにも私には聴こえるのである。



神々の世界にも人間にも修羅にも畜生にも餓鬼にも地獄にも飽き飽きしたインドの聖仏が退屈しのぎにヒョツとしたついでにたまたま思いついたゲーム、それが caturaga(チャトランガ)。

西に行っては chess となり、極東の Nippon にも辿りついた。Nippon の神か仏か何かはよく知らないが、かなり変わり者だった将棋の神様はこう考えた。

他の世界と同じものにしてはつまらない、さてどうしよう、そうだ、一回取られた駒がそれで終わりなんてつまらない、何度も使えるようにすればいいじゃないか。駒が何度も使えたっていいじゃないか！

その将棋の神様が現世に受肉して岡本太郎になり、テレビ CM で「ガラスの底に顔があったっていいじゃないか」と言ったというオカルト説を私は採用しない。

その発明に chess の世界の神は当然激怒した。なんという異端、一度死んだものは生まれ変わったりはしない、信仰によってのみ人間は義とされるのだ。

一方で、チャトランガ発祥のインドの聖仏は齒噛みした。なんとしいパクリだ。リンカネーションはわたくしのオリジナルではないか、マツタク。Nippon の神は西欧の物質的発明だけではなく、輪廻転生までコピーするのか。たいしたもんだよ。

そんな神々同士の争いには関わりなく、そうして生まれた shogi - 将棋 は着々と Nippon に根付いていった。

将棋の神様のもとに、世界中を巡回しているある神が訪れる。世界各地の神同士の絶え間ない争い衝突紛争戦争を調停するのが彼の役目だ。残念ながら彼にはほとんど権限など与えられていない。それは現在の世界をご覧になればお分かりの通り。しかしそれでも、各地の神は、彼を少々煙たがりながらも少しは意見をきく。

彼が将棋の神様に話しかける。

やれやれ、カンベンしてよ。ただでさえ世界中は問題だらけでわたくしの手余るのに、わざわざゲームの世界でも争いをつくりだすなんて。しかも、あなたのところの将棋は取った駒まで再生可能なんで終盤が激しくなって、愚かな人間たちの闘争本能に火をつけるようなものじゃない？

将棋の神様が答える。

確かに人間たちは愚かでムダな騒ぎを毎日繰り返しているわ。でも、実際に戦争するのよりは全然マシだわ。それに、ちょっとあなた、今の将棋の世界を御覧なさい。すごく面白いのよ。

あっ、将棋の神様がいつの間にか女性に……。それはともかくとして、世界調停の神は彼女の言うことを素直に聞いて地上の将棋の世界をのぞきこんでみる。

そこでは……。

加藤一二三が、昼夜と寿司を続けて注文しつつ、それでは足りずにおにぎりやリンゴジュースで栄養補給しつつ、長いネクタイで時々ズボンをたくしあげ、時には対局している相手の後ろに立って盤面をのぞきこみつつ、得意の棒銀で、自分の子供ほどの相手を勢いよく攻め込み、駒が割れんばかりのものすごい勢いで駒を盤面に叩きつけて見事に勝って会心の笑みを浮かべている。

石田和雄が猛烈な勢いでボヤキ、森けい二が控え室にやって来て「まちがえろー」と念力をかけ、谷川浩司が厳しい光速の寄せで相手を気品溢れる手つきで追いつめ、森内俊之が重厚極まりない将棋で他を圧倒しつつも投了時には「あっ負けました」と言い、佐藤康光が独創的な新手を連発しつつも「私の指し手を誰も真似してくれない」とボヤキ、郷田真隆の正統派居飛車党を絵に書いたような将棋を金井恒太が常に見つ

め、藤井猛が本当に独創的な序盤作戦で天才ぶりを発揮しつつ感想戦ではボソボソ自虐し、丸山忠久が実にプロらしい厳しい将棋を指しつつ冷えピタを頭に三枚貼り、森下卓が「驚きました」と言い、島朗が潔く投了したかと思うと、深浦康市が赤鬼のように赤く紅潮させて諦めわるく粘りぬく。

三浦弘行が左斜め上 45 度の中空を見つめ、行方尚史が二日酔いの状態で羽生を負かし、木村一基が周り全てに気を遣いすぎている。

山崎隆之はチョイ悪で、豊川孝弘がダジャレを連発し、櫛田陽一が四間飛車以外一切指さず、勝又清和が理路整然と将棋理論を説きつつ実戦では石田師匠に負けずとボヤキまくり、田村康介が早指しで飛ばし、宮田敦史が詰め将棋を解き、糸谷哲郎がスーツをほうばりつつ哲学を語る。

そして、羽生善治と渡辺明は、いつ果てるともない将棋を延々と指し続けるのだった。

世界調停の神が言う。

なにこれ、楽しそうじゃん。

将棋の神様の彼女

でしょでしょー。あなたもちょっと指してみないー？

世界調停の神

うーん、これから世界を巡らないといけないからそんな暇はないんだけどちょっとだけ・・・。

こうして将棋の神様 (の彼女) にうまく誘惑され、すっかり将棋 (と将棋の神様の彼女) にハマったことは言うまでもない。

そして、世界の紛争を調停するものがいなくなり、世界中がますます争いで混乱しているのは皆様先刻ご承知の通りである。

## 2008 年竜王戦七番勝負観戦記

---

もはや伝説の渡辺 vs 羽生 7 番勝負。羽生ファンでも今となってはもはや懐かしい。一番「観戦記」を気合を入れて書いていた頃です。

物語の発端はこうだ。

当時奨励会時代の渡辺は、低年齢なのにとてつもない勢いで勝ち続けていた。風貌がすこし似ていることから(本人がうれしかったかどうかは知らない)大山二世とも呼ばれていた。中原誠は、渡辺の活躍ぶりを知って目を輝かせていった。

「羽生さんは、この子に倒されるんだね。」

二人の対決は、最初はわりと早く実現する。渡辺は中学生でプロになりたての頃はすこし苦労したが、数年経つと頭角を現してものすごい勢いで勝ちだし、19歳の時に、王座戦で羽生に挑戦する。渡辺は、その若さに似合わないくらい落ち着きはらって、イヤ、ふてぶてしいくらいの態度でタイトル戦に挑む。羽生を、あと一步のところまで追い込むが、結局2勝3敗のスコアで惜敗する。

その際、最終局で羽生が勝ちを見つけた瞬間、指す手がブルブル震えた。渡辺は、羽生を初めて震えさせた男なのである。

王座戦では惜敗したが、竜王戦では20歳で森内に挑戦し、見事奪取する。当時流行の最盛期にあった後手8五飛を駆使した。徹底的な最新研究と合理的な指し手の積み重ね。初日も、定跡部分はほとんど時間を使わずに指し、一日目でのっぴきならない局面に突入することもあった。また、対局態度も、19歳とは思えぬ落ち着き、ふてぶてしさ、率直な発言。神経の細やかな森内からすれば、心が乱されることも多かったのではないかと思う。

下馬評では、まだ森内厚しだったのだが、フルセットでの奪取。

将棋界はニューヒーローの誕生に沸きたち、羽生世代と渡辺世代の戦争勃発かと喧伝された。いや、世代抗争というより、これから羽生と渡辺の戦いが始まるのだと。

ところが、物語は、ここからとてつもなく長い中断に入る。羽生は羽生で、特に森内に苦しめられ。一時はタイトルひとつにまで落ちこんでしまう。羽生は、渡辺世代との戦争以前に、羽生世代との過酷な競争で手一杯だった。

一方の渡辺、竜王戦でこそ毎年とてつもない強さを見せつけて現在四連覇中。特に、絶好調期の佐藤を二年連続して退けたのは、渡辺の実力の証明となった。特に一回目の防衛戦は、名勝負の名に恥じない内容で、終盤の白熱したねじりあいは、将棋ファンを唸らせたものである。

ところが、竜王戦以外で、渡辺はなかなかタイトル挑戦すらままならない。それどころか、なかなか羽生と対戦することさえ出来なかった。

順位戦では確実にクラスを上げていき、早指し戦での優勝を積み重ねながら、世間が渡辺に期待するほどの活躍が出来ていなかったのも事実である。

それにしても、あまりにも羽生と渡辺の対戦が少なすぎた。まるで、将棋の神様がファンに意地悪するように、そして「まだ早い」と、対戦を禁止しているかのよう。一方、ファンのこの二人の対戦への渴望は加速度的に昂進するばかりだった。

だから、今年ネット棋戦でこの二人が対戦した際には、大変な注目と期待が集まったのである。ところが、将棋の神様は、ここでも徹底的に意地が悪い。なんと、羽生の時間切れという、誰もが予期せぬ結末を準備

した。「まだダメだよ」、将棋の神様の高笑いが聞こえた。

しかし、将棋の神様は、ファンをじらすだけじらせておいて、しっかり最高の舞台を準備していた。神様なのはダテじゃない。お互いに永世竜王、しかも永遠に一人にしか与えられない「初代」の永世竜王をかけたの戦いを。将棋の神様も、随分無茶をするものだ。「どうだい、これなら文句はないだろう」。将棋の神様が、イタズラっぽく微笑んでいる。

しかし本来なら、渡辺が羽生に挑戦するというのが、本来のストーリーだったはずである。しかし、羽生のほうが待ちかねたように、逆に挑戦に名乗りを上げてきた。いや、竜王戦に限らず羽生はあの七冠当時の勢いを完全に取り戻している。

それにしても、羽生の竜王挑戦への道のりは、まさしく将棋の神様が周到に準備したとしか思えなかった。1組トーナメントでは初戦敗退し、陥落の危機さえあったが、かろうじて決勝トーナメントに進出。その予選決勝の相手の中原には、佐藤と森内をつぶさせておくという将棋の神様の念入りぶりだ。

さらに、決勝トーナメント。最終盤で深浦が 4 九銀としたら、丸山が 8 三金としていたら・・・。もう今の騒ぎはなかった。神の見えざる手が働いたとしか思えない。

直近の、木村との竜王戦挑戦者決定戦三番勝負も壮絶だった。木村も、持ち前の強靱な受けと、抜群の持久力で羽生を楽にさせないが、羽生もハードスケジュールの最中、長手数のおちこち勝負をまるで楽しんでいるかのような様子だった。挑戦の決まった第三局は明らかにプロ的には木村必勝と思える作戦負けの将棋を、正々堂々と力でねじ伏せてしまった。王位戦第六局も似たような感じの将棋で、とにかく力が桁違いという印象を与えた。羽生ファンの私でさえこう思った、「羽生さんって、こんなに強かったっけ。」

というわけで、渡辺にとっては、恐らく世評では厳しいと判断されるのではないかと思う。しかし、実は渡辺は、自分が不利だとか逆境だという時にこそ、もっとも力を発揮するタイプなのだ。先述の森内相手の竜王奪取の時だって、恐らく客観的にはあの時点では、まだ実力では森内が上だったろう。しかし、タイトル戦初挑戦とは思えない堂々とした人間力、 8 五飛戦法を専門的に合理的に突き詰める能力で、大仕事を難なく成し遂げてしまったのである。

8 五飛スペシャリストだった渡辺だが、その後、将棋の作戦面の選択を一変させる。

現代将棋では、後手番の作戦が最重要課題である。ゴキゲンにせよ、一手損の角換わりにせよ、その力戦振り飛車にせよ、いわば変化球であり、そのことで後手でも主導権を握ろうとしている。羽生も、基本的には後手ではその線で戦っているし、現在はそういう棋士が大勢だ。

しかし、渡辺は、後手でも変化球を投げない。先手の作戦を真っ向から受けて立っている。後手矢倉でも、通常角換わりでも、先手の作戦を全て受け止めて戦うという方針である。ある意味、勝負だけに徹するならば損な意味もある。しかし、渡辺は将棋世界のインタビューで、そのように相手の作戦を受けて戦うことが、自分の力を高めるために役立つという意味のことを言っていた。これはちょっとすごいと思う。

現代のプロ将棋は、とてつもなくシビアな世界である。そういう正攻法では、並みの棋士ではやっていけない。しかし、渡辺は竜王奪取後、しばらくそういう厳しい修行を自分に課し続けてきた。そのことを考えると、渡辺が現在のような活躍を続けているのは、むしろ評価されるべきなのかもしれない。単純に勝ちにだけ徹する作戦でなく、これだけトップの地位を保っているのだから。ここ数年の渡辺は、さらに本物の実力を涵養するための時期だったという考え方も出来ると思う。

恐らく、将棋の神様は、何もかもお見通しなのだ。渡辺に、羽生と本当に対戦できる力蓄えるまでの練習期

間を与えてきたのだ。そして、渡辺が少し不利な時ほど真価を發揮するのさえ折り込み済みで、この竜王戦を選んだのだと思う。言うまでもなく、現在の羽生は最強最良の状態である。問題は、渡辺がどういう戦い方を出来るかにかかっている。

そして私は、渡辺はこういう時にこそ、最高のパフォーマンスが出来る棋士だと信じる一人である。どういう戦い方をするのも楽しみだ。今まで通り、羽生さん相手でも、堂々と相手の作戦を受けるのもいいだろう。また、もしかしてもしかすると、最近見直されつつある 8五飛で、厳しい定跡勝負を挑むのもまたよし。

将棋の神様がこう言っているのだけは間違いない。

「とにかく、この勝負だけは見逃しちゃダメだぜ」と。

竜王戦中継サイト

羽生世代と渡辺世代という言葉があるが、第一局は、両世代の将棋に対する考え方の本質の違いが、図らずも端的にあらわれた将棋になった。

後手羽生の採用した作戦は、一手損角換わり。先手の渡辺は、羽生が右玉含みをみせて警戒しているのにもかかわらず、敢えて棒銀にでた。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
|   | 皇 |   |   |   | 王 |   |   | 科 | 皇 | 一 ▲ |
|   |   | 龍 |   |   | 平 |   | 平 |   |   | 二 渡 |
|   | 歩 | 歩 | 科 | 龍 | 歩 | 歩 | 龍 | 歩 |   | 三 辺 |
|   |   |   | 歩 | 歩 |   |   | 歩 |   | 歩 | 四 角 |
|   |   |   |   |   |   |   |   | 歩 |   | 五   |
| 皇 |   |   | 歩 |   |   |   |   | 銀 | 歩 | 六   |
| 皇 | 歩 | 歩 | 銀 | 歩 | 歩 | 歩 | 歩 |   |   | 七   |
| 皇 |   |   | 金 |   | 金 |   |   | 飛 |   | 八   |
| 皇 | 香 | 桂 | 玉 |   |   |   |   | 桂 | 香 | 九 ▼ |

しかし、渡辺の作戦は恐らく当初から棒銀で攻め倒すということではなかったのだろう。羽生が右玉に態度を決めると、銀を組み替えて、仕掛けずに駒組みを続ける柔軟な指し方にした。右玉というのは、本質的にかたくすることが出来ない囲いなので、後手に形を決めさせてしまってから、自分だけどんどんかたく囲おうという狙いなのだろう。

この辺、どちらかが若いのか分からないような、渡辺の老獪極まりない指し回しだった。そして、渡辺の代名詞、穴熊への組みかえをみせる。放置しては、先手のみどんどんかたくなるので、羽生も動かざるをえなくなった。

その動きを利用して、渡辺は二筋から襲いかかる。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
|   | 皇 | 龍 |   |   |   |   |   |   | 皇 | 一 ▲ |
|   |   |   | 王 | 平 |   |   | 平 |   |   | 二 渡 |
|   |   |   | 科 | 龍 | 龍 |   | 科 | 角 |   | 三 辺 |
|   | 歩 |   | 歩 |   | 歩 | 歩 | 歩 | 飛 | 歩 | 四 歩 |
|   |   | 歩 |   | 歩 |   |   |   |   |   | 五   |
| 皇 | 歩 |   | 歩 | 歩 |   | 銀 | 歩 |   | 歩 | 六   |
| 皇 |   | 歩 | 銀 |   | 歩 | 歩 | 桂 |   |   | 七   |
| 皇 | 香 |   | 金 | 金 |   |   |   |   |   | 八   |
| 皇 | 玉 | 桂 |   |   |   |   |   |   | 香 | 九 ▼ |

2三角と打ち込んで竜をつくり、なおかつ駒わりも角と銀桂の二枚がえ、さらに玉形も穴熊と右玉、先手の渡辺にすれば、何も不満のない展開だろう。

渡辺が、綿密に立てたプランを見事に実行に移し、局面の主導権を完全に握ったはずだった。

しかし、羽生の懐の深さが、渡辺の前に立ちふさがる。

渡辺が勢いよく 4三金と打ち込んで攻めの継続を図ったところから出た、羽生の 6四角。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 | 皇 |   |   |   |   |   |   | 皇 | ▲ 渡辺 |
|   |   |   | 王 | 王 |   |   |   |   |   | 桂    |
|   |   |   | 科 | 科 | 科 | 金 | 龍 |   |   | 歩    |
|   | 歩 |   | 歩 | 馬 | 歩 | 歩 | 歩 |   | 歩 | 二    |
| 三 |   | 歩 |   |   |   |   |   |   |   | 五    |
| 歩 |   | 歩 |   |   | 銀 | 歩 |   | 歩 |   | 六    |
|   | 歩 | 銀 |   | 歩 | 留 | 桂 |   |   |   | 七    |
|   | 香 |   | 金 | 金 |   |   |   |   |   | 八    |
| 玉 | 桂 |   |   |   |   |   |   |   | 香 | 九    |

単に 5三の地点を受けただけの手のように見えるが、この一手で、突然先手の渡辺の攻めの継続がむつかしくなった。指されてみると 6四角が光り輝いて見える。渡辺は、この 6四角を指されて、事の重大さに気づいたのだという。

このあたりの折衝について、佐藤棋王が世代間の将棋観の違いと関連させて論じているのを、特別観戦記の梅田望夫氏が紹介している。

### 【梅田望夫観戦記】(12) 佐藤康光棋王、現代将棋を語る

これ（玉の堅さ、遠さ）で簡単に勝ちと即断することはありますね。現代棋士なら。

2三角で単純にわかりやすく勝てそうというのが現代感覚なんですね。ちょっと形勢判断を誤ってしまう可能性がある。

佐藤の話は、もっと具体的に実際の局面に即した「緻密流」なのだが、敢えて端的に「現代棋士」＝渡辺について語っている部分を引用した。

(一つ大事な点として、佐藤が羽生の指し方で感心していたのは 6四角自体でなく、その前の 6七歩成から 6九角で間に合うという感覚である。)

羽生世代と渡辺世代の違いとしてよく指摘されるのは、玉のかたさの重視の度合いである。とにかく、渡辺を代表とする現代棋士は、玉をかたくすることを最優先する。渡辺が、隙あらばすぐ穴熊に組み替えようとするのは、将棋ファンならば誰でも知っているだろう。

一方、羽生世代が、玉のかたさを重視しないというわけではない。むしろ、玉のかたさを重視しないのは、もっと世代が上のベテラン棋士たちである。かつては「穴熊は邪道」という考え方が正論としてまかり通っていたことすらあるのだ。羽生世代は、そうした偏見を打ち破ってきたし、玉のかたさも従来よりは相対的には、はるかに重要視するのだが、渡辺世代ほど極端ではないということである。

佐藤は、このインタビューでははっきり言っていないが、本当はこういいたいのではないだろうか。お断りしておくが、以下は完全に私の推測であって、佐藤の実際の考えとは関係ない。

「確かに玉のかたさは重要だ。私たちの世代だって、そのことは分かっている。でも、渡辺世代は、あまりに安易に玉をかたくすればよいと考えすぎていないだろうか。将棋は、玉をかたくすれば勝てるというほど



簡単なものではない。もっと、具体的な精緻な読みと大局観に裏付けられていなければならない。渡辺世代の合理主義を徹底的に追及する姿勢は認めるが、ちょっと将棋を簡単に考えすぎていないだろうか。もっと、将棋というのは、奥行き深いものなのではないか。また、そのように考えて指すべきではないか。」佐藤の名を借りるのは失礼だから、はっきり告白しておこう。今のは、私自身が普段から漠然と感じていることである。ただ、あまりに弱すぎるアマチュアがえらそうに言うような話ではないので、心のうちにしまっていたただけである。

しかし、勿論渡辺だって、そんな単純な考え方をしているわけではないのは言うまでもないだろう。今のは、あくまで世代比較ということで、ごく大雑把に単純化してくくって言えばという話だ。一局一局、もっと具体的な読みに基づいて、どの棋士も世代に関係なく戦っているはずだ。

### 【梅田望夫観戦記】(13) 羽生名人、大局観の勝利

これを読むと、渡辺は、6四角と指されて手がなくことに愕然としたこと、さらにさかのぼって2三角と踏み込んだ大局観に問題があったかもしれない

こと、さらにそれでも何度指しても2三角と指してしまうであろうと、かなり正直に述べている。このあたりの率直さは、とても渡辺の好感の持てるところである。

実際、佐藤だって、実戦なら2三角と指してしまうだろうと正直に言っているのだ。

ただ、羽生が考えていることについては、佐藤も読みきれていなかったようだ。佐藤も、羽生も本譜の展開でよいと思っているわけではなく、ちょっとやりそこなったと思いながらも、自滅せずにじっと6四角と打ち据えたのを称えるという言い方だった。

しかし、恐ろしいことに、どうも羽生は、やりそこなったとも悪いとも思っていなかったらしい。

立会人の米長会長は「二枚がえになって飛車が成ればふつうはいいのにねえ」と羽生に問うたが、羽生は「ふつうはそうですけどね……」と答えた。

竜をつくり、二枚がえで、玉のかたさが大差なら、先手がよいというのが「普通の」大局観である。しかし、羽生はそういう先入観でないレベルで将棋を指していた。将棋が、そんなに簡単じゃないことを、本局を通じて身をもって証明したのである。

この、後半の負かされ方は、渡辺にとっては多少はショックだろう。しかし、立会いの佐藤の読みと比べても、やはり渡辺の読みの深さはただ事ではない。むしろ、羽生が相手でも、十分深い具体的読みあいの勝負ができるという手ごたえを感じ取ったのではないだろうか。

ただ一点、6四角とされて手がなかったこと、さかのぼって誰でもやりそうな2三角が問題だったかもしれない「大局観」の問題を除いては。

とはいえ、まだ一局戦っただけである。将棋に対する世代間の考え方の違い、「大局観」について判断してしまっただけは、あまりに早計過ぎるとの誹りを受けるだろう。具体的読みのぶつかり合いでも、世帯間の考え方の違いでも、本当に見逃せないシリーズになったと感じる。第二局以降も本当に楽しみだ。

一番大切なことを言い忘れていたが、本局は、大変密度の濃い好局だった。

羽生は本局にのぞんで「パリらしく芸術ともいえる将棋を指したい」と抱負を述べたが、本局は、まさに羽生一人が作り上げた芸術だったと言えるのかもしれない。

この梅田氏の言葉が、本局を総括するのにふさわしいだろう。

竜王戦中継サイト

先手羽生で初手 7六歩、後手渡辺が二手目 8四歩で相矢倉に。渡辺は、後手では基本的に先手の作戦を全て受けてたつ。羽生をはじめとして、後手では趣向をこらして主導権を握ろうとするのが大勢なので(但し羽生は先手の作戦を受けることもあり、結局は全ての戦形を指しこなすオールラウンダーである)、今時珍しい古風なやり方ともいえるが、将棋の内容自体は当然現代的である。

渡辺が取った作戦は 9五歩形だった。それに対する 6五歩が、宮田敦史五段が指した「宮田新手」。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 | 科 |   |   |   |   |   | 科 | 皇 | 一 |
|   |   | 飛 |   |   |   |   | 王 | 王 |   | 二 |
|   |   |   | 馬 | 歩 | 香 | 香 |   | 歩 |   | 三 |
|   |   | 歩 | 歩 |   | 歩 | 歩 | 歩 | 香 | 歩 | 四 |
|   | 歩 |   |   | 歩 |   |   |   |   |   | 五 |
|   |   |   | 歩 |   | 歩 | 銀 | 歩 | 歩 | 歩 | 六 |
|   | 歩 | 歩 | 銀 | 金 |   | 歩 | 桂 |   |   | 七 |
|   |   | 玉 | 金 | 角 |   |   | 飛 |   | 香 | 八 |
| ▽ | 香 | 桂 |   |   |   |   |   |   |   | 九 |

この辺の現代矢倉の動向については、将棋世界 2008/5 の勝又教授の最新戦法講義スペシャルがくわしい。この宮田新手により、先手良しとされていたが、後手にも工夫が生まれ、十分に戦えるとされている。但し、紹介されているのは銀冠に組み替えて徹底的に受けに回る順である。この回には渡辺竜王も登場している。

勝又 後手 9五歩形はどう思います？

渡辺 後手が好ましくないと思う。

勝又 銀冠に組み替える手法もありますが。

渡辺 後手がかなり守勢になるので、自分ではあまり指す気がしません。

ということで、渡辺が本譜で選んでいるのは、受ける順ではなく、 9三桂から 8五桂と跳ねて先攻する順なのである。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   |   |   |   |   |   | 科 | 皇 | 一 |
|   |   | 飛 |   |   |   |   | 王 |   |   | 二 |
|   |   |   | 馬 | 歩 | 龍 | 馬 |   | 歩 |   | 三 |
|   |   | 歩 | 歩 |   | 歩 | 歩 | 歩 | 龍 | 歩 | 四 |
| ▽ | 歩 | 科 |   | 歩 |   |   |   |   |   | 五 |
|   |   |   | 歩 | 銀 | 歩 | 銀 | 歩 | 歩 | 歩 | 六 |
|   | 歩 | 歩 |   | 金 |   | 歩 | 桂 |   |   | 七 |
|   |   | 玉 | 金 | 角 |   |   | 飛 |   | 香 | 八 |
|   | 香 | 桂 |   |   |   |   |   |   |   | 九 |

この将棋は、今年9月のB1順位戦で先手行方、後手渡辺で指されている。若干手順に違いがあるが、先手が7五の歩を交換して銀を進出して押さえ込もうとする形になっている。

渡辺の場合は、基本的に棋風ゆえに、守勢一方になる作戦を嫌うようである。後手で矢倉を受けてはいるが、決して先手の言いなりにはならず積極的に攻めに行くのが現代風なのかもしれない。通常の角換わりでも、桂頭を守るために6三に上がった金を、そのまま前進して攻めに用いる渡辺新手も印象的だった。さらに、行方戦で驚いたのは、先手が入玉があるかもしれない将棋なのに、渡辺はこのあと後手でも穴熊に組み替えていた。攻めておいて、穴熊に囲いなおすという、渡辺らしい指し方だった。主導権を握り、なおかつ玉もかたくという欲張った指し方ともいえるが、やはり、合理的で実戦的な渡辺将棋の特徴がよく出ているのかもしれない。

但し、行方戦は、内容・結果ともに良くなかったので、当然研究修正を加えてきているのだろう。とりあえず、飛車を9三でなく9四にひいたのが違いである。ただし、5七角に対しての大長考は、いったい何を意味しているのだろうか。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   |   | 馬 |   |   |   | 科 | 皇 | 一 |
|   |   |   |   |   |   |   | 王 |   |   | 二 |
|   |   |   |   | 歩 | 龍 | 馬 |   | 歩 |   | 三 |
|   | 飛 | 歩 | 歩 |   | 歩 | 歩 | 歩 | 龍 | 歩 | 四 |
|   |   |   | 銀 | 歩 |   |   |   |   |   | 五 |
| ▽ |   | 歩 |   |   | 歩 | 銀 | 歩 | 歩 | 歩 | 六 |
|   | 歩 | 玉 |   | 金 | 角 | 歩 | 桂 |   |   | 七 |
|   |   |   | 金 |   |   |   | 飛 |   | 香 | 八 |
|   |   | 桂 |   |   |   |   |   |   |   | 九 |

局面が漠然としていて指し手が難しいそうだが、このあたりまでは想定できそうなだけに、敢えて腰を入れて考えているところに、何か重みを感じる。前局「何とかなるだろう」で失敗しているので、徹底的に構想を固めて練ってから指そうということなのだろうか。

やはり穴熊にもぐろうとするのか、あるいは局面に応じた柔軟な手を指すのか。なんとなく、私は後者なのではないかという気がしている。

一方、羽生の矢倉で印象的だったのは、佐藤との棋王戦第5局である。現代矢倉の主流 8五歩形に対して

先手が穴熊を見せる順で、通常 9九玉に 6四角と穴熊を牽制するのに、羽生は 3三桂と、先手に穴熊に十分組ませる順を選択した。結果的には、佐藤が一方的に攻めて勝ったのだが、実はよく調べると後手も指せる順があったそうである。(将棋世界 2008/6 の、小暮克洋氏が佐藤将棋王に取材した記事に詳しい。) とにかく穴熊を阻止するというのが通常の考え方だが、羽生がきわめて重要な勝負でそれに敢えて別の指し方・考え方でチャレンジしているのが注目される。佐藤の話も、そういう羽生の意図に敏感に呼応するかのようで、とても興味深かった。羽生世代と渡辺世代の、微妙な考えの違いを理解するために、役に立つかもしれない。

但し、対局者二人の話を聞くと、「世代対決」というよりは、あくまで「個人と個人」という意識が強いようである。BS で流れた第一局の事前インタビューより。

渡辺 世代というよりは、羽生さんと久々に大きな舞台で戦うので、まあそれがどうなるかなというところですね。

羽生 勿論最初の王座戦の時は少し感じましたが、今は年の差を感じるということはなく、同じ土俵で対戦するという心境ですね。

ファンとしても、世代による将棋観の違いにも興味はあるが、無論究極的には、渡辺と羽生、羽生と渡辺の個人の戦いが見たいのである。

竜王戦中継 plus では、質問コーナーが新設された。この藤井さんの言葉は、システム構築で「しっかり準備」して対局に臨んだ人の言葉なので重みがあるし、橋本さんの「なぜ深浦は羽生に強いのか」の分析も興味深い。

そして、この橋本のサービス精神あふれるポーズ……。

「目立ちたがりだっっていいじゃないか、ハッシーだもの(みつを)」

竜王戦中継サイト

大長考の末の封じ手は 9八歩だった。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   |   |   | 皇 |   |   | 科 | 皇 | 一 |
|   |   |   |   |   |   |   | △ | 王 |   | 二 |
|   |   |   |   | △ | △ | △ |   | △ |   | 三 |
|   | 皇 | △ | 歩 |   | △ | △ | △ | △ | △ | 四 |
|   |   |   | 銀 | 歩 |   |   |   |   |   | 五 |
|   |   | 歩 |   |   | 歩 | 銀 | 歩 | 歩 | 歩 | 六 |
| 皇 | 歩 | 玉 |   | 金 | 角 | 歩 | 桂 |   |   | 七 |
| 皇 | △ |   | 金 |   |   |   | 飛 |   | 香 | 八 |
| △ |   | 桂 |   |   |   |   |   |   |   | 九 |

▲羽生  
桂歩

穴熊に組み替える可能性も少しはあるのではないとも言われたが、棋譜コメントに追加された渡辺本人の感想にあるように 2五歩 1三銀となっていないで、いきなりもぐるうとしてもうまくかためられない。羽生も、渡辺の意見に同調していた。

実は、私もそう思っていたのだよね。って昨日書け。思ったことを書かないでいて、後で当たっていると後悔する。あっ、思ったことを書いていたら大ハズレというのが実はそれより断然多いのを今すっかり忘れていました・・・。

とにかく、細そうに見える攻めをつなげていこうという渡辺竜王らしい一手だった。

王座戦第二局は、後手の羽生がかなり細いのではないかという攻めをつなぎ、自玉のかたさをいかして勝った将棋だったが、その際渡辺はブログで冗談めかしてこう書いている。

ちなみに、仕掛けから70手目あたりまで現地は先手優勢の見解だったようですが、僕とボナンザの検討では後手もやれる、でしたよ。僕とボナンザは棋風(玉の堅さ>駒の損得)がそっくりで、大体同じような評価を出すんですよね。今日も僕が「囲いがしっかりしている後手を持ちたいな」と思っていたらボナンザも「-10」とやや後手持ちの評価。さすが相棒(笑)

その後、控え室の検討陣は、かなり先手の羽生がよいという判断を下していたが、実際は難しかったようである。棋譜解説に追加された感想戦のコメントは、とても興味深いので一読の価値がある。(スクロールしないと下に隠れて見えない場合が多いのでご注意を。)

例えば、ごく自然に見えた 6三とが疑問で、じっくり 7四とと、ひきつけておくべきだったそうである。なかなか指せませんよね。実際羽生さんでも指せていないのである。本当に将棋というのは間違えるように間違えるように出来ているゲームだと思う。

とにかく、両対局者の感想を読んでいると、いつも思うが将棋というのは深く読めば読むほど、そう簡単に均衡が崩れないし、勝負もつかないゲームだと感じる。前局の羽生の 6四角周辺の大局観が代表例で、パッと見ではどう見てもどちらかがよいように見えても、深く掘り下げるとそうではないということが、あ

まりにも多いのだ。

さらに進んで、この場面で渡辺は 6九銀と直接相手玉に迫っていったが、 2七銀ともたれて指すのが有力だったそうである。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   |   |   |   |   |   |   |   | 王 | 皇 | 一 ▲  |
|   | 飛 |   |   | 馬 | 馬 | 王 |   |   |   | 二 羽生 |
|   |   |   |   | 馬 |   | 馬 | 馬 |   |   | 三 生  |
| 皇 |   | 歩 |   | 馬 | 馬 | 馬 |   | 馬 |   | 四 歩  |
|   |   |   | 皇 |   |   |   | 歩 |   |   | 五 一  |
| 馬 | 馬 | 桂 | 馬 | 歩 | 銀 | 歩 |   | 歩 |   | 六    |
| 歩 |   | 金 |   | 角 | 歩 | 桂 |   |   |   | 七    |
| 玉 | 歩 | 金 | 歩 |   |   | 飛 |   | 香 |   | 八    |
|   | 桂 |   | 馬 |   |   |   |   |   |   | 九    |

勿論渡辺も考えてはいて、その後の 5五歩が見えていなかったの見送ったそうである。気になるのは、羽生はこの場面ではどう考えていたかということである。羽生はこういう玉や主戦場とは遠いところへ金銀打ちが得意中の得意なので。(正確には疑問手だったらしいが) 名人戦第三局の土壇場での 6九銀は印象的だったし、今回の立会いの藤井さんも、この種類の手でとてつもない逆転負けを喰らったことがあるのだ。

羽生ならば、 2七銀だったのではないだろうか。

本局で渡辺が一番悔やんでいたのがこの 8三桂。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   |   |   |   |   |   |   |   | 王 | 皇 | 一 ▲  |
|   | 飛 |   |   | 馬 | 王 |   |   |   |   | 二 羽生 |
|   | 馬 |   |   | 馬 |   | 馬 | 馬 |   |   | 三 金  |
| 皇 |   | 歩 |   | 馬 | 馬 | 馬 |   | 馬 |   | 四 一  |
|   |   | 角 |   |   |   |   | 歩 |   |   | 五 歩  |
| 馬 | 金 | 桂 |   | 歩 | 銀 | 歩 |   | 歩 |   | 六 四  |
| 歩 |   |   | 皇 | 歩 | 桂 |   |   |   |   | 七    |
|   | 玉 |   |   |   | 飛 |   | 香 |   |   | 八    |
|   |   |   | 馬 |   |   |   |   |   |   | 九    |

この手については、[渡辺明ブログ](#)できわめて率直に記述されている。竜王戦中継 plus に「同飛成としたらどうか？」という素朴な質問が届いていたが、渡辺は 4二角成の順の変化を読んで、この当然の一手がエアポケットになってしまったそうである。プロならではの錯覚とも言える。桂を渡すと、 1二玉の時に 2四桂、 2三玉には 3五桂の筋が生じて詰んでしまい。本人の表現を借りると「プレゼント」してしまったわけである。[この渡辺の表情しぐさ](#)に、その気持ちがよく現れていると思う。

対局を落としただけでもつらいはずなのに、それを改めて記事にして一般に公開するというのは、かなり精神力の要る作業のはずである。つい、我々は最近では当たり前のように渡辺明ブログを読んでいるが、改

めに彼に感謝しなければいけないだろう。

控え室では、藤井さんが相変わらず、サービス精神たっぷりだった。藤井は、かなり思ったことをそのまま口に出してコメントするタイプなので、一般イメージ的には損だとは思うが、慎重を期してほとんど当然のことしか言わない棋士よりは、我々アマチュアとしてはありがたい。これからも、その場で一瞬間違えることなど恐れずに、どんどんサービスしていただきたいものである。

この出だしは渡辺にとって、当然ながら苦しい。しかし、佐藤との一年目の竜王戦でも、二連敗後第三局を終盤の絶妙手で勝って流れを変えたことがある。

本局もギリギリの高度な戦いで羽生と渡り合いながらも、ごくわずかな歯車の狂いで負けているという印象である。とにかく第三局に期待しよう。



## 竜王戦中継サイト

というようなベタなダジャレを思いついてしまったくらい、封じ手が即決め手になっていても全然おかしくないところまで進んでいる。と思ったら、しかも「死刑台のエレベーター」(マイルスが音楽をつけた)と「死刑執行人もまた死す」(F・ラング)が、ごっちゃになっていたし。

類似局では、竜王戦挑決第二局よりも、王位戦最終局が印象に残っている。本局の 3七歩成でなく、3七角成と深浦が踏み込んだ将棋で、駒得の羽生が残していそうにも思えたが、と金が予想以上に大きくて、そのプレッシャーが実に嫌味だった。

羽生はその展開を当然意識してこの変化にしたのかと思いきや、もっと過激な順を準備していた。いや、準備していたのかどうかは分からない。王位戦の時は、7七銀だったが、今回は7九玉の新手。渡辺竜王だけでなく、解説の行方八段もある手だと思っていたそうである。王位戦と同じ変化になれば、玉がと金から遠いので当然得である。

しかし、8八銀の壁銀の欠陥について、3七歩成から、銀損の強襲を選んだ。

この歩成の変化というのは、羽生は王位戦のときにも考えていたのだろうか。同じことを7七銀型でやると、どういうことになるのかな。いや、やはり壁銀を見て、この場で発見して決行することにしたのかな。

渡辺竜王が、7九玉を事前に準備していたか、この場で考えて思いついたか、どちらなのかは不明だが、とにかく工夫の一手であることは間違いない。しかし、羽生がその壁銀の弱点を的確に突いて過激に踏み込む手順で返してきた。まだ、どうなるかは分からないが、検討陣の言うように、羽生勝ちになったとしたら、渡辺にはまたしてもショックな負け方になってしまうだろう。第一局で、卓抜した大局観を見せつけられ、今度は読みの具体的深さ的確さでもしてやられたとしたら。あるいは、銀損になっても3八のと金捨てていけるという「羽生の大局観」が、やはりすごいという言い方も出来るだろう。

また、羽生は封じ手の後の展開を徹底して考えることが出来る。いくら寝不足になっても、完全に読みきりしてしまえば、それで終わりだし、実際読みきることだって十分可能な場面だろう。一方、渡辺にすれば、まさしく眠れない一夜になりそうだ。形勢が、少なくともはつきりいいとはいえなさそうだし、封じ手も4五桂と2九飛成の二通りがあり、なおかつしのがなければいけない変化だらけだ。

と、羽生に有利な条件ばかり揃ってしまっているが、ほとんど全ての変化が負けだらけでも、ただ一筋でも勝ちの変化があれば将棋はそれでいいのだ。個人的には、今回はどちらが勝ってもよく、ただ第七局まで見たいとだけ願っている。だから、明日何か起こるのを期待しよう。

ところで、本局で、羽生は矢倉を選ぶのではないかと思っていた。前局、先手番で快勝だったので、後手で「矢倉はこう指すものですよ」と往復ピンタをくравそうとするのも、羽生流としては十分ありえそうだ。また、大事な対局でも、同じ戦形ばかり指さずに常に意欲的な羽生なので、後手番では一手損角換わりを一度指しているので、今回は別の作戦にするのかとも思っていた。

しかし、一手損角換わりの連投。今のところ、後手番で一番有力とされて多く指されているのがこの戦形。ある意味、一切「遊び」なしに勝ちにいつているという見方もできるのかもしれない。

また、羽生は渡辺のポテンシャルを十分高く評価しているのかもしれない。佐藤相手の一年目の防衛戦の際に、連敗後に劇的な勝ち方をして勢いに乗ったように、うまく流れをつかむのにも長けている。したがっ

て、一切隙を見せないでいくぞと。

さらに、永世竜王がかかっている。名人戦でも、あと一步というところで森内に阻まれ、名人挑戦すら出来ない間に森内に先を越されてしまった。艱難辛苦を乗り越えて、やっとの思いで今期獲得したわけである。その苦勞を一番よく知る羽生だけに、周りが想像する以上に今回何が何でも永世竜王になっておこうと考えている可能性もあると思う。

第一局のパリ対局で、羽生は初日の観光を単独行動したという。周りに気配りを怠らない羽生としては、本当に珍しいことだったそうである。

今回、恐らく羽生は、いつもにもまして本気で勝ちに来ているのではないだろうか。

竜王戦中継サイト

初日から終盤に突入し、羽生勝ち筋と言われていたわけだが、そうは言ってもそう簡単に勝てるものなのだろうかと思ふ。しかし、二日目の羽生は本当に危なげなく完璧に勝ちきってしまった。

初日の流れがとても激しいものだっただけに、きっとその勢いで一気に切りあいの寄せ合いに持ち込んで勝つのだろうとつい思い込んでしまっていた。ところが、羽生は一切勝ちをあせることなく、確実にジワジワと差を広げて、最後は負けようがない態勢を築き上げてしまったのである。

封じ手は、本譜の 2九飛成以外に 4五桂もあげられていた。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
|   | 皇 | 科 |   | 変 | 王 |   |   |   | 皇 | 一 ▲ |
|   |   | 飛 |   |   |   |   | 変 |   |   | 二 渡 |
|   | 歩 |   | 歩 |   | 歩 | 歩 | 科 | 歩 | 歩 | 三 角 |
|   |   |   |   | 歩 | 歩 |   |   |   |   | 四 二 |
| 歩 |   | 歩 |   |   |   |   |   |   |   | 五 銀 |
|   |   |   | 歩 |   |   |   |   |   |   | 六 二 |
| 歩 | 歩 |   | 歩 |   | 歩 |   |   |   | 歩 | 七 歩 |
|   |   | 銀 | 金 | 玉 |   | 金 |   |   |   | 八 一 |
| 香 | 桂 |   |   |   |   |   | 馬 | 香 |   | 九   |

こちらの方が一気に寄せに行く順であり、それまでの流れから言えばこちらを選びたくなくても不思議ではない。それはそれで難解で、やはり後手が良いような変化手順が紹介されていた。しかし、いきなり踏み込むと当然間違っただけで負けになる可能性も当然秘められている。

羽生は底歩を打たせても、急がずに行って勝ると冷静に判断した。羽生の二日目の指し方は、終始一貫あせらずにいくということ徹底していた。初日の激しい踏み込みの後だけに、考え方の切り替えが柔軟である。ある程度戦果をあげたので、後はあせらずにやるという羽生らしい考え方の転換。

さらに、印象的だったのが、 5二歩に対して 4一玉と逃げたところ。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
|   | 皇 | 科 |   | 変 |   | 王 |   |   | 皇 | 一 ▲ |
|   |   | 飛 |   |   | 歩 |   | 変 |   |   | 二 渡 |
|   | 歩 |   | 歩 |   |   | 歩 | 科 | 歩 | 歩 | 三 角 |
|   |   |   |   | 馬 | 歩 |   |   |   |   | 四 銀 |
| 歩 |   | 歩 |   |   |   |   |   |   |   | 五 二 |
|   |   |   | 歩 |   |   |   |   |   |   | 六 歩 |
| 歩 | 歩 |   | 歩 |   | 歩 |   |   |   | 歩 | 七   |
|   |   | 銀 | 金 | 玉 |   | 玉 |   |   |   | 八   |
| 香 | 桂 |   |   |   |   |   | 歩 | 馬 | 香 | 九   |

控え室では、 同金ととって一手勝ちを目指す順ばかり検討していたようである。この場合も、難解そうだ

が 6 四金という好手があってむしろ先手が有望だそうである。恐らく気分としては早くきりあって勝ちたいところを羽生はじっと玉を逃げた。一見馬筋や重ねて 7 五角と打つ筋があって危なく見えるが、どうやって来ても 4 二銀で受けきれるとい判断である。ここでも、冷静そのもので全くあせらない羽生の判断が光った。

さらに、きわめつけは 2 二歩に対して 3 一金と受けたところ。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
|   | 皇 | 科 |   | 変 |   |   | 変 |   | 皇 | 一 ▲ |
|   |   | 継 |   |   | 歩 | 爵 | 王 | 歩 |   | 二 渡 |
|   | 平 |   | 平 |   |   | 平 | 科 | 平 | 平 | 三 角 |
|   |   |   |   | 馬 | 平 |   |   |   |   | 四 金 |
| 平 |   | 平 |   |   |   |   |   |   |   | 五 銀 |
|   |   |   | 歩 |   |   |   |   |   |   | 六   |
|   | 歩 | 歩 |   | 歩 |   | 歩 |   |   | 歩 | 七   |
|   |   | 銀 | 金 | 玉 |   |   | マ |   |   | 八   |
| 香 | 桂 |   |   |   |   | 歩 | 驥 | 香 |   | 九   |

この辺は他にも勝ち方があったようだが「最高に堅くいくなら 3 一金ですね」(森下九段。)という手を指した。さらに駄目押し的に 5 三銀打ち。全く隙を見せずに完全に受けきってしまった。この後はほとんど感想戦もなかったそうである。

森下さんが「からい」と評していた。私は「激辛」とか「からい」という表現が個人的には嫌いで、きちんと勝ちに結びつけることが出来るのならばそれは正当な指し方だと考えている。しかしこの羽生の指し方を見て、私でも「いやあ、からいよなあ」という言葉が口から漏れそうになってしまった。

非情なまでの勝負術だが、二日目を通じて羽生はどうやれば将棋を確実に勝ちきれるのかを実地でレッスンしているかのようなようだった。将棋は逆転のゲームであって、このようにスマートにすっきり勝ちきるのが、実は一番難しいことなのである。

結局、さかのぼって 3 八同金とせずに 5 三歩成といったほうが良かったそうである。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
|   | 皇 | 科 |   | 変 | 王 |   |   |   | 皇 | 一 ▲ |
|   |   | 継 |   |   |   |   | 変 |   |   | 二 渡 |
|   | 平 |   | 平 |   | と | 平 | 科 | 平 | 平 | 三 角 |
|   |   |   |   | 平 |   |   |   |   |   | 四 二 |
| 平 |   | 平 |   |   |   |   |   |   |   | 五 銀 |
|   |   |   | 歩 |   |   |   |   |   |   | 六 二 |
|   | 歩 | 歩 |   | 歩 |   | 歩 |   |   | 歩 | 七 歩 |
|   |   | 銀 | 金 |   |   |   | マ |   |   | 八 一 |
| 香 | 桂 | 玉 |   |   | 金 |   | 桂 | 香 |   | 九   |

それについても当初は後手が難解ながらも指せているといわれていたが、[行方八段が好手を後になって発見した](#)そうである。竜王戦中継 plus にある通り、それを[翌日羽生に伝える](#)と、やはり先手勝ちの変化があったという。その時に、聞かれた羽生の様子がすごい。

羽生名人は「ん、ん？うーん」と言ったきり目を閉じ黙考。十数分後にカッと目を開き

だそうである。この真理探究意欲。

なお、今回新設された棋譜 plus の企画は素晴らしい。当初は初心者向けと説明されていたが、結局あらゆるレベルのファンの要望にこたえるものになった。序盤では、それこそ初心者用の作戦解説を变化手順で示しているが、感想戦の結果も詳しく变化手順として加えている。上記記事も、ほとんどそれを参考にして書かせてもらったものである。符号で变化手順を書いてあってもちゃんと分かるよ、と見栄を張りたいたいところだが、一応自称アマ中段者の私でも余りにも手順が長いと脳内盤面がかなりおぼろげになってしまうのだ(笑)。このように変化棋譜を入力してくれば、誰にでも手順がしっかり理解できる。大変な手間が必要な作業だと思うが、まことにありがたい試みである。[お仕事ブログ](#)でおなじみの鳥記者に感謝しよう。そして、今後もこのやり方が定着しますように。

さて、結果は渡辺竜王には、とても厳しいものになった。渡辺にとっては試練の時である。しかし、実は羽生も似たような経験を通してきているのだ。NHK 系列で放送された「100 年インタビュー」で、羽生が竜王を初獲得した後に、谷川の挑戦を受け、1-4 で奪取されたシリーズのことを取り上げていた。羽生が 0-3 に追い込まれた第四局は、203 手の激闘になり、しかも入玉や持将棋模様でなく、延々と通常の攻防が続き形勢も二転三転した。最終は羽生が名手を見つけて勝ちきった。その将棋についての羽生の発言要旨。

それまでは、前を見た戦いばかりしてきたが、初めて後ろ向きの対局をした。そういう時の心境や状態が、とても印象に残っている。何とか一局いれたいと思っているが、どうにも駒が前に進まない。形勢が何度も入れ替わり、勝ち負けの揺れがすごくて、奪取されたとも勝ったとも何度も思った。最後に懸命に手を見つけて勝った。勝負のけわしさ、厳しさを知ることが出来た。

羽生は、負けたシリーズの一局をその後の自分にとって大切な将棋として位置づけているのである。現在の渡辺はまさしくそういう状況にある。勿論、まだ結果が決まってしまったわけでは全然ないが、次の第四局で、勝負以外にも何かをつかむような将棋を期待しようではないか。

ところで、第三局を受けて、将棋系ブログをしている人間の中では恐らくもっとも性格の良い [nanapon さんが、こんな記事を書かれていました](#)。nanapon さん、変な形容で紹介してしまっておめんなさい。でも、記事を読んで、本当に渡辺竜王に肩入れして応援していて、なおかつ本当にガッカリしているのが、濃紺の画面全体からにじみ出てくるかのように感じてしまう程、あまりによく伝わってきたので。人が落ちこんでいるところを申し訳ありませんが、気持ちがストレートに伝わってきて、なんかいいなーと思って、こちらはちょっとなごんでしまいました(笑)。

こんなに一生懸命応援しているかわいそうなファンもいるのだから、渡辺竜王もここは一つ頑張ってください(笑)。

羽生が事前に想定した順では多分ないのだろうが、それでも実戦の展開に柔軟に対応して、右銀を大旅行させて銀矢倉を作り上げたのは、やはりらしいところである。衛星放送でも紹介していたが、羽生愛用の研究用の駒では銀の裏だけがすりへっていたそうである。名人戦の相がかりでも、やはりこういう銀の大旅行があった。

しかし、とにかく渡辺が攻撃できる態勢で封じ手を迎えた。さすがに、羽生の大局観がすごくてこの時点で受けの先手が良いと言うことはないだろう。渡辺が、どう攻めを組み立てていくのか、二日目が楽しみである。

それにしても、渡辺の陣形が面白い。ネット中継では「中住まいカニカニ銀」と言われていた。ある人は「バルタン星人」と呼んでいた。私はそちらに一票(笑)。

ところで、なぜ羽生は相掛かりを採用したのか。余裕があるので矢倉ではない戦形にしたという見方もあるかもしれないが、私はズバリ決めに行くための相掛かりではないかと思う。羽生は相掛かりで先手を持ってとてつもない高勝率を記録しているのである。

名人戦でも三局も相掛かりが出て話題になったが、先手が大きい作戦勝ちをするか、あるいは難しい将棋になるかで、後手の決定的な対策はでてこなかった。もしかしたら、プロ全体でも相掛かりが流行するのかと思ったが、そのようなことはなかったようである。指す棋士が限定されているが、やはり独特の感覚感性が必要で、一步でも間違えると一挙に転落する危険のある厳しい将棋だからなのだろうか。

前局の時にも書いたが、羽生はこの機を逃さずに永世竜王になろうとしていると思うので、三連勝でも今回は緩めようとはしないだろうと、私は勝手に考えている。この相掛かりは、ストレートで決めに行くための選択ではないかと。

衛星放送で桐山先生が指摘されていたが、今回の渡辺は封じ手直前の場面になると、袴が盤に触れそうになるくらい近づいて考えていたそうである。さすがに鋭い観察眼で、今日の夕方の中継でも封じ手直前の渡辺が、やはり盤ギリギリに袴を近づけてすごい迫力で読みふけていた。今回は、たまたま初日の展開がはやいからなのかもしれないが。

渡辺竜王への事前インタビューも、なかなか良かった。

(第三局までの)手ごたえは？

渡辺 (明るく笑って) いや、ないですけど、全然。

聞くほうも聞くほうだけど、明るくケロっと答えるのがらしいところである。

第四局への抱負は？

渡辺 ここまでいい将棋になってないのは、自分のせいなので、将棋ファンの方々をガッカリさせちゃってるところがあると思うので、明日明後日と、何とかいい将棋に出来るよう頑張ります。

とても明るい調子で渡辺は語っていた。「将棋ファン」という言葉が、この追い込まれた状況でも出てくるのだ。泣かせるではないか。やはり、明日は渡辺に一ついれて欲しいと思う。

それにしても、衛星放送聞き手の中倉宏美さん、結構若い頃から衛星聞き手をやっていて、なんだか面白い

子だなあと感じていたけど、聞き手ぶりも板について、すっかり立派になったなあ。 オジサンの感慨が、そのまま口からもれて出た。もうこうなったら、人間オワリである。

## 竜王戦中継サイト

プロ棋士たちは、普通の人間よりはるかに濃い密度の時間を生きている。あるいは、生きざるをえない。勝ちと負けがあからさまな結果の世界で、言い訳は一切きかない。基本的には運の要素が限りなく少ない実力の世界である。しかし、ぎりぎりのところでその運がとてつもない意味をもってくる。ちょっとした一つの着手、指運としか言えないほとんど賭けといってもよい指し手が、勝負に直結してしまう。そして、今回の竜王戦の舞台のように、そのプロ棋士の人生を決めかねないような舞台で、そのように勝負が決まる瞬間がある。各人間のもつ運命や宿命を、プロ棋士は必要以上にはっきりした形で顕在化して背負っている存在である。まるでギリシャ神話のように。我々一般人は、その多少残酷ながらも魅力の尽きぬ神話ドラマに、陶然として見入るしかないのだ。

本局の終盤は、本当にそのような運命のサイコロの一擲がどちらにころぶのかよく分からない極限の戦いだった。冷静に見れば、恐らく羽生に勝ちきる方法はあったのだろう。しかし、そういうのは全て結果論である。感想戦から伝わってくるごく一端を読んでも、両対局者が水面下で恐ろしく深く広い読みをしていたのが分かる。様々な無限の筋が頭の中を駆け巡っている中から、分単位の短時間で決断して着手している。

例えば、本譜よりは宮田五段の指摘した 4七飛の順のほうがよかったと結果論ではいえるかもしれない。だが、いくら残酷な性質の一般ファンでも、「そう指せばよかったのに」とあっけらかんと言いつのはためらうはずだ。

それにしても、宮田五段の指摘とそれとは別の感想戦での検討手順を巡ってプロが言っていることは凄まじい。私は我慢して全て理解しようとしたが、ついにギブアップした。関連リンクを全部はっておくので腕に自慢の方は答えを出してください(笑)。

[宮田五段が発見した寄せ \(竜王戦中継 plus\)](#)

[山崎七段の見た第4局 \(竜王戦中継 plus\)](#)

[「宮田五段の寄せ」への羽生見解 \(竜王戦中継 plus\)](#)

[竜王戦第4局のこと \(お仕事ブログ\)](#)

[片上五段の twitter より 1 2](#)

今回の終盤は、善悪を通り越した名勝負だったのだと思う。渡辺にしても、寄せがありそうで負けを覚悟しなければいけない局面で、まさしく度胸をすえてぎりぎりの勝負手を攻撃的に放ち続けた。現時点では、厳密に良い手なのかは素人には分からないが、例えば強気に 4三玉とあがった手もその一つ。さらに、夜中のBSダイジェストで深浦王位が勝因としてあげた 8九飛。



|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
| ▲ | 皇 |   |   |   |   |   |   |   |   | 皇   |
| 一 |   |   |   | 銀 |   | 変 |   |   |   | ▲羽生 |
| 二 |   |   | と | 歩 | 歩 |   |   | 歩 |   | 金   |
| 三 |   |   |   |   |   |   | 歩 |   | 歩 | 桂   |
| 四 |   |   |   |   |   |   | 歩 |   | 歩 | 歩   |
| 五 | 歩 |   | 銀 | 金 |   | 飛 |   |   |   | 歩   |
| 六 |   |   | 銀 | 歩 |   |   | 桂 |   |   | 歩   |
| 七 | 玉 | 歩 | 桂 |   |   |   | 王 |   |   | 歩   |
| 八 |   |   | 歩 |   |   | 歩 |   |   |   | 歩   |
| 九 | 香 | 歩 |   |   |   | 銀 |   |   |   | 香   |

今書いた通り、それに対して 4七飛とする変化が難解きわまりないし、深浦も多分収録時点ではそれを知らないで言ったのだと思う。従って本当は 8九飛を勝着とはいえないわけだが、しかしある意味この手はとても印象的だった。

というのは、渡辺玉が奇跡的に打ち歩詰めで詰まないと分かっているにもかかわらず、他に 7九角と守りにもきかして保険をかけたくるところを、堂々と飛車を打ちきった。あのぎりぎりの場面で、あの手を放した渡辺の決断力と肝っ玉の据わり方を、やはり賞賛すべきだろう。その結果羽生が 4七飛の勝負手を逃して、結果的には勝ちにつながったわけだから。

一方羽生の指し手で言うと、 5二銀。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
| ▲ | 皇 |   |   |   |   |   |   |   |   | 皇   |
| 一 |   |   |   | 銀 |   | 変 |   |   |   | ▲羽生 |
| 二 |   |   | と | 歩 | 歩 | 王 |   | 歩 |   | 金   |
| 三 |   |   |   |   |   | 驥 | 歩 |   | 歩 | 銀   |
| 四 |   |   |   |   |   |   | 歩 |   | 歩 | 歩   |
| 五 | 歩 |   | 銀 |   |   |   |   |   |   | 歩   |
| 六 |   |   | 銀 | 歩 |   |   | 桂 |   |   | 歩   |
| 七 | 玉 | 歩 | 桂 |   | 手 |   | 歩 |   |   | 歩   |
| 八 |   |   | 驥 |   |   |   |   |   |   | 歩   |
| 九 | 香 |   | 歩 |   |   |   |   | 桂 |   | 香   |

玉を上がらせて竜の横効きを遮断した手だが、あそこは堂々 7八歩と竜を取ってしまっても詰まなかったそうである。つまり、渡辺とは対照的に保険をかけたのが裏目に出た。私の書いていることこそ結果論もいいところなのは承知だが、「勝利の女神は勇者に微笑む」といえなくもなさそうである。(ちょっと強引過ぎますが。)

そもそも、本局で渡辺の駒はこれ以上ないというくらい前に出た。「バルタン星人」とも称された超攻撃的シフトである。羽生が銀を大遠征して銀矢倉に使うという、これまた羽生らしい柔軟な構想のため、とにかく攻めるしかなくなったのも、幸いしたのかもかもしれない。しかし、追い込まれた場面でこのような積極的な指し方が出来たことも、やはり渡辺の勝因の一つに上げられるのではないかな。

ただ、ああいう戦い方も実は渡辺の得意とするところだそう。最近ブログをはじめた[戸辺四段](#)がこのよ

うに指摘している。

穴熊をはじめ、堅い玉を好む渡辺竜王ですが、このような薄い玉を指しこなすのも、ホントに上手いんですね。本局の玉型はバランス重視。

さて、[最近の記事](#)で書いたことを再掲させていただく。

NHK 系列で放送された「100 年インタビュー」で、羽生が竜王を初獲得した後に、谷川の挑戦を受け、1-4 で奪取されたシリーズのことを取り上げていた。羽生が0 3に追い込まれた第四局は、203手の激闘になり、しかも入玉や持将棋模様でなく、延々と通常の攻防が続き形勢も二転三転した。最終は羽生が名手を見つけて勝ちきった。その将棋についての羽生の発言要旨。

それまでは、前を見た戦いばかりしてきたが、初めて後ろ向きの対局をした。そういう時の心境や状態が、とても印象に残っている。何とか一局いれたいと思っているが、どうにも駒が前に進まない。形勢が何度も入れ替わり、勝ち負けの揺れがすごくて、奪取されたとも勝ったとも何度も思った。最後に懸命に手を見つけて勝った。勝負のけわしさ、厳しさを知ることが出来た。

羽生は、負けたシリーズの一局をその後の自分にとって大切な将棋として位置づけているのである。

今回の第四局は、まさしくその再現になった。羽生が谷川と戦った勝負も、純粋な名勝負というよりは二転三転する激闘だった、今回もやはり厳密にはお互い間違いが多いのかもしれないが、それを上回る終盤の迫力がきわだっていた。

羽生が谷川に対してした事を、今度は渡辺が羽生に対してやってのけたわけである。歴史は繰り返す。ある種の神話の主人公が、勝利を得るまでの過程で、艱難辛苦の旅路を辿るように、超一流の棋士も通過儀礼としてこのような困難を一度は体験する必要があるのだろうか。まるで、将棋の神様が、そういう棋士に必ず義務として与える試練のように。渡辺も羽生同様、その試練をひとまずは乗り越えた。厳密には負けのはずの本局で、目に見えない運も見方にして。

ただ、ここまで言うと、恐らく渡辺から抗議が来るだろう。

ということは、羽生さんが谷川さんにやられたように次で負けてしまうの？、だいたい一つ羽生さんに勝っただけでそんなに騒がないでよ、ボクの実力を皆さん一体どの程度だと思っているの？、まだ一つ返しただけでは全然満足なんかしていませんよ、と。

ということで、このあとのドラマの続きにもまだまだ注目しよう。

ところで、寄せられるかもしれないあの局面で粘り強く折れないで戦い続けた渡辺の胸中に、果たしてこの言葉が浮かんでいたのかどうか、残念ながら私には知る術がないのである。

[第四局の記事](#)に、熱狂的佐藤康光ファンの Beaverさんからコメントをいただいた。

Posted by Beaver

竜王戦第4局をみていて、渡辺竜王 = ウルトラマン説というのを思いつきました。初代ウルトラマンではなく、帰ってきたウルトラマンの方です。

郷秀樹は自由にウルトラマンに変身できるわけではなく、命の危機に陥ったときに自然にウルトラマンに変身する。渡辺明もピンチになると自然にウルトラアキラに変身してとんでもない力を出す。そしてウルトラマンは3分間しか地球上にいられないが、ウルトラアキラは竜王戦をやっている3ヶ月間しか地球上に居られない。

すみません。怒らないで・・・。

ということで、竜王戦面白くなってきました。ウルトラアキラの強さは昨年、一昨年と痛いほど思い知りました。

Beaverさん、怒るなんてとんでもない、私はこういうのには大喜びしてしまう人間です。

でも、一応渡辺明竜王の立場に立って、文句を言う必要はあるだろう。

「どういうことですか。人のことを竜王戦の三ヶ月だけで暮らすいい男のように言って。他の棋戦だって、ボクは一生懸命、全身全霊をこめて戦っているんです。他人様に言われるよりも、他で思うような結果を残せていないのを、誰よりもボクが残念だと思っているというのに。マツタク、ファンの人たちときたら・・・。」

さてと、私自身も、そういう困ったファンの一人であることをあらかじめ素早く自分で認めてしまっておきましょうか。

それにしても、やはり竜王戦の渡辺は、やはり「ウルトラ」である。Beaverさんを歯がみさせた？先々期の竜王戦でも、豪腕佐藤相手に終盤で一步もひけをとっていなかった。誰もがあの終盤には見惚れた。去年の竜王戦では、あの佐藤相手に終始内容で圧倒していた。(圧倒していたは言いすぎですか、Beaverさん?)  
そして、あの前局の羽生相手の壮絶な終盤戦。

やはり、渡辺明はタダモノではないのである。将棋世界の竜王戦事前討論で、橋本七段が渡辺をこう評していた。

(渡辺は) ずば抜けています。子供のころから知っているけどあそこまで才能を感じた人間は他にいない。天才とは彼のことを言うんだと思う。羽生さんももちろん大天才だけど、努力家でもある。羽生さんは努力する天才。ともにやってきた佐藤さんも森内さんも努力家だと思う。もちろん、渡辺さんも努力はしているんだけど、羽生さんや佐藤さんの努力に比べたら全熱量が違う。

こういう話を聞くと、渡辺にはまだまだ潜在能力が秘められているのではないかと感じる。竜王戦の「ウルトラアキラ」を見ていると、本領発揮さえすれば、羽生や佐藤でも手がつけられないところがあるのではないかと思うのだ。

戦形は相矢倉に。羽生がなぜ矢倉を選択したのかは正直よく分からないが、とにかく同じ戦法を極端に続

けて指さないようにしているということなのだろうか。何を選択してもそれなりに理由づけられるような気がする。

8五歩型でも、いちばんよく見かける穴熊に組ませかけて角を出入りして牽制するやり方でなく、6四角のまま頑張って4二銀と引き3三桂と右辺からの攻めをがっちり防ぎ、さらに宮田五段新手という2一玉からさらに銀をひきつけて固める狙いを見せるという指し方を羽生は採用した。

当然、黙っていないで渡辺が動いたところを、4五歩の反撃。BSの解説を聞いていると、同桂同桂同銀4四歩で一時的に銀損になるが、7四歩6二角をどこかでいれておいて、3四銀同金4六桂3三金5四桂で、銀を取り返せて桂損にとどまる。駒損だが、後手の陣形も乱れる。但し、後手も2一玉と一つ先に逃げてあるのが主張である。その際、1五歩6四歩といった味付けもどう入れておくか。

ということで、渡辺が駒損しながら攻めをつなぎ、羽生が受けるという展開になるのだろう。私レベルなら桂損くらいなら攻めたいというのは、この二人の場合全く参考意見にならない(汗)。きっと、「よく調べると難しい」という攻防が繰り広げられるのだろう。

あと、BSで久保八段が、4五歩には5七銀とおとなしく引いておいて、さらに6六銀と出て好形を築きたいと言っていたのが印象的。振り飛車党の矢倉感覚と謙遜していたが、確かにそこまで組めると美しい。藤井さんあたりなら、どういう考え方をするのだろうか。

午前中のBS中継で、NHKの長野アナが、谷川先生に誰しもが聞きたいことを質問してくれていた。第三期の竜王戦で、羽生竜王に谷川が挑戦し、三連勝した後、羽生が死闘の末に一つ返した将棋のことについてである。当事者の谷川の言葉には、やはり格別な重みがある。

第四局、確か203手、二人の対局の中では最長手数で、一番の熱戦だったと思うんですね。のちに、羽生さんが、あの時に第四局で返したのが大きかったと書いていましたし、今回の第四局も、渡辺さんにとってはそういうことが言えると思うんですね。

この後、このシリーズがどうなるか分かりませんが、渡辺さんのこれからの将棋人生にとって、これからのお二人の戦いにとって、大きな意味を持つ一勝だと思えますね。

角番に追い込まれて、精神的には非常に厳しいのですけれども、すぐ負けてしまうと、角番の期間が十日くらいしかないわけですね。それを、一つまた一つとしのいでいくほど、それが二週間、一ヶ月と伸びていくわけで、その間、色々なことを考える、悩むわけで、それが将来の大きな財産になるのかなという気がします。

竜王戦中継サイト

渡辺快勝で本当に面白くなってきた。ただ、本局の羽生の指し方には何となく不思議なところが残る。

図の 2一玉が、宮田五段の指した新手で、羽生もこれを試してみたかったのだろう。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |    |
| ▲ | 皇 | 桂 |   |   |   |   |   | 王 | 皇 | ▲  |
|   |   | 飛 |   |   |   | 銀 | 銀 |   |   | 渡  |
|   |   |   | 馬 | 歩 |   | 銀 | 桂 | 歩 |   | 辺  |
|   | 歩 |   | 歩 |   | 歩 | 歩 | 歩 | 銀 | 歩 | なし |
|   |   | 歩 |   | 歩 |   |   |   |   |   | 四  |
| ▽ | 歩 |   | 歩 | 銀 | 歩 | 銀 | 歩 | 歩 | 歩 | 五  |
|   |   | 歩 |   | 金 |   | 歩 | 桂 |   |   | 六  |
|   |   | 玉 | 金 | 角 |   |   | 飛 |   | 香 | 七  |
|   | 香 | 桂 |   |   |   |   |   |   |   | 八  |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 九  |

この手については、片上五段が[このようなブログ記事](#)を書いている。公式戦で現れたのはごく最近だが、かなり以前に実は奨励会でよく指されていた形だという。あるいは、公式戦ではない研究会などでは、現在でも指されているのかもしれない。

最近では、プロならば公式戦の棋譜全部に目を通して把握しているのは、いわば最低限の作業らしい。むしろ、様々な研究会の水面下でどういう新手が指されているか、それをどこまで把握しているかが勝負。研究会で指された新手は、若手の間ではメールによって瞬く間に伝わり広まるとも聞いたことがある。

ただ、羽生の場合はどうなのだろう。いくつか研究会はやっているようだが、忙しくて頻繁には出来ないだろう。また、羽生がメールで、研究会の新手を誰かと情報交換している図というのは、かなり想像しにくい。

だから、この 2一玉についても、公式戦で見て指してみようと思ったのではないだろうか。羽生の場合、かなり限られた情報で、なおかつ最新形の将棋にチャレンジし続けている気がして、それがすごいところだと思う。それとも、羽生は何か地下の情報ネットワークでも持っているのだろうか。あくまで冗談だが、そう思うてしまうくらい、色々な最新形を楽々と指しこなしているのが不思議なのだ。

二日目に入り、図では先手の渡辺の銀が死んで、瞬間的に銀損になっているところである。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
|   | ▲ | 桂 |   |   |   |   |   | 王 | ▲ | 一 |
|   |   | ▲ |   |   |   | ▲ | ▲ |   |   | 二 |
|   |   |   | ▲ | ▲ |   | ▲ |   | ▲ |   | 三 |
|   | ▲ |   |   |   | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ |   | 四 |
|   |   | ▲ | 銀 | 歩 |   | 銀 |   |   | ▲ | 五 |
| ▲ |   |   |   |   | 歩 |   | 歩 | 歩 |   | 六 |
|   |   | 歩 |   | 金 |   | 歩 |   |   |   | 七 |
|   |   | 玉 | 金 | 角 |   |   | 飛 |   | 香 | 八 |
| ▲ | 香 | 桂 |   |   |   |   |   |   |   | 九 |

本譜の通り、端を絡めた渡辺の攻めがとても厳しく、完全に先手ペースになった。つまり、一時的には銀損になっても、それで攻めが続くと判断した渡辺の大局観が卓越していたということになるだろう。

並みの相手なら、それで話を済ましてもよい。ただ、相手は羽生なのだ。今述べた通り 2一玉までは先例がある。本局で採用する以上、羽生も当然その先を研究して臨んでいるはずだ。渡辺が7筋で歩を交換したのも、ごく自然な手だし、なおかつ一步持って 4五歩と反撃に出るのも必然に近いように思える。さらに銀を殺しても先手が攻めをつなごうとしてくるところまでは、想定できそうなものだ。

本譜の進行を見ると、解説では羽生は入玉を目指すのかなどとも言われていた。そのような進行を羽生が喜んで選択するとは思えない。要するに、なぜ羽生がこのような進行にはまったのか、どこが誤算だったのかがよく分からないのだ。

もしかしたら、今書いたのは弱いアマが結果論で言えることで、実際に戦うプロは、もっと色々広がりのある変化を想定しなければならず、なかなか机上の空論のように行かないということなのかもしれないが。タイトルに「大局観でもやり返した？」とクエッションマークをつけたのは、羽生の対応の真意がよく分からないという意味である。ただ、言うまでもなく渡辺の攻めをつなぐ正確な技術は大変なもので、本譜の進行を辿ってみていると、いとも簡単のように見えてしまうが、実は高度な読みで裏付けられているプロの芸なのに違いない。やはり、渡辺の銀損でも攻めがつながると見た大局観がすぐれていたのだといたい。第一局と第三局で、羽生の常識外の大局観にしてやられただけに、一応少し借りを返したといえるのではないだろうか。

本局は、前局に続いて終盤戦も面白かった。

図では後手玉に詰めるがかかっているが、ここでは羽生の側に実は色々な手段があったらしい。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 | 将 |   |   |   |   |   | と |   | 一 |
|   |   |   |   |   | 龍 | 王 |   |   | 銀 | 二 |
| ▽ |   |   |   | 全 | 金 |   | 飛 | 飛 |   | 三 |
|   |   |   |   | 飛 | 飛 | 香 |   |   |   | 四 |
|   |   | 飛 |   |   |   |   | 馬 | 飛 |   | 五 |
|   |   |   |   | 歩 |   | 歩 |   |   |   | 六 |
|   | マ | 歩 |   | 金 |   | 歩 | 龍 |   |   | 七 |
|   |   |   | 金 |   |   |   | 手 |   | 香 | 八 |
|   | 香 |   | 玉 |   |   |   |   |   |   | 九 |

BSの夜中のダイジェストで谷川九段が簡単にこの局面にふれていた。飛車を2九から打つのと、本譜のように4九から打つ二通り。角も1三と2四の二通り。その組み合わせと先手の受け方によって、後手玉の詰めろが消えたり、受ける順が生じたりするというこらしい。まるで難解なパズルのような局面である。谷川が一つ例としてあげていたのは、まず2九飛6九歩を入れてから4一桂と受ける順。最後4五に玉が逃げたときに2五竜と取るのを2九の飛車が防ぐそうである！

ただ、本譜で羽生が選んだ順も、絶妙のパズルの解に思えたのだが、渡辺はそれを上回る絶妙手で応えた。

3五歩。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 | 将 |   |   |   |   |   | と |   | 一 |
|   |   |   |   |   | 龍 | 王 |   |   | 銀 | 二 |
|   |   |   |   | 全 | 金 |   | 飛 | 飛 |   | 三 |
| ▽ |   |   |   | 飛 | 飛 | 香 | 馬 |   |   | 四 |
|   |   | 飛 |   |   |   | 歩 | 馬 | 飛 |   | 五 |
|   |   |   |   | 歩 |   |   |   |   |   | 六 |
|   | マ | 歩 |   | 金 |   | 歩 | 龍 |   |   | 七 |
|   |   |   | 金 |   |   |   | 手 |   | 香 | 八 |
|   | 香 |   | 玉 | 歩 | 龍 |   |   |   |   | 九 |

この手については、さっそくご本人が[ブログで分かりやすく解説](#)してくれている。

相変わらず正直だと思うのは、これを事前に読みきったのではなく、何とか見つけ出したと言っているところだ。読みきりでしたと言いたいところではないかと思うのだが(笑)、そういう虚飾は渡辺流ではない。変に謙遜もしないかわりに、つまらないハッターも一切ない。徹底したプラグマティストなのである。

さて、羽生は今回後手番で矢倉を受けた。一手損角換わりで連勝しているので、それを連採するというのも十分あったと思うのだが、なぜだろうか。色々推測できるだろうが、一つほとんど我ながら妄想とも思える仮説をお笑いの種に書いておく。

第四局のあの負け方というのは、明らかに勝負の流れを変えかねないものだった。羽生は、恐らくそういうことに実は人一番敏感である。その流れに逆らって、一手損で無理やり勝ちに行くとさらに流

れがおかしくなる。敢えて、ここは後手番で矢倉を堂々と受けておいて、ごく自然に指してそれで勝てればいいということにしよう。仮に負けたとしても、それなら引きずらないですむ。勿論、この第五局で決めたいが、第四局の負け方の流れを受けて本局は無理して勝ちに行かずに、第六局の先手局も、視野に入れて見据えて指そう。

ハイっ、どれだけツッコミいれてくださっても結構です。ありえねー、そんな余裕アルわけねーだろ、実際の勝負を知らなすぎるぜ、等等。お好きなだけどうぞ(笑)。ただ、私は羽生ファンというより、ほとんど羽生信者に近いもので、こんな馬鹿げたことを言ってみたくなっただけである。本当に聞き流してやってくださいませ。

さてさて、一方の渡辺。事前インタビューでも、後手番での指し方で悩んでいると言っていた。矢倉も通常角換わりも堂々と後手で受けて立っているが、やはり作戦面でなかなか何か思うようにいかないということのようである。

現に今期のB1順位戦でも、渡辺は、先手全勝、後手全敗という極端な成績を残しているのである。それでも渡辺はかなり頑固なところがあって、後手矢倉で、行方、羽生、畠山鎮と、9五歩型の同じ戦形を連採して三連敗している。一流の人物は、とにかくいい意味で頑固なところがあると思う。

しかし、次の後手番はとにかく勝たなければいけない。渡辺はどう出るのだろうか。それも、色々な意味で実に楽しみだ。ただ、私はやはり今回は堂々と矢倉を受けるのではないかと思うが。(勿論、羽生が初手7六歩とやってきた場合。)

それと忘れてならないのは、今回の竜王戦では、実は後手が三勝もしているということである。なぜか渡辺のからむ竜王戦は、そうなることが多い。

次局、本当に楽しみである。現時点で言えることはただ一つ、もうこれで「情熱大陸」の制作者は苦勞しないで済むだろうということである。



竜王戦中継サイト

大変なことになった。事実は小説より奇なり・・歴史の生き証人・・将棋史上に燦然と輝く名勝負・・優曇華が開くのを目撃する稀有な幸福・・子孫代々語り継がれる・・、と既にうわ言をつぶやきだしている私である。

本局は渡辺の優れたところのみ出た将棋だった。一方羽生にはそれらしさが少しもないまま終わった。第三局と完全に逆のことが起こったわけである。

やはり、本局を決めたのは渡辺の新手 3一玉。あの場面で、羽生が 6五歩を長考の末に断念せざるをえなくなった時点で既に成功といえるのだが、あの手の影響が、その後もずっと続いたように見える。

初日に羽生が2筋を交換して 同角といったのは、やはり危険だったという感想が局後にあった。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
| ▲ | 皇 | 科 |   |   | 平 |   | 王 | 科 | 皇 | 一   |
|   |   |   |   |   | 龍 | 平 |   |   |   | 二 羽 |
|   | 歩 |   | 馬 | 歩 | 歩 |   |   |   | 歩 | 三 生 |
|   |   | 龍 | 龍 |   |   | 歩 | 角 |   |   | 四 歩 |
|   | 歩 |   |   |   |   |   |   |   |   | 五 一 |
| 三 |   |   | 歩 | 歩 |   |   |   |   |   | 六   |
| 歩 | 歩 | 銀 | 金 |   | 歩 | 歩 |   | 歩 |   | 七   |
|   |   | 金 |   |   | 銀 |   | 飛 |   |   | 八   |
| ▽ | 香 | 桂 |   | 玉 |   |   | 桂 | 香 |   | 九   |

この手には渡辺が 3一玉と守ったに対して、攻撃的に指して得をしてとがめようとしたという意味があるようだ。BSで流れた感想戦で、羽生は 6五歩を「つけなきゃおかしいと思った」と言っていた。しかし実際に読むと後手の攻めがつながることが分かり、断念せざるを得なかった。ある種のあせりや気負いが、羽生に必要以上に危険な手をその後も選ばせたと言ったら、うがちすぎだろうか。

さらに、封じ手の局面で羽生は長考に沈む。定刻六時になって、中村立会い人がそれを告げても、羽生は「えっ」という感じですぐには普通に答えなかったそうである。読みにまだ没頭しており、指す手もはっきりまとまっていなかったのかもしれない。

その日の夕食に、羽生はあまり箸をつけなかったそうである。局面の事が頭から離れなかったのだろう。そういうところが、羽生の自然体で正直なところでもある。そういう姿をまわりに見せるのは勝負師として好ましくないとはいえる。渡辺も当然見るし、観察眼では抜け目のない男だから、羽生が苦しいと考えていることも敏感に察知するだろう。

翌日、渡辺は堂々と踏み込む順を選んだ。成算があるとしても、やはり決断が必要な順である。渡辺は、前日の羽生の姿を見て、自信を持って切りこめたのかもしれないのだ。

封じ手の 3六歩は、控え室が予想していない手だった。ただ苦しいながらも本筋に行く手だそうで、羽生の場合、多少苦しくてもそういう手を選択することが多いような気がする。名人戦の第五局でも、誰

もが驚く最強の手で封じていた。結果的にはよくなかったが。あまり無理をして耐え忍ぶような手を指さないことが多いと思う。もっとも、場合によっては信じられないような辛抱をすることもあるので、羽生の場合一概には言えないのだが。

さらに、7七同金としたところでは、7七同桂の方がまさったという感想があった。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 香 | 桂 |   |   | 玉 |   | 王 | 桂 | 香 | 一 |
|   |   |   | 馬 |   | 銀 | 金 |   |   |   | 二 |
|   | 歩 |   | 歩 |   | 歩 |   |   |   | 歩 | 三 |
|   |   |   | 龍 |   |   | 歩 | 角 |   |   | 四 |
|   | 歩 |   |   |   |   |   |   |   |   | 五 |
| ▲ |   |   |   | 歩 | 歩 |   | 歩 | 歩 |   | 六 |
|   | 歩 | 歩 | 金 |   |   | 歩 |   |   | 歩 | 七 |
|   |   |   | 金 |   |   | 銀 |   | 飛 |   | 八 |
| ▽ | 香 | 桂 |   | 玉 |   |   |   | 桂 | 香 | 九 |

本譜と同じように進み、2二歩に対して同玉と応じる変化の場合、6七金と7七桂の働きが大きいということだそうである。従って、2二歩には同金と応じることになるが、その場合は8二飛と打ち込み、本譜よりは余程難しいとの事。羽生が7七同金としたのは、2二歩に同金とした場合に有利になる変化があったからだそうである。

つまり、対局者の頭の中では、かなり先まで様々な読みの分岐があり、その微妙なところにより最善手を逃してしまったということである。勝負の微妙なアヤともいえるが、普段の羽生だったら、苦しい中でも最善手を指したのではないだろうか。本局は、渡辺の3一玉によって、羽生にとってはすっかり流れが悪くなり、それが終局まで続いてしまったような印象を受ける。

夕方のBS中継では、対局がすぐに終了したため、しばらく感想戦の模様を流していた。その際、長い棒の先にマイクをくくりつけたものを、盤側に延ばして音声を拾っていたので、二人の発言がクリアに聞けてよかった。途中でできてしまっていたけど、出来れば感想戦を全部見たかった。でも、全部見て飽きないのはやっぱりマニアだけかな？(笑)

先ほども書いたが、羽生は、初日の夕方から、ほとんど食事が喉を通らなかったそうである。昨日の夕食もほとんど箸をつけず、朝食も残し、昼食もほとんどとらず。やはり、平常通りに見えても、大変な緊張状態で対局しているのだろう。

そういうところを、無理に隠そうとしないのが羽生らしいとも思う。相手に悟られないように、無理やり食べ物を詰めこむというような不自然なことを羽生には似合わない。あくまで、盤面の上の勝負がすべて。羽生的な勝負師的側面が発揮されるのも、あくまで将棋の上でのこと。はるか昔に谷川相手に上座を占めたのも、今回の名人戦で見せた鬼のような表情も、全て意識的に計算してしたのでなく、ごく自然に内面からあふれ出る気持ちの強さや情熱が外面まで溢れかえってしまっただけではないだろうか。今回弱みを回りにみせてしまったのも、ごく自然な羽生流だったのだろう。

羽生はどんな時でも、いつもと変わらないといわれるが、無理に平静を保つというのとは全然違う。今回の食事のこと一つとっても、張り詰めたギリギリの精神状態で将棋に接しているのだと痛感する。そうい

う極限的な危ういバランスの状態、なおかつ客観的な態度で将棋の最善を尽くせるのが羽生流。最高に熱く燃えたぎる状態で「玲瓏」な将棋を指すのが羽生の魅力である。第七局でも、そういう将棋をみせてくれることだろう。

一方の渡辺。第四局で一つ返してくれたときは、ファンとして正直ホッとしてしまっていた。羽生が谷川に対して三連敗の後一つ返したのと同じで、とにかく形はついたし、今後につながったのでよかったと。正直に告白してしまう、こんなに巻き返すとは思ってなかった(笑)。やはり、一度流れをつかんだときそれを逃さないし、凡人のように一つ勝ったからいいやなどとは、全く考えないのだろう。そうでなければ、こんなに見事な将棋を二局続けて指せるわけがない。

結果的には両局とも完勝だが、羽生の場合は途轍もなく劣勢な将棋を逆転し続けることで、今までの多くのタイトル戦を乗りきってきた。それを、ほとんど付け入る隙を与えずに勝ちきれているのも、やはり渡辺の強さ、将棋の厳しさの証拠だろう。羽生といえども、渡辺相手だとなかなか大逆転勝ちをするというわけにはいかないのではないだろうか。振り返れば、羽生が三連勝したのも、全て順当に勝ちきった将棋ばかりである。

しかし、渡辺だって、負けて平然としていたわけではない。特に渡辺の場合はブログをしているので、第三局直後は、落ち込んでいるのがかなりはっきり伝わってきて痛々しいくらいだった。第三局の後、当日の最終の新幹線で帰ったそうだが、その様子が妻の小言にも書かれていて、ちょっと読んでいてグッと来るものがあった。プロ棋士というのは、本当に大変な仕事だと思う。その分、勝ったときの喜びも大きいのだろうけれど。

今回 BS では時間が余ったので、過去局の様子を流していたが、第三局の投了の際、ああいう色々な意味でつらい負けにもかかわらず、渡辺ははっきり「負けました」と言葉に出し、少しも悪びれた様子も見せず、とても立派な態度だった。羽生も、本局はつらすぎる負け方だったが、BS で流れた感想戦では、いつもの研究者の姿に戻って淡々と振舞っていた。二人とも、負けた時の姿まで美しい。

さて、第七局。

勝ったほうが初代永世竜王。

羽生が勝てば永世七冠。

渡辺が勝てば、将棋界初の三連敗後の四連勝。

将棋の神様は、随分とド派手好みの演出家のような。

舞台は、将棋の聖地、天童である。

(追記) 何人かの方からコメントでご指摘をいただいたのですが、羽生さんは恐らく本当に体調がすぐれなかった可能性の方が高いのではないかと思います。たまたま形勢と重なったので思い込みで書きすぎてしまいました。

## 竜王戦中継サイト

また随分進んだ。「まだ分からないが、間違いなくどちらかがよくなっているはずの局面」である。初日でこういう局面まで進んだのは何局目だろう。お互い意地をはりあっているかのように、闘志を燃やしあっているかのように、ほとんど将棋を決めかねないような手についての決断が早い。本局では羽生が 7五歩から仕掛けていき、 8二歩の激しい後戻りのきかない順を選んだこと、渡辺が 5二飛とわりとはやく 6二飛でない方を選んだこと。

今まで、勝敗の動きがドラマティックすぎたので、そのことばかりに目を奪われていたが、やはりこの二人の場合、戦っている、深いところでぶつかっているという印象を受ける。表面上は決して敵対などしていなし、二人ともそういうことを決して口に出すタイプではないのだが、例えば、羽生 vs 森内、羽生 vs 佐藤とは、やはり雰囲気全然違うような気がする。

14へ行け等でおなじみの doublecrown 氏が、第六局の結果を受けて[このような事](#)を twitter でつぶやいていた。

印象だけど、竜王戦は第1局を除きその他はどうもかみ合っていないような気がしてしょうがない。一度刃をあわせて以降、お互い遠くから石を投げ合っているような。お互い認めあい、勝負を楽しむ、といった雰囲気ではないなー。

私のような単純なファンは、つい勝敗の行方にのみ目が言ってしまうのだが、成る程なー、と感心し納得もした次第である。

将棋の内容自体で言うと、本シリーズでは第四局のあの歴史に残る終盤以外は、実は名局はひとつもないのだ。どちらかが一方的に勝った将棋ばかりである。

なぜ、そうなっているのか。

やはり二人は世代を代表するので、負けたくないのは当たり前だろう。羽生が同世代と戦う時も、負けたくないのは同じにしても、将棋を作りあげていく上での一種の共犯関係、密かな安心感のようなものがあるのかもしれない。しかし、羽生 vs 渡辺では、そういうものは多分ない。異質なもの同士のみぶつかりあいである。

将棋自体に対する感覚も多分違う。それは第一局の大局観の違いで鮮明になった。羽生の世代が始めた将棋の合理主義を、渡辺世代はさらに徹底してシビアに推し進めた。羽生の第一局や第三局の勝ち方が、常識の隙をつくような大局観によるものだったのに対し、渡辺が勝った第五、六局は、奇をてらうことのない自然な手の合理的な積み重ねだった。

あるいは、二人とも優勢になった時の勝ち方が並外れて上手なのかもしれない。一度どちらかがよくなると、厳しく差が開く方向に力学が働き、二人といえどもそれに対抗するのが容易でなさそうである。

そして、二人の対照的な個性。まるで深遠な思索にふける哲学者のようなところのある羽生に対して、渡辺は徹底的な現実主義者である。読書を好む(好みそう)な羽生と競馬愛好家の渡辺。今日の事前インタビューでもそうだったが、常に超然としている羽生と、正直すぎるくらい開けっぴろげな渡辺。近代的な羽生と現代的な渡辺。

冷静に考えれば、二人の将棋がかみ合う要素など、最初からあまりないのだ。がっぴり四つの名勝負とい

うより、異質な者同士がぶつかりあうスリリングを楽しむべきなのかもしれない。

など書いていたら、第七局が大変かみ合った名局になったりしてね(笑)。まあ、そうなったら歓迎である。

直前の朝日杯オープンも面白かった。

羽生 vs 渡辺も、羽生の執念と渡辺の冷静がぶつかりあう異様な名局だったが、それ以上に、渡辺は初戦の畠山鎮戦で、なんと後手ゴキゲン中飛車を採用した。今年一度も指していないのだ。手の内を見せないにしても徹底している。もし負けたら何を言われるか分からないのに、思い切りがいい。しかも快勝。

だからといって、羽生もさすがに竜王戦でゴキゲンをしてくるとは考えないだろう。しかし、前局急戦矢倉に変化したこともあり、本戦の矢倉、急戦矢倉以外にも、後手で何をやってくるか分からないという印象くらいは持つだろう。そして、渡辺は恐らく相手がそう考えるであろう事まで考えるタイプなのだ。あくまで推測だが。

やはり本局では、変化すると見せて矢倉。しかし、急戦矢倉を連投したのは少し意外だった。第六局がうまく行き過ぎたので、柳の下のドジョウは二匹いないと考えそうなものである。しかし、渡辺は敢えて連投してきた。合理主義者の渡辺のことだから、きちんとした具体的成算があつてのことなのだろうが、同時に微妙な心理戦にもなっている。

羽生が 3一玉に再チャレンジするかも注目だったが、あっさりかわして 2五歩。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 | 科 |   | 玉 |   | 王 |   | 科 | 皇 | 一 |
|   |   | 飛 |   |   | 龍 | 玉 |   |   |   | 二 |
|   | 歩 |   |   | 歩 | 龍 | 歩 |   | 歩 | 歩 | 三 |
|   |   | 歩 |   |   |   | 歩 |   |   |   | 四 |
|   | 歩 |   |   | 馬 |   |   |   | 歩 |   | 五 |
|   |   | 歩 | 歩 |   |   |   |   |   |   | 六 |
| ▲ | 歩 | 歩 | 銀 | 金 |   | 歩 | 歩 |   | 歩 | 七 |
|   |   | 角 | 金 |   |   | 銀 |   | 飛 |   | 八 |
| ▽ | 香 | 桂 |   | 玉 |   |   |   | 桂 | 香 | 九 |

しかし、この手自体は大変前例が多いそうである。ちょっと調べたが、羽生は先手をもってかなり多く指しており、なんと先手では全勝していた。特に後手で「剛直」郷田が、羽生相手にこの形を何度も指しており、勝ち星を献上し続けていたのが、いかにもらしくて笑ってしまった。(勿論、私はプロ棋士の使う完全なデータベースを持ってないので、あくまで限られたデータでの話です。)

そして、直後に指された 3三銀が、またしても「渡辺新手」。

この手についての藤井情報が面白い。棋譜 plus から引用させていただく。

「渡辺さんが先手を持って研究会で指したらいいんです。僕は後手の若手からその話を聞きました。その若手はこの将棋の知識が少なく、フラフラと 3三銀としたそうなんです、渡辺さんは有力だと見たのでしょう」(藤井九段)

やはり水面下の研究会は大切なのである。現代将棋は情報戦でもあるのだが、気になるのは羽生がどの程度それをやっているのかということだ。多分情報戦というほどにはやってないのではないかと思う。そこ

も多分、羽生と渡辺の違いだ。

この辺については夕方のBSの藤井解説が分かりやすかった。要旨を再現すると、

3三銀では、前例は全て5四銀。つまり、後手としては5筋で頑張ったので、2筋は譲るというバランス感覚。3三銀は、飛車先交換も許さないという欲張った手。

当然羽生は反発するが、以降の手数を見ると、渡辺のみ有効度の高い手を指している印象があり、先手なのにもかかわらず、なんとかしてとがめないといけないという、少しあせらされているという意味あいがある。

従って、羽生は動いていった。この展開なら、後手番としては、一方的に受身になるわけでもなくまずまずといえる。先手は香得したが、歩切れが大きいし、後手からの反撃も残る。

今回は藤井九段は、あまりはっきり形勢判断は言わなかったが(何でもいつも言い過ぎて後で色々言われるのを気にしているらしい?)、やはり後手持ちというニュアンスが伝わってきた。

棋譜解説でも言われていたように、6二飛として6筋から反撃してくる筋も気になったが、実際は5二飛。これには、先手も香車を取って5九香とすえる味がよく、先手もまずまず戦えるのではないかということである。

弱い素人は、プロの言うことを素直に聞くしか出来ないわけだが、印象としては、後手番の作戦としては上出来だが、先手も5九香の展開ならまずまずで、少なくとも第六局のように後手がかなりよいというわけではないのではないかと感じた。

それにしても、この大一番で、矢倉解説にはもってこいの藤井九段を得たことは、我々にとって僥倖である。私は皮肉が言いたいのではない。順位戦で指している藤井の矢倉は、人真似でなく面白い。しかも、結果はともかく、どれも居飛車等の「老舗」相手に「屋台を出したばかり」なのに、常にいい(以上の)勝負になっている。解説を聞いていてもとても分かりやすいし、振り飛車に限らず、やはり序盤の感覚に鋭敏な先生なのだと思う。

矢倉に革命を起こすのは、従来の居飛車党ではなく藤井猛だと、素人なりに私はひそかに期待しているのである。

二人の勝負を見守っていたのは人間だけではない。

将棋の歴史上、最大の勝負が行われるという噂を聞きつけて、天に住む神々も、阿修羅も、畜生も、餓鬼も、地獄の住人も、こぞってかけつけてきた。普段は永遠の責め苦に苦しむ地獄の住人たちも、こういう特別な時だけは、神々の計らいによって一時の休息を与えられ、六道の世界全ての生きとし生ける者たちが、二人の勝負を見守ったのである。

二人の対局者以外に、きわめて重要な役割を担っている存在がいる。将棋の神様だ。天の世界では、残念ながらマイナーな存在に過ぎず、普段は肩身も狭く暮らしている。性格も地味でおとなしいのだが、この時ばかりは彼が主役である。我々人間が想像するのとは違って意外に口の悪い同僚の神々に散々冷やかされながらも、将棋の神様もまんざらではない様子である。

彼の役目は、勝負をある程度までは見守り、最後のところでどちらが勝つかを決めることである。彼がその権限を一手に握っている。

さあ、対局が始まった。

戦うために生きている阿修羅たちは、勿論のこと大喜びで叫ぶ。

戦え、戦え、ひたすら殴りあいつぶしあえ！ボコボコにしてしまえ！やってまえ！

畜生たちは、残念ながら将棋を理解認識する能力を奪われているのだが、周りの普通でない雰囲気だけは感じ取ることが出来るのだ。

ワンワン、ニャーニャー、モーモー、メーメー、ガアカア

ああ、喧しいったらありゃしない。

餓鬼や地獄の住人たちは、最初は大人しく見ていたが、すぐに本性が出てしまう。二人の気に入らない点を見つけて、口々にののしりだす。

あんなやつ負けてしまえ！ああ気に入らねえ！くたばってしまえ！

しまいには、どちらが負けるかで賭けを始め、喧嘩小競り合いが絶えない。地獄の衆生は所詮地獄の衆生である。一時の休息を得てのんびり煙草をふかしていた閻魔大王が、あわてて仲裁に入る。

そんな騒ぎの中、対局はどんどん進んでいく。ことその他激しい展開である。もうすぐにも勝負が決まってもおかしくない。

神々が将棋の神様にちょっかいをだす。ここだけの話だが、六道の世界広しといえど、一番迷惑で厄介な存在は、実は天の神々なのである。

ほら、もうは勝負を決めていいよ。やっぱりあの年上のほうに勝たせてやれよ。あの品格、将棋に対する真摯な姿勢、将棋の神に身を捧げきっているストイックな姿勢、立派じゃないか。

他の神が反論する。

いやいや、あの若いやつが勝つべき。生意気そうだけど、本当はいいやつだ。将棋に対する姿勢も年上の奴と変わらないくらい真摯だ。しかも、いかに将棋が世間に受け入れる力なども、若いのに常に考えている。今後の時代を託すことが出来るのはヤツしかいないよ。なあ、将棋の神様さんよ。

寡黙な将棋の神様は、口も挟めずにただ当惑して聞くだけである。いや、将棋の神は、神々の意見だけを聞けばよいのではない。六界に生きる者たち全ての思考、感情を受け止め、考慮に入れなければいけないのである。

無論、将棋の神もそれら全てに耳を傾けることなど無理だ、しかし、六道の世界に生きる全ての生き物の、思考や考え感情は、巨大な雲になって、二人の対局者の上に黙々と立ち上っていて、それを見れば分かるようになってきている。その、賞賛や敵意や尊敬や軽蔑や愛情や憎悪が混然一体となった巨大な雲は、刻々と微妙に豊かな色合い歩変化させていた。その壮観な姿は、対局に必死に打ち込む二人には、勿論あずかり知らぬところである。

そんなことをしている間にも、展開の速い将棋はもはや終盤の真っ只中である。

そろそろ、将棋の神様も覚悟を決めなければいけない。雲の様子を見て、さあどちらかを勝ちに決めようとする。ところが、その瞬間に雲の姿は急激に変化をとげ、将棋の神様は勝敗の裁定をするのを何度もためらう。同僚の神々も、将棋の神様が勝利を決めるポーズをとろうとするたびに茶々を入れて、やかましいこと限りない。いつまでたっても優柔不断な将棋の神様は裁定を下せないのであった。

可哀想なのは、そんなことをあずかりしらぬ二人の対局者である。普段ならとっくに終わっていいはずの将棋が、終盤戦に入ってもいつまでたっても終わらない。どちらかが勝ちになったかと思うと、相手が絶妙な勝負手を出して決まらない。普段なら、将棋を終わらせる技術では並ぶ者のない二人なのに、果てしなく将棋が続いていくのだ。

相変わらず、将棋の神様の立ち往生は続いていた。口さがない神々の猛口撃もとどまるところを知らない。すると、突然、耐えに耐えていた大人しい将棋の神様はぶちきれてしまったのである。

ええい、もうやってらんねえ。もうオレが決めるのなんかやめてやらあ。もう。あの二人の好きなようにやらせる。二人の力で、勝手に勝敗を決めてくれればいいよ。

天の神々の世界では、かつてないことが起きたのである。神々の仕事は、どうしようもない人間の運命や宿命を厳重に管理することである。その責務を神が放棄するなどというのは前代未聞である。あってはならないことだ。それまで将棋の神様を冷やかしていた他の神々も、今度は慌てふためいて、仕事をきちんと果たすようになだめに入る。しかし、本来とてつもない頑固者の将棋の神様は、頑として聞き入れないのである。

その間も、二人の対局は続いていく。本来なら、将棋の神様が責任を放棄したので、もうすぐにどちらかが勝ってしまってもおかしくない。

ところが、驚いたことに、その後も将棋は延々と続いて終わらないのであった。完全に二人の力だけにゆだねられた将棋も、将棋の神様の関与に関係なく、素晴らしい勝負がいつ果てることもなく繰り広げられたのである。

将棋の神様を翻意させようと必死だった他の神々も、人間二人の対局のただならぬ様子に気づく。そして、彼らも自分の仕事を忘れ果てて、すっかり夢中になって、人間二人の戦いに見入るのであった。神々だけではない、阿修羅も畜生も餓鬼も地獄の衆生も、今はシーンと静まり返って対局を見つめている。



すっかりへそを曲げてしまっていた将棋の神様まで、今は目を丸くして人間だけの力による勝負を注視している。

二人の頭上に広がっていた異様な姿の雲も、今は青空に広がる白雲のように、穏やかな姿を取り戻していた。

いつ果てるとも知らぬ二人の将棋にも、ついに終わりの時が来た。若い方が死力を振り絞って勝ったのだ。その瞬間、六界は静寂に包まれたが、すぐに歓声に変わった。大騒ぎである。

戦いが好きでたまらない阿修羅たちも口々に、もうあの二人は良く戦った、ゆっくりして欲しいと、信じられないセリフを口に出し、畜生たちは、犬と猫、牛と馬、鶏と鴨がペアを組んで浮かれて踊りだし、餓鬼や地獄の衆生も、二人の戦いにすっかり感動して皆仲直りし、明日から自分たちも心を入れ替えようと誓い合うのだった。ただ、その傍で閻魔大王だけは、明日になればどうせ元通りさと、苦虫を嚙み潰したような表情を変えないままでいたが。

神々が、将棋の神様に話しかける。

オマエのしことは正しかったのかもしれないな。オレたちは、人間どもの能力を見くびりすぎているのかもしれない。オレたちも、あんたみたいにもう少し人間たちに好きにやらせてもいいのかもしれないな。

将棋の神様は恥ずかしかった。自分はただきれて職務放棄しただけだったからである。

いやあ。

と、照れ笑いを浮かべて答えるのがやっとだった。

神々が将棋の神様を、飲みにいこうと誘う。ここだけの話だが、神々は人間など比較にならないくらいノンベイなのである。もともと決して嫌いでない将棋の神様も、やっと今度は晴れやかな笑顔を見せて答える。

いいですね。

将棋の神様が他の神々と仲良く肩を組んで天のパーへ歩いていく。

ふと、将棋の神様がこちらを振り向いて、もう一度地上の二人の方を眺めやる。

二人は、もう普段の様子に戻って、笑顔さえ浮かべて感想戦の最中である。

将棋の神様がポソリとつぶやく。

人間って、すごいな。

あの百年に一度の対局を、敗れた羽生が自戦解説することに。あまりに過酷な運命のめぐり合わせだが、やはり、羽生はいつもの通りの羽生だった。あの笑顔も時折見せ、淡々と解説の仕事をこなしていた。

戎棋実説さんも 08/12/22 に書かれている通りである。「一流の敗者」の姿であり、将棋界の「尊い伝統の一つ」である。

むしろ、だらしなかったのは私の方だ。もう最初からジャーナルを見るのがつらかったが、見ないのもかえって失礼だと思い、テレビの前に正座した。羽生の笑顔に少しホッとしたが、さすがに自戦解説の部分では、淡々と進めているのが、かえって見ていてつらかった。羽生にしてみれば、自分は普通にやっているのに、勝手に胸を痛めたりしないでくださいと、笑いたくなるどころだろう。

というわけで、最初からブログ記事にする予定だったのだが、気が進まず遅れてしまった。しかし、やはりある意味歴史的な放送だったともいえるので、メモくらいは残しておこう。

冒頭で聞き手の中井広恵が、羽生を紹介する。

(いかにも気を遣って、年末もお忙しいのでしょうか、と言ったのに対し)

でも、ねえ、中井さんの方が大変なんじゃないですか。切り盛りするのが。それに比べれば私はたいしたことはありません。

そう言う羽生さんのとても爽やかな笑顔が神様のように見えた。もう私はダメである。まったくもってだらしない。

一週間の結果コーナーでは、直前の朝日杯オープンの結果表まで映しだされる。無論、羽生は淡々として、A級二人を連破した若手の佐藤和俊のことをほめる。

ネット女流最強戦では、中井が里見を破ったことが話題に。

中井 最近里見さんに勝つと、すごく周りが、あの里見さんに勝ったんですかというんです。

羽生 そうですか。反響が大きいですか。それは、それは。

番組中で羽生が一番よい笑顔を見せた瞬間である。

NHK杯の予告は、羽生 vs 飯島。本当に重なる時は徹底的に重なるものである。

まあ、自分の将棋なんで、見どころとかは言いづらいんで、なんとも言えません。これは。

やはり笑顔。(結果は羽生勝ち。)

しかし、ここからが本番である。

竜王戦第七局の自戦解説。

さすがに羽生の表情も、少し硬いように見える。いきなりここまでの展開ということで、羽生の白丸が三つ続いた後黒丸が三つ続いたボードが映し出される。ほとんど嫌がらせのようだが、こればかりはどうしようもない。

中井が、対局していて渡辺に変化があったかと問う。

いや、特に変化ということはないのですが、初めて対戦したのは(渡辺が)十代の頃、今は竜王戦の舞台にも慣れて落ち着いて対局していたと思います。

以下具体的内容について箇条書きで羽生の発言要旨メモ。

急戦矢倉は、十年以上前に大流行したが廃れた。それがまた新しい工夫で二局でた。

2五歩 7九角が作戦的にうまくいかなかったので、ここで手を変えてみた。

3三銀(渡辺新手) パッと見、ちょっとあぶない手。収まれば、後手作戦勝ち。この瞬間は怖い。思い切った一手。

7五歩 もう囲いあう将棋ではない。仕掛けるタイミングはここ。

8六歩 普通の手じゃないが、最近の将棋は普通じゃないのが多い。(笑う)

5五歩 指されてみて、手がなくて、ここは自信がなかった。先手は8六歩など、傷が多い。

9二と 中央から先手が行くと反動がきつい。つらい手だが、8二から8三の活用にかけた。仕方ないという感じ。

(本人は、そう言っていたが本局では一番「羽生らしさ」が出たすごい手だったと思う。)

2三歩 ここで 5二金もあるが、 2二玉と早逃げされる。その変化もあまり自信はなかった。

6二金 疑問だったかもしれない。 6四角 8七歩成 5二金に 5三香が、気になった。しかし5四歩としておけば、よかった。

6五桂 多分最善手。

6六金 これも多分最善手。例えば 5四歩 6二角 5三歩成 8七金 7九玉 5三角は先手負け筋になってしまう。

6一飛 問題だった。これでまずくした。はっきり負けにしてしまった。ここは 2二銀 同銀 同歩成 同玉 2三銀 3一玉 4八飛、とした方がよかった。はっきり勝ちとは言い切れないが。

(負けにしたが) まだまだ続きます。とって羽生は笑った。こんなつらい場面を解説していて羽生は笑っ

た・・・。

6 四歩は後手も問題だった。 6 六角が詰める逃れの詰めるになった。  
(これは、もし羽生が勝っていたら歴史的妙手と言われたであろうと思う。)

2 四飛が敗着。 4 八飛 5 二金で、難解ながらその方がまさった。ただし、勝ち負けは指してみないと分からない。

二転三転した将棋なので、当然まずい手も指している訳だが、やはり本人に言わせるのは酷だ。さすがに私はこの終盤の解説を聞いていてつらくなってしまったのだ。しかし、本当に羽生の態度は淡々として立派だったと思う。

終局後の渡辺のインタビューも流れたが、これも実に率直で渡辺らしくてよかった。

羽生さんというのは、僕というか僕ら若手にとって特別な存在なので、びびっている部分があった。ただ、相手が強いからといって無難に指していると勝てないと思ったので、四局目からは積極的に指すようにしたのが良かった。(勝てたのはまだ)信じられない。一年間、竜王を名乗れるのはうれしい。

素直に「羽生は特別」と言ってしまうのが渡辺流である。しかし、だからといって恐れたままでないのも渡辺流である。

中井が羽生に戦ってみての渡辺将棋の印象を聞く。

非常に力強いし、ピンチにも動じない強さを感じました。

その後はNHKもさすがに気を遣って、羽生永世六冠獲得の歴史の映像を流していた。  
最後に羽生に新年の抱負を聞く。

今年是一年間あっという間も間に終わりましたが、来年も時が早く立つような充実した一年にしたいと思っています。

来年度竜王に挑戦して欲しいがと聞かれて

(笑って) まあ、今から言うのは鬼が笑うという感じなのですが、また、遠い目標として頑張りたいと思っています。

気が早すぎるが、来年も同一カードが見たいというのが、多くのファンの願いだろう。

試練の時、ピンチの時、失意の時にどのように振舞えるかで、その人間の価値は分かってしまう。やはり羽生は一流の人物だった。

羽生はかつて王将戦でも佐藤に三連勝後三連敗した経験がある。第七局は佐渡での対局だったが、あいにく大荒れの天候だった。

羽生さんが3連勝した後に，佐藤康光さんが3連勝して迎えた2006年3月の王将戦第7局。対局場は佐渡島。あいにく天候は大荒れで，通常であれば欠航するような波の高さ（3メートルから4メートルとのこと。）であるにもかかわらず，スケジュールの都合上，その波をこえて佐渡島に向かった船の中。（悠然と）本を読んでいた羽生さんには驚いた，と観戦記者さん。

「でも，佐渡汽船のエース中のエースが操船されるということでしたよね。」と羽生さん。

羽生は、どんな人生の嵐の真っ只中でも、こうなのだろう。今も多分・・・。

将棋は純粋な技術の戦いであると同時に、総合的な人間力の勝負でもある。今回の「情熱大陸」で、渡辺明は従来の勝負師からすると型破りな側面を見せてくれた。とにかく発言がストレートで率直でとんでもない正直者なのである。なおかつ正直に発言しながらしたたかであり、勝負師として恐ろしいまでの線の太さを感じさせた。

いきなり大切な第一局のパリ対局の前日に、渡辺明は競馬場にいた。いくら競馬好きだからといっても、気分転換になるからといっても、羽生相手の竜王戦の前日である。しかも、渡辺は馬券を的中させてしまう。

競馬はいいから、将棋の一勝が欲しいっす。

渡辺はそういうと屈託なく笑った。梅田望夫が紹介していたが、同行の佐藤康光も驚きを隠せなかったそうである。

その第一局では、羽生が卓越した大局観で渡辺に大きなダメージを与える。将棋の大局観というのは、その個人の根本思想・感性が問われるものであって、それを否定されるというのは全てを否定されるのに等しい。第一局から渡辺はショックな負け方をしたのである。

しかし、渡辺は取材者をホテルの自室に招き入れ、率直に心中を語る。

最初はうまくいってるかなと思ったんですけど、実はそうじゃなくて、全部見抜かれていた感じですね。ああいう読み筋で組み立てる人は多分なかなかいないんじゃないかな。多分羽生さんの他にあれを指してくる人はいないんじゃないかなと。なんか、さすがというところを見せられましたね。今日は。

アッサリと羽生のすごさを認めてしまっているのである。そこが渡辺の非凡なところである。普通なら大局観の差を見せつけられても、何か理由をつけて今回は偶然と思いつつもしたりするだろうし、まして他人にペラペラ喋ったりしないだろう。しかし、渡辺は認めた上で口にも出してしまふ。要するに現実には現実として、ありのままに受け止めているのだ。実は、人間という生き物にとって、事実を主観的にではなく客観的にありのままに受け止めるのは実に難しいことなのだが。

パリでの渡辺の率直な発言については、梅田も紹介している。誰にも彼にも本心を言い過ぎではないだろうか(笑)。

第三局。初日から羽生がほとんど勝ちを決め、そのまま押しきった。渡辺三連敗である。さすがの渡辺にとっても、結果内容ともにつらすぎる。渡辺は当日最終の電車で一人帰宅の徒につく。取材スタッフが、あわてて駅にかけつけると、そこには渡辺が一人ホームに佇む姿があった。

渡辺はスタッフに気づき、驚いたような、見つかってしまったかというような、バツの悪そうな表情を見せた。しかし、それでも渡辺はスタッフに努めて明るく言う。

わざわざすみません。

敗者はひっそりと帰るんです。

そして、電車に乗り込む際、渡辺は何度も何度もスタッフに律儀にお辞儀を繰り返すのだった。ショックは

ショックでも、誰かと話す時は気遣いや余裕を忘れないのである。

さらに、第四局直前の移動中の車内で渡辺は語る。

(第三局までのことは) 忘れられないですよ。なかなか。同じ相手と短期間に何局も戦うんで。

やはりウソがつけないのである。

第四局では、あの最終盤の場面をカメラが捉えていたのが、きわめてスリリングだった。渡辺は 3 七成桂としたときは完全に負けを覚悟していて、もし羽生がすぐに指したら投了しようとも考えていたそうである。(多分、もしそうなっても実際にはやはり投了はしなかったと思うが。)

実際に、渡辺はその手を指す時は、口に手をあてガクリと下を向いて指している。言葉に偽りはない。しかし、羽生が次の手を指すまでに少し間が空いた。その間、渡辺はうなだれて頭を抱える。しかし、ふと何か気づいたように、もう一度盤面を見直し、何かを一心に読み出す。そう、その瞬間に渡辺は白玉の打ち歩詰めの際に気づいたのだ。

それをカメラは捉えていた。渡辺のちょっとした仕草の変化が心中の動きを語っていたきわめてスリリングな映像である。映画監督がこういうのを撮ろうと思ってもなかなか撮れないようなことが、将棋の終盤の映像ではたまに起きるのだ。

第四局後もやはり渡辺は率直である。

今日、なんで勝てたのか分からないですね。だって終わる五分くらいの前まで負けだと思ってやっていたので。最後、打ち歩詰めのところまでは、ボクも負けだと思っていたし。羽生さんも勝ちだと思ってやっていたと思うんですよ。

すごい報道陣の数だったなあ。でもあれ、背中に回られたらきついなあ。

背中にとというのは、カメラが勝者の渡辺ではなく、羽生の方をパチパチやっていたということである。

このことについては[即席の足跡さんが、渡辺がスポーツ新聞の一面に登場した際のことを紹介している](#)。そういう報道陣の雰囲気を感じて、「反骨心」を大逆転の秘訣としてあげていたそうである。周りの雰囲気にへこんだりすることなく、ひそかに闘争心を燃やす勝負師としての強さ・たくましさも兼ね備えているのである。

第七局の終了直後、さすがに渡辺も感極まったという表情をみせていた。後に本人が言ったからというわけではなく、本当に「自分でも信じられない」と、その正直な表情には確かに書いてあった。

最後の渡辺の正直発言。

信じられないですね。いや羽生さん相手に四連勝するなんて、やっぱり信じられないです。そんなことがあるとは思わなかったですからね。

終わったとき、夢じゃないかと。

いや、結構竜王戦の夢とか見るんで。なんか夢じゃなくて欲しいなあと思いましたけどね。

そして、とてもいい笑顔を見せた。渡辺は竜王戦を通じて、負けている時も、勝った時も、変わらず渡辺らしさを貫いたといえるだろう。

渡辺と羽生、羽生と渡辺の勝負は、ようやく本格的に幕開けしたばかりである。

第一章は、期待以上のド派手な展開だったが、まだまだ大長編小説は続いていくはずである。いや、続いてもらわないとつまらない。また、続いてもらわなくては困る。



## 羽生善治

---

わたくし、羽生ファンとしてなぜか有名になってしまいましたが、実は意外に冷静な羽生オタなんです。羽生さんという人間に興味があります。もしかすると、いわゆるファンではないかもしれない。

## 将棋世界バックナンバーの羽生、森内、渡辺のインタビュー

---

どれも、ほぼ一年ほど前のものなのだが、それぞれ興味深いところがあったので、少しずつ紹介してみる。

羽生善治 将棋世界 2006/8

ここ数日、朝日新聞にA級順位戦、羽生 vs 三浦が掲載されていた。観戦記は、東公平氏、解説担当は渡辺竜王という豪華版。羽生さんが、一度 2六銀と上がって、2四歩とつかせてバックした手順が印象的。前例もあるそうだが、羽生さんが指すといかにも柔軟な手だと思ってしまう。竜王解説によると、攻めを相手にしない 3七桂が決め手だそう。きれいで明快な決め方で、それに対する竜王の明晰な解説である。やはり、羽生将棋というのは、流れを追っていて楽しい美しい将棋である。

東公平氏の文章は、やはり読んでいて心地よい。観戦記では、無論将棋の内容を質高く伝えるのも大切だろうが、やはり「読ませる」ことが何より大切なのだと感じる。最後に、もう一度生まれてきたら何を職業にするかという質問。三浦八段の「教師」という回答も、いかにも「らしい」誠実なもので好感が持てる。羽生三冠の答えは「そのときの流れに任せます。」これまた羽生流である。東氏の名批評を聞いてみよう。「水は方円の器に従う」という。円熟期の今の羽生将棋は、水の流れのように常に自然である。相手が四角ならその形を取り、丸ければ丸く応じ、最後は急流と化して相手を押し流す。本局はその棋風を、そして人生観までを表現したような、「羽生善治の名局」であったと思う。」

将棋世界のインタビューともつながる話である。

「あるひとつの局面を前にして、なにかしら答えがあるだろう、ベストがあるだろうという気持ちは、昔のほうが強く持っていたと思います。今は、そういうことはあまり求めないで考えたほうがいいんじゃないか、と思っているんですよね。答えを求めないようなアプローチのほうが大事なんじゃないかと。」

「言っていることは矛盾しているんです。でも、明快な理論で「こうだ」ということを求めようとしてしまうことで、選択が狭まってしまうのではないかと。今はそんなことを考えています。」

含蓄があって分かりにくいのだが、「相手を見て指す」大山将棋や、感性を研ぎ澄ました名人級の職人の話が持ち出されている。

羽生三冠は、最近、コンピューターと人間の将棋の根本的な考え方の違いにも言及していた。徹底的に合理性を追求してきた羽生三冠が、単純な狭義の合理性を追求するだけでは、こぼれ落ちる部分に対して、近年自覚的に考え始めているのかもしれない。吉増剛造氏との対談を考えても、もともと十二分にそういう素地はあったと思う。

但し、それは、あくまできちんとした将棋の実地での合理性を追求することがあくまで前提になっている。そうでなければ、怪しげな神秘主義やハッキリになりかねない。羽生三冠の場合、あくまで合理的にやるべきことをやりつくした上で、こういうことを言うから説得力がある。羽生将棋は、今後どういう方向性に進んでいくのだろうか。

森内俊之 将棋世界 2006/10

ご本人の将棋観ではないのだが、一番印象に残ったの羽生三冠について語った部分。

「棋士の中では一番尊敬しています。そういう感情を持つことは勝負師としては問題なのかもしれませんが

れど・・・。」

「羽生さんのすごいところは周りを引き上げながら自分もあがっていくところだと思います。勝負の世界では仲間がそのままの位置でいてくれれば自分があがった時差がその分開くわけで、勝ち負けだけ考えればそのほうが得になるわけですが、彼の場合はそう考えずもっと大きな視点で見えています。」

「自分でも情報を発信していく、技術的な部分でも将棋界全体のことにしても羽生さんはそうですね。自分は料理人に例えると、包丁で技術を振るうよりも市場に言って材料を集めたりするのが向いているし、好きなタイプだと思っています。」

こんなことをサラリと言っている森内さんを、私は人間的には「一番尊敬しています」と言いたくなってしまう。森内名人も羽生さんも、なんていう人たちなのだろう。こんな人たちが、トップに言って戦っているのを見ている将棋ファンは幸せだと考えるべきなのだ。

勿論、勝負師は、無理にでも敵対して戦ってこそプロという考え方もあるだろう。しかし、誰しも分かっていることだが、こういうことを言うのが森内俊之のありのままの個性なのだ。善人に無理に悪人になれといっても、仕方がないことである。

言うまでもなく、羽生三冠に対して褒めていることは、全部森内名人に対しても当てはまることを、きちんと指摘しておかなければフェアではないだろう。

やはり永世名人にふさわしい人である。

渡辺明 将棋世界 2006/11

竜王奪取の頃は8五飛戦法ばかり指していたが、現在は戦法の幅を広げていることに関して。

「後手番で工夫しなくなった。結構相手の好きなようにやらせています。」

「昔は戦法や知識で勝とうと思っていたんです。若手や挑戦者はそれでいい、だって結果を求めますから。(中略)色んな将棋を指すほうが自分の将来にとってメリットが大きいのではないかと最近では考えているんです。(中略)流行にとらわれない指し方をするようになりました。」

「今の立場では(勝ちのみにこだわる指し方は)許されません。勝ちにこだわるのは当然なんですけど、そんなやり方を後輩たちにまねして欲しくない。」

「(8五飛をやめた理由について)「どうせ研究で勝ったんでしょ」と思われてしまう。(中略)率が悪い、認めてもらえない、その上ファンにもうけないのでは・・・(笑)。」

竜王奪取当時、私は完全に渡辺さんを、完全に合理的でデジタル型の現代棋士だと勘違いしていた。また、だから面白いと思っていたのだ。

しかし、研究方法も若い頃は谷川さんの棋譜を実際に盤面にじっくり並べたアナログ型なのだと分かってきた。安易にイメージで批評したりするとやけどする棋士である。なかなか一筋縄ではいかないのだ。

渡辺明というのは究極的なプラグマティストだと思う。何か決めた理論や方式で自分を縛ったりせずに、現実に柔軟にどう対応すればいいかを、その都度即座に判断していく。また、8五飛について言っているように、世評とかファンの評判も、ある程度は気にするタイプのようなのである。「勝てば、どう思われようと構わない」ということではないのだ。だから、今後も渡辺明は、あらゆる外部のことにアンテナをはりめぐらしつつ、きっとどんどん変化し続けていくのに違いない。

ひとつ、テキトーな予言をしておこう。渡辺明は、将来必ず飛車を振り出し、しかもそれが主戦法になるくらいに勝ちだす、と。よく言われるように、竜王の場合は、将棋の各局面の、見極め、判断能力、センスが人並みはずれている。理論的に公式的に考えるというのとは、ちょっと違う。そういうセンスが最高に発揮されるのは、振り飛車なのではないだろうか。

まっ、多分また大ハズレなんだろうけど。渡辺明には、これからもファンの予想を裏切り続けてもらいたいものである。

## プロフェッショナル/仕事の流儀「最強の二人、宿命の対決—名人戦 森内俊之 vs 羽生善治」 断章 2008年07月28日

---

(未見の方で、DVD等入手可能予定の方は読まれないでください。この番組はとても完成度が高いので、余計な予備知識など一切なしに実際に見るのが一番なので。)

番組中、カメラが二人のそれぞれのアップをふんだんととらえ続ける。人間の俗悪な感情があらわになる顔になどお面をしてしまえと能は考える。しかし、この二人のギリギリの対局時の表情は、その喜びと悲しみと興奮と絶望の全てが、そのまま感情が昇華された聖なる絵画である。もともと人間の表情は美しいものなのである。

一般的なイメージでは、「将棋指し」とは対極ともいえそうな、kokuaの「Progress」が流れだすが、二人の対局姿は少しの違和感もなく現代風の音楽にはまっている。

本当に若き日の羽生の対局姿がチラリと映る。今以上に、あの羽生独特のオーラの透明感が尋常じゃない。サロメがヨハネに欲情するような純粹無垢さ、というわけ分からないが。しかし、指し方はあくまでピシッと厳しく。しびれる。

森内俊之 (羽生さんに) 劣等感を持っている自分がすごくいやだった。なんかイヤな人間になっていく気がして。

イヤな人間になりそうだと考えるのが、いかにも森内らしい。そういう自己認識のある人間は、実際にはイヤな人間になりようがないのだ。

羽生善治 お互いに力をふりしぼって考えて、やっとそういう一手が見つかるわけなんです。

本当に「力を振り絞って」いるように一生懸命言っている姿が、健気であるよ。

森内も、実は対局中には、怖い眼で羽生をにらみついているのだな。「森内ニラミ」だ。

森内俊之 私は音に弱いほうなんで。

全将棋ファンが、「去年の名人戦のせんす事件！」と合唱したに違いない。

森内俊之 自分が気がつかなかったすごいいい手をさされると感心する。実際には困っているんですけど、喜びとかありますね。

森内の羽生に対する発言は、常にやや無防備である。人がよいいとってしまえばそれまでなのだけれど、これが森内の個性なのだ。

森内俊之 (嬉しそうに) 負けず嫌いでは羽生さんのほうが上じゃないですかね。

そういうところでもかなわないやという一種のコンプレックスとでも言うべきか。

森内俊之 若いころは、完璧主義で間違えるのが許せなかったが、最近はゆるくなって、思うように指している。

あくまで、相対的な話であって、森内の完璧主義は、現在でも他の棋士と比べたら、遠くかけ離れて傑出している。要するに自分に厳しすぎるのだ。

羽生善治 (小学生のときの森内の初印象について) なんか、体格のいい、フフ、フフフ、そういう印象がありましたけれどね。

羽生の中では、体格がよくて「大きい」将棋の強い人というイメージは、いまだもそのままなのだろう。羽生が、他のライバルたちに対する態度とはどこか違っていて、やっぱり「幼い時からのツレ」というのが、森内に対してはあるような気がする。当然、あの森内の人の良さとも無関係ではありえないだろう。

羽生善治 (どちらが負けず嫌いかについては) よくわかりません、と笑う。

多分、ハイ、私のほうが負けず嫌いです、と受け取ってもいいんでしょうね。

羽生善治 (森内さんと) デパートの屋上で指すのも、名人戦で指すのも基本的にはかわりありません。ビニール盤で指すのも、五寸盤で指すのも。

将棋だけで純粹につながっている二人の関係性に嫉妬せずにはられない。

羽生が傷心で宙を見つめている写真の挿入。カメラが切り取る一瞬というのは、一万語費やして表現するよりも、簡潔にして雄弁である。

第三局で、羽生が、眼鏡をはずして目を押さえて、うなだれる姿。羽生は素直に気持ちを表現する達人でもある。

羽生善治 メンタルな部分は、年齢を重ねれば重ねるだけ、上がっていく部分だと私は思っています。長老の知恵、年配の人間のもっている揺るぎ無い知恵というか。

羽生が、大山のことを高く評価するのも、そういうメンタルな部分と、大きく関係しているのだろう。大山の揺れない心については、多くの伝説や証言が伝わるところである。

(お互いをどう思うか)

羽生善治 自分にはないものを提示してくれる相手。1+1=2 じゃない。掛け算とか二乗だと、思っています。

森内俊之 自分がここまで来れた恩人だと思っています。

またまた、二人の関係に嫉妬せずにはいられないではないか。それにしても、森内は正直すぎるよ。

第三局の大逆転の直後に、森内がバッティングセンターで、気晴らしをする場面。決してきれいなフォームとはいえないが、力づくで球をひっぱっていた。羽生の言うとおりの体格のいい「大きい」人である。

森内俊之 理詰めでもやることも今でも大切だとは思っていますが、今は自分の心の底からわきあがってくるものに素直にやったほうが、自分の能力を発揮しやすいと思っています。

つい、超一流のプロに対しては、純粋な技術だけで考えたくなるが、指しているのは生身の人間である。森内も、「技術的な完璧主義」だけでは駄目なことを身をもって体験した人なのだろう、羽生の言うように、メンタルのしめる割合は、予想以上に大きいのもかもしれない。

羽生の第六局での、鬼の表情もちょっと映った。羽生の将棋には、指し手にも対局姿にも、日常の時間にズカズカと非日常が踏み込んでくるように瞬間が確かにある。とてもスリリングな時間である。しかし、羽生が時折言う、「狂気」の世界に足を踏み込みすぎると、もはや元に戻ってくることはできない。

羽生善治 (プロとは)24 時間、365 日、プロであり続けること。つまり、そういう、プロであることを、常に意識の片隅に置き続けているということ。

こんなすごいこと、サラッといわないでくれー。やはり羽生は、単なる将棋指しではなく、将棋に仕える「聖職者」なのかもしれない。

第二局で、観戦記者と記録係が二人とも寝てしまい、どちらかが、大イビキをかきだす。森内が、「困ったな」という感じで、そちらを見やると、羽生のほうにチラリと一瞥をくれて。下を向いて笑う。羽生も、快活に対局中とは思えない様子で、大きく笑う。

あの森内の羽生への一瞥の瞬間に、私は全てを読み取ってしまったよ。ああ、この二人は、小学生のときに、どっかのデパートで、おっさんたちに混じって指していた時と、今でも全く変わらない関係なのだ。

羽生の再度の七冠騒動は、一応終わった。棋王戦決勝トーナメントで久保に破れ、挑戦の目がなくなった。王位戦でも、深浦が第七局の死闘を制した。深浦の戦いぶりについては、[梅田望夫氏が本質をついた分析をされている](#)。「大きなリスクを取った」というのは、まさしく今回の深浦の戦いぶりそのものであり、羽生相手であろうと、少しも気合負けもせず、弱気にもならず、自らを危険な場所に追い込み、羽生を打ち破ったのは見事であった。一羽生ファンとしては、最終局直後は悔しくてたまらなかったが、もしかしたら羽生のことだから、負けたことよりも、あの深浦のギリギリに自分を追い込む戦いぶりに、感心し何かを学んでしたのではないだろうかと思える。

羽生が、竜王奪取し、全タイトルを防衛し続け、王位に挑戦し奪取し、再来年の棋王をとればという可能性があるが、流石に現実的な話ではない。一応、七冠騒動はひとまず終結ということでもいいだろう。

私だって、ある程度現在の将棋界の状況を理解している。現在のトップ棋士はとても層が厚く、羽生とほとんど実力で遜色のない棋士がゴロゴロしている。だから、いくらなんでも再度の七冠なんて無理だろうと最初は思っていた。しかし、棋聖戦の奪取のしかたとか、竜王挑戦のプロセスとか、王位戦の逆襲を見て、私まで「もしかして」と思ってしまったのは事実だ。そういう夢を見させてもらっただけでも、羽生に感謝すべきだろう。

羽生の健康のことを考えても、今程度でよかったと考えよう。現在程度の過半数タイトルを維持しながら、魅力的な将棋を見せ続けてくれるだけで、文句を言ったらバチがあたるだろう。

当面は大注目の竜王戦がある。ここでは、羽生より渡辺の戦いぶりがきになる。竜王戦前でも、渡辺は大事な将棋を落とし続けている。[ブログでは、将棋について悩んでいると率直に告白もしている](#)。実績や勢いだけなら羽生が圧倒的なのだが、渡辺は、こういう時こそ、何かやって何かをつかんでくれる棋士だと私は信じている。結果どちらが勝っても個人的にはOKだ。それよりも、この戦いの中身の全てに注目しよう。

さて、百年インタビュー。

「8五飛戦法」を「高飛車」と言うなど、将棋ファンだけでなく、一般ファンにも理解できる話のないようにするというスタンスでつくられていた。聞き手の坪倉義彦アナも、きちんとよく下調べをした上で、あまりマニアックにもなり過ぎないように話を持っていき、とても賢い人で、この他優秀な聞き手であった。良いインタビューをしてきていたと思う。

羽生のお話を90分も聞き続けるという濃密な時間を、他の視聴者と共有したわけだが、やはり羽生というの、自然体でありながら普通じゃない人という印象を強く持った。名人戦特番のとき、茂木健一郎氏が、こんなことを言われていた。

あの表情は普通では絶対に出ないものだ。それをカメラが捕らえていることがすごい。普通の文明の中にいる人の表情ではない。サバンナの中でハイエナが獲物を狙っているようだった。

また、同時に羽生にはどこか不安定なところがあるという意味のことも言われていたと記憶する。羽生は、一見、とても爽やかだし穏やかだし、勝負師らしからぬ常識人である。少なくとも、一時代前の、いかにも勝負師らしい棋士とは全然違う。しかし、羽生のお話に耳を傾けていると、羽生の内面というのは、将棋を巡って常に高い緊張・テンションを保っており、場合によっては危なげとも言えるような突き詰め張り詰めたモノに対する態度・感性を保っていると感じる。



吉増氏との対談では、将棋を通じて垣間見る狂気の世界について、かなりおおっぴらに語っていた。無論、羽生だって、常にそういう世界ばかり意識しているわけではないに決まっているが、なんというか内面にとんでもない嵐を抱え込んでいる人だという印象を受ける。本人にしてみれば、別にごくごく普通に将棋に取り組んでいるだけです、ということなのだろうが、凡庸な人間からすると、その取り組みが、あまりに真摯であまりに緊迫感に満ちあまりに一瞬一瞬が新鮮だと感じる。

外面的にメチャクチャだった昔の棋士よりも、内面に恐ろしい感性を秘めている羽生のほうに、私は凄みを感じる。うまくいえないが、羽生が、ごくごく普通に話していても、凡人にとっては常に日常の退屈な時間を超絶した異空間を感じるのだ。常に強く張っている弓矢の弓のように。

紹介したい箇所はいくつもある。ただ、ここでは話として重要というよりは、個人的に強く反応した部分を紹介してみようと思う。

感情について

アツくなりすぎるとか、冷静を失うというのは、良くない時もあるんですけど、感情があるからこそ、いろいろな発想であるとかアイデアとか、集中力とか瞬発力を生むということもあるので、一概にサイボーグのように感情を排除してやるのがいいとは思わないのです。感情をうまく使うというか、一つの起爆剤のようにする。それが大きな集中力やモチベーションを生むことは、良くあることなんです。人為的には、どうこうできるものじゃないですか。今起こらないでおこうとか、調節できません。悲しい気分でいようとか。そうなった時に、どうするかを、その場合その場で、自分なりに対応するということ。

ちょっと大げさに言うと、高い境地に達した修行者のような感情に対する対処である。感情を無理に撓めようとしたり、コントロールするのでなく、今生まれる感情のままに、それを生かしてしまうやり方。あの名人戦の鬼気迫る表情を、誰もが忘れられないだろう。通俗的には、あのように気合を入れすぎるのは冷静さを欠いてよくないと言われるかもしれない。しかし、羽生の場合は、あの極限的な緊張状態を、最大の集中力へとプラスに転化させてしまうのだ。

人間には様々な感情がある。美しかったり醜かったり、高貴だったり卑属だったり、闘争的だったり平和だったり。そういう感情を、無理に抑制するのでなく、それぞれの感情に自然に花開かせ、自分の建設的な行為に役立ててしまおうとすること。

こういう話を聞いていると、羽生本人は全く意識していないかもしれないが、深い思想家や宗教家のような感性を自然に持っているように感じてしまう。

七冠達成当時について。

自分も一つの波に乗っている感じで、自分のことなんだけど、自分のことでないことのような状態になるんですよ。つまり、対局の指し手一手一手を決めていくのは自分の責任で、介入の余地はないのですが、周りの雰囲気とか、ムードとか、そういう大きな流れとか、そういうのに乗っているという感じなので、自分で成し遂げたという感じはなかったですね。

羽生が言っていたのだが、将棋は相手があるので自分でどうしようとか思ってもどうしようもなるものではない。相手次第で他力だという意味のことを言っていた。(梅田氏の棋聖戦観戦記だったと思う。)

こういうのを聞くと、羽生はほとんど「絶対他力」の人なのかもしれないと思ってしまう。ほとんど自力そ

のものとしか思えない将棋を職業としていながら。不思議な人である。

冒険的な手を指すということについて。

今日勝つ確率が一番高いというやり方は、十年後では、一番リスクが高くなるんですよ。十年後では、進歩に遅れているというか、時代に取り残されているやり方なんです。今日勝つ一番勝率の高いやり方は。つまり、どこまでリスクをとって、どこまで取らないかという、リスクマネージメントのことだと思っんです。どこまでアクセルをかけて、どこまでブレーキをかけるかが大事なこと。一番手堅くやり続けるというのは。長い目で見たら、一番駄目なやり方だと思っんです。勝率の高いやり方にこだわるというのは、未来を見ているのではなく、過去を見ているということですから。

そんなことまで考えて将棋を指しているのかと驚くのは、私のような一般ファンだけではないだろう。特にプロ棋士がこの言葉を聞いたらどう思うだろうか。羽生は、最近よく将棋はマラソンだというのが、近視眼的に目の前の勝負に勝つことだけ考えているわけではないのだ。まだ、これから何十年先に、第一位でマラソンのゴールをきればいいと考えているのかもしれない。恐ろしい話だ。

どの話を通じて感じるのは、羽生の場合、常に自分を客観視する能力が並外れているということ。常に、将棋を指している羽生を高めから見下ろしているもう一人の羽生がいるとでもいうか。

だから、今回七冠を逃がした事について我々ファンは悲嘆にくれている一方、羽生はもっと遠くを見ているのに違いない。このインタビューを聞いていて、私も七冠を逃したことなんて、なんでもないような気がしてきた(笑)。

私が一番痺れたエピソードを紹介して終わりにする。

小学生の頃の話

羽生 将棋は、いくらやってもコツが分からなかったんです。全然分からなかった。いくらやっても。まあ、今でも全然分かってないんですけど。

坪倉アナ (笑って) イヤイヤ・・・。

羽生 いや、ホントに。

羽生が毎日新聞の夕刊「想創」に三回にわたってコラムを書いていた。

8/4(火)「確率」について。

(要約) 将棋の振り駒も本当に公平かと、ある時期から将棋連盟が記録を取り出したら、やはりほぼ50%ずつになった。イアン・エアーズの「その数学が戦略を決める」では「絶対計算」という概念によって、例えばブドウが収穫された時点でその年のワインがおいしかどうかという普通予測が難しい問題に対して、数学的にアプローチして解決しようとする。母数が大きくなるほど確率計算の誤差が少なくなる。確率計算がマクロの行動予想やマーケティングでも今後ますます有効になるだろう。

一方、「砂山の崩れ」という考え方もある。砂を一粒一粒取り除いていくと、決して毎回同じパターンにはならない。常に偶然的なものも介在している。

偶然や意外性はどんな世界にも必要不可欠である。人は確率に惹かれるとともに、確率を超えるものを探すが「想像力」や「創造力」である。

羽生は忙しい中、色々勉強する時間をどうやって見つけているのだろうか。羽生的態度の典型的パターンがここでも現れていて、まず合理的な確率計算をきちんと学び理解した上で、その確率計算からはみ出る部分も見つけ出そうとしている。合理的な棋理の理解を徹底的に追及しながら、そこからふっと逃れ出る何かを常に追い求める姿勢。羽生は、現代には珍しいバランス型調和型の天才ーちょっとだけダ・ヴィンチのようなルネッサンス型天才を思わせる(ほめすぎか)ーなのである。

8/11(火) スピード・失敗から学ぶこと

(要約) 現代社会では様々なもののスピードが上がっていて、将棋の世界も例外ではない。そのために、きちんと検証したり確認する時間が少なくなってしまった。

将棋を指していて「人は同じようなミスを繰り返す」という事を学んだ。分かっている、同じ過ちをつい繰り返してしまう。ミスを繰り返す原因は、一つ目は動揺して冷静を失うこと、二つ目はミスの後にはより状況が複雑で混沌として選択難度が上がること。「歴史は繰り返す」というが、自分はマーク・トウェインの「歴史は繰り返さない、ただ韻をふむのみ」という言葉が好きである。失敗しても、そこからわずかでも学んで、次の機会に「韻を踏む」ことが出来ればと思う。

ミスを繰り返す理由について、例によって冷静に客観的に分析している。羽生のようなトッププロだけの話ではない。我々のようなヘボ将棋でも、一つミスをしてしまうだけで、将棋はわけの分からないカオスの局面になってしまう。不思議に。自分もミスを繰り返すが、相手もつられてミスを重ねて、とんでもない情けない棋譜が出来上がるという仕組みである。将棋というのは、お互い正しく指していると美しい形式が出来上がるが、一旦踏み外すと荒野に迷い込むとあてどもなく道なく彷徨う羽目になる。プロでもアマでもそれは変わりなく、将棋というゲームの本質なのかもしれない。

それにしても、トウェインの喩えは羽生流だ。全く同じミスを繰り返すのではなく、それを韻を踏んで意識しながら、新しくて美しく正しい詩句を生み出すということなのだろうか。羽生の思考には、合理的で

ありながら、どこことなく直感的把握能力がある。それを人はよくわからないとか言うこともあるわけだが、多分羽生本人にしてみればごくごく自然で普通な思考方法ということなのではないだろうか。

8/18(火) 自然から学ぶ

(要約) ヨット冒険家の白石康次氏は「自分の調子が良いと思った時は、船室の外に出て、風や波を感じながら次に進むべき方向を決める。調子が悪いと思ったら、中に入ってラップトップを見ながらデータで判断する」そうである。自然の中で暮らすのは過酷な反面、野生の勘が磨かれ自然と調和することが可能なのではないかと思う。現代社会が抱える問題は多くが解決困難だが、そのヒントは自然と分離していない人々の生活の知恵に隠されているのではないか。自分もそう考えて最近調べている。

現代将棋では、「今まで見たことも無いような局面」「けものみち」に入り込むことがままある。それには単なる定跡システムの知識では対応不能で、自分の直感に頼って局面を把握する能力が必要である。このことは、羽生が最近の対談やインタビューで盛んに語っている。そのヒントとして、自然と向き合って暮らす人々の知恵を探ろうとしているのだろう。

最近の羽生は、将棋の徹底的な合理的追求の段階をひとまず終えて、それだけではどうではないものにどのように対応するかを常に考えているように思える。大山のほとんど読んでないにもかかわらず急所に手が向かう「大局観」を高く評価するのも同じ文脈だろう。それは、決して年をとって達人を気取っているわけではなく、合理的に追求しても分からないものにどう対応するかを必死に真剣に追い求めているように見える。

私が羽生を面白いと思うのは、結局そのことに尽きる。極めて現代的に合理的に知識でカバーできる部分で出来る努力を決して惜しまない一方、そういうことを極限までやってもどうしても分からない部分についての、きわめて明瞭で開かれた捉われの無い感性がある。羽生の哲学的な言辭は決してハツタリとか気取りではなく、将棋をいかに深く正しく理解するかというごくごく実際的な要請によるものである。徹底的に合理的でありながら、ある時は非合理であることを全く恐れていない。中途半端な努力しかしていない人間に限って、一見合理的な薄っぺらな考えを振り回して、自分の理解できない事柄を馬鹿にしがちなものだ。本来、羽生のような世界や対象に対する態度は、人間のごく当たり前のあるべき姿なのである。現代においては、ほとんどの人間が、そういうことを忘れ果てているだけに過ぎない。

羽生は教養的将棋指しとかいう存在なのでもない。徹底的に職人的な将棋指しである。羽生が、将棋以外の色々なことに興味を示して止まないのは、彼が本物の将棋職人であるために、将棋の真理を知るために他の事を考えずにはいられないからだ。将棋に限らず本当に何かの道を追求している一流の人物には必ず起こることである。彼が色々なことに興味を示すのは趣味や余技などではなく、将棋を本当に知るための必要に迫られてのことだ。羽生には一生純粋な将棋職人であり続けてもらいたい。彼にとっては、将棋を指す以外のことはどうでもいいことだ。将棋を指すことで他の全ての世界のことに通じるレベルの職人だから。間違っても、連盟会長のような、くだらない仕事など一生して欲しくない。彼の性格からして、きつとやるのだろうけれども・・・。

いやはや、ちょっと調子が出すぎた。こんなことを書いていても、羽生には迷惑なだけだし、仮に読んだら苦笑されてしまうだろう。もうやめよう。読者諸賢もつきあわせられてさぞ迷惑だっただろうが、すぐにでも忘れていただきたい。

さて、この回のコラムでは、「ハゲタカ」というテレビドラマにもふれている。柴田恭平演じるエリートサラリーマンが、自分の関与する粉飾決算に嫌気がさして、上司の飯島(中尾彬)に辞表を提出する。中尾は

「オマエはカッコいい。だからダメなんだ」と答える。羽生は中尾の演じる飯島の人間的魅力を(羽生らしく公平に)認めたとうえで、こんなことを言っている。

しかし、組織における不祥事や問題が後を絶たないのは、飯島のように清濁あわせのむことができ一人前、という風土があればこそではないでしょうか。

番組恒例の脳内将棋で五連覇中の佐藤康光「脳内名人」。決まりなどないわけだが、永世資格を授与するべきか検討しなければいけないくらいの強さである。過去に対戦した久保利明が「手の見え方が普通じゃない」と感嘆していた。プロなら誰でも脳内将棋くらいはできるのだが、脳の中に浮かぶイメージの鮮明度が桁違いなのだろう。

その「絶対王者」佐藤に待ったをかけるべく登場したのが羽生善治である。番組冒頭から、いつもの人を引き込む笑顔を見せながらも「今日はちょっと緊張しています」。

対局開始前に、両対局者にミニインタビューが行われる。いつも通り笑顔で羽生は答えるが、続いて佐藤にインタビューが行われている間に、既に羽生は額に右手の当ててうつむき、既に集中モードである。「考える人」ならぬ「考える羽生」。

羽生がタイトル戦などで見せる異常なまでの集中力、ほとんど外界の出来ごとを完全にシャットアウトして自分の世界に入り込んでしまった時に見せる、日常風景では見受けることなど不可能な、あの羽生の眼光、表情からみなぎるこわいくらいの気迫。

羽生は、深く考えるというのはある種海に深く潜水するようなものと表現していたことがある。タイトル戦などでは徐々に潜っていくわけだが、今回はいきなりトップギアにいれなければいけない。佐藤のインタビューなど完全に無視してしまっている羽生の急激な集中への没入振りに、見ていて既に震えがくる。将棋は先手羽生で、少々変則の矢倉。7六歩に3四歩に対して、三手目6六歩としたのは、さすがにいきなりの乱戦を羽生も警戒したのだろうか。

先に動いたのは羽生。こういう場合、大抵積極的に強気にいく羽生らしい。

羽生は相変わらず、額に右手を当てたままのポーズ。時折頭を小刻みに振り、膝の上におかれた左手が時折りズムをとっている。頭脳が猛烈にフル回転しているのが、そうした仕草からはっきりと感じられる。

佐藤は対照的に静の姿勢。

解説の久保によると同じプロでも脳内にモノクロの盤が浮かぶ人もいれば、カラーで鮮明に浮かぶ人もいるそうである。

将棋は相変わらず羽生の猛攻。流れるような手筋から、羽生ゾーンとも言われる8三へのらしい金打ちで相手飛車を捕獲。攻勢の羽生が俄然優勢である。

羽生のアップが映し出される。つぶった目がパチパチ、パチパチと小刻みに動かされる。睡眠の最中にこのような眼球の動きをされるといわれるが、ほとんど身体全体をフルにつかった深いレベルで頭脳が猛回転しているかのようなようである。人間が極限状況で考えている姿をカメラがしっかりと捉えていた。神吉宏充も「羽生さんのこんな表情を見たことがない。」脳科学者なら、この状態の羽生の頭脳を調べたくて仕方ないだろう。

羽生が一気に寄せに行くが、さすがは佐藤「脳内名人」。粘り強く冷静に中段に玉を脱出していく。佐藤玉が入玉できるかどうかの勝負になり、羽生も必死に迫るが佐藤が冷静に対応して結局入玉確定。

脳内将棋でこんな展開になるとは。

しかし、羽生も諦めない。今度は自分が退路を開拓して、相入玉を狙う。

えっ、脳内将棋で持将棋か？

手数既には150手を超えてしまった。

今度は佐藤が必死に羽生玉の脱出を阻もうとする。そして、ようやく羽生玉を下段にむ追い落とすことに成功。あとは、なんとか寄せることが出来れば佐藤勝ちだろうという場面で・・・。

佐藤 6六歩。

6三にも歩が！二歩だ。

久保「あっ、それはちょっと」

佐藤もすぐ気付く。「あっ」、痛恨の表情と苦笑い。羽生は、まだ呆然としたまま。

佐藤が言うには、手数も伸びて、持ち歩の枚数のことばかり気にして、二歩がノーガードになってしまっていたと。一方、羽生も二歩には気付いておらず読み筋で、佐藤の手の後を考えていたという。まるで、激戦を繰り広げた末に、二人の読みがテレパシーで通じ合ってしまったかのように。

局後羽生は寄せ方を悔いていた。もっと明確な寄せがあったはずだという感想だった。さすがの羽生でも、10秒の脳内将棋、公開対局ということもあり、無理もない。むしろ、羽生が寄せそこなったために、壮絶な展開になって面白かったともいえるだろう。

佐藤は終始静の状態だったが、やはり集中力に尋常ならざるものを感じさせるに十分だった。

そして、一方の羽生はまさしく「考える人」だった。

asahi.com [ドラマを伝える将棋 ～名人・羽生善治氏に聞く](#)

朝日新聞社デジタルビジネスセンターの企画・制作のインタビューなのだが、大変良質な内容で、「羽生善治の現在」を考える上での手かがりが満載である。

私にとって理想の将棋は、最初から最後まで停滞なく、秩序立った手が続くようなもの。

こういう考え方は、多分羽生が若い頃から変わらないところなのだろう。将棋は場合によっては、秩序とは無縁な泥沼の戦いに突入することもあり、特に現代将棋の場合はいきなり序盤から混沌状態に陥ることもある。羽生は、そうした現代将棋に対しても積極的な興味関心を持ち、現代将棋の最前線に常に顔を出し続けながらも、やはり本質的には秩序だった古典的な形式感のある将棋に対する強い憧れがあるのではないだろうか。量子力学に「神はサイコロを振らない」と言って抵抗したアインシュタインのように、羽生も本質的には古典的秩序主義者なのではないかと思うのだが、どうだろうか。

テニスの試合などによく似ていると思います。相手が簡単な球ばかり打ってくると、こちらも平凡なショットしか返せない。厳しいところにいい球が打ち込まれるからこそ、スーパーショットが生まれ、観客が感動するわけですね。

羽生ならではの美しい比喻である。常々羽生が言うように、将棋はあくまで対戦相手との共同作業であり、一度自分が手を指してしまったら、相手にゆだねるしかない。将棋は他力である。そして羽生は、相手がベストのショットを返してくることを常に期待している。最近、深浦が一部で「恋愛流」と呼ばれているようだが、ある意味羽生こそ本物の「恋愛流」なのかもしれない。まず、なによりも自分ひとりでは何も出来ず、常に最上の恋人を待ち望んでいるという意味で。羽生がよく急所で見せる「手渡し」も、相手のベストショットを期待して敢えてチャンスボールを打っているのかも？

一つの局面に対し、限られた時間内で「深く」読む（主要な手について何十手先まで展開を考える）か、もしくは、「広く」読む（手の選択肢を増やしているいろいろな可能性を検討する）か、この二つのアプローチがありますよね。最近の私は後者をとる傾向が強く、結果的にほかの人の頭になかった手を選ぶということがあるのかもしれません。

「羽生マジック」について、羽生はいとも簡単にいう。種も仕掛けもありませんよ、ただ広く読んでいるから他の人の考えない手が読めるのですよ、と。特に、近年は広く読む傾向が強まっていると言う。これは



後述の大局観の問題とも関連するが、現在の羽生が、いかに力づくで読む作業を省略して、局面を直感的に正しく把握しようとしているかとも関係するのだろう。羽生は、そういう方向性に自分を変えて、さらに一段上のレベルへ進歩させようとしているかのようだ。

定跡やセオリーの中で、不利な局面につながるから損だといわれている手でも、実際はどれくらい損なのかはよくわからない。それを実戦で使ってみて、自分の感覚として理解することの積み重ねが、手の良し悪しを判断するカンのようなものを磨いてくれるのかなと思うんです。

羽生は、忙しい中、タイトル戦当で常に最新の研究将棋を指している。羽生くらい力があれば、研究将棋を避けて力戦に持ち込めばとも考えてしまうが、研究将棋の定跡についても、羽生はそれほど簡単には考えていないのようだ。最新形の定跡の中からも、普通は先入観で考えてしまう場面で柔軟に考えて疑問を投げかけているようだ。また、その能力に相当個人的な自信があるのではないか。だから、徹底的に研究された定跡将棋にも、羽生は常に大事な将棋で自分の身を投げ入れ、なおかつその定跡のちょっとした隙について勝ち続けることが可能なのだろう。研究将棋でも、実は個人の考える能力が一番大切だと考えているのではないだろうか。

私は、劣勢になったら、差がそれ以上開かないように、ひたすらついていきます。その間はずっと劣勢が続くわけですから、気持ちの上でイヤになって投げたくなりますが、そこは耐えて粘り強く……。もちろんそのまま逃げ切られてしまうこともありますけど、チャンスが来てひっくり返せる場合も少なくない。それ以外に、とくに秘訣はありません。

これも羽生マジックの秘密公開である。問題なのは、種明かしされても、誰もなかなかそう簡単には実行できないことだ。羽生は、基本的にはとても筋よく指すが、時にはとてつもない辛抱を厭わないことがある。普通の棋士が指したならば、とても勝ち目がない、酷評されそうな我慢の手を指す。多分、それは羽生の中では、劣勢を素直に認めて差を開かないようにするための手段に過ぎないのだろう。じぶんの劣勢を率直に認めるといのは難しいことだ、それを認める能力と言うのは、羽生特有の全てを客観的にみつめる能力とも関係しているのだろう。

後は、40代、50代とそれぞれの年代ごとにテーマを決めて、それを達成していきたい。もうすぐ40歳になりますが、『大局観』つまり、勝負の全体を見通す感覚のようなものはこれから伸びてくるところだと思うので、そこは磨きをかけたいですね。

羽生が最近良く口にする「大局観」も、とりあえずの40代のテーマに過ぎないのかもしれない。なんと貪欲な、そして常に自分を変えて生きたいという意志。ここまで来ると、孔子の「三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳従う。七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず。」

のようではないか。まさか、四十にして大山、五十にして升田、・・・、というようなことを考えているわけではあるまいが。とにかく将棋ファンは、当分先まで楽しめそうである。

生活全般の中で、行動がルーティンになってしまわないように心がけています。行動がパターン化すると、思考もパターン化しがちですよ。しかし、思考のパターンだけを変えるのは難しい。だからまず行動パターンから変えてみるというわけです。簡単ですよ、いつもより早起きしてみるとか、朝食のメニューを変えてみるとか、行ったことのないところに行ってみるとか、そんなことです。そうした結果、新しいアイデアや発想が生まれやすくなる気がします。パターン化されたことが嫌いなのかも知れませんが。例えば、私は10年後、20年後には、今予想されるのとは違う姿でいたいなと思っています。青写真どおりに人生が進んでいくのはちょっとつまらない気がするんですよ。

常に毎日同じ時間に同じ事を儀式のように繰り返して行動しないと気がすまないタイプの人間がいる。一報、羽生のようなタイプの人間もいる。両者は、同じ人間でも全くタイプが違う。農耕民族と狩猟民族、定住民族と遊牧民族、平地の民と山の民、色々な言い方が可能なのだろうが、明らかに羽生は後者のタイプである。羽生は、一見健全な常識人のようであるが、いい意味で普通の生活人とはちょっと違うところがある。常に変化を追い求めて一箇所に安住しない本質的な血のようなものを感じさせるところがあるのだ。羽生は他の職業でも何でもこなせる人なのかもしれないが、やはり「棋士」ではない「将棋指し」にふさわしい人なのではないかと勝手に思ったりもするのだ。

最近、「生きてみた感想」さんの記事に触発されて、私もいくつか記事を書いたわけだけど、この本のことが何となく気にかかっていた。

これが出版されたのは1997年というから、もう13年も前のことである。羽生さんのことだから、多分、当時とは考え方や感じ方も随分変わっていることだろう。しかし、若いからこそ可能な率直な物言いが新鮮で、改めて読んでも感動が薄れることはない。

特に二回目の対談(なんと椿山荘で行われていたことに今回気付いた)は素晴らしい。二人の本物の表現者が、普段はとてもしゃべらないであろうことを、喜々として語っている。何度読んでも感じるのだが、二人が言っていることを頭で理解することは出来ても、本当に二人の表現者のレベルにたって身体的に理解するのは無理だ。だから、素晴らしいのだが。

以下、いくつか最近書いたことに関係しそうな部分を紹介してみよう。

突然、羽生が将棋指す際に垣間見る「狂気」の世界について語りだす。以下そのテーマを二人で深く延々と語るのだが、その最初あたりから。

なにか抽象的な表現で申し訳ないんですけども、つまり確信がもてない、その確信がもてないということがいわゆる漠然とした不安ですよ。確信がもてない。つまり同じ不安でも、何が原因か分かっている不安というのは耐えられると思うんですけども、確信がもてない不安というのは、なにかだんだんだんだん長く長く続いていると、精神が持ちこたえられないんじゃないかっていう、そういうところが狂気みたいなものの結びつくんじゃないかっていう、そういう感じはあります。

我々が普段将棋を指していても、不安も狂気も感じたりはしない。しかし、プロレベルになると「不安」を感じ出す。それが外面に分かりやすく表現された例が、名人戦での三浦八段である。しかし、プロといえども、「狂気」まではっきり感じてしまう棋士は果たしてどれだけいるのだろうか？

羽生の場合、人一倍真摯に将棋にむきあっているので、「狂気」とすら場合によっては直面してしまう。そういう恐ろしさをよく知っているからこそ、「不安」への対処が上手で、短い時間の将棋でも、次々に素早く拘泥しない決断が出来るのではないだろうか。羽生が一日制のタイトル戦で絶対的な強さを示すのも、恐らく将棋の強さだけの問題ではない。

「ヒカルの碁」と関連して、歴史全体とのかかわりについて、この本でもかなり深く語られている。特に、吉増氏の詩全体の歴史とのかかわりについての「告白」はもの凄いのだが、ここは一応将棋ブログなので(笑)、興味のある方には読んでいただくとして、羽生の発言を紹介しておこう。

定跡というのは、つまりいままでの歴史の蓄積みたいなものですけども、その歴史の全部を否定するようなアイデアに行くのか、定跡にのるのかのどちらかしかないのではないかなという、そういう感じがして。

将棋もあと五十年経ったらどうなっているのかなあってことを考えたことがあるんですよ。(中略)

狭く狭く考えていってしまうと、なんかつまらなくなるような気がするし、広く広く考えていけば、また逆にシジフォスの巨大な石じゃないですけども、とんでもない可能性があるような気もする。それはわからないけれども、そういうことを考えていて楽しかったりするのです。

羽生が、吉増氏に対して詩の言語全体の歴史と詩人のかかわりについて、ものすごい勢いで質問し続ける。詩についての興味もあるのだろうが、羽生が将棋の歴史全体を意識しているのは明らかなようにも思える。「ヒカルの碁」の「神の一手」が、恐らく歴史全体の産物であるように、羽生も将棋の歴史全体と意識的に対峙して将棋を指しているのだろう。そして、猛烈な定跡化によって解明されつつ現代将棋を賢明に理解しながらも、羽生の視線はそういう定跡化からどうしてもこぼれ落ちるもの、将棋全体の歴史の蓄積を全て感じることによって逆説的に可能な「自由」に向いているような気がしてならない。もちろん、私の独断に過ぎないのだけれども。つまり、羽生は将棋の歴史全体による拘束や不自由を全て正面かすら受け止めながら、その歴史を超える、—という言い方は適切ではないかもしれない—、のではなく「すりぬける」ような行為を夢見ているとでも言うか。シジフォスのように、永遠に続く労苦を厭わずに、坂から降りる一瞬の喜びのみを待ち望んで。

また、羽生は「神の一手」が、羽生個人の所有物でないことも一番よく理解している棋士だろう。羽生が最近よくいう「将棋は他力」というのは、まさしくそのことだ。

さて、もう読むのがイヤだという読者のために、最後はこれを紹介しておこう。

(対戦相手と共鳴がおこりやすい条件について) それは、率直にいうと、相手の将棋を認めているかどうかということが大きいと思います。だから人間性とかでなくて、その人の指している将棋そのものを認めている、すばらしい将棋を指す人だということをちゃんと思っていれば、そういう共鳴は起きると思いますけれど。

やはり、羽生はエロスではなくアガペーの愛の人なのだ。

最初から最後まで余すところなく語りつくしたくなるような貴重な番組だった。以下、呼び捨てにはしていない方々が次々に登場するのだが、敬称略で統一して書かせていただく。

十局中、羽生善治の将棋がなんと七局を占めた。やはり、NHK 杯の歴史は羽生善治の歴史だったといえるだろうか。今回は歴代優勝者が選んでいるので、特に現役世代の将棋が多くて昔の名局が抜けているかもしれないが、やはり現役世代にとって、NHK 杯に限らず将棋の歴史がそのまま羽生善治の歴史だということを感じさせた。

選ばれた将棋では、やはり羽生が、大山康晴、加藤一二三、谷川浩司、中原誠という歴代名人を連破して優勝した伝説の大会が印象的である。一位に加藤戦、四位に決勝の中原戦が選ばれた。

加藤戦については、伝説の 5 二銀があるので一位は予想通りである。当時の映像で全ての指し手を再現したので、将棋の流れが分かって良かった。角換わりの将棋で羽生が先手で加藤のお株を奪う棒銀で攻め倒した将棋である。そういう将棋の内容もそうだが、羽生の指し手、指す手つき、全てに迷いがなくて若々しい。新鮮である。羽生睨みも出ていた。それに、負けずと加藤もど迫力の対局態度と手つきで対抗していたのも爽快だった。伝説の 5 二銀よりも、羽生が若くて攻撃的に年長の棋士に襲い掛かる様子に感慨を覚える。最近、逆の立場の竜王戦を見終えたばかりなので。

米長邦雄が、いつものように賑やかな解説で盛り上げているのだが、羽生の若々しい将棋の勢いに反応していたところもあったように感じる。ちなみに、5 二銀の瞬間に、米長がマイクの音声が割れるくらいの大声、奇声をあげたのだが、羽生によるとそれが防音された対局室にまで聞こえてきたそうである。そんなことは後にも先にも、その一度きりだとのこと。

加藤戦よりも将棋の内容が鮮烈だったのが中原戦である。当時の映像とスタジオの映像を見比べて感じたのだが、羽生はやはり今より顔も細身でシャープな印象である。黒澤明の「椿三十郎」で、三船敏郎扮する素浪人のことを大名の奥方が「あなたは抜身のないむきだしの刀のような方ね」と評するシーンがあるのだが、若き日の羽生の映像にも、ちょっとそんなところを感じた。

将棋自体も、角と飛車を次々に叩き切り、以下も鋭い寄せで中原玉を捕獲してしまった。その流れるような攻撃手順は本当に見事だ。羽生も振り返って、「今見ても信じられないくらいうまく指せていますね。自分の持っている力以上の将棋が指せた。出来すぎという感じがします。」と言っていた。後半は謙遜だろうが、羽生も自分の過去の姿を見て何か思うところがあったのではないだろうか。先日までの竜王戦では、どこかアンバランスで踏み込むべきところで自重したり逆に辛抱すべきところで無理に行ったりしていた様に思えた。素人が偉そうに言うべきことではないのだろうが、将棋に迷いのようなものを感じた。相手の渡辺明には、指し手に全く迷いが感じられなかった。そういうアクセルの踏み方緩め方が将棋では一番難しいのだろうが、かつての全く迷いのない羽生に何かのヒントがあるのではないだろうか。羽生ファンとしては、羽生にその何かを見つけてもらいたいなど感じたりもした。

解説が大山だったのだが、当然ながら実に的確で鋭かった。最近、羽生が「大山先生は読まないでも局面を見ただけで急所がすぐに分かる」とよく言うが、まさしくそんなことを感じさせる伝説の解説でもあった。永井英明の名聞き手ぶりも懐かしい。

羽生が負けた将棋も入っている。長沼洋が驚異の受けで羽生をうっちゃった将棋も当時話題になったもの

である。同票の七位。羽生が投了した瞬間に、長沼が何か申し訳ないとも言うように、ほとんど畳に頭がついてしまうのではないかというくらい頭を深く下げているのも印象的だった。長沼の人柄を感じさせると共に、羽生に勝った嬉しさがにじみ出る名シーンだった。

羽生が決勝で山崎隆之に負けた将棋も六位にランクインした。羽生も当時を振り返って、山崎の 3 九銀が珍しい筋で印象的だったと語っていた。この手に象徴されるように、世代的にそれまでとは「線ではなく点で考える」新感覚の棋士が現れたなどと騒がれたものが、今にして思うと世代の問題というよりは山崎の強烈な個性だと感じる。

羽生が決勝で村山聖と戦った将棋が三位。最後受けておけば村山の勝ち筋だったのを、ウツカリで飛車を抜かれて急転直下で負けにした将棋である。スタジオで映像を見つめる羽生も、やはり感慨深げだった。中原と米長の重量級の対決が二位。ランクインした中では懐かしい感じがする組み合わせである。実はこのお二人での決勝はこの一回だけだったそうである。ちょっと意外だった。さすがに将棋も対局姿も迫力満点だった。

櫛田陽一が四段で一気かけあがって優勝した決勝の将棋が流れたのも嬉しかった。第五位。やはり、この頃から櫛田は堂々と居飛車穴熊にくませて、堂々と作戦勝ちして勝っていたのである。そして、それを今でも変ることなく続けている職人肌で頑固な棋士である。フリークラスに自主的に転出した関係で、引退の時期が近づいているのだが本当に惜しい。何とかならないものだろうか。

中井広恵が NHK 杯で女流が初勝利をあげた将棋も同票で七位に選ばれた。その回のトーナメントで、中井は佐藤康光もほとんど負かす直前のところまで行ったのである。本来その将棋が選ばれるところだったので、あれは残念だった。オマケで中井が NHK 杯に初出場した際の映像も流れたのだが、対戦相手の先崎学も含めて、いや若い若い。他にも懐かしい聞き手や読み上げや記録が映っていたが、女性の場合、やはりファッションや化粧が随分変わるものだと感じた。本当に余計なことだけれども。

番外編では、小林健二の時間切れブザー鳴り。ブーと無機質なブザー音が響き渡る絵はなんともシュールだった。有名?な豊川孝弘の二歩も。直後に豊川は「あっ、失礼失礼、申し訳ない」と。咄嗟に「申し訳ない」と出てくるのが豊川らしい人柄の良さを感じさせた。

羽生善治以外に、もうひとりのこの番組の主役がいた。加藤一二三である。ラジオ時代の話がされていたのだが、若き日の先生のモノクロ映像が。クールな眉目秀麗な感じの痩せた美青年である。最近のファンは驚かれたのではないだろうか。対戦相手の大山が当時 37 歳というのにも貫禄がありすぎて私は驚いたのだが。

加藤の場合、今とその当時のイメージに落差がありすぎる。しかし、米長が羽生 vs 加藤の解説で加藤の少年時代を紹介していた。「若い頃はとてもお喋りだった。有吉さんが『ピン (一) ちゃん、うるさいよ』、そういう風に叱ったというくらい早口で喋る少年だった。」と。つまり現在の加藤は少年時代に先祖帰りしたということであろう。

同票の七位に、羽生が中川大輔に大逆転した将棋が選ばれたのだが、この将棋に関してだけは主役は解説の加藤だった。これは私もリアルタイムで見れていたが、中川玉の頓死を発見した後の加藤は伝説である。「あれっ、あれあれあれあれ。」あれを何度言ったか私は数え切れなかった。そして「ひゃあー」の繰り返し。擬音の天才。スタジオの羽生によると、「私も、あれ、つくろいは思った。ひゃあー、までは思いませんでした」とのこと。

第十位は加藤 vs 大山の古い対局。残念ながら映像が残っていないそうだが、その代わりに「加藤一二三・当時を振り返って語る」を観ることが出来たのはファンにとって僥倖であった。加藤一二三必勝の将棋を最後頓死を喰らってしまった将棋について、自分にショックな将棋なのに、加藤は嬉しそうに滔々と熱弁を

ふるったのである。 8 八金とやったために、すかさず 同角成とされて簡単な 3 手詰めの大頓死である。加藤先生曰く。

「ファンの方が言うのには、 8 八角成と金を取った時の大山先生のね、この手の素早さ、つまりね、加藤さんに絶対にマッタは許さんぞ、という気迫のこもった 8 八角成だったと。」と、少年当時と同じように早口で解説されたわけである。

これは谷川も印象に残っている将棋だそうで、スタジオの羽生も大山の電光石火の手つきを覚えているそうである。

唯一、この番組で残念だったのは、「加藤一二三・羽生の 5 二銀を振り返って語る」がなかったことである。

というわけで、BS 特番「加藤一二三・6 時間将棋を語りつくす」をどうっすか？ NHK さん。

本書は、「100冊の本制作委員会」が羽生善治にインタビューしたのをきっかけに、羽生が講演会を開催し、その内容をもとに大幅に加筆・修正してつくられた本だそうである。

内容は、羽生が将棋を指してきた経験を具体的に踏まえて、それを一般人が生きていく上でヒントになるようにまとめられている。目次は以下の通りである。

- 第一章 努力を結果に結びつけるために
- 第二章 ツキと運にとらわれずに、最善を選択する
- 第三章 120%の能力を出し切るプレッシャーとの付き合い方
- 第四章 結果を出し続けるためにはミスへの対応が鍵になる
- 第五章 自ら変化を生み出し、流れに乗っていくために

こうした、ツキ、プレッシャー、ミスといった具体的なテーマを将棋の経験と関連させながら、分かりやすく説明している本である。

なお、講演会の模様もDVD化されているそうである。

以上、簡単ではあるが、まず本の内容を紹介させていただいた。以下は、将棋ファン、羽生ファンの個人的感想である。

まず、純粋に将棋ファンとしても面白い部分がある。プロ同士が将棋を指していると、お互いに手を消しあうのでプラスになる手がなくて、なるべくマイナスの少ない手を選ぶことが多いという。その話とも関連するが羽生が得意とする「手渡し」についても述べている。

また、読む上で決断するプロセス、直感、読み、大局観について具体的に詳述しているのも将棋ファンには興味深いところだろう。

それと、この本の人生論的な側面について。タイトルが「結果を出し続けるために」となっているので、もしかすると成功するためのハウツー本のように取られるかもしれないが、内容は逆である。羽生の人生に対する考え方は将棋同様に、ごくごく自然な素直で柔軟である。内容は本を読んでもいただければ明快に分かるので、紹介のために具体例を最小限の範囲で引用させていただく。

(対局の)本質は、勝つためというよりは、価値をつくるためです。

私は、一人ひとりの人に、「自分が思っている以上に、周りに対する影響があること」に気づいてほしいと思っています。

私はさらに究極的には、「成功とは、今ではなく晩年どうなるか、ということに尽きる」と感じています。

これらの例で分かる通り、決して強者が弱者をおしのけてエリート主義的に生き残るためではなく、各



個人が自分の価値観に基づいて自分をどう生かせるかという考え方で書かれている本である。そういう考え方に共感できる方は、将棋ファンでなくても読んで見られる価値がある本だと思う。羽生も「本書では、『結果』『成功』『幸せ』等の言葉が出てきますが、これは世間的、社会的にという意味ではなく、あくまでも各々の価値観において、という意味です」と断っている。

羽生が読者が生きていく上でアドバイスしている事柄についても、決して上から押し付けるのではなく、こうしてみたらどうだろうかという謙虚なスタイルなのである。

ところで、将棋の世界はあくまで勝ち負けで勝負がついてしまう単純で残酷な世界である。そういう世界で圧倒的な「勝者」である羽生が、こういう勝敗に重きを置かない価値観について語るのはどうかと、意地悪な人間ならもしかしたら言うかもしれない。

勿論、羽生の魅力が将棋が強いことにもあることも確かだろう。しかし、そういう弱肉強者の世界の頂点にいる人間が、このような自然で普通な考え方をしていることを知るだけで私には十分である。羽生は将棋指しとしても、その他の面でも非凡な存在である。しかし、一人の生身の人間としてはごくごく普通の存在だ。そういう羽生個人まで神格化してしまったら羽生も迷惑なだけだろう。この本は、厳しい勝負に明け暮れる人間が、ごくごくまっとうで普通な感覚を失っていないことをすることができる、きわめて健全な本である。

個人の間人としては、どんな凡人も羽生と対等である。心の世界には社会的地位や名誉や財産による差別など一切ない。例えば将棋の世界にも、まったく実績をあげてなくて無名でも素晴らしい心の持ち主はいくらでもいるだろう。羽生もそのことをよく理解している筈で、たまたま将棋の世界で有名だから、こうして自分の経験を生かした本を書いているだけのことであろう。

だから、羽生に対してかしこまったりせずに、そのアドバイスで役に立つ部分をありがたく取り入れてみればよい。そして、羽生もあくまで読者に対して対等な視点で気さくに一人のアドバイザーとして話しかけている。

そういうごくごく真っ当な本なので、それが返って今の世の中では珍しく感じられる。

朝吹真理子は、将棋は人間が指しているのに、人間の理を離れた将棋の無時間の世界に人間が入り込んでゆく恐ろしい出来事だと考える。将棋の盤という平面の本来時間が介在しない無時間と対局者が感じる特別だが本質的には有限な時間とそれを我々が観る日常的な現実世界の時間が交錯する、と。

朝吹は鋭い感受性でそのように将棋を捉えるが、実はほとんどの将棋ファンがそのようなことを深いところでは感じている。大の男二人が、81 枰の盤の前で対峙してその人間的な能力を極限まで酷使して、狭い将棋盤の中にひそむ深い真理を求めてあがくのは、本来大変に異常な行為なのである。我々が将棋に感じる興奮は、朝吹の言うように「加藤一二三が昼用の鰻重と夜用の鰻重の代金かきりを背広の両ポケットに分けいれて対局に臨む人間的な娯楽の面白さ」であると同時に、人間が何か人間の能力や許容量を超えるものと直面するのを目撃するスリルに他ならない。将棋を観る興奮とは確かに深いところではそういうものだろう。

しかし、味気ないことを言ってしまうと本来将棋盤の中の世界には無限に近いようで有限で本来は「解」が存在する。何も神秘はない。数学以上に本来は何も曖昧なところのない世界である。だから、現在のようにコンピューターが人間の能力に限りなく肉薄することも可能なのである。

しかし、朝吹はそういうつまらない原理とは違う何か深いものを見ているような気がする。人間にとっては無時間の盤上に、有限な時間を生きる人間がその分を突き破ろうとするかのように突入しようとする際に生起する何かしらの事件。将棋盤の世界が事実上本当は有限だとしても、人間にとってはほとんど事実上無限なものに無謀にドンキホーテのように挑みかかろうとする際に生じる何か。人間も将棋も有限だとしても、両者の絶望的なまでに大きい相対的な格差が、人間に無限の眩暈を垣間見させる瞬間。

あるいは、こうもいえるのかもしれない。盤の中の世界は無限に見えても実は有限だが、有限のように思える人間が、無限の感覚を疑似体験だとしても味わうことで、本来人間の中にひそむ無限がほんのかすかにだけけれども目を覚ますのかもしれない。

羽生の将棋観。朝吹に、自身の将棋の一番完全な駒組みは対局をはじめる時の陣形で、それが波紋が崩れていくように将棋が進むという発言について問われて、このような美しい言葉をつむいでいる。

イメージとしては、第一手が指される前の最初の状態というのは非常に平面的な世界なんです。それが駒組みが進んで、囲いができて、まるで建物が建っていくように、段々と立体的になっていく。しかし、駒数が限られているし、ルールの制限もあるので、ずっと高い建物を建て続けるわけにはいかず、どこかで壊れる。そういうプロセスですね。最後は壊れるんです。

将棋とは調和から建築へ、そして破壊の死へと至るプロセスである。建築を続けてゆくのが序盤、飽和点に達して壊れ始めるのが中盤、完全に世界が破壊されてどちらかの王が死ぬのが終盤ともいえようか。考えてみると、実に美しく残酷な物語である。棋士たちは、毎局ごとに世界の生起と滅亡を体験しなければいけない。

朝吹が数学が既に存在している真理に光を照らすのに対して将棋はどうかと問われて、羽生はむしろ感覚的におかしい奇抜な手、バカなという手から何かが始まると答える。

将棋は絶対的に存在する真理を再発見するというよりも、何かしらの事件によって動的に発展してゆく真理がありそうでいて真理のない世界なのかもしれない。無論、これも人間の能力の問題で、究極的には真理が存在するはずだが、そのように人間が真理などないかのように振舞って発展したり楽しめるのが将棋の面白さなのかもしれない。但し、それがいつまで続くかは分からない。例えば、コンピューターが息を根を止めてしまうかもしれないので。

千日手と永遠について朝吹が語り出すが、羽生はそういう永遠を直視しすぎると絶望するので、あまり直面しないようにしていると答える。これは、羽生が吉増剛造との対談でも熱烈に語っていた狂気の問題とも関連していて、羽生としては将棋を指しながら本来人間が目にはいけないものを垣間見てしまう切実な恐怖体験があるために、そのようないい方になるのかもしれない。我々一般人は、プロ棋士が将棋を通じて永遠を感じ取って狂気とギリギリの世界を彷徨うことにロマンを感じてしまうが、当事者としてはそれこそ一度落ち込んだら戻って来れない世界なので、それどころではないのかもしれない。

羽生が現代将棋における自由を語っている部分。

現代将棋ではある種のセオリーとか形から逃れるのは相当難しいですね。そうではない場所こそが将棋の最先端なんですけど、どっぷりセオリーや制約につかた上でない、最先端の一番自由のある場所に居られないというところがあります。

これは、将棋の話ではなく、そのまま人間が生きることを意味を語っていないだろうか。

羽生が対局者の二人の間に起きる二人にしか分からない共鳴や阿吽の呼吸について語っている。この朝吹と羽生の対談も対局と考えると、二人の間にも明らかに強烈な共鳴が発生している。

朝吹は序盤のちょっとした手順から徹底的にその意味を解明しようとする藤井猛のような原理主義者である。その疑問をストレートに指し手で羽生にぶつける。羽生は、その斬新な指し手に素直に驚きながらも、その意図を的確に捉えて、柔軟に朝吹の指し手の可能性を存分に生かした上で、美しい対局に仕上げあげてゆく。そういう共犯関係の二人のように感じた。

二人は、ものを書くことと将棋を指すことを通じて、徹底的に作家や棋士としての自己に向き合わざるをえない。二人とも、そういう種類の作家であり棋士だ。羽生は、そういう自己認識を、徹底的につきつめて自己否定に行く直前まで行って開き直ることが大切だという。ぎりぎりまで詰めた上での余白が大事だと。これは、常にギリギリの仕事をしている二人のような人たちだけに可能な特権的な体験だろうか。我々のように怠惰に生を送っている衆生には縁のない話だろうか。

恐らくそうではない。人間が生きるということは、本来は生きることがそのまま、徹底的な自己認識を強いる厳しいが美しいものであるはずだ。我々現代人が、それを忘れ果てているだけだ。例えば、今回の地震の様な環境の激変によって、忘れていたものを思い出すことがある。今回の地震も大ピンチであると同時にチャンスにも出来るはずだ。

そして、それはこの二人のようにとにかく自分の生を生きることで、それがたとえ彼らのような芸術的な営為ではなく地味な仕事や家事やあるいは本当に単にブラブラしているだけだったとしても 誰もが体験できるはずのことなのだ。

[チェス戒棋夷説](#)さんも、11/03/23 や 11/03/28 など、この対談について取り上げられています。私は氏の  
の記事でこの対談のことを知ることが出来ました。

Number801 4/19 はメジャーに挑む日本人プレイヤー特集である。ダルビッシュをはじめとして、それぞれのプレイヤーのこだわりや個性が伝わってきて面白い。特に川崎宗則のエピソードが面白かった。イチロー愛ばかりが伝えられるが、本人自体がとてつもなく個性的である。気持ちいいくらいのポジティブシンキングとひたむきな向上心。川崎が予想に反して厳しくてレベルの高いメジャーに適応しつつある秘密の一端が分かったような気がした。イチローに対する憧れもその一つの表現にすぎないのかなと思った。そうした野球記事に埋め尽くされている中に、「羽生善治 42 歳 闘う理由」。高川武将による記事である。

羽生が麻雀の桜井章一との講演会を行った際、本来は対談形式なのに羽生は桜井に勝負哲学、人生哲学について質問し続けた。桜井が苦笑して言う。「先生はズルいよ。わかった上で聞いている。こいつどう答えるんだろうって。素人将棋みたいに。」

すると、羽生はポツリとこう答えたそうである。「大変申しわけないんですけど、こういうことに答えてくれる人があまりいないんですよ。」

桜井は麻雀の世界では大変有名で、雀鬼と呼ばれ、高レートの賭け麻雀の世界で生き抜き、自分では 20 年間無敗と称している。

私も学生時代に麻雀に凝ったことがあるので、桜井のことはわりと知っている。漫画の片山まさゆきや西原理恵子なども通じて。そして、桜井が書いた麻雀や人生論的な本も書店で手にしてみた。しかし、そこに書かれているのはきわめて主観的、あるいはもっときつくいうとオカルト的な主張の数々だった。率直に言って私には到底ついてゆくことが出来なかった。

でもそれは仕方のないところもある。麻雀は実力だけでは勝てず、運という魔物も相手にしないといけない。そしてそれを言語化しようとするとうまくも非合理的にならざるをえない。桜井はプロとして無敗を自称するなどしているけれど、実際に麻雀の腕前は凄いらしい。だから、運に対する対処法に独自の工夫と何か奥義のようなものをつかんでいるのだろう。ただ、それを客観的に言語化するのは恐らく大変難しいはずだ。

むしろ、羽生が、そういう桜井に深い関心を抱いたことの方が興味深い。将棋は麻雀と比べると運の占める割合は低い。実力がものを言う世界だ。しかし、逆に言うと将棋を合理的に究めればきわめるほど、それだけではどうにもならない運に近い部分も明確に見えてくるのではないだろうか。そして、そうした部分への対処法、コントロール法が知りたくなるのではないだろうか。

将棋の合理的な追求の部分については棋士仲間でいくらでも出来る。でも、それからこぼれ落ちる部分を会得したり語れる人間はほとんどいないだろう。だから先の羽生の言葉のように、そういうことを語る人がいないということになるのだろう。そして、羽生はそういう何かを求めて桜井から何かを学ぼうと必死に質問し続けるのだ。恐らく。

我々のような凡人には桜井のような超主観的な言説は理解不能である。それが凡庸だが常識的なものの見方である。しかし、羽生はそうした一見理解不能な言語の底にある何か それは同じ勝負の世界で戦い続けてきた人間だけに言葉ではなく理屈ぬきで直感的に体得できるもの が見えているのかもしれない。しかし、それはたとえ羽生といえども客観的に言語化するのは相当難しい世界のはずでもある。そして恐らくどちらかというとな黙っていた方が無難という種類の話だろう。

羽生のことばかり書いてしまった。明日から名人戦開幕である。相手は森内俊之。恐ろしいことに、この二人だけでこの10年間名人位を占有し続けている。

最近「羽生 VS 森内百番指し」を並べてみた。羽生がタイトルでは大きく先行して、二人の初の名人戦対決がなんと16局目である。森内はなかなか羽生と戦うことも出来なかった。しかし、その後は名人戦を中心に番勝負での対決が続いて局数が急増していく。

基本的な図式としては、やはり羽生の方に派手な手が多い。序盤での羽生流の手渡しを本当に若い頃からやっていたことにも驚かされる。また終盤でハッとさせる手の多さは若い頃から最近に至るまで変わらない。

一方の森内は地味だがなんと重厚な将棋だろうか。特に竜王、王将、名人と次々と羽生からタイトルを奪っていた頃の森内は自信に満ち溢れている。序盤の深い研究でリードを奪ってペースを握り終盤でも大胆で思い切った指し方が目立つ。明らかに森内の中で何かが変わってふっきれた。さすがの羽生もこの時期の森内のことは完全に持て余している。分厚くて頑丈な壁のようだ。ご本人は気に入っていないようだが「鉄板流」というのは森内将棋に対する最大の賛辞にちゃんとなっている思う。

特に初期の頃に千日手が目立つ。平成4年の王将リーグでは二回千日手の激闘もしている。100局中千日手局が7回。特に羽生が先手で5局もしている。永瀬の千日手が話題になっているが、ここでもまだ羽生には及ばないか。但し、近年は千日手がなくなっている。

ニコニコ生放送が**名人戦のPV動画**を作成して二人の戦いを色々喩えているが、この百局集を並べていると、どうしても羽生牛若丸 vs 森内弁慶を連想せずにはいられなかった。但し、羽生は対戦相手によって人格を様々に変えると思う。

羽生の強さは今更いうまでもないが、森内は羽生相手だと余計なことを何も考えずに自身の力を全て発揮できている。ここ一年では二人の対局結果が大差だが、羽生相手だと森内は全然違うと思う。まして、森内得意の二日制の長時間将棋である。森内が連続して勝った竜王、王将、名人も考えてみれば全て二日制なのだ。今年も激しい戦いになるだろう。

なお、今回はニコニコ生放送が全ての対局を**完全生放送**するそうである。(但しタイムシフト予約して後で見るとは出来ない。)

Numberで羽生は将棋を指す意味を問われて、突き詰めてはいけない。突き詰めると全て意味がない。後で振り返ると意味があるかもしれない、でも結局意味などないかもしれない、と答えている。

羽生らしい達観である。確かに将棋にも、いや人生にも本当は意味などないのかもしれない。しかし恐らく心底無意味だと悟ることが出来て、全てのものに対するこだわりを捨てることが出来たら、逆に全てのものが意味を持ち出して輝くのかもしれない。完全に無心の状態になって、将棋を指したり生きることが出来れば。

Numberの川崎の言葉がもしかするとこの問題に対する答えになるかもしれない。川崎はプロ一年目で、プロのあまりのレベルの高さに驚いて絶望する。

しかし自分の技術の下手さを自覚した瞬間に、自分が今何をやりたいかと問いかけたら、とにかく練習をしたいし、するしかないとふっきれて小さな光が見えたそうである。一切迷いがなくなって練習に没頭して自分を取り戻した。

今メジャーで新たな挑戦をしていますが、それは全く変わらないと言う。

あの、ちっちゃい光が見えたときと同じ。考えはもう、ずーっとあの時から変わっていないんです。あのとき、目標なんてなかった。成功も失敗もなかった。安定なんか、してたはずがない。今もあのときのまんまです。常に不安定だから、自分がこうしたいと思ったことをする。後悔することもあるし、切り替えだって簡単にできません。でも、それは失敗じゃない。いいプレーも悪いプレーも10分で忘れます(笑)。少しの達成感と、少しの敗北感があっても、いつも今が一番、調子がいい。明日の朝、もう一回、聞いてもらえますか。明日は「今日の方が調子がいい」って答えますから(笑)。よく調子はどうって聞かれますけど、僕に調子はない。調子は“いい”しかないんです。調子はいいいけど打てない。調子はいいいのに、ミスをする。光の方向が見えていますから、今もその方向に向かって走ってるだけなんです。

不安定なまま、そのまま今を生ききる。こういう状態でいられるならば、将棋や野球や人生に意味などなくても別に構わないのではないだろうか。

## 渡辺明

---

わたくしがブログを始めたキッカケは渡辺明でした。もともとは渡辺オタだったんです。初期は渡辺のことばかり書いていたのが懐かしい。今は羽生の強力なライバルなんで、あんまり書きませんが、やはり私がすごく気になる棋士です。隠れ渡辺ファン。



はじめて「渡辺明」の名を目にしたのは、河口俊彦氏の著書の中でだった。当時、渡辺少年は、低年齢にもかかわらず奨励会をものすごい勢いで勝ち進んでいた。風貌も大山を髣髴とさせる。当時は、羽生が栄華の絶頂にあった。渡辺少年の事を聞いた中原先生が、目を輝かせて「羽生さんは、この子に負かされるんだね。」といったという話、生々しくて忘れようにも忘れられません。

それ以来「渡辺明」の名がすごく気になるようになり、週刊将棋の奨励会の勝敗表を、欠かさず見るようになった。しかし、実は順調に昇級していったわけではない。二級になってから、なかなか勝てずに、かなり長く停滞していたのを知っている。「この調子じゃ、中学生棋士は、チョット無理かなあ」と思ったのをよく覚えている。

つまり、渡辺明は、実は早めに、小さい挫折経験をしているのだ。回りの期待が大きいだけに、少年なりにアセリもあっただろう。同時期、やはり低年齢で活躍していた、橋本現四段の方が、勢いがあるくらいだった。

しかし、脱出してからは、順調にまた階段をのぼり始めて、ギリギリで「中学生棋士」に滑りこんだ。その辺、追い込まれた時の勝負強さを、当時から見てとることができる。つまり、「挫折を経験するが、決して折れることなく巻き返し、最後は勝負強く目的を達成する」という、渡辺パターンが、既に当時から確立されていたのだ。

四段になってからも、順風満帆だったわけではない。勝率もたいしたことはなかった。C2順位戦では、さすがに昇級には絡んだが、最後の大事なところで、昇級争いのライバルに敗れて、目標もかなわず。その対戦相手が、すごく威勢のよくて言いたいことを言う棋士で、週刊将棋か何かで「渡辺将棋は、たいしたことはないと思っていました。」と言い放っていた。

将棋界は、ああいう狭い世界なので、勝ち負け同様、仲間の「信頼度」がきわめて重要なファクターになる。その意味で、かなり渡辺にはつらかったはずだ。また、将来の有望格としては、同門の松尾五段のほうが、はるかに注目されていた。普通の神経の持ち主なら、精神的に参ってしまうところだ。しかし、ここでも「渡辺パターン」が繰り返される。翌年度からは、勝率が極めて高くなり、仲間内の「信頼」も少しずつ、取り返していく。その辺、渡辺が、どのような考え方をし、どのように挫折を乗り越えていったのが、すごく知りたいところである。

最後の「渡辺パターン」は、言うまでもなく、王座戦での挑戦と惜敗、そして今回の竜王戦での、ギリギリの奪取なのは、もう言うまでもないだろう。

かつて坂口安吾が、若き日の大山を「切っても、血が出ない男」と評した。つまり、逆境とか、挫折体験に対して、類まれなタフさを持っており、平然として努力を続けて巻き返す精神的強さがあるということだ。やはり、その意味では渡辺明は、「大山二世」なのである。現代の将棋界はきわめてシビアで、精神的な面だけで勝てるほど甘くはない。しかし、この竜王戦を通じて見てきて、渡辺明に、勝負師としての類まれな資質があることは、明らか過ぎるくらい明らかである。少なくとも、大棋士になる「必要条件」だけは、間違いなく備えている。

大山は、ああ見えて、実はサービス精神も旺盛だったそうだ。坂口安吾と、テレビで生の対談をした際、準備不足で今ひとつ盛り上がらなかった。大山は、放送終了後「もっと、何を言うかよく相談すればよかったですねえ。」と盛んに言ったそうである。その意味では、やはり渡辺明は「大山二世」である。(笑)例の日記の公開にしても、将棋マスコミに対する、やや挑発的とも言える発言にしても、いかにファンにアピールしてサービスするかを、考えているのだと思う。

ただ、大山とは違って、いかにもアツケラカンとして明るく、屈託がないのが渡辺の良いところである。とてもみずみずしかった竜王位奪取の瞬間が象徴するように、勝負師としての老成ぶりやフテブテしさとは相反する、普通の二十歳の若者らしいキャラクターとの共存が、彼の大きい魅力になっている。

将棋の内容について、自分はコメントする力がないのだが、あらゆる点で合理性を追求する現代的な将棋であることは、誰にも異論がないだろう。かつて、羽生世代の出現によって、将棋の価値観が根本から覆されたが、さらに渡辺明は、それをラジカルに推し進めている。徹底した研究、時間の使い方、パソコンの利用法、言葉が矛盾するのだが「合理的な感覚的判断能力」などなど。

森内は、ある意味羽生世代の中でも、一番の「合理主義者」なので、今回の対決は「合理主義者対決」でもあったのだが、その程度で渡辺が、わずかに上回ったのともいえる。羽生が、王座戦を振り返って「自分の将棋も、もしかすると、意識しないうちに、古くなっているのかもしれない」と述懐していたのも、忘れがたいし、羽生ならではの鋭敏な渡辺将棋への把握能力が現れていたと思う。

最終局が、研究戦型の「8五飛車」だったのも、象徴的である。しかも、8五飛車がもはや全盛でなく、先手の勝率が高くなっている時期に、何とか勝ち取ったのは、渡辺の底力、潜在能力の高さを証明していると思う。あのシビアな、丸山が、8五飛車を放棄したのだから、今、この戦形で後手でトップレベルで勝ちきるのは、相当な難作業だったはずだ。自分など、もしかして、最終局後手番の場合、別の戦形を選択する可能性があるのではないかと思っていたが、奇をてらわず、最後まで正攻法でいったのも、精神的なタフネスの証明である。

渡辺は、日記を書いているように「情報公開」に積極的な棋士である。合理性ということでは、ちょっと微妙なところがある。最近、丸山について書いたとおり、むしろ、自分のことは何も他人に知らせず、判断材料を与えないのが「合理的」だともいえる。しかし、渡辺は、あえて、情報公開の道を選んでいる。それは、先ほど述べた、彼の「サービス精神」、いくら将棋が強くてもファンがいないと仕方ないという自覚の故でもあるかもしれない。

同時に、情報を公開して、他人に色々思われても、全く平気という精神的タフネスがありそうだ。競争相手が、公開された情報を元に仮に対策を考えても、それを逆手にとってはいね返すくらいの芸当をする力がありそうである。

来年も、日記を続けていくと本人が宣言しているので、ファンにとってはありがたい。但し、さすがに何時までも続けることは不可能だと思うので、今のうちにしっかりチェックしておこう。まさしく「ファン必読」である。

今後、「羽生世代」と「渡辺世代の」全面抗争が始まるといわれるが、自分はそうは思わない。あくまで、羽生世代は特別なのであって、どの世界でも、才能ある人間が集中して現れる時期があるものだ。そして、そんなにしょっちゅう起こることではないと思う。「渡辺世代」の、皆が上の世代をどんどん倒すようになるとは、到底思えないのだ。渡辺を含めて、二三人だけが、トップとして生き残るのが、せいぜいよいところなのではないだろうか。

その意味で、渡辺は、今後もほとんど一人で羽生世代と戦い続けていくことになるのではないかと考えている。

読売夕刊に連載された「竜王は二十歳」、全六回で完結しました。前回は、第二回の研究法について取り上げたが、今回は第四回の「勝負師向き立ち直りの早さ」について。

羽生さんの渡辺観が紹介されている。渡辺将棋について、以下のように述べている。

「現代の若者らしく多くのデータの中から良質のものを選び出す能力が高い。棋譜、定跡、研究、手筋などあふれかえるほどの情報量をうまく質に転換できている。」

「現代的な棋士渡辺」のイメージ通りの分析である。しかし、第二回の記事で紹介したとおり、研究法に関しては、実は「根っからのアナログ棋士」なのだ。パソコンによる検索より、実際に盤に並べて考えることを重視するという。この事実と、羽生さんの発言内容の違いのようなものをどう考えればよいのか？

多分こういうことではないだろうか。実際に、渡辺竜王は、あまり実際にはパソコンに頼らないタイプなのにしても、やはり同世代と物事に対する価値観、感覚、考え方を無意識に共有している。だから、年をとった人間が、過大な情報量の海に溺れてしまうのに対して、それを楽々と泳ぎぬけて、膨大な情報量を処理して、役に立つものだけを「しっかり、ちゃっかり」自分のものにすることが出来る。それが、彼に限らない世代共通のものにしても、特に情報処理能力の迅速さ、選択能力が並外れているのだろう。恐らく、実際にパソコンを使うかどうかという問題ではないのだ。

「盤に並べる」研究法にしても、誰もが同じ思考回路、方式を取っているわけではないだろう。同じ棋譜を並べるにしても、その局のポイントを即座に見つける能力、その対局の精髓を感知して徹底的に考える能力などが、優れているのではないだろうか。あくまで盤に並べるのは「集中して考えるのに都合が良い」だけのことであって、アナログかデジタルかという問題ではないのだと思う。

将棋指し以前の「頭のよさ」で、羽生二冠と渡辺竜王には共通するものを感じるが、その質は二人では違う気がする。羽生さんの場合、どちらかという「理論的・抽象的に盤面の真理を追究する能力の高さ、抜群のあかるさ」という感じ、渡辺さんのほうは「理論的というより、実践的・实际的に、局面局面の最善をつかみ取る頭のよさ、それは理論的というより一見素朴にすら思える」という感じだと思うのだが、どうだろう。

さて、話は変わって勝負師としての資質についても、羽生さんは渡辺さんを高く評価しているようだ。「立ち直りが早く勝負師向きの資質」といっている。これについては、竜王戦をテレビや新聞などで楽しみながら、自分が何より強く感じたことだ。生まれつきの勝負師という感じがする。しかし、実は「勝負師としての資質」ということでは、羽生さんも決して負けていない。ああいうスマートな外見だけでも、その内に秘めた勝負師根性たるや、本当にすさまじいものがあるって、一時期谷川さんが完全にやられてしまっていたのも、実力差というより、その面での差ではないかと思う。順位戦での「上座事件」ひとつとっても、羽生さんの勝負師としての度胸のすわり方は明らかである。

羽生 VS 渡辺は、王座戦で一度実現しているわけだが、その時は、まだ羽生さんも「勝負師渡辺」をそれほど意識していたわけではないだろう。だから、今度二人がぶつかる時は、将棋以外の部分でも大注目である。恐らく、盤外戦でも、二人とも一步も譲らないのではないだろうか。根っからの勝負師同士の激突、衝突が見られるのではないかと期待してしまう。

自分は、このブログで、何度も渡辺竜王と若き日の大山の類似性についてふれてきたのだが、最後に実際に坂口安吾の文章を引用しておこうと思う。「大山」を「渡辺」と入れかえても、そのまま通用するところ

がある気がするので。

「勝負師という点では、大山はちょっと頭抜けているようだ」

「大山にはハツタリめいたものがないのである。非常に平静で、それを若年からの修練で身につけたミガキがかかっている。(中略) 温室育ちという生易しいものがないのである。勝負師の逞しさ、粘り強さは、升田の比ではない(以下略)。」

「この図太さは、棋士多しといえども、大山をもって随一とする。頭抜けたアクターであり、その底にひそむ勝負師の根性ははかり知れないものがあるようである。」

「私は大山と(中略)酒を飲んだ。私はまだ二十七の風采のあがらぬこの小男の平静な勝負師が、なんともミズミズしく澄んで見えて、ちょっと一日つきあいたい気持ちがあった。」

( 坂口安吾「勝負師」より)

この本については、私みたいなスレっカラシの将棋ファンよりも、将棋を知らない一般の人間がどう読んだのかがすごく気になります。かなり分かり易い啓蒙書だと思うのですが、どういう受け取られ方をされているのでしょうか。

将棋の様々な、基本的な時事ニュースについても取り上げているのですが、ちょっと書き方がムツカシイだろうなという話題についても、渡辺さんらしく、さりげなく客観的にうまく扱っていて、そういうところにもセンスを感じてしまいました。

従来の将棋ファンとして、印象的なのは、将棋の勝負におけるメンタルな面についてもかなり踏み込んで述べていることです。少し前に、女流の問題と関連して、片上五段が、持ち時間が長い将棋での、一局全体を通じての目に見えないところでの対戦相手とのせめぎあいについて書いていたことがありましたが、さらに踏み込んで詳しく書いています。また、こういうところが、「将棋をプロ野球や作家のように楽しむ」ポイントにも、なるのかもしれませんが。

白眉は、最後の去年の竜王戦第三局と、今年の棋聖戦第四局の自戦記。これについては、編集者から「なるべく将棋の符号を使わないで書いて」という注文があったそうです。それだけに、対局中の心理に焦点が当たった、とても興味深い読み物に仕上がっています。特に、棋聖戦の方については、よく負けた将棋についてここまで心のうちを正直に書いたものだなあ、と感じます。

こういう心理面について書くというのは、今後自戦記の可能性を広げるのではないのでしょうか。将棋世界12月号での、深浦王位の自戦記も、かなり心のうちを正直に記したもので、ある方が、ご自身羽生ファンであるにもかかわらず、読んで感動せずにはいられなかったそうです。

私自身、そういうギリギリの勝負における勝負師の心の内には、ものすごく興味があるもので、今後こういうものが、どんどん増えて行って欲しいと思いました。

それと、各所にブログでおなじみの、「渡辺ユーモア」もちりばめられていて楽しめます。個人的には、和服について書いたあたりでの、紅白の小林幸子と美川憲一のくだりがツボでした(笑)

自戦記編はとうに読み終えたのだが、棋譜解説編がいつまでたっても読み終わらない。なかなか進まない理由があって、一局の棋譜に対して図面5つだと私の脆弱きわまりない脳内棋譜再生能力だと。ちと苦しい。きちんと理解しようと思ったら実際に盤に並べないと無理だ。本当は一局につき図面10個は欲しいのだが(我儘だなあ)それは本の構成上無理だろう。とにかく、いつまでたっても書評が書けそうにないので、第一部自戦記編を読んだ感想をメモしておこう。

本書は第一部自戦記編で10局詳しく解説し、第二部棋譜解説編で31局の棋譜とポイントの指し手の簡潔な解説するという構成である。第一部があくまで本書の中心部分である。そして、取りあげている計41局は、竜王を獲得する17期の竜王戦の予選一回戦からの渡辺が指した竜王戦での全ての棋譜が網羅されている。他にも、羽生との王座戦など大切な将棋は多いわけだが、それらは取り上げておらず、本のタイトル通りに、渡辺の永世竜王への戦いの全ての記録である。

自戦記では、去年のあの羽生との壮絶な戦いから、第1, 4, 7局が取り上げられている。他には、谷川との決勝トーナメントでの1局、森内相手から1局、木村相手から2局、佐藤相手から、一年目2局、二年目1局の計10局である。

本書の特徴は、[梅田望夫さんが書評](#)で書かれているように、渡辺が戦っている上での気持ちをかなり正直に生々しく語っていることである。それは、竜王戦のネット中継や専門誌の観戦記でも決して読めない貴重な部分である。ここまで、自分の心のうちを率直に書いた例は、多分今までにはないだろう。従って、将棋マニアだけでなく、「指さない将棋ファン」でも楽しめる内容になっていると思う。特に、竜王戦の間のエピソードを記した部分については、将棋を知らない人でも読んで完全に理解できる。(当たり前だけど。)梅田さんは、渡辺の「戦略性」について指摘している。いかに封じ手を自分に有利になるように利用できるかを徹底して考えるなど、緻密に計算して戦っているということである。普通、そういう事は黙っていたほうが有利なはずなのだが、渡辺の場合は全て自分の手の内のカードを明かしてしまう。それが渡辺流の面白いところで、去年の竜王戦取材した「情熱大陸」でも、渡辺の正直者ぶりが本当に印象的だった。(その番組のまとめ記事を書いたことがあるので、興味のある方はどうぞ。)

対局中の心理と実際の指し手の読みの関連を、きわめて具体的に語っている例が、佐藤との第20期竜王戦第6局の終盤での決め手となった9八飛の場面。他の飛車の逃げ方では全部ダメな場面で、渡辺は残り時間を全て使いきって正解の好手を指した。読んでいる内容を、まるで自分の心中を小説に書くようにリアルに再現していて面白い。そして、残り2, 3分になったところで、やっと正解にたどり着いたそうである。

羽生との竜王戦第4局の終盤でも、自玉が打ち歩詰めで逃れていることを、羽生がコップに水を注いで飲んでいる間に発見したという有名になった話とともに、いかに本当のギリギリのところまで戦っているかがわかる。ちなみに、その第4局についても、対局後の渡辺自身の発言についても、本書には新たな記述があって興味深い。

とにかく、こうして竜王戦での渡辺の戦いの歴史を振り返ると、ギリギリのところでも恐ろしく勝負強いと感じずにはいられない。佐藤相手の7九角にしても。その理由としては、希代の戦略家であること、徹底的に現代的な合理主義的将棋観といったものが考えられるのかもしれないが、根底においてはやはり精神面の強さ、図太さがあるように感じる。私がこのブログをはじめたのが、丁度渡辺が竜王を獲得した頃なのだが、その頃から渡辺の将棋自体は大きく変化し続けている一方、渡辺の人間に対する基本的な印象は全く変わらない。その頃の記事でも引用したことがあるのだが、坂口安吾の「勝負師」からの一節。

「勝負師という点では、大山はちょっと頭抜けているようだ」

「大山にはハツタリめいたものがないのである。非常に平静で、それを若年からの修練で身につけたミガキがかかっている。(中略) 温室育ちという生易しいものがないのである。勝負師の逞しさ、粘り強さは、升田の比ではない(以下略)。」

「この図太さは、棋士多しといえども、大山をもって随一とする。頭抜けたアクターであり、その底にひそむ勝負師の根性ははかり知れないものがあるようである。」

安吾は、若き日の大山を見てこのように評しているのだが、渡辺にもそういう勝負師的な資質があるように感じる、と当時も私は書いていたし今もそう思う。羽生は羽生で、また別の種類の強烈な無意識派の勝負師だと思うのだが、やはり意識的に勝負に取り組んで勝つためのあらゆる努力を惜しまないという点では、大山に近いのは渡辺の方だと思う。もっとも、渡辺の場合は、大山のように露骨な盤外戦術を使うわけではないし、先述したようにきわめて「正直者」の一種爽やかな勝負師なのだけれども。

本書全体を通じて、渡辺は明らかに将棋マニア以外でも楽しんで読めることを意識して書いているのだと思う。それは「頭脳勝負」以来、広い層に将棋を楽しんでもらいたいと、渡辺が終始一貫考えているためなのだろう。そういうところまで、渡辺は「戦略家」なのである。勿論、それは将棋を多くの人間に楽しんでもらえるようにするために、素晴らしい事である。

ただ、唯一私がちょっと残念に感じた点。羽生との竜王戦の第4局と第7局の終盤というのは、とてつもなく難解で終わってからむなかな結論がでない将棋だった。その変化手順について、本書は徹底的に詳しく解説はしていない。恐らく、そのようなことを詳しく書きすぎても多くの読者は理解できないし興味もないだろうし、この本はそういうことを書く場所ではないという渡辺流のバランス感覚なのかもしれない。ただ、やはりあの伝説の終盤の最終結論を知りたかった。ファンとは我儘なものなのである(笑)。

竜王戦のエピソードの部分については、ブログに近い渡辺流の軽やかなタッチで書いている。私としては自戦記の本文も完全にブログ調で書いて欲しかったくらいなのだが、それはいくらなんでも「指しすぎ」か(笑)。

最後に、私が思わず吹いてしまった部分を一つだけ紹介して終わりにしよう。

嬉野温泉は「日本三大美肌の湯」。対局場「和多屋別荘」の温泉施設は素晴らしく、3泊で5回は入っただろうか。勿論、美肌にはなっていない。

今回自分のブログを読み返してみると、結局私が一番好きなのはひふみん。もうこれは理屈ぬきでどうしようもない。



## 加藤一二三九段 1000 敗の不滅の金字塔記録に寄せて

---

お盆休み中に将棋本をまとめて購入して、少しずつ読んでいる。その中の一冊が「一二三の玉手箱」(毎日コミュニケーションズ)。おりしも、1000 敗の大記録が耳に飛び込んできた。お祝いせねばなるまい。

加藤一二三は「公平」な人である。

本の冒頭に BIGLOBE の「ザ・加藤一二三伝説」がまとめられている。「勝手に電気ストーブ伝説」。順位先で、寒いというので電気ストーブを室内に持ち込み、自分だけでなく、相手にも「公平に」熱が行くように、厳密に丹念にストーブの位置を調節した。悪意など、これっぽっちもないのだ。ただ、相手が自分と同じ寒がりかどうかは分からないということまでは、ちっとも気がつかなかったというだけのことである。

「将棋盤の位置にはこだわる伝説」。盤の位置が部屋の中央になるように、きちんと微調整する。あるとき対戦相手が、クレームをつけた。加藤先生いわく「くじ引きで決めましょう。」やはり「公平」であるだけでなく、恐らく気まずかったであろう現場においても、たくまざるユーモアが結果的に招来される。無論、悪意などみじんもないのだ。ただ、一度設置されてある盤を、いちいちいじられたら、対戦相手の神経に触るということには、全く気がつかなかっただけのことである。

私は皮肉を言いたいのではない。相手は年下だったそうだが、「対局室に入ったら、先輩も後輩もないから、くじ引きで決めるべきだ」と加藤先生が強く主張されたそうである。こういう考え方のできるベテラン棋士が、どれだけいるだろうか。加藤先生の行為の「意図」は純粹そのものである。ただ、先生の主観と、客観的な事情に齟齬があることに無頓着なだけなのだ。

かつて羽生さんが、「加藤先生は、相手と戦っているというより、自分と戦っているという印象がある」と指摘していた。

加藤一二三は「直感」の人である。

「将棋は盤面を見た瞬間に、次の一手が浮かんでくる。読む価値のある手は 5 通りくらいあるが、そのうち一番よい手は一つしかない。(中略) 直感を重んじ、正確さを求め、深みを増すために、直感精読の心得が大切と考える。」(「一二三の玉手箱」より)

プロの本当の才能というのは、一目の直感で最善手が浮かぶかどうかということらしい。加藤先生は、言うまでもなく「直感」に秀でた人であろう。

ことは将棋にとどまらない。完全にオリジナルな感性であらゆる物事に当たり、自分の直感が正しいと信じたものを迷うことなく選ぶ。モーツァルトのピアノ協奏曲 22 番が好きだそうだ。他の有名曲と比べるとめだたない曲だが、「アマデウス」の一シーンで流れるのを聴いて、ピピッと来たらしい。世評など関係なく、自分の直感の働いた好きなものを愛する。

将棋の解説でも、情報化されたデータベースなど、はなっから相手にしない。あくまで、自分で盤に並べて、徹底的に考え抜いて、オリジナルの主張をする。徹底的に自分の直感を信じているのだ。

加藤先生の信仰は、真摯な本物である。そのことについて、無論他人がとやかく言うべきではない。この本でも、キリスト教について、多く語られている。読んでいて、やはり信仰も他者に説得されたり強制されたということではなく、本当に御自分が「直感」して真実だと信じた心に素直に従われているという印象を受ける。全く信仰のない私のような者が読んでいても、なにかとても気持ちがいいのだ。

加藤一二三は「喜び」の人である。

「私の角が二枚並び、大山棋聖の飛が二枚並んだ形は心を打たれるもので、まず二度と出ないと思う。私は対局中この形に進行したときに、大きな喜びを覚えていた」(同書より)

プロ棋士にとって、将棋を指すというのは、大変つらい作業のはずである。せいぜい勝った喜びで、それが消えるというのが普通だろう。しかし、加藤先生の場合は、対局の過程そのものが、恐らく大きな喜びなのだ。加藤先生くらい、素直に勝てば大喜びし、負けるとガッカリする棋士もいないかもしれない。しかし、それよりも、対局している充実感、生の喜びがはるかに勝っているのだと私は信じる。

加藤先生は、将棋は芸術だと言う。恐らく、単なる棋譜のレベルの高さだけではないのだ。対局中に大変な高揚感を覚える、モノを創造する人間にしか分からない心の動きも含めて言われているのではないだろうか。

「昭和 45 年の 10 月ごろ洗礼を受ける決心がついたので、12 月のクリスマスの夜、下井草協会で私はマンテガツァー神父からキリスト教の洗礼を受けた。真夜中のミサは人がいっぱい、式が終わって喜ばしい気持ちで教会を出ると空に星がきらきらと輝いていた。」(同書より)

恐らく、加藤一二三にとっては、将棋を指すことも、モーツァルトを聴くことも、信仰も、生きることは全て、それ自体で充足したとてつもない喜びなのではないだろうか。

その喜びのおすそ分けにファンはずかっているのだ。

1000 敗は、その喜びの行為の結果に過ぎない。

有楽町まで出向いて、JT 杯決勝見てきました！ 本来出不精なのだが、解説に「加藤一二三」の名前を見つけてしまった以上は、これは行かねばと即決心した。加藤先生は、なんと言っても個人的には、永遠のアイドルなのだ。

とにかく楽しいイベントでした。JT 杯の前に、小学生の大会の決勝が行われたのだが、これが大変な拾い物。特に、高学年の部の将棋がすごかった。片方の子が(名前を失念してしまった)「ここまできたら、絶対に勝ちたいです」と、かわいらしくも強い口調で宣言すると、対戦相手の佐々木君は「ぼくは、負けないように戦います。」と冷静に切り返す。あの年齢にして、勝負師としての受け答えがすでにできている。未恐るべし。

将棋は相穴熊の熱戦で、どちらも容易に崩れず、一進一退の攻防を繰り広げた。加藤先生も感心することしきりで、「ホォーホォー」とか「イヤー」とかいう独特の加藤擬音語を連発して、会場を沸かす。

最後は、佐々木君が、相手玉を詰ますむしかないという局面に。加藤先生も、一瞬詰みを読みきれなかったのだが、さすがにすぐ、「この手が有力ですね」といって、指差し棒で、持ち駒の金を 74 に打つ手を指摘。その瞬間、佐々木君がその通りの着手。会場からは、どよめきと感嘆の声。本当に強い。結局、きれいに詰まして、佐々木君の勝ち。会場も、大満足の熱戦でした。小学生たちも、和服姿で対局したのだが、凛々しくもかわいらしくてよかった。

JT 杯のほうは、久保がゴキゲン採用に、佐藤が「丸山ワクチン」で対抗する形に。久保が攻め込むが、佐藤の角打ちからの鋭い切り返しが決まり、一気に佐藤優勢に。ただ、そのあと、千日手含みの場面が出現。加藤先生が、すかさず、「これは、我々は大慌ての場面になりましたねえ」と、ツッコミ、時計を見つめるしぐさ。本当に、楽しくて憎めないキャラクターである。結局、佐藤が、打開し、その後久保に疑問手も出て、最後は、佐藤が一方向的に攻めつけて、勝利をものにした。加藤先生の解説は、楽しい上に、具体的に手をどんどん言ってくれる「親切」な解説である。絶対に、安易に「どうするんでしょうね」とか言わず、必ず、自分なりに手の候補を示そうとする姿勢に、誠実さとプライドを感じた。

二人の対局姿も、テレビ上で見るのとは、違う迫力があつた。もともと、二人ともルックスはよいので、和服姿も引き立つ。久保さんは、長髪で、したたかでクールな刺客といった趣でかっこいい。一方、佐藤さんの、小刻みに体を揺らしながら、顔に青筋を立てて、読みを確認していく姿は、迫力満点。全身から、強烈なオーラが出ていて、あれは実際に生で見ないと絶対よく分からないと思う。

時間をかけて出かけた価値は十分すぎるくらいあつた。ぜひ、また、東京で実施してもらいたいものだ。大満足して、帰路についた。

皆さん、今日の囲碁将棋ジャーナルご覧になりましたか？相撲中継で短縮版でしたが堪能しました。勿論、加藤一二三先生のおかげです。見ていない方のためと、記念のために加藤語録を残しておいちゃいます。

加藤「四十歳の頃などは、何もしなくても四十勝、五十勝したことがありましたけれども、最近はその時の三倍くらい努力しているんだけれども、なかなか勝ち星があがらないという状況でして・・・でも、やる気十分で、これからも精進していくつもりですけどもね。」

(いきなりこの発言で感動させられてしまいました。あの加藤先生が、昔の三倍努力しているんですって。すごい！えらい！)

加藤「(昇級した飯島五段について) 私一回だけ対局してまして、まあ見事に素晴らしい新手を出させてもらって勝ったんで、ええ、それで非常に好感を持っていますけどね。」(満面の笑み)

矢内「ああそうですか、ハハハ・・・」

(飯島五段のことほめるのかと思ったら、ご自分の会心の手のことですか。でも、いいんです。(ジョン川平調) 全然イヤミじゃないのが人徳なんです。)

加藤「三浦さんは、まあ、とても個性の強い棋士ですよ。」

矢内「はい、フフフ・・・。(なぜか笑いを隠せない)」

(矢内さん、何笑ってるんですか。失礼じゃないですか。超個性派の加藤先生が、三浦先生のことを個性的だといっていたのが、そんなにおかしかったのですか。実は私もおかしくて仕方なかったです。)

加藤「(加藤先生はNHK杯に七回優勝していて、羽生さんが、明日勝てば、七回目の優勝で並ぶということで)(頭に手を当てて、全く憎めない笑顔で) まあ、そんなに早く並ばれてもちょっとという気もしますけれども。」

矢内「はあ、楽しみですね。(思わず噴出すように) フフフ・・・」

(矢内さん、ナイスリアクションでした。)

解説局は羽生 vs 谷川王位戦第四局 あっ、画面には対局場で、盤の位置を丹念に確認する、いつもの加藤先生のお姿が・・・。

加藤「(当日の対局姿を立会人として見て) 羽生さんは終日、扇子をパタパタあおぎですね、体を左右前後に動かしましてですね、まあわが同志、ワタクシのパフォーマンスの二倍三倍の大きな動きでして。(矢内、ハハハ・・・) やっぱり、将棋というのは、気持ちを込めて、精魂込めて戦うのが将棋であって、まあ、はっきり言って将棋の対局姿って静か過ぎるじゃありませんか。羽生さんの対局見ていると、これぞ、本物だって思ってるんです、常々。」

(素晴らしい。けだし名言です。羽生さんも、「同志」といわれて、さぞかし驚かれていることでしょう。)

加藤先生、近く「振り飛車破り決定版」の本を出版されるそうです。是非買きましょう。

また、四月からは将棋講座を担当して、自戦の名局解説をされるそうで、これを見逃したら将棋ファンとはいえません。

加藤先生は、まさしく現在の将棋界の至宝なのです。

きょうは(も)、全部雑談です。

録画し忘れて再放送をチェックした「囲碁将棋チャンネル」の「将棋まるごと 90 分」、ゲストは加藤一二三九段でした。(その時知ったのですが、金曜の深夜に大庭美夏さんの「It's show time」も再放送されているようです。)

加藤独演会を堪能、満喫しました。全部アップしたいくらいですが、名言集を抄録で。

今でも将棋を夜十二時ごろに指していても、40 代のころと疲労感はそれほど変わりませんね。

最近、うな重から上にぎりに宗旨変えされたようですが、スタミナは相変わらず健在のようです。

私が名人を獲得したのは、何年何月何日何時何分ですて・・・。

加藤流の数に対するこだわりは並外れてますが、氏の創造性となんか関係あるんですかね。そういえば、ケン・ラッセルの映画で、ブルックナーの数字に対する強迫神経症をテーマにしているのがありました。

谷川さんが、私から名人を取ったのを、将棋界の大転換で、棋士を目指す若い人が増えたとか、昔から、イヤ今でも言われますが、私だってそれからもずっと頑張ってきているわけで、不満です。ちょっとムツとしています。

妙に大人の態度などとったりしないのが、多分若さの秘訣なのでしょう。

(毎日コミュニケーションから出た「一二三の玉手箱」について) 将棋ファン必見です。

だそうです。まだの方は是非購入するように。

20 連敗していた頃、モーツアルトのヴァイオリン協奏曲の第三番を聴きまして、「遊び心」を感じとりまして、気分を変えて連敗脱出できました。

モーツアルトと加藤一二三、文句なく二人とも天才です。

私が勝った将棋はだいたい完勝、負けた将棋は少なくとも 200 敗は逆転負けです。

実際そういう印象はあります。勝つときは、どんな超一流棋士でもふっ飛ばしてしまうのが、加藤先生のすごいところですよ。

(自戦解説で自分が勝たれた将棋について) 素晴らしい妙手、好手をおりませた快勝です。

自分が勝たれた将棋を、これだけ楽しそうに解説される先生を他に知りません。やっぱりモーツァルトとも通ずる純真です。

将棋が凄すぎて書くのを忘れてましたが、BS 中継でも加藤節は全開だったので、ダイジェストを残しておくことにしました。

対局前日の検分で、加藤先生は何種類の駒から事前に一つに絞って駒を選んでおいて、両対局者に提示したそうです。

まあ、わたくしがいい駒と言うんだったら、きっとそうだろうと思ってくれるだろうと、ウフフ、ウフフフ。

そりゃ、加藤先生にそういわれたら、両対局者も平伏して「ハハ - 」と言うしかありません。でも、確かに対局者の二人が違う駒を選ぶとアジが悪いと思うので、いい気配りなんじゃないでしょうか。「竹風」作の名品だそうです

加藤先生は、かつての名人戦の際には有楽町の大盤解説を、いつもつとめられていたそうです。

(但し) わたくしが名人戦に出ないときは、ウフフ。

そうです、加藤先生が名人戦に何度も出られたことを決して忘れてはいけません。特に大山名人に、二十歳の頃に挑戦した際は、まさしく眉目秀麗のクールな美青年でした。若い方はご存じないかもしれませんが、といっても私も写真で知っているだけです。

一日目封じ手の場面で、加藤先生が赤鉛筆でサインしている場面で、加藤先生の所作動作の何かがおかしいのか、羽生さんが笑いをこらえている姿が映し出されていました。

間違いなく、羽生さんにとって、加藤先生はツボなんだと思います。いや、ほとんどの将棋ファンにとってツボなんじゃないでしょうか。勿論、皆にとって愛情に満ちた「ツボ」であります。

二日目の封じ手開封の場面で、加藤先生の予想とは違う手を羽生さんは封じていました。そのため、読み上げるのに少し間が空いてしまったそうです。

加藤 今日、アレ、羽生さんの 5 三銀はある手だけれども、 6 四歩のほうがよかったんじゃないかと、率直に思ったんですね。

アナ 率直ですねー。立会人の加藤先生がそう思われるというのは。

大人しそうな NHK のアナウンサーも、思わずつつこまずにはいられないのが、加藤先生のすごいところです。でも、その後の展開を考えると確かに 6 四歩の方が良かったようです。さすが。

6 四歩なら、ノータイムで「 6 四歩」と言ったんですけどね。



「 6 四歩」の部分を、まるで封じ手を現場で読み上げるように、力強くはっきり発音しているのをご想像ください。羽生さんじゃなくても、笑いをこらえるのが大変です。

引き続き、熱弁を振るって解説。千日手含みの手順を示して、

(そうになったら) 私たち立会人は一気に緊迫感を増します。

手振りも大きく、まるで本当に千日手になってしまったかのように、驚いてあせって緊迫しているかのように目を大きく見開いて話しているのをご想像ください。ああ、自分の筆力の貧しさがもどかしい。映像を見てもらえば一発なのに。

常に加藤先生は一生懸命なのです。

熱弁を振るいすぎて、放送時間が残り二分になって、「本」解説の井上さんが戻ってきました。

もう、僕ら、出る幕ないんじゃないかと思いました

以上。

NHK 杯、石田&加藤の魂の感想戦。アレッ、でも加藤先生は対局者じゃないし、北浜先生タジタジだし、感想戦の名局でした 2008 年 06 月 23 日

---

石田先生、時折ご自分の頭をバシバシ叩きながら気合の対局姿。しかし、とにかく攻めまくるのが持ち味の北浜さんの、やや無理気味な突進を受け止め損ねて残念な結果でした。しかし、本局はここからの感想戦が本番でした。

石田先生、ボヤクこと、ボヤクこと。駒を、こぼして落とすこと、落とすこと。北浜さん、思わず嘖きだす。

石田 駒ポロポロ落とすようじゃ、だめだなあ。

他にも

石田 よくかいちゃった。角得だから。場合によっちゃ、入玉と。入玉あんまりしたことないけど。

石田 角得ですよ！おかしいですねー。

石田 あー、負けですね、これは。おかしーなー。

とにかく、角得でなぜ悪いか、どうしても納得できない様子の石田先生でした。というところで、5 四馬とも金をとったらどうかという話になりました。そこで、加藤先生がひらめいてしまったのです。

加藤 (4 一の部分を、実際に指で指して) ここで銀打ちですか。これいいじゃないですか。次銀ひいたら、角出があるし。2 四桂もあるし。

加藤先生、とまらなくなっていました。

北浜 見えにくいですね。

加藤 こりゃ、北浜さん、悩めますよ。(本当にうれしそうに笑いながら) こりゃ悩めますよ。こりゃ悩めますよ。こりゃ悩めますよ。

加藤先生、四回同じことを言われました。さらに興奮して

加藤 これ、もういっぺん。なるほど、いい手ですね。

と、自ら盤に手を出して 5 四馬まで強引に戻しました。

加藤 これは有望だ。これは駒の損得はないんですよ。

北浜 いえ、金損ですから。

石田 金得。

加藤 (興奮して笑う。) ああ、そうか、金損ですもんねー。

石田 あなたもどうやりますか、秒読まれてたら。

北浜 (苦笑して) いやあー。

加藤 いや、この銀打った局面は、石田さんがいいですよ。

石田 いいっ！

北浜 はぁー。

加藤 自信が出てきた

北浜 (もう笑うしかないといという感じで笑う。)

棋士の方にこんな言い方するのはなんですが、北浜先生、本当にいいヤツです。両ベテランの猛攻を、全て素直に真正面から受け止めて見せていました。棋風の攻め将棋とは正反対に。

北浜 (銀は) ちょっと気がつかないです。

石田 ウン、気がつかない、気がつかない。

とって悔しそうにも駒を盤に叩きつけて見せたところでお開きとなりました。

中倉 そろそろお時間になりましたので、ありがとうございました。

石田 アリガト。

最高でした。

それと、対局直後に、石田さんが悔しそうな様子をしている映像から、解説室に戻った際に加藤先生の表情。ベルトのあたりを両手でわしづかみにして、なんとも慈愛に満ちた笑顔で石田先生を見つめていました。

ーいやー、石田先生残念だった、頑張っていたんだけどなあ。

と、その尊い顔には書いてあるように見えました。長らく同時代で競い合っていた対戦相手への敬意や愛情がにじみ出ていたのです。

いいものを見せてもらいました。

昨日も、加藤一二三先生は順位戦で熱局を繰り広げられていた。昼食も夕食も、「鍋焼きうどんとおにぎり2個」という同一メニューの加藤一二三定跡で。先生にはこだわりがあり、うな重ならうな重、特上寿司なら特上寿司を昼夜繰り返すのが神聖な儀式なのである。なお、「おにぎり2個」には説明が必要だ。おにぎりメニューは、実はおにぎり3個のセットなのである。ということは・・・賢明な読者諸賢ならば即座に計算されたことであろう、おにぎり2個というのは即ち必然的におにぎり6個ということになる。

将棋は、浦野先生相手に加藤先生の鋭い攻めが終盤に決まって快勝。先日の朝日杯では行方八段の指す手つきを「ロックな手つき」と中継記者が形容して話題になったのだが、加藤先生の場合ならば、アツアツで重量感溢れる「おにぎりな手つき」で盤面をたたき割らんばかりの迫力で指されていたことが容易に想像される。素晴らしいことである。

さて、加藤先生は先週の「週刊！ステーション」にも出演されて、おなじみの名調子を披露されていたので、昨日の勝利を祝して、そのさわりを紹介させていただく。

番組では羽生さんの王座就位式の模様も紹介していた。加藤先生、コメントを求められて「どうして、あんなに勝つんでしょうね、うっふっふっ」と、あの尊い笑顔を見せられていた。加藤先生は、羽生さんのことが大好きなのである。そして、羽生さんも加藤先生がタイトル戦の立会いつとめると楽しそうなのである。二人とも底抜けに明るい。

トークのコーナーでは、椅子に座って。となるとネクタイの長さがいつも以上に目に付く。真紫のネクタイが、随分ズボンの下まで垂れ下がっていた。加藤一二三流の、本当に昔から変ることなきファッション・スタイルである。

同一カード数では、一位 大山先生、二位 中原先生 三位 米長先生だそうである。かつてよく対局で当たった際に、米長先生が加藤先生に対して「顔はあうけれども、気はあわない」と言い放ったエピソードを加藤先生自ら披露されていた。そして、ご自分でも嬉しそうに大笑い。「それは彼一流のジョークでして、結構気もあうんですよ。」ということだそうである。このエピソードは昔から有名なのだが、もはや懐かしい良い思い出なのだろう。

そして、第七期十段戦第四局の大山先生相手に、初日から翌日まで計7時間考えた名手 6二歩について。先生によると「なんと、それが強力そのものの、もうすごい絶妙手」だそうである。確かに素晴らしい手なのだけれども、ご本人がご自分でこれだけ素直に自画自賛できることが、それ以上に素晴らしいのである。さらに、6二歩と指せば「相手がどうやってきても、百局戦っても百局戦っても私の勝ちです」と言ってドヤ顔。それくらいの名手であったということを、胆に銘じていただきたい。

第40期名人戦で中原先生から名人位を奪取した際の話。1982年7月31日の夜の9時1分か2分の出来事だったそうである。とても大切なことなので、何分だったかも決しておろそかに出来ないのである。

加藤先生が終盤に絶妙な詰み手順を発見してかったのだが、それを発見した際に先生は「あっ、そうか！」と叫んだということである。この「あっ、そうか」は、本当にその場にいるように、スタジオでも突如トーンを上げて大声で発せられたことは言うまでもない。あくまで正確に再現しなければいけないからである。しかし、正確を期すことでは解説の山田史生さんも負けていない。「あっ、そうか」という前に加藤先生は「ひえええええ」と叫んだのだと指摘した。これには、加藤先生も照れたような嬉しいようななんとも憎めない尊い笑顔で応えるしかなかったのである。

オマケで、「東大将棋の名人戦道場」の話題。実は加藤一二三先生の声も収録されているソフトなのだが、

この番組ではそれをスタジオで加藤先生本人に聞かすという暴挙？をやったのけてくれた。  
というわけで、スタジオに「かとうです。よろしく申し上げます。あと何分？」と流れた。  
加藤先生は笑顔ながらも声が流れると「ピクッ」と(失礼ながら)かわいく照れて反応し、両手でご自分の頭をかかえてしまった。歳を召されられたびに、どんどん(再度失礼ながら)かわいらしくなっていくタイプの方なのである。  
最後にキャスターの恩田菜穂さんが、ファンを代弁してこういつていた。「加藤九段、123歳までは是非頑張ってくださいね。」まさしく。先生も嬉しそうでした。  
そして、加藤先生を見ていると少し気が早いけれどもこう言わずにはいられない。

メリー・クリスマス！

囲碁将棋ジャーナル、勿論、加藤一二三先生はいつものように元気一杯だった。ネット将棋の関連で、先生がパソコンを使うかどうかの話題に。現在、ほとんどの(特に若い)棋士はパソコンを使ってプロの全ての棋譜を確認したり、局面検索して調べている。なおかつ、共同研究会で、いかに表面には出ない情報を得るかが大切になっている。

ところが、加藤先生はパソコンも使わないし共同研究もしない。つまり、最初から相当ハンディキャップを負った状態で対局しているのだ。私の最近のお気に入りのスリムクラブのフレーズを使うならば、「なんとかならんかねえ」である。

高群 加藤九段は、普段将棋の研究にパソコンを使われていますか？

加藤 あっ、パソコンは使ってないんですねえ。ただ、使えばかなりじっくりくると思うんです。ああいう感じって、結構、感触がいいと思っているんです。

高群 じゃあ、使われたいと思われたことはあるんですか？

加藤 いや、ないんですけれども。(加藤スマイル)

結局ないんかいっ。一体何なんですか、その絶妙のすかし方は、先生。

すごい将棋だったので、記事のトリに持ってきました。

後手佐藤のゴキゲンで、相穴熊に。解説の加藤一二三先生が「対局前に羽生さんは最初から緊迫感のある将棋になればといていましたが、そうはなっていませんね。」と、ごもっともなツッコミをして和ませつつ、じっくりとした展開に。

佐藤が 2 五桂とはねたのに対して、羽生は左辺から動いていき、角を切って金と交換して後手の穴熊を弱体化させたが、佐藤も 8 七歩のたたきをいれつつ 4 四角のにらみを利かせて攻めを見せる。羽生も端攻めから露骨な金の打ちこみと実戦的な迫り方をしたが、素人目にも振り飛車がよさそうに見えた。

しかし、羽生の 7 五歩を手抜いて佐藤も 7 六歩、さらに 7 四歩 7 七歩成 7 三步成と何回お互いに手抜けば気が済むのだという加藤先生もビックリ? の過激な順で局面が一気に緊迫。

しかし、結局お互いに手を戻して、羽生が 9 八玉と詰めろを解消しながら逃げて佐藤が 9 四香と打ったところでは佐藤勝ちになったように見えた。そして問題は 9 五歩 同香となった局面。普通に 9 六歩だと 7 九龍で困る。羽生絶体絶命か?

以下文字で再現してみよう。

羽生 9 六金!!!!!!!!!!!!

加藤 あああ！うわぁーっと！驚きました。いやぁー！ひやぁー！もう、大変な驚きの一着で。うーん、こんな手がありましたか。

さて、この驚きの一着がでまして 9 六金。ひやぁー、いやぁー。これは、うわぁー、にわかに、うわぁー。これ、うなりましたね。うわぁー。

加藤先生、あなたは擬音語のデパートですか。加藤先生、あなたはかつての長嶋茂雄ですか。うわぁー(私までつられた)。

録画を何度も巻き戻してみたら、佐藤も指された後に一瞬間があって、目を見開いて驚いていたようにも見えた。

金をただ捨てすることで、先手玉の上部脱出が可能になり、風前の灯だった先手玉が一瞬にして全然簡単にはつかまらなくなってしまったのだ。

以下も、佐藤も粘りに出て長い戦いが続き、佐藤がもしかしたら再度逆転かというところまで追い込んだが、羽生が逃げ切って勝ち。

但し、感想戦がなかったので対局者二人の対局中の形勢判断はよく分からない。

とにかく、9 六金は目の覚めるような一着だった。

今年は NHK 杯の 60 回記念大会。そして、羽生の伝説の 5 二銀をくらったのが加藤一二三。羽生の新たな伝説の 9 六金を解説したのが加藤で、何か因縁めいたものを感じずにはいられなかった。

また、羽生が中川に大逆転勝ちした将棋を解説していたのも加藤。加藤が羽生の将棋を解説すると何かが起こるのだ。

まずは懺悔から。今日の終盤はすごいことになった。羽生の鬼気迫る追い上げて本当に逆転しかけた。このすごい将棋については、また日を改めて書く。

ところが、私はもう今日の昼食休憩の頃から諦めていた。いや、私だけじゃなくてプロもそうだ。夕方のBSを見ていたら、島朗が出てきて、3九金でもう私なら投げたくなって、中村修に指し続けられないといけないと諫められたと話していた。

夕休時点では、私はもっと諦めきっていた。普通そうですよね。逆転する要素なんて、これっぽっちもない。ところが、羽生善治だけは全然諦めていなかった。最後、森内が詰まसानければ明確に逆転というところまで追い込んだのである。

さて、以下は私が夕休以降、諦めてお酒を痛飲しながら楽しく書いてしまった記事である。

でも、加藤先生もやはり偉大で素晴らしいので、強引にそのままアップすることにする。

今日の将棋についての感想を期待して来てくださった方にはごめんなさい。

名人戦ニコ生初日に登場した加藤は終日エネルギッシュなトークを繰り広げて、その勢いは最初から最後まで留まることを知らなかった。ツイッターでは聞き手の貞升南に対して「ガンバレ！」の声援がやむことがなかったことも肯けるところである。

以下、私も全部見たわけではないが、ツイッターの他の方のつぶやきも参照して一部再現してみよう。

最近の矢倉は本局のように6六歩がほとんどなのですが、わたくしが名人戦で中原さんと千日手持将棋を含む10局の死闘を繰り広げた末に名人を獲得しまして。その時も矢倉がほとんどだったのですが、全て6六歩ではなく7七銀型でした。わたくしは個人的には7七銀の方がよいと思っております。ええ。

わたくし、矢倉の後手では6三步から6三銀の作戦を多用しております、これが大変強力な作戦でして、わたくし、後手では七割近い勝率をあげております。それは他の棋士も皆知っているのですが、なぜかほとんど採用する人間がおりませんで、せいぜい、そうですね1%。そして本局のように5四歩が大部分なんですね。それで勝てればいいのですが、なかなかうまく行かないのに。なぜわたくしの形を皆が採用しないのかは棋界の七不思議です。ええ。

加藤「わたくしは現在までに1300勝なにがしの勝ち星をあげておりまして・・・。」貞升「ええええ、すごいですねえー。」加藤「あれっ、知らないの？それは知らないとおかしいですよー。(笑顔)」貞升「あっ、はいっ。」

わたくし、実は九段になりましてから800勝あげていまして・・・。

(すごいですよね、さすが神武以来の天才で九段になられたのがはやかったということです。)

本日は時間がタププリありますので、また後々お話つせていただくこととしまして・・・。

(落語「寝床」でダンナが期限を直して「今日はまたミッチリと語らせていただきますから」という桂文楽師匠の名人芸が私の脳裏をよぎりました。)



実はですね、過去の勝ち星の記録で、記憶が曖昧で正確ではないということで記録が取り消された例があります。大山さんやわたくしの記録については、ちゃんと残っているので間違いございません。

わたくし、新潟の第二局の立会いでして、夕食の際に私の右隣に森内名人が座りました。わたくしがこういう話をしました。わたくしは持将棋が苦手でどう指せばいいのか分からないと。そうしますと、森内名人曰く、「私は加藤先生に持将棋で見事に負かされたことがあります。262手でした」と。わたくしは森内名人の記憶力に大変感心いたしました。(満面の笑み)

例えば、大山さんと羽生さんが、どちらが強いかというと、わたくしは互角だと思います。わたくしは、大山さんにはある時期からは楽勝が多かった。羽生さんは、対局数が少ないけれど負かすのは大変。でも、強さとか将棋に対する執着とかは二人は互角ですね。うん、互角。

わたくし、揮毫をよくしまして、ササッと素晴らしい勢いで書くわけですが、ある時、大山先生に書き順の間違いを指摘されたことがあります。大山さんは基本通りにやっているんだと感心いたしました。でも、将棋は基本通りじゃないのにね、ふいふいっ。

わたくしは第二局の立会人の際に対局前に座布団を直しました。横長に置かれていたのを縦長に直しました。われながら、これはちょっといいなあと思っております。(満面の笑み)  
(聞くとところに新橋の大内先生の解説会で「仲居さんがせっかく揃えたのに(笑)」「いやあ、さすがですね」とおっしゃったそうです。)

わたくし、実は将棋界の連敗記録の持ち主でして、21連敗というのがあります。さらに、中原さんには7年間一度も勝てなかったこともあります。でも段々中原さんも得意になってきまして、ついに名人戦の死闘では勝ちまして何年何月何分に見事名人を獲得することが出来たわけです。  
(最後はポジティブにもっていく思考を是非見習いたいところです。)

Q 将来有望な棋士は？ A わたくしの数多い対局の中でも千局はほとんど名局です。そして私の将棋をよく並べたというのは郷田さんが若い頃に並べたと言っていたかな、そして渡辺さんも。はい、それでは将来有望な棋士？それは私の棋譜を理解してよく並べる棋士ですね、ええ。

羽生さんがNHK杯でわたくしと対戦した際に指した 5二銀。あれは大変有名な指し手で今でもよく言われるわけですが、でもあれはね、羽生さんにしてみれば朝飯前の手なんですよ。

わたくしもかつて升田先生ともよく戦いました。して、戦って先生が勝った場合は感想戦はありません。ところが、わたくしが勝った場合は、朝の6時7時まで続きました。そして、朝になった頃に升田先生が「加藤さん、最近指した将棋を見てくれよ」と先生の会心局を並べました。勿論、イヤだと思ったことなど一度もありません。

大山さんは結構賑やかな多弁な人でした。ある時記者のご夫人が手術で、皆でお見舞いをお金だそうという話に対局中になったこともあります。昔はそのように対局中にも会話をしていたんですよ。

わたくし、昔天ぷら定食を頼んだんですが、配達がないことが二度ありまして。当時新鋭の勝又さんが心配して走り回ってくれたけれども結局来なかったんです。なので何も食べずに指しました。それ以降うなぎにしました。鍋焼きうどんも好きなのですが、あつくて冷ますのに10分くらいかかるのでやめました。今は寿司です。

わたくしが対局の前によく聴くのはモーツァルト、メンデルスゾーン、バッハです。最近はモーツァルトのオペラ「後宮からの誘拐(逃走)」、メンデルスゾーンの「スコットランド」が好きでよく聴いています。

大山先生とのタイトル戦を銀波荘でわたくしが致しましたた時に、駒を打ちつけた際に、盤の左側にヒビが入ったことがあります。それは、ずっと使わずに保存して出した温度差、湿度差のためで、わたくしが駒を強くたたきつけたからじゃないんです、ええ。

大山先生に皆が勝てなかったのは、我々が棒銀を徹底的に研究しなかったからだわたくしは思っております。今度出す本にもわたくしは書いています。

わたくしは、ひふみんと呼ばれているのは知ってまして、いい感じ、なかなか巧みなネーミングだと思っております。わたくしが二十歳の頃には、ピンさんと呼ばれていたの。大山さんとか丸田さんとか。別にイヤじゃなかったです。

対局中によく食べるのは、カマンベール・チーズですね。以前ある棋士と戦っていて、わたくしがカマンベールを食べていたら、相手もほしいと言い出しまして。ところが、出てきたらカマンベールじゃない違うのが出てきたの。ホテルのチーズがもうなかったのかどうかは知りませんが。

大山先生は、投了しなければいけない局面で、隣の部屋にカメラマンがいるのに気づいて、意地でも投げないと決めて一時間くらい粘ったという話があります。だから、わたくしも立会人の時に対局室に入るのは投了を促しているようで味が悪いので入らないようにしています。

わたくしの棒銀は現在でも、誰に対しても通用すると思っております。それは千葉さんとの対局で新たな発見がありまして、将棋世界にも自戦記を書きました。

渡辺さんは、大変将棋も強くて名人戦にも出で来るだろうと、わたくしは思っております。また、人間的にも常に安定している感じです。話も大変面白いと思います。

よく将棋は理系だと言われるけれども、わたくしはそうは思いません。だって、将棋というのは景色をみてその感覚で指すものでしょう。わたくしは将棋は文系だと思っております。

わたくしのよく指す棒銀戦法について、私のふるい本にも書いていますが、現在は入手が難しいです。ただ、羽生さんの「羽生の頭脳」にも書かれてまして、それが大変優秀でオススメです。実は、わたくしも羽生の頭脳の通りに指しまして二度勝ったこともあるんですよ。

山田道美さんとは、わたくしは昔からの知り合いでした。早く亡くなられてしまったのですが、大山さん

とのタイトル戦は本当に火花の散る激しいものでした。山田さんも「打倒大山」を前面に出して、大山さんもそれに反応して闘志を燃やして、あの二人のタイトル戦くらい激しかったのはいまだにないと思います。

実は振り飛車に対する矢倉というのは大変有力な作戦でして、わたくしは大山さんにもよく勝っています。ほとんど無敗でした。ところが、森安さんだけには負かされました。森安流で来られると困ります、ギブアップです。

以上、ごく一部に過ぎないが加藤先生の将棋界の生き証人ぶりを遺憾なく発揮した素晴らしいニコなまであった。

なお、加藤先生が学習院大学で講演された話が出ていたが、加藤先生ご本人がその模様が youtube にアップされていることをお話されていた。それについては、こちらのブログで見ることが可能である。

男 45 才経営コンサルティング会社社長の感動備忘録/有限会社キャタリスト軟式 HP 【講演】「将棋と人生」加藤一二三さん

9 個の動画に分かれていて「[加藤一二三 学習院大学](#)」でぐったこのページに出てくる。

さらに、加藤先生は最近の達人戦でも高橋道雄九段に勝たれている。A 級の高橋のお得意の後手横歩取らせに対して、やや模様が割る目ながらも最後は怒涛の攻めを決めて勝った素晴らしい将棋である。

棋譜は[こちら](#)。

さらに、[中継ブログ](#)では加藤先生の写真が満載でファンには見逃せないものになっている。

そして、加藤先生の新著も 5/10 に発売である。わたくしも (別に加藤先生の口癖がうつったわけではない)、当然買います。

## 棋士論

---

結局、私は棋士、の人間が好きなんです。百花繚乱の棋士絵巻をどうぞ。

昨日のNHK杯をご覧になった方も多いただろう。もしかすると、感想戦についてまたあのアホが何か書いているんじゃないかと、本ページをのぞいておられる方もいらっしゃるのかもしれない。しかし、私も一応は人間らしい心を少しは持ち合わせているのである。さすがに藤井先生に対して悪いのでないかと。だが、そういう気持ちよりも、あの感想戦からにじみ出てくるほとんど人間のギリギリの形での悲しみや自嘲や誇りが混ざったとても人間らしい光景に対する感動が上回って、こうして私に書かせているのである。というのは真っ赤なウソで、結局私はあの感想戦を心底面白がってしまったロクデナシに過ぎない。芸術的な攻めの構想で圧倒的な優勢を築き上げた藤井が、信じられないようなウツカリの一手だけで一局をだいなしにしてしまった。そして、丸山がその手をとがめる当然の一手を指したのを見て、藤井は秒を読まれる中、即投了。肩を落として、まるで「ガックシ」が背広を着ているかのような哀愁の姿がテレビ上に映し出されていた。

具体的指し手については、勝又教授が来年「新手ポカ妙手選」で紹介されるはずなので、そちらを参照されたい。と、なんでこんな意地悪なことを書いてしまうのか、自分で自分がよく分からない。画面では終局直後、藤井が丸山に話しかけている。

まあ、こんなもんかね。大爆笑だね、しかし。

丸山も笑うしかないのだが、見る者は既に涙をこらえることが出来ない。

木村と矢内が入ってくる。藤井が木村に話しかける、誰かにものを言わずにはいたたまれないかのように。

いや、芸術的でしょう。

(木村)でも、攻めのつくりはすごく良かった・・・。

しかし、オチがひどいね。

(今度は矢内を見て)

笑ったでしょ、これ、いくらなんでも。

しかし、矢内は表情を硬くしたままみじんも笑顔を見せない。木村と矢内の優しさ、心遣いがひしひしと画面を通じて伝わってくる。以下、藤井の悲しくもおかしい自虐節が炸裂し続ける。その場は笑いに包まれるが、笑いを取れば取るほど、藤井の姿が孤独で寂しくなっていくような空間。こういうのが、残酷なようだが、命がけで戦っているプロ棋士たちの尊い姿なのだと思う。

悪手にしても、悪手を指したいよね。(とって、飛車を分かりやすくタダで取られる場所に置く)

(木村が藤井の鋭い攻め筋を褒めると)こんなとこ、うまく指してもあんまり意味がないんだよね。オチがひどいね。しかし。

必勝なんですよ。必勝なのは分かっているんですよ。確かにね。頭では分かっているんですけど、体が反応しないんです。

よく見たら、桂をとるじゃん。ひどいじゃん、これ。なんで投げないの？なに、これっ。ひどいじゃん。一勝損しちゃったよ。

木村も矢内も笑いながらも、同業者として気持ちが痛いほど分かるのだろう、藤井への気遣いが美しい。しかし、そんな中、丸山は常にいつも通りの丸山であった。勿論、丸山だって藤井の心情はよく分かっているに決まっているが、特に態度を変えたりしないのが、丸山の良いところである。終盤丸山に 8 六桂という強引に藤井玉に迫る手が出たのだが、

木村 玉頭桂がいやらしいんですかねー。

丸山 しかし、まあ、なんでもないですからー。

といつもの丸山スマイルでおっしゃった。

その通りです。丸山先生。でも、藤井先生は、その「なんでもない桂」で動揺してやらかしちゃったんですよ。実際その通りだし、悪気など一切ないのでしょうが、そのお言葉は結果的に藤井先生に対する致命的なダメ押しになってしまっているのですよ。

お江戸の町で、鰻屋タケシといやあ、そりゃあ誰一人知らぬ者はいないのさ。タケシのつくる鰻重は天下一品、完璧で非の打ち所がなし。詳しいことは知らねえが、なんでもタレに革新的な技を用いて、それまで誰にも出せなかった味をだすことに成功したそう。最初の頃はあまりに革新的な味だったので、邪道だとかこんな鰻じゃねえとかうるさい食通どもが騒いだけれど、結局そんな連中も一度食べた味が忘れられずに、タケシの鰻屋に通いつめる羽目になったそう。今じゃ、もうタケシの鰻が常識、定番さ。

でも、タケシは単なる革新家じゃない。タケシが名家の道楽息子だった頃、先代のヤスハル師匠のつくる鰻に惚れこんで通いつめ、好きが昂じて頼み込んで弟子入りしたというわけさ。だから、タケシは徹底的に伝統芸を身につけているんで、気が向くと昔ながらの伝統の鰻を出すこともあるのさ。これがまた絶品。最近タケシの鰻を真似する店もすっかり増えた。でも、タケシはそれを苦々しく思っていて「オレはちゃんと修行をつんだ本物の鰻屋で、その辺のポッポ出の即席鰻屋には負けられねえ」が口癖だとか。

こいつは余計な話だが、タケシはシャレ者ということでも有名さ。鰻をつくる際の職人服も決まっているけど、普段の着物姿もそりゃあイナセなもんさ。よく下町の飲み屋で、タケシは寿司職人のヒサシと一杯やっているんだけど、二人ともなかなかの男前なんで、町娘たちの騒ぎようといったら、ああ喧しいったらありやしねえ。

でも、タケシはカッコいい見かけに似合わず結構ふざけた野郎でさ、ヒサシと好きなおなごのことを語り合ったり、同業の中華の大人ヒフミ先生のに物真似をしたりして、呵呵大笑さ。結構面白い男なんだよ。おっといけねえこれだけじゃ二人に失礼だ、この二人はそうはいってもとことん料理人根性なんで、笑って飲んでいても最後は結局料理がどうあるべきかを熱く語り合うのがオチなんだってさ。

そんな有名なタケシだったんで、世の將軍様の御耳にも入って、タケシの鰻を召し上がられることもあった。將軍様もいたくお気に入り、何度もご所望されたとか。それが気に入らないのが將軍のお取り巻きたちだ。当然、將軍さまご専用の料理番たちがいて、その総料理長といえば、これまた誰一人知らぬ人なきヨシハル。なんでもヨシハルはものにこだわらない大物で、タケシの鰻も十分認めていて「あっ、あれは本当においしいです。」と素直に認めていたんだが、こういう場合取り巻きたちが余計なお節介をやくのが世の常さ。ヨシハルという存在がありながら、たかが下町のむ鰻屋の分際でけしからん。ここは白黒はっきりさせるために、ヨシハルとタケシの料理対決を行うべきだと騒ぎ立てた。將軍様も面白がって同意したのでさあ大変。二人の料理対決がとり行われる次第となった。

というわけで、司会には別のタケシ。実況にはケンジ、審査員にはハットリ先生などを迎えて「料理の鉄人」はにぎにきぐしく行われることとなった。細かいところは一切省くが、戦前の予想を覆して鰻屋タケシが勝っちゃった。ヨシハルが潔く「あっ、負けました」といった瞬間には、お江戸の庶民はみんなお喜びさ。なんでもヨシハルが秘伝の和食を封印して、なんと鰻料理で真っ向勝負に出たのが敗因だったとか。タケシも「オレ以外で、あんなに鰻をうまくつくれる人間がいるとは思わなかった」と率直にヨシハルをちゃんと認めたとか。

戦った二人はアッサリしたもんだったんだけど、うるさい取り巻きたちが騒ぎ立てて再戦もおこなわれた。今度は、ヨシハルも秘伝の和食で勝負してきて、それでも大激戦になったがなんとか今度はヨシハルが勝った。でも、タケシの実力はもう誰もが認めるところとなって、もう誰もとやかく言う者はいなくなったんだと。

というわけで、タケシもその後はしばらく平和に暮らしていた。でも、この頃からかなあ。タケシはいかにも冷静沈着な外見なんだけど実は結構江戸っ子気質でカッとなりやすい。鰻をつくっている最中におかみ

さんに色々話しかけられて時々仕上げをしくじることが増えて来た。でも、その頃はご鬣も多かったんで、まあしょうがねーや、ということになっていたそうだ。えーっと、ご鬣が多い、ファンが多い、ファンタ・・・バンザーーイ、こん平でーす。

もしかすると、タケシもちょっと鰻に飽きていたのかもしれない。ある時タケシは酔っ払って屋台の蕎麦を食べたそう、それが信じられないくらいうまかったらしい。そこから波乱の新しい物語が始まるのさ。

「なあ、オレ、蕎麦をつくりたくなかった。屋台を引いて始めたいんだけど。」

「えっ、オマエさん気は確かかい、この鰻屋はどうするつもりなんだい。」

以下愁嘆場は略すが、タケシも一度決めたら頑固である。幸い鰻屋には、腕もよくイナセな男前のトシアキという弟子の職人がいたので、店は彼に任せるということでおかみさんもシブシブ納得した。こうしてタケシの蕎麦職人修行が始まった。

天下のタケシといえども、文字通り一からの再出発さ。そりゃあ、最初の頃は大変だったらしい。噂を聞きつけた若手料理人のアキラ、ヤスアキ、マコトが冷やかに来て、酷評して去っていたこともあるそう。タケシも悔し涙に暮れたと暮れないとか。

でも、もともとタケシも天才職人だ。あっという間にコツをつかむとともに、蕎麦でも今までにはなかったような味を出すことに成功してお江戸の町の噂になる。なんでも、天麩羅の具を早く加工するのが工夫とか。早く加工、早く困う、早困い・・・バンザーーイ、こん平でーす。

というわけで、蕎麦職人としても名を上げたタケシ。となると、平安な世に退屈しきっている者たちが放っておく訳がない。また、タケシとヨシハルで勝負してみたらどうだろう。そして將軍様も乗り気でトントン拍子で話は決まって二人が再戦することになったのさ。

お江戸の衆は蜂の巣をつついたように上を下にの大騒ぎ。タケシは、蕎麦で勝負するのか、いやそうとみせかけて鰻の新構想か、一方、さらに円熟の境地のヨシハルはどうするんだろう。

・・・という話で今、お江戸の町は持ちきりなのさ。

(注 本文は完全にフィクションであり、登場人物が現実の人物に似ているとしても、それは完全に単なる偶然にすぎない。)

羽生善治王座に藤井猛九段が挑戦する第 58 期王座戦は東京千代田区では 9/9 (木) に開幕する。

参考文献 [鰻屋本舗 \(将棋\) - 藤井猛九段公認応援サイト](#) [第 58 期王座戦五番勝負特設ページ](#)  
[ものぐさ将棋観戦ブログ「鰻職人タケシの冒険」関連? 将棋人物・用語集](#)



一昨日書いた記事は、正直申し上げて、あまり読者の方々に分かせようとするのではなく、何よりも自分自身が楽しんで書いてしまったというところがあります。分かる人が分かればいいやと。それでも、ブログ読者の方々強者も多く、私などより詳しい人も結構いそうなので、面白がっていただけの方もたくさんいらっしゃるようです。でも、冷静に考えると、やはりある程度詳しい将棋ファンじゃないと分からない部分もあるし、まして将棋ファン以外の方が読んだら意味不明でしょう。

というわけで、あの「小説」と関連することについて必要最小限の人物・用語集を書いておくことにしました。勿論、あの小説？は荒唐無稽なフィクションなのですが、当然将棋の人物や出来ごとと関連させてあります。いちいち該当箇所は示しませんが、一応小説に関連する順に書いていきます。なお、最小限の解説で、かつあくまで素人の我流の説明で不十分なところもあるでしょうから、興味をもたれた方はウィキペディアを見るなり検索するなりされるようお願い致します。

### 藤井猛(フジイ タケシ) 九段その1

プロ・アマ問わず振り飛車党のカリスマにしてアイドル。四間飛車に「藤井システム」をもたらし、振り飛車のみならず将棋の考え方に根本的な革命を起こす。従来の振り飛車は、受身に相手の動きを利用して捌くものだった。しかし、藤井は相手の居飛車穴熊に対抗するために、居玉のままいきなり相手に襲い掛かる藤井システムを発明して勝ちまくり、竜王位も獲得する。当初はその過激な発想に誰もなかなかついていけなかったが、いまや四間飛車の常識、スタンダードとなっている。

### 大山康晴(オオヤマ ヤスハル) 十五世名人

将棋界の歴史を代表する巨人にして名人。振り飛車の名人でもあり、藤井九段も大山将棋を深く研究して甚大な影響を受けている。羽生名人も、近年「読まなくても局面の急所に手か向かう」大山の大局観に言及することが多い。

### 「ファミレスの鰻に負けるわけにはいかない」

藤井九段の四間飛車に対するこだわりを示す発言。鰻屋本舗の[このページ](#)を参照されたい。

### 藤井猛(フジイ タケシ) 九段その2

藤井九段は、ダンディでおしゃれかつお茶目で女性ファンにも人気が高い。例えば将棋連盟主催のイベント「将棋日和」の[この写真集](#)をご覧ください。また、ボソボソとした語り口ながら自虐も含んだ独特なユーモアの話術でも人気が高く、仲間内では同業棋士の絶妙な物真似を披露することもあるとか。

### 行方尚史(ナメカタ ヒサシ) 八段

藤井九段と親交があるとされる。ロックとお酒を愛してやまない個性派棋士でエピソードには事欠かない。もう昔のことで時効だと思うのだが、若気の至り？で「羽生さんを倒していい女を抱きたい」と発言して話題になったことも。最近もJT杯で羽生名人と対戦した際、前日に地酒がおいしくて飲みすぎてしまい二日酔いで対局を迎えたがちゃんと勝ったという強者である。但し、将棋に対する姿勢はあくまで真摯で真面目である。よくは知らないが、愛するお酒を飲みつつ今も将棋の事をアツク語っているのだろう？なお。行方八段についてのみ記事と関係ないことまで調子に乗って書いているのは、あくまで筆者の個人的趣味

による。

### 加藤一二三 (カトウ ヒフミ) 九段

早熟でかつて「神武以来の天才」と呼ばれ、現在まで息長く全力で将棋を指し続けるベテラン棋士。堂々たる体躯と甲高い声の早口のハイテンションな解説など、唯一無比な個性で現在もファンの間では絶大な人気を誇る。これは私見だけれども棋界の長嶋茂雄である。愛猫家としても高名。語りつくせぬ氏のエピソードについては各人検索されたい。

### 羽生善治 (ハブ ヨシハル) 名人

説明の必要はないだろう。棋界の第一人者。オールラウンド・プレーヤーとして知られ、居飛車、振り飛車等あらゆる戦法を指しこなす。藤井システムについても、それを打ち破る側も指せば、自分で藤井システムを採用して指すことも多かった。藤井九段も、「私以外だと、羽生さんが一番藤井システムをうまく指すかもしれない」という意味のこと発言していたのをテレビ棋戦の解説で目撃したことがある。

### 藤井と羽生の竜王戦対決。

第13期と第14期の二年連続してこのカードだった。第13期は藤井竜王がフルセットの死闘の末に防衛。藤井の評価をより高めた名シリーズだった。第14期は羽生が雪辱して竜王位を奪取した。

### 藤井のファンタ (ファンタジスタ)

どう説明するが困惑したのが、検索したら何と [yahoo 知恵袋](#) で質問している人がいて笑ってしまった。その回答を参照されたい。なかなかの名回答である。

### 藤井の「ラーメン屋の屋台」

振り飛車党の藤井が先手で居飛車の矢倉を指し始めたことについて、やはり鰻屋本舗での [ご本人の証言](#) を参照されたい。藤井九段らしいユーモアにあふれた名文である。

### 久保利明 (クボ トシアキ) 王将・棋王

藤井と共に振り飛車党を代表する存在。現在は、石田流とゴキゲン中飛車の使い手として有名だが、実は藤井システムの達人でもある。三間飛車での実験的な藤井システムに似た指し方を披露したこともある。

### 酷評三羽烏

かつて渡辺明 (ワタナベ アキラ) 竜王、村山慈明 (ムラヤマ ヤスアキ) 五段、戸部誠 (トベ マコト) 六段が、若い頃に遠慮会釈なく同業プロの将棋を酷評することからこういわれた。渡辺竜王のブログや、その前の日記で [自分たちでも認めていた](#) 表現である。

### 矢倉早囲い

矢倉で、自分の玉を囲う際に慎重に金をあがる手を省力して、早く玉を囲おうとする指し方。普通より一手早く玉を囲える代わりに、相手から急戦で攻め込まれる危険もある。そのためあまり指されなかったが、藤井九段が指し始めることで見直され現在流行の気配もある。新・藤井システムと呼ばれることもあり、今回の王座戦でも注目される戦形。

藤井九段が羽生王座に挑戦

やはり、鰻屋本舗でのご本人のユーモアがあり、なおかつ隠れた闘志が感じられる[名文](#)を参照されたい。

いよいよ、明日王座戦が開幕する。

藤井猛は意外なことに週刊将棋ステーション初登場だそうである。例によってボソボソ口調の独特な藤井流センス・オブ・ヒューモア世界全開だったのだけれども、それ以上に藤井の幼い頃の将棋勉強法やプロになる経緯の話が実に興味深かった。ほとんど藤井将棋の本質を悟って開眼した(と錯覚するくらい)藤井将棋を理解する上で重要な手掛かりになるトークだった。

藤井が初めて将棋を知ったのは小学生4年生の時、友達にルールを教わったそうである。それで、その時は終わり。小学校でも将棋の流行り廃りがあって、まくた6年生の頃に流行して、友達と指したりした。でも、あくまで友達と指した程度で、本人曰くには「十級」程度だったそうである。但し、将棋の本を試しに買って読んでその通りに指してみたら、友達程度にはそのまま勝てたそうである。あと、NHK杯の将棋を見るのが好きだったと。要するに現代風に言うならば、元祖「観る将棋ファン」だったわけである。道場に通うような積極的な子どもではなく、藤井流に言う「ジャンケンをすれば負け、かけっこをすれば遅い子ども」だったそうである。羽生などが小学生名人で既に十分強くて実戦経験も豊富だったのとは原点からして大違いなのだ。

その後、地元で将棋普及に熱心な方に会い、実際に指してみたら、アマチュア三段程度のその方に勝ってしまったそうである。藤井は、あくまで将棋の本を読んだりテレビ将棋を見たりしていただいけにもかわからず。この辺が藤井の才能である。中学2年生の頃である。そして、奨励会の予備機関の研修会に入会する。当時14歳。そして、その頃将棋の専門誌を見ると「はにゅう」なる子どもが同い年で既に奨励会三段であることを知る。「なんだ。コイツは」と思った。それが「羽生」である。将棋エリート羽生とは、その時点では限りない格差があったのである。

そして、研修会入会当時も、頭で覚えた将棋なので最初は全然勝てなかった。本で読んだ知識で途中まではそこそこの勝負でも、中終盤では体で覚えた将棋でないのでボロボロにされた。そんな状態が半年ほど続いて、それに耐え抜いた。

そして、奨励会にやっと入ったのが15歳の時。羽生はその頃既にプロになっていた。

要するに藤井は将棋の世界においては、「エリート」とは程遠い「雑草」だったのである。それが、羽生などの将棋エリートたちと現在互してやっているのは、ほとんど奇跡に近いともいえる。

将棋でも、例えばプロのクラシック音楽家でもそうだが、幼い頃から肉体的に鍛錬をつんで「体で覚える」ことをしなければ普通は到底無理とされる。基本時に完全に特異なスペシャリストの世界であって、一般人には手が出しようもない世界なのだ。それを、藤井は努力と才能で突き崩したわけである。

本ブログの「ものぐさ将棋観戦ブログ」というのは、実は私が好きな岸田秀の「ものぐさ精神分析」の影響を受けている。岸田はその主張にボルクの「胎児化説」というのを置いている。簡単に言うと、人間は猿の胎児であるにもかかわらず、成人になっても猿でいうと胎児段階の特徴を残しているという説である。従って、猿などの動物においては本能によって必然的に決まってしまう部分を、人間の場合は成人になっても自由に選択できて、動物のようなきちんとした成熟がなくて世話が必要なかわりに多岐で自由な発展の可能性を残している。本能が壊れているかわりに人間的な自由の可能性があると。

私は別に岸田やボルクの説に賛同するわけではないのだけれども、藤井の話も聞いていてその話を思い出した。羽生などの将棋エリートは、「体で覚えた」将棋であって、ほとんど考えなくても直感的に将棋の「正しい」指し手を把握する。一方、藤井においては、そうした「将棋的本能」が、本人の経歴からも分か

るとおりでない。「頭で覚えた」将棋なのである。

従って、藤井将棋の弱点は、将棋の「本能的部分」、すなわち終盤の指し手である。「ファンタ」と揶揄されるように、そうした部分ではいまだに羽生などの「体で覚えた将棋」に対して劣る。

しかし、その代わりに「将棋本能」が最初から崩壊しているために、自由で常識や本能に捉われない発想が可能だ。「体で覚えた将棋」が本能によって最初から拒否する指し方を、先入観なく自由に追求することが出来る。その美しい果実が「藤井システム」や「藤井矢倉」である。将棋エリートたちにちにとって、そんな指し方は最初から「ありえない」ので拒否される。しかし、藤井の場合は「将棋本能」が最初から壊れている、あるいはもともと存在しないので、そうした革命的な思考が可能なのだ。

藤井 vs 深浦。後手の藤井が伝家の宝刀を抜いて藤井システムを採用。深浦が 5 五角急戦をみせ、藤井が 6 三銀と受ける形。藤井に構想ミスがあったらしく、深浦がペースを握るも藤井もうまく追い上げ難解な終盤になったが、藤井に悔いる手が出て深浦勝利。対局後は、藤井ボヤキ独演会と化した。

対局直後の映像から、いきなり。

藤井 いやあ、龍、回ったのがひどかったねえ。折角、ちょっと難しくなったのに。こういうバカなことを やっちゃ・・・、一步、使わせようと思ったのに、意味ないよね。叩かれるのを消して桂打ってるんだから。(ボソボソと

ハイ、いきなり、敗因を全て説明してくれました。困惑気味の深浦。

感想戦でもとまらない。

藤井 龍回ったのが大悪手でした。( 8 三に) 叩かれたら投了級だったんだけど。( 5 七に) 垂らしたのも論外なんだけど。

龍回ったのはひどかったねえ。龍を(3 五に) 引く手があるから。歩を使わせて(8 三に) 叩かれないうつもりで、自分で(8 三に) 桂を打っているんだから。こんな初歩的なミスをしているようじゃ・・・。(ボソボソ

深浦 そうか、龍がここ(3 九) にいるのがいい位置なんですね。

藤井 当然そうですよ。当たり前じゃないですか。(自虐笑い)。こんな初歩的なミスをしているようじゃ。

龍(回り) はなんか役立たずになっちゃって。(ボソボソ

局面進んで

藤井 しかし、まあ、ここでどう指すかが難しいなあ。ここで、ウン、まあ再び間違える可能性が・・・(ボソボソ

深浦、こらえられず思わず、「フッ」と失笑。深浦先生、失礼です。でも笑ってしまうのはよく分かります。

藤井 とにかく悪い方が最善を尽くさなきゃ、しょうがないよね。悪い方が先にミスしているようじゃ。これ、ひどいよね。とにかくね。

鈴木 しかし、すごくうまく追いこみんでいると思いましたが・・・。

藤井 うん、追いこんでいるハズが、一気に台無しにしてしまって。龍戻ろうかと思ったくらいだもん。もう一回。

深浦 フッフフ。(困惑気味の笑い

藤井 もとから足りない上に悪手を指しているからねえ。足らなさすぎるはずなんだけどねえ(ボソボソ しかも最後に 5 五桂に 同香でも、まだ難しかったらしい。その検討は感想戦の時間内に間に合わず。もし、そうしていて藤井勝ちだったとしたら、先生がどれだけボヤいたか、いやはや空恐ろしいくらいである。

今更で恐縮だが、恒例の渋谷東急将棋祭りの一幕を。今年はニコニコ動画さんが、全三日間フル中継されて将棋ファンには本当にありがたかった。生中継以外にもタイムシフト予約というのがあって、事前に予約しておくとも一定期間録画を視聴可能で、最近私は思い出してみても、改めて大笑いしたのである。

他にも、加藤一二三先生の講演会とかもあって、その一人語りは、まるで桂文楽や古今亭志ん生といった落語の巨匠たちにも勝るとも劣らない至芸であった。この場合、名キリスト教伝道師の名前を出して彼らに比してもしてもいいのかもしれないが、さすがにそれは趣味の悪いジョークになりそうなのでやめておこう・・・。

さて、二日目の特選対局は郷田真隆 vs 三浦弘行、そして解説は藤井猛であった。以下の再現は、藤井と三浦が、西村門下の仲のいい兄弟弟子であること知らなければ、涙なくしては読めないことをあらかじめお断りしておく。

聞き手は遊びに来ていた井道千尋女流がつとめて軽快なトークで盛り上げていたが、予定があって時間切れで途中から山口恵梨子女流に交代した。

局面は緊迫した終盤に差し掛かっている。藤井も「もう変なことはいえませんね。真面目にやります。」とのたもしたが、当然これは藤井劇場開幕の周到な前フリに過ぎなかった。

藤井「先ほど、山口さんと三浦八段、控室で記念撮影していましたよね。」

山口(カンベンしてくださいという様子で苦笑)

藤井「いや、普通に控室で見た光景を離しているだけなんですけれども。」

山口「藤井九段に頼まれたんじゃないですか。先生、それが言いたくて私は待たされていたんですか？」

藤井「そうですね。その話をしたくて・・・。三浦八段の携帯の待ち受け画面にするという・・・。」

山口(腹をおさえて苦爆笑)

カメラが絶妙のタイミングで対局中の三浦に切り替えられると、三浦が「カンベンしてください」という実に人のいい憎めない笑顔をみせるのであった。

藤井「あっ、違いました？それは間違いでした。ごめんなさいね。」

山口「すごい盤外戦術ですね。」

説明しよう。私もこれが書きたくてわざわざこの記事を立てたようなものである。藤井も本当にひどい。自分で仕込んで三浦と山口に記念撮影されておいて、この大盤解説でとっておきのネタに使ったわけである。そして、「携帯画面」のところまで、多分藤井は往年の藤井システムのように研究済、想定済だったのだろう。藤井の周到きわまりない事前研究の恐ろしさを改めて思い知らされた瞬間であった。最近の藤井も将棋の方の研究もこれくらい入念にやればもっと勝てるのにという憎まれ口をたたくのはやめておこう。

藤井「この郷田さんの 5六銀はカッコいいですね。群馬はこういう手じゃなくて、すぐ駒を取っちゃうんですよ。」

山口「先生、ニコニコ動画で群馬の方もご覧になっていると思うんですけど。」

藤井「いや、省略して言っているんですよ。群馬出身の棋士という意味です。」

山口「じゃあ、山田久美さんが聞いていたら？」

藤井(苦笑)「分かりました。じゃあ私や三浦クンと訂正しておきます。」

藤井は井道女流にも何度も形勢を聞かれて「まだ分かりません」と慎重に何度も逃げていた。

藤井「どうも、ボクが形勢を言うと形勢が入れ替わるんですよ。」

山口「じゃあ、藤井九段が形勢判断をし続けたら永遠に終わらないですね。」

藤井「永遠に終わらないんですよ。」

説明しよう。藤井と三浦は西村門下で、ともに群馬出身である。その地方出身であるハンディを二人とも独自の単独研究にいかしてプラスに変えてきたところも似ている。というのは真面目な話である。ちなみに、二人の姉弟子の山田久美女流も群馬出身で、藤井もさすがに気を遣わずをえず、そこをすかさず突いてきた山口女流はなかなかなのである。

そして、藤井が形勢判断をすると形勢が逆になるというのはネット上では一種の伝説であって、初期は藤井もどんどん形勢をすぐ言うタイプだったのだが、この発言からそういう噂も藤井の耳に届いてしまっているということである。そして、山口は実は結構ひどいことを言っていて、さすがの藤井も反応しきれていない。

この二つの例からも分かるように、山口女流はオツトリしている感じだが、なかなかのお笑いセンスがあり、将棋と同じくらいお笑いを愛している私はひそかに感心したのである。(どんな分析だ。

将棋は結局郷田が鋭い寄せで快勝。対局者二人が大盤に呼ばれた。

郷田はすぐ来たが、三浦の様子がおかしい。どうも対局に集中しすぎて足がしびれてしまったようである。

藤井「まったく、もう。修行が足りないんだよ、キミ。」

そして、足を引きずりながら歩く三浦。三浦らしく、本当に対局しきっていたようで、なおかつ負けたのが悔しかった様子で、藤井が話をふっても頭の中で駒が猛烈に動いている様子で生返事。マイクも使わずに、藤井に注意される始末。実に盤上没我の三浦らしい。

重ねて敗着や問題手を藤井にただされた三浦が最後に万感の思いをこめるかのように、三浦らしく素朴に言い放った一言がハイライトであった。

三浦「まあ、やはり藤井さんの解説ですよ。」

場内爆笑

藤井(苦笑)「ええ、結論が出たところで特選対局終わりにしたいと思います。」

全盛期の笑点でも、こうはうまくいかないだろうというキレイすぎるオチなのだった。



とある下町の夕暮れ時、街外れにある鰻屋は客もまばらで、おかみさんが客をさほど期待することもなくボンヤリと座り込んでいる。

すると深編み笠姿の浪人風の男が、静かに店に入ってくる。おかみさんが立ち上がると、人のいい年増の色気を滲ませながら笑顔で「いらっしやい」と声をかける。

男は深編み笠をかぶったまま席に座る。

「何にいたしましょう。」

「鰻。」

男はボソリと答える。

「ハッ、その声は・・・。」

男は何も言わない。

「おまえさんだろ、誰がその声を忘れるもんか・・・。」

男はためらいつつも、ゆっくりと編み笠を脱ぐ。

「やっぱりタケシかい・・・。まったくどこを

ほっつき歩いていたんだい。あたしがどれだけ心配したか、あんたは分かっているのかい・・・。」

おかみさはオイオイ泣き出す。男はただ一言ボソボソと、

「すまねえ・・・。」

以下、夫婦の仲直りの感動の場面は、読者諸賢のご想像にお任せして省略することにする。

さてここで説明の必要があるようだ。タケシは江戸の町では知らぬものなき鰻職人だった。その辺の経緯は、「<http://blog.livedoor.jp/shogitygoo/archives/51690757.html#>」  
鰻職人タケシの冒険」に詳しいとか。

タケシは鰻職人の名声も身分も捨てて、屋台をひいて蕎麦職人に転身したのだ。誰もがバカなことをすると言ったのだが、そこは天才料理人のタケシ、あっという間にタケシの蕎麦は江戸の町でも有名になり、老舗の食堂でもタケシ蕎麦が取り入れられるようになったのだ。

そこまではよかった。それで満足していればいいものを、タケシの向上心は限りなく、よせばいいのに江戸の料理の家元ヨシハルに料理で勝負を挑んだのだ。(今で言うところの

「料理の鉄人」だが、この番組ももう古くなって分からない御仁もいるかもしれないが、そういう事は気にしないことにする。)

結果は残念ながらタケシの惨敗。ヨシハルは「タケシさんの蕎麦の味は他の誰にも出せません」とニコヤカに何の邪心もなく慰めたのだが、プライドの高いタケシはいたくショックをうけ江戸の町から姿を消してしまったとさ。

そして冒頭の夫婦再会のシーンへつながる。

「すまねえな、苦労をかけて。でも、腕前が一流のトシアキのやつに任せたから、ちゃんと店はうまく行ってたんだろ？」

「それがおまえさん、きいとくれよ。トシアキさんは、最初のうちは真面目に鰻を焼いていたんだけどさ、そのうちにもう今時鰻なんかはやらねえと言いだしてさ。

わけまのわからないトシアキ流の寿司にすっかり夢中になって、そればかりさ。でもそれが信じられないほどうまくて、大流行さ。あんたには悪いけど鰻の比じゃなかった。あたしだって、店が繁盛するんで文句は言わなかった。

ほら、常連のヒフミ先生がいただける。昼も夜も鰻重の松を食べに来てくださってさ。あたしたちも、いくら好きでもあんなに食べれるもんじゃないって笑っていたじゃないか。

ところが、そのヒフミ先生までも昼も夜もトシアキ寿司の特上にぎりの連続さ。今度はトシアキと、ヒフミ先生も好きだねえと笑っていたのさ。

それがトシアキ寿司は飽きられるのもビックリするくらいはやかったのさ。向かいにある料理屋が、回っていて待たずにすぐ食べれる寿司を始めたのさ。それが大流行。

すぐ食べれる・・・、すごくはやい・・・、超速・・・、ばんざーい、こん平で一す。」

「はっ？お前何言ってるんだ？」

「ごめんよ、取り乱してわけわからないことを言って。とにかくそんなわけで、あっという間にウチは閑古鳥さ。

トシアキはすっかりノイローゼになって、寝言では超速超速とうなされる始末でさ。

ついに、知らない間にうちから姿を消してしまったんだよ。かわいそうに、トシアキも男前もいいし腕もいいし本当にいい男だったんだけどねえ・・・。」

「おまえっ、もしかしてトシアキの奴と・・・。」

「おまえさんもバカだねえ、いい年して嫉妬するのはおよしよ。あたしが本当に好きなのは本家の鰻屋だけさ。」

「へっ、バカいうないっ、照れるじゃねえか。」

以下夫婦がいかにも仲直りして愛を語りあったかは、馬鹿馬鹿しいので読者諸賢のご想像にお任せして省略することにしよう。

といったわけで、めでたくタケシは鰻屋の主人に再びおさまった。最初は腕のなまりを心配する向きもあったけれど、さこはさすが、筋金入りの職人だ。前と変わらない本物の鰻の味。鰻だけは回る鰻で対抗できるわけもない。(今時はファミレスの鰻っていうんですか?)

というわけで、鰻屋は前と変わらぬ大繁盛。

以前の常連もすっかり戻ってきて、やっぱりタケシの鰻は絶品だと舌鼓をうった。

でも、そこは研究心旺盛なタケシのことだ。従来の鰻重だけじゃなくて、新しいメニューも始めた。と言っても今度はちゃんとした鰻料理だ。鰻の開きとかいう変な料理だ。

鰻の開き・・・、角道を開いたまま・・・、角道オープン四間・・・、おいっ、強引過ぎるけどばんざーい、こん平で一す。

昔からの常連にはこの新料理はすごく評判が悪い。タケシは普通に鰻重をつくっていた方がいいのにと。ところが、さすがはタケシ、こちらも段々人気が出てきて、特に若手の鰻職人は最近はこればかりになってきた。

結局、昔ながらの鰻をやっているのは気がつけばタケシだけになってしまった。でも、おかみさんも幸せそうで一件落着のはず・・・だったのだが・・・。

ある時、タケシが言い出す。

「なあ、おれはもう一度ヨシハルのやつと戦ってみたいんだけど。今度は鰻でな。」

「おまえさん・・・何度バカを言えば気が済むんだい。やっとなつかんだ幸せをまたぶちこわそうっていうのかい。いいじゃないか、こうして大人しく鰻を焼いていれば誰もが幸せで。」

「すまねえ、でもこれは男の意地ってやつなんだ。もう最近鰻なんかはやらねえと世間の奴らは思っている。俺はそれが歯がゆくてならねえ。ヨシハルの奴は本物さ。おれもそれは骨の髄まで分かっている。でも、こういう時代だからこそ、ヨシハルにおれの鰻をぶつけてみたいのさ。」

おかみさんが、しばし沈黙する。そして長い間があった末に・・・。

「わかったよ。あんたがそうしたいならそうおし。一度言い出したらあたしの言うことなんか聞いてくれないだろう。

でも、タケシ。あたしは本当は嬉しいんだよ。あんなみたいな本物の職人を旦那にできて。店の事なんかきにしないでいいよ。思いっきり戦っておいで。」

タケシはもう何もいえない。あっ、タケシの目から涙が一筋・・・。

夫婦の感動の場面は涙なしには語れないので、読者諸賢のご想像にまかせて省略することにする。

というわけで、またしてもタケシとヨシハルの大勝負。言うまでもなくお江戸の町は上に下への大騒ぎさ・・・。

・本文は完全にフィクションであり、実在する人物団体等とは一切関係ありません。

第 53 期王位戦七番勝負、羽生善治王位に藤井猛九段が挑戦する第 1 局は明日 7/10 (火) に長野県松本市で始まる。

現在、羽生名人との名人戦を戦っている最中の三浦八段だが、名人挑戦を決めてからテレビ等への露出が増えている。名人戦での一生懸命で盤上没我の対局姿勢のファンになった方も多いのではないかと思うのだが、テレビでの解説ぶりもなかなか面白いのである。

昨日もNHK杯で杉本 vs 野月の解説をされていた。今年からNHK杯では事前の対局者インタビューを観ることが出来るようになった。杉本七段は基本的に振り飛車党だが、最近は横歩取りなど相居飛車の将棋も増えている。それに対して、野月さんは、杉本さんは飛車を振ってくると思うので、その場所によって対策を考えたいと言っていた。三浦さんは、杉本さんが飛車を振るときめつけていますねとコメントしていた。対局が始まり、7六歩 8四歩 5六歩の出だしで杉本さんの先手中飛車になったのだが、それについての三浦さんの解説が面白かった。

普通、野月さんは振り飛車党相手でも二手目 3四歩が多いのだが、今回は 8四歩とした。振り飛車党とすると、そうやられると本譜のように中飛車にしたくなる。もし、二手目 3四歩だと、最近杉本さんが多用している横歩取りの将棋になる可能性がある。それを考えての 8四歩であり、それで野月さんは事前に杉本さんが飛車を振ってくると予想できたのではないか。

だいたい、そんな要旨だった。なるほど、プロの序盤ではこういう駆け引きがされているのかと勉強になった。三浦八段は、序盤の作戦に凝ることで有名だが、即座にこんな説明が出てくる辺り、普段からこの種のことを用意周到に考えているのだろう。封じ手の練習をあらかじめしたように。

その名人戦の封じ手練習の相手が杉本さんだったことを、三浦八段が明かしていた。三浦八段は独自の秘密研究をしているというイメージもままあるが、どうも解説を聞いていると恐ろしく正直で、むしろ喋り好きである。似たようなところもある丸山九段とは、その辺が随分違うのかもかもしれない。

封じ手練習の際には、杉本七段が封じ手時刻の丁度よいくらい前の時間で新手を指してきたそうである。それで三浦八段が自然と封じ手の練習が出来る形になった。杉本七段は別に意識しなかったと言うが、普段の杉本八段の優しい人柄から、自然に封じ手練習が出来るように仕向けて配慮してくれたのではないかというのが三浦分析である。

これまた、三浦八段らしい深読みである。三浦八段は、このように色々なことを「読む」のが本当に好きなのだろう。つくづく棋士向きの性格をされていると思う。

三浦八段は、先月の囲碁将棋チャンネルの「月刊！順位戦」でも解説を担当していた。私は大好きなプロ野球が始まってからというもの、将棋番組の録画をHDにためまくって最近やっと見たのだが、これも面白かった。

収録は、恐らく名人挑戦を決めた後で名人戦が始まる大分前であろう。鈴木環那さんの相変わらずの名司会ぶりにつられてか、あるいはいつも通りなのかもしれないが、ここでも多弁で正直だった。

順位戦最終局は、三者プレーオフの可能性があった。それについて、三浦八段は対郷田戦で一瞬負けを覚悟した場面でこう考えたそうである。

谷川 vs 高橋の勝者と自動的にプレーオフになるのは仕方ない。しかし、丸山 vs 佐藤で丸山さんが勝って三者プレーオフになったら大変だと、ほんの一瞬だけれども思った、と。

これも、棋士としては恐ろしく正直な発言である。普通の棋士ならば「対局に夢中で、そんなことを考える余裕は全くありませんでした。」とお茶を濁すところだろう。本当は色々気になって仕方なかったとしても。三浦さんの解説を聞いていると棋士の本音に近い部分が垣間見えて面白い。

また、オリンピックのアイススケートの浅田真央の練習振りをみて、自分はあれほど努力してきたかを反

省して、最終局前には頑張っ勉強したそうである。

鈴木環那さんがすかさず、棋界きっての三浦さんがそんなことをおっしゃるとは、とツッコミを入れていたが、さぞ最終局前には猛研究をされたのだろう。一日 10 時間も軽く越えたのだろうか。三浦八段は、正直かつ素直な性格をされているようである。

さらに、郷田九段との順位戦最終局で自慢の研究手となった 5 五歩についても、豊島五段との練習将棋で三浦八段が先手をもってひどい目にあつたのをういてみたそうである。これまた、三浦正直流であろう。名人戦は今のところ苦しい戦いを強いられているが、ネットの反応を見ていると三浦さんが好きになったファンも多いようである。特に最近、twitter で増え始めている女性の観る将棋ファン「将棋女子」と呼ばれているようだーの間では、三浦八段に肩入れする声も多い。

第三局以降は結果も残して接戦のシリーズになれば、なおさら盛り上がるはずである。

## 4 タテをくらった挑戦者が主役だった不思議な名人戦——名人戦 2010 第四局羽生名人 vs 三浦挑戦者 2010 年 05 月 20 日

---

いきなりだが、私は羽生ヲタである。出来るものなら、名人位だけは未来永劫羽生さんに保持してもらいたいくらいのことを思っている。

しかしながら、である。今回の名人戦では、三浦挑戦者の対局にかけるあまりに真摯過ぎる姿勢、テレビに映っていることなど完全に忘れ果てているような対局への極限的な集中ぶり、そしてコメント等から漏れ伝わって来る余りに正直で人を和ませずにはいられない純真で素直な発言が、観る人間をひきつけずにはいられなかった。途中からは挑戦者の勝ちを待ち望んでいる自分に自分で驚いた。

私だけではない、ネットでの反応を見ていると、普段は羽生を応援している人間までもが、三浦挑戦者の一つは勝たせてあげたいなどと言い出し、特に女性将棋ファン(将棋女子)はすっかり三浦挑戦者に夢中だったようである。我々男性将棋ファンよりは、恐らく人間(おとこ)の本質を見抜くことについては鋭敏かつ敏感な方々が言うんだから間違いはない。某プロ棋士のブログによると、三浦挑戦者は「婚活中」ということで、そもそもそれが本当かどうかはよくは知らないのだけれども、恐らくご本人さえその気にさえなれば「No problem」なのである。本当に大きなお世話なのだが・・・

いきなり閑話休題。

本局でも、三浦挑戦者らしさが随所に出ていた。

今回は、横歩取りシリーズとも言われ、ここまできたら三浦挑戦者は意地でも横歩取りを採用してリベンジを目指すのではないかと周囲は観測し、またそれを期待する声も多かった。しかし、蓋を開けてみれば、あっさり違う形に。

事前の BS インタビューでも、横歩取りが続いたことについて、別に意地になっているわけではなく、特に先手では避けるのが難しいのだと率直に述べていた。三浦後手の第二局はとも角として、第一第三局については後手の羽生の誘導なので仕方ないという意味である。それでも、羽生が敢えて後手番で横歩を連採してきて、しかも負けてしまったのだから、普通ならば意地で本局でも横歩ということを考えてしまいそうなものである。しかし、三浦はそこはあっさりとかわして自分の自信のある研究をぶつけてきた。そして、結果は少なくとも後手が悪くなく、むしろ作戦勝ちではないかという成果をおさめたのである。この辺。あまり周囲の目を気にせずに、自分のやりたいことをきちんと実行する三浦の強さのようなものを感じた。封じ手にしてもそうである。三浦が今回 BS 解説を担当した杉本と実地研究したことが散々話題になり、せっかく練習した封じ手を出来ないのが三浦の敗因ではないかと、口の悪い棋界雀のネタになってしまっていたが、本人は実はそんなにこだわりはなかったようである。本局も、羽生が当然手の封じ手にするところまで指した。もし、相手が駆け引きを重んじる棋士なら直前に 4 七銀を指して三浦を困らせるかもしれないが、羽生ならそんなことをしないという読みも三浦にはあったのではないだろうか。周囲は、三浦の封じ手練習を面白おかしく騒ぎ立てたが、意外に三浦本人はこだわりなく冷静に封じ手を考えていたのかもしれない。

このどちらについても、三浦には周囲とは関係なく意外に冷静に自分の思うように出来る強さと(いい意味での)鈍感さがあり、それはむしろ三浦の長所・美点なのではないかと感じたりもした。

しかし、なんといっても三浦の最大の魅力はほとんど忘我状態に近い対局姿勢である。終盤、三浦が渾身の勝負手 2 三角を放って猛烈な追い上げ、それでも羽生が厳密には残しているのではないかといわれていたが、羽生の対応にも問題があり、三浦が逆転したのではないかというところで、NHK の BS は 10 分間の生中継に突入した。

いきなり三浦が映る。いつもながらの驚異の極限の前傾姿勢で、左手を開いて頭を驚づかみに抱えて必死に読み耽っている。手に隠れて表情はよく見えないが、なんとか見て取れる左目だけからも、頭脳がフル回転であることを雄弁に物語っている。まるで、間違っただけで世界核戦争が発生してしまい、10分以内に重大な決断をしなければいけない大統領が「正解」を探して体裁など一切無視して必死に苦悩しながら考えているかのように。

その三浦の姿勢は中継中の10分間全く不動のままだった。悟りをこれから開こうとして瞑想中の仏陀のように。これだけでも、見た甲斐があったというものである。

その後も、三浦の手が異常なくらいブルブル震え、羽生顔負けだったようである。残念ながら、それを見ることは出来なかったが。恐らく、将棋の終盤映像というのはおそろしく商品価値が高いのではないだろうか。

深夜のBSでは終局場面も映った。三浦が中空をみつめて、何がが悪かったのかを考えている。荒い息遣いが映像越しにも伝わってくる。羽生は前傾姿勢で盤面に集中している。三浦が気を取り直したように盤面に手を伸ばす。驚いたことに三浦の手番だったのだ。そして、三浦はタオルを手に取り、顔に当てて名残惜しそうに盤面を見つめている。タオルを置いて、左手を額に当てて、名残惜しそうに盤面をみやる。そして、気を取り直したように姿勢を正して、三浦らしくはっきりと投了の意思表示をした。立会いの加藤一二三も感慨無量という表情で見つめている。指し手など全く知らなくても、三浦の気持ちをはっきりと伝わってくる映像だった。BS解説では、終始冷静な解説を続けてきた杉本が最後に「残念でした」とキッパリという。

三浦挑戦者は局後に、このように語った。

力不足だったと思います。しかし力を出し尽くせたかと思えます

さらに、担当記者に対して「すみませんでした」と言ったそうである。恐らく4局で終わってしまったことについてだろう。普通なら負けたショックでそんなことを言う状態ではない筈なのに。

現在二冠の久保利明も、当初タイトル戦では羽生にひどい目にあい続けた。次々に激戦の終盤を戦い、どれも名局といわれながら、結果は常に羽生がかっさらっていた。今回の三浦の戦いぶりは、ちょっとそれに近いものがある。決して、一方的にやられたのではなく、第二局以外は三浦にも勝つチャンスがあったが、羽生の終盤の底力が首の皮一枚上回っただけである。

三浦は、今回のシリーズを通じてファンに対して十分自分の将棋や人間をアピールできたはずである。あとは、久保のように、どれだけ何度潰されても、へこたれずに甦って来て羽生と戦い続けることが出来るかどうかだろう。

年始恒例の「大逆転将棋」である。去年は、羽生善治と佐藤康光が脳内将棋で伝説的な死闘を繰り広げた。それについては、私も記事に書いた。まさしくあれは脳内将棋の奇跡だったと思うのだが、私が今年の番組で全く別の意味で奇跡に選びたいのが三浦弘行である。以下、スタンリー・キューブリックの「現金に体を張れ」風を書く・・・のは無理なので、忠実に時間軸に従ってドキュメンタリー風にまとめてみよう。

pm07:32 三浦弘行が画面に登場。なんと三浦は今回司会をされていた南野陽子さんのコンサートに通っていたそうである。三浦、しっかりと南野を見つめて「ええ、今日は本当に感激しております。」南野「楽しみにしています。頑張ってください。」三浦、嬉しそうに「ハイ、頑張ります。」これが本映画のプロローグである。ちなみに、南野陽子というと、私などはどうしてもスケバン刑事IIでの「おまんら、許さんぜよ!」思い出してしまうが、それはこの際特に関係ない。

pm8:45 「斜め45度? 投了図対局」という変わったタイトルが画面に。そう、三浦が癖で斜め45度にある脳内盤面をみつめて一心不乱に読みふける姿は、去年の羽生との名人戦ですっかり有名になった。私は、あれを橋幸夫の「いたこのいたろう」方式と呼びたいのだが、それもこの際どうでもいいことだ。とにかく、このスタッフ、三浦先生で遊ぶ気満々過ぎるだろ。

pm8:46 真打? 三浦登場。三浦の斜め45度にカメラが設定され、そこに対戦相手の指し手のみが表示され投了図からの将棋を脳内で三浦が指すという仕組みである。そして、三浦がそのカメラを観ると、南野陽子が「ふぁいと」といいいながら優しく微笑む写真が。言うまでもなくスタッフは遊び過ぎだ。しかし、それをみた三浦の感想は「よけい気合が入りますね。」これを三浦のサービス精神ととるか、本当に南野陽子が好きなだけなのと考えるかは若干判断に苦しむところといえるだろう。さらに、南野さんもノリのいい方で、本当に三浦に向かって優しくかわいらしく「ふぁいと」と声をかけると、三浦は(失礼ながら)完全にやけきって右腕を力づよくあげて応えると。もう馬鹿馬鹿しい、勝手にやっぺいなさい。

pm8:49 そして投了図以降対局に選ばれたのが、なんと去年の名人戦第三局である。画面にもチラッと映ったが、三浦が何かを指そうとして時間切れで指せずに頭を抱えるのが終局シーン。三浦のこの対局後の落ち込みようといったら尋常じゃなかった。私も当時記事に書いたが、終盤羽生に大きなミスが出たのだが三浦が勝ちを逃し、また最後の羽生の手が疑問手だったのだ。三浦にとっては本当に惜まれる将棋だった、その三浦にとっては悪夢のような将棋をよりによって選ぶとは、スタッフもちょっとしたサドである。

pm8:52 対局開始。対戦相手は演歌歌手の香田晋さんである。有段の実力者とのこと。もっとも、はっきりいってこれは香田さんにはかなり酷だ。この投了図以降については、三浦も感想戦でしっかり調べており、羽生が最善を尽くしても実は将棋模様の長い将棋になっていた可能性が高いのである。いくら、脳内将棋でも、ほとんど香田さんに勝つチャンスはないと思う。はっきり言って、香田さんハメラれた感じ? ただ、香田さんは残念ながら三浦の王手に対して三連続で逃げ方を間違えてしまう。最初は気の毒だと思って見えていたが、正直3番目のところでは、「間違えるー」と酔っぱらいは思ってしまったことをここに告白する。香田さんは期待を裏切らなかった。香田さん、本当にごめんなさい。



pm8:57 3度目の過ちで香田さんが見事に攻めの要の銀を抜かれてしまう。苦しむ香田さんをよそに三浦は余裕の笑顔。神吉の「南野さんのプロマイドを見て喜んでいるのでは」というツッコミが入るものの、何を言われても三浦の笑いは止まらない。脳内対局しているのに。まあ、プロは凄いですよ。以下順当に勝ち。

pm9:04 対局終了後。三浦「これで名人戦のこともすっかり忘れられそうです。」そんな訳はないのだが、こんなことを言う三浦は本当にいい人である。えらい。「いい正月が向かえられました。」と。勿論、最後までにやっけばなしであった。

pm9:05 三浦が控え室で、右肩にシップを貼って休んでいる図。45度を見つめ続けて疲れたという意味か。これ、絶対にスタッフにやらされているだろ。何でも言われたことをやらないください、三浦先生。そして、バックに流れるのは、無論、南野陽子のアイドル時代の歌声なのだった。というのが、本映画のエピローグである。

おひさです。

最近、将棋を観てはいたものの、今ひとつブログを書くほどのパワーがなかったのですが、日曜日のNHK杯木村 vs 山崎の感想戦をみて、また筆をとりたくなった次第です。この件については、twitter 等でも結構言及している人が多くて、なんでこんなに将棋って楽しいんだろうと改めてつくづく思いました。将棋は最高の頭脳勝負であり芸術的営為ではありますが、つまるところ、その魅力というのはギリギリのところに出てくる人間のありのままの姿の尊さに尽きるのではないのでしょうか。そういう魅力を感じることについては、どんな将棋ファンも棋力には一切関係なく平等なのであります。木村さんのボヤキ節をニヤニヤしてながめながら、そんなことを考えておりました。つまらぬ前置きが長くなりました。相変わらずくどい性格は変わらないようです。

将棋は、後手木村の 8五飛戦法 (最近木村さんは一手損角換わりをやめちゃったの?) に対して山崎が自身の山崎流で対抗する形に。そこから山崎が一見相当無理そうに見える強襲をかけたのですが、それがズバリ決まって山崎大優勢に。後は、山崎がどう着地するかというだけの展開に。ところが、そこから山崎がもたつき迷走して、かなりおかしい感じの局面になったのですが、結局山崎が勝ちきりました。一気に殺してくれれば、木村も諦めがついたのですが、きわどくなったために返って悔しさが倍増したのが、ボヤキの伏線になったわけであります。我々の世代のファンにとって、「ボヤキ」の大家と言え、石田和雄先生をおいて他にいらっしやりませんが、木村さんをその正統な継承者として、ここに勝手に認定します。いやはや、ボヤくことボヤくこと。

ボクはバカだなあ。

そうか、悪魔を呼び込んだようなものか。

(北浜) 木村先生らしいかと。

いや、らしいけど、やられちゃしょうがないねえ。これじゃ。

もし、(自分が) こう指していて (山崎に) 何もなかったら、ちょっとつらいんだけど。

(山崎) いやっ、(何も) 考えてなかったんですけど。

そうなんだよなあ。

そういう人だと思ったんだよなあ。

考えてないと思ったですよ。

これで何もなかったら、おうちに帰って泣きますよ。

おバカちゃんもいいところですよ。

呆れました。

(北浜) でも、強い手だと思いましたけれど。

いや、弱い手ですね。気だけは強かったという。

ああ、ひどいなあー。

こうなれば、私でもいい勝負ですよ。

接待もいいところだよねえ。

ひどいねー。

寝てた方が良かったということですよ。

泣きそうですけど。

(北浜) こんな変化もあるかなと解説で気楽で言っていたんですけども。

私も解説がよかったよ。被害者だからねえ。

ひどいよ。どうせ温泉気分でやっているんだと思いましたよ。

もうやけっぱちで。

(山崎が角打ちの両取りを見逃す手を感想で指して、それが木村が指摘すると)

(山崎) ウッカリです。

読んでないねえ。オレを悔しながらそうしているのかな。

ひどいねー、そう打ってくれよ。

相当見えてないそぶりだから。

でも、いい手がなくて。神は私を見放したと。

(本譜でも実際に山崎が角による両取りをウッカリする手を指してしまい)

場を盛り上げようとしているんじゃないか、この人はと。

大丈夫かよと思ったけど。

(山崎) ウッカリですよ。

そう、ウッカリしているんだよねえ。

一瞬その気にさせて。

ひどいよね。

二重のショックですよ。

(最後山崎が木村がこうしていれば自分が負けだったかもしれないと指摘して)

いや全然(それじゃ)大したことないとワタシは見たが。

結局いい勝負にされて負けちゃうんだよね。

(と実際に検討してみたら、実は木村に絶妙の香打ちがある事が発覚)

あっ、香車がある！

(山崎) 負けかもしれないですね。

ほんとかよー。

悔しいねえー。

いやぁ。泣きそうですけど。

と、綺麗にオチがついたところでお開きになりました。

木村さんに、何とかしてタイトルを取らせてあげたいと思うファンが従来以上に激増したであろうことは言うまでもない。

Merry Christmas !

朝日杯の対局が連日行われているが、本日の木村 vs 佐藤和俊は千日指し直しの壮絶な戦いとなった。特に指し直し局は名局かつ名実況 (担当銀杏記者) で、将棋ファンにとって素晴らしいクリスマスプレゼントになった。

### 朝日杯中継サイト

[木村一基八段 - 佐藤和俊五段 \(木村一基八段 - 佐藤和俊五段 \(指し直し局\)\)](#)

終盤で千日手となり、両者最初から手一分将棋。(以下コメントは全て銀杏記者による。)

初手から1分将棋で秒読みというのは、記者も初めての経験。不思議な感じがする。

千日手局は、先手木村で後手佐藤のゴキゲン中飛車になった。後手の佐藤が二手目にいきなり 5 四歩としたのが駆け引き。これは普通に 3 四歩だと 6 八玉の「ゴキゲン封じ」があるためである。以下普通のゴキゲンの形に。

これで普通に戻る。現代将棋は2手目、いや、初手の段階から駆け引きがあるのだ。

木村は 7 八金方の再流行の対策を採用。本譜のように、先手が馬を作る形になるのが定跡手順なのだが、それでも先手有利ではなく、後手も十分に指せて勝率もむしろ良い。現代将棋の特異な感覚を象徴する形である。

先手は馬を作ることに成功。しかし、不思議なことにこの局面は先手の8勝16敗(9筋の端歩の突き合いがないものも含む)とダブルスコアになっている。

馬を作ったものの、後手に2筋を押しえられるのも大きいということだろうか。不思議な局面ではある。

銀杏記者は、このように千日手局でも、少しも慌てることなく将棋の内容、現代性についてしっかり触れながら実況を進めていく。

指し直して両者最初から一分将棋なので、「トイレ問題」も発生する。それをしっかり実況しているのが実に面白い。

佐藤が席を立つ。1分将棋では一番の決断。特に銀沙の間はトイレから遠いだけになおさらだ。

10数秒後、木村が指す。そして、木村も席を立った。

こちらは1分将棋での手筋。自分は時間が切れるリスクが少ない。

佐々木三段は初めての経験だったのだろう。「読んでいいんですか」と記者に聞いてきた。もちろんOKだ。

木村が指して、40数秒後に佐藤が戻ってきた。席に着いたときに「50秒、1、2、…」と佐々木三

段。

佐藤の勝負手（？）は成功した。

生対局ならではの。結果的に成功はしたが、佐藤が帰ってくるのがあと十秒遅れていたらジ・エンドだったわけである。なんともスリリング。

さらに、途中で再度千日手かという局面も発生。大変だ。

同飛 4五銀 3四歩 同銀 3八飛…。ん？また、千日手か？？

クエッション・マークに実況者の心の叫びが聞き取れるではないか！

さらに、佐藤の猛攻を木村がいかにもらしいギリギリの受けで凌ぐというすごい展開になったのだが、ここで銀杏記者の名言が飛び出す。

(木村の) 真剣白羽取りの現場を見ているかのよう。

すさまじい応酬が続いている。

これを後で考えて書いたのではなく、秒読みの最中でコメントしているのだ。両者の鬼気迫る対局につられて、銀杏記者にも将棋の神が舞い降りて憑依した一瞬と言えるだろう。

その後も迫力満点の攻防が、いつ果てるともなく繰り広げられる。記録係も大変だ。

記録係の佐々木三段も疲れの色が見え、秒読みの声がかすれている。

記者は、頑張れと心でエールを送る。

壮絶な現場の雰囲気如実に伝わってくるではないか。

最後は視力を振りしぼって佐藤が勝ちきった。第二局開始予定時刻をはるかにこえてしまっている。

2回戦があるため、木村が佐藤に気遣って感想戦はほとんどなかった。1九角成 3四飛のあたりは先手が良かったと木村は駒を片付けながら話してくれた。5二金打でとも。また、佐藤は6六とでは6六飛が良かったと話した。

悔しいはずの木村だが、決して相手に対する配慮を忘れない。またしても木村の勝負師としてはマイナスかと思え目ほどの優しさが自然に発露した瞬間である。そして、それを淡々ときちんと伝える銀杏記者。佐藤はこの勢いをかって、二回戦でも深浦を破ってベストフォー進出。大したものである。なお、その対局の実況も銀杏記者が担当している。

名局があり、その素晴らしさを生の厳しい状況で過不足なく伝えうる実況の名人芸が助けた実例といえるだろう。

ファン待望の勝又清和六段（もはや「教授」という呼称が定着しているので以下そう表現させていただく、教授といえは将棋の世界では坂本龍一ではなく勝又清和、これ常識）による「将棋世界」の連載が再開されて半年が経過した。

前回の連載は名著「最新戦法の話」にまとめられている。そこではタイトル通りに、現代将棋の最新形について体系的に歴史をふまえて解説し、また現代将棋の革新的であると同時に素人には分かりにくい性質を一般将棋ファンに分かりやすく啓蒙解説していた。

今回も、やはり現代将棋を勝又流に斬りまくっているわけだが、前回とは異なる部分も現れてきている。一番印象的なのは、前回はいくまで現代将棋の最新の歴史空間の内部での歴史を叙述していたのに対して、今回はさらに歴史を遡って、現代将棋とかつての将棋の接点も探ろうとしている点である。

初回で 3 三角戦法を叙述するにあたって、勝又教授がまず例示するのは、「升田幸三の 2 五桂ボン」である。升田が現代を先駆けする指し方をしていたのを、当時の升田自身の観戦記も紹介しながら解説していて、読み物としてもとても面白い。この回に限らず、現代的な指し方の先駆けとしての升田が毎回のように紹介されていて、現代将棋を語りながら、同時に升田将棋の革新性を現代の目で再発見するという二重構造になっているのだ。

あるいは、全三回の労作となった「相掛かり編」の中心・目玉となるのが、中原永世名人へのロングインタビューである。「中原囲い」などが生まれた経緯を御本人に語らせつつ、中原将棋の誰にも真似の出来ない特異性・独創性も自然に浮かび上がるという仕組みである。

つまり、前回はいくまで現代将棋という限られた歴史性の中での話だったのが、今回はかつての将棋との接点や、あるいは現代将棋でさえ乗り越えられていない偉大な先人たちの独創性にも照準を当てており、歴史を語るそのまなざしの射程がより遠くより広がっている。歴史物語としての、分厚さ・重層性が前回より増しているのだ。勝又教授が、歴史学者としてより本格的な講義を始めたという印象である。

今回の連載で、今までのところ個人的に一番印象的だったのは、11月号の「自陣飛車」である。特別な最新戦法の話ではないし、テーマとしては地味なのだが、勝又教授の歴史を取り扱う包丁捌きがとりわけ鮮やかだからである。

まず、現在の将棋を題材に、自陣飛車というのが現代将棋でいきなり角などを大駒交換する将棋で、大駒の打ち込みを防ぎために重要な役割を果たすことを説くことから始める。

そして、次には歴史を遡って升田の自陣飛車を解説する。次には、懐かしい「塚田スペシャル」の定跡講座をしながら、その最終対抗策としての自陣飛車に言及する。さらに、今度は現代将棋に目を戻して、現代将棋の申し子、渡辺竜王の自陣飛車を例示するといった具合である。

つまり、自陣飛車というテーマをもとに、勝又教授は現代、過去、近過去、現代と、めまぐるしい歴史の旅に読者をいざなうのである。勝又教授ならではの該博な知識に基づいて、広大な将棋の歴史空間を縦横無尽に駆け巡るのだ。読者は眩暈さえ覚えながらも、勝又教授のタイムマシーンに乗車を許されて夢のような旅行を気軽に体験できるというわけである。

将棋の世界というのは、過去から現在に至るまで、膨大な叢智の豊かな倉庫である。その魅力を一般人が知るためには、どうしても優秀な「語り手」が必要である。どのような歴史も、それをうまく語る人間がいなければ、その生き生きとした姿を我々の前に現してはくれない。我々は、勝又教授という、最強の歴史の語り手をもっていることに感謝すべきだろう。

将棋の駒の中で桂馬だけは異質なところがある。駒の効きからして変則だし、とてつもない速度で相手陣に攻め込むと思えば、勢いあまって相手の歩の餌食にもなる。相手に避けようのない両取りをかけることも出来るし、いきなり何の手がかかりもないところから相手玉に王手をかけて詰ましてしまうことも可能だ。将棋盤の81枰の小宇宙にあって、桂馬は隙あらばその秩序を乱そうと機会をうかがっている悪戯者、トリックスターである。

勝又清和教授による将棋世界連載「突き抜ける！現代将棋」は分かりにくい現代将棋の最前線をファンに分かりやすく解説しようとする試みである。ただ、時々一つのテーマを決めて将棋の歴史を縦横無尽に駆け抜けながら現代将棋を照射しようとする実験的な試みもしている。「自陣飛車」の歴史はたいそうスリリングだったし、そのことについては[記事](#)にも書いた。

今回は「桂」という駒にスポットライトを当てた3回にわたる大作だった。(2010年8月号から10月号)語り部勝又はこんな感じで語りははじめる。「昔、升田幸三というヒゲの先生がおってな・・・。」聞く者をワクワクさせずにはいない魅力的な導入部だ。升田は従来単なる素人戦法とみなされていた矢倉におけるスズメ指しをプロ的な感覚を加えてアレンジし、見事に立派な作戦として成立させたのだ。以下、矢倉、通常角換割り、一手損角換わり、8五飛、振り飛車、右玉とミレニアムと豊富な実戦棋譜を引用しながら桂が果たしてきた役割を語っていく。

でも勿論それで終わりではない。次に語り部勝又はこう語りだす、「それでは次に今までの名人たちの桂の名場面を話してみようかな・・・」。升田、大山、谷川、米長、羽生、佐藤、丸山、森内。歴代名人の桂の名シーンを語りながら、そのまま名人戦のミニ概観をするという離れ業を勝又はやっている。過去の名人戦の名シーンがパノラマのように読者の頭の中に浮かび、それぞれの時代の将棋ファンが感慨にふけったり、また新たな将棋ファンが歴史を学びつつ、いかに桂という駒が重要な役割を果たしてきたのかを自然に納得してしまう。名人戦の歴史、各名棋士の歴史、各戦法の歴史が縦横無尽に交錯しつつ渾然一体となって「将棋の歴史」全体を形成しているのを読者は目のあたりにするのだ。

名人戦の桂では個人的には丸山が谷川相手に放った4五桂が一番インパクトがあった。他にも名「桂」の連続だが、各棋士ごとに微妙に個性の違いがあるような気がするの面白いところである。それと桂を捨てて飛車ほ成りこむ「ポンポン桂」を行方が親友の藤井相手にやっているのも、なんだか「らしくて」おかし。

しかし、それでも語り部勝又はやめない。「桂といえば誰か忘れてないかな、中原先生にわしは直接お話を伺ったのだよ・・・。」勝又教授得意のプロ棋士直接インタビューである。その前の部分の谷川と羽生の竜王戦直接対決の歴史だけでも十分魅力的なのだが(谷川の竜王戦での7七桂はやはり個人的には将棋の歴史上最高の桂だと思う)中原誠のインタビューは、桂についてだけでなく多岐の話題にふれていて歴史的にも貴重である。大山と戦う上での心境、棋士が対局している際の肉体心理状態などについての中原の発言は大変興味深い。特に第33期名人戦第七局の大山との将棋は素晴らしい。中原と大山が盤の前で言葉を交わしあいつつ、中原が桂を駆使してうまく攻めれば大山が驚異的な強靱な受けで譲らない。中原がじっと端をつく9六歩が決め手になったのだが、これは羽生善治が得意とする「手渡し」の名手だと私は感じた。いつか「手渡し」の歴史についても書いていただきたいものである。この将棋の棋譜は「盤に並べたい名局」として10月号に完全な棋譜が掲載されているので並べてみることをお勧めする。この将棋を良く知っている方も初めての方も。

また、中原の桂と谷川の桂の比較も面白い。勝又が「谷川流の桂は尖った、一気に攻めつづす、駒を取る桂



ですね。中原流は攻撃の拠点となる桂が多いような・・・」と指摘すると中原本人が「盤面占拠の桂」と評されたことを述べている。中原が谷川相手に入玉含みを目指す桂がそれこそ両者の個性の違いを象徴していると感じた。

それにしても勝又の将棋の知識の該博さと打てば響く聞き手ぶりは凄すぎる。

中原　そうですね。この将棋もそうだけど、桂の攻めだとうまくいった記憶があるね。たとえば最初の名人戦の、ええと、何局目だったかな・・・。

(勝又) - - 4局目の　8六桂ですか？

中原　それだ、よくわかったね。

この三ヶ月の講座の内容は大変内容が充実していて濃密なのだが、それでも語り部勝又は名残惜しげにこう言いたそうである。「いや、まだまだ話したいことは山のようにあるのだけれども、キリがないので仕方がないからこれくらいにしておこう・・・。」

最近、村山慈明「ライバルに勝つ最新定跡」、「豊島将之の定跡研究」と最新定跡書の紹介をしてきた。となるとまだ書籍化はされていないが、勝又教授の講座にもふれておかなければ片手落ちだろう。

最新の 4 月号は「パスは進化のエンジン」。基本時には最新形を随時取り上げてアマチュアに分かりやすく解説するという講座なのだが、時々意外なテーマを設定して、現代将棋だけでなく過去の名勝負も豊富に引用し、将棋の歴史を縦横無尽にかけぬけるスリリングな論考をしている。例えば「自陣飛車の歴史」や「桂馬の歴史」については、私も記事に書いて紹介した。

今回は、パスとか手渡しという、地味だけれども、将棋において重要で、ある意味本質的な重要性を有するテクニックについて論じている。まだ発売されたばかりなので、内緒紹介を「予告編」風にやってみよう。

羽生善治と「将棋のほとんどが悪手である。指さないほうがいい手のほうが多い。」と言った。プロ将棋では、局面が煮詰まって有効な手がなく、パスや手渡しをした方がいい場合もまま生じる。そして、そういうパスが高いレベルのプロの将棋で勝敗を分けることも少なくない。但し、そういう手は我々アマチュアには分かりにくい。

しかし、ご心配なく。勝又清和教授が、その該博な将棋知識をベースに分かりやすく我々に解き明かしてくれる。まず、将棋と囲碁やチェス等との比較、あるいはコンピューター将棋の思考をもとにゲームにおける「パス」の本質的意義を説明する。

そして、竜王戦第六局で渡辺明が角換わりの後手で巧妙に用いた「パス」の手法を具体的に解説する。しかも、これを読めばあの分かりにくい将棋についても明晰に理解できるようになるだろう。

さらに、現代の将棋から「パス」が有効に機能した典型的な将棋を取り上げ、藤井や羽生の先見性や飯島の用いたパズルのような芸術的な手順をひもとき、興味がつきない。

それに留まらず、過去に遡り、大山のパスにまで言及し、しかも大山のパスと羽生のパスの性質の違いまで考察してみせる。

読み終えた読者は、いつの間にか、具体的な将棋の知識を習得しながら、自分の将棋を観る目がいつの間にか格段に深まっていることに驚くだろう。

といった感じだが、今回に限らず、単なる将棋の具体的説明にとどまらずに、そこに知的な切り口で論理的な分析を加えるので、読み物としてとても面白いのだ。それは、普通に流行形の解説を行っている時と同じである。最新定跡書は当然将棋が分からなければ理解できないが、勝又の講座は、極端な話、符号を全部読み飛ばしても、読み物として成立していると思う。だから、「観る将棋ファン」が、現代将棋の思想を理解するためには最適だと思う。勿論、基本時には具体的な将棋の棋譜を広くきちんととりあげていることは言うまでもない。

以下、最近半年の内容をメモしておく。これだけでも、この守備範囲の広さに驚く。なお、この講座とは別の 2 ページ見開きで毎月連載している「勝又教授の勝手に戦法ランキング」も、最新流行を押さえる上で見逃せない。

2010/11「注目の最新形をチェック」

広瀬流穴熊の特徴分析、藤井矢倉講座、石田流最前線、阿部健治郎インタビュー (藤井、三浦の二人の兄弟

子の話が興味深い)

2010/12「ゴキ中対策と角換わり問題」

ゴキゲン対策最前線、角交換の簡単な歴史紹介と最新形。阿部健治郎インタビュー

2011/01「相居飛車 30 年戦争」

佐藤康光インタビュー、鈴木大介インタビュー、矢倉・相掛かり、一手損のレッスン。この回から「教授・生徒」の対話形式を導入。各形の現況分析だけでなく、その本質の解説・歴史講義にもなっている。特に角換わりの解説が一手損との比較も含めて勉強になる。

2011/02「一手損のパラレルワールド」

「一手損」という現代的な将棋の講義。通常角換わりとの比較による本質、具体的な戦法の変遷から他の現代将棋との関連などを縦横無尽に論じている勝又らしい回。「パラレルワールド」というのは、一手損の世界が0手損の世界と似ている様で全く異なる異次元世界であることを意味する卓抜な表現である。

2011/03「後手番のメリット」

3 三角戦法と横歩取りの講義。特に横歩取りについては、単なる最新形紹介にとどまらず、その歴史から紐解いた上で、各形の基本コンセプトを解説しているので、分かりにくい横歩取りの将棋の思想がアマチュアにも理解できる。松尾流 5 二玉の解説も分かりやすい。さらに、後手、一手損といった現代将棋のキーワードと関連させた考察も欠かさない。

2011/04「パスは進化のエンジン」

上述した通り。

この勝又講義というのは、ちょっと大袈裟に言うとフロイドやラカンの精神分析講義のようなものだと思う。当時、少人数の聴衆を相手に行われて、理解できる人間も多くはなかったが、現在ではその革命的意義が認知されている。

勿論、私も「理解している」とはいわない。あなたも講義に参加して歴史の証人になってみてはいかが？

芹沢博文が逝った時、色川武大がいい追悼文を書いていた。色川というより、「麻雀放浪記」の阿佐田哲也といった方が通りがいいかもしれない。ついでに言うと、西原理絵子の「まあじゃんほうろうき」も、それに勝るとも劣らぬ名作だ。何が言いたいのか、自分でも分からないまま書きはじめている。

そう、真部はちょっと芹沢を連想させるところがあった。あんなにメチャクチャじゃない芹沢、小型の芹沢。

棋士らしからぬ教養を兼ね備え、将棋界に対して一家言を持つ。でも、そんなことが、いったいなんだっていうんだ。棋士はあくまで将棋指し、社会的視野の広さや、教養や、常識センスもなんだっていうんだ。結局は、将棋指しという存在からの逃避じゃないか。そんな憎まれ口を叩きたくなる。

でも、芹沢も真部も、人間的にはどうしても気にならずにはいられない存在だった。人をひきつけずにはいられない何かを持って生まれてきている。ハナがある。才能も、世間一般の凡人どもと比べたら、腐るほど持ち合わせている。なろうと思えば、多分たいていのことはこなせるだろう。芸術家、大学教授、何かの家元、真部の場合だったら、男に使う表現じゃないが、あの美貌(という表現が使いたくなる若き日のカッコよさだった)を生かした売れない役者。でも、二人とも将棋の名人にだけはどうしてもなれない。将棋界というのは、そういうどうしようもなく残酷な世界である。だから面白い。他が全部ダメだとしても、将棋さえ強ければ、あとはどうとでもなる。わかりやすすぎる世界。そういう猛獣の檻に、才人が放り込まれた悲劇。

私が青少年だったころ、真部や青野は、上昇気流に乗って破竹の勢いだった。真部は、なんと言ったって、あのかっこよさで、しかも理路整然。今では、棋士も随分スマートなイメージになったが、当時においては全く異色の存在だった。まぶしかった。でも、A級の壁にぶちあたる。理知理詰めだけでは、どうしようも出来ない世界。その後、真部はあきらめるのも早かった。

やはり真部同様まぶしい存在だった青野も、壁にぶちあたる。しかし、青野は全然諦めなかった。A級にだって歳とってから復帰したし、年取ってから強くなったと若手に認められた。多分今だって、全然諦めていないだろう。若手何するものぞという気概たるや凄まじく、闘志満々、衰えを知らない。加藤一二三にも一歩も引けをとらない。本来、棋士は青野のようであるべきなのだ。真部には、青野の執念がかけていた。執念を持ち続けるには、あまりに頭がよすぎ、あまりにスマートで、神経が細やか過ぎた。やはり、多分職業を間違えた人なのだ。

若い棋士や奨励会員たちが、真部に対して心のこもった追悼を、ウェブ上に書いている。大先輩に対する、素直な尊敬心が失われていない。マツタク、なんて奴らだ、本当にいい奴らだ。島朗の言うように、棋士はいまだに「純粹なるもの」のままである。しかし、私は彼らに対して、決して真部のようにはなるなよ、とこっそり思う。

昨日の夜、真部の訃報を聞いた。無論、私は、真部と縁もゆかりもないし、正直に言うが、近年の真部には、完全に興味も関心も失っていた。しかし、昔のことが急に色々思い出されて、自分の心が揺れ動くのをどうすることも出来なかった。人の死というのは不思議なものである。小林秀雄の言うように、急に形がはっきりしてくる。

次に揚げるのは、真部の絶局の投了図である。これは、正真正銘の投了図である。本当にこの場面で、真部は投げた。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |        |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--------|
|   | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |        |
|   | 香 | 桂 |   |   |   | 金 |   | 桂 | 香 | 九 △真部角 |
|   |   | 飛 |   |   | 金 |   | 銀 | 玉 |   | 八      |
|   | 歩 |   | 歩 |   | 歩 | 銀 | 歩 | 歩 |   | 七      |
|   |   |   |   | 歩 |   | 歩 |   |   | 歩 | 六      |
|   |   | 歩 |   |   |   |   |   |   |   | 五      |
| 角 |   |   | 歩 |   | 歩 |   | 歩 | 歩 | 歩 | 四      |
|   | 歩 | 歩 | 銀 | 歩 |   | 歩 | 桂 | 銀 |   | 三      |
|   |   |   |   |   |   |   | 金 | 玉 |   | 二      |
| ▼ | 香 | 桂 |   | 金 | 飛 |   |   |   | 香 | 一      |

棋譜も人生も、汚してしまう前に去ったというような、おざなりな月並みは言わないでおくことにしよう。こんな声が聞こえてこないだろうか？

ワタシだってプロなんだから、最後までボロボロになるまで指さなきゃいけないことくらい知ってるさ。

でも、もともとあんまりそういうのが性に合わんのだよ。

わるいけど、失敬してお先にいかせてもらうよ。

ちょっと困っている。軽い気持ちで真部さんの追悼めいたことを好き放題書いてしまったのだが、カウンターを見ると、このブログはじめて以来の多くの人に読まれてしまったらしい。しかも、いまだに検索で見に来る人が跡を絶たない。懺悔の気持ちをこめて、真部さんの残した本について、少しはまともなことを書いて紹介しておこうと思う。ただ、読み返して色々なことを感じてしまったので、やっぱり少しは余計なことを書いてしまうかもしれないが・・・。

「将棋論考」で扱った升田将棋が、30局掲載されている。冒頭のエッセイも、升田に関係ないものもそのまま収録されていて読んでいて楽しい。また、書き下ろしの「升田幸三論」も冒頭に収められている。貴重な写真も満載である。

もともと「将棋論考」からの転載なので、升田の名局もあれば凡局もあり、勝ち将棋負け将棋もある。真部は客観的に冷静に升田将棋を分析していて、棋譜に升田を語らせようというスタイルだと思う。

やはり、中でも何局か収められている対大山戦が白眉だろう。完全な将棋ばかりというわけではないが、双方のとてつもない腕力を感じて、現代的な将棋とは全く感触の異なる、押したり引いたり重量感のある将棋である。現代将棋の序盤戦術の洗練や終盤の正確な技術は別として、ねじりあう力のようなものでは、現代でもこれだけ指せる棋士はなかなかいないんじゃないだろうかとシロウトながら感じてしまった。

他にも、対加藤一二三、対内藤などの超乱戦の将棋も面白い。特に对有吉戦の、青天の霹靂といってもいい序盤作戦は、いくら佐藤康光でも真似できないだろうという凄まじさである。

豪快なイメージが強い升田だが、実は強靱な受けが持ち味だったとか、緻密な序盤の組み立てとか、遠見の角に代表される角使いの名手だったとか、升田将棋の具体的特質が、自然に分かるようになっている。

また、真部自身も若いころ升田の将棋の記録を多くとったそうで、そのエピソードも貴重である。

各章の冒頭のエッセイも、例のディーブプルーとカスパロフの対決のテレビ特番についての詳細な解説や、木村義雄が具体的などという読み方をしていたかの紹介なども、興味が尽きない。

その中でも、やはり「芹沢」の名前が何度も出てきて、こんなくだりがある。

それがなぜ、急に失速し、無頼とも言える生き方に傾いていったのだろう。

曰く酒、曰く博打、その他うんぬん、様々な憶測があった。

しかし、これらは意味がない。

なぜ、酒、博打に溺れていったかが問題だからだ。

これはもちろん憶測に過ぎないが、升田、大山と戦いこの両者が持つ特別な何か、それは芹沢にはどうしても身につけることが出来ない差異、頭脳明晰な芹沢は明敏なるがために、それを察知しコンプレックスを抱いてしまった、とは考えられないだろうか。

やるせない気持ちが酒と博打に救いを求めたのではなからうか。

どうも、真部自身のことを芹沢にたくして語っているような気がして仕方がないのは、私の悪い深読み癖なのだろう。

それと、坂口安吾の話がよく出てくる。安吾に言わせると、囲碁(安吾は将棋は観戦するだけで指さなかつ

た) くらい文士の性格の隠せないものはないそうだ。

この本では紹介されていないが、例えば小林秀雄。ああいう煮ても焼いても食えないような、鋭利で攻撃的で独断的な文章を書く人だったが、実は囲碁ではまったく定石通りの一切ケンカをしないタイプだったそうである。安吾は、小林自身の本質がそうだったし、文章に騙されがちだが、実は常識派だったのだと断じている。

逆に、将棋指しの書く文章というのも、実はその人の人間性を隠せないものではないかと思う。真部は、ああいう派手な外見だったし、芹沢同様無頼派風なところがあつたらしい。しかし、文章から受ける印象は、きわめて穏やかで一種の人のよささえ感じてしまう。升田を語っても、よくありがちな主観を押し付けるようなスタイルとは一線を画する、きわめて対象に即した客観的な態度で、人によってはそれが物足りないくらいだろう。

真部の透明感のある文章を読み進めながら、無頼派風の生活は彼の本意だったのだろうか、また単に芹沢風を装っていただけなのではないだろうか、などという相変わらずの根拠なき憶測をいじめてしまった。とにかく、真部の文章を読んでいると、心が澄んでいく感じがした。

先手郷田で、後手糸谷の一手損角換わりになり、郷田の攻めを完全に切らした糸谷が快勝。早見えで定評のある郷田を圧倒した糸谷の大物ぶりが際立った一局だった。勝ちになってからも、ほとんどノータイム指しに近く、郷田を押しきってしまった。

糸谷の奨励会時代に幹事をしていた畠山鎮七段が、色々エピソードを紹介していた。とにかく、元気いっぱい落ち着きのない子だったそうである。

有名な話だが、糸谷が相手の駒をとって、それを相手の駒台にエイッと叩きつけてしまったことがあるという。対局をとめて手をあげて幹事に裁定を頼み、井上幹事が糸谷の反則負けにしたそうである。

かわいいと思うのは、ちゃんと手をあげて裁定を依頼するところである。別に、相手の駒台から黙って自分の駒台に移してしまえば、マナーは相当悪いにしても厳密には反則ともいえない気もするのだが。元氣はいいが素直な子供だったということなのだろう。

ところで、対局以上に面白かったのが感想戦。

郷田 全然考えてくれないからねえ。

図は、郷田が本譜とは別の手順で攻めていたらどうなるかという局面だが、ここで糸谷が即座に示したのが 4二桂。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
|   | ▲ | 桂 |   |   |   |   |   | 桂 | ▲ | 一 |
|   |   |   |   |   |   | 桂 | ▲ | 王 |   | 二 |
|   |   | 銀 |   |   |   |   |   |   |   | 三 |
| 三 | 歩 | 歩 | 歩 | 歩 | 馬 |   | 歩 | 歩 | 歩 | 四 |
| 歩 |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 五 |
|   | 歩 |   | 歩 | 歩 |   |   | 歩 |   | 歩 | 六 |
|   |   |   |   | 歩 |   |   |   |   |   | 七 |
|   |   | 金 | 銀 | 金 |   |   |   |   |   | 八 |
| ▽ | 香 | 桂 | 玉 |   |   |   |   |   | 香 | 九 |

郷田 桂ですか。しかし、桂はどうかなあ、こっちがいいような気がするけど。これは、いいんじゃないかなー。桂ならさすがにいいと思う、ちょっと・・・。

畠山 4二桂がすぐ出るというのが、将棋観の世代の違いですね。

具体的説明は詳しくはなかったが、桂をアッサリ手放して、ただ受けるというのが、郷田の世代には感覚的には抵抗があるということなのだろうか。一方、糸谷にしてみれば、4四歩と垂らされてから4一銀を狙われると困るので、とにかく黙って桂を受けておくしかないということのようである。

プロの場合は、やりたくても感覚的には指せない手、指しにくい手というのがあるようなのだが、感想戦全体を通して聞いていると、糸谷の場合は感覚にとらわれずに、仕方ない場合は指すべき手をアッサリ指すという違いなのかなとも感じた。



他にも、玉が 5五に出て来る「いかにも糸谷流ですね」(畠山) という手が飛び出したりした。

郷田 ちょっと感覚が破壊されるな。

とまで言っていた。

渡辺竜王よりさらに若い糸谷五段。将棋も人間もとても個性的で要注目である。

まあ、スポーツ紙なら、こんな感じの見出しなのでしょう。

NHK杯の場合は読み上げが入るのだが、もうそれを聞いているのももどかしいといわんばかりにパチリ。しかも、駒を豪快に叩きつける。

記録係が糸谷五回目の考慮時間に入りました。」と言っても、そんなことはお構いなしにすぐ指す。普通は一分間遣って慎重に検討するところだが、「もう、考えなくても、指し手はこれに決まっているでしょ」といわんばかりに。竜王が相手でも関係なし。

そして、上目遣いにチラチラ竜王の方を見やる。「羽生ニラミ」ならぬ「糸谷ニラミ」けである。羽生ニラミがほとんど無意識な集中力の発露だとしたら、糸谷の場合は、本当にストレートな闘志の現れ。相手を威嚇するというよりも、自分の指し手に絶対的な自信を持っていて、「どうだ」と相手の反応をみる。闘争的なものだけれども、真っ直ぐで混じりけのない心の在り様の表現だとすぐ分かるので、イヤミには感じない。早指しの棋士の場合、相手に早指しで飛ばされると意外に調子が狂うということも聞く。渡辺竜王も、もともと序盤は早いタイプだけれども、糸谷に負けずと飛ばしていた。竜王は、指し手以外の部分も意識的に考えるタイプなので、そういったことも考えていたのか、あるいは単に気合負けしないようにつられただけなのかは分からないが。もっとも、竜王がどんなに早指しで飛ばしても、糸谷はそれを上回る早さで返していて、結局は竜王が早指し負けせざるをえなかった。

今月の将棋世界の東西対抗戦にも糸谷は登場している。ここではもっと強烈な「糸谷ニラミ」の写真を披露している。まだ、NHKではテレビなので、あれでも随分遠慮しているのではないだろうか。

NHKでは、猛烈に勢いで一気に渡辺玉を寄せきる展開になったが、その渡辺が糸谷将棋を将棋世界でこう評している。

糸谷君の本質は受けた。

久保棋王もこういう。

ああ見えて糸谷君は粘りの将棋。

NHKの森内戦も、銀河戦の佐藤天彦戦でも、超手数をいとわずに、負けない将棋を指していた。今回は、そんな粘りを出す必要もなく竜王を撃破してしまったわけである。竜王に誤算があったとはいえ、間違えれば一気に持っていく力もある。

糸谷五段の場合、勝ちになってからも、ほとんど考えずに指す。「勝ちになったら慎重に腰を落とす」というセオリーも通用しない。相手にしてみれば、ほとんど考えずに負かされるのだから、同じ負けるにしてもこれはこたえるだろう。渡辺竜王も、最後の方は、心なしか頬が高潮しているようにも見えた。今までは、常に年上に挑む立場だったが、これからは糸谷や豊島といった、渡辺以上に現実主義でシビアな将棋を指す若手を相手にしなければいけないのである。

決勝の相手が羽生名人になるか丸山九段になるかは分からないが、どちらにしても楽しみである。決勝だからといって、一切指し方を変えてほしくないものだ。

最後に渡辺竜王の糸谷評をもう一つ紹介しておこう。この二人の対戦は、来月の将棋世界でも見ることが出来るのだ。

糸谷将棋は関西のというより、全棋士の中でもかなりの異能派。プロから見てもあの早見えはすごい。

戎棋夷説の maro\_chronicon さんから、昨日の記事にコメントをいただきました。対局地の大盤解説会に行かれたそうで、最終盤の様子を伝えてくださっています。コメント欄まで見てくださる方はあまり多くないのではないかと思いますので、改めてこちらに再掲載させていただきます。とにかく最高に面白いものから。

Posted by maro\_chronicon

6八玉 7九玉 1八香のあたり、対局地の大盤解説では、山崎と阪口が担当していました。ずっと、後手玉ばかり見て寄せを検討していても、王手飛車の筋があって、どうにも決め手が無い。そこに 6八玉が指されました。

阪口「これが指せたらアマ高段者というところですかね」

ところが、5五角が攻防の一手で、相変わらず先手の勝ちが見つからない。

で、ふと、

阪口「7九玉はいくらなんでもぬるいですか」

山崎「それは、、、」

阪口「ぬるすぎますかね」

山崎「、、、うーん」

ややあきれた、「そんな手、本気で考えてんのか、おまえ」という沈黙でしたが、そこで羽生が 7九玉と指した。

山崎「うーん、あ、良い手ですね」。場内爆笑。

それでもまだ寄らない。歩切れが痛い。

阪口「でも、こんなところに歩が、1八香とか」

山崎「あー、、、盤面を広く見た、というのはわかるんですが、、、そんなことばかり考えてるんですか。だからしょっちゅう逆転負けを、、、」

と言いかけたところで 1八香。

山崎「はい、妙手ですね」場内大爆笑でした。

何も言い足すことはありません。

ほんまに、関西人には、かないまへん、勝てまへんなあ。

何度もいいますが、関西の方を馬鹿にしているのではございません。森内と羽生の余人の伺い知れぬ対話に対するのと同様、関西人のお笑いのセンスに対して、限りない嫉妬をいただいているのでございます・・・。

最初にお断りしておきます。お二人の将棋の指し手についての解説内容を紹介する気は金輪際ございません。タイトルは「掛け合い」と遠慮した表現にしましたが「漫才」としてとても秀逸だったので、ここに記録に残しておこうと決意した所存でございます。なおかつ、お二人の役割周りも実に明確でございます、山崎=ツッコミ、深浦=-ボケに自然に成り、というよりは、深浦氏がどんどん追い込まれていきました。それでは、論より証拠、ハイライトをお目にかけてみましょう。

深浦 ズバリ、どちらを持ちたいでしょう？

山崎 いきなり？いきなりですか？でも、これ逆じゃないですか？やっぱり深浦先生の・。おかしいな、解説者というのは。解説をする人だと思ったんですけど。

深浦先生、いきなりジャブを入れようと試みましたが、黙っているような山崎氏ではありませんでした。まだまだ、この辺は深浦先生も余裕だったのですが。

深浦=羽生、山崎=渡辺をもって、ある手順を検討し、深浦が劣勢を認めてアッサリ撤回すると。

山崎 ご自分がタイトル戦を戦っていたら、絶対こんな簡単にあきらめないですよ。深浦先生は将棋界の中でも、諦めの悪さでは結構かなり有名なような。

早速、山崎のストレートパンチ炸裂しました。柔らかい口調で笑顔で言うので嫌味はないのですが、言ってることは超辛口です。

ある検討手順で深浦の手が止まると。

山崎 決して、このままで終わる深浦先生じゃないですよ。

はい、この辺りからはツッコミどころを山崎氏は寸分たりとも見逃さなくなっています。

深浦が山崎に対して渡辺戦の対戦成績を問う。

山崎 ここ数年勝っていないです。もう数えてないです。ちなみに深浦先生は？

深浦 私ですか。まあ私が10回やって7,8局勝ちですかね。

山崎 えー。(手をパチパチやるしぐさ、そして絶妙の間を空けてやおら言い放つ)それが言いたくて私に聞いたんですかー。(場内爆笑)そうですかー。

この切り返しセンス、深浦、言い返せず。

次は羽生の話題になり。

山崎 羽生さんと互角に戦っているのは地球生命体では深浦先生だけですよね。

「地球生命体」って。

そして、山崎が深浦に羽生と戦うコツをきく。深浦も、悪い気はししない様子で、羽生と谷川は神の領域で戦っている、しかし私がやるとたまに気の抜けたような手を指してしまう、一生懸命なのだけれど変な手を指してしまう、それで羽生さんの調子が狂うんじゃないですか、などと謙遜しながら誠実に説明する。

山崎　じゃあ勝つコツは変な手を指すということですか？

真面目に深浦先生が説明してくれたのに、台無しです。この絶妙な返しのセンスは是非見習いたい。(なんでだよ)

そして、さらに検討を再開し、深浦がある手を指すと。

山崎　確かに変な手ですねー。(場内爆笑)

今度は検討して山崎側の手番。深浦が、さあどうしますかと山崎に問う。山崎困った様子だが、その瞬間に絶妙のタスイミングでモニターから「パチッ」と指す音が。山崎もモニターをチラッと見ると。

山崎　じゃあボクは玉をあがりますねー。(場内爆笑)

深浦先生の攻撃不発どころか、笑いを取るのに利用されてしまいました。

山崎の深浦に対する口撃はとどまるところを知りません。

山崎　いやっ、今後の将棋界を生きてゆくために、先ほどは深浦先生にゴマをすっておこうと思っただんです。

山崎　もう二枚取ろうということですか。欲張りですねー。もう一冠で十分なんじゃないですか。

深浦先生、言われっぱなし。サンドバック状態。それでも人のよい笑顔で耐えられている深浦先生のお姿が尊いです。

無理やり深浦に詰まされる順を選ばせたり、もう詰みがわかっているのに最後まで指させようとしたりして。

山崎　で？

深浦　もうカンベンしてください。

でも、たまには山崎も深浦先生の手をほめます。

山崎　1七桂というのは、いい手ですねー。

深浦　すごくウソくさい・・・。

山崎　いやいや、ボクは人をほめるのが苦手なんですよ。

しかし、これもネタ振りに過ぎませんでした。さらに他の検討手順を調べていて。

深浦 じゃあ得意の 1 七桂で。

山崎 一度味をしめたから。でも、先ほどのような感動はちょっと二度目はないですねー。

深浦 なんか、きびしいですねー。

山崎 いい手なんですけど、あまり心には響かなかったですね。

深浦 なんかケンカを売られている気が・・・。

こうして文章にするときつく感じられるかもしれませんが、お二人の表情もやわらかで、場内も笑いに包まれっぱなしなのでした。

総じて深浦さんの純朴さ、人の良さが感じられました。山崎さんの猛口撃を、いやな顔一つせずに、完全に受け止めてあげていました。

一方の山崎さん、大盤解説においては、もはや竜王・名人クラスにまで達していると感じられました。本気で頑張れば、現役七冠、あるいは永世七冠も決して夢ではないでしょう。

山崎さんばかり目立ちましたが、冷静に考えると深浦さんが黙ってパンチを受け続けたからこそそのことで、MVP は深浦さんでしょう。

って、何の分析だよ。

豊川語録

将棋まるごと90分のゲストは豊川七段。もう、面白すぎて困りました。こんなところをピックアップして申し訳ないが、豊川節の真骨頂を。これぞオヤジギャグ。

最近筋トレ、一切してないです。子供ダッコするくらいで。

ーお忙しいでしょうし。

[[Puboo::BookConverter::Page::Fix::Fontescape1 そうですね、やっぱカミサンとの対戦もありますし。

Puboo::BookConverter::Page::Fix::Fontescape1

]]



。山崎の後手一手損角換わりから郷田完勝。山崎は郷田と相性が悪く、これで1勝6敗。本局も、全くいいところなかった。郷田は良くなってから、山崎の手を完全に殺す「やや激辛流?」の指し回しだった。感想戦で山崎の自虐ギャグと相手への悪気の無い毒舌が炸裂したことは言うまでもない。

形を作りたかったんですけど、首を差し出しても、首をジワジワ絞められる感じで。

冷たいなあと思って。

何か、イヤな事でもあったのかと思って。

名人戦は初日から、とんでもないことになっている。郷田の驚愕の 5 五角から最早のっぴきならない局面に突入している。その際、ネット中継では副立会員の豊川七段がこんなことを言ったのが紹介されている。

豊川七段は「すごいことになっています。ミルマスカラスです。空中殺法です。」

ミル・マスカラスって一体なんだとよいう若い方も多いようだ。無理もない。しかし、実は豊川がこの表現を使ったのは初めてではない。ネット最強戦の谷川 v s 深浦で、最終盤に谷川が放った光速流の 1 三角に対しても、このように言っているのだ。

1 三角。あ～素敵です！ 1 三角はミルマスカラスみたいな手です。

説明しよう。ミル・マスカラスとは、メキシコの伝説のプロレスラーである。ルチャリブレというメキシコ特有の空中殺法を多用する華麗でトリッキーなプロレスの体現者であり、得意技は豪快なフライング・ボディアタックである。またメキシコプロレスの代名詞である覆面を着用するレスラーで、ミル・マスカラスは千の仮面（マスク）の意味である。

日本でも古くから活躍しており、特に我々おっさんの世代にとってきは、ジャイアント馬場の全日本プロレスでの活躍が印象的である。入場テーマ曲の「スカイ・ハイ」は、聞けば誰もがわかるという名曲中の名曲で、日本では猪木ボンバイエと同格の知名度を有する。

というのを、現在 40 代の豊川七段は、とっさに（あるいはもともともっていたネタとして）、谷川九段の指し手を形容するのに用いたわけである。

だから、なんなんだといわれると困るが。

ちなみに、ネット最強戦では、豊川七段は他にも世代を感じさせる表現を連発していたので、ついでにそれらも紹介しておこう。

「クイズプロ棋士 100 人に聞きました」なら先手持ちが 90 人以上出そうな局面だと思います。それくらい現代将棋は玉の堅さを重要視します。

説明しよう。「クイズ 100 人に聞きました」とは、TBS で一世を風靡したクイズ番組である。あらかじめ観客にとったアンケートで出た答えをクイズとして素人出演者が当てるという番組である。司会は関口宏で、きっちりとして司会ぶりりではなく、セットにひじを突くりラックスポーズが定番で、よく学校でモノマネされたりしていたものである。また、観客が、答えに対して「あるある」と唱和するやらせ的なパターンも現代テレビの先駆と言えるだろう。

という古い番組を、豊川七段は使ったわけである。

だから、どうしたと言われれば謝るしかないが。

感想戦の最後で。

それでは、大和証券杯は永遠に不滅です！

説明しよう。「我が巨人軍は永久に不滅です！」は、長嶋茂雄が引退試合後のスピーチでの伝説の発言である。今の若い人達には想像できないだろうが、当時はスポーツと言えばプロ野球、巨人だった。そして、日本中の野球ファンが、この長嶋の名文句に涙したものである。徳光和夫だけではない。

それを、やはりそういう世代の豊川先生は、使ったというわけである。

だから、なんなんだよと怒られそうなので、もうお開きにする。

あっ、そうだ。深浦王位は「長崎チャンポン王位」と食べ物にされ、谷川九段に至っては「神戸牛九段」と牛にされてしまっていたことも付言しておく。

相変わらずサービス精神たっぷりのトークである。

先日のNHK杯、対小林裕士の感想戦でも、「戦前の矢内さんとのインタビューいやなんだよねー、つぶれます、って言ったらつぶれちゃったね」「あっ、今放送されているのかこれ、正体がバレたしまいましたはたね」「ちょっとamだからねー、pmだったらこういう指し方しないんだけどねー。」「二人でつぶしていませんからね、いや、よく丸山さんに言われるんですよ、豊川さん相手の攻め駒攻めちゃうからダメですよ。」「もう、迷える将棋指しだ」「解説者はつらいけれど敗者はもっとつらいよね。」

筋トレ仲間?の私生活で謎の多い丸山との関係が気になるところである?

阿部「最後(の小林さんの攻め)はシャープだったですね。」豊川「ペンシルだったよね。」矢内失笑。

こうして文字化するとくだらなすぎるが、あまりにくだらなすぎるのでつい笑ってしまうのである。

あと、「だいたい、これはこれはそうか、アラファト議長か。」とか言っていたけれど、どういうこと?

そんなことが気になるようじゃ、完全に豊川ワールドにハマっている証拠である。そもそも、これを書くためにNHK杯の録画を克明に見直している私も私だ。

週刊将棋ステーションでも、例によって「よろしく願いしマンモス。」から入っていたが、ノリのいい恩田菜穂キャスターも「それでは最後までご覧くださいマンモス。」と返していたが、あの生真面目な山田史生氏までつい笑ってしまっていたのであった。

シリアスなトークでは、豊川さんは奨励会試験に一度落ちて、追試で入った苦労人だそうである。さらに二段の時に三段昇段の一番に郷田初段に長手数詰みを逃して、しばらく三段にあがれなかったそうである。奨励会の世界は本当に厳しい・・・。

しかし、結局は楽しいトークで、あの山田史生氏まで「今日はありがとうございマンモス」と言っていた。自分の目を疑わずにはいられなかったのである。豊川もこれには笑わずにはいられなかった。人徳である?

さて、豊川さんは面白いし大好きだけれども、ある意味オヤジギャグも冷静にいやらしく?計算している「常識人」である。ある意味将棋界では珍しいタイプだ。将棋界にはもっと「本物」がいる。豊川が奨励会幹事だったころの宮田敦史のエピソード。

――宮田さんは本当に凄い将棋指しだと当時から評判でした。確かに盤の前だとグレート。ところが、盤を離れると全く別人です。悪く言うと抜けちゃっているんですね。例えば、奨励会には一年に一回合宿があって地方に集団でバスで行きます。休憩しますよね。お土産屋さんみんな行って。

宮田「先生!トイレどこですか?」

豊川「いや、オレも初めてだから分からないけれど、地元の人に聞きなよ。」

宮田「分かりましたっ。」

まあ、それくらいは普通かもしれませんが、たいがいそんなこと聞きにこないですよ。その後、また別の休憩所の時にボクのところに来て、

宮田「先生!トイレどこですか?」

これじゃ、古典落語だよ。

NHK 杯の井上 vs 山崎戦は、井上さんが惜しい将棋を落としました。しかし、主役は解説の福崎文吾さんでしょう。さっそく聞き手の中倉宏美さんとのちょっと風変わりな漫才を紹介してみましょう。

福崎 (山崎さんの将棋は) 宇宙空間で指しているような。どこが上かどこが下か分からない、トリッキーな感じです。

中倉 ああ、ちょっと分かりやすいです。

あの一、全然わかりやすくないんですけどー。

福崎 (山崎さんは桂頭二つに傷を作ったりして) いじめられるのがすきなのかもかもしれません

福崎 (山崎さんの将棋は): 元気というか積極的というか無謀というかムチャというかやりすぎというか

中倉 山崎さんは NHK 杯優勝していますよ。

福崎 (過去) 三年くらいしか覚えていません。

福崎 上着を脱いでいますから。体温が上昇しているんですね。なんか虎みたいでしょう。豹とか。ゴロゴロ、獲物を狙っているというか。

あ、 9 五歩いきましたね。やっぱり何か狙っていると思いました。

狙いは分かりませんが。

一番肝心なところ、分からないんですか。

福崎 井上さんは C2 から上がり損ねて、泣いていたんですね。そうしたら兄弟子の谷川さんから手紙が来て立ち直ったそうなんです。私もそんな兄弟子が欲しいです。

中倉 あっ、わたしもそのお話、どこかで聞いたような気が。

福崎 確か今月の雑誌にのっていたと思うんですけど。

情報元は将棋世界 7 月号かい。一般ファンと同じじゃないですか。

福崎 歩が三つ以上当たると初段以上といいますね。この二人とも初段以上ということですか。

中倉 あっ、それは多分特には・・・。

福崎 ほめていることにはなりませんか。

福崎 プロでも王手といってもいいんですよ。別に。

中倉 いいことはいいんですか。

福崎 無視されますけど。

真面目に答えていた中倉さんが気の毒です。

井上さんが頭を抱えて必死に考えてる画。あれっ、若干頭頂部付近の頭髪が・・・。

福崎 頭がフル回転ですよ。ハゲていくかも、あまり考えたらね。アブないかも、考えすぎたら。

中倉、 あっ (思わず噴き出して)、 ×・・・。(言葉にならず)

福崎さん。見たことにそのまま反応して口に出すのはやめましょう。

感想戦も三人で賑やかでした。関西では、普段からこんな感じでやっているんでしょうね。

新藤兼人に『ある映画監督の生涯 - 溝口健二の記録』というフィルムがある。とにかく関係者の証言を徹底的に収集して構成したものなのだが、この村山特番も基本的にはそれと同じ作り方だった。

当然、村山の大変な人生を再確認せざるを得なかったわけだが、それ以外に関係者が生前の村山のことを嬉々として語るのが印象的だった。村山はかなりオモロイ人だったようである。十年もたつと彼の人生の悲劇的面も勿論だが、そういう村山の楽しい面を、より懐かしく思い出すものなのかもしれない。

そういう証言にしぼって、いくつか紹介してみよう。

先崎学 自分が村山に最初に連勝したら「キミは強いなー、強いなー」と言われた。次にひとつ負けたら「意外とたいしたことないね、先崎くんはたいしたことないね」と言われて笑ってしまった。

中野隆義 麻雀で自分が浮くと帰ろうし、引き止められると「ボク、今日は病院に行って注射を打たなければいけないんです。」とウソの言い訳をした。

浦野真彦 麻雀をしようというと、「お金があったかどうか」といって、財布を持たないのでポケットを方々探したら次々に札が出てきて、十何万円持っていた。

田村康介 午前二時三時に麻雀で呼び出され、村山は国土無双をあがると「オレ、もう帰るわ」といった。

滝誠一郎 A 級なのにあまりにダサイ格好をしているので、見かねて無理やり派手なアロハシャツを買わせたら、そればかり着て連盟に現れ、村山はそういう人なんだということになった。

鹿野圭生 ネクタイを輪っかのまま控え室に置きっぱなしにで、「だれの」と聞いたら「分かるでしょ」と言われた。

池和記 薬師丸ひろ子のファンで「薬師丸先生」と呼んでいた。

橋本崇載 村山が既にプロになっているときに、橋本が奨励会時代に指してもらって、全然手加減してもらえず何連敗もして、やっとの思いで一勝したら、村山に「クソー」と言われた。

鹿野圭生 負けず嫌いで、普通のゲームでも負けるとすごく悔しがり、必ず「オレには将棋しかないんじゃー」と言った。あまりに本気で言うので、みんな笑ってしまった。

鈴木大介 皆でカラオケに行き、当然 A 級の村山が払うのかと思ったら、イザ支払いのときになって、村山が走って逃げた。(結局ちゃんと払ったらしい。)

瀬川昌司 カラオケで、瀬川が歌っている途中で、何度も村山に消された。瀬川も腹を立てて、村山が歌っている途中で消した。小学生のように、お互いに消しあった。

森下卓 順位戦で負かしたら、村山がゴロンと後ろに倒れて「今日はアナタに遊ばれたー」と言った。

村山の代表局といえば、丸山との B1 順位戦である。A 級陥落後に、病を抱えながら深夜まで及ぶ激闘を戦い抜いた伝説の一局である。村山が大優勢の将棋を、丸山が粘り抜き、最後は村山が逆転負けしてしまう。森信雄門下の増田裕司が、万一のために控え室で見守っていたが「丸山が鬼のように見えた」そうである。その丸山忠久もインタビューに答えている。普段、あまり多くを語らないタイプなのだが、この番組では、誰よりも村山将棋について具体的にしっかり語っている。

村山さんは本当に天才だったという印象があります。普通の人とは将棋の作り方が違っていました

た。自分が考えに考えていって妙手を指すと、必ずそれ以上の妙手がかえってきました。逆に自分の調子が悪かったりウツカリをすると、それを警戒して変化したりして、勝ったりすることが出来ました。そういうタイプの人を私はあまり知りませんでした。

この丸山証言を、私は新藤映画における田中絹代の証言同様に、最高のハイライトとして聞いた。



順位戦B級一組の、先崎 vs 阿部戦が大変な大勝負になりました。A級最終局と同じくらい、注目されてもいいんじゃないでしょうか。

先崎八段といえば、棋士の顔以外に「印税生活者」?としての一面も、いまや有名である。自分もエッセイの類を愛読している一人である。いかにも才気煥発の文章で、将棋に限らず、生まれつきの天分、才能を感じさせる。彼の書くようなタイプの文章は、えてしてウケ狙いがかえってつまらなくなったり、イヤミになったりしがちなのだが、なんとというかバランス感覚が抜群で、実にサマになっているのだ。ああいう軽めの文章をセンスよく綴るといのは、実はものすごく難しいんじゃないかなあと思っていたのだが、御自身を「活字中毒者」と呼んでいるのを知って、なんとなくナゾが解けた気がした。

トイレでも、電車でも、風呂でも、のべつくまなく活字を追っているそうである。先崎八段の文章は、一見軽めなのだが、そういう基礎がしっかり出来ている人が書いたものなのだ。基礎体力を十分につけた上で、敢えてハジケているのだとおもう。もし、その気になりさえすれば、いくらでも硬派な文章も書けるのだろう。我々シロウトが、下手にマネをしたら絶対ケガをするというタイプの文章だと思う。

さて、その先崎八段、十四歳の頃、なんとマルクスを愛読していたそうである。たまたま一番多く置いてある文庫を選んだら、それがたまたま「共産党宣言」で、すっかりハマってしまったのだという。しかも、「資本論」にまで読み進み、三巻ぐらいまで読破したというのだから恐れ入る。あの経済学的でもあり、哲学的でもある、難解な「価値形態論」を、恐らく何の予備知識もなく黙々と読んでいる先崎少年。ちょっと想像するだけで、おかしくて痛快ではないか。ところで、これを読んで、「さては先崎、隠れ共産党」と誤解する方がいるといけないから、念のために言っておくと、その後すぐパチスロに出会って、あっという間にマルキストから卒業したとの事。メダタシ、メダタシ。(なんのこっちゃ。)

(興味のある方は、「浮いたり沈んだり」所収の「活字中毒的生活」「『共産党宣言』、そしてパチスロ」をお読みください。)

さてさて、そんな先崎八段の文章を読みながら感じるのだが、ああいう軽めの文章でありながら、けっして「今風」ではない。むしろ微妙に「古風」で「硬派」であって、ああいうヤンチャ坊主的なイメージとは反して、根本では、ごくごく健全な常識人だという気もする。自分のようなヨワイアマには、先崎将棋を分析する能力も資格もマツタクないのだが、文章から推測するに、将棋のほうも自由な指し方をしているようで、本質的には正当派、常識派なのではないかと想像するのだが、どうだろう。

作戦面では、ものすごく思い切ったことをする。確か、谷川棋王に対して大事な竜王戦の対局で、初手3六歩とやって、谷川さんをカリカリさせたこともあったっけ。でも、他のプロの先崎評を聞いていても、中終盤の指し手は、理にかなった正統派なのではないだろうか。むしろ、外見とかではフツーな佐藤康光さんとかの方が、「異常」なことを平気でやってのけたりするのでは。(勿論ほめ言葉のつもり)。羽生さんや森内さんも佐藤さんと同様のところがある。先崎さんの健全な常識人の面が、むしろトップと戦うのに邪魔になっているのではないかしら。(全然具体的な根拠なく言っていて、ちょっとそんな気がしたという程度のことなので読み流してください。)

先崎さんのことを「第二の芹沢」呼ばわりする声もチラホラ聞こえるが、それは全然違うと思う。A級から陥落したあとも、目立った活躍こそないものの、安定した勝率を上げているし、精神的にも充実して将棋に取り組んでおられるのではないかと思う。冒頭書いた通り、B1の最終局は本当に楽しみ。昇級に絡んでいる郷田、阿部のお二人も大好きなのだが、やはり先崎さんに頑張ってもらいたいと思う。

王位戦リーグの初戦で渡辺竜王とあたるのも気になる、週刊将棋の先崎八段のコメントを読んだら、「教  
えをこうつもりで戦う」とか言っていたが、勿論本心は全然違うだろう。個人的には、その勝負に勝った方  
に、挑戦者になって欲しいと思う。

NHKのBSで放映された番組を見た。升田がタバコを吸いながら、あの独特な風貌で盤の前で読みふける姿、大山が晩年ガンと戦いながら、本当に痛む部分を手でおさえて対局している姿など、素晴らしかった。昔の時代に大道詰将棋師が街角で盤を広げる姿もチラッと映ったが、いかにもカタギのものではないという雰囲気が出ていた。将棋指しのイメージも現代では随分変わったが、本来あのような姿であって欲しいと思ってしまう。

升田と大山は兄弟弟子だったが、その頃の話が興味深かった。ある時、升田が床屋に行くと、大山が「升田相手でも、一枚(大駒一枚落ち)なら軽い。」と言っていたと聞いて、升田はカッと戻り、大山を、飛車落ち、飛車香落ち、飛車角落ちで、たて続きに負かす。そして「オマエ、もう田舎に帰れ」というと、大山は泣いたそうだ。升田は笑いながら、あれが勉強になったのだろうろうなと言う。さらに、少し真面目になって。

プロは、どこまで行っても天狗になるのが一番いけないんですね。それが一番毒なんだ。

大山も、このように言う。

(升田が) もしいなかったら、慢心していたでしょうね。

この話を聞いて坂口安吾が大山の若き日について語っていたのを思い出した。

大山は若年にして老成。礼儀正しく、対局態度は静かで、一言にして重厚というたいそうな人物評価を得ていた。観戦者が筆をそろえて、彼の重厚な人柄を賞賛していたものだ。

ところが、この名人挑戦対局(註 塚田名人に大山が25歳で挑戦した)に至っていちじるしい変化が起こった。彼の重厚な人柄が一変していたのである。倉島竹二郎君の語るところによれば、ただ、呆れるばかりであったというが、不遜ともなんとも言いようがなく、すでに自分が名人に決まったの如く塚田をなめてかかり、それが言行の端々に露骨に現れ、正視しがたい生意気、無礼な態度であったということである。塚田がよく奮起してこの思いあがった小僧をひねりつぶしたのは大手柄であった。(坂口安吾 「九段」より)

あの大山にして、そんな時代もあったのだ。しかし、あれだけの偉大な勝負師だったのだから、外には出さなくても、内心の自負や強烈な自己主張は当然物凄いものがあったはずである。やはり若いために、それが表に出てしまったということである。安吾によると、大山はその生意気な態度で、ファンやマスコミからも、ひどく叩かれたが、大山はそれにもめげずに、すぐ立ち直ったと言う。安吾は大山のそうした精神力の強さもほめている。

大山の慢心を押さえつけ鍛えて、あの冷静沈着を育てたのが升田というわけである。

大山にはハツタリめいたものがないのである。非常に平静で、それを若年からの修練で身につけたミガキがかかっている。兄弟子に升田のようなガラッハがいて、頭ごなしにどやされ続けて育ったのだから、平静な心を習得するのも自然で、温室育ちという生易しいものがないのである。勝負師の

遅しさ、粘り強さは、升田の比ではないが、大山がここまで育った功の一半は升田という柄の悪い兄弟子が存在したタマモノであったのかもしれない。(坂口安吾「勝負師」より)

当然、今日は羽生 19 世永世名人について書く予定だったのだが、こちらもしっかり気がゆるんでしまって、頑張って書く気力がない。ということで今日は小ネタを。

昨日は名人戦と共に、A 級順位戦の佐藤対鈴木も行われていた。名人戦が終わったあと、しばらく眺めていたのだが、棋譜解説では、相当鈴木さんがいいように書いていたし、素人目にも、どう考えても鈴木さんの方が最低でも一手は早く相手玉にたどりつきそうな感じの将棋に見えた。

ああ、佐藤さんは今年もスタートに失敗か、と思って観るのをやめたのだが、今日棋譜を見てビックリ。最後、佐藤さんが、とても詰みそうにない相手玉を長手数で詰まして逆転勝ちしていた。鈴木さんが、明らかに詰みがわかって、最後まで指していたのが、いかにも心中の無念を感じさせた。

でフト、思い出したのだ。順位戦が始まる前に、佐藤康光ファンの Beaver さんからこんなコメントをいただいたのを。

A 級は総当りなので、でも昨年のようなことは心臓に悪いので、今年ことはスタートダッシュをと思って対戦表を見ると、なんと初戦は鈴木八段！

なんたる偶然！ついこの間鈴木八段と酒席をともしたばかりです。（この時初対面）

共通の知人を交えて大いに飲んで盛り上がったところで、知人氏が「彼は熱烈な佐藤ファンで、"佐藤の黒"（\*）は決して飲まないんですよ」と言ったのに対して、大いに飲んで気分の良かった私は、「そんなゲン担ぎは意味のないことは、鈴木先生に証明していただいたので、今では気にせず飲んでいきます。」と言ってしまいました。

今頃、鈴木八段が壁に貼った A 級の対戦表を睨みつつ、佐藤ファンの中年おやじの赤ら顔を思い浮かべて闘志を燃やしているかと思うと心配で夜も眠れません。

\* 焼酎の銘柄、鈴木八段が棋聖戦に挑戦したとき、ゲンを担いで飲んでいたことで有名

鈴木さんは、その通りに闘志を燃やして、佐藤さんをほとんど完璧に葬り去りかけていたのだ。しかし、鈴木さんはほとんど勝ちになった局面で、この言葉をフト思い出してしまったのに違いない。「クソッ、絶対に勝たなけりゃ」。当然、それまで冷静だった鈴木の手指しに、一分の狂いが生じたことは言うまでもない。ということで、佐藤の勝因は、この或る佐藤ファンの言葉だったということになる。

ごめんなさい、悪趣味なジョークで。

とりあえず、Beaver さん、おめでとう。今年の佐藤さんは、間違いなく挑戦争いに絡むと思いますよ。でも、佐藤さん同様にいいスタートさえできれば、ライバル or 本命は森内さんだと思っていますけれどね。個人的には。

小野修一八段が亡くなられ、先日公表された。

小野先生は、銀河戦などの解説をされていたが、とても優しそうな先生だという印象だった。正直言って、それ以外のことは良く知らないのである。

囲碁将棋チャンネルの棋士インタビュー番組に、中川七段が出演した際に、通われている空手道場で収録していた。中川先生には空手はあまりに似合いすぎである。道場での大勢での稽古のシーンもう映し出されたのだが、あれっ、どこかでみた顔が・・・、小野先生じゃないの、でも、空手とかされそうじゃないしなあ、他人の空似かなと思った。

しかし、将棋世界7月号の、中川七段による小野追悼文を読んだら。なんと、小野先生も同じ道場で空手を習われていたらしい。しかも、中川先生の先輩格の黒帯で、中川先生は厳しく鍛えられたそうである。人は見かけによらないものである。

他にも、週刊将棋で泉正樹七段が追悼を書いていて。また小野七段の若き日の自戦記の傑作「もぐらだっ

て空を飛ばしたい！」も、今月の将棋世界に収録されている。それらを読むと、実は小野修一八段は、とても男気があって、大変な情熱を内に秘められていた方だったらしいと、よく分かる。

プロ棋士のうち、本当に注目されるのはごく一握りである。「その他大勢」の人生は振り向かれない。しかし、当然のことながら。各棋士にはそれぞれの人生があり、表には伝わってこない人生のドラマがあるのだろう。これらを読んで、そんなことを思わずにはいられなかった。

週刊将棋の泉七段の記事によると、小野八段は、対局中に左手を胸に押し当てる仕草をされていたそうである。銀河戦の解説でその泉さんが言われていたが、順位戦で戦っていて、12時を過ぎると、自分の心臓の音が、「ドクン、ドクン」と聞こえるそうである。文字通り心身を削ってプロ棋士は対局しているのだ。以下、それぞれの記事から少しずつ引用させていただく。

将棋世界7月号 中川大輔七段の「小野八段を偲ぶ」より

ある時、こう教えられた。

「中川君ね、男ってというのはイザって時に家族や大切な人を守るだけの体力、腕力を身につけていなきゃダメだよ」

胸に刻み込まれる言葉だった。

週刊将棋5/28号より 泉正樹七段の「小野修一さんのこと」より

小野さんは責任感が強い一面も持っていて、棋士会では時に連盟の怠慢を鋭く指摘し、打開策をきちんと提示していた。名人戦問題で毎日新聞社様に棋士多数が呼ばれたときは「棋士は毎日さんをだますような人種ではありません。言い過ぎを謝ってください」と1人猛反発。弁明一方の棋士の中、理路整然、連盟の立場を理解してもらえよう必死に話していた。

昭和61年将棋世界8月号より小野修一さんの自戦記「もぐらだっ

私が奨励会の頃、「もぐらは空を飛べない」という言葉がはやった。才能がない人間が努力するのは無駄だという意味で使われていた。まだ三島由紀夫の「文章読本」の中に「世間や俗物がどうであろうと、歴史や文化の中に埋没する決意をしたものが、実はもっとも飛翔する人間になる」との一説がある。どちらが本当かは分からないが、後者の言葉が私は好きだ。

そのようなことがあって、(中略)、ともかく勉強に専念した(小野修一もぐらの時代)。

当時の日課は朝起きると軽い運動、朝食の後、詰将棋を一時間くぎりで三時間、棋譜並べ二、三時間、夕食・風呂、研究といった感じで、定食屋で夕食の時ビールを飲みながらナイトーを見ている人が羨ましかった。(ビールを飲むと研究ができない)。風呂に入りながら自分なりの成果(どのあたりか分からないが)をだすまで死にたくないと本気で思っていた。23歳から26歳ぐらいの時。

もぐらはもぐら かな？

格闘技の世界は、体の小さい人はでかい人間に基本的に勝てないものらしいが、将棋はどうなのだろう。

「何事かを成しとげるのは、その人の才能ではなくて性格である。」

司馬遼太郎の言葉をもって結びとしたい。

健康上の理由で棋士を引退されたようだが、このように男気があり正義感のある方こそ、現在の連盟という組織にとって必要だったし、惜しまれるところである。

「才能と努力」の問題は、特にプロ将棋の世界においては露骨なまでに問われてしまう。これほど「天賦の才能」がなければどうしようもない世界も珍しいだろう。我々一般ファンは、トップ棋士たちの超人的な能力に感嘆して無責任に熱狂する。しかし、実際に戦っているプロ棋士の側からすれば、どれだけ努力しても報われない世界の構図を感じずにいられないところもあるのかもしれない。

だが、いうまでもなく、人間の価値はその人が得た名誉名声ではなく、どれだけ自分の力を限界まで発揮できたかということに存在するはずだ。

そういう意味では、小野八段は、間違いなく「ベストを尽くした」人なのだろう。

一方、現在のトップ棋士たちは、自分の才能だけにおぼれているのではなく、その上で最大限の努力をしている人たちのように思える。だから、彼らは報われるべき報酬を正当に得ているといえるだろう。

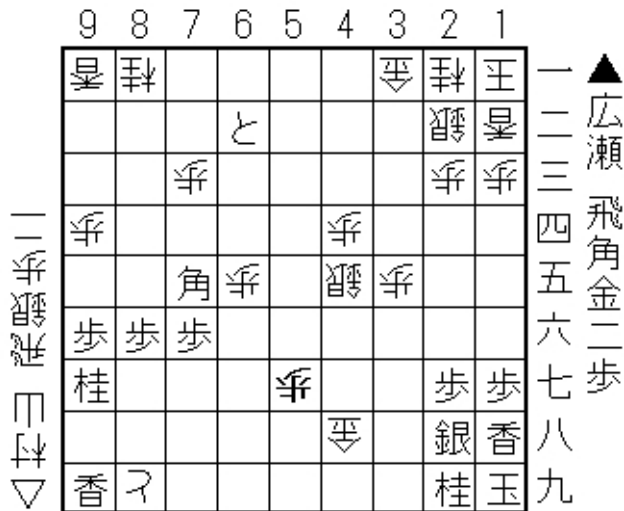
ただ、棋士としての現実的な栄光とは別に、棋士としての人間的価値という、別の基準もあっていいだろう。

もっとも、我々一般ファンは、普段からそんなところまでいちいち考える必要はない。いつも真面目に辛気臭くそんなことを考えてばかりいては、気楽に楽しめなくなってしまうだろう。単純に、勝敗に一喜一憂するファンで構わないと思う。

ただ、こういう小野八段の文章のようなものを読んで、棋士の人生に思いをめぐらせることも、たまにはあってもよいのではないかと思う。

囲碁将棋チャンネルの「広瀬章人の将棋講座 ボクの愛穴熊」を、まとめて観た。相穴熊の序盤、終盤、自戦解説という内容だが、白眉は最終回の対村山戦での寄せ。広瀬自身が「生涯最高の自慢の一手」と言い、この順位戦を見ていた片上五段が「神の寄せ」と評した寄せ手順である。ここでは、広瀬による解説内容を紹介しておく。

図は村山が 5七歩と垂らしたところ。まだ後手玉がすぐには寄らないと読んでのことだが、ここから広瀬の神の寄せが始まる。



まず、 3一角成 同銀に 3三角!!!!!!



村山も、かなり深く読んで自玉がすぐには寄らないと判断したのだろうが、さすがにこんな手は誰にも読めないだろう。

対して 2二銀打には 同角成 同玉には 4三金が 3二金 同銀 3一銀以下の詰めろ 同銀には 3二金 ( 2一金 同玉 4一飛以下の詰めろ ) 5四角 3三歩 ( 2二金 同玉 3二金以下詰めろ ) 同銀 同金 同桂 5一飛で寄り筋。

なので本譜は 3三角に 同桂。例えばここで 5一飛などとすると、 6四角が詰めろ逃れの詰めろになってしまう。以下 3一飛成 同角 3二銀 2一銀 3一銀成に対して再度の 6四角がまたしても詰めろ逃れの詰めろで後手勝ちとなる。



というわけで、広瀬が指したのは 3二歩。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 王 | 香 |   |   |   |   | 飛 |   | 王 | 一 |
|   |   |   | と |   |   |   | 歩 |   | 皇 | 二 |
| 二 |   |   | 歩 |   |   |   | 歩 | 歩 | 歩 | 三 |
| 銀 | 歩 |   |   |   |   |   | 歩 |   |   | 四 |
| 二 |   |   | 歩 |   | 飛 | 歩 |   |   |   | 五 |
| 角 | 歩 | 歩 | 歩 |   |   |   |   |   |   | 六 |
| 飛 | 桂 |   |   |   | 歩 |   |   | 歩 | 歩 | 七 |
| 山 |   |   |   |   | 香 |   |   | 銀 | 香 | 八 |
| 村 |   |   |   |   |   |   |   |   | 桂 | 九 |
| △ | 香 | 王 |   |   |   |   |   |   | 玉 |   |

この手は 2一金 同玉 3一步成 同玉 4一金 同玉 5一飛 3二玉 5二飛成以下の詰める。  
 従って 同銀と取ったが 4二金。これも、 3一飛 2一銀打 2二金 同玉 3二飛成以下の詰める。  
 なので、 2一銀打と受けたが、そこで 5一飛。これも 2二金 同玉 3一飛成以下の詰める。  
 従って 2二飛と受けたが、 3一金打。段々、受ける余地がなくなっていく。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 王 | 香 |   | 飛 |   | 金 | 飛 | 王 | 皇 | 一 |
|   |   |   | と |   | 金 | 飛 | 皇 | 皇 | 皇 | 二 |
|   |   |   | 歩 |   |   |   | 歩 | 歩 | 歩 | 三 |
| 三 | 歩 |   |   |   |   |   | 歩 |   |   | 四 |
| 歩 |   |   | 歩 |   | 飛 | 歩 |   |   |   | 五 |
| 二 | 歩 | 歩 | 歩 |   |   |   |   |   |   | 六 |
| 角 | 桂 |   |   |   | 歩 |   |   | 歩 | 歩 | 七 |
| 山 |   |   |   |   |   |   |   | 銀 | 香 | 八 |
| 村 |   |   |   |   | 香 |   |   |   | 桂 | 九 |
| △ | 香 | 王 |   |   |   |   |   |   | 玉 |   |

これには 6四角がこわいが、 3二金寄としておけば先手玉はきわどく詰まない。 2八角成 同玉に  
 4六角には 3七桂 3九銀には 3七玉 一五角 2六歩で逃れている。  
 従って、本譜は 5四角と受けたが、 3二金引 同飛 同金 同角 2二金 同玉 3一銀 1一玉  
 2二飛で必至である。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 | 将 |   |   | 飛 |   | 銀 | 將 | 王 | 一 ▲  |
|   |   |   |   | と |   |   | 馬 | 飛 | 皇 | 二 広瀬 |
| 三 |   |   | 歩 |   |   |   | 将 | 歩 | 歩 | 三 なし |
| 四 | 歩 |   |   |   |   | 歩 |   |   |   | 四    |
| 五 |   |   |   | 歩 |   | 將 | 歩 |   |   | 五    |
| 六 | 歩 | 歩 | 歩 |   |   |   |   |   |   | 六    |
| 七 | 桂 |   |   |   | 歩 |   |   | 歩 | 歩 | 七    |
| 八 |   |   |   |   |   | 馬 |   | 銀 | 香 | 八    |
| 九 | 香 | 王 |   |   |   |   |   | 桂 | 玉 | 九    |

以下 同銀なら 同銀成 同玉 1一銀までの詰み。 4一金と受けても、 2一飛成 同玉 2二銀打までの詰みである。

以上、手順のみ紹介したが、何も無いようなところからの 3三角から 3二歩が、完全に読みきりの寄せであることがわかる。芸術的な手順の組み立てであり、まさに神の寄せといえるだろう。

(追記)

将棋の神様～0と1の世界～さんよりご指摘をいただいたのですが、将棋世界1月号でも広瀬さんの自戦記が掲載されています。下の記事を参照していただきたいのですが、村山さんも 3三角は見えていて、プロ的には一目！の手だそうで、むしろ成立するか難解で分からない局面だったので実現したというのが正確なところのようです。

[将棋の神様～0と1の世界～ 「将棋世界」2009年1月号に、「パンツ剥ぎの名局」の自戦記](#)

## 中田宏樹の一言

---

NHK杯の中田宏樹 vs 瀬川。解説は「元祖とよぴー」豊川孝弘だった。

相変わらずオヤジ・ダジャレ・ギャグ連発で矢内理絵子が全部それを素直に笑ってあげるという心和む展開であった。

豊川によると、中田は普段も寡黙そのもので「いるかいないか分からない」そうで、中田が食事をするのを真似する「中田食べ」が流行したそうである。よくわけが分からないが、「味もそっけもない」ということ。でも、私が書きたいのはそんな事ではない。豊川の言葉をそのまま紹介する。

「中田八段で、ボクは忘れられない一言があって、10代の時ですけれどね、当時、中田三段は奨励会で、関東で一部かもしれませんが一番強いと言われていたんですよ。注目されていて、ボクねえ、『今度将棋教えてください』って言ったんですよ。ボク、二段くらいだったですかね、奨励会の。そしたらね、『豊川くん、楽しんで強くなろうとしているでしょう。』って言われたんですよ。その一言がずっと忘れられなくて、やはり厳しい稽古を積んでいるんだろうなと、自分が恥ずかしくなっていました。だから、ボク、一生忘れないですよ、ホントに。」

当時はVS的な研究はあまり流行していなかったが、とにかく中田が苦勞して一人で厳しい研鑽を続けているのを豊川は感じたのだろう。中田がプロの棋譜並べをしないのが一頃有名だったが、とにかく自分の力だけを頼りに苦心惨憺して強くなってきた将棋なのだと思う。

研究とデータ全盛の現代にあって中田は貴重な存在である。そして、現在でもB1で独自の存在感を発揮し続けている。

毎日新聞 [将棋：74歳・有吉道夫九段が敗れ、引退 現役最高齢](#)  
朝日新聞 [現役最年長棋士、引退へ 74歳「火の玉流」](#)  
読売新聞 [「ひとつの区切り」...74歳最年長棋士 将棋人生投了](#)  
産経新聞 [“火の玉流”有吉九段引退へ 74歳の現役最年長棋士](#)  
神戸新聞 [現役最年長棋士、有吉九段の引退決定 宝塚在住](#)  
時事通信 [最高齢棋士有吉九段が引退へ](#)  
47NEWS [将棋の有吉九段が引退へ最年長プロ棋士](#)

出典: フリー百科事典『[ウィキペディア \(Wikipedia\)](#)』有吉道夫

[将棋ペンクラブログ: 有吉道夫九段](#)

[将棋が好きになってから有吉道夫九段](#)

有吉道夫九段の引退が決まった。

中平邦彦さんの「[棋士 その世界](#)」の有吉九段をとりあげた「[盤上没我](#)」より。

日常は温厚な紳士で、にこやかにしゃべり、人当たりは柔らかい。が、ひとたび盤に向かえば、この紳士は盤上没我。闘志あふれる駒音で相手を圧倒せんとする。猛烈な攻め将棋。顔を真っ赤にしてがんばる姿は尊いものがある。

かなり昔の文章なのだが、この対局態度を最後まで貫かれた先生だった。そう、普段は温和で引きこまれるような温かい笑顔の持ち主だが、いざ対局にのぞむと、まさしく「火の玉」のように相手に襲いかかる。しかし、いかにも根が陽性なので、ギスギスした感じ、厭な様子にはならず、あくまで盤の上だけで純粋な戦いを繰り広げるといふ先生だった。

ある時、テレビ棋戦で、対局者有吉道夫、解説者加藤一二三というのがあった。感想戦で加藤先生が、いつもの調子で自説を堂々と滔々と主張すると、有吉先生は、とても人のよい笑顔で「そうですねえ、なるほど」とうなずきながらも、「でも私はこうやりたかったんですよ」口ぶりは柔らかながら自分の主張を曲げない。そして、有吉説をよく検討してみると、実はとても優秀だと判明して、加藤先生も「なるほどねー」と素直に納得。有吉先生も、また素晴らしい笑顔で「そうでしょう」と言われていた。人間的には温和でも、勝負師としては頑固な有吉先生らしさがとてもよくでていた。有吉先生も加藤先生も、見ていてなごまずにはいられない先生方である。

朝のテレビ小説「ふたりっこ」にも出演して、迫力満点の対局姿を披露し、相手を厳しくにらんでから、会心の手を指したという様子でニヤリとされた姿なども、実に堂に入ったものだった。

有吉先生は、名人戦で師匠の大山先生に挑戦して、3勝2敗までいったが、その後連敗して惜しくも名人奪取はならなかった。その時の、第六局について、戯曲・脚本家の青江舜二郎さんが当時書いた長文の記事を、ネットで読むことが出来る。大山先生と有吉先生の師弟関係についてなど、とても興味深い内容である。

[青江舜二郎 電子資料室 名人戦の印象 \(1969\)](#)

74歳にして、最後まで若手にまじって深夜にまで及ぶ長時間の順位戦を戦い続けられた。簡単に出来ることではない。スポーツ選手などは、若くして引退するが、将棋は頭脳スポーツなので、一応は高年齢でも指し続けることは可能だが、長時間対局の場合、体力勝負という側面もやはり大きく大変なことである。また、かつてのトップ棋士としてのプライドをかなぐり捨てて、自分の孫でもおかしくない年齢の若手たちと戦い続けるというのも、精神的にきついところもあったはずだ。

それでも、有吉先生をはじめとするベテラン棋士たちは、最後まで戦い続けることが多い。今回、有吉先生とともに引退が決まった大内先生もそうだし、加藤先生もいまだ対局姿に衰えるところはない。むしろ逆くらいである。そういう姿に、ファンは尊さを感じずにはいられない。いや、ファンだけではない。羽生善治名人が、タイトルの数も少なくなった頃に、ある時ベテラン棋士たちが一心不乱に若手と対局する姿をみて、自分も見習おうと思ったというのは有名な話である。

「火の玉流」というのは、猛烈な闘争心で戦うという意味と同時に、最後に燃え尽きるまで戦い続けるという意味もあったということになるのだろう。

有吉先生が、若い頃に奨励会幹事をしていた時に、ある若い奨励会員が悪くなって安易に投了したのをみてこう言われたそうである。この言葉通りに、最後まで将棋に取り組み続けられたということなのだろう。「敵に一矢を報うべくがんばってほしかった。昔、中国の武人が、刀折れ矢つきれば素手を持って敵と戦い、力つきて捕らわれの身になれば、眼光をもって敵を射すくめ、もし盲目にされれば、なお舌をもって敵を刺すといったとある。勝負を争ううえにおいて可能な限り力の限界をつくして闘う。この気迫は何より必要ではないかと思う。」(「棋士 その世界」「盤上没我」より)

今更ですが、有吉先生の番組の感想です。放映当時は、既に早くも夏バテ気味でブログを書く棋力も気力もなかったのですが、最近暑すぎてむしろ少しハイになっております。ちょっとアブナイ気もします。今年には本当に酷暑のようなので、皆様もご自愛ください。

将棋の内容もきちんと取材してあったし、技術革新の波に古い世代がどう対応すればよいのかという一般向きのテーマにもなっていて、良質な内容に仕上がっていたと思う。

有吉先生の自宅にあった、戦型別に分類された膨大な棋譜ファイル、あれだけでも将棋ファンは感動してしまう。あれを見て、有吉先生宅にパソコンを持ち込んで設定から何から全てしてあげて、プロ棋士用のデータベースをすぐみられるようにしてあげたいと思ったのは、多分私だけではないだろう。でも、敢えて紙の棋譜ファイルを片っ端から盤に並べるといったやり方が先生には合っているし身につくのかも知れず、実は大きなお世話なのかもしれない。

若手棋士たちとの VS(一対一の対戦研究) の場面も印象的だった。話には聞いていたが、ああやってラフな格好の若手たちに混じって、きっちりスーツを着込んだ先生がひとり控え室にいるのをみると、改めてすごいなあと感じずにはいられない。

そういう、若手の強さや優秀性を素直に認めて現代将棋に適応しようとする姿勢は、実際に盤面の上でも成果をきちんと出した。その代表例が、番組でも大きく取り上げられていた高崎五段との順位戦だろう。会心の 2 三桂を嬉しそうに語るこぼれんばかりの有吉スマイルには、微笑まずにいられなかった。

そもそも、あの将棋でも出現した対ゴキゲン対策の 7 八金型の下図の局面では、以下 2 四歩 同歩 2 三角 3 二金 3 四角成と先手だけ馬をつくる定跡手順がある。



普通なら馬を作った先手がよさそうなものだが、先手の馬の活用が難しく、後手の飛車を自由に活用されて、むしろ後手の勝率が高い。つまり、この手順は、馬をつくれれば有利という旧来の常識を根底から覆すもので、現代将棋を象徴する順ともいえる。

ここで、有吉先生は馬を作らずに 6 六歩から昔から得意にされている玉頭位取りの態勢を築いて、さらに下図の 2 五桂ポンという現代将棋を代表する異筋にも見事に対応して完勝した。

|       |   |   |   |   |   |   |   |   |   |       |
|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-------|
|       | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |       |
|       | 皇 | 将 |   |   |   |   |   | 飛 | 皇 | ▲ 有吉角 |
|       |   | 王 | 金 |   |   |   | 金 |   |   | 一     |
|       |   | 銀 | 歩 | 歩 | 銀 | 歩 |   | 歩 | 歩 | 二     |
|       | 歩 | 歩 |   |   | 歩 |   | 歩 |   |   | 三     |
|       |   |   | 歩 |   |   |   |   | 将 |   | 四     |
| ▲ 有吉角 | 歩 |   |   | 歩 |   |   |   |   | 歩 | 五     |
|       |   | 歩 |   | 銀 | 歩 | 歩 | 歩 |   |   | 六     |
|       |   | 玉 | 金 | 銀 | 金 |   |   | 飛 |   | 七     |
|       | 香 | 桂 |   |   |   |   |   | 桂 | 香 | 八     |
| ▽     |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 九     |

もし、有吉先生が昔の常識にとらわれていたら、馬をつくって悪いはずがないとして、若手の研究の畷にはまっていたかもしれない。しかし、有吉先生は若手の棋譜も十分並べて調べていて、この順が実は難しいことをきちんと把握していたのだろう。なおかつ、旧来の常識が通用しないことを率直に認める心の柔軟性も必要だったはずである。

さらに、その形を避けて自分が経験豊富でコツがよくわかっている玉頭位取りの形に持ち込むことに成功した。しっかり現代将棋の「新しさ」に適応しながら、過去の有力な指し方を利用して「伝統」も生かすという、有吉先生ならではの会心の指し回しだったといえるのではないだろうか。

週刊将棋で中原先生が有吉将棋を語る特集があったのだが、その中で面白いエピソードを紹介されていた。6、7、年前に、中原先生が倉敷の大山記念館で有吉先生と会われた際に、「自分をモルモットと思って、どこまでやれるのか試している。」と有吉先生が言われたそうである。

現代将棋に、どりれだけベテラン棋士が対応出来るか、自分の身体を実験材料にしてまで最後までチャレンジされ続けたのである。言うのは簡単だが、勿論、簡単には出来ることではない。

有吉道夫九段とともに、大内延介九段の引退も決まっている。今期のC級2組順位戦の成績でフリークラス転出となり、年齢の関係で自動的に引退が決まった。近年でも若手有望格の佐藤天彦を長手数で将棋でねじ伏せるなど、まだまだ「怒涛流」の力強さが健在なところを見せていたので残念である。改めて言うまでもなく、有吉先生同様、時代を代表する名棋士の一人だった。

## フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 大内延介

将棋では、当時は王道ではないとして批判されることもあった穴熊を積極的に採用し、豪快な振り飛車穴熊で中原誠に名人戦で挑戦して、後一步まで追い詰めたのは有名である。「穴熊党総裁」とも呼ばれ、ある意味では現代的な振り飛車の先駆者でもあった。

鈴木大介、田村康介などの、優秀な弟子を数多く輩出している。子の二人とも、現代的な研究将棋というよりも、力で勝負するタイプの将棋で、豪快な将棋を指す師匠の影響もきっとあるのだろう。

将棋のルーツについての研究家で、「将棋の来た道」という著書もある。私自身、大内先生が将棋のルーツを探って旅ををするドキュメンタリー番組を観たことがあるが、明るく気さくな人柄をいかして、現地の人たちと交流しながら将棋の歴史を探る、とても楽しい番組に仕上がっていた。

田丸昇先生が週刊将棋の連載で書かれていたが、若き日には将棋ファンの吉永小百合とも親交があったそうである。スキーなどスポーツ万能で、若いときには大変もてたようだ。中平邦彦氏の「棋士・その世界」にも、こんなエピソードが載っている。

大内。美人の夫人。新婚ホヤホヤ。銀座のすし屋で飲んだとき、結婚式の写真を大切に持っていて、みせてくれた。すごい美人。大内の目ジリがさがって、こっちの反応を見ている。「きれいだ」といったら、ニッコリした。あとハシゴ。バーの前の屋台で焼きイモを買う。奥さんのみやげだ。

しかし、何と言っても大内といえば、当時の中原誠名人との第34期名人戦七番勝負第七局のエピソードが有名だろう。

初日に、既に形勢が大きく傾いて、既に大内勝勢になっていた。

勝った！ついにオレは名人位をこの手にした！”

この夜の興奮は大内を眠らせなかった。寝るのをあきらめた大内が、窓の外を見る。中庭を挟んだ向かい側の部屋で、ただ一つ明かりの消えていない部屋があった。そう、その部屋が中原の部屋であった。そこにはあまりの形勢の不利に苦悩する中原の姿があった。”明日は3年間君臨した名人位を明け渡さねばならぬのか・・・”中原もまた、眠れぬ夜を過ごしていた・・・

(「将棋の館 - 盤上のドラマ - 」「これが名人位の重さか！大内、痛恨の一手」より)

なんとも人間的な光景である。

ところが、翌日に大内に致命的な手順前後が出て、中原が持将棋にもちこみ、次局は中原が勝って薄氷の防衛を果たす事になる。



中原が席を立ったあと、大内は立会いの塚田九段（故人）にむかって、“しまった、先に 45 歩と突くんだった。それで決まっていたでしょう？”と問いかけたとか。まさか立会人が対局中に“はい、そうですね。”と言えるはずもないが・・・

持将棋を提案する中原に、大内は“もう少しやらせてくれ”と言ったとか。この言葉に大内の無念の想いが、にじみ出ているようだ。

(引用 同上より)

これもまた、なんとも人間的である。将棋の内容についてもこのサイトで詳細に説明されているので、興味のある方は参照されたい。

この時に記録係をつとめていた田丸昇八段もブログで次のように証言されている。

大内は中盤で早くも優勢となりますが、名人位のプレッシャーによって形勢は次第にもつれ、終盤で勝ち筋を逃すと「あっ、しまった！」と口走りました。私はその光景を今でも鮮明に覚えています。

(「[将棋棋士・田丸昇のと金横歩き](#)」「最後の「[引退対局](#)」が注目される有吉道夫九段と大内延介九段」より)

さらに、これには後日談があり、大内九段が NHK・BS 中継に立会人で出演した際に、当時のことを次のように振り返っていた。

後に大内自身が、「対局室の近くにビアガーデンがあり、そこから聞こえる酔った人の話し声と将棋の読みとの‘葛藤’があり、後で指すべき手を先に指してしまった」と語っている

(上記 大内延介ウィキペディア より)

私もたまたまその放送は見ていたのだが、大内先生は、とてもよい笑顔で「一生、これは言わないでおこうと思ったんだけどね。」と爽やかにおっしゃっていた。

将棋の性質は時代とともに変遷進化していくが、その根底にある人間的なドラマの面白さは、昔も今も全く変わることがないのである。

囲碁将棋チャンネルで再放送中の、I's show time に、山田久美さん登場。やはり、とても楽しい方です。いい話もたくさんされている中、こんな話を取り上げて恐縮ですが、山田さんは、初めて連盟に来たときに、間違えて男士トイレに入って用を済ませてしまったそうです。

山田「そして、出てきたら真正面に女性トイレがあるんですよ。アレねえ。どうにかしたほうがいいですねっ。(フフツ)」

島井(遠慮がちに)「間違えますかね、でも・・・。(ウフフ)」

ここで残念なお知らせがあります。山田久美さんは、間違えて当たり前でしょ、的に自信满满におっしゃっていましたが、大先輩に対して勇気を振り絞って控えめに言っていた島井さんの意見がどう考えても正しいんじゃないかと思えます(笑)。

私は山田久美さんのファンですし、ぶっちゃけて言うと、美人だなあ、とも思うんですよ。でも、なんとんでもあの楽しいキャラクターが一番いいのですよ、山田さんの場合。いろいろな面で活躍していただきたい方です。

山田久美さんの、囲碁将棋チャンネルで再放送中の l's show time 後編の事も。見ていて思ったのだが、山田さんが楽しい方だとは分かっていたが、島井さんというのも相当なのかもしれない。

山田さんがカラー扇子を使っている話になった。

山田「実はですね。ワタシ扇子を口元に持ってくるんですよ。白いと口紅がつくじゃないですが、だから。」

姉妹「じゃあ、口紅ついているんですね。そりゃ、高く売れそうですね、ウフフ。」

お前何言ってんだよシマイ、と心の中でツッコんでしまいました。(心の中なので敬称略)

山田さんが、通販に凝って、色々失敗した話になった。何でも、「朝起きるとトースト・コーヒー・目玉焼きが出来るセット」なるものを、結構高額で買ったら、目玉焼きがまずいわ、掃除が大変だわで、一回しか使わなかったそうで。

山田「ペットボトルカッターというのを買って、丸いペットボトルを螺旋状に切れるというのを買ったの。でも、よく考えたらワタシ四角いペットボトルしか買わないのに気づいて、使えないじゃんって、フフ。」

島井「フフフ、なぜ、気づかないんでしょうね、フフフ(笑い止まらず)」

自分でツッコみながらふき出してしまうなよシマイ、と心の中でツッコんでしまいました。

ファンの方の質問メールに答えていたのだが、皆さんプライベートなことまで良くご存知で。私などファンを名乗る資格などありゃしない。

こんな紹介の仕方だと、全国百万人の山田ファンの鬻蹙を買うこと必至なので、最後にいいことを言われていたので紹介しておく。

山田「ファンの皆様、いつもありがとうございます。私たち将棋を指していますけれども、その将棋を見てくださるお客様がいて成り立っている職業だと思っています。何が一番大切かというと、将棋ファンが一番大切だと思っていますので、これからも山田久美を見捨てずによろしく願いいたします。」

すぐにこういう言葉が出てくるのが素晴らしい。多分本当にそう考えておられるのだろう。

NHKの「ドキュメント挑戦」で「[16歳の“稲妻”～島根県出雲市～](#)」という里見さんの番組があった。十分間と短時間だが。少し前に放送されたのだが、なぜ今更書く気になったかという、えーっと、あのですね、モゴモゴ…。察した方はご自分で調べてみてください。

プロ棋士多数出席のパーティで、当時八歳の里見さんが「どうすれば強くなるか」を聞いて回っている。きょとんとした感じが、なんともかわいらしい。なんと谷川先生や羽生さんと話している。すごい。そして女流の高橋和さんが、満面の笑みで里見さんと指きりゲンマンをしている。里見さんは、相変わらずきょとんとした様子。高橋さんは、里見さんに毎日詰将棋を解きなさいとアドバイスしたそうである。高橋さん自身、詰将棋作家としても有名だ。里見さんは、それ以来毎日十題以上、かならず詰将棋を解くようになったそうである。現在の里見さんのあの終盤力につながったというわけだ。

倉敷での対局にのぞむ様子をお父様が撮影している。明日の対局に当たって何かないかと聞かれ、にこやかに

「普通に楽しんでやる。」

対局当日、

「がんばってね」

「うん。」

「集中してね」

振り向いて「うん。」

ごく普通の親子だ、といたいところだが、今時珍しいくらいの、ちょっと羨ましいような親子関係ではある。

里見さんは見事、倉敷藤花のタイトルを獲得する。[里見さん自身もブログで勝利報告しているのだが](#)、信じられないくらい自然でオフガードで素直だ。新鮮である。タイトル奪取の将棋については、[プロ棋士の里見将棋評など紹介しつつ書いた](#)ので、よろしければご覧ください。

週刊将棋や将棋世界でも、里見さんの特集が組まれていた。

谷川九段 里見さんのいい部分は今もそうですが、デビュー当時から素直な感じがするところです。

全くその通りで、結局里見さんの魅力というのは、結局このことに尽きると思う。

師匠の森九段 不利な将棋をよく逆転しているけど、有利だと喜んじゃって。良くなったとき時に勝ちきれないのは私に似ているね。

なんともホノボノとした師弟である。二人とも終盤がメチャクチャ強いが、二人ともどこか人の良い甘いところがあって。

きらりっ娘仲間の室田女流初段 普段は面白いですよ。あまりおしゃべりではないけど、たまに辛口だったり。そういうところがかわいくて。

お父様 あれは外向きの顔で、本人はものすごくひょうきんな子です。

お母様 お笑い系とか、俳優さんでもちょっと変わった個性の人が好きなんですよ。それから柔道の石井さんとか。

そういう一面もあるそうだ。

姉弟子の島井女流初段 香奈ちゃんは純粹で、けがれのないところが将棋にも表れていると思います。笑顔がかわいくて守ってあげたい存在で、会った時はなんだか照れくさくて、いまだにうまくしゃべれなくて。本当の妹のような感じです。

よくもここまでいってくれたという感じだが(笑)、言いたいことはとてもよく分かる。

こうして周りの証言を聞くと人柄が良く伝わってくる。[この似顔絵](#)も、そんな人柄をよくとらえていると思う。

(以上、全て週刊将棋の里見特集より。ただし、ご両親の言葉のみ、将棋世界の吉村達也氏の記事より。)

将棋界のアイドルというべき存在だが、谷川先生の言われるとおり、とても素直な感じで、こちらも素直に応援したくなる。しかし、本人はあまり浮ついたところがないし、目指すべきところも実にしっかりしている。「16歳の“稲妻”～島根県 出雲市～」でも、このように言っている。

「(女流の)タイトルをみんな獲って、男性棋戦で活躍したいです。」

頼もしいではないか。実際、周囲が本当に期待しているのは、男性棋士と互角に渡り合ってくれることなのである。

## 梅田望夫

---

梅田さんは無条件な将棋愛の人。私と比べるのはおこがましいけれど、いわゆる「将棋界内部の人」でない視点があるのが共通していると勝手に考えてます。

「[daichan's opinion](#)」が更新されて、[駒落ちについて書かれている](#)のですが、ついでに過去記事をつらつらと眺めていたら、面白いのを見つけました。観戦記について、梅田望夫さん、遠山四段、片上五段の鼎談がブログ上で行われています。

[My Life Between Silicon Valley and Japan](#) 毎日新聞夕刊「ダブルクリック」欄・第九回「将棋の魅力」

[My Life Between Silicon Valley and Japan](#) 新聞社の将棋担当者への提言: ネット上に長い観戦記を

[遠山雄亮のファニースペース](#) [梅田望夫さんのブログより](#)

[遠山雄亮のファニースペース](#) [梅田望夫さんのブログより](#)

[daichan's opinion](#) [観戦記について](#)

[daichan's opinion](#) [観戦記について](#) [引用ふたつ](#)

梅田氏が言われているのは、新聞の観戦記が短すぎて、対局の読みの多様さ深さが大幅に抜け落ちているので、ネットを活用して補うべきだということ。遠山氏は、そういう声を将棋界内部の人間も真摯に受け止めるべきという考え。片上氏は、ネットの「即時性」に対抗する手段を、今後の観戦記は考えるべきという主張です。

私のようなオジンファンにとって、かつて新聞の観戦記は重要な情報源で、実際毎日楽しみに読んでいました。ほかに情報源がほとんどなかったこともあるのですが、あの時代の観戦記者には独特の文体のスタイルがありました。なんとというか、講談調というか、劇画調というか、ご存知の方なら説明しなくても分かると思うのですが、読み物自体としてもなかなか楽しめるものだったのです。無論、あのスタイルを今そのままやったら、かなりアウト・オブ・デートになるのは否めませんが、現在にも現在なりのスタイル、読んで面白い文章であって欲しいとかねてから思っていたところです。

現在の観戦記は、対局者や解説者の読みの紹介盤外こぼれ話を淡々とまとめているのがほとんどだという気がします。短字数でやむをえないのかもしれませんが、もう少し思い切って「個性」を出して欲しい気がします。特に、ネットやBSや週刊将棋で、タイトル戦の棋譜や解説はほとんど分かってしまうわけですから、「読み物」としての魅力がないと多分読まれないでしょう。実際、私自身、正直に言いますが新聞の観戦記は気が向いた時以外はほとんど読んでいません。結構自分でもコアな部類のファンだと思うのですが。以前の記事で散々ふれたのですが、坂口安吾が将棋について書いている文章が、自分の中では最高のものです。安吾は将棋は全然しないのですが、扱っている対象が、升田、木村ということもあって、面白くてたまりません。まあ、こういう一流作家の例を出すのは、反則かもしれませんが、ちょっと引用してみます。

升田八段が、ウアア、ウウ、とデッカイ声で唸って、復員姿をピョンと直立させたかと思うと、ガクンと勇ましく、かがみこんだ。口をへの字に、大目の玉で盤面をハッタと睨んで、勇気リンリン、勇気リンリン、勇気リンリンか、と唸っている。前名人は、ゆっくりと、静かに瞑想型、盤面から顔を上げ、天井を見て目をとじたり体を起こして紫煙をはいたり。・・・。

坂口安吾 「観戦記」より

まあ、対象が升田なので二重に反則なのですが、こんな調子で延々と続くのです。但し、これは長文の例なので、新聞の観戦記の参考にはならないのですが、とにかく「読み物」としての面白さが必要だと思いま

す。将棋ファンといっても、レベルが様々で観戦記に求めるものが違うのですが、新聞の観戦記が、一応将棋ファン以外のすべての目にふれる性質上、多少レベルを下げてでも、読み物としての面白さを追求することを真剣に考えるべきだという気がします。坂口安吾の将棋関係文章を、ざっと紹介しておきます。

ちくま文庫 坂口安吾全集 7 「勝負師」「九段」

ちくま文庫 坂口安吾全集 17 「観戦記」「将棋の鬼」「坂口流の将棋観」

もう一点、梅田氏が指摘されている、ネットの活用について。新聞の短文では物足りないので、ネットの長文で補うというのはとても魅力的なアイデアです。但し、これについては片上五段が指摘しているように、ファンによって求めるものが違う気もします。

将棋ファンを分ける一つの要素として、「指し手の詳しい解説を望む層」と「そうでない層」というものがあると思います。他に「棋力」(高い・低い)「見る or 指す」などいくつかの要素があるでしょうが、この要素は中でも最も厄介なものだと思います。

専門誌については「詳しい解説を望む」層を優先でよいのですが、新聞の観戦記については違うような気もします。特に、こうして将棋ブログを書いたりする人間は、普通コアなファンばかりでしょうから、その意見ばかり聞くと間違えるような感じもしないではありません。私見を述べると、新聞の観戦記については、全く将棋が分からない人間でも、読んでなんとなく楽しくなってしまうような記事にすべきなのではないかと思います。

但し、梅田氏の意見の中で、コメント欄で述べられている次の部分については完全同意です。

umedamochio 『棋譜の周囲にオープン観戦記をどんどん許すというのが、本当はもっと大切なことなんですよね。でもそれはもっとネット戦略上級編なので (いきなりだと絶対に新聞社等に理解してもらえないから)、いずれまとめて提言を書くつもりです。』

もしこれをしたら、ネットが相当盛り上がるのは間違いありません。オープン観戦記を書くのは、プロでもアマでも構わないわけです。技術的には、私が「[プロ棋士も是非このスタイルでの自戦記を](#)」で書いた、棋譜再生プラスコメント方式を使ったら、なおさら面白いでしょう。

但し、ご指摘の通り「新聞社の理解」と、棋譜の著作権の問題があります。棋譜の著作権については、現在宙ぶらりんの曖昧な状態が続いています。法的には、あまり根拠がなさそうなのですが、「知的財産権」でカバーする考え方もあるようで、私のようなシロウトには正直判断しきれません。

ただ、チェスでは、棋譜の著作権なし、が定着して、自由に棋譜を扱えているようです。もし、「将棋の棋譜の著作権なし」をやった場合に、実害が出るのは、棋譜データを売っている「将棋年鑑」とか新聞社の有料ネット中継でしょう。どの程度の利益が上がっているのか全く不明なのですが。有料中継の方については、棋譜を見たいというより「ライブ感」が重要なのでしょうから、少なくとも対局終了までは、棋譜をさらさないというルールさえ決めておけば、それほど損害は出ないのではないのでしょうか。「将棋年鑑」の方は、どうしようもありませんが、そこで失う金銭的な損害と、自由化することで期待できるネットの活性化と将棋ファンの増加によって期待できる利益とを、どう天秤にかけるかということでしょう。もっとも、ファンとしての本音を言うと、それぐらいはやってちょうだいよ、ということなのですが。

どちらにせよ、梅田氏が「まとめて提言を書くつもり」と言われているので、一般ファンとしてはそれを待ちたいと思います。





産経ニュース コラム・オピニオン 梅田望夫

まずは梅田望夫氏のネット観戦記の基本的特徴

はやい。 迂闊にも後日まとめるものかと思っていたら、当日に複数の超長文記事を5つも仕上げている。これがネットの性質を生かした最大の売りだろう。ネット中継については、普段から中継担当者たちが練達の達人芸を披露してくれているが、長文の「記事」を当日にこれだけ大量にアップしたのは恐らく初だろう。

とにかく文章量が多い。 説明不要だろう。まるで、対局者二人かが膨大な量を読んでいるのに張り合っているかのように。

分かりやすい。 この記事を書こうと思ってすぐ気づいた。余計なことなど言わなくても、記事を読んでもらえば全て分かるじゃん。

一般人向け 記事冒頭に書かれているように、将棋マニアは数的にはさほど多くない。むしろ、それほど詳しくないけれども興味があるという人間が圧倒的多数のはずだ。そういう人間が読んで楽しめるように書かれている。実は、これは梅田氏自身が「ウェブ進化論」「ウェブ時代をゆく」(「私塾のすすめ」)の著作で進めてきた方向でもある。ウェブの専門家にだけでなく、なるべく多くの人間に分かるように説明し、一般人にも役立ててもらいたいという願いを、将棋の世界でも実行しようとしているのだ。プロ将棋を、将棋マニアだけの占有物から、「指さない将棋ファン」のみならず、完全な門外漢にまで開放しようとする試み。

引用豊富。単に、自分の考えたことだけを材料に文章をつづっているのではない。羽生や佐藤との対話を、豊富に織り込みながら、本局に話題を限らず、将棋にも限定せず、一般読者が興味を持って読めるように工夫してある。他者の発言をどんどん取り入れるのは、ウェブで常に自己を他者に開いている梅田氏らしいやり方ともいえる。

格調が高い。しかし、梅田氏の観戦記は、従来の「人間的将棋観戦記」とは、完全に一線を画する独特なものである。羽生や佐藤と親交のある梅田氏は、彼らの将棋に対する突き詰めた取り組み、プロフェッショナルな姿勢、芸術家のような繊細な感性、求道者的な一途さ、といったものに強く打たれているようである。彼らから受けた人間的影響に加えて、梅田氏のもともとの個人的嗜好も関係しているのだろうが、単純化して言うと「格闘技としての将棋」というよりは「アートとしての将棋」という見方を好まれているようである。まるで、素晴らしい絵画や高尚な音楽を鑑賞するかのよう、将棋を高雅に高踏的に楽しんでいる。しかし、一方で棋士に対する人間的な関心も失われていない。

ミーハーなファン気質。 梅田氏に対してこんな表現を使うのが失礼なのは分かっているが、勿論ほめ言葉である。子供のようにプロ棋士に憧れ尊敬している。梅田氏自身、普段どんなに激務の最中であっても、将棋の棋士に会ったり、将棋の話をしている時には、実に楽しげなよい顔をしていると人に言われたと、ブログに書かれていたことがある。ウソだと思えば、[この写真](#)を見てもよい。こういうのを満面の笑みというのだ。羽生や佐藤までつられて、すっかりなごんでしまっているではないか。

で、あとは、万が一まだの方がおられたら、是非読まれてみてください、で終わりにしてもよいのだが、大量の文章を書こうという梅田氏の情熱が私にも伝染したのか(笑)、この程度では物足りないので、以下雑感も蛇足で付け加えておこう。

## 羽生の銀と佐藤の桂

羽生は、「つなぎ」の役割を果たす銀を一番良く使うそうである。駒組みの際にも、駒のつながりをとて意識しているのだと。あの名人戦第三局の終盤で打った 6九銀。敵陣深く打ちこんだ銀が、守りの金を追いかけて回しながら、中段まで生き物のように動いてきて森内の入玉への攻めを「つないだ」とはダジャレになってしまったが。

一方、佐藤の桂の話は初耳であるし、ちょっと意外でもある。桂使いの名手といえば、中原誠である。軽妙に誰にも真似の出来ない桂の使い方をする。しかし、佐藤の棋風は決して軽快ではなく、むしろ剛直である。イメージに合わないのだが、佐藤自身の説明を聞くと、他の駒は自然に使うことになるが、桂という駒は、自分で意識して意志的に使う必要があると考えているらしい。この辺が、佐藤らしい表現だと思う。佐藤は、一番変り種の動きをする他の駒とは異質な桂を、「自分の意志」で使いこなそうとしているのだ。中原が桂に自由に遊ばせているとしたら、佐藤は、自由な桂の動きすらも自分で支配しようとして戦っているともいうか。

はからずも、本局のポイントになったのは 2七桂。しかも、打ったその桂を 1九桂成と空成りした。普通では考えられないし異筋の桂なのだが、羽生の角が身動きをとれなくなって、一気に佐藤ペースになった。強引な意志の力の桂打ち。

## 将棋には闘争心は必要ない、他力本願

羽生が言うには、要するに将棋は一人では指せないということだ。一方、相手が指し手によって主張したことに対して、闘争心で自分の主張を貫き通そうという考え方はあるはずだ。実際、そういう考え方で指しているプロ棋士も実は多いのではないだろうか。しかし、羽生の場合は、お互いのエゴをぶつけ合って強いものが主張を通すというような将棋観とは無縁なのだろう。相手の出方に応じて、その場で最善と思える指し手を自然に選択してゆく。

かつて、島が言っていたことがある、「羽生さんは私が悪い手を指すと、ため息をついたりしてガッカリした様子をするのですよね。アレはこたえます。」と。羽生の場合は、相手が悪い手を指すことを期待することなどなく、最善の手で応えてくれて最良の将棋を作品としつくりあげたいという気持ちがあるのだろう。それと矛盾するようだが、私は羽生の勝利に対する執念は人一倍だと感じる。しかし、それは単なる勝利へのあくなき執念・本能というよりは、お互い最良の手順を尽くして最良の作品を作り上げるためには、決して欠かせぬ動機という意味合いがあるのではないだろうか。いわば、将棋という神聖な競技においては、「勝つ」という目的に全神経を注がないと将棋の神の意思に反するからベストを尽くすのであって、個人としての勝ちだけが問題ではないというでも言うか。

羽生とはまったくタイプが異なる加藤一二三だが、氏は教会で祈るときに、「対局に勝つこと」ではなく「全力を尽くして戦うことが出来るように」祈るそうである。羽生にも、それと似たようなところがあるような気がする。

## 科学者の目

対局自体は、2七桂を羽生が厳しいと感じすぎたために対応を誤り、以降大差になり終局したということのようである。ただし、やはり感想戦で調べてみると難くなる変化があったようだ。

二人がお互いに「むつかしい」を連発する様子が描かれている。この二人には限らないことだが、一流の棋士ほど、そう簡単には将棋は終わらないし、形勢も簡単に傾かない、双方がベストを尽くして最善手を指しさえすれば、梅田氏の言う「均衡の美」が保たれるものだというほとんど信念のようなものがあるように感

じる。

将棋のことがよく分かれば分かるほど、将棋に対してどんどん謙虚になっていくようなところがある。まるで、修行に没頭する宗教者が、かすかにでも神や偉大なものや悟りの存在を察知すると、そういう存在に対して怖れを抱くかのように。「指さない将棋ファン」のひとりである [okadaic さんが、羽生をこう評していた。](#)

「将棋と羽生善治」の関係は、ゲームとトッププレイヤーというよりは、「神と聖職者」の関係に近いやはり、佐藤康光も「聖職者」の一人なのだと思う。但し、二人は全く違う宗教なのだとおもう、というのが私の言いたかったジョークである。これは将棋マニアにしか喜んでもらえないかなあ。

梅田氏は、「指さない一般ファン」の代表だというのが、実は全然「一般」でもフツーでもない将棋ファンである。[金子金五郎の観戦記を全て読破しようとし、一般ファンが何十年もかけて読む棋貴を一週間で集中して読破する実験](#)を敢行したりもしている。

梅田氏にとって将棋観戦気を書く上での「ロールモデル」は間違いなく金子金五郎なのだろう。残念ながら、私は読んだことがないのだが、[梅田氏のはてなハイクで、一部金子の文章を読むことが出来る。](#)いかにも梅田氏好みな感じのする高踏的にして哲学的な文章である。本質的に梅田氏の将棋観に合致しているのだろう。

「ロールモデル」というのは、すごい有名人でも恥ずかしがらずにあげてみて、自分の性向を分析するのに使ってしまう方がいいらしい。なので、私ごときも堂々と言ってしまうと、将棋観戦記のロールモデルは坂口安吾である。安吾の観戦記は、金子とは対照的にもきわめて人間的にして、いい意味で通俗的である。升田、木村、大山、塚田といった千両役者を対象に得て、将棋を通じて人間を、人間を通じて将棋を語るというスタイルだ。

実は、安吾自身も将棋はルールしか知らない「指さない将棋ファン」だった。梅田氏は、終局までずっと対局室に張りついて二人を観察していたそうだが、安吾も分からないまま升田や木村の姿を見つめ続けるのが特技だった。

いうまでもなく、あの二人なら将棋など分からなくても全く退屈しないだろう。その一挙一動をそのまま描写するだけで名記事になる。しかし、羽生や佐藤では、なかなかそういうわけにはいかないだろう。佐藤の場合 A 級順位戦というすごい例があるが、あくまでアレは特例だろう。梅田氏も二人の対局姿の描写を試みているが、それほど強烈なものというわけにはなっていない。むしろ、梅田氏の観戦記で面白いのは対局以外で二人が語った言葉である。二人が、どのように将棋という「対象」に向き合い取り組んでいるかの描写である。

安吾の観戦記では、あくまで個々の「人間」が主役であり、「将棋」はそれを引き立たすひとつのゲームに過ぎなかった。しかし、梅田氏の観戦記においては、あくまで「将棋」自体が主役であり、登場する個々の「人間」は将棋という神聖なものに仕える存在である。いかに、羽生や佐藤が個人として傑出していても、二人ともあくまで将棋という神聖なる対象(神)に使える聖職者なのだ。

昔と違って将棋に人間味がなくなってしまうというのは、ある意味正しいのかもしれないが、しかし、それは「将棋」の真理をより深く究めるようになったために、「人間」が「将棋」に謙虚に仕えるようになったからだともいえるだろう。

その魅力を正しく伝えるのは、昔と違ってむづかしい。棋士の人間的魅力を言えばすむという話ではないのだから。梅田氏は、独自の手法で、そうした現代将棋の魅力を、一般の人間にも伝えようとしているのか

もしれない。

これだけの情熱的な観戦記を読ませてもらった以上、梅田氏も「聖職者」の列に加えても構うまい。

### 【梅田望夫観戦記】(3) F1 と装甲車

ところで「野球術」という本がある。熱狂的野球ファンで政治評論家のジョージ・ウィルが、四人の野球知性に密着取材して現代野球の神髄を解き明かした不朽の名著である。その中にこんな言葉がある。

『ほんとうの野球ファン、すなわち深い知識と豊かな想像力と鋭い観察力にめぐまれた野球ファンになるのは、そう容易なことではない。ぼんやりと野球見物するファンがナイフで木を削っている人々だとしたら、ほんとうの野球ファンとは、石を彫り刻んでいる存在に近い。石を彫り刻むという行為は、彫る人の心に、たえずなにかを問いかける。そもそも、ゲームを見に行く際に、「テイク・イン」という言葉の使われるスポーツが野球以外にあるだろうか？ 野球の場合、われわれは「明日の晩の試合、テイク・インしようぜ」などという。ほかの競技だと、こんな言い方はしない。これは野球特有の言いまわしだ。野球というスポーツには摂取すべきものがたっぷりある。摂取したものを吸収(テイク・イン)する時間もふんだんにある(といっても、ありあまっているわけではない)。だからこそ、こういう言い方が生まれたのかもしれない。』

将棋を見る楽しみは、純粹に将棋の内容についてのみではない。根底には将棋というゲームの無限の奥深さがあるにしても、ただストイックに指し手のことのみ考えるのは、なんと貧しい将棋の楽しみ方だろう。大の男二人が、盤面をはさんで、とんでもなく長い時間を過ごすのだ。そこには、「人間的なあまりに人間的な」要素が横溢する。

無心に読みふける美しい姿、髪をかきむしりボヤいて何とか必死に勝負手を発見しようと模索する姿、何時間も駒が一つも動かない大長考、各棋士に固有の独特のクセ・習慣、控え室での軽口、食事に何を頼むのか、何を盤側に持ち込むのか、普段どういう人間でどういう性格なのか、職人芸によるとびっきりの駒と盤、誰と誰が仲が良くて誰と誰が犬猿の仲なのか、等々、あらゆる人間的な要素が将棋を楽しむ格好の材料になる。

野球と将棋は似ている。どちらにもね「間」が存在する。野球は、のべつまくなしに走り回るサッカーと違って、投球投球ごとに間があく。その間に、ある者は次の配給を推測し、ある者は守備体系を確認し、ある者はプレーとは一切関係なくひいきの選手に熱視線を送り続け、ある者はバッターに猛烈な野次を飛ばす。しかし、投球の瞬間だけは、誰しもがプレーのみに集中する。

将棋も、指し手指し手の間に「間」が生じる。そして、それは野球の場合よりもはるかに長く退屈だ。もし、その間中、ひたすら将棋の指し手についてのみ考え続けているという人間がもしいたら、私は彼に(あるいは、最近彼女は彼女かもしれない)、こう言い渡すだろう。

「将棋指しになりなさい、あるいは心の病院に即刻入院しなさい。」と。

竜王戦第一局は、テレビ中継がなかった。私にとっては「間」を楽しむ大切な手がかりなので、とてつもない痛手であった。しかし、今回は幸い梅田望夫の、とてつもない観戦記が存在する。「間」を楽しむために、これを利用しない手はあるまい。そこには、将棋を「テイク・イン」する、あらゆる材料が贅沢なまでに用意されている。

それでは、

## 【梅田望夫観戦記】(1) 正しいことが正しく行われている街で

そして今年の6月12日、棋聖戦第一局の観戦記を書いた翌朝、燕三条から東京に帰る新幹線の中で、羽生さんが突然、私にこう言ったのだ。

「今年の竜王戦は、パリでやるんですよ。」

羽生さんが名人位を奪取して永世名人の資格を獲得する5日前のことである。

私はふと答に窮し「ああ、そうなんですか」と、少し気の抜けた返事をしてしまった。なぜなら、渡辺明竜王への挑戦者はぜんぜん決まっていなかった段階だったし、羽生さんの1組5位ギリギリでの挑戦者決定トーナメント進出がやっと決まったのもその3日前(6月9日)のことで、「渡辺羽生戦が確定」などというような状況ではまったくなかったからだった。

しかしその後も、羽生さんは新幹線の車内でしきりにパリの話をしていた。そして東京駅で別れたあとすぐに、パリ対局の日程についてのメールまで届いたのだった。

「ああ、羽生さんは今年、名人と竜王の両方を取って永世七冠になるぞと、固い決意をしているんだなあ」

と私は思った。

羽生には二つの顔がある。将棋についてまるで批評家のように冷静に語る羽生、そしてもう一つは徹底的な勝負師であり勝ちに誰よりも執着する羽生。梅田とのプライベートな場面で、羽生のとてつもない勝利への強固な意志が、やわらかな日常的な会話に露出した瞬間。全く普通の人間にしか見えない羽生の、とんでもない勝負師としての自負がポロリとこぼれ出た瞬間。そんなものを目撃してしまっただけで、梅田が是が非でもパリにいかざるをえなくなったのも当然である。

一方、渡辺のエピソードで、今回もっとも印象的だったのはこれだ。

### ベルサイユ宮殿にて羽生善治名人と

昼食後、ベルサイユからホテルへの帰途、渡辺竜王は「せっかくパリに来たんだから、サンクルー競馬場に行きたい」と、パスをとめて途中下車。

今日は午後五時から対局室検分、それから前夜祭がありますが、それまでに戻ると言って出かけて行きました。

「いやあ、対局前日に競馬場に行くなんて、考えられないですよ」とは、佐藤棋王の感想。渡辺竜王の神経はとても図太く、じつにリラックスしています。

竜王戦でも、渡辺は、二十歳で登場したときから、「自分の家のようにふるまった」そうである。この勝負師としての線の太さが、渡辺の変えがたい魅力である。しかし、「妻の小言」を愛読している者なら、誰もが知っているだろう。渡辺が、きわめて繊細にしてデリケートな神経の持ち主であることを。渡辺は、勝負師としての資質を完全に兼ね備えている。「豪胆にして細心な男」なのである。

「妻の小言」は将棋界きっての名ブログだが、唯一の欠点といえば、渡辺が極端な虫嫌い・弱点だということ、恐らく羽生にも伝えてしまったことであろう。

### 【梅田望夫観戦記】(3) F1 と装甲車

ちなみに、今日明日の対局にのぞむ羽生さんの抱負は「パリらしく芸術ともいえる将棋を指したい」である。

この抱負がまさしく現実のものとなったのは、昨日の記事で書いたとおりだ。一方、囲碁将棋ジャーナルで棋聖就位式の羽生善治スピーチが流れていた。

将棋というのは長い歴史があって、日本的なものを実感することが多いんですね。これは将棋に限らずに、日本が持っている伝統文化、お茶でもお花でも歌舞伎でも能でも、全部そうなんですけれども、共通する何かがあるのかなと思っています。そういうものを見直そうとか再発見しようとかする風潮とか流れが出てきているのかなと、感じていますし、私自身も棋士ですので、将棋を指していく中で、そういうものを表現していければと思っています。

羽生は、一体何を、そしてどこまで遠くを見て将棋を指しているのだろうか。

### 【梅田望夫観戦記】(7) 羽生世代の信頼関係

私がこれまで読んだ羽生世代についての文章でいちばん感動したのは、羽生世代より三、四歳若い行方尚史八段が、13年前に、19歳の時に書いた文章だ(ちなみに私は、将棋の本や雑誌を読んで感動した部分があると必ず筆写して、ネットの「あちら側」に置いてある。だから必要なときにすぐ引用ができる。たとえそれがパリからであっても)。

『羽生名人、佐藤康竜王ら「57年組」の存在は、僕に重たくのしかかってくる。ただ、漠然と奨励会生活を過ごした僕と比べて、奨励会入会時あるいはそれより前からのライバル関係を、十年以上続けている彼らは、考えられる上で最良の環境に、あらかじめ祝福されていた。

一種の桃源郷に自意識が芽生える前から身をおいた彼らは、夢におぼれることもなくリアルな少年時代を過ごすことに成功するのだ。ほしいものは、すでに分かっている。その道のりを歩むことによって、大抵の大人よりも面白い人生を生きることになるだろう。うぬぼれがちな少年ならば、ここで鼻にかかって達観してしまうのだが、彼らはさきに自らを律することによってそれを防いだ。うぬぼれると、すぐに置いてけぼりにあったから。将棋に乗とられ、なんだか体が重たくなっていき、街の空気が肌に合わなくなったが、奨励会で競い合うことが楽しかったから、日常なんてどうでも良かった。普通であることに、軽蔑にも似たあこがれも持ったが、「ジャンプ」を買って読むなんてことは想像もつかないことだった。

こうして彼らは棋士になり、次第に勢力を拡げ、ブランド名までつけられた。』(将棋世界 95年1月号)



これ、十九歳の行方が書いたというのだ。あまりに名文過ぎて何もつけ足す言葉が見つからない。行方は、たまたま将棋指しになったが、そうでなければ、ミュージシャンなり、漫画家なり、もの書きなり、とにかく芸術家系統の職業についていた人なのだと思う。間違っても、勤め人は無理だと思う。

そして、そういう行方のようなタイプが退屈して投げ出してしまわない魅力が将棋には確かにあるのだ。実際にプロになった者にしか分からない将棋のとてつもない魔力をこの一節ほど見事に伝えているものはないと思う。「将棋に乗っ取られ、なんだか体が重たくなっていき、街の空気が肌に合わなくなったが、奨励会で競い合うことが楽しかったから、日常なんてどうでも良かった。普通であることに、軽蔑にも似たあこがれも持ったが、「ジャンプ」を買って読むなんてことは想像もつかないことだった。」

このような将棋のプロたちに、我々は無限に嫉妬せずにいられないではないか。

そして、そのプロのトップを争っているのが、今回の渡辺と羽生、羽生と渡辺の二人なのだ・・・。

# 「観る」という行為は実は恐ろしく深いのだー梅田望夫「シリコンバレーから将棋を観る」

2009年04月25日

---

クルーゾー警部でおなじみのピーター・セラーズは、晩年に「チャンス」という不思議な映画を残した。知的障害をもつ「チャンス」は、ある富豪の大邸宅に庭師として住みこみ、一度も屋敷の外に出ることなく暮らしている。しかし、主人の死とともに追い出され、初めて外の世界に飛び出す。全く疑いを知らない静謐な人柄に人々はひきつけられ、誤解は誤解は招き、ついには大統領候補にまでなりかけるといふコメディである。

チャンスの唯一の趣味はテレビを「観る」ことだ。外部の世界の騒ぎに巻き込まれることは決してない。屋敷の外に出ても、周りの人々や世界の喧騒をひたすら静かにテレビを観る様に見守り続ける。その落ち着きがますます人々を感心させる。本当は知的障害で、ただテレビを観る様に世界を観ているだけなのに。という皮肉。しかし、セラーズが完全になりきって演ずる「チャンス」は、まるで本物の聖人のようだ。この映画を観ている人間はいつしかこのように疑問を持つようになる。「果たして、人々は本当にチャンスに騙されているだけなのだろうか?」と。

人間はあくまで自分で「行為する」主体である。ひたすら「観る」だけというのは、どちらかという神の領域に近い。半ば聖人のような「チャンス」が、そうだったように。

将棋の場合も、人生を生きることとの類比でいうならば、実際に自分で指してこそ本物である。勝ったり負けたり、読む苦しみを味わってこそ、初めて自分のものになるし、そのことで本当の喜び、充足を得ることが出来る。それと比べて単に将棋を「観る」だけというのは、なんと浅はかな行為なのだろうか?

しかしながら、ただひたすら「指す」だけが正しい行為とはいえない。もし、将棋を指すことで自分を忘れ果て、ただ勝つことに夢中になったり、自分の将棋の内容を全く省みないのならば、それは愚かしい時間の無駄、単なる気晴らしにとどまるだろう。人生を生きることと汲々として、全く自分自身を見失っている人のように。

一方、将棋を「観る」行為だけでも、それが真剣に集中する行為であれば、ほとんど芸術的な行為にまで高めることが可能だ。この梅田望夫の本は、要するにそういう観方を徹底的に自分の身をもって人体実験してしてみた人間の報告書である。梅田は謙遜しているが、無論実際は将棋の腕前も世間一般ではかなりのものなのだと思う。但し、将棋の世界のマニアというのは恐ろしいものなので、そういう連中と比べれば相対的に素人というだけのことである。とにかく、限られた時間で自分では指すことなく、どれだけ「観る」行為を深く出来るかを追求している。率直に言って、梅田は根がストイックで真面目そのものなのだ。梅田が、羽生をはじめとするストイックなヒーローたちに強く惹きつけられるのも、よく分かるような気がする。

巻末の羽生との対談で梅田はこのように言う。

梅田　ところが、そんなふうにするのをはばかりられる雰囲気、将棋の世界にはありますね。だって「じゃあお前、指してみろよ」と言われたら、指せないわけですから(笑)。「いったいどこに感動したんだ」と問い詰められれば、言葉が浮かばない。・・・でもね、たとえば絵画なら、自分で絵が描けなくても「感動した」という自由が許されているわけです。システイーナ礼拝堂の「最後の審判」を見て感動した、と言って「おまえ、描けないだろう」とは言われませんか。将棋を観て感動したと言うと「え、君どのくらい指せるの」となる(笑)。

必ずしも深い専門性がなくても、「最後の審判」に直截的な感動を受けたり、美術専門家よりも深いところを「観る」ことは十分可能なのである。なぜ、将棋でそれをしてはいけないのかと。

そうは言っても、頑固な将棋ファンはこういうかもしれない。そんなのは言葉の遊びだよ。将棋を口々に指せないのに、深く将棋を楽しむことなんて出来るわけないさ、と侮蔑的に呟くだろう。しかし、これについては対談で羽生が恐ろしい言葉で答えてくれている。(梅田のブログでご自身でも引用している。)

将棋の局面というのは、つねに揺れ動き続けているようなものなんですよ。或るプロ棋士に訊いてこっちが良いと言っても、違うプロ棋士は自信がない、と言う。タイトル戦に限らず、大部分の対局は、その微妙なギリギリのところ、ずっとずっと揺れ動き続けているものです。私は、その途中の感じを観るには、アマとプロとの差は、じつはあんまりないんじゃないか、という気がしているんです。稀にすぐ大差がついて形勢がハッキリする場合は別として、そうして競っている状態のときは、みんな見解が分かれるものです。針がどっちに振れるかわからない、切羽詰まった場面を見るには、将棋の実力は関係ない。最低限ルールさえ知っていれば、そのときの雰囲気とか「場」を、かなり捉えることができるのではないかと。もちろん、その一手に潜む裏側の意味、といったことは、プロ棋士のほうが観えていますよ。ただ、プロは将棋を観るときに、そこだけを観てしまうきらいもある。プロの見方と一般的な人の見方は、補完する感じで表現できたら、一番いいのではないかと思います。

本当にプロでも分からないような局面でも、いや、そういう局面でこそ、プロとアマの観る感じには差がないといっているのだ。将棋の第一人者が。羽生は梅田相手だからといって、リップサービスで嘘を言ったりするようなタイプではない。将棋のプロフェッショナルとして、本当に深くそう考えているはずである。「最後の審判」のギリギリの本質を感受する能力には、玄人と素人で大差ないように、難解なプロの将棋が語りかけているものを観て感じる能力には、プロとアマで差がないという驚くべき発言。ある意味、自分たちプロの指している将棋が単なる専門的なゲームでなく、ある種の普遍的な美を表現し得ているという自信の現われとも言えるだろう。

とにかく「観る」という行為は、実はとてつもなく深いところまで届く行為なのである。極端に言うならば、自分で「指す」という行為が全く出来ない人間でも、「観る」達人ならば将棋の本質を全く過たずにきちんと見抜くことが出来るはずである。逆に、中途半端な専門性をもつ素人には、自分の狭隘な主観性によって将棋を素直に観ることが出来ない危険があるともいえるだろう。

単純化すると「観る」というのは客観的な行為、「する」というのは主観的な行為である。人は結局自分の人生を生きなければならない。あくまで生きるというのは自分自身の主観的な行為である。自分でしなければどうしても身につかないということは確かにある。だから「する」(生きる)という行為は尊い。だが、そこに客観的な「観る」行為が欠けるのならば、自分を失ったり自分の狭い価値観に閉じこもることになってしまう。理想の生き方は自分の「する」行為を常に同時に「観る」ことである。時分の身を持って体験しながら、それを常に冷静に俯瞰するもう一人の自分を意識し続けること。

将棋についても同じことがいえる。本当に将棋を深く楽しもうとするならば、「指す」のが良いに決まっている。しかし、「指す」達人というのは、実は常に自分の将棋を「観て」いるものである。自分の勝手な読みだけでなく、相手の指しての可能性も「観て」いる。さらに、深い大局観で指すプロならば、アマチュアがプロ将棋を観て直感的に感じるのと限りなく近い「将棋の美」を「観て」指しているかもしれないのだ。これは私の勝手な妄想だが、本当に強い一流のプロほど、弱いアマが直感的に感じる将棋伸びの感覚に対して、素朴で捉われのない感覚の共有があるのではないだろうか。

将棋では、たとえプロであっても無限の組み合わせがある将棋の指し手を全て具体的に読んで指すのは不可能だ。従って、「大局観」という一種独特な将棋に対する感覚がプロにも必要になってくる。その大局観の大元にあるのは、つまるところその人間の感性そのものである。将棋を「観る」素人と差別のない人としての能力なのだ。ギリギリのところ勝負を分けるのは、その人間の美への感覚だとまで言ったら言い過ぎだろうか。

だから、きわめて深いところでは、将棋のプロも素人も、将棋を「観る」という行為では驚くほど平等だし、専門性のない素人が、指し手を具体的によく理解しているプロよりも、将棋の本質の深いところを見抜くことがあっても全く不思議ではないといえるのかもしれない。

「チャンス」のラストシーンで、いきなりセラーズは、池の上をイエス・キリストのように歩く。もし「観る」ことを完璧に出来るのならば、人間は神に限りなく近づくのである。

そもそも、昨日は梅田さんの本について将棋ファンとしての視点からある程度きちんとした書評をするつもりで書き始めたのである。しかし、ただ普通にするのもつまらないかと思い、まず雑談からはじめたらどんどん脱線してしまい、軌道修正不能になりそのまま力尽きて終わってしまった。今日は、昨日書ききれなかったことの補足を少ししておこうと思う。

というわけで、昨日の記事は我ながら何を言っているのかよく分からない内容に見事に仕上がったのだが、梅田さんご本人があんまり変わったことを書いているのがおかしかったのか?、ブログで取り上げてくださった。

### [My Life Between Silicon Valley and Japan](#) 「観る」ことと「する」こと「生きる」こと

「シリコンバレーから将棋を観る」では、当然将棋や棋士を対象としているので、その中で梅田さん御自身の個人的なことはそれほど語られていない。しかし、この記事では梅田さんの個人史が率直に語られていて面白い。

(どうでもいいことだが、今日は「梅田さん」「梅田さん」と言っているが、オマエは昨日は「梅田」と呼び捨ての連発だったのではないかと思う方もいるかもしれない。しかし、言い訳するとあの呼び捨ては、例えば、羽生は、渡辺はというときと同じ意味の完全に自分とは別世界の人へのリスペクトをこめた呼び捨てである。イチロー、松井を呼び捨てにするのと同じこと。野球のブログで「イチローさん」とか書いてあったら、多分不自然でかなり気持ち悪いだらう。要するにスター性が高い固有名詞ほど呼び捨てにしやすいのである。将棋の世界では、まだ棋士が「イチロー」レベルまでいっていない。もっと将棋がメジャーになって「羽生が」と呼び捨てるのがごくごく普通になって欲しいと思う。)

さて、梅田さんは、将棋に関しては「観る」楽しみに徹しているわけだが、「生きる」方に関してはシリコンバレーでの多忙かつ過酷な実生活を生き抜いてこられたようである。

会社を創業してからの日常は、ぜんぜん意識していなかったけれどじつは勝負・勝負の連続で、ブラックジャックのテーブルの上のチップとは比較にならぬ金額が、自分の判断の一つ一つによって、ちょっとしたことの成功と失敗の違いによって、出て行ったり入ってきたりするものなのだということが、ブラックジャックをやり始めてまもなく、鮮やかに身体でわかってしまったからである。

12年前に会社を始めたときに、僕は本当に「自分の人生を生き」はじめ、その代償行為を必要としなくなったのだろう。

代償行為というのは、梅田さんの場合、例えば「ラスベガスで夜通しテーブルに座り続けて妻に呆れられたブラックジャック」である。梅田さんの場合、かなり高踏的な将棋ファンというイメージが強いのだが、やはり将棋が好きだけあって、実はかなり勝負事が好きなのだ分かって、ちょっとおかしい。

それはともかくとして、「生きる」という行為が<sup>o</sup>、賭博以上にスリリングで緊張感に満ちているような生を梅田さんは過ごしてきた。しかし、ただ必死に自分の生きているだけの者でも、必ずといっていいほど人間は自分の人生とは別のもの求めるものである。それが梅田さんの場合「将棋を観る」という行為だった。

梅田さんは羽生さんの対談で、将棋を仕事をする上での「触媒」と語っている。朝から順位戦のネット中継をつけっぱなしにしながら、仕事もこなし、将棋を観ていることでよいアイデアがぱっと浮かんだりするそうである。(その辺、やっぱり梅田さんは我々一般の怠惰な将棋ファンと違ってストイックなところを捨てきれない。笑)

私が昨日書いたことと強引に結びつけると、「生きる」という自分の主体的行為をしながら、それを「将棋を観る」という客観的な行為で補完し、生きることに役立てるとともに、逆に将棋を深く「観る」ために自分の生活体験をフルに生かしているという言い方が出来るかもしれない。

その際、面白いのが、梅田さんが会社の経営がブラックジャックのように「自分の判断の一つ一つによって、ちょっとしたことの成功と失敗の違いによって、出て行ったり入ってきたりするものなのだ」の述べていることだ。要するに自分の力で全てをあらかじめ判断できるのではなく、常に先行きが不透明な中で瞬時の決断を積み重ねていかなければならない。そして、その一つ一つの決断が、実は大局的には重要な意味を持つ。これって、将棋そのものではないか。

本の最後の対談で、羽生さんが将棋について一貫して語っているのも、「分かってないで」指しているということである。具体的内容は本を読む方の楽しみのためにここでは詳しく言わないでおくが、一般のファンが思うほど、プロは先の見通しをクリアに立てて指しているわけではない。ほとんど五里霧中の中を航海する様な感覚の言葉を、羽生さんが次々に発するのには、読者は驚くはずである。

しかし、。そうだとはいっても、漠然と指しているわけにはいかないもので、全く見通しが立たない中でも、次々と決断し続けなければいけない。ここまで来ると、逆に将棋が梅田さんの会社の経営と実に性格が良く似ていることに気付くだろう。

つまり、ちょっと通俗的な表現になることを恐れずに言うならば、将棋は人生の縮図そのものなのである。従って、何も将棋が分からない人間でも、人生を各人なりに深く生きてきた人間ならば、将棋の本質を「観る」ことは可能なのだ。逆に、単なるゲームに過ぎないように思える将棋だけを指してきたプロ棋士も、もし真摯に深く追求してきたならば、「人生」についても驚くほど深い理解を示すことができるはずなのである。羽生さんが、その最たる存在といえるだろう。

だから、「将棋を観る」というよりは「生きながら将棋を観る」という表現がいいのかもしれない。そういう「観る」行為は。全く将棋と関わらずに生きてきたどのような人間にも可能なはずだし、梅田さんのこの本をキッカケにして、そういう将棋の魅力を知る人間が一人でも増えてくれればと思う。一将棋ファンとして。

さて、予定に反してもまたしても、この本の中の将棋についての具体的内容を全く書けずにもう力尽きかけている。もう一つ、どうせならやはり将棋自体とは全く関係ないことを書いて終わりにしよう。

この本の編集は、okadaicさんという女性が行っている。彼女自身「指さない将棋ファン」であり、梅田さんは「彼女の、ときには狂気さえ宿った「将棋の世界への愛情あふれる言葉」で励まされることがなければ」本書を書き上げることは出来なかったそうである。

当然然私は okadaic さんのことを全く知らないが、彼女は twitter で盛んに活動していて、私はその読者の一人なので、彼女の「狂気」というのはひそかによく理解で来てしまう。okadaic さんのブログにこんな記事がある。

[帝都高速度少年少女！ 近況：相変わらず指せませんが、将棋の本を作りました。](#)

1970年生まれの羽生善治が七冠王になったのは、1980年生まれの私が高校へ進学する頃のこと。当時、同年代の女の子たちの一部に、熱狂的な羽生ファンが生まれた。運動部のエースより軽音部のカリスマより、じーっと何か考えているメガネ君に弱いタイプ。そういう子は、当時あらゆるメディアに引っ張りだこだった「天才・羽生」の、一局ごとの勝敗から、個人的なことまで、いろいろ知りたくて、他の子たちがスポーツ選手やアイドルを追いかけるように、熱心に彼を追いかけたものである。何を隠そう、私もその一人だ。

こんな将棋の楽しみ方もあるのだ。現在のプロ棋士には男しかいない以上、女性のファンが居るのが、本当は当然のことともいえる。しかも、将棋を全くさせないタイプの女性ファンが、もっと増えていいはずなのだ。

勿論、okadaicさんは男として興味があるからだけで将棋を「観て」いるのではなく(笑)。やはり梅田さんと同じ文脈での将棋の不思議な文化性に興味があるのである。それも、我々普通のおじさん将棋ファンが全く考えもしないような将棋の文化性に着目していて面白い。「女性として生きながら将棋を観る」ことだってあっていいはずだ。

それにだいたい、将棋イベントに行くと必然おっさんの溜まり場という現状を、我々もそろそろなんとかしたいではないか(笑)。

梅田との対談で、羽生は現代将棋の一種の「分かりにくさ」について、様々な表現を用いて語っている。この本は将棋ファン以外でも楽しめるように書かれた本なのだが、将棋ファンとしてはあの部分が大層スリリングで面白かった。

最近片上五段が、ブログで現代将棋について論じていた。まるで羽生＝梅田対談に呼応するような内容である。

#### daichan's opinion 将棋の「奥」について

現代将棋では、序盤の定跡を徹底的に体系化して解明したり、またその延長で中盤・終盤まで通して明快な法則性ののっとなって勝ちきる技術が追求されてきた。その先駆者が羽生である。ところが、現在進行中の将棋では、そうした法則性を見出すのが難しくなっているというのだ。

具体的には、後手番でいきなり角を交換したり、乱戦に持ち込むことで、「高速道路」の定跡からいきなり降りて「けものみち」を歩くように仕向ける。

実は将棋界では、先期に歴史的な出来事が起こった。それまで常に先手の勝率が5割を超えていたのが、初めて後手版の勝率が五割を割ったのである。その大きな要因が、後手番での「けものみち」戦法といわれている。

しかしおそらく、法則探しの旅にはある程度「ケリがついた」。そしてこれからは例外探しの旅が始まる。否、もう始まっている。

例外を掘り当てるのに必要なものは、たぶんすこしの勇気と、直観と、そして大量の読み。見たこともない局面において頼れるのは読みしかないから。そして将棋というのは原理的には、解にたどりつけるはずのものだから。たぶんこれからは「いくら時間があっても足りない」ような局面を前にする機会がどんどん増えることだろう。

片上は東大出身の理論派若手棋士である。「高速道路」の整備を徹底的にしてきた世代の若手が、現代将棋に対してこうした認識を示しているのは、とても興味深い。

ここまで読んで、梅田本を読んだ人ならばすぐ気付くだろう。これこそ、対談で羽生が盛んに言っていたことだと。羽生の表現は相変わらず巧みで多様で面白いのだが、一箇所だけ引用してみよう。

羅針盤がきかないんですね。

(中略)

いや・・・やっぱりその、いかに曖昧さに耐えられるか、ということだと思っているんですよ。曖昧模糊さ、いい加減さを前に、どれだけ普通でいられるか、ということだと思うんです。

その際大切なのは、羽生は最初から将棋をそのように訳が分からないものと考えていたのでは決していない



ということである。むしろ、従来の力勝負重視の将棋に対して、革命家として大改革を唱え、徹底的に合理的な作業を積み重ねて、将棋を出来うるかぎり法則的体系的に解明しようと努力しようとしてきた棋士なのだ。その辺の事情については、梅田が第一章で解説している通りである。

従来の将棋の歴史を単純に図式化して説明すると次のようになるだろうか。

### 第一段階 過去の名人達の時代

将棋は研究ではなく、最後は個人の力がものをいう。序盤研究よりも中盤終盤が大切。また、将棋の指し方に、人間的な美意識

を求め、穴熊などは邪道として名人が指す戦法ではないとされる。将棋と人生・その棋士の人間性には、大いに関係があるとされる。

### 第二段階 高速道路を徹底的に整備する時代

序盤の作戦は将棋においてはきわめて重要。また、その体系的な研究もすべき。羽生の「羽生の頭脳」全十巻がそれを象徴する。中盤終盤も、ある程度のパターン化法則化は可能で、それもできうるかぎり行う。

旧来の美意識などにはとらわれず、可能な戦

法は全て追求する。将棋と人生は全く別物。とは、この時代の羽生の有名な言葉。

### 第三段階 けものみちの時代

体系化の作業が徹底して行われた後、むしろそこからこぼれ落ちる指し方にプロ棋士が生きる道を求めだした時代。序盤の高速道路の定跡をそのまま進むのではなく、いきなり見たこともないような局面に導き、そこでは各個人の力が問われる。しかし、あくまで合理的な序盤知識やある程度されたパターン化された終盤技術を、ほとんどの棋士が共有しており、差別化は難しい。本当に個人の創造性が問われる段階。

断っておくが、この分類自体、極端な単純化を行ったものであり、なおかつ内容自体も全く違う見方が可能である。また、時代区分自体明確でなく、例えば羽生などは第二期の時代から、現在をビジョナリーとして予知するような発言もしていた。

つまり、現代将棋は、のっけから非合理を求めているのではなく、徹底的な合理化をやりつくした末に、突如出現したようなカオス状態なのである。だから、第一期の名人が「人生と将棋は関連がある。」というのと、羽生が同じことを言うのでは、全然然意味が違う。

大風呂敷を広げるならば、これは将棋の世界のみならず、恐らくどんな世界でも起こることのはずである。徹底的に合理性を追求すること、そのことで体系的に建築を築き上げようというのは、基本的には全世界で起きたことである。その価値には計り知れないものがあるし、その意義を否定するのは馬鹿げている。確かにそのことで「世界は進歩する」。しかし、そういう追求には、必ずといっていいほどどこかで壁にぶち当たる。いくら追求しても分からない部分が出てくる。

将棋以外の世界のことと対比して言うと、どうしようもなく通俗的な話になりそうなので、やめておこう。ただ、将棋の場合、あくまで根底には勝たなければならないという鉄則がある。哲学的に遊んだりしていたら、あっという間に100連敗くらい喫してしまうだろう。そういうきわめて厳しい勝負の世界で、合理化の追求のはてに、そこかこぼれ落ちるむものが見え出しているというのは、やはり興味深いことだといわざるをえないだろう。

必ずしも、プロ棋士全てが、意識的にそういうことを行っているわけではない。だから、それを説明する人は必要だ。梅田もその一人だろうし、また羽生が何よりも凄いのは、プロ棋士でありながら、明らかに世界

に対する感受性や直感を兼ね備えていて、それを極上の言葉で表現する能力を有していることなのだ。

ハイハイ、もう梅田さんの本の書評は飽きましたか？(笑)すみません。もう今日でおしまいになりますから。さらに書きたくなったキッカケはこの記事。

### Party in Preparation 『シリコンバレーから将棋を観る』を読む

梅田氏の本は、将棋を観る楽しみを狭い範囲の将棋ファンから広く開放しようとする試みである。この記事の筆者は、そういう梅田氏の普及努力に敬意を払いながらも、どの程度の間が本当に将棋の「棋譜」を楽しむことができるのかについて、自らの将棋ファンとしての経験に照らして冷静かつ具体的に指摘している。

「しかしそれほど(将棋が)強くななくても、将棋を観て楽しむことはできる」(『シリコンバレーから将棋を観る』98ページ)とは言うが、その「それほど強く」ないレベルというのはどの程度か。著者は、「ある局面の最善手や好手やその先の変化手順を、自分で思いつけなくても、それらを教えてもらったときにその意味が理解」(同98ページ)できるレベルを想定しているようだが、それはアマチュア2、3級以上ではないだろうか。私の経験からも、プロの将棋の変化手順を理解できるようになるのは「アマチュア2、3級」というのは頷けるところである。ただ、「アマチュア2、3級」が「それほど強くない」レベルなのかとなると少々首を傾げざるを得ない。

このアマチュア2、3級程度というのは、将棋ファンならば納得できる数字だろう。梅田氏の本を読んで、いきなり名人戦のネット中継を見ても、少なくとも「棋譜自体」を楽しむのは流石に無理である。無論、梅田氏は棋譜自体以外の楽しみ方も提示しているわけだが、やはり将棋を観る楽しみの根本というのは将棋の棋譜を鑑賞することだ。筆者指摘の通り、アマ2、3級というのは、何の努力もしないで将棋を漠然と観ているだけでは到達できないレベルである。やはり、自分でルールを覚え、指してみ、詰将棋を解くといった基礎作業を重ねて到達することが出来るというレベルである。但し、そういう努力さえ惜しまなければ、多くの人間が到達できるであろうレベルではある。

どちらしても、将棋の内容自体を理解して楽しもうとするならば、入り口の敷居がある程度高いというのは否定しがたい事実である。それが、野球やサッカーを観るのとは根本的に違うところだ。

昔読んだ本にニコラウス・アーノンクルの「古楽とは何か 言語としての音楽」というのがある。アーノンクルは古楽器を使って演奏し、古典音楽が当時演奏された形も緻密に考証するいわゆる「古楽器派」の親玉的な存在である。(今は、もうそんな狭いくくりでは言えない人になってしまった。)実際、その演奏は、それまでのものとは全然違う。この本の中で、音楽を「聴く」という行為について、様々挑発的な論考をしている。

(現在手元に著書がないので、記憶だけを頼りに書くのでかなりいい加減なことをお断りしておく。)そもそもかつては現在のように演奏者(作曲家)と聴衆が明確に分離していなかった。演奏するのは音楽を深く学んだ専門家、それを聴くのは一般大衆という図式ではなかった。例えば、モーツァルトは自身の手紙の

中で「通のために音楽を書いている」と語っている。当時の聴衆は、自らも楽器を演奏する専門的な知識を持つ人たちばかりだった。モーツァルトの手紙から面白い箇所が引用されていて、モーツァルトが効果を狙って書いた部分に聴衆が反応している様子が書かれている。それと比べると、現在は音楽が漠然と「聴く」だけのものになり、大衆消費財に成り下がっている、とか何とかかんとか。

これを読んで、学ぶことが多いと思いながらも、どうしても納得できないものを感じた。じゃあ、クラシック音楽というのは一部の貴族のためのものなのかと素朴に感じたものである。

しかしながら、クラシック音楽というのも将棋同様、本当に理解しようと思ったら、ある程度は楽曲の形式を学ぶ「努力」が必要なのは間違いない。そうしなくても例えばモーツァルトの局を深く理解できることは可能なかもしれないが、間違いなく最小限のことは学んだほうが良いに決まっている。

つまり、専門性のある深みのある対象を本当に「楽しむ」為には、そのために「努力する」ことも、ある程度は必要なのである。現代人は、何かとすぐ安易に「批評」したがる。むしろ、現代人に必要なのは、何でもすぐ「楽しむ」ことを求めるのでなく、そのために「努力する」のを惜しまないことなのではないか。

その場合、音楽と将棋で違うのは、音楽の場合は努力しなくても理解できる(出来たつもりになる)ことである。実際、素人が専門家よりも音楽の深いところを聴き取る事はありうるだろう。しかし、将棋の「棋譜」についてはもっと条件は厳しい。流石に将棋のルールを知らない人間が、将棋の棋譜自体を深く理解するのは無理である。だから、将棋の場合、アーノンクールが理想とする状態が、最初から確保されているという皮肉な言い方も出来るかもしれない。

私自身、とても自慢できるような棋力ではないのだが、それでもある程度将棋を学ぶことでプロの将棋をますます面白く感じるということを実際に体験している。それこそ、苦労して学べば学ぶほど、「観る」楽しみが増す世界である。

とはいっても、現実問題として、大多数の人間には、将棋をそれほど深く学ぶ時間的余裕がない。梅田氏もその一人で、その中で、ご自身としてどれだけ「観る」楽しみを追求できるか試している。また一般の人間にも将棋を「観る」楽しみを知ってもらいたいと思ってこの本は書かれている。そして、これは将棋ファンとしての鼻窟目かも知れないが、現在のプロ将棋というのは「棋譜」以外の付加価値部分でも、多くの人間が楽しむ要素が十分にあると思う。それについては、梅田氏の本を読んでいただければよい。まさしく、そういうことを書いている本なのだから。

但し、梅田氏も実際はプロ将棋を理解する「努力」を積み重ねている人だ。それは実際に将棋を指すという行為が中心でないにしても、膨大な時間をかけてプロ将棋を「観て」、関連書籍を読んでいる。やはり、何かを深く楽しもうとするためらは必ず努力する必要がある。これは、どうしようもないことだし、将棋に限らず、何についても言えることなのではないだろうか。

今回は、一将棋ファンとして梅田氏の「将棋ファン以外のための本」を読んだ。私は、将棋を通じて梅田氏の事を知り、ウェブ関係の著作もほとんど読んでいる。そうしたウェブ関係の書物でも、今回の将棋の本でも共通して感じるのは、梅田氏の「楽しむ」能力のとてつもない高さである。この本の中で、梅田氏は棋士たちを「純粋な存在」と言っているが、それは恐らく梅田氏本人にも当てはまる言葉のはずである。将棋ファンとて傍で見ている、将棋を心から楽しんでいる様子が羨ましいし楽しい。

日本という精神風土では、純粋に「楽しむ」と言う行為が馬鹿にされがちなところがある。分かったような物言いと大人を気取ったシニシズムが横行している。それに対して、梅田氏がよく言われるオプティミズムは異彩をを放っている。あっけらかんとして明るい。しかし、特に今回の本では将棋ファンとしてよく理解できるのだが、梅田氏が「明るく楽しむ」ために払っている「努力」はほとんど法外と言ってもいいくらい凄いものである。そういう「努力」を感じさせずに「努力」を楽しみながら対象を心から「楽しむ」こ

と。将棋の本としてに限らず、梅田氏の本が語りかけてくるのは、そういうことなのだと思う。

梅田氏は、この本で「将棋」を心から楽しんだ。しかし、読者は、何もそれに従って将棋だけを楽しむべきということではないだろう。対象が何であれ、何か心から楽しんではみたらどうだろう。そのための努力が楽しみになるくらい没頭してみたらどうだろう。梅田氏のこの将棋の本は、そのように読者に語りかけているようにも思える。

さて、私が書いた梅田本の書評については、全部または一部を、英語はもちろん中国語でも韓国語でもスペイン語でもフランス語でも、どなたが何語に翻訳してウェブにアップすることも自由、とします (許諾の連絡も不要です)。

誰もしねーよ。

棋聖戦中継 plus 梅田望夫氏、棋聖戦第1局リアルタイム観戦記

1 急戦矢倉をめぐる

「シリコンバレーから将棋を観る」は、羽生善治の「変わりゆく現代将棋」の話から始まる。矢倉の序盤で、従来はある程度、定跡手順を自動的にこなして指す事が多かった。それに対して、羽生は序盤の本当の入り口の段階の手順、5手目に 7七銀とすべきか 6六歩とすべきか、それに対して後手がどのような対策を取ることが可能なのかを、徹底的にこの連載で再検証した。いわば、自明とされる常識的な矢倉の序盤が、本当に棋理を追求したものになっているかを、一度白紙に戻して徹底的に疑い、矢倉戦法の本質を問い直そうという試みである。

そして、後手番で普通に矢倉の駒組みに追従するのではなく、先手の初手からの数手をとがめようとする指し方の一つが、本局で現れた「急戦矢倉」なのである。つまり、急戦矢倉は単なる一つの作戦というだけではなく、矢倉の思想における根本的な革命的意義も備えている。

梅田は、そのような羽生のものの考え方に刺激され深い共感を覚えて、決してアマチュアにとって易しいとはいえない「変わりゆく現代将棋」を耽読した。それは、単に将棋の戦術書を読むというのではなく、他の世界とも通底する本質的なものの考え方の指南書として向き合うという特殊な読み方だったのかもしれない。そこから、梅田は、将棋世界と別のウェブ世界などの共通性、あるいは将棋が別世界を逆に先取りしている意味を、鮮やかに描き出してみせている。

梅田は twitter で、ひたすら将棋のことをつぶやき続けているが、今年の竜王戦で、渡辺が羽生相手に立て続けに急戦矢倉を採用した際の過剰ともいえる反応には、一人の follower として、なぜなんだろうという疑問を覚えずにはいられなかった。梅田の著作を読んで、その疑問が氷解したというわけである。

そのような経緯があつての、今回の棋聖戦第一局での、後手番での羽生の急戦矢倉採用なのだ。梅田としては、もう天にも昇らんばかりの心境だったのではないだろうか。無論、羽生は有効な作戦だから採用しただけなのかもしれないが、梅田としては羽生からの強烈なメッセージを感じずにはいられなかっただろう。羽生は時々こういう戦法選択をすることがある。立会人が振り飛車の達人の時に振り飛車を採用したり、解説に来ている棋士が得意とする作戦を選んだり。詳しい将棋ファンなら、多分誰もが知っていることだろう。余裕があるともいえるのだが、羽生には一種他力思想のようなものがある。梅田との対談でも言っていたが、将棋は自分だけで指すのではなく、相手がいるので、とにかく自分のできることはした上で相手に任せるといふ思想。将棋の対局だけでなく、作戦選択においても、一番勝てそうだという戦法を自分一人で勝手に仮想して選択せず、始まってしまえば自分の思うようには行かないに決まっているので、その場にいる人間が喜ぶ戦法を大胆に採用する。選ぶというより、サイコロの目をふるような駆けの要素のある方法。出たさいの目の通りにどうぞとでも言うような。オールラウンダーの羽生だからこそ、出来ることなのだが。

とにかく、梅田にとって恐らく現在一番思い入れの強い急戦矢倉になったのだ。そうなったら、梅田の「将棋マニア」の血が沸き立たないわけがない。今回のウェブ観戦記は、かなり将棋マニア向けの専門的な内容になっているという印象を受けた。それは、今述べたような事情が関係しているのかもしれない。

梅田の著作の中で、その後手急戦矢倉の復古ののろしを上げた渡辺が、「変わりゆく現代将棋」を読んだ感想を語っている部分がある。渡辺は羽生の志の高さに反応して、やはり現代矢倉の本質を鋭く問う発言を

していて興味深い。

5手目の局面での後手の利点は(1)角が通っていること(2)金銀の位置を決めていないこと。対して先手のデメリットは(3)角をとめていること(4) 6八銀と矢倉に決めてしまっていること。この4条件を組み合わせて、後手が対抗出来る形を見出したいと思っているのですが、具体策が分かりません(笑)。「やってみて、ダメならまた新しい手」の繰り返しになりそうだと感じています。

その手段の一つが急戦矢倉というわけである。つまり、渡辺は自明とされる後手の矢倉の駒組みに簡単に従うのではなく、本質的なところで先手の矢倉作戦をとがめる方法を探っているのだ。「将棋の神様～0と1の世界～」で渡辺の記事を紹介しているように、渡辺も羽生同様に将棋の神様を意識しながら将棋を指している棋士の一人といえるだろう。

ところで。その竜王戦で後手の渡辺が立て続けに急戦矢倉を採用した二局では。どちらも羽生は敗れている。特に、最終第七局は、最後までどちらに勝利の女神が微笑むか分からない将棋史に残る激闘を、結局渡辺が制した。羽生にとっては、痛すぎる敗戦である。普通に考えれば、思い出したくもないだろう。「縁起の悪い作戦」として、自分では採用しないよう封印しても、何ら不思議ではない。

その作戦を、羽生は採用した。しかも、今回の対局室で羽生はなにかうれしそうだったという。羽生は、個人的な好き嫌い、将棋の勝ち負けだけで将棋を指していないのだ。急戦矢倉という、将棋の思想の根本を考える作戦が、竜王戦に出てきたことを喜び、その意義を素直に認めて、自分でも指してみようという無私な態度。直前の王位戦リーグでは、なんと先手渡辺に対しても、羽生は急戦矢倉を採用している。渡辺も、また十分に対策を練って、逆に先手での新手を試して応じている。

将棋に特許はなく、他人の開発した作戦を誰もが自由に用いることが可能だ。有効とされる作戦は、たちまち大流行し、多くの棋士の実戦や研究を通じて、瞬く間に解明される。つまり、自分の好き嫌いでプロ棋士は作戦を選択するのではなく、有効とされる作戦に「従う」のである。渡辺が再発見した急戦矢倉を羽生が使う。渡辺もまた逆に羽生に返して答えを問うことも近い将来あるだろう。彼らは、自分の主張をエゴイスティックに貫こうとしているのではなく、将棋の神様に忠実に仕えて、将棋の真理を見出すために日々努めている神官たちなのである。

(続く)

棋聖戦中継 plus 梅田望夫氏、棋聖戦第1局リアルタイム観戦記

2 大局観

去年の竜王戦第一局でも、梅田は羽生と渡辺の大局観の違いについて、突っ込んだ取材と考察を行っていた。

【梅田望夫観戦記】(12) 佐藤康光棋王、現代将棋を語る

【梅田望夫観戦記】(13) 羽生名人、大局観の勝利

普通ならどう考えても渡辺良しと思う展開で、実は自分が戦えることを見切っていた羽生の不思議で秀逸な大局観が話題になった一局である。解説の佐藤康光が、世代による大局観、将棋観の違い、現代将棋の欠点と関連させて説明していた。

今回は、後手の羽生の急戦矢倉に対して、木村が中央に位をはり、それを銀二枚で支える伸び伸びとした陣形を敷き、一方後手の羽生はまるで渡辺のように穴熊に組み替えてひたすら玉を堅く囲って、それをいかして攻めかかろうとする態勢を築いた。

つまり、羽生が世代の違う渡辺竜の指し方を採用したようにも見えた。解説の深浦も「渡辺竜王の影が見えますね、今日の羽生さんの指し方には。」と指摘していた。

ところが、この局面の味方について対局者や検討陣の見方が大きく分かれたのである。

解説の深浦は後手持ち、藤井は先手持ちだった。

対局者の木村は、このあたりの局面では自分が指せると考えていたようである。そもそも、そういう指し方を自分で選んだのだから、それについては納得できる。一方、意外なことに羽生は自分が苦しい将棋にしたという見方をしていた。

「駒が偏り過ぎて、攻め味がなくなって、作戦負けだった。仕掛けられてダメでしょう。先手の銀二枚のおかげで動けなくなってしまった。」

羽生棋聖は、「やる手がなくなってしまって、囲いに行くのではだめですね」と、穴熊は不本意という様子だった。

つまり、玉は堅くなったものの、駒の働きのバランスを欠いているという大局観である。基本的に羽生世代の大局観というのは、このようなものだと思う。ネット中継を見ていてメールをしてきた渡辺は次のように述べている。

現局面は後手持ちです。深浦王位も言っていますが、先手の指し方はいかにも木村流で、5三銀右急戦に対して、この局面を目指す人は少ないのでは。現局面、後手は暴れれば良いのに対して、先手は丁寧な指し口が求められます。

やはり玉を堅めているのが大きく、あとはうまく暴れられれば良いという大局観である。渡辺は現場におらず、ネット観戦しながら、ある時点だけ見て言ったサービスなので、これだけで判断してしまっはフェ



アではないかもしれないが、それでも基本的な大局観の違いははっきりしていると思う。

渡辺は、羽生が自分が得意にしている穴熊への組み換えを採用しながら、それでは苦しいという感想を述べたのを、かなり複雑な心境で聞いたのではないだろうか。

しかしながら、羽生は渡辺世代の大局観を無下に否定しているわけではなく、認めるべきところは認めている。梅田の今回の記事中にもこんな部分がある。

羽生さんは、新著「勝ち続ける力」(柳瀬尚紀との共著)の中で、渡辺さん以降の世代について、こんな面白いことを話している。

『渡辺さんの世代は、その(将棋の)体系化がかなり具体的に形になった時代に育ってきた第一世代です。ですから、将棋が学術的な形で学んでいける環境の中で、成果を吸収したり分析したりして強くなってきています。(中略) 渡辺さんの世代は、一つの形を見て、将来性があるかどうか、とても鋭い判断力を持っているんですよ。(中略) あの世代は、余計な情報、今の段階では使えないような知識はっさい持ちません。どんな歴史があったとしても、ぱっと先入観なく、分け隔てなく切り捨てることができるんです。ですから、この形はすごく未来が描けそうだとか、この形にはほとんど将来性がない、という見極めはとてもシビアで、はっきり見えています。(p213-214)』

歴史的な先入観。余計な知識にとらわれずに、合理的に形の適性を見抜く力があると言い換えてもよいのだろうか。つまり、羽生は渡辺世代の先入観のない合理的でシビアな判断能力には素直に敬意を払っているのである。しかしながら、当然世代によるものの見方の違いは当然ある。直接的には自分達が強くなる過程で学んだ将棋の影響は避けられないだろうし、間接的にはその世代の人間としてのものの考え方、感じ方の違いもやはり影響しているはずだ。

そういう世代間の大局観の違いに着目して将棋を鑑賞してみるのも面白いだろう。但し、今回の例のように世代には関わりなく個人による差が出ているので、単純に世代の問題で割り切れないことは、言うまでもない。

### 3 木村八段のこと

先に述べたように、今回の梅田観戦記は、将棋の内容自体を純粹に伝えるという硬派な側面が強かった。但し、木村八段について書いている部分については、将棋ファン以外にもよく分かるように人間を描いている。木村の繊細さ、他人に対する気配りがタイトル戦では邪魔になっているのではないかということである。そういえば、木村がタイトル戦に初登場した際に戦った渡辺竜王とは対照的である。

渡辺が竜王を獲得した際に、森内と戦った時には、とても初タイトル戦とは思えない落ち着きぶりだった。それどころか。まるで対局場でも我が家のように振舞ったと、ある観戦記者が述べていたと記憶する。また、感想戦でも、森内に対して人をくったような発言をしていたし、当時見ていて、大変な若者が出現したと思ったものである。

そういう部分が木村には欠けているのだろう。でも、それはその人間の個人的な性格なのだから、変えるといっても無理だろう。木村は、A吸棋士になるほどの才能の持ち主でありながら、奨励会をなかなか抜けることが出来なかった。やはり、そこにも人間的な優しさが関係しているのかもしれない。

しかしながら、今回の梅田観戦記を読んで、改めて木村の人間性が好きになったというファンも多いだろう。久保棋王同様、何度もタイトル戦に出たりからんだりする力があり、やはりタイトル未経験者の中で

は、現在間違いなく一番タイトル獲得に近い男である。勿論、本シリーズも含めて。

#### 4 梅田の将棋マニアと将棋啓蒙家という二つの顔

今まで述べてきたように、今回は思い入れの深い急戦矢倉だったこともあるのだろうか、梅田の観戦記は、かなり将棋の内容自体に専門的に踏み込んだ内容だった。将棋ファン向けとも言えるだろう。

将棋というのは、深く理解すればするほど、のめりこむものである。理解するにつれてどんどん専門性が高くなっていき、一般の人間には分からない仲間内の符牒をささやき出す。それが将棋の魅力ともいえる一方で、一般のファンにとっての敷居の高さにもなってきた。

梅田は著作でもウェブ観戦記でも、そういう敷居の高さを取り払い、なるべく多くの人間に将棋を楽しんでもらえるようにすることを大きな目標に掲げている。その意味では、今回の観戦記は、将棋ファンには十分満足のいくものである一方、一般ファンにとっては、やや理解がたい部分があったかもしれない。

しかし、梅田も将棋啓蒙家の役割を意識的に果たそうとしていながらも、同時に将棋の専門性にどんどんはまり込みつつある将棋マニアでもある。今回は、急戦矢倉の戦型、そして見事な解説ぶりをみせていた深浦や藤井が近くにいたこともあり、すっかり将棋マニアになりきってしまったのではないだろうか。それは、一将棋ファンとしては、とても嬉しいことだ。梅田さん、ようこそ将棋の底知れぬ魅惑の泥沼の世界？へといったところである。そのように徹底的に将棋マニアになりきることは、将棋を外部の世界により分かりやすく伝えるためにも絶対に役立つはずである。

梅田はよく「均衡の美」ということを言う。対局者二人が最善を尽くすと、局面は絶妙な均衡を保ち続け、それがとてつもなく美しいという意味である。梅田自身の中でも、将棋マニアと将棋啓蒙家の二つの力があり、観戦記を書きだした頃は、後者が優勢だったが、今回は、どちらかということ、前者の力が勝っていたのかもしれない。

両方の要素を求められてご本人は本当に大変だろうとは思いますが、将棋マニアの力を強化することでより深く将棋を理解鑑賞しながら、それに見合った形で将棋啓蒙家としてもパワーアップして行って頂きたいものだと思う。そして、二つの力が絶妙で高度な「均衡の美」を保つのが理想形だろう。

と、傍で言うだけなら本当に簡単なんですけれどね・・・。

棋聖戦中継 plus 梅田望夫氏、棋聖戦第5局リアルタイム観戦記

今回の梅田観戦記はコンピューター将棋と人間将棋の比較がテーマだった。解説に最適任の勝又教授を得て(というよりは、梅田の熱烈ラブコールによってひっぱりだされて 笑)、大変興味深い話を多く聞く事ができた。以下は、その感想メモなのだが、私はコンピューター将棋に興味があつてごく基本的なことは理解しているが、完全に文系人間で具体的な技術面が全く分かっていない。なおかつ、棋力も大したことは無いという二重苦?なので、もしかすると勘違いによる記述もあるかもしれないことを、あらかじめご了承ください。

(2) コンピュータに不向きな将棋より

「コンピュータに不向きな将棋になりましたね。」

と勝又さんが言う。

「手の狙いがちょっと目にわかりにくい将棋は、コンピュータには難しいんです。先手・木村さんは5八玉と3八金の形で、8七歩を打たずに頑張るぞという意志を示して、後手の8五飛を拒否したんですが、それで羽生さんは8四飛から2四飛とした。羽生さんのほうは、先手に2八銀という悪い形を強要するために、2四飛から8四飛に戻して二手損をしているわけです。たとえば「5八玉と3八金」の狙いの意味がわかるのは相当先ですね。「8四飛から2四飛」の効果、つまり先手の壁銀が先手にとってマイナスになるかどうかは、コンピュータ的には相当先にならないとわからない。つまり、相手の手を拒否する狙いの効果がずっと先に出るような将棋って、コンピュータには読みにくいんですね。」

横歩取りは、コンピューターだけでなく、弱いアマチュアにとっても分かりにくい。勝又六段の指摘は、そのまま我々弱いアマチュアに対してのアドバイスにもなりうるのである。振り飛車や矢倉なら、弱くてもとにかくどこが争点になる(なりそう)なのかは理解できる。しかし、横歩取りの場合、どの部分がポイントになるかを、まず的確に判断しなければいけないわけだ。

コンピューターの一番の課題は当然手が広い序盤であるわけだが、特に横歩取りの場合は指針方針が立てづらい。また、中住いという囲いとはいえない囲いも用いなければならない、穴熊や美濃と違って、堅さの判断がコンピューターには難しいだろう。例えば、ボナンザは駒の三手間の位置関係によって、囲いの堅さを判断しているそうだが、中住まいの場合は多分三点の関係だけでは判断できない。局面全体との関わりで判断しなければならない。それはコンピューターには難しいだろう。

ただ、全く対策が無いわけではない。例えば、本局では木村の2八の壁銀が最後までたたったわけだが、それは言語化してコンピューターに理解させることは可能なはずだ。金銀に邪魔されて玉が逃げ込めない状態の形に、きわめて高いマイナス評価を与える方法など。現在のソフトが、具体的な壁銀にどの程度対応しているかは不明だが、そういうきめ細かい一つ一つの言語化によるコンピューター教育が、やはり必要になっていくのだろう。

### (3) 時速 40 手の研究のぶつかりあいより

コンピュータの課題は、この 43 手目まで来られるかどうかなのだと、勝又さんは言う。この「時速 40 手で進む展開」の裏には百科事典並みの変化があり、それを全部コンピュータに正しく入れるのは無理だから（結論が日々変わるから。最近では定跡に依存しようとするソフトが負けやすい状況とのこと）、この局面に来るまでに、トッププロによる落とし穴にコンピュータがハマってしまう可能性が非常に強いのだそうだ。

定跡の問題も、コンピュータにとっては重大な課題だろう。人間もある程度定跡に頼って指すわけだが、どんなに弱い人間でも、定跡でも何か変だと思った瞬間に自分で対応するモードに即シフトチェンジできる。しかし、コンピュータの場合、その融通がきかない。定跡を入れた部分までは、無条件にそこまで指してしまう。それだと、定跡による価値評価が誤りだったり、日々革新する定跡に対応していないと、少なくともプロレベル相手だと致命傷になる恐れがある。まして、横歩取りのように、激しくて大技が決まりやすい将棋では、その危険が高まる。だから、勝又の指摘のように、定跡に頼るソフトは勝ちにくくなる。本当に無難な間違いのない定跡を短い手数だけ入れておくしかないのかもしれない。

対策として、コンピュータとしては、なるべく直線的でない定跡の戦法を選ぶというのがあるが、しかしそういう力戦だと、先述したようにコンピュータの序盤感覚では対応できないという難点がある。となると、やはりコンピュータに適した戦法は、振り飛車穴熊あたりなのだろうか。とにかく、一目散に囲うことを目指すと。ただ、それも最近では研究が行き届いていて、プロ相手に工夫なしに穴熊にすると、あっという間に作戦負けになるので、きめ細かい定跡入力には欠かせないだろう。

この辺は、素人が考えてもいかにも難しそうで、プログラマーの皆さんが頭を悩ますところなのではないだろうか。要するに、コンピュータの永遠の課題は序盤なのである。

### (7) 意表のコンピュータの指し手を控え室で検討。おっ、その手を羽生が指した！ より

「この手にどう指すんですかねえ」

屋敷さんが笑いながら、

「これ、しびれてますかねえ」と言う。

この手とは、GPS 将棋がしきりに読み筋として指摘していた 4 五桂を、ここで指してみたらどうかということである。いまは 67 手目 9 一桂成に羽生さんが長考しているさなか。

4 五桂について、控え室の棋士たちの直感は、3 三の桂はそのままにして、後手は右辺の駒をさばっていくべき、という棋士の感覚に、コンピュータの感覚はちょっと違う、と言うのだ。

(中略)

そこで羽生さんの手がモニター上にあらわれ、指したのが果たして 4 五桂であった。控え室で歓声が上がった。

「羽生さんは、先入観がないからなあ」とは勝又さん。「コンピュータが、この 4 五桂を読み筋に入れているだけで、褒めなくちゃいけない。」

序盤では、コンピュータとトッププロの感覚の差が顕著な将棋だった。、具体的には羽生の 3 一玉の構想を GPS が全く読めなかったこと。(ここでも、コンピュータに対する言語化としては、相手の歩がきかない筋にある玉の安全度は高い、というのがあるのかもしれない。今回、人間の感覚とコンピュータの感覚が異なる一方。もしその気になれば言語化できる部分も結構あるのではないかと、個人的には感じた。そのためには、勝又六段のようなプロ将棋の言語化の達人の力が必要だろうか。)

しかし。この 4 五桂については、コンピュータの先入観のなさが長所になって現れた。プロ棋士がいうように、とにかく右辺の駒を捌きたいと言うのが人間の感覚、人情?である。しかし、本譜のように 4 五桂から先手玉を寄せに行ってしまうえば、おわりだったのである。実際、ほとんどこの一手によって、木村といえども受けることが難しく、収集困難になってしまったのである。

羽生のような超一流のプロ棋士の特徴は、常識にとらわれない手を指すことにあるといわれる。佐藤も典型的だろう。つまり、プロであるならば、「ここでこう指すべき」という基本的な感覚は誰もが習得している。そうでなければ、プロになることは不可能だ。しかし、さらに上に行くためには、「プロの常識」を疑う勇気と柔軟性が必要になってくる。羽生の将棋が常に新鮮なもの、どの一局にも「驚きの一手」が必ず出てくるからだ。

そして、実はそういうことは、全く先入観の無いコンピュータが得意とすることなのである。人間の場合、直感的に読む筋を最初から何通りかに限定するが、コンピュータにはそういう能力がそもそもないので、基本的にはあらゆる組み合わせを読む。(技術的に全幅探索と選択探索の差はあるにしても、相対的には人間よりはるかに広く多くの手を読む。)だから、コンピュータが人間の気付きにくい妙手を発見するというのは、当然ありうることなのである。

そして、実はこのことはコンピュータが人間を凌駕する可能性の一つともいえる。現在は、評価関数の制度が高くないので、優劣の評価をトッププロ並にはきちんと出来てないのだが、少なくとも「妙手」をコンピュータは必ず「読んで」いる。あとは、その「妙手」を選択肢の網の目に掬い上げることが出来るように、評価関数の精度を上げればよいのだ。といっても、多分それが一番難しいことなのだろう。

羽生は人間の指す将棋のチャンプであるとともに、実はコンピュータ将棋の最大の理解者なのかもしれない。

#### (10) 構想力で最高レベルを行った羽生の芸術的将棋より

本局が、羽生の人間的な構想力が最高度に発揮された将棋である。まだ、特に序盤感覚メンでは、コンピュータとの大きい佐賀あることを見せ付けた将棋だった。それを受けて埋めだせはこのように言う。

『私個人はと言えば、「コンピュータが進歩に続いて人間のプロの最高峰に挑みながら、紙一重のところで人間が勝つ」ということが相当長く続く未来の戦いを見たいと思う。』

と書いたが、私は、私が見たい未来を、見るができる、と確信した。相当先まで x-day は来ないのではないかと、私は強く思った。人間の能力の深淵を垣間見た一日だった。

いかにも梅田らしい言い方だと思う。こういう良い意味での楽天性は、梅田のウェブ関係での書物から終始一貫しているものである。ただ、個人的には私はコンピューター将棋に対する人間の優越については、あまり楽天的な見方をしていない。

本局は極端な例であるにしても、現時点では、感覚面ではまだ人間がかなりコンピューターに対して優位にあることは間違いない。それは、勝又六段による絶妙な言語化能力による説明を聞いてもよく分かることだ。

しかし、そういう感覚面の優劣と、実際の勝負というのは全く別物なのである。先ほども、少し述べたがコンピューターの基本原理は、とにかく数多く読むということである。その点だけでは、最初からコンピューターが人間に対して絶対的有利な立場にある。当たり前だ。

それでは、なぜコンピューターが人間に勝てないかということ、読んだ手を評価する「評価関数」部分が、まだコンピューターは人間に全然追いついていないからである。つまり、いくらたくさん読んでも、そのどれが実際に有効な手なのかを判断的なければ無意味だ。その形勢判断能力、大局観、将棋の感覚部分では、まだまだコンピューターは人間に対して後れを取っている。

その「評価関数」部分に関して、駒得のみを重視しない工夫や、ポナンザメソッドの自動学習の導入によって、かなり精度が上がり、そのことでコンピューターは格段に強くなってきている。但し、人間とはまだ差がある。

にも関わらず、既にコンピューターは、既に奨励会二三段レベル、つまりほぼプロレベルに到達している。そのことにこそ驚くべきである。つまり、「評価関数」は、かなり雑駁なのに、それでも圧倒的な読む能力でここまで強くなってしまったのだ。

つまり、人間の美的感覚とは別のレベルで、コンピューターは「勝つ」ことが出来る。そもそも、思考原理が人間とはまったく別なのだ。だから、人間の感覚に全く追いつくことが出来ないまま、コンピューターが勝負だけでは、人間を上回る可能性がないとはいえないと思うのである。

勿論、それは人間にとっては必ずしも嬉しいことではないのだが。そして、個人的には、私も梅田同様に、コンピューターの非情な読む能力に、感覚面でしのでギリギリで勝っていてもらいたいと願うものである。

「人間の感覚」自体について、ポナンザ開発者の保木さんが言っていることを引用して終わりにしたいと思う。人間の「感覚」というものは、人間が思っているほど絶対的なものではない。少なくとも、人間はそのことだけは、コンピューターから謙虚に学ぶべきだと思う。

面白いのは、当初、コンピューターチェスの指し手は、チェスプレイヤーたちからすれば、揶揄すべきような手であった。「あんな手を指すなんて、やっぱり機械だな」「美しくない、ただ力づくの手だ」というわけである。ところがそんな中傷に対して文字通り聞く耳を持たないコンピューターはどんどん強くなっていった。そしてディーブブルーが世界チャンピオンを負かすにいたって、「コンピューターチェスの指し手には知性を感じる」という印象に変わってきたのだ。これは意外なことだが、人間というものはそんなものなのかもしれない。コンピューターにしてみれば、単なる計算結果なのだが、その一手、たとえばポーンをひとつ前に進めた手に、人間は奥深さを感じた。「渋い！」というわけである。(渡辺明・保木邦仁の「ポナンザ vs 勝負脳より」)

梅田望夫さんは、ブログでシリーズとして金子金五郎語録を紹介されているのだが、最新回はとりわけ面白く興味深かった。

### 梅田望夫の ModernShogi ダイアリー 金子金五郎語録 (11) : 金子の将棋史観と升田幸三

金子が、升田の将棋の理論的革命的性、その序盤戦術の評価、木村などの旧来の将棋観を乗り越えた歴史的必然性などについて述べている。金子の本質を掴み取る慧眼に驚く。升田将棋の革新性については現代棋士たちの多くも気付いているところであり、羽生や渡辺といった現在のトップたちが、升田将棋に新鮮な驚きを感じて、おのおのが升田将棋から影響を受けている。その本質を同時代にあって、金子は極めて深いレベル—それは、ほとんど哲学的といっても構わない—で把握しているのだ。

また、升田も、金子の序盤作戦を高く評価していたことも、この記事では紹介されている。

それらについては、梅田さんのブログを読んでいただくのにこしたことは無いのだが、今回私が特に取り上げたいのは、金子の加藤一二三分析である。

そのときにあって現われたのが加藤一二三、二上等の二十台の人々であるが、加藤(一)の棋風をみると近代将棋といわれた木村、花田や筆者達が共通に持つ将棋観をずっと昔に飛び越えた古典に属する指し口が感じられてならない。升田も三代宗看の棋風が好きだといっていたが、加藤(一)君には伊藤印達(詰将棋の煙り詰の作者看寿の兄)を思わせるものがある。筆者はいつか本誌で加藤君の穴は序盤の感覚がすこしわるいところにあるという批評をしたが、このことは、「古典に流れている思想 将棋観 が先天的に加藤にあって、それが細密な分析に基礎を置く今の将棋を知ることが妨げているのだ」といえないだろうか。

つまり加藤(一)にある個性が強くて今の将棋を受け入れることを排除してしまうということである。しかし、この排除作用を受け入れようとする個性的な努力でもあるかもしれない。(一)君は今、その闘いをしつつあるのだと思う。

木村をはじめとする「戦前派」を、升田の「戦中派」がラジカルに乗り越えていったという文脈の中で、さらに若い加藤のことを紹介している部分である。

現代の読者は、金子が加藤一二三の本質を実に誤ることなく的確に射抜いていることに驚きを禁じずにはいられないのではないだろうか。

升田の理論、序盤作戦は現代にも通じるものがある。ところが、加藤一二三の場合は、升田とは異質であり、さらに戦前派の木村さえ通り越して、江戸時代の「古典主義」に通じるという。まさしく、それは我々が現在の加藤一二三の将棋を見て感じていることではないだろうか。

ほとんど頑なと言ってもいい序盤作戦へのこだわり。現代将棋では、飛車先不突き矢倉が最早常識中の常識であっても、飛車先の歩はまず突くものだという、ほとんど信仰に近い信念。対振り飛車に対して、居飛車穴熊など、とにかく玉を固めるのが圧倒的な主流の現状の中で、ひたすら急戦によって振り飛車を打ち破ろうとする、頑なかつラジカルな原理主義。ほとんど一人だけ棒銀を採用し続け、結果的に藤井流 4

二金の決定的対策を生み出させる姿勢。棒銀に対する決定版の対策を生み出させたのは、現代の居飛車党ではなく加藤一二三なのである。それは、決して加藤にとって不名誉なことではなく、藤井のような本物の振り飛車党(と敢えてここでは言う)にとって、加藤は懐かしい恋人のような存在であり畏敬すべきライバルのはずである。

例えば、矢倉の飛車先不突き立場から言えば、加藤の指し方ははっきり時代遅れだろう。飛車先を保留することで、自分の作戦に含み、選択を持たせるといのが、現代将棋の本質である。そういう考え方からすれば、加藤の飛車先を必ず突く指し方は、合理的な根拠がないということになってしまうかもしれない。しかし、恐らくそこには加藤なりの「江戸時代にまで遡る」古典主義の感性が裏打ちされているのだ。飛車先を突かないと何かおかしいという、ほとんど直感的な将棋に対する形式感。勿論、合理的な現代将棋においてはいとも簡単に否定されかねないわけなのだが、加藤はそんなことはお構いなしに、将棋に対する深いところに潜在する思想を直感しているような気がしてならない。

指し将棋においては技術革新が著しく、「昔の棋士より今の棋士が強い」といのが定説である。実際、加藤も若手たち相手に厳しい戦いを余儀なくされているのが現状だ。それは、事実は事実として認めるべきだろう。

しかし、一方詰将棋の世界においては、伊藤宗鑑看寿の詰将棋は、現代においても不滅の輝きを今でも失っていない。そういう、最高の頭脳が残した指し将棋には、おそらく深いところで決して失われない生命力のようなものがあるはずだ。序盤作戦等では、特に現代の目ではおおらかでぬるいところがあるのかもしれないが、例えば終盤などでは現代棋士が見ても驚嘆する手順が残されている。それは、トップ棋士たちが、江戸時代の将棋の終盤を分析する企画で現に実証されている。

さらに言えば、終盤だけでなく、かつての最高の頭脳が残した将棋の本質的な形式感には、決して現代将棋も看過しえないものが残されているのではないだろうか。それを、まだ現代の将棋では解明把握する力がないだけで。加藤一二三は、無人の荒野をただ一人行くごとく、そうした古典的な形式感を直感的に把握して、現代においても実践している人なのではないだろうか。

将棋は単純な勝ち負けの勝負である。それが良い所でもある。だから、加藤一二三の将棋を現代の目で徹底的に観察批判する作業もあっていいが、しかしもっと深いところで加藤一二三の将棋の本質的な価値観を抽出する作業だってあっていいはずだ。

チェスの世界では、カスパロフが過去の名人たちを敬意を込めて分析するという作業を行っているらしい。将棋の世界でも、例えば羽生善治が、現代将棋の技術的成果を踏まえながらも、加藤一二三のもっと本質的なところでの美点を分析するといったことがあってもいいはずだ。遠い将来の夢として期待しておこう。とにかく、金子は、現在の加藤一二三を見てではなく、まだ二十代の加藤を見て、これだけの本質を喝破している。それだけで、金子の分析力の凄みを証明していると感じた。

加藤一二三は、つい最近朝日新聞のインタビューを受けてこんなことを言っている。

将棋は戦いであると同時に人に感動を与えられる芸術だと思っています。モーツァルトは200年たっても人々に感動を与えている。私の将棋もそうありたいと願っています。

そう、加藤一二三はまるでモーツァルトの音楽のように将棋を指しているのである。昔から今に至るまで変わることなく。



梅田望夫さんが、今度は金子金五郎の加藤一二三分析を集中的に紹介されている。加藤一二三ファン、将棋ファンにはたまらない貴重な資料である。

本来、これを元にプロ棋士や専門家に論考してもらいたいところだが、とりあえず一将棋ファンとしての感想を記しておく。勿論、素人の私には本来無謀でとてもではないが手に余る作業なので、間違い・勘違いもあるかもしれないことを、あらかじめお断りしておく。

[梅田望夫の ModernShogi ダイアリー 金子金五郎語録 \(12\) : 金子の加藤一二三論 \(1\)](#)

[梅田望夫の ModernShogi ダイアリー 金子金五郎語録 \(13\) : 金子の加藤一二三論 \(2\)](#)

これらを読んで感じるのは、金子が観察した当時の若き加藤一二三には、現在とは全く異質なものがある一方、きわめて本質的な部分では現在の加藤一二三のレイゾン・ディートル (存在理由) とでもいうべきものが既に確固たるものとして存在している。金子がすごいのは、極めて具体的に将棋に即して論じながら、加藤の人間そのもののあり方、大げさに言うと魂の傾向といったものすら透視していることである。若き日の加藤は、終盤に才気煥発な着手を連発するタイプだったようである。これは、現在のイメージとはちょっと異なる。

金子はそれを、「加藤の本領は中終盤の乱戦にある」とか「中盤戦から漸次終盤に入るが加藤は多くの敵手の予測されぬ奇手の連発で棋勢挽回乃至一打逆転で成功している」とか「中盤以後に相手の予想しない飛躍した手がとびだす」とか「中終盤の荒業的なもの」と表現している。

但し、単純な乱戦将棋ではなく、基本的な性質は「積み重ね」の将棋でありながら、そういう側面があったということのようである。

一方、加藤のその後の全盛期においては、そういう鋭さというよりは、序盤で築いた優位を派手ではないが重厚で確実に力強い手を積み重ねることで堂々と押しきるといったイメージである。

そういう変化の原因には、大山の影がちらつく。加藤は、若くしてA級に昇りつめて名人に挑戦するのだが、大山の壁はとてつもなく厚かった。加藤の若き日の対局写真を観ると、眉目秀麗のクールな美男子、とても涼しげな様子で、現在の全力集中型とは大分感じが違う。

実際、加藤自身がこのような意味を語っていた記憶がある。

自分は若い時は、将棋はそんなに力まないで指すものだと思っていた、それでも十分勝てた、しかし大山と戦ったり経験をつむことで、将棋がそんなに簡単に勝てるものではないことが理解できてきた、従って全力を傾けて対局に臨むようになった、と。

それが現在に至るまで続いている加藤一二三スタイルである。梅田さんも紹介されているが、五味康祐の表現を借りると「大山に町人根性でいたぶられ」た結果、対局姿勢も棋風も変更せざるをえなかったのだろう。金子も、大山と戦う前から既にA級で、加藤にそういう変化の兆しがあったことを指摘している。

加藤がA級にはいるとともに、序盤の芸が中終盤の荒業的なものとおよそ異った細かい将棋をみせるようになったと思う。だいたい序盤の研究をはじめると、中終盤は序盤の延長であるとする考え方が強くなってくるものである。だから、加藤が本来的に所有していた荒けずりな中終盤の性格が、

序盤の科学的な考え方というものに影響され、変化することは進歩を意味する。が、変ぼうを遂げる間の過渡期における動揺が忍び寄ってくることも考えられる。なぜ、このようなことを述べたかという、こんどの名人戦の第三局で加藤が勝ち将棋を逸していることについて、何か上述のことと関係がありはしないかと、ふっと思ったからである。勝負というのは理外の理という原因があっ てきまることが相当に多い。ここでいう理外の理とは、表面に現われない精神面のことであるが、若い加藤にはまだ彼が本来持っている荒けずりな指し方を抑制していると、そこに精神的な不調和が訪れることがある。それが表面に出てきて第三局の敗因をなした、という想像である。

加藤には、升田のような繊細な序盤感覚がないというのが金子の分析なのだが、勿論加藤が序盤研究をしなかったということではない。それどころか、この後、加藤は居飛車党の先輩山田道美の影響もあって、対振り飛車の徹底的な序盤定跡研究に打ち込む。それは、やはり大山相手だと、何の工夫もなく指して終盤の才気煥発ぶりだけでは勝てないと分かったことも関係しているのだろう。矢倉においても同様である。ただ、加藤の研究というのは、実に堂々と相手を力で打ち破るという性格のものであり、対振り飛車なら、棒銀をはじめとする急戦で堂々と仕掛けて戦果を挙げて相手を打ち破り、矢倉でも積極果敢に攻め込むという調子であった。将棋を単純明快に考える「古典主義者」加藤の面目躍如である。

ただ、金子が既に若い日の加藤をみて指摘しているのは、序盤の感覚は単に研究すれば会得できるものではないということだ。

序盤技術というものでも中終盤と同じく必ずしも、経験や研究のみで得られるのでなく、先天的なカンというものがむしろ基礎になっているというのが筆者の主張である。この仮説に立ってみると加藤がA級に入った場合、ねらわれるのは序盤であるといえそうな気がする。

特に現代将棋の序盤感覚においては、素人には分かりにくい晦渋な押し引き・駆け引きがあり、まるで騙しあいのような繊細な感覚が要求されるようである。そういうものが、おそらく加藤の性質には合わないのではないだろうか。加藤は、今でも昔以上に努力を続けていると語っている。序盤研究も独自に行っているが、いわゆる現代的な序盤感覚とは違う、単純明快に相手を打ち破ろうとする研究を続けているのではないだろうか。また、加藤が共同研究ではなく、基本的には一人で自分で考えて研究していることも関係しているだろう。それが、善悪ではなく、あくまで加藤スタイルなのである。

金子は、加藤が本格的な序盤研究に取り組む時代の前に、さらにその後に加藤が研究はしていてもいわゆる純粋な序盤将棋が好きになってから八割の力の駆け引き上手とはいえない現在の時代を予見していたかのようなようである。一つ時代をまたいで、遠くに射程を置いて予言しているかのようなのだ。

しかし、金子の分析で何と言ってもすごいと思うのは、加藤の将棋や人間の本質—時代の変化・年齢の変化とともに当然大きく変遷していく中でも核として不変な部分—を鋭く見抜いていることだろう。

一二三の将棋は率直簡明で複雑な組立て方に精力を投入しない。

今の加藤八段は青年の素直さの中に「ただ、われ将棋するのみ」といった、ドライな面があるように感じられる。昔流の「心」といったものを先に出さないのがこの世代の特色というものだろうか。

すこしほめすぎのようだが、加藤君の対局ぶりをみていると“達人”という感じに近いものをうける。考えているときでも苦しんでいる様子もなく、また、自分の着想を妙に気負う風もない。真面目(まじめ)でいながら、よそ行きも普段着もない態度で一貫している。こういって大山名人に似ているように思うだろうが、大山には何か一種のくせが底にひそんでいて、それが強味を構成しているように思える。これに比して加藤は陽性であり、表口から名乗りをあげている将棋であり、対局態度もそうだ。

特に、最期の引用は、そのまま現在の加藤一二三にあてはめても全く違和感がない。名評といっても構わないだろう。

二十歳の頃の加藤一二三を見て、ここまで本質を予言者のように見抜いた金子金五郎がすごいのだろうか。それとも、金子金五郎に既にそういうものを感じ取らせた加藤一二三の唯一無比な強烈な個性、決して変わることはないまっすぐな将棋に対する姿勢がすごいのだろうか。

多分、その両方なのだろう。

(追記) 加藤先生の若き日については、こちらの記事が紹介されています。私のおぼろげな記憶も、もしかしたらこれと関係しているのかもしれませんが。

[将棋が好きになってから八割の力](#)

今年の棋聖戦第一局でも梅田望夫さんのリアルタイム観戦記があった。本来将棋ファンなら、(2) [二手目8四歩問題と将棋の進化の物語](#)について語るべきなのなのかもしれないが、それはもっと棋力のある本格ファンに任せるとして、ワタシが食いつかざるをえないのは、当然？ (1) [相思相愛の羽生と深浦](#)なのである。

タイトルのテーマについてはじっくり論ずるとして(笑)、まずこの文章はとても興味深い「人間・深浦康市論」になっている。

昨日の深浦とのやり取りで私は、アメリカにわたってまもなく仕えた、抜群に仕事のできるスウェーデン人の上司を思いだした。同僚たちはその上司のことを「シリアス」という一言で評していたが、そうか深浦も「シリアス」な男なのだなあ、と深浦をより深く理解できた気がした。「シリアス」とはなかなか日本語にしにくいのだが、真剣で一生懸命ということだけでなく、必要以上に深刻という感じが含まれ、甘えや妥協がいっさいなく、きわめて目的志向で、目的を達成するためにはときに手段を選ばないこともある、という感じが合わさっている。そしてこの「シリアス」さは基本的に仕事上に限られ、その上司もそうだったし深浦もそうだが、プライベートのときはまったく違う顔を見せるのだ。

これは、多くのファンが深浦から感じているところなのではないだろうか。勝負に対する貪欲さが少なくとも表面には出てこない羽生世代、あるいは羽生が最近戦った少し下の世代の、木村や三浦という人間的な魅力や場合によっては弱さも感じさせるナイスガイ、ある意味面白いところがある渡辺竜王とは違って、とことん深浦はシビアである。将棋の内容も、綿密極まりない序盤の周到な準備、厳しい順をいとわずに妥協なく選択する中盤、場合によっては肉食獣のように相手に襲いかかったり、あるいはど根性で粘り抜く折れない心の終盤。実にプロらしい厳しい将棋を指す棋士である。また、対局態度でも、羽生何するものぞという気持ちがストレートに表に出てくるタイプである。まさしく、「シリアス・ガイ」。

また、梅田氏が紹介しているように、プロ棋士は深浦に対してある種屈折した感情をいただいているようである。とにかく、羽生世代が絶対的な存在として君臨し、どの棋士もが羽生打倒に燃えつつも、倒すとしたら誰がふさわしいのかという人間らしい感情もいれずにはいられないのだろう。同じ羽生世代の誰かが羽生を倒すのなら仕方ない。全く世代の違う渡辺が倒すのも納得できる、しかし、実力は誰もが認めながらも従来それほどの活躍がなかったのに、深浦だけがなぜ、という、正直な気持ちはとてもよく分かるような気がする。

また、人間的なタイプからしても、深浦はいかにも隙が無い。木村や三浦と違って(というと彼らに失礼かもしれないが)、甘いところがまるでない。実際、王位戦での、木村 vs 深浦での後半四連勝した際の深浦の精神的な強さは素晴らしかった。しかし、それがあある意味、特に男たちの軽い反感や嫉妬を買いやすいところもあるのかもしれない(笑)。一方、twitterでの将棋女子の反応を見ていると、深浦はとても人気が高い。あのも隙のなさ、スマートさ、そつのなさ、シャープさが女性をひきつけるのも、よく理解できるのである。

さて、その深浦と羽生の関係。深浦の発言を噂の「ゲーム・ラボ」2月号の「アイラブ?将棋特集から紹介してみよう。

「(相手のことばかり考えると言う意味で) 番勝負はある種恋愛と似ている」「(対局日が迫るにつれて) 羽生さんのことばかり考えています。」「(羽生名人が長考前に眼鏡を外すと) 羽生さんの素顔を見られるので、ドキッとしてしまいます。」といった発言から2ちゃんでは恋愛流と称されている。

梅田氏のタイトルも、当然こういったところから由来しているはずである。とにかく、深浦が羽生に恋していることはわかった、ことに一応しておこう。冗談抜きで、深浦にとって将棋対戦棋士として、これ以上望むべき相手はいないはずである。ある意味、全てのプロ棋士が羽生将棋に恋しているわけだし。

さて、問題は羽生が深浦のことをどう思っているかの一点にかかってくる。(既に調子に乗りすぎなのは自覚しています。) 梅田氏が紹介しているのは、とにかく羽生が「深浦は強い。」と率直に実力を認めているということである。そして、

仲間の棋士たちが深浦に複雑な思いを抱く中、羽生は、深浦の将棋を高く評価し、人間的にも深浦に好意を持ち、難解な現代将棋を究める同士と位置付けているふうである。羽生とこれまで幾度も対話を重ねる中で、私はそう感じるが多かった。

とも。

私は、梅田氏の実際の付き合いを通じて得た感触を素直に信じる。だから、基本的に羽生と深浦は相思相愛ということで、特に問題はないのだ。

しかし、中継当日の twitter での反応をみると、私を含めて「深浦片思い説」が圧倒的に優勢だったのである。勿論、我々一般ファンは、具体的な人間関係を知らないのだから、取るに足らない主張と言ってしまうはおわりないのだが、人がそうしたイメージをもつのはそれなりの根拠があるはずだ。だから、これ以降述べるのは、あくまで事実に基づいた「深浦片思い説」ではないし、また同時にある種の勝手な羽生善治論、深浦康市論に過ぎないことをあらかじめお断りしておかなければならない。

深浦が、羽生の将棋に対して深い興味関心を持ち、相手を倒すことを一途に考えながらも、きわめて人間的なある種愛情に近いようなものいただいているのは理解できる。しかし、羽生は深浦に対して、果たしてそれと等価の愛情をいただいているのか？

その点が、我々一般将棋ファンが勝手に一番ひっかかった部分なのである。先ほど、一般プロ棋士の深浦に対する屈折した思いを紹介したが、そういう感情を持つはずがない棋士がただ一人だけいる。それが、まさしく羽生善治だ。

羽生は常に将棋界のトップに立ち続けている。それが同じ羽生世代の他のメンバーとも本質的に違う。全ての棋士は、羽生に対してコンプレックスと羨望の入り混じった感情を持たずにはいられないが、羽生だけがそういう感情とは無縁でいられる。勝者の必然として、人間的な勝負のドロドロとした感情から比較的身を引いていることが可能なのだ。羽生も実は勝負の鬼であって、ひとたび盤面の前に座れば相手を倒すことに専念するが、それはあくまで勝負の際の一時の感情の燃焼であって、勝負が終わればあっさり燃え尽きてどこかに消えてしまうだろう。

また、羽生独特のキャラクターも関係している。羽生の場合、どこか常に超然と飄々としている。対戦相手も客観的に見るし、自分自身についても常に突き放して客観的に見ている。先ほど、紹介した羽生の実力評価にしてもそうである。たんに、深浦が強いから自分と互角の成績を残しているのだと。我々なら、何

か人間的な要素の原因を無理やり探し出そうとしてしまうところだが、羽生はそうして我々俗人を優しく笑って、「単に強いだけですよ」とあっさりいう。どうも、深浦に対して敵意をいただいていることはなくても、どう考えても深浦に対する人間的な思いいれなどありそうにないのだ。ここでも、羽生は爽やかに言うのではないかと、「深浦さん？好敵手ですね。」恐らくそれ以上でもそれ以下でもない。まして恋愛感情など存在しようがない。

ここで、当日の twitter でのやりとりを紹介してみる。

@Zeirams さんの発言

梅田さん観戦記「>相思相愛の羽生と深浦」; . . . . ちょっと、待て。片思いじゃなかったの???

それを受けて私。

私見だけど私も深浦さんの片思いだと思う。別に羽生さんが深浦さんを嫌いと言うのでなく、羽生さんは全ての棋士が好きだけどそれは慈悲に近いものであって決して愛ではないと思う。(朝から悪乗り

すると@rakuha から、このような反応があった。

なるほど、羽生さんの将棋に対するアガペーと、深浦さんの羽生将棋に対するエロスという愛の構図で見ればいいんですね

さらに

神の愛に立ち向かう人間の愛。壮絶な相思相愛ですね(笑)

再び@Zeirams さん

キリスト教では愛。仏教では慈悲。つまり羽生 = 菩薩説を唱えてみる。菩薩は全ての人を真理に導くためにあえて仏とならずに現世にいるとか。

私

なんかすごいことになって来た。しかし、羽生さんが一神教の神なのか、仏教のようにいつかは誰もが仏になれる先達としての菩薩なのかは、慎重に深く考察せねばなりません(笑)。

ほとんどお遊びのつぶやきを勝手に紹介して恐縮だけれども、多分私を含めて全員あるいみ本気のはずである、と私は勝手に解釈してしまった。

アガペーとは神の人間に対する愛である。人間的な、相手を愛し憎み奪うエロスの愛とは本質的に異なる。羽生さんは、アガペーのように全ての棋士を平等に愛するが、しかしそれは人間的なドロドロした愛憎とは

無縁である。そうした神の愛に対して、深浦はほとんど不可能事なのだが、人間的なエロスで立ち向かっている。それが深浦の尊さでもある。相思相愛ではあるが、それは、双方向の平等な愛ではなく、人間が神に無謀に挑む壮絶な相思相愛である。というのは勿論、私の勝手な解釈なのだが・・・。

一方、仏教的に言えば、羽生は深浦に対して慈悲を抱くが、深浦は羽生を愛している。むしろ、菩薩のように、羽生は深浦が自分の位置にたどり着くことを誰よりも切望している。菩薩は、全ての人間が仏陀にならないかぎり、自分は可能でも仏陀になることを拒むという。羽生は、常に将棋界の先頭をひた走りながらも、同時に情報公開することで、周りも高めてきた。そのことについては、森内が羽生に感謝すると率直にインタビューで述べているのを見て驚いたことがある。

さて、ここまできてどうしても一つ断っておかなければいけないことがある。今述べたのはあくまで遊びである。羽生も生身の人間だ。神や仏じゃない。羽生も人間らしい感情をいただく一人の人間に過ぎない。あくまで、今述べたのは、将棋界における羽生の位置についての、一種の比喩に過ぎない。人間羽生については、おそらく梅田氏が述べている通りのはずだ。

さらに、それ以上にどうしても述べておかなければならないこと。この小文は、深浦を侮辱するために書かれているのではない。むしろ逆だ。将棋界にあっては、絶対的な存在であり、それこそ神仏扱いされかねない存在に対して、きわめて人間的に努力を積み重ねてあらゆる手段を用いて真摯に戦おうとしている。そうした深浦の素晴らしさを私はいいたいのだ。現在と羽生善治のタイトル戦でもっとも緊張感をもたせるのは、深浦康市か、あるいは渡辺明なのだから。

そして、冗談抜きで言うと、実は神や仏の愛は人間より優越するのではない。人間として人間らしく愛することは、本当は至上の行為なのであって、神や仏もその愛には、ほんの少しだけ嫉妬せずにはいられないのだ。

まず、刺激的なタイトルについて説明する必要があるだろう。この問いは梅田望夫が発したものではいし、この本に登場するプロ棋士たちによるものでないし、恐らく将棋関係者や詳しい将棋ファンがするような類の質問でもない。

「はじめに」に書かれているように、将棋の「インサイダー」とそれに近い人たちは羽生善治だけが突出して強いわけではなく、羽生と本当に首の皮一枚の差でしのぎを削るプロ棋士が多数存在することを認識している。「羽生さんだけが強い」などというのは素人の考え方に過ぎない、と。

この質問は、将棋の世界の「アウトサイダー」が将棋の世界をみて素朴に発する問いである。しかし、何も偏見のないまっさらな目の方が鋭い質問をすることもある。現に、実力差がほとんどない世界で羽生だけが今のところ圧倒的な結果を残し続けている。その理由は何かと問われたら、「インサイダー」もきちんと説明できずに口ごもってしまうのではないだろうか。

梅田の立ち位置は独特だ。現在かなり深く将棋の世界に関わっていて「インサイダー」的な側面も大きい。基本的には「アウトサイダー」である。そして、梅田は将棋の世界との関わりながら、将棋をマニアだけのものではなく、一般の人間が楽しめるものにしようと努力を続けている。とすれば、「アウトサイダー」の立場からの究極の問いに、もしかすると無謀かもしれないが立ち向かうのが、一般の人間に対してなすべきことではないかと考えることになる。

同時に、梅田本人が「インサイダー」かつ「アウトサイダー」という境界線上に位置する以上、本人もファンとして楽しみながらこの問いにぶつかれる筈だ。梅田の本にもし意味があるとしたら、それは「インサイダー」によマニア向け将棋本ではなく、「アウトサイダー」的な素朴ながらも新鮮な視点を失わない本だという一点に尽きるのではないだろうか。

だから恐らく、本のタイトルが敢えてこういう挑発的なものなのだ。あくまで、将棋ファンだけでなく、全ての人間に将棋の世界の魅力を開放して解き放つために。

## 1、現代将棋の世界と一般の世界

梅田は、現代将棋の進化の過程で起こっていることが、ウェブなど一般の世界の出来事と通底することを常々指摘し続けてきた。この本でも、そうした観点から読み解くことが可能なテーマが扱われている。

一番分かりやすい例は、現代将棋における猛烈な「研究合戦」についてだろう。若手が努力した研究成果をトップ棋士が取り入れて将棋に生かしている現状について、深浦康市が「素材」と「調理」という秀逸な比喩で説明している。それを、インターネットのオープンソース・ソフトウェアを使って企業が収益をあげている問題と関連させて論じている。

それ以外にも、一般の世界と通ずるテーマが隠されている筈だ。私が気づいた例を一つ挙げてみる。膨大な広い内容をカバーする必要がある研究合戦を通じて、研究に通じているとされる有力な若手研究家の意見が権威主義的に盲目的に信仰され、定跡に疑いをもたれなくなり、実戦でその穴が発見されるということがあるといふ弊害が本書で指摘されている。研究が膨大すぎるために生じることである。これは、我々が日常身を晒している情報社会についても同じことが言えそうだ。あまりにも消化しなければいけない情報量が多すぎるために、自分の力で情報を吟味して確認する作業を怠り、特定の権威者の発言に頼って盲目的に信じてしまいがちではないだろうか。



これは一例にすぎず、各人が自分の世界と関連するテーマを発見することが可能なはずだ。

## 2、将棋の言語の一般の言語への翻訳

プロ棋士の思考は、あくまで将棋に即して符号・記号を通じて行われる。それをそのままでは一般の人間は勿論のこと、ほとんど<sup>①</sup>の将棋ファンにも理解不能だ。従って、それを理解させるためには、それを日常の言語に翻訳する必要がある。

この本では、五人のプロ棋士がインタビューを受けているが、全員がそれぞれ見事な翻訳作業を行って来ている。

先述した、深浦の卓抜した比喻もその一例である。行方尚志もその「研究」について専門的な話からも一般の出来事に通じそうな鮮やかな言語化を行っている。

勿論、将棋ファンが興味のある、もっと具体的な話についてはなおさらである。例えば、行方が羽生の指した 5 三歩という手に加えている説明はプロ棋士ならではの見事なものだ。

しかし、翻訳による言語化といえ、やはり羽生が際立つ。この本では、各章にインタビュー棋士以外に対局者本人の羽生の言葉がでてくるのだが、その明晰な論理と表現の分かりやすさには唖然とするばかりだ。急戦矢倉の現状、現代的な大局観、角換わりの現状といった概括的な話から、具体的な指し手の話に至るまで、全てがそのまま美しい言語表現になっている。少し先走りすると、もしタイトルの「なぜ羽生さんだけが」の理由を挙げるとしたら、私は羽生の言語化能力を真っ先に言うだろう。

## 3、棋士という不思議で魅力的な生き物

羽生がタイトル名になっているが、強さだけでなく人間的でも羽生にまさるとも劣らないタレントがプロ将棋の世界にはいくらでもいる。今回、タイトル戦に登場したためにたまたま取り上げられた、木村一基、山崎隆之、三浦弘行、深浦康市、全員が例外なく魅力的な「濃いキャラ」なのである。

本書で、その人間的な魅力を引き出すことに成功しているのはななんとといっても山崎だろう。一切説明する必要がない楽しいインタビューなので、具体的な説明は省くが、将棋を知らない人が読んでも、恐らくなんて面白くて魅力的な奴なんだろうと思わずにはいられないのではないだろうか。

それと、羽生が将棋の内容を語る過程で、突然垣間見せる「狂気」の瞬間も、なんとも印象的である。

梅田の書いたりまとめたりしている文章の特徴は「棋士の人間」をよく描き出していることだ。それも、やはり梅田が常に「アウトサイダー」的な視点を失わずに、常に新鮮な姿勢でプロ棋士と向き合っているからではないだろうか。そして、「アウトサイダー」として、梅田はプロ棋士のことが好きで仕方がないのだ。分かりやすく言うと、思いきりミーハーなファン視線なのである。勿論、これは最大限の賛辞のつもりだ。

## 4、対局当時と時間を置いての感想

一般的な話題から書いてきたが、実はこの本の最大の特徴は、いわゆる将棋ファンが十分楽しんで読める内容になっているということだ。各章が梅田によるリアルタイム観戦記とそれに関連するインタビューを対にするという形式をとっている。そのため、インタビュー部分では、将棋の具体的内容により踏み込むことが可能になっている。

具体的には、棋聖戦での羽生の 8 四飛について本人の後で振り返っての述懐、山崎の対局途中での読みと心理の詳細、名人戦での羽生の 5 三桂成について後日の研究で明らかにされた手順、同じく澤田新手

をめぐる舞台裏の話、深浦の 3 三桂についての、やはり後日発見された決め手の手順など。

これだけあげれば将棋ファンには分かっていただけのだろうが、純粋な将棋書としても大変充実した内容になっているのだ。

つい、対局が終わるとすべてを忘れてしまいがちだが、こうして時間を置いて振り返ることで、その将棋の内容をより明晰な分析することが可能になっている。

さて、冒頭のテーマの話を再び論じて終わりにしよう。

梅田は、最後にタイトルの問いに自分なりの解答を提出している。それは、いかにも梅田らしい徹底したものだ。しかし、それを必ずしも読者は無条件に受け入れる必要などない。各自が、その問いに答えようとすればよいのだ。梅田も、自分の考えが受け入れられることなどよりも、本書を通読してこのテーマに興味をもって色々考えはじめることを望んでいるのではないだろうか。

例えば、私ならこう言ってみよう、羽生の強さの理由は、羽生が究極のインサイダーでありながら、常にアウトサイダー的な新鮮な視点を失わずにいられるからだ、と。

さらに、読者の興味関心が羽生だけに限定される必要など全くない。梅田は「はじめに」でも「あとがき」でもはっきりこういっている。最終的には、誰もが将棋の「全体」を愛するようになって欲しいと。

結論は分かりやすい。タイトル名は梅田望夫による巨大な「釣り」である。梅田が望むのは、将棋界最大のビッグネームの羽生を入り口として、誰もが他の色々な棋士にも興味を持ち、羽生のことにもますます興味がわき、結局将棋の世界全体を愛することである。タイトル名は、そのために梅田が自分の身を危険に晒してまでも巧妙に張り巡らせたワナだったのである。そして、読者がそうなるように本書は書かれているのだ。

最近ツイッターで、将棋を観戦することに専念して楽しむ「観る将棋ファン」が増えている。彼らを観察していると、まさに梅田が言うような成長の過程をたどっている。

入り口は大抵羽生だ。しかし、羽生の将棋を見ているうちに、他にも魅力的な棋士がたくさんいることに気づく。猛烈な勢いで詳しくなり、それぞれが各自の鼻息を持ちつつ、結局将棋の世界全体が好きになっていく。

本書で将棋の興味を持った読者が、そういうプロセスをたどることを梅田は切望しているはずである。

そして、将棋の世界全体が好きになったならば、今度は各自が自分の好きな問いを始めればよいのだ。別にそれは、「どうして羽生さんだけが、そんなに強いんですか？」などである必要など全くない。「どうして渡辺明さんだけが、そんなに強いんですか？」でも、「どうして里見香奈さんだけが、そんなに強いんですか？」でもいいだろう。

いや、別に将棋に限らなくてもよい。「どうしてマイルス・デイヴィスだけが、ジャズで特権的な位置を占めて来たんですか？」でも、「どうしてロッテだけが、そんなに日本シリーズで強いんですか？」でもいいし、「どうして鈴木京香さんだけが、そんなに美しいんですか？」でも。

なんだってよいのだ。そういう自由をこの書物は望んでいる。

## 将棋界の一番長い日

---

NHKBS さんが長時間放送してくれるので、棋士を「観る」貴重な機会になって毎年色々書いてます。個人的に今までに書いたあらゆる記事の中で一番気に入っているのを一本だけ選ぶとしたら「将棋界の一番長い日の佐藤康光」です。

BS中継に映し出された佐藤康光の表情を、誰も一度見たら忘れることが出来ないだろう。

夜の中継が始まる前に、羽生善治が、完璧な構想力で谷川浩司を「光速の投了」に追い込んでしまっていた。挑戦者はあっさり決定。問題の降級争いも、自力残留の佐藤が木村一基相手に、角桂交換の戦果をあげ、ほぼ勝勢のように言われていた。やや拍子抜けな感じだが、気を取り直してとにかく夜のBS中継を見出す。三浦弘行と久保利明の将棋が千日手になるのを、ぼんやりながめていたら、突然佐藤康光の異常な表情が画面に映し出されたのである。

人が心底苦悩する表情というのは、ああいうのをいうのだろうか。いや、苦悩というよりは苦悶といったほうが正確かもしれない。顔を右側からアップで映し出している。口を苦しげに半開きにし、目はほとんど泣いているように見え、表情全体が完全に歪みきっている。何度も首を振り、舌打ちをし、体を小刻みに揺らす。髪の毛をかきあげ、頬をかく。いったい何の因果があって、いったい何の罰で、この人はこのような苦しみを受けているのだろうか。既に佐藤は一分将棋に突入していて、情け容赦なく秒読みの声が襲いかかり続けている。

木村の執念の追い上げで、いつの間にか全く分からない将棋になっていたのだ。気合の和服姿の木村は、対照的に静の表情である。しかし、その表情の落ち着きからは、完全に集中して読みふけている様子、闘志が満々な様子が感じ取れ、不気味なくらいである。

木村の 6六歩に対し佐藤が 6八玉と下がった瞬間、解説の深浦康市と橋本崇載が騒ぎ出す。 6七銀と打ち込めば、トン死なのではないか。でも、二人とも一分では読みきれない。持ち駒の歩の数が微妙だ。なんと、実際詰んでいたのだが、両者とも気づいていなかったことが、終局後に判明する。

佐藤の苦悶の表情は全く変わらない。解説の二人も、どちらが勝ちなのか判断しきれていない。

という状態が、延々と続いたのだが、木村が 2三香と執念の受けをしたものの、佐藤が 3二銀と打ったあたりで、二人の表情が一変した。

木村が、顔をあげて宙を見つめ、現在の局面ではなく、過去のどの場面が悪かったのかを考えているように見える。静の姿には変わらないが、内に秘めていた闘志が、徐々に脱力されていく。

佐藤の表情からも、苦悶がパツパツと消えた。まだ緊張の余韻が続いているが、苦しげでなく、ただ集中する表情に変わったのだ。はるか昔の大魔神映画で、恐ろしい表情が、戦いが終わって仏の表情に変わる瞬間くらい、劇的な変化であった。並の映画よりはるかにすごいし、なにより人間の現実のギリギリの姿なのである。

解説の二人もやっと落ち着いた。木村が、気持ちを納得させようとするかのように、何度も水を飲みだす。最後まで指して木村投了。

終局後も、二人の固い表情はすぐには崩れない。場の空気が完全に凍りついているところに、盤側から声がかかり、カメラに映る佐藤がその方を怪訝な目つきで見やる。先崎学が、 6七銀の即詰みの場面を確認しに駆けつけたのだ。先崎が、詰み手順を説明する。二人も気づき、呆然とする。しかし、固まっていた二人が、とにもかくにも話し始め、対局室に動きが出で、少しずつ日常の時間に戻っていった。

佐藤は、いったいどれだけの間、一分将棋で、あの苦悶の表情を続けていたのだろうか。時間を置いて中継の最後にチラッと映った、佐藤の落ち着いて元に戻った表情が、なんとも印象的だった。

もうひとつ、全く別の意味で印象的だったのは、丸山忠久と藤井猛の将棋の終局場面だ。局面は丸山勝勢。突然、ごそごそとビニール袋の音が聞こえてくる。なんと、丸山が何か、食料を取り出したのである。モグ

モグやりだし、藤井が着手した瞬間、食べるのを中断して、即座に藤井の攻めの金に対し、王手金取りをかけた。プロなら当然の手ではあるが、丸山らしい安全勝ちの手、私はこの言葉が好きではないが、激辛流系統の手である。藤井にしてみれば、やりきれない局面である。

さらに、丸山はモグモグモグモグと栄養補給をやめない。解説の深浦と聞き手の千葉涼子が情け容赦なく突っ込む。

千葉「なんかごく平常のお顔をして食べておられますねえ。」

深浦「なんか、一人だけ緊張感がない感じがするんですけど、いいんですかねえ。」

千葉「ポーカークフェイスがきわまっている感じですよ。」

丸山が食べ続けたまま、藤井は秒を読まれて投了。丸山の口は動き続けていた。こんな投了局面、見たことない。藤井にとっては屈辱だろう。丸山の、相手が徹底的に粘っても、いくらでもゆっくり最後まで指しますよという意思表示とも強引に解釈できる。無論そんなことは、本人は考えていないのだろうが。藤井も、別に丸山の行為に参ったわけではなく、局面自体が戦意喪失ただただけだろうが。

丸山の、そうしたとにかく勝負に徹する姿勢を、私は尊いと思う。変な美意識やカッコつけより、徹底的に合理的に勝負を追求する姿のほうが、私は好きである。そういうウソのない姿のほうが、薄っぺらな人間的な気取りよりも、はるかに美しいし真実の姿だと思う。

佐藤の表情が、あれほど人の心をうったのも、その表情に全くウソいつわりがないからなのである。

(将棋のことだけ書きます。)

NHKのBSでは、計8時間以上の放送があった。将棋をそんなに流すというのは、表現は悪いが、電波ジャックかよというくらい凄いことである。色々な意味で、将棋ファンはNHKの将棋班には足を向けて寝ることが出来ない。

番組の頭に流れるテーマ映像に、去年の一番長い日が使われていた。佐藤康光の苦悶する表情や丸山忠久のカロリーメイトのチョコ味をモグモグしているところも、きちんとセレクトされていた。よく分かっていらっしゃる、NHKさん。何のことやらという方は、去年書いた[この記事](#)をどうぞ。

三浦弘行が、時間ギリギリで将棋会館に到着。悠々と落ち着き払って歩いてきた。すかさず、「三浦さんは若いころ武蔵と呼ばれていましたね」という、お決まりのツッコミが。「待たせたな、小次郎」である。

佐藤康光の寝癖が猛烈だった。いつもの寝癖とか言われていたが、それは羽生善治である。

対局前、丸山忠久がいつもの大型扇子をユラユラさせる図が映った。いかにも曲者という感じである。昔。ジュリアナ東京のお立ち台で、ボディコン女が振り回していた扇子を連想してしまった私は、頭がおかしい。

作戦の選択がいかにもA級最終局だった。後手の木村一基が、最近多用して一手損角換わりではなく、かつて中心戦法だった8五飛に導こうとした。研究将棋で、この大一番に秘策があったのだろう。しかし、郷田真隆は横歩を取らず。お互い相手のペースで戦いたくないという駆け引き。

森内俊之が先手三間飛車、丸山忠久が後手ゴキゲン。意表の戦法である。しかも、どちらも相手に降級がかかっている。やられた方は、たまらないだろう。

谷川浩司も先手で相振りを選択。鈴木大介の後手ゴキゲンは受けない。但し、勝又清和のデータ分析によると、谷川は相振りで勝ちまくっていて、特に振り飛車党相手には全勝である。谷川にとっては本当の勝負将棋だったわけだが、作戦の選択にも厳しさを感じた。

意外でなかったのは、本格矢倉党の藤井が堂々と矢倉にした一局だけである。という言い方はイヤミだね。

棋士プロフィールで、各棋士のプロ入り当時の写真が紹介されていた。郷田は、確かに若いころは(も)カッコよかった。すこし古いタイプの二枚目ではあるが、という余計なことを付け加えたりしたのは私のつまらない嫉妬が入っているからに過ぎない。

解説の山崎隆之と聞き手の山田久美の若き日の映像も流れていた。全国十万人の山崎王子ファンも、全国百万人の山田久美ファンも、満足したことだろう。

山崎は、竜王戦の深浦とのW解説で、その話術を遺憾なく発揮、披露していたが、あの時ほどはヤンチャではなかった。ただ、山田が強気な手を指摘した時に「意外に、我慢できない人なんですね。」と言ったところには、その片鱗が感じられた。単なるセクハラじゃんとか言わないように。

棋士が手を読む姿は没我状態である。丸山が上方を見つめて何か考えている。棋士には脳内将棋盤があるので、盤を歩見なくても考えられるのである。三浦も、負けずと上方を見つめて考えに耽っている。もう一度、三浦が映ったら、さらにのけぞるかのように天井を見つめて考えていて、妙におかしみを誘った。角刈りのような感じ大柄で、対局姿は大変な迫力である。

今回は、将棋自体ではどちらが勝つのか全く分からない大接戦というのは残念ながらなかった。内容で言うと、やはり谷川の将棋が素晴らしかったか。桂を端の筋に空成りする発想、さらに自陣に金銀を続けざまに打ちつける、負けたくないという気持ちが伝わってくる指し方、そして仕上げは光速の寄せ。最高にプレッシャーのかかった将棋で、芸術的な将棋を指しきったのは流石としか言いようがない。

正直に言うと、事前には谷川は苦しいのではないかと思っていた。実力面でなく、ここぞという将棋のメンタル面で、鈴木は恐らく文句なく自分の最大限の力を発揮するだろう。しかし、谷川にはとても繊細なところがあって、そういう面でどうだろうかと素人が勝手な心配をしていたのだが、そんなところは微塵も感じられなかった。今季の成績は谷川にとっては不本意もいいところだろうが、この大一番でこういう内容の良い将棋をさせたのは、今後の巻き返しのためにも大きい意義があったのではないだろうか。

深夜の放送では、渡辺明が登場。山崎とのW解説は、二人とも弁が立つ上にサービス精神が旺盛なので楽しかった。だが、丸山 vs 深浦の解説をしていて、馬の前に 3 三歩と行き場所を打診する手を、それこそほとんど考えずサッと指摘していたのはやはり流石だと思った。プロからすればどうということもない手なのかもしれないが、その手が浮かぶ速度とか敏捷性のようなものを渡辺には感じる。あの竜王戦第七局の終盤で出た 5 五歩の勝負手のことを思い出してしまった。あれも咄嗟に出たという感じだったが、やはり抜群の才能の持ち主なのだろう。

スーパーあつしクン、こと宮田敦史もゲストで登場。なんとも存在感のある男である。何を聞かれても必要最小限の言葉数で答え、相手が渡辺竜王だろうが誰だろうが妙な気遣いなど一切なし。ひたすら思った指し手のことだけを自信満々に言い放つ。ほとんどテレビに映っているという意識もないようで、大盤を見つめて専ら詰み手順を自分の世界に入り込んで考えている感じ。没頭するあまり、大盤にかぶさって立ってしまい、渡辺竜王にも長野アナにも注意されていた。得がたいキャラクターである。

山崎は、恐らく根がとても優しい男で、即座に宮田の性質を見抜いたようで、ひたすら宮田を立ててその読みを引き出してあげることに専念していた。そして、もうこれで受けも何もないという場面について、宮田に意見を聞くと一言。

「もう、どうしようもないですね」

ぶっきらぼうに何の飾り気もなく言い放った様子が、おかしくて仕方なかった。

郷田が挑戦を決めた。終盤、一気に決める順があるところを、自陣に手を入れて絶対負けない形にしたところに、将棋の重みを感じずにはいられなかった。本局は、ずっと優勢だったようだが、今回の順位戦全体を通じて、良いときも悪いときもとにかくバランスをうまくとって、容易に将棋を一方的にして壊さない懐の深さとか、難しいところから一步抜け出す底力のようなものを感じる。猛者強者ぞろいのA級棋士の中でも、スケールの大きさを感じさせる将棋である。

羽生善治との名人戦は本当に楽しみである。どちらかということ、羽生は対戦相手に応じた将棋を指すタイプだと思うので、最近では現代的な厳しい将棋を指すことが多かったような気がする。郷田が相手なら、お

互い伸び伸びした、プロらしい高度ながっぶり四つの技術の応酬が期待できるのではないだろうか。恐らく格調の高い、いかにも筋の良い将棋になるのだろう。この二人の場合、勝敗もさることながら、どういう内容の将棋をみせてくれるのかも楽しみである。



NHKの「将棋界の一番長い日」ドキュメンタリー番組なのだが、以下の再放送予定がある。

番組タイトル：ドキュメント 将棋界の一番長い日

放送日：2010年4月4日(日) 放送時間：午後4:00～午後5:00(60分)

(追記) 再放送予定が変更になりました。4月5日(月) BS2 午前3:30～4:29

<http://cgi2.nhk.or.jp/goshogi/special/index.cgi>

というわけで、未見で視聴可能な方は本記事を読まれないように。長い日のBS放送のダイジェスト版程度かと思っていたら、さにあらず、取材を事前にも事後にも十分に行った力作である。NHKさんになりかわると「将棋ファン必見」と言っても構わないと思う。できれば、NHK総合などでも放映していただきたいものである。

と必要な断りを済ました上ではじめます。もっとも、私がこれから書くことは、いつも通り「見りゃ、分かるじゃん」という内容に終始するであろう。あそこよかったね、そうそう、と番組を見た仮想のブログ読者とともに井戸端会議するといった程度の趣旨なのでご了承いただきたい。

取材シーンは三浦弘行の自宅取材から始まる。三浦といえば、最近は共同研究が主流な中、群馬の自宅で黙々と独自研究を行っていることで有名である。しかも、毎日十時間以上、将棋の勉強をしているとする通説がある。ということで、将棋ファンにとっては、秘密基地潜入のようなドキドキ感である(大袈裟だ)。三浦が愛犬を連れて散歩をしている。毎日二時間の散歩を欠かさないとのこと。愛犬君がカメラをジロリと睨んで「なんだ、こいつら」と迷惑そうである。

スタッフ 散歩の時も将棋のことって、考えられますか？

ナイス質問である。三浦も、鋭いところを突かれたという様子で、戸惑い笑いを浮かべながら、

うーむ、まあ、実は詰将棋のこととか考えたりすることもありますね。

「こともある」というのは、必ずそうしているということではないだろうか。森下卓が証言していたが、三浦は米長研究会の草むしりの際に、右手に鎌、左手に詰将棋の本というスタイルだったそうである。伝説は本当だった(だから大袈裟だって)。

三浦が自宅で盤に駒を並べるシーンも映った。眼光鋭くかっこいい。野球選手がユニフォームを着ているときが一番かっこいいように、プロ将棋棋士も駒を持っているときが一番良い。最終局では5五歩が、三浦流研究の一手だったということである。

棋士の皆に認められるような方でないと、なかなか名人にもなれないのかと思うんですね。本当に尊敬してやまない方ばかりなので、そういう方に一步でも近づきたいと、私自身も常日頃思っ

いることではあるので。

三浦の名人に対する思いである。三浦にとって、あるいは全ての棋士にとってなのだろうが、名人が単なる将棋が強い人以上のものであることが良く分かる。

他に谷川浩司 vs 高橋道雄、木村一基 vs 井上慶太の二局についても、具体的な内容を取り上げていた。対局者たちから事後のインタビューも十分に取っている。谷川と井上の兄弟弟子にとっては酷なことになったが、二人ともきちんと言えられていた。

特に、谷川については、2四角が痛恨の一手だったわけだが、谷川自身がその手を解説していた。「気持ちの整理がついていないで指した」のだが、その原因として早い段階で形勢を悪くして悲観していたことを自ら挙げていた。それはネット中継でも確かふれられていたところである。当たり前のように観ているが、現在のネット将棋中継のレベルはかなり高いと思う。

さらに、その後に投了前に、谷川がコップの水を二敗飲んでいるシーンをカメラが捉えていた。気持ちを整理していることまで、谷川自身が解説させられていた。谷川なので誠実に対応していたが、さすがにその辺は酷過ぎるので、誰か別のプロの解説者にコメントさせた方がいいのかもしれない。勿論、本人が話してくれれば一番良いわけだが。

ところが、それだけではない。対局直後に谷川は対局室の廊下で立ったままインタビューに応じている。

そうですね、いや、難しい将棋だったんですけれども、なんか一手バツタリをしてしまって、そうですね。こんなに早く終わってはいけなかったんですよね。ええ。日付が変わる前に負けてはいけなかったんですけれども。ハイ。

絞りだすように、ちょっと自嘲笑いを浮かべながら。断らずにインタビューに答えていたのが谷川らしい。事後インタビューで、ちょっとだけ救われた感じだったのは

――奥様は何か言われたりするのでしょうか

谷川 ええーっ、まあ、妻は、そうですね、勝った時も負けた時もお疲れ様・・・ですね、ええ。

その他にも、井上の子供教室、高橋の自宅、渡辺竜王、夕食出前、ネット中継などの控え室、大盤解説会など、将棋ファンにはこたえられない内容であった。

最後に流れていたのが Norah Jones の名作 Come away with me より The long day is over.

Feeling tired

By the fire

The long day is over

The wind is gone

Asleep at dawn

The embers burn on

With no reprise

The sun will rise

The long day is over

(オマケ) 注意力テスト。twitter である方に教わったのだが、チラリと一瞬だけ映った、高橋先生が自宅で原稿用紙に執筆する際に下じきに使っていた雑誌は、さてなんでしょう？

[答えはこちら](#)

NHKのBSは、対局者が将棋会館に入ってくるころから撮影することになっている。今回は丸山忠久と一緒にエレベーターに乗り込んで撮影してしまう念の入れようだった。井上慶太が既に下座に着座しているところに木村一基が入ってくる。井上に律儀に挨拶すると、手を上座に差し出して「どうぞ、どうぞ」と譲る。井上も笑って「いや、どうぞ」と譲り返す。木村も「いやいや」と譲らない。順位戦では、順位上位者が上座に着くことになっているが、木村が先輩の井上に敬意を表したわけである。二人とも、盤の前に座れば鬼だが、普段はとても優しい。厳しい勝負の直前に、ほんの一瞬だけ和んだ。結局、木村に押切られたのか、井上が上座についていた。

三浦弘行と郷田真隆の戦いは、三浦が勝てば即名人挑戦の決まる大一番である。定刻になると記録係が郷田先手を告げ、両者が黙礼して対局が始まる。緊張感がみなぎる、とてもよい瞬間だ。郷田はお茶を口に含み精神を集中させようとする様子ですぐには指さない。と、突然三浦が相手が指さないのに、グラスを手にして対局室から出て行ってしまふ。取り残された郷田は、三浦が戻ってくるのを待たずに、初手 2六歩を指す。といった具合に大一番は始まった。

佐藤康光は、既に降級が決まってしまっている。信じられないことだ。相手は、まだプレーオフの目もある丸山忠久である。先手の佐藤は角交換の振り飛車。後手でこのような指し方をすることは良くあるが、先手では珍しい。丸山としてはやりにくいだらう。実は、昨年最終局で、丸山が降級のかかった深浦康市相手に、丸山としては実に珍しい後手ゴキゲン中飛車を採用して深浦に引導を渡したことがある。因果応報。

NHKのBSの各棋士のプロフィールでは血液型が紹介されていた。O型が、谷川、郷田、佐藤、森内、藤井、井上。A型が、丸山、三浦、高橋。AB型が木村。B型はいない。いかにもそうだという人もいれば意外だという人もいる。ただ、何となくO型かA型のどちらかなのではないかという人が多い。O型的な自己主張の強さや唯我独尊性とA型の几帳面な真面目さ、繊細さを兼ね備えた人間が多いことに気付く。多分、血液型とは関係ないところで棋士に求められる二面的な性質なのだらう。ちなみに羽生善治はAB型である。

谷川浩司と高橋道雄の将棋は、後手の高橋の十八番の 八五飛戦法に。高橋のスペシャリストとしての能力が遺憾なく発揮されて後手ペースになったかに思われたが、谷川も粘り強く受けて、控え室はしっかり受けて指せば谷川が有望ではないかとの評価。谷川も大事なところで十分時間を使って考えている。ファンも読みきりの光速の寄せを期待する。そして、谷川がいかにも「勝ちました」と主張しているようにも見える手を指す。ところが、それが明らかな疑問手。高橋にあっという間にくいつかれて寄せきられてしまった。谷川と羽生の名人戦再来を切望するファンにとっては悪夢のような展開。谷川は形勢を悲観してしまっていたらしいが、それにしてもあっけない折れ方だった。谷川に限らず、羽生世代の最近の終盤では、若い頃には信じられないようなミスが見受けられることが多い。そんな気がするだけなのだらうか。どちらにせよ、彼らにとって、対戦相手という敵以外に年齢という敵も相手にしなければならなくなっているのは確かだらう。しかし、ワグナーの「神々のたそがれ」を演じるのにはまだ早すぎる。

佐藤と丸山の将棋は、佐藤の会心譜になった。先崎学と阿久津主税が、全対局終了後の深夜に後半を並べ

て解説していた。先崎が、飛車を見切ったり、 3六歩といく構想を褒めていた。降級が早々に決まる人間の指す将棋にはとても見えないと。同時に、えてして気が楽になると指し手が伸びてこういうことになるのだとも。

藤井猛が角交換振り飛車から積極的に動いたが、振り飛車の銀が完全に遊んでしまった。しかし、天王山に馬をしっかりひきつけて崩れず、森内らしく力強いが力強過ぎたと控え室に評されてしまった疑問手もあり、振り飛車ペースに。藤井がガジガシ流らしく一気に食いついたところでは振り飛車勝勢との評判だった。ところが、森内が攻め込むとどうも局面が容易ではない。深夜のBS開始時にも、先崎が藤井勝ちを明言していたのだが、渡辺明が登場する頃には逆に森内勝勢に。

カメラが藤井の横顔を映し出す。右手を顔に当て呆然とした様子。「なんでこんなことになってしまったんだろう」と顔に書いてある。苦しげな様子で「いやぁ」とつぶやく。悪趣味とお叱りを受けるかもしれないが、こういうときの棋士の表情というのは確かに「美しい」。結局、藤井勝勢に思えたが、よく検討してみると、もともと難しかったようである。

井上がうまく指して作戦勝ちになったのだが、「千駄ヶ谷の受け師」が本領を發揮して、結局すっかり木村の将棋になってしまった。誰かが「木村さんに受けられるとおかしくなる」といっていた。朝、井上に上座を譲っていた好漢ぶりがウソのような、執念の塊のような将棋が魅力的である。最後は、井上が相入玉しても明らかに点数が足りない中、負けたら即陥落ということもあって必死に指し継いだ。ついに力尽きた。カメラは絶妙のタイミングで他力残留を決めた藤井の顔をアップで映し出す。藤井はなにやら苦笑いを浮かべている。それが、自分の指し手に対する自嘲なのか、誰かにこっそり残留を教えられての照れ笑いだったのかはよく分からなかったが。

三浦と郷田の将棋は、いわゆる「善悪を超えた」、熱局、名局になった。

映像では、三浦がこれ以上は前傾になれないだろうという前傾姿勢で、眼光鋭く盤面をにらみつけている。三浦の対局姿は、いかにも盤上没我で魅力的だ。

最後は、郷田が相駒すれば詰まないのに、敢えてあぶない受け方をして、しかも正確に受ければ詰まずに勝ちだったのに、詰み手順に飛び込んだが、三浦も(郷田も)詰みに気付かず、気付いていた控え室が絶叫し、さらに三浦が開き直って詰めろをかけたなら、詰みそうな三浦玉がどうしても詰まなかったという(あー、説明するのに疲れた)、とんでもない結末だった。将棋の終盤というのは、時としてこういうわけの分からないことになる。控え室のプロ棋士も、我々ファンもそのドラマに熱狂し堪能した。

先崎と阿久津が最後に通して並べて解説していた。三浦の 3三桂に二人とも驚いていた。あの辺りは実戦ならではの苦心してひねり出した手順である。中盤以降お互いの意地と意地がぶつかりあう、相手の言い分を一切聞こうとしないような将棋になったようである。先崎は、お互い 5六桂と 5四桂と強気に打ち合ったのを「歴史に残る応酬」と評していた。二人が真正面からぶつかり合った壮絶な将棋だった。こうして、三浦は挑戦者になるにふさわしい将棋を制したわけである。

三浦は、前期ギリギリで残留しての挑戦。こういうケースは、森安秀光以来、26年ぶりの記録だそうである。

BS中継で話題になっていたが、三浦はかつての求道者的な姿から多少変わって、近頃は人間的な余裕も出てきたそうである。何でも、今回の最終局を迎えるにあたって、「今回のオリンピックのような舞台だと思って、研究もして対局に臨みたい」と語ったそうだ。今までの三浦は、そういう発言をするようなタイプではなかったということである。

羽生善治の七冠の一角を崩してから、もう久しい。あの頃、三浦は「武蔵」と呼ばれた。ただし「たけぞう」と読まれていた。

今回は人間的にも成熟し、しかも相変わらず芸道を純粹にきわめる姿勢では一切変わりのない「むさし」が名人戦の桜舞台登場してくれるはずである。

スーツを身にまとった男たちが次々にやってきては同じビルの建物に入ってゆく。ごく普通の出勤光景のようだが、どの男もその表情に普通とは違うある種独特な緊張感を湛えている。彼らもサラリーマンたち同様に仕事にやってきたのだが、その仕事というのが、ちょっとばかり変っている。彼らの仕事は将棋を指すことだ。仕事には違いはないのだけれども、今日は仕事を超えた仕事の日、「将棋界の一番長い日」、A級順位戦最終局の日である。祝祭的な仕事の日、彼らの晴れ舞台なのだ。

森内俊之はいつも通り淡々と、藤井猛はオシャレなマフラー姿でダンディーに、谷川浩司は気品に満ちて、渡部明はいつものようにリラックスした中に、やはり今日ばかりは緊張感をどこかに滲ませて対局室に入ってゆく。

久保利明が、対局室に入ってきて先に席についていた森内になにやら話しかける。森内が「えっ」と大きな声を出して驚く。久保が永世名人の森内に敬意を表して上座を譲ろうとしたのだ。森内が譲り返して結局久保が上座に。こんなごやかな一瞬の出来事を見て、誰がこの二人の深夜の激闘を想像しえただろう。

三浦弘行が、ものすごい勢いでスタスタ歩いてくる。対局室の入り口の下駄箱でも大急ぎの様子で、番組スタッフとぶつかりそうになってしまう。道ですれ違う時にねお互いに避けようとしてお互いに何度も通せんぼをして左右に体をよせあうのと同じ状態だ。

そして、そそくさと対局室に入ってゆく。残留をかけた大一番を戦う木村一基が静かに正座して待ち構えている。「待たせたな、小次郎」の三浦「武蔵」である。

こうして、2011年の将棋界の一番長い日は始まった。

森内 vs 久保は、後手の久保のゴキゲン中飛車に。先手の森内の対策は流行の超速 三七銀。前局では、先手の郷田真隆の超速 三七銀に、後手で森内がゴキゲンを採用して久保流の 三二銀型を採用したが、郷田の優れた研究対策の前になすすべもなく完敗。今回はゴキゲン家元の久保に自分が対策をきいてみようということである。

BS解説の佐藤康光が、その将棋にふれて、「森内さんは、郷田さんの対策手で序盤早々に将棋が終わってしまったといったのですが、その後13時間くらい指し続けたんですね。」と軽口を叩く。佐藤と森内は私的にも親しい間柄である。

BSのもう一人の解説の飯島栄治が、解説手順で「こうする方法もあるんです。」と角道をあけずに角を引いて転換して活用する順を説明。いわずとしれた「飯島流引き角戦法」であり、飯島は午後の放送でも島朗相手におなじネタ？を披露して、引き角布教活動に余念がなかった。これには、佐藤も島も笑うしかなかったのである。

ちなみに、午後のBS放送では久保が夕食を注文する珍しいシーンも映し出されていた。注文カードの数がものすごく多いのに驚く。配達可能な店が結構多いようだ。

渡辺 vs 丸山忠久は、後手の渡辺が通常角換わりをいつものように受けて立った。丸山といえば、角換わりの先手のスペシャリスト中のスペシャリストである。丸山に後手の角換わりをもって何度も挑んだ郷田がどれだけひどい目にあわされ続けたのかは、これはもう涙なしには語れないのである。

現在、角換わりの根幹になる相腰掛け銀同型の変化に富岡流という先手のきわめて優秀な対策が存在して、それを打ちやぶる後手の明快な手順は発見されていない。従って渡辺も同型でない形に工夫をして活路を求めることが多い。去年の羽生善治との竜王戦でもそうだったし本局もやはりそうだった。また、それに

対する丸山の対策も微妙に通常と手順を変えていて、まさしく角換わりの先手最高峰の丸山と後手最高峰の渡辺の研究と経験がぶつかりあう玄妙な手順になったようである。素人にはおいそれとは口出しできないが、とにかく作戦としては丸山がうまくやったようである。

残留争いをめぐって深刻きわまりない三浦 vs 木村は横歩取りの将棋に。三浦が早めに 8五飛プラス松尾流 5二玉の流行の形に。解説の佐藤によると、現在の横歩取りは後手が飛車の位置を 8五にするか 8四にするかと、玉の位置を 5二にするか 5一にするかの合計 4通りの組み合わせのどれを採用するかがポイントになっているそうである。

将棋は、三浦が端歩をついてきたのを受けたために三浦が端から攻めて角を打ちあった後に木村が 2三步成と成り捨ててしまのが本局全体のポイントになってしまったというのだから、横歩取りの将棋は恐ろしい。まだ夕食休憩前の局面である。

同じく残留を目指す藤井は高橋道雄との対局。後手の藤井の角道オープン四間飛車に。藤井の弟弟子の阿部健治郎が勝又清和のインタビューに答えて言うところによると、藤井は実はあらゆる作戦を手広く研究していて指さそうと思えばどんな戦法も指しこなせるそうである。限られた作戦しか採用しないのは、あくまで藤井特有の序盤のオリジナリティへのこだわりがあるとのこと。確かに先手の藤井矢倉も後手のオープン四間飛車も、一応他の棋士も指すが基本的には「藤井の作戦」というイメージが強い。

序盤からお互いの構想力が問われる将棋になり、千日手模様にもなったが、高橋の打開が英断で先手がペースを握る。高橋は、谷川、三浦、藤井相手に三局連続して完全に自分のペースで将棋を指して圧倒した。高橋の序盤も瞠目すべきだろう。

谷川 vs 郷田。二人とも挑戦にも残留にも関係ないが、まさしく重要な「順位」戦だし、谷川の 1200勝もかかっていた。先手谷川の中飛車に。阿部が勝又のインタビューで、7六歩に2手目 8四歩と指すということは、矢倉や角換わりだけでなく先手中飛車も覚悟しなければならないのが課題だと指摘していた。丸山同様に角換わり先手のスペシャリストの谷川が敢えて中飛車の方を採用したのも現代将棋ならではの現象なのかもしれない。将棋は後手の角交換5筋歩交換拒否形から、谷川が早めに 7五銀をぶつけて後手が深浦流の 2四角を打つ類型のある最新型に。関西の菅井が銀河戦で先手で採用してうまく指して勝っていた。谷川は菅井と研究もしているらしいので、最近中飛車をたまに用いるのも、当然菅井や久保の影響もあるのだろう。しかし、結果的には谷川本来のものとはいいがたい将棋になってしまうのは、やはり谷川のような超一流レベルでも中飛車には独特な感覚が必要ということなのだろうか。

一番早く終わったのは。三浦 vs 木村。三浦の強烈な攻めが決まって、5六桂とされてはもうどうしようもない。この手を見て席をはずしていた木村が対局室に戻ってくる。きちんと正座で座り、コップで水を飲み干して、ネクタイをきちんと締め直す。明らかに動作や表情から、気持の整理をつけてきたことが伺えて見ていて痛々しい。三浦は決して油断をみせまいとするかのように前傾姿勢で盤面に集中している。木村も 同歩と指すしかないのだが未練を捨てきれないようになかなか指さない。あるいは、指せない。そして意を決したように 同歩。三浦はすぐに 同角。これが飛車金両取りである。木村はやはり諦めきれないようにじっと盤面をみつめていたが、コップの水を飲み干して、頭をさげて投了した。その瞬間に木村の A 級陥落が決定してしまった。

三浦は、目薬をつけたり、お得意の左 45 度前方凝視のポーズが出たり、相変わらず印象的な動きが多かった。



次に終わったのが、谷川 vs 郷田。見込みなしで投了もやむなしの局面のようだが、タイミングがやや早めで、その瞬間は映らず。1200勝はおあずけ。谷川は後半連敗でおわったが、結果以上に内容的に終盤にあっさり土俵をわる将棋が多かったのが、谷川ファンには気にかかるころだろう。

高橋 vs 藤井。こちらは高橋の鋭い寄せが決まって藤井は絶望的な局面に。藤井は、左手をずっとあごに当てて苦しげに考え続ける。どうしてこうなってしまったのか、どんなに後悔しても後悔しきれないような、あるいは絶望的な現局面をなんとか出来ないかをすぎるような気持で探り続けているような、そもそも現局面を現実として認めたくないような、なんとも言えない表情だった。藤井も陥落。ラス前では木村も藤井も意地を見せたが、やはりそこまでの星の悪さがそのまま最後まで響いてしまった。

渡辺 vs 丸山。丸山が激しく攻めに出たのに対して、渡辺が飛車を出で攻め合ったのが問題だったそうで、その後の丸山の 4三銀打ちが厳しくて難解ながら丸山勝ちの局面に。

丸山がジェルシートのようなものを頭頂にはりつけている。いきなりユダヤ教のラビが対局室に乱入したのだろうか。なんとも異様な光景だ。深夜の頭のオーバーヒートを防ぐためなのだろう。丸山も三浦に負けなくらい用意周到である。何年か前には、深夜の栄養分補給のために、カロリーメイトのチョコ味を盤の前でモグモグ食べるのがそのままテレビに流れたこともあった。そして、モグモグしている間に相手の藤井が投了という残酷図。全く周囲の目など気にしないプロフェッショナルなのである。

序盤でも遺憾なくスペシャリストぶりを発揮した上で、難しくなったものの全く間違えずに、終盤の競り合いに絶対的な強みをみせる渡辺をきっちりしのいだ。先ほどはふざけていってしまったが、冗談抜きで丸山は本当に本物のプロフェッショナルなのである。畏怖すべき存在である。

渡辺もさすがに必死の形相である。なんとか勝ち筋がないかを必死に探っている。なにしろ名人挑戦がかかっているのだ。丸山は最後の決め手の 8三龍を指す前に、頭の上のジェルシートをとった。その手を見て渡辺が潔く「負けました」と告げて頭を下げた。渡辺は勝っても負けても堂々としている。

羽生の手が震えたら相手は負けを覚悟しなければいけないが、丸山が頭のジェルシートを取ったら相手は観念しないといけないという新伝説が誕生した瞬間である。

最後に残ったのが、森内 vs 久保。渡辺が負けたので、森内が勝てば名人挑戦が決まる。当然、私も寝ることが出来なくなった。

久保が従来は先手有利とされている定跡に挑戦したが、あまりうまくいかずに森内良しとされた。進行も早くて一番先に終局しそうな勢いだったが、その後もつれる。久保が不思議に粘りで局勢が接近、久保がよくなりそうな変化も幾つかでたが、最後に一局残った時点では、ようやく森内が逃げ切ったかという感じだった。

先手が 7一角として後手は受けがなさそう。先手玉にも詰みはないと、佐藤&島が解説する。 7八桂と打てば勝ちである。森内が「いやぁ」とかつぶやきながら、あわてて秒に読まれたような手つきで 7八桂。

しかし島が解説していたように騙されてはいけない。森内のこういうのが出たら、羽生の手が震えや丸山のジェルシート取りのように相手は観念しなければならないのだ。噂にはよく聞いていたが、こうして深夜の現場を見れたのは初めてなのでよかったなどと安心していたら、とんでもなかった。

久保は全然諦めていなかった。 8七金以下森内の香車を抜いて自玉の受けに回る。猛烈な駒損だが、久保の穴熊も耐久力がある。森内が逆に焦らされる場面だ。佐藤も、「いやこれは簡単じゃなくて大変です」を何度も繰り返し、島も鋭い指摘をしながら久保がそれを跳ね返すような粘りをみせてそれに感心。BS放

送の午前2時までにおさまるかが段々心配になってきた。

しかし、森内も最後の力を振り絞るように、なんとか逃げ切った。陥落の危険のある久保の執念が本当に凄まじい深夜の死闘だった。最後、森内が一目で自玉が詰まないと分かる局面でも、秒読みギリギリまで慎重に考えていたのが、かかっているものの重さを痛感させた。

関係者やカメラがなだれこんでいる。森内はまだ茫然としている。毎日の記者がインタビューに入り、森内が挑戦者になったことを告げる。森内の表情は変わらない。一方の久保は、恐らくまだ自分が落ちたのか助かったのか分からないままである。

インタビューが終わって、報道関係者が退席して、森内と久保で感想戦が始まる。ずっと硬い表情のままの森内だったが、しばらくたってから、ようやくあの人懐っこい憎めない笑顔をみせたのだった。

こうして、今年が一番長い日は終わった。森内と渡辺が並んだ時点では、流れと勢いでは渡辺が優位に立ったように見えたが、

森内が苦手に行っている久保を渾身の将棋でなんとか振りきり、渡辺は角換わりのスペシャリストの丸山に屈した。最近若い世代の躍進が目覚しいが、羽生世代や羽生少し下世代が意地をみせた形になった。

勿論、羽生と渡辺の激しい激突もみたかったが、久しぶりに羽生世代同士のタイトル戦である。そして、羽生と森内は百局指して本も出版されたばかりである。円熟した二人のコクのある将棋が今から楽しみだ。

BSで放送されたもの。見逃しかけたのだが再放送があって、なんとか観ることが出来た。今年が一番長い日については、既にやや真面目な記事は書いたので、ここでは朝吹真理子言うところの「加藤一二三が昼用の鰻重と夜用の鰻重の代金かきりを背広の両ポケットに分けいれて対局に臨む人間的な娯楽の面白さ」の側面に絞って？メモ書きしてみよう。

将棋会館への各棋士の入場シーンかっこええなあ。緊張感があって凛々しくて。これ、将棋女子だったら惚れてまうやろ。と思ったら、三浦弘行がギリギリで慌てて駆け込んできた。一人だけ全然かっこよくないし。武蔵みたいに遅くても悠々としていれればいいのに。

あっ、この民俗音楽みたいなやつ、去年の長い日特番でも使われていた。アンゲロプロス映画のギリシャ民謡みたいなやつ。この音楽、なんていうの？知っている人がいたら教えて。

渡辺明が初めて竜王を獲得した際に、就位式でトロフィーを大きく掲げるシーン、すごく記憶に残っているけど、あれはカメラマンが誰かに大きく掲げてとリクエストされていたのですね。自分で勢いでやっていたわけではなかったことを、七年後にして知る。

渡辺は、「竜王・名人」狙っていたんだなあ。もしそうなったら、「完璧にその時点ではチャンピオンですからね。」と。

久保利明が森内俊之に上座を譲ろうとしたシーン。ちゃんとマイク音量をあげて聞こえるように編集されている。森内が「えっ」と大きい声で驚くのが驚きすぎである。ホント人がいい。

羽生善治の小学生時代、やっぱり眼光が鋭くて普通じゃない。ちょっとあやうく不安定なものを感じさせるくらいに研ぎ澄まされた感じ。現在は円熟して落ち着いたけれど、多分これが羽生の本質的な姿。

森内の自宅研究シーン。駒送りのスピードが速っ。これ、森内にも事前取材したんだから、当然渡辺にもしたんだろうね。ほとんどカットになったようで惜しい。

阿久津主税は私服だと棋士に見えないね。(勿論、ほめことば)

将棋会館での昼食シーンはお宝だわ。意外に狭い部屋。しかし、対局者の丸山忠久と渡辺が正面に座るって。もう食事の時くらい顔を見たくないでしょ。これは食事を置く場所のセンスが問われそう。それとも、やっぱり上座的な位置が決まっているのかな。食事の時は、棋士の地位でなく谷川浩司がやはり一番上で、上座っぽい場所に座っていたし。考え過ぎか？すごく気になる。

久保がA級から落ちた頃、「将棋を指していて楽しいことは一度もなかった」というのも、すごいなあ。

久保のスポニチ勝者罰ゲーム舞台裏動画は、。これは本当にお宝ですね。色々カメラマンが久保に話しかけ

て、無理にでも笑わそうとするのですね。グラビアアイドルの撮影みたい。って、それがどういうのかもよくは知りませんが。

記録の天野貴元三段は、木村一基や三浦にも負けない存在感ですね。

あれっ、三浦先生のセーター破れてる？

木村が廊下でストレッチする後姿も、多分木村ファンにとってはかけがえのないお宝映像。後姿から人柄がなぜかよく伝わってきます。背中で演技できるタイプ？

食事の注文をとる「えのき」くん、顔を売ったね。木村が一言「そばっ」というところがなぜかセレクトされていた。久保の注文では、注文カードが全部映されていた。すごくカートの数が多い。

木村ファンの女性が、なんだかかっこいい。ツイッターにもたくさん女性の木村ファンがいるが、みなさんこんな感じなのではないでしょうか？

丸山が冷えピタを装着する決定的瞬間をカメラはとらえていた。笑うしかない。

「さらに渡辺の倍以上はあろうかという扇子が登場する。」私はこれをジュリアナ扇子と勝手に呼んでいる。かつて、バブル全盛のジュリアナ東京で、お立ち台の女たちが(以下略

三浦が、お得意の左45度で考慮して小さくうなづく決定的瞬間もカメラは捉えていた。勝ちを確信したのだと、ご本人が解説していた。

木村が負けて階段を降りてゆく後姿。哀愁の後姿。ううう。

谷川の投了シーンもすごい。記録係りが「秒読みは何分から読みますか？」と問うたのに対して、谷川は短く「結構です。」そして、すぐに投了。間が悪かった。記録係も大変だ。

森内 vs 久保の再現映像で使われているのが、タルコフスキーの「惑星ソラリス」のような音楽だ。

丸山の冷えピタを斜め俯瞰で映しだす映像がすごいです。

丸山が冷えピタについて聞かれて「自分でも変かなと思ったんですけども。」しかし、そうは思っても勝負に徹して実行したというわけである。えらい。しかし、ここまで取材されてしまうと、さすがにもうテレビでは封印かな。

控え室で検討に加わる藤井の姿。誰も話しかけない。藤井も心ここにあらずで、明らかに自分の指した将棋のことを頭の中で考えている。対局直後以上に悲しそうな顔。はっきり言っていまにも泣き出しそうである。カメラは残酷だ。

久保と矢倉の練習将棋の隣で、糸谷の私服姿が。やっぱり若者ですね。(おじさんの感想です)

森内と久保のあの終盤がハイライト。当然だろう。ただ、もう少し久保の粘りのすごさを具体的に分かりやすく説明してもよかったかも。と、たまには真面目な感想を述べてみる。

森内勝ちを悟って階段を降りてゆく渡辺の寂しそうな後姿。

A級残留を知って、安堵したように階段を降りてゆく久保の後姿。

締め音楽は、去年と同じノラ・ジョーンズの「ザ・ロング・デイ・イズ・オーバー」。歌詞については去年私が書いた[記事](#)を参照されたい。というわけで、NHKの将棋班さんはこの番組のレギュラー化を狙っている模様。と勝手に解釈しておこう。BS2がなくなるが、是非続けてもらいたい。

将棋会館に男たちが入城 ではなく入場する毎年おなじみのシーンから始まる。谷川浩司の気品は年ごとに高まるばかりだし、丸山忠久はいくつも荷物を抱えこんでいて中身が気になるし、三浦弘行は相変わらずトリで急ぎ足で登場、おなじみの「待たせたな小次郎」である。

今年は羽生善治が名人挑戦をすでに決めている。興味の焦点は、その羽生が中原誠と森内俊之の二人に続いて史上三人目の全勝挑戦を決めるかと、高橋道雄と丸山忠久と久保利明の三人のうち、どの一人だけが残留出来るかだけに絞られていた。いや、どの二人が落ちるのかと正直に言うべきか。

他は順位が大切とは言っても、やはり基本的には消化試合である。しかも、高橋を相手にする谷川以外は対戦相手に深刻すぎる状況を抱える者はいない。だから、どうしても郷田真隆が生まれて初めて後手で一手損角換わりを採用したり、佐藤康光が力戦角換わり向かい飛車で大胆な 4八金をぶつけたり、屋敷伸之が横歩取り後手で 5四飛の早い段階での新手構想を試したりすることになる。これは仕方ないところだろう。いや、佐藤の場合は別段珍しくもなくいつものことか。

例によってNHKのBSが午前午後深夜の三回にわたって長時間放送していた。今回は皆のデビュー当時の写真を紹介していた。佐藤康光のガクラン姿はいかにも賢そうであると共に俗世間から隔絶した若者のオーラがブンブンするし、丸山忠久は既にデビューの頃の写真でも微笑んでいるし、屋敷伸之の16歳はやっぱり若くて天才少年だったんだなぁと改めて思うし、三浦弘行もやはり若いと基本的に顔が全然変わっていない。

順位戦のドラマをまとめたビデオでは、深浦康市が丸山に深々とお辞儀をしている。多分降級が決まった対局なのだろう。そして、深浦のこわばりきった表情がアップで映し出され画面がモノクロに変わって静止し効果音と共にデカデカと赤文字で「地獄」のテロップがかぶせられる。ひどい。ひどすぎる。でも、私はお茶を吹かすにはいられなかったことをここに正直に告白する。

羽生が初の名人挑戦を決めた順位戦の様子も紹介されて、有吉道夫の勇姿など懐かしい。羽生が車を運転して会館に駐車する珍しいシーンも。そして降級をかけた加藤一二三と小林健二の直接対決で、加藤が勝ってゴキゲンな様子で早口に感想を述べ小林がそれに悔しそうに聞きいる姿も。

今年はニコ生中継まであった。担当したのは行方尚史、北浜健介、松尾歩の三人。行方はいつものように面白いし、北浜と松尾がいかに人が良くて何とも平和な感じのなごむ放送だった。

どんどん対局が終っていく。屋敷新手はますますの構想だったようだが、三浦が一瞬の間隙をついて屋敷玉に鋭く襲い掛かってそのまま決めた。三浦らしい切れ味の鋭さが発揮された会心譜である。

行方によると、この二人は研究仲間で仲もいいとのこと。感想戦が長そうで、三浦が色々指摘して一方的に喋りまくるのを屋敷が「そうですね、そうですね。」と素直に聞いていそうだと行方分析。目に浮かぶようである。但し行方も藤井猛が感想戦に本格参戦していたのは読みようがなかった。藤井と三浦の兄弟弟子もこれまた仲が良い。

次に渡辺が佐藤の無理気味な構想を実に自然に的確に咎め、最後は佐藤をポコ殴りして終局。

今回の順位戦を通じて、羽生と渡辺の力が抜けていることを感じずにはいられなかった。よくA級にもA1とA2があるなどと言われるが、今年は二人だけがA1で他は全員A2という感じだった。

佐藤は歩を取るために金を8七のソッポに持って行って、普通これでは勝てないとしたものだが、感想コメントによると「佐藤は歩を取って戦えると考えていた。」実に佐藤流で感服したと同時にちょっとおかしい。

次に終わったのは羽生のところ。途中までは郷田もまずまずで長くなりそうだとされていた。ところが、途中郷田が方針を誤り、それを羽生が的確について着実にポイントをあげ続けて気づけば大差。派手な手を指したり力でねじ伏せたりするわけでないのだが。それだけに恐ろしさを感じる。今期の順位戦ではこういう戦い方が実に多かったように思う。

ただ、具体的に羽生がどうすごいのかと問われると結構答えに窮する。プロならある程度見えているのかもしれないが、A級の猛者がこのよう次々に手玉に取られるのを観ていると、羽生にしか見えない何かが見えているのか、さらにまた新たに何かをつかんだのかとも思ってしまう。一つ言うと、以前にもまして序盤の巧みさが増して分の悪い将棋になることが減ったような気がするのだが、どうだろうか。

郷田と言えば、あらゆる点でレベルの高い超一流である。それがこんなひどい負け方をするのはちょっと考えられないことである。

先ほども述べたが全勝挑戦は、これで中原誠、森内俊之に続いて史上三人目。森内の場合はとにかく順位戦の持ち時間の長い将棋に滅法強いという事情がある。他の二人が中原と羽生だけというのは、全勝挑戦がどれだけ大変なことかがよく分かる。

次に終わったのは高橋VS谷川。高橋得意の先手での横歩取らせからペースを握り、終盤きわどくなっただけに見えたが7三歩が厳しく、6八金右の受けの冷静で後手に手段がなく結果的には快勝だったようである。

横歩取りでよくある形でさらに先手なので9六歩の端をつけている形。BS解説の村山慈明によると、高橋と実戦経験があってその端歩がいきる変化も多いそうである。高橋の研究の深さと勝負強さが光った一局。

行方は高橋の横歩（取らせ）将棋を評して、「普通の横歩取りは激しくなったり詰むや詰まざるやになりがちだが高橋先生が指すと重厚なまったりとした展開になっていつの間にか盤面全体を支配されてしまう」と述べていた。結果的には高橋が残留した。順位戦の戦い方を知り尽くしているプロである。

最後に残ったのが丸山vs久保。高橋が勝ったことで丸山の降級は決まったが、勿論本人は知らない。

ゴキゲンの超速3七銀に4四銀対抗形、さらに相穴熊という注目の形である。丸山は事前研究が十分だったようで、時間を使わずすごい勢いで進めていた。そしてその研究の仕掛けが有効だったようで、ずっと丸山ペースで久保は長時間の苦しい戦いを余儀なくされた。

深夜のBSに終盤の二人の姿が映る。丸山は、座布団の後ろの方に座って必死に読んでいる。そして何度も何度も咳きこむ。竜王戦の時にもこれはなかった。とにかく勝たなければならないストレスが尋常ではないのだろう。

久保は動きが少ない。ずっと非勢なのを意識しているのか、何かを観念したようなでも諦めきれないような何かにじっと耐えているような久保の横顔が印象的だった。

将棋は久保が悪い将棋を必死に諦めずに食いつくが、丸山が決して焦らずに確実に相手をジワジワと追い詰めていく。観ていても苦しくなるような将棋だった。いかにも丸山流の将棋、勝ち方だけけれども、かかっているものの大きさを考えると当然である。

しかし、観ている我々は知っている。丸山は仮に勝っても何も得られず、ただ久保を道連れにするためだけに必死の努力を続けていることを。なんとも切ない光景だった。

久保が万策尽きて投了。完全に対局室の空気が凍りついている。勝者の丸山も精根尽きた表情である。当然、誰も丸山には結果を知られたりしない、いやできないだろう。丸山は、そんな空気から何か感じ取っていたのかいないのかは分からない。

普通、それでも時間が経つと対局室の空気がほぐれてくるものである。しかし、今回は感想戦でもその重い空気が全く変化しない。二人がつらそうに、あまり言葉もかわさず、駒もさほど動かさずに盤をはさんでお通夜のように座り続けている。

本年度は最後に残った対局の二人が揃って討ち死にという残酷なケースになってしまった。

感想戦の様子を観るために深浦も対局室も訪れていた。深浦くらいこの二人の気持ちがよく分かる棋士はいないだろう。しばらくして深浦が立ちあがって去ってゆく。もうつらくて観ていられないと思ったのか、来年の自分は決してこんなことになるまいと心に誓ったのかは知る由もない。



## 書評

---

棋書の書評も結構書いているのですが、ここでは読み物として楽しめそうなものを集めてみました。

誰にでも、なんとなく訳がわからないけれども、ぴったりくるという本があるだろう。自分にとってはこの本が、まさしくそう。この本を始めて読んだのは、高校生のときか大学生の時か、忘れてしまったくらい昔のことだ。初版が、それよりも前の昭和49年というのだから、三十年前の本だ。

一言でいうと、古きよき時代の棋士たちを、淡々とした筆致でしみじみと描いた本である。しかし、鋭い人間観察の裏づけがあって、決して「退屈」ではない。筆者独特の美学とスタイルに支えられた文章が本当に好きだった。久しぶりに読み返してみたが、やはり素晴らしいと思った。最近、自分はこのブログで「新時代の将棋」というようなことを、少し力みがちに書き連ねてきたわけだが、そんなことがどうでもよいくらい感じられるくらい、懐かしさがこみ上げてきて「やっぱり、昔は良かったなあ」という禁句がつい口からこぼれ出てしまう。

特に後半の、個別の棋士をとり上げた部分は、いったい何度繰り返しかえし読んだことだろう。将棋学徒小堀の一途さと孤独。天才芹沢の華やかさと自虐と絶望。大野の毒舌と子供のような人のよさ。謙信と良寛を兼ね備えた原田の人的魅力。関根の実直さ。灘の昔かたぎの頑固さと豪快さ。塚田の飄々とした姿。有吉の熱血と明るさ。真善美を追及する加藤の純粹さ。まれにみる才人丸田。正直者の佐藤大五郎。人の良さで世代特有の屈折を共有する二上。さわやかで自由奔放な米長。繊細で華やかな内藤。そして、巨匠大山、大スター升田、若き日の中原。どれもこれも忘れがたい。本当に読むのは久しぶりだが、ほとんど全部記憶していたので我ながら驚いてしまった。

勿論、昔の棋士だって、ただきれい事だけで済んでいたわけではないだろう。しかし、この本は、棋士の美点だけを、決して表面的な建前に陥ることなく、しっかり浮かびあがらせていると思う。現代の、何もかもが知れわたってしまうジャーナリズムでは到底不可能だろう。自分が、本当に懐かしく感じたのは、昔の棋士に対してというより、棋士に対する書き手の絶妙な距離のとり方、書き手と棋士の関係性に対してなのかもしれない。別に、ファンは棋士と日常付き合うわけではないのだから、何もかも全て知る必要などなく、棋士の本質的な美質だけを知ることが出来ればそれで十分なのだ。

あーあ、本当に昔が懐かしいという気持ちだが、どんどんこみあげてきて、どうにも抑えることが出来ない。自分もそれだけ歳をとったということか。

少し前の本ばかりですみませんが、まあ古典的名著の紹介ということで。

島朗「純粋なるもの」

それまでの、人間的なドロドロした将棋指しのイメージを一新する本。個人的には、旧世代の「あまりに人間的な」棋士像も決して嫌いではないのだが、やはりあの島さんが書くと、将棋新世代の生態が鮮やかに浮かび上がる。また、文体がそれまでの将棋本とは全く違って、透明感があって格調が高いのである。人によって好き嫌いはあるかもしれないが。しかも、登場人物の行動や心理を島さんが「代弁」して語るといふ、彼にしか許されない書き方をしている。例えば、羽生さんについて書いている章から。

「幹線道路を走っていた羽生は、早めに右折のウィンカーを出し、対向車線の車がとぎれたことを念入りに確認しながら、静かな住宅街の小道へと入っていった。一度だけ左折し、道なりに左にスロープになっているエントランスへと円滑に車を乗り入れた。午後と夕方の曖昧なこの時間には駐車場にとめてある車はまばらで、彼はゆとりを持ってきれいにリバースで自分のスペースに車を止めた。」

つい長めに引用してしまった。念のためにいっておくが、これを書いているのは羽生ではなく島朗なのである。そして、このお洒落な小説のような文体。感心するのを通り越して、思わず笑ってしまう。まさしく、島朗にしか許されない行為であろう。島さんには、将来「将棋小説」の新ジャンルを確立してもらいたいものである。

実は、竜王を取った当時の島さんのことをあまり好きじゃなかった。あの頃は、少し突っ張ったようなところがあり、偽悪的な部分もあったので。多分、男のヤッカミや嫉みが多分に混じっていたとは思いますが。どこかで、かつて田中康夫ファンだったと聞いたことがあるので、もしかするとその影響などもあったのかもしれない。

しかし、あの頃と比べると随分イメージが変わってしまった。人格円満、高潔で、周りの誰も不快にさせることがない。よく分からないが、彼の人間にしても将棋にしても、最初から存在していたというより、長年の努力、研鑽の蓄積の末に形作られてきたものだという気がする。「努力する天才」とでも言うべきか。河口俊彦氏が確か同じような意味のことを言っていたのだが、将棋指しにはユニークな人が多いといえども、島さんほど「変わっている」人はいないと思う。勿論、最大級にいい意味で。

「戦う将棋指し」1、2

将棋の内容より、将棋周辺の「噂話」に興味があるオバサンのような自分にはこたえられない本である。色々な棋士に、多ジャンルのインタビューアーが話を聞いている。特に面白いと感じたのは、ロッキンオン誌の女性編集者が、行方さんと三浦さんにインタビューしたもの。行方さんの、全く将棋指しらしからぬ部分がよく引き出されていた。多分、彼は将棋界にあっては永遠に「異質」な人であり続けるだろう。彼のそういうところが、好きになってしまうというインタビューだった。

羽生さんのインタビューもあり、本の性格上、それほど突っ込んだものではないのだが、ここでも実に興味深いことを言っている。手を読んでいる状態について聞かれてのお答え。

「うーん、とにかくたくさん判断していかなきゃならないから、何かすごい飛び飛びな判断になっているよ

うな気が・・・飛び飛びな判断って、うーん、ここはこうなってこうなってこうなってコッチがいいっていうんじゃないくて、こうなったからコレで終わり、こうなったからコレで終わる、こうなったからコレでっていう、そういう飛び飛びの考えが非常に速いスピードで行きつ戻りつしている、という感じなんですかね。」

サラッとやっているが、恐ろしいことが告白されている。要するに、読みを一手一手積み重ねるというのでなく、読みの過程を直感的に省略して、結果だけが瞬時にイメージできるというのだ。プロなら、ある程度この種のことのできるのかもしれないが、言語的ではなくイメージ的に思考する能力が、羽生さんの場合並外れているのだろう。将棋の手を考えている間、羽生さんの右脳が異常に活発な働きをしているという有名な話を連想する。絶対にコンピューターソフトには真似の出来ない行為である。こんな怪物を相手に戦わないといけないプロ棋士に同情せずにはいられない。

いつか、羽生 vs 将棋の「ディープ・ブルー」の対決を見られる日は来るのだろうか。それまでは是非長生きしたいものである。

石橋幸緒「生きてこそ光り輝く」

「ごきげん DE ブログ」で、彼女のファンになって読んでみた。シリアスな内容なのだが、全然メソメソしたところや暗いところがない。あのブログでおなじみの独特のユーモアのセンスが、ある程度抑制されてよい形で出ている。内容は結構重いが、同時に楽しく読める本である。読後感が、とても爽快で素直によい本を読んだと思える。ただの「感動的な本」だと思って敬遠している人がいたらおすすめしたい。余計な説明は要らないという種類の本。彼女が十九歳のときに書かれた。

河口氏の「大山康晴の晩節」を読んで、やっぱり面白かった。で、正月休みを使って、新対局日誌をまとめ読みしちゃおうと思いつき、図書館でごっそり借りこんだ。最初は、ちゃんと棋譜や指し手の解説部分も読んでいたのだが、ちょっと時間がかかりすぎそうだったので、今回はそういう部分は全部飛ばしちゃうという失礼な読み方をさせていただき、猛スピードで全 8 巻を読破。私はゴシップ好きのオバサンみたいなところが多分にある将棋ファンで、将棋自体以外にも棋士のエピソードにも興味があるのだ。

考えてみれば、プロの将棋指しの世界というのは、変わった場所である。たった、百数十人の人間が、ほぼ一生付きあっていき、なおかつ、勝ち負けというはっきりしすぎた結果を伴う非人間的行為を延々繰り返していかなければならない。人間関係において、一般社会以上に、色々あって当然なのだ。

そういう場面を活写させたら、河口氏の右に出るものはいないだろう。色々面白かったが、本のごくサワリのみ紹介しておこう。

かつての B1 で、田中寅彦と前田祐司は猛烈に張りあっていた。両者の対局時の緊張感はものすごく、二人とも闘志むき出しだったらしい。前田にいたっては、「私は人間魚雷になります」と言い放ち、自分が負けて犠牲になってでも田中を昇級させまいとしたのだという。今じゃとても考えられないような、人間的な光景である。ところが、そんな二人も、直接対局の後、一緒に飲みに行って、買った方が負けの方におごったりしているというのだから、実に不思議な関係である。いわば、しょっちゅうケンカしている兄弟のようなもので、大きな意味では家族の一員ということなのだろう。

河口氏の対局日誌では、普段省みられない棋士たちの順位戦での哀歓などを主に扱っているのだが、晩年の大山については、さすがに大きく取り上げている。特に、A 級順位戦での青野との死闘はすごい。(藤井猛「現代に生きる大山振り飛車」でも、棋譜解説されている。) 序盤で大山が大ポカがでてほとんど終わった将棋を、驚異の粘りで逆転に持ち込むが、その後も二転三転し、最後は青野がはっきり勝ちに。普通なら投げてもおかしくない場面で、大山が指した 6 九銀という、ただ詰めるを受けただけの手のことを河口氏は特筆している。そういう場面で、ほとんど意味のないような手を平然とさせる大山の心の強さ。その執念が通じたのか、青野が間違えて、大山が勝つ。総手数、227 手の大激闘、消耗戦、当時大山はなんと 67 歳であった。大山というのは、たんなる将棋指しという以上の、何者かであったことだけは間違いない。最後に、思わず笑い転げてしまった神谷広志さんのエピソードを。神谷さんは、一言居士で、毒舌家で、なんでもストレートに言う性格だそうである。そういう性格だと、ああいう狭いムラ社会では大変そうなものだが、案外仲間内からは好かれているらしい。もう各人がどういう性格か、お互い知り尽くしているので、かえって表裏がないほうが、気持ちよいかもかもしれない。私自身も、大好きな棋士の一人である。そういえば、今年の名人戦か竜王戦か忘れたが、神谷さんが立会いで BS に出演した時のこと。アナウンサーが、神谷さんを紹介するのに、気を使って、あの何十何連勝をした神谷さんと紹介したら、神谷さんは喜ぶどころか「あんまり、そういう過去の栄光みたいなことを言われてもうれしくありませんね、今勝ちたいです。」という意味のことをのたまうた。アナウンサーだって、単に気を使ってご機嫌取りしているだけなのだから、黙って受け入れればいいところを、そんな正直な受け答えをしてしまう神谷さんが、実に好ましかった。

また、田中寅彦さんの「将棋界の真相」によると、加藤一二三先生の対局で、例によって加藤先生がいつものクセで、駒を何度も何度も触って位置を直していたら、神谷さんは耐えきれなくなって「ボクの駒にさわらないでください」と言ってしまったそうである。思ったことを言わずにはいられない性格なのである。さて、そんなとてつもない正直者の神谷さんについての、河口本のエピソードを引用して終わりにする。

島といえば、「将棋世界」平成三年二月号のエッセイも愉快だった。中でも沖縄本島に旅行して、女の子と仲良くなりかけたとき「どうせあなた方も下心があって旅行に来ているんでしょう」と神谷が言ってはならぬことを言って、努力が水泡に帰したあたりは大笑いした。神谷の人柄がこの一言であらわされている。さらに、情景、表情など目に浮かぶようではないか。

そりゃね、若い男も女も、下心があって旅行に来ているかもしれないさ。誰しもそれは分かっているのさ。でも、なぜわざわざそれを女の子たちを誘っている最中に口に出して言う必要があるのさ。それを言われた女の子たちの表情やリアクション、島さんたちの唾然とする表情などを想像すると、もうたまりません。

(「ヒカルの碁」についてネタバレで書いているので御注意ください。)

生きてみた感想 『ヒカルの碁』 「神の一手」と歴史の慈愛について

「ヒカルの碁」についての素晴らしい分析なので、是非お読みください。私は「ヒカルの碁」を未読だったのだが、これを読んで興味をもち、今ものすごい勢いで全23巻を読破したところである。本当に面白かった。

「佐為」は、囲碁の歴史上最強とされる本因坊秀策に降臨して背後で碁を打っていた存在である。時を経て今度は全く碁をしらないヒカルに憑依する。だが、憑依するといっても、ヒカルに危害を加えるのではない。佐為は、人間として生きた際に個人的な不幸な体験があり、そのために成仏できていないのだが、おそろしく明るい。「ヒカルの碁」の読者は佐為のかわいらしさに魅了されてしまう。全く人間的な俗ないやなところがない。原作者に、佐為が女性だという声は何度も届いたそうだが、確かに佐為は人間的な男女の性質を超越しているところがある。成仏できていない霊というよりは、「天使」的な存在である。

碁に対してだけは「神の一手」を極めようという限りない情熱がある。いわば、「囲碁の神」と「人間」を媒介する「天使」である。碁の真理をきわめようとする「人間」を常に助けようとする。佐為も、現代に現れることで自身も一応は進歩を遂げる。秀策が現代に生まれて、進歩した定石を学んだらどうなるのかというのが佐為なのだから。しかし、佐為の本質はあくまで佐為であって、ヒカルのような「人間」の持つ予想不可能な進歩の可能性をもたない。それが、霊あるいは天使としての佐為の本質だ。

天使としての佐為は、「人間」としてのヒカルに対して囲碁の腕前で圧倒的に優越する位置にある。しかし、それでも佐為はあくまで、ヒカルの教師、助言者以上の役割を持たない。ヒカルが「人間」としての無限の可能性を開花させるのを、ただ佐為は、見守って助けるしかない。ヒカルにとってほとんど囲碁の神に近い佐為も、或る意味では人間よりも劣っている。それが天使の本質だ。天使は、囲碁の神と人間を媒介するのが任務なのだから。

だから、ヒカルが自身の能力に気付き、それを最大限に伸ばす努力を決意した際に、佐為は静かに去るしかない。しかし、佐為は、これからも何度も人間のもとを訪れるだろう。第二、第三のヒカルを助けるために。自分が進歩するためではなく、人間を援助するための天使として。

その佐為が、ヒカル以外の人間と本気で交錯する一瞬がある。saiとして、塔矢行洋とネット対局する場面だ。あれは、要するに秀策が現代の布石を学んで、現代の名人と戦ったらどういうことになるかということだ。将棋で言えば、例えば升田幸三が現代的な定跡を全てマスターした上で、羽生善治と戦ったらどうということになるかと。

勿論、それもとても興味深いテーマだが、今は別の点に注目したい。saiは完全に正体不明の存在だ。世界中の囲碁ファンが、saiの対局をリアルタイムで見守り、その腕前に驚嘆しながら、誰もが正体をつかめない。完全に世界に対して開かれていながら、完璧な匿名性を保持している。これは、ある意味では「神」の特性に近い。

しかし、実際は佐為は囲碁の神ではない。彼もまた、「神の一手」を求める存在にすぎない。その佐為が、

名人の塔矢行洋と囲碁の「神曲」を繰り広げる。ヒカルにそれを見せる為と同時に、やはり「神の一手」を追求する塔矢行洋のためにも。

ここでも、佐為は損な役回りだ。佐為も対局を満喫するが、かれはネット上の sai から生身の人間へ移行することは許されていない。佐為は塔矢行洋に勝つ。しかし、本当に何かを得る勝利者は塔矢行洋の方だ。塔矢行洋は、この敗戦を機に自ら名人位を返上して引退し、韓国に単身渡って、ひたすら「神の一手」を追求することに専念する。世間的には愚行だが、囲碁棋士としての塔矢行洋にとっては最高の生き方に目覚めたということである。それを可能にしたのは sai だ。しかし、佐為は勝利以外には何も受け取れない。ここでも、佐為=sai は、ネットという世界に開かれつつ匿名性が守られる舞台上、「人間」にたいして「囲碁の神」の姿を、直接見せないで暗示し、両者を媒介する役割を果たしているのだ。

進藤ヒカルの最大のライバルは塔矢アキラである。アキラも、ヒカルの中に住む佐為を囲碁を通じて最初に見て「囲碁の神」を瞥見する。アキラは外見は完全に女性のように描かれている。ずっと読み続けていても、絵の力によってつい女性と考えてしまい、何度も男性なんだと意識的に訂正しないといけない。

ヒカルとアキラは何から何まで対照的だ。アキラは早熟である。粗野なところが少しもない。ヒカルは成長が遅い、荒削りの原石である。単純に言えば、ここでも女性性と男性性の対比を見て取ることができる。しかし、内面性においては、両者は意外な部分がある。アキラはみかけに似合わず、強固な勝利への意志、揺るがない強い心の持ち主である。一方、ヒカルの方は、元気一杯そうできて、内面はおそろしく繊細でもろい部分がある。それもヒカルがアキラに先行される要因のひとつだ。ユングの言う、アニマ、アニムスのように、男性も女性も内面には自分の性別とは正反対な性質を隠し持っているのだ。

まさしく、ヒカルとアキラは、二人で対の存在である。お互いに激しくひきつけられ、反発しあう魂の一組だ。もし、二人が男女だったならば、猛烈な恋に落ちてしまっても不思議ではない。しかし、それはアキラが男性であることで、注意深く避けられている。佐為も、二人が結びつくキューピットの役割を果たすが、あくまでそれは肉体上ではなく精神的な結婚、魂の相補性のためであろう。

それでは、男性性を象徴するヒカルと女性性を象徴するアキラのどちらが、「神の一手」に先に辿り着くのだろうか？

それについては、「生きてみた感想」に答えが書かれているのでここでは繰り返さない。桑原本因坊がいうように、囲碁は二人いなければ打てない。誰か個人の囲碁棋士のみならず「神の一手」が舞い降りるわけではない。「神の一手」は、二人の「あいだ」、関係性によってのみ生じる。誰かがそれを所有できるわけでもないし、確実に触れることが出来るわけでもない。それは、囲碁の「歴史」に参画する全ての人間によって生み出されるものだ。

第 23 巻の最後にも、作者は少し照れながらはっきり結論を書いているのではないか。

「遠い過去と遠い未来をつなげるために」(ヒカル)

ヒカルただ一人の力によるのではなく、アキラと最高の碁を打った時に、それは可能になるはずだ。しかも、それは二人の所有物としてではなく、過去と未来の歴史がつながるという形で。

そもそも、こんな疑問が浮かばないだろうか。「神の一手」というのは、果たして実在するものなのか。それは、囲碁の神が人間に与えた問題なのだが、「神の一手」に実際にたどり着かせるのが目的ではなく、そのために人間的なギリギリの努力を積重ねる行為自体が目的なのではないのか。何かの報酬を得るのが目的ではなく、無償の行為をひたすら楽しみつつ苦しみつつ続けることのみ価値があるのではないか。囲



碁の神が与えた「神の一手」は、答えのない質問であって、人間を行為に駆り立てるための質問のための質問なのではないか。

囲碁だけの話ではない。神と人間の関係自体、あるいは人間にとって世界が存在する意味もそういうことではないだろうか。

妄想が行き過ぎたので、もうやめよう。

――読者「こんなの、ヒカルの碁の書評じゃないよ。」

噂の里見香奈のフォト&エッセイ集である。

事前に、もしかすると高校生の写真集なんで、オジサン将棋ファンはちょっと店頭で買いにくいのではないかとも言われたりもした。しかし、私は酸いも甘いもかみわけた立派なおヤジである。そんなことは、これっぽっちも気にせず、さっさと目当てのこの本を手にとると、急いでいたこともあり、この一冊だけ持ってそそくさとレジへ向かったのである。レジには若い女性店員が待ち受けていたが、そんなことは気にも留めなかった。

それでも、私はなぜか無意識のうちに裏表紙を上にして、本を店員に差し出していたのであった。

店員は本を表に向け直すと。満面の笑みで「ありがとうございます。」

この一言をキッカケに私の被害妄想が繰り広げられることとなる。

ーなっ、なんなんだ、表紙を見てのこの笑顔は。「女子高生がお好きなんですね。分かります。」と言わんばかりに。ちっ、違うぞ、オレは純粹将棋ファンで里見さんを応援しているだけなのであって・・・。

さらに、店員の攻撃は続く。さらにそれ以上の満面の笑みで「カバーをおつけしてもよろしいですね。」

ーなっ、なんだと。それは、「貴方もこれから電車の中ですぐ読みたいたでしょうけど、人目があるからカバーは必須でしょう。」ということか。なんだ、その笑顔をやめろっ。で、私は反射的に、

「カバーはけっこうです。」と、なぜか言い放っていたのであった。

勿論、たまたますごく愛想のいい店員に当たったに過ぎないのである。私が勝手に内心のドラマを繰り広げてしまっただけのことだ。

その後電車に乗ってから、カバーをつけてもらわなかったことを私がすぐに後悔した事は言うまでもない・・・。

さて、私が一番言いたかったことは既に書いてしまったのだが、これで終わると読者の怒りを買うこと必至問題なので、本の内用も一応説明しておこう。

撮影は弦巻勝カメラマンである。将棋界では、知らぬ人なき「鬚のカメラマン」氏である。その写真が期待以上に良い。対局風景だけでなく、里見のプライベートの写真も多いのだが、篠山紀信並の出来栄え？である。被写体もいいのだろうが、里見が見せる普段の自然なさりげない表情が、きっちり記録されているのだ。里見の場合、対局時の凜々しさと、普段のあどけなさのギャップが魅力なのだが、それがきちんと表現されている。

個人的なベストショットは表紙をはぎ取るとあらわれる、里見がはじけて走る姿である。これだけでも買った価値はあったと思った。

他には、里見らしいむ素直で飾り気のないエッセイ。里見による家族紹介と、家族による里見寸評。(やはり、絵に書いたような良い家族であって、羽生家や谷川家を想起させる。)女流名人戦についての、里見の各局ごとのエッセイ。森師匠によるエッセイ。森師匠と里見による名人戦の棋譜解説。里見に対するQ&Aといった内容である。

私がこの本を買ったのは、里見ファンということもあるけれど、それ以上に、将来振り返って、これが伝説の本になるのではないか、あるいはなっって欲しいという気持ちも込めてである。

その意味で、森師匠が最後に書いているこの言葉が全てを言い表していると思う。

「夢は、羽生善治三冠を負かして名人だ。」



最近亡くなった北杜夫のどくどくマンボウシリーズに「どくどくマンボウ青春記」というのがあってとても好きだった。

旧制高校時代の北自身を含む真剣そのものだがそれがそのまま滑稽であるような青春時代を描いている。彼らは難解な哲学や高遠な文学に真剣に取り組み、それに嘘はないのだが、北杜夫の作家の目がそれを客観視して茶化す。但し深い愛情をもって。そういう現代とは全く異なる青春を送る学生がいた時代が存在した。

北杜夫は1927年生まれ、山田道美は1933年生まれである。6歳差。この山田が遺した随筆を読んでいて、ちょっと「青春期」を思い出してしまったのである。

山田は当時のプロ棋士らしくなく、ドイツ文学を愛し(ドイツ語の原書も読みこなしたらしい)、クラシック音楽を好み、将棋という職業の意味を愚直なまでに真剣に考えていた。その、真摯すぎる思考の記録が随筆等の文章に残されている。

例えば、山田は単なる将棋指しでいることに疑問を持って、生きることの真の意味を考えて、シュバイツァーを見習って医師としてアフリカに渡って他人に尽くして生きようと決意したりもする。真夏の炎天下を歩いたりもした。実際には断念することになるが本気だった。

師匠の金子金五郎は当時の将棋の名解説者として現在でも知られている。同時に引退後には出家して仏の道を行んだ変わり種である。この師匠にしてこの弟子ありなのだが、二人が将棋という職業の意味について語り合う。

人を負かすことで成立する棋士という存在にたいする疑問。人によっては青臭いと笑うかもしれないがこの師弟は真剣である。そして、それが大層好ましい。

私は、また聞いた。

「今、ボクは将棋を指すことがそれほど楽しくない。苦行であることすらあります。しかし、一体将棋は苦しむに値するものですか。もし、将棋が何らかの意味をもち、苦しみに値するものでしたら、名人、八段にならなくても、ボクは努力をする勇気が湧くのですが……。」

老僧は、ちょっと困惑した表情をみせたあと、静かに言った。

「どんなことでも、苦しみに値するだろうね。」

この答えはずっしりとした重みがあった。禅問答なら、明かに私の負けである。

このような調子で理想主義的な求道者としての情熱や絶望が、率直過ぎるくらいに語り続けられるのである。

その考え方は、いはゆる「大人」は冷笑的にバカにしてしまうかもしれないが、私にはそれがすごましく新鮮に感じられた。こういう真っ直ぐな性質のまま、大人になっても生き続けられている山田のことが、ちょっと羨ましくなるのである。

当時の棋士の世界を私はよくは知らないが、本などで読むとある意味純粹ではあっても、「あまりに人間的な」世界だったようである。当然、山田のような人間は浮きまくっていたことだろう。

しかし、山田にも気の置けない棋士仲間はいた。加藤一二三である。彼とは、ある時は将棋を真剣に語り、ある時はバツハの「口短調ミサ」のレコードを貸しあい、まるで文学の白樺派のような交友を繰り広げてい

るようである。

基本的には大変真面目な文章だが、時にはその加藤一二三の結婚をめぐる微笑ましいエピソードも軽妙な筆致で語られている。

また、大山将棋を分析している文章も興味深い。ここでは、一部分だけ引用しておく。最近羽生善治がよく言う「大山先生は手を読んでいなかった。大局観だけで指していた。」という話を、もう少し具体的に補う証言とも言える。

要するに広く、浅くという形で思考線が非常に短いのが特徴である。長考しても一つの筋だけを深く読むのではなく、短い思考形式で広く読んでいる。

さて、最初に述べた北杜夫の場合は、自分の青春の真剣さを突き放して冷徹に見つめて笑い飛ばす作家の目が常にあった。しかし、山田の場合は大人になっても青春時代の延長で、真剣そのもののまま突っ走っている。

普通に考えると、北の方が大人だし成熟していると言えるだろう。

しかしながら、私にはそういう山田の愚直すぎるくらい愚直で真剣な姿が好ましくて仕方なかった。そんな生き方を現代でしても笑われるだけだろう。だが、そういう真面目な本質的な問いをする姿勢こそが、現在の日本の「現実主義」で何も変わらずにズルズル全てが流れていく状況に必用なのではないだろうか。

もうやめよう。山田の真剣さが私にまでうつって柄にもないことを言わせているようなので。

山田道美は「血小板減少性紫斑病」という珍しい病気で36歳の若さで亡くなった。この文章を読んでいると体だけではなく精神までも激しく燃え尽きて去ったようにも思えてしまう。

山田道美がまだプロになる前の十五歳の時から、結婚する二十六歳まで日記を、中原誠が編者として著作集の一巻として出版したもの。

前回紹介した随筆・評論集よりさらに赤裸々な山田の肉声を聞くことが出来る。わりと早熟な子供時代の日記から始まるが、特にプロになりたての頃の苦闘の記録が生々しい。

将棋という職業への根本的な疑問。将棋の本島の意味が見つけれず、苦労しながらその疑問を打ち消すためのように必死に将棋に取り組んでいる。

プロ棋士になってからも親の仕送りなしではやっていけない厳しい経済状況、お稽古などがあまり得意でない不器用な性格。

人生の異議も真面目につきつめて考え、古典文学を読み漁り、「復活」や聖書や「神曲」などに答えを虚しく求める日々。随筆でも登場したが、シュバイツァーに傾倒して本気で博士を追ってアフリカで医療活動をしようと決意したりもする。

肺結核を患い自身の健康と行く末への不安。

そして、女性に対する恋愛感情の飾らぬ率直な告白。

プロ棋士の日記というよりは、あまりに真摯に生き過ぎている一人の孤独な魂の直截な訴えに心動かされずにはいられない。日記文学としても異色の出来栄えだと思ふ。こんな生真面目な人間が将棋指しという最も過酷で残酷な部類の実験場にほうりこまれると、どうなるか・・・という記録である。

但し、最後は幸せな結婚の報告で終わり、一応彼の孤独には終止符が打たれる。とはいっても、最後まで真面目に生を考える性格は変わらなかったように、随筆等を読むと思えてしまう。

山田道美に興味がある方だけではなく、強烈な理想と絶望の間でゆれる若者の日記として読む価値があると思つた。

最後に一日分だけ日記を引用しておく。

昭和29年12月8日(水曜日)

また、あのたまらない倦怠がやって来た。どこへももって行きようのない、このいらだたしさ。現在の自分のみじめな姿、明日のカテを得れない不安、そして棋士として将来生存でき得るかどうかの不安 そんな心配が一どきにやって来て、生きている恐怖すら起こる。

生きたい、どうかして生きたい。死がこわい。生とは一体何だろう。衣食住に追われて生きる事なのか。夢のような理想を求める事か。或はよごれた世間に追じゅうして、うまく世渡りする事か。或は、生きている間だけ生き享樂する事か ああ分からない。

生とは？死とは？死んだ後は？愛とは？恋とは？快樂とは？禁欲とは？宗教とは？哲学とは？女とは？男とは？

この世の事で、一体何が分かるのだろうか。分からない事ばかり。今日は、殆ど生きる意欲すら失せそうな気がする。孤独のなせるわざか。

## エッセイ

---

私の場合、一応将棋ブログだけど実は全然将棋ブログじゃない。そういう文章を集めていて、個人的には大変気に入っています。

どんな人間にも、善悪両面が存在する。完全な善人など存在しないし、本当に悪にだけ徹しきれるほど強い人間などいない。程度の差、両者の力のバランス、善悪の深さは別にして、どちらも内面に抱え込みながら、何とか生きているのが人間というものだろう。

現代という時代では、「人間」を見る場合に、そのどちらかのみを照準を当てがちなどころがある。

一方では、人間の、悪、欠点、弱みばかりを嗅ぎつける姿勢。世間の奴らは何もわかってなくて、あの人間の本性は言われているようなモンじゃない。本性ごくごく汚いものだし、動機なんて所詮不純なものである。人間をよく知れば知るほど、そういうことが分かってくるものさと、うそぶく態度。

一方では、そういう悪を一切無視して、人間性の建前、美しさのみを無邪気に信じる姿勢。人のことが悪く見えるのは、お前の心が汚れているからで、人間性とは本来美しいもので、人間を汚いもののように言うのは、単なる偽悪趣味に過ぎない、と。

恐らくどちらにも道理があるのだ。現代において問題なのは、その両者が著しく乖離して、どちらかの見方にのみ偏ってしまっていることなのではないだろうか。理想を言えば、人間の心の、悪、汚さを余すところなく直視しながらも、総体としての人間性の美しさを、キレイ事でなく深いところで信じることの出来る強さである。とはいえ、言うは易しであって、それこそ実践するのは至難の業なのだ。

何でこんなことを書いているのか、訝しがらむきもあるかもしれないが、将棋指しを語るときにも、本来、今述べたようないわば「複眼」のようなものが要だと思っただけである。

どんな棋士であっても、あの過酷な奨励会を生き抜いてプロになっている。当然、ただのアマちゃんでは不可能だろう。自然自然に、人間が鍛えられて、どうしても人間的な「闘争本能」やそれに伴う「悪」の部分も必要になってくる。その一方で、いわゆる社会の中でもまれてスレているわけではないので、恐るべき純粋さや理想主義者的な面も残している。多かれ、少なかれどんなプロ棋士についてもいえることであって、そういうところが棋士という人間の魅力なのではないだろうか。

現代棋界を代表する、羽生と渡辺。自分は、この二人にその典型を感じるのだ。心の中に、いわば善と悪の大きい振幅を内面に抱え込んでいながら、結果的に全体としては、総合力の高さ、大きさや魅力を感じさせる人間。

渡辺については、本人が認めている通り「酷評家」の一面があり、辛辣なものを見方をする。また、徹底して合理的に勝ちにこだわる恐ろしいまでの勝負師でもある。その一方で、意外なほどの純粋さとか、周りを引きこむ明るさ、屈託のなさ、他人をひきつけてやまない人間的魅力にも欠けていない。

羽生については、生来の明るさと華、スター性があるのは誰にも異論がないだろう。しかし、その一方で、恐ろしいほどに冷徹で残酷なまでの勝負師でもある。本当の激カラ流は羽生だという声があるように、将棋に対する姿勢も実にシビアである。

この二人は、キレイ事でない人間性の幅を内面に隠し持っている点でも、やはり、現代の将棋界でも傑出しているのではないかと思う。そういう二人が、真正面から戦うところをファンは見てみたいのだよ。

そして、その二人の戦いを、本当に理解して楽しむためには、見る側にも、人間性の深さを悪にも善にもかたよらずに見ることの出来る鑑識眼が必要なのではないかと思う。

実は、坂口安吾が、木村 vs 升田の観戦記で実践していたのが、まさにそのことである。二人の戦いを、ただのキレイ事としてはなく、なおかつ、最高に楽しく描ききっている。しかも、安吾は将棋を全く知らずに、そのことを成し遂げているのだ。

いつのことになるかわからないが、羽生と渡辺が本格的に戦うときには、将棋だけでなく、そうした二人



の人間のせめぎあいを余すところなく描く観戦記が現れてくれることを願わずにはられない。

というわけで、タイトル宣言通りの、棋士という人間についての、ごく漠然とした話でした。いうまでもありませんが、羽生三冠、渡辺竜王について述べた部分は、あくまで自分が主観的に感じていることを述べただけであって、なんら客観的な根拠がないことを、一応断っておきます。

小林秀雄の未完のベルグソン論、「感想」を少しずつ読んでいます。小林が、生前出版を禁じたいわくつきの書物である。その中で、将棋と関連する面白い部分を見つけたので紹介しておく。ベルグソンが記憶についての叙述について小林が説明している部分からの引用を。

将棋の専門家が、幾人もの相手を並べて置いて、めくら将棋が指せるのは誰も知っている。相手のうちの誰かが、次はこう指したと報告をされる毎に、これに対応している自分の盤の駒を動かして貰い、結局、みんなに勝って了う。従来の解釈は、例えばテーヌの「知性論」にあるように、この場合、専門家には、純粹に視覚的な記憶があるとす。恐らく、彼には、心の中の鏡に映るように、最後の手順を示す各盤面のイメージが浮かんでいるのであろうと考えた。ところが、ビネの「めくら将棋」の研究は意外な結果を、はっきり示したのである。専門家の駒のイメージは、けっして鏡に映る様なものではなく、絶えず努力して、再構成しなければならないものだ、ということがわかった。では、この努力とは何か。彼の記憶に実際に現れた諸要素は何か。質問を受けた将棋の専門家たちの答えは、先ず次の点で一致していた。駒自体が心の眼に見えているということは、勝負の役には立たぬ。寧ろ勝負の邪魔になる。彼らが心に留め、心に浮かべているものは、駒の外見ではない、その力であり、射程であり、価値であり、要するに駒の機能である。見えているのは角の格好でもなければ、飛車という字でもない、斜めの力であり、直線的行進である。それは駒の話だが、勝負についても、彼らが心に浮かべているものは、様々な力の構成であり、敵方の力と味方の力の関係である。彼らは、勝負の初めからの歴史を、心のうちでやり直す。遂に現在の位置に到達するために継起した諸事件を再構成する。こうして、彼らは、全体的な表象を得たうえで、時に応じて、そこから様々な要素を視覚化する。だが、この抽象的な表象は、やはり分割の出来ぬ一つの全体を成した表象であって、それは、全ての要素の相互の浸透を含んでいる。つまり、めくら将棋を指す棋士には、それぞれの対局が、独特の印象を与える独特の顔付を持ったものと見えているのである。この顔を捕らえるのは、音楽家が、ひとつの和音全体をつかまえる様なものだ、と或る棋士は言う。幾つもの対局が混同してしまうことがないのは、この顔の違いによる。この棋士の言う顔という対局全体を指す図式(シエマ)は、対局の単なる抜粋でもなければ、要約でもあるまい。それはひとたび喚起されたイメージが完全な様に完全なものでありながら、イメージが、互いに外的な部分に展開する所以のものを、互いに関連する状態で含んでいるであろう。

引用が長くなったことをお許しいただきたい。途中で切ろうと思ったのだが、ここまで引用しないと十分に意味が明確に伝わらないと思って、ダラダラ続けてしまった。また、書き写していて、表現の美しさにホレボレしてしまったこともあるのだが。

言うまでもないが、ここで「将棋」といわれているのは「チェス」のことであるが、当然将棋にも適用できる話だろう。

将棋でもおける、脳内将棋、場合によってはそれにプラスした多面指しの場合、我々素人は、何であんなことが可能なのだろうかと思嘆するばかりである。頭の構造がハナから違うのだ、で片付けてしまう。

しかし、この叙述を読んでもみると、頭の出来というよりは、考え方とかイメージの仕方の違いの問題なのかもしれないと思えてくる。要するに、プロ棋士は、一つの局面を単なる図面として靜的に映像として描いて

いるわけではないのだ。そうではなく、その局面に至る。各駒の動き、展開、力のベクトルぶつかり合いを動的に全体として捉え、その総合としての局面をイメージしているわけである。前者は単なる静的な俯瞰図、後者は力のベクトルを内包する立体的な映像とも言える。二次元と三次元の違いともいえるかもしれない。「一つの顔」とか「音楽家が捕らえる一つの和声」という比喩が理解するためには分かりやすいだろう。これは、将棋の弱い強いにも関連させて考えることが出来るかもしれない。つまり、我々のようなヘボは、別に目隠しでなく普通に指していても、或る局面でどうすればよいかだけをアタフタ考えて、前後のイメージの積み重ねがきわめて貧弱である。それに対して、プロの場合ならば、ある局面だけを独立して見るのではなく、そこにいたる駒の機能や動きの状態を常に活発にイメージしながら指しているために、結果的に「直感」でよい手が見えるのかもしれない。

将棋は、単なる記憶力のゲームではないのだ。徹底的に定跡を覚えれば、ある程度までは強くなるだろうが、必ず壁にぶち当たるだろう。それに加えて、いかに将棋を豊かにイメージできるかがポイントになってくるのかもしれない。全く同じ局面を見ていても、弱いアマチュアには、単なる貧弱な符合の塊にしか見えないのに対し、プロにとっては、そこにはエネルギーの風や水流が逆巻く豊潤な絵のように見えるのかもしれない。いわば、ある風景を見て、一般の人間が素通りするのに対して、画家の目が全く違った美しさを見つけ出すのとも似ている。

将棋を上達するための「高速道路」を走りぬけた末に大渋滞に巻き込まれるとしたら、それを抜け出すためには、この種の芸術的イメージ能力が必須なのだろう。

これは、プロを目指す人に限った話ではない。アマチュアが上達するためにも、貴重な手がかりになりそうである。単に場面の一部だけを狭い視野で見て、ああすればこうすると考えるのではなく、盤面全体を力の場としてイメージ的に捉えること。抽象的な言うとそうなるが、具体的には、「盤面全体を見て指しなさい」とか、「どの駒も遊ばないように指しなさい」とか、「自分のことだけでなく、相手との関係を良く考えて指しなさい」というのも、全部今の話につながってくるはずだ。要するに豊かにイメージして将棋を指しなさい、ということだ。

といっても、今のようなことを頭で理解したからといって、実際に急に私が強くなることは絶対ありえないわけだが(笑)、将棋というゲームを考える上で、この小林の本の引用部分には、目が覚める思いがしたのも事実である。

この引用は、チェスに関してなのだが、こういう視点で、プロの将棋棋士が、どのように将棋をイメージして指しているのか、目隠し将棋や多面指しの際に、どういう思考・イメージ方式を採用しているのかも、是非機会があったら調べてもらいたいものだと思う。

朝日オープンを横目で眺めながら書いていたのだが、今羽生さんが勝ったところである。やっぱり強い。羽生さんの眼には、盤面はどのようにイメージされているのだろうか。一度でいいから、頭の中にもぐりこんでのぞいてみたいものである。

以前、[本ブログにコメントして下さったものを紹介した](#)ことがありましたが、改めてまとめた形で記事にされています。

第 67 期名人戦第二局二日目夕憩後、2008 (平成 20) 年 3 月 24 日

先手、挑戦者、羽生善治。後手、名人、森内俊之。

[Twitter](#) でも取り上げてみたら、プロ棋士や有名将棋ブロガーから、すぐに反応があったので、こちらでもリンクをはっておくことにしました。

[shogidaichan](#) @shogitygoo たしかにこれは名観戦記ですね

[doublecrown](#) @shogitygoo ああ、これはいい観戦記ですねえ。子供がかわいいなあ。昔の自分を思い出しました。

子供もかわいいし、私は、あぶないジョークを言った駐車場のおっちゃんが、いたく気に入ってしまいました。

私の知りうる最高の名人戦記事が、普段チェスのことを書いている方のものだというのは、将棋ブロガーとしては内心忸怩たるものがありますが、まあ、はっきりいってこの方はちょっと別格なので仕方ありません。

そうだ、そういえば[第三局のことも書かれていました](#)。阪田三吉の名セリフとは逆の「銀の笑いが聞える。」が、決まりすぎだぜ。

少し前にこのことについて書いたら、わたしの記事に、というより、紹介した羽生さんの言葉に反応して、[こんな記事](#)を書かれていた方がいた。モダンアートを「理解する」ことの意味をめぐる引用集なのだが、これが実に面白い。

将棋と関連させて考えたいと思ったのだが、さすがに難しすぎる。ということで、気になった引用について、思いつくままに雑談してみようかと。

われわれにとって「和音」といえば、たとえば「ドミソ」のことであるが、中世においては「ドミソ」は不協和音だった。つまり「ミ（三度）」が入ってはいけなかったのである。・・・中世の人々にとっては、この（近代の和声法では「空虚五度」と呼ばれて禁則とされる）「ドソ」の響きの方が「正しかった」のである。（「西洋音楽史」 岡田暁生著）

あまりに根本的な問題である。人間の各時代における感覚は、当然その時代の制約を受けた相対的なものである。音楽史において、自明とされている前提は実は全然自明ではない。いや、そもそも「西欧」の音楽の理論体系自体が、全然普遍的ではないかもしれない。自由な音楽を抑圧する帝国主義的体系なのかもしれない、というのはあまりにありがちな言い方過ぎますが。

「わたしたちがレト・ボラーの作品を「わからない」と嘆くのは、「芸術」という西洋近代が生み出した抑圧的観念のベールによってわたしたちの眼差しそのものが「制度化」されているからではないのか？」（「20世紀絵画」宮下誠著）

我々が「分かりやすい」とか「あたり前」と思い込んでいるのは、実は制度によって刷りこまれた先入観に過ぎないのではないか。そういう制度の根元の部分の幻想のベールを剥ぎ取る作業が必要なのではないか。その作業の結果、従来の芸術の見方に、根本的な価値転倒が起こるのではないか。

さて、それでは将棋においてはどうか。さすがにそこまで根本的な価値転倒は起こらないだろう。将棋の世界は、根本的にはルールが明快な世界だし、勝ち負けという明快な終着点のある世界である。例えば、ある人間が、最初に飛車先を突いたり角道を明けたりするのに生理的違和感を覚えるといったら、最初に玉を動かしていたら、たちまち負けてしまうだろう。

芸術の世界では、人間の感覚対象把握能力の相対性が問題になるが、将棋の世界においては、少なくとも程度の問題としては、人間が勝手な見方や理論づけをする自由は大きくない。対象やルールに即して考えることを最初から要請されるからだ。

しかし、それはあくまで程度の問題だし、将棋にも芸術同様の問題は当然発生する。

「何が描かれているか」という基準で見ると「モナリザ」は「わかる」し、「黒に黒」(アド・ラインハートの作品。四角いキャンバスが真っ黒に塗りつぶされている。)は「わからない」。しかし「モナリザ」とは誰か、レオナルドがこの絵によって何を言おうとしたのかは今もって謎である。主題が分からないのだ。その点で「黒に黒」と寸分も違わない。「黒に黒」が私たちにあって「モナリザ」と違うのはだからその外観(見た目)にすぎない。ラインハートの世界解釈システムが「見た目」と

は違うところで機能しているからだ。」

現代将棋は、形が古典的ではないし、見た目の理解が難しく分かりにくい。では、なぜそれを人は「分かりにくい」と思うのか。それは、将棋を「見た目」の基準で判断しようとするからである。古典的な将棋は「見た目」では、現代将棋よりは分かりやすいとしても、必ずしもその将棋の深い意味内容を一般の人間が理解しているわけではない。モナリザの主題が分からないのと同様に。

それでは、現代将棋の「世界解釈システム」とはどのようなものか。この引用でも、ラインハートのそれが何なのかは言われていない。表現するのが難しいのだろう。現代将棋もそうだ。弱い素人に、それが説明できれば世話は無いのだが、到底無理である。敢えて言って見れば、形の古典性でなく、各駒の働きや構図の力学を動的に把握しようとしているとでも言うべきか。内的動的力学関連さえ均衡していれば、外的な見た目の変さにはこだわらなくなっているというか。

いきなり角交換したり、馬を作りあったり、玉をちゃんと囲わなかったりするの、「形はきれいでない。」しかし、見た目とは関係ないところでは、きちんとバランスがとれている。だからプロも指すのだろう。形のきれいさに対する図形的把握よりも、その局面の内的力学関係まで、現代将棋は読み取ろうとしているのかもしれない。と、一応仮説を立ててみたが、全然自信は無いです。

「ある無邪気な知り合いから「どうしてかつては・・・ロマンティックで美しい調性音楽を書いていたのに、なぜ不協和音だらけの曲しか書かなくなったのか？」と尋ねられたシェーンベルクは、憤然として「自分だって出来るなら調性で音楽が書きたい。しかし三和音を書くことを、歴史が私に禁じているのだ」と答えたというのである。」(「西洋音楽史」 岡田暁生著)

シェーンベルクは、彼の生徒に対して「私は、あなたたちが音楽を書けなくなることを出来なくするために音楽を教える。」という意味のことをいったそうである。

将棋においても、従来の指し方の理論体系を徹底的に疑っていったら、どんなことになるのだろうか。いつの日か、将棋のシェーンベルクが出現して、彼の弟子たちにこのように言うのだろうか。

「私は、あなたたちが将棋を指すことが出来なくなるようにするために、将棋を教えるのです。」と。

「歴史を一本の糸のように見て、過去から現在、未来にかけて直線的につながり、先に行くほど進歩するとか光明に富んだ時代になるとか言う考え方を批判して おのおのの時代は神に対し垂直な関係に立つ」と言ったのは、確か19世紀の歴史学者ランケだったと覚えているけれども、音楽家、演奏家達も、また、前の人達の方が靈感に満ちていたとか、あとの時代になるほど技術が進むとか言うことはないで、それぞれの在り方とそれぞれの時代との様式において、作品に対し垂直な関係にあるのである。つまり、どの人の演奏も、一方では歴史の中で捉えなければならないと同時に、どの人の演奏も、それ自体の価値と考え方の体系として、その内部で評価されるに値するのだ。」(「一枚のレコード」 吉田秀和著)

音楽の世界においては、ある程度正論として素直に受け取ることが出来るだろう。しかし、将棋の世界では、話がかなり違う。基本的には、将棋の世界においては、技術の進歩が進んできている。分かりやすく言うと、昔の棋士より現代の棋士のほうが強い。従って、各人の個々の評価よりも、時代における将棋の全体

レベルを評価すれば、それば十分であると。

しかし、それも実は程度問題である。明らかに、音楽と比べれば、将棋は個々人が自由な創造性を発揮する余地は小さい。しかし、全く無いわけではない。羽生と佐藤の将棋は全然違う。厳しい技術革新に対しては、羽生も佐藤もそのほかの全てのプロも、謙虚に学ばなければいけない。その努力を怠るものは、たちまち敗れ去るだろう。しかし、そういうことをやりつくした上でも必ず残る個々の人間の個性の部分がある。吉田秀和の言っていることは、ギリギリの部分では、ちゃんと将棋にも当てはまるのではないだろうか。例えば、最近のインタビューで、羽生は大山のことを「史上最強」と呼んだ。私は、あれを偉大な先人に対する単なる社交辞令だとは思わない。現代将棋と大山の将棋との技術的差異を、冷徹に明晰に把握した上で、それでも残る「大山将棋の個別的特性」を、羽生は本当に見抜いているのだと私は考える。最近、羽生が急に勝ちだしたのは、決して偶然ではないだろう。羽生は、浅い合理主義者が馬鹿にして見逃す部分を、きちんと見ているのではないかと思う。

将棋世界の最新号に、各界有名人が祝いのメッセージを寄せているが、内館牧子さんが紹介して羽生の言葉は、きわめて興味深い。

将棋には「技術」と「人間性」がでる中、最近では技術の方が見直される傾向にあるとし、次のように語っている。「技術が進めば、今度は人間性が見直されます。二十年、三十年たてば、その人が持っている資質とか性格とかそういう部分が重要になってくると思うんですよ。」

今から十四年前の羽生の言葉である。羽生は預言者である。

「人はみな絵画を理解しようとする。ではなぜ人は小鳥の歌を理解しようとはしないのだろうか。美しい夜、一輪の花、そして人間を取り巻くあらゆるものを、人はなぜ理解しようとはせず、ただひたすらそれらを愛するのだろうか・・・。」(ピカソ)

「ピカソの不満は、人が絵画を「理解しよう」とすることにあるのではなく、人が絵画を「愛そうとしない」ことにある・・・。」(「20世紀美術」 高階秀爾著)

ピカソは、モダン・アートを、頭でっかちに作り出したわけではない。本当に、自分の深いところの欲求に素直に従って描いたら、あのようになっただけだ。鳥を愛するように、自分の描いたものを愛した。野性的で強靱な理性と尽きせぬ泉のような創造性の稀有な結合。

羽生善治の批評力と佐藤康光の創造性を兼ね備えた将棋のピカソが、いつの日か出現するのだろうか。

3/26(木)の朝刊に掲載された「オシム氏に日本サッカーを聞く」が素晴らしかった。現在、オシム氏は、日本サッカー協会とのアドバイザー契約を終え、オーストリアのグラーツに居を構えている。

ー日本について

「お米と豆腐が恋しい。東京の高層ビル、広告ネオンも懐かしい。日本の美しいスタジアムで美しい試合を見ることは、私を興奮させた。今はそれがない。恋しい。」

日本に住んでいると、中々その良さは分からない。むしろ、駄目な所ばかりに目につく。オシムのこの言葉には、何かハッとさせられるものがある。彼のような知性的な外国人から見ても、とても美しく感じられる Tokyo。はるか昔に、映画監督のタルコフスキーが「惑星ソラリス」で首都高速道路を未来都市の情景として使った時に感じたような、外国人の視線で見た日本の文明に対する新鮮な驚き。相変わらずオシムの表現は優美である。

ー選手にとって W 杯に出る重要性とは。

「例えをすると、世界でもっとも美しい声で歌うカエルがいたとしても、ミラノのスカラ座で歌わなかったのなら、そのカエルは(一流の)歌手にはなれないということだ。」

オシムは、現在の世界(西欧)のサッカーの動向に対しても距離を置いた冷静な見方をしている。彼自身、西欧の周縁のユーゴ出身であることを反映するかのよう。

ー欧州サッカーで何か変化を感じているか。

「サッカーが、より大きなビジネスになった。お金をいくら使うか、全てがビッグクラブの思うがままに動く。戦術とは関係なく、(お金をかけて)どんな選手を連れてくるかが重要になっている。負け始め、上位から落ちるとスポンサーは引き上げる。だから、いかに負けないようにプレーするか、になる。これでは美しい試合にはならない。日本がそうなったら意味はない。誰もが結果をすぐに欲しがるが、チームづくりというのは遠い道のりだ。」

サッカーやスポーツに限らず、世界的な傾向に対して、当たり前すぎて誰も言いそうにもないが誰かが言うべきことを、きちんと言っている。日本のサッカーだってある程度同じことは言えるのだろうが、世界サッカーの中で日本がおかれている立場を考えると、日本にはオシムの言う「美しいサッカー」をする可能性が残されている。そして、オシムがしようとしていたサッカーは、まさしくそういうものだった。彼がかつてユーゴでしたように、主流とは異なる「美しい」芸術的なサッカー。

ー日本は不況といってもまだ経済的には豊か。それがサッカーに影響しているか。

「サッカーをプレイするのは難しい。走らなければならないし、苦しまなければならない。やり方を学ぶ必要もある。成功したいなら、多くを犠牲にしなければならない。すべてに犠牲を払うのは難しい。両親、環境に恵まれ、車やオートバイ、テレビなどすべてを手にしたのならば、サッカーをすることが何になるのだね。そういうことはサッカーとは相反するものだ。」



彼にとってサッカーとは単なる仕事ではない。生きるとはどういうことかと深く哲学的に関連した行為である。サッカーは、現代的な享楽文明とは相反する要素を求める。オシムがよく言っていたように「まず、とにかく走れ」である。苦しみや犠牲を払った上でこそ達成できるもの、それがあゆむゆえに価値が高いもの。オシムにとって、サッカーとは、まさしく人生を生きることそのものなのだろう。

オシムの言葉を聞いていて、将棋のことを考えずにはいられなかった。将棋も、美しくプレーするためには、苦しまなければならない。サッカーで走らなければならないように、苦しんでとにかく手を読まなければならない。戦術を学び、犠牲を払って自己を高める努力をしなければならない。

現代のプロ棋士たちも、常にそういう行為を行っている。将棋を指すことは、恐ろしく苦しい行為のはずだが、それだからこそ素人にはうかがい知れない時間の充実、深く生きているという喜びがあるのだろう。将棋をわざわざ考えて指すのは、現代の享楽文明においては、明らかに変わった行為である。将棋のプロ棋士たちは、きわめて反時代的なヒーローたちなのだ。しかし、それは人間が本来生きるというのがどういうことなのかを、怠惰な生活に慣れきった我々にも思い出させずにはいられない営為でもある。だから、我々は、彼らの 81 枱内の激闘に熱狂できるのだ。

かつて、行方尚史が若い頃にこんなことを言ったのではないか。彼は、とても現代的な青年だが、時代にそぐわない将棋の魅力を若い頃からちゃんと身をもって理解していた。

将棋に乗っ取られ、なんだか体が重たくなっていき、街の空気が肌に合わなくなったが、奨励会で競い合うことが楽しかったから、日常なんてどうでも良かった。普通であることに、軽蔑にも似たあこがれも持ったが、「ジャンプ」を買って読むなんてことは想像もつかないことだった。

(竜王戦【梅田望夫観戦記】(7) 羽生世代の信頼関係 より)

少し前の記事なのだが、私のブログにリンクをはっていただいていたことで最近気付いた記事を紹介させていただく。

#### 生きてみた感想 将棋と時間 将棋に見る有限性の考察

羽生名人と三浦八段の名人戦における三浦八段の必死な対局姿は誰しもの心をうった。それを、ハイデガーの「恐怖」と「不安」をひきつつ、プロ棋士が将棋を指す上での時間の有限性と三浦八段の対局姿勢とに関連させて、きわめて本質的な考察を深くなおかつ明快にされている。大変面白いので、是非皆様お読みになっていただきたい。(私のブログなどよりも読者数の多いブログのようなのだが、将棋ファンの為に申し上げます。)

私自身、哲学にも興味はあるのだが、本格的な素養は全然ないので、何も言うべきことはないのだが、折角私の愚記事を紹介していただいた事もあるので、少しだけ私自身の感想も書かせていただく。

ハイデガーは「不安」という気分の源泉を、いつかやがて訪れる「死」を先取りすることのうちに求めました。「不安」というのは、有限性を肌で感じることの極限にある気分であるということです。ですので、相当に勝手な解釈であるとは自覚していますが、名人戦で三浦挑戦者が見せた極限状況を、将棋に潜む「不安」と向き合ったがために追い詰められた、棋士という存在にともなう有限性の、生々しくも美しい発露であると捉えてみたい、と個人的には考えています。

いきなり、結論部分を引用させていただいた。

名人戦のような長時間の将棋でも、持ち時間は有限である。将棋の指し手の組み合わせも一応有限ではあっても、人間にとっては殆ど無限に近い。その、「無限」に対して「有限」な時間内でいかに人間が立ち向かうのか。仮に時間がなくなると「死」と考えた場合に、有限な「生」が宿命の人間がどう対処すべきなのか。

三浦八段は、「無限」の存在にたいして、「有限」の身でありながら、自分の出来ることをすべてやろうとする。なりふり構わず、必死に人間らしさをむき出しにして。散々話題になった「封じ手練習」もその一端に過ぎない。当然、人間には「無限」を理解することなど不可能なのだから、努力すればするほど「不安」が生じる。また、そのあまりに一生懸命な姿は、そのドンキホーテ的な姿勢の為に一種のおかしみ誘う。しかし、見ている人間達は、気持ちよく笑いながらも多分分かっている。三浦の姿が、本来の人間のあるべき姿を、極限的な形でありのままに提示していることを。だから、誰もが笑いながら、とてつもなく心を揺り動かされるのだ。すっかり「死」を忘れ果ててしまった現代人が、本来の「生」にふと気付かされるように。

一方の羽生。

そして逆説的にも、多くの手を読み進めることができればできるほど、この困難さ、つまりそこには必ず読み切れない部分が残る、という点をより強く実感するのだらうと思います。羽生名人が、将棋における他力、つまり将棋の指し手は、最終的には対局者の指し手に依存せざるを得ないのだとい

う一種の諦念のようなものにたどりついたことは、このことを如実に示している事例のように思われます。羽生名人は、将棋というゲームに向かう際に人間につきつけられるある有限性というものに、もっとも敏感な棋士の一人であるのかもしれませんが。

羽生は、吉増剛造氏との対談で、将棋を指している際にふとのぞきこんでしまう「狂気」について延々と語り続けていた。羽生が最近「他力」ということを盛んに言うのは、楽天主義というようなことでは決してあるまい。羽生も、三浦と同様、あるいはそれ以上に「有限」な人間の身でありながら、「無限」を突きつめようとする、あるいは突き詰めざるをえないという種類の存在である。恐らく、その努力を普通の人間には想像も出来ないくらい激しく徹底的に行ったうえで、羽生はサラリと言う。「将棋は他力ですよ」。あるいは、かつての大山のように「全然考えなくても急所に手がいく大局観」を言う。

羽生が、最近この種の発言を繰り返すことを、ある種のファンは批判的に考えるかもしれないもしれない。羽生も、かつては徹底的に合理的でラジカルな存在だった、しかし、現在は人生の達人のような境地に逃げるようになってしまった、と。しかし、一見そう見えるだけだ。羽生の場合、最初から人生や将棋を達観しているわけではない。むしろ、有限な人間として、極限的な努力をしたうえでの、「他力」なのだ。当然、その努力の過程では、人間が耐えることの出来る最大限の「不安」も体験しているはずだ。いや、羽生の場合、その「不安」は、一直線に「狂気」へと繋がってしまっている。その危険を一番よく心得ている羽生だからこそ、あっさり「他力」という。羽生の「他力」は全然楽天的ではなく、恐るべきストイシズムの裏づけがあるのだ。多分、自力救済の極限的な修行を積重ねた上で、自分の根底になるエゴに気付いて、「絶対他力」の境地にたどりつく修行者のように。

三浦は三浦らしく、真正面から人間的な「不安」と向きあっている。一方、羽生は、そこから賢明にスルリと身をかかわしてしまっているようで、実は三浦の最大の理解者なのだ。

羽生は、三浦の猛烈な努力と不安を一番良く理解していて、おそらく微笑みつつ三浦の姿を眺めている。――三浦さん、あなたの姿はそのまま私の姿だよ。

しかし、羽生の場合、その羽生自信の姿を常に冷静に突き放して見つめているもう一人の自分がいる。それが、恐らく羽生が他の棋士たちに優越しているわけの本質だ。恐らく、唯一つの理由だ。

しかし、羽生は、一心不乱に「不安」と向きあえている三浦を、きっとどこかで羨ましがっているはずだ。多分・・・。

Zeiramsさんより、[朝吹 + 羽生対談の記事](#)について長文コメントをいただきました。ありがとうございました。

生まれ生きて死んで、また生まれ。死と再生の輪廻の向こうの残酷で美しい真理。私は「真理の探求者」が好きです。

人間は言葉で考え、それは言葉でしか表現できません。だから真理を探る人は必死に言葉で真理を紡ごうとする。彼らの豊穡な言葉は、真理に真剣に向き合えたからこそ発せられるのでしょう。

真理の扉は、きっとこの世界のそこかしこにあって、我々のすぐ隣りにもきっとあるのです（\*個人の感想です）。

かつて白隠禅師が、コオロギの声を聴いて「目の前にあるあらゆる相の中に深い真理が潜んでいる」と気づかれたという逸話が残っています。

あらゆる現象が実はそのまま真実の姿を表している。これを仏教では「諸法実相」と言いますね。

真理の扉の向こうに実は言葉はなく、故に真理は人間の言葉では表現することは出来ないと思うのです。

ものぐささん、将棋盤の中の世界が有限か無限かとか、結論は先手勝ちか後手勝ちか？といったことは、真理の前ではもしかすると全く「どうでもいい」ことなのかもしれません。

むしろ駒の配置そのもの、矢倉や美濃囲いの「美しさ」の黄金律の中に、本当の真理が潜んでいるように思えてなりません。...それはもう「将棋の真理」を遥か超えた「宇宙の真理」だったりするかもしれません。

羽生さんは将棋の世界に潜む真理の扉をいつか開き、やがて「語る」ことを放棄されるような気がする。真理は言葉では決して表せないと思うから。

数十年後。

弟子（とってないと思うけど）に「将棋の真理とは何でしょうか？」と尋ねられた羽生師匠が、何も言わず駒を軽くつまんでそっと微笑む。

...という情景（個人的な妄想）が頭にこびりついて離れません。

もうすぐ名人戦が開幕しますね。羽生-森内。この二人だからこそ盤上に表出する「真理の相」に想いを馳せながら、宿命のライバル同士の闘いを見守りたいと思います。

さっきから、ずっとどうやってお答えしようかと考えていたのですが、さすがに真面目に答えるには大きすぎる問題で自信もないので、ここは「ものぐさ居士」に変身して、ちょっとおふざけでお答えしてしまおうと思います。ちなみに調子はふざけていて Zeirams さんに対して失礼になるかもしれませんが、もしかすると実はかなりマジで語ることになるかもしれません。

海より深き智恵の Zeirams 大師よ。ありがたきお言葉の数々、しかと承った。

真理は言葉では表現できぬというのは、おっしゃるとおりじゃ。我々にとってそんなことは自明の理じゃ。しかし、白隠禅師が、コオロギの声に全てを感じ取ったように、ぎりぎりの言葉に対して、本来貧困な言葉以上のものを感じとることも可能なのではないかしら。コオロギの声にも言語にも差別はないのだから。大師が、お二人の対談を既に読まれたかどうかは存じ上げぬが、この二人の対談の言葉自体が言葉の限界をするりと通り抜けて言葉ではあらわせない何かを常に指向するような、そんな言葉の数々じゃった。朝吹さんは、こんなことも言っておる。

たぶん、小説は余白を読み手に差し出すのが幸せなことで、書かれなかった言葉を受け取るのが人間の思考の面白さなのではないかと思います。

恐らく、朝吹さんは、言葉を徹底的に突きつめて言葉自体の可能性を極限まで追求しながら、最終的には言葉にはどうしてもできないものをかすかにだが確かに感じさせるようなタイプの作家なのではないかしら。だから、白隠禅師のコオロギと同じなのでは？

羽生さんは、この対談でも吉増さんとの対談でも、「言葉」に対する感受性が普通じゃない。ワシたちが、日常的に使っている貧しい言葉ではない、言葉に対する感性があると思うのじゃ。羽生さんは、多分将棋でも将棋の言語をまず真面目に徹底的に突き詰める作業を行ったうえで、将棋の言語を越えるものを発見しようとしている、あるいは感じずにはいられないような気もするのじゃ。そういう態度は、羽生さんの普通の言語に対する異常な感覚の鋭さとも関係しているのかもしれん。

将棋盤の中の世界が有限か無限かとか、結論は先手勝ちか後手勝ちか？といったことは、真理の前ではもしかすると全く「どうでもいい」ことなのかもしれません。むしろ駒の配置そのもの、矢倉や美濃囲いの「美しさ」の黄金律の中に、本当の真理が潜んでいるように思えてなりません。

これも、ワシには分かるが普通の人たちには理解できないのではないだろうか。要するに、将棋というゲームの解や勝敗など究極的にはどうでもいいことで、そこに人間が感じ取るものが大切でそれが真理だとおっしゃるのだからな。

ワシは Zeirams 大師ほどは悟りきれておらんので、やはり将棋というゲームの解にも興味がある。それは現在のコンピューター将棋の顕著な進歩によって人間が直面させられている問題で、実は有限だが人間にとってほとんど無限な世界に、どう人間が向き合うかという興味深い問いなのじゃから。

しかし、ワシも基本的には大師の意見に賛成じゃ。何も、将棋の詰まらない解を知らなくても、人間は将棋という現象に向き合うだけで全てを知る能力を本来は有していると信じておる。しかし、残念ながら普通の人間には、白隠禅師のコオロギは無理じゃ。

将棋の世界でも、現象で全てをいきなり悟るのではなく、地道な努力を徹底的に繰り返す作業を積重ねないと、それを越えるものは見えてこないのではなからうか。多分、白隠禅師の時代の禅道と現代の禅道は違うのじゃよ。何の努力もせずいきなり悟れる Zeirams 大師のように、なかなかいかん。

拈華微笑の故事にちなんだ羽生さんの微笑。ワシの頭の中にはこんな光景が浮かんだ。

羽生が、初手に 5八玉と指した。誰もその真意をつかめずに動揺して黙ったが、対戦相手の棋士だけは真意を理解してにっこりと微笑んだ。羽生は、その時点で投了して、その棋士に全てを託して、その後一切将棋を指さなくなった。

さて、その棋士は一体誰になるのじゃろう。Zeirams 大師のお好きな渡辺かな。でも、渡辺なら微笑まずに合理的に「なんですか、これは」と口に出して言うのではないかしら。まだまだ渡辺も修行が足りるので、Zeirams 大師の教えを請う必要がありそうじゃ。

朝吹真理子による、日本経済新聞夕刊に10回に分けて掲載された、王座戦二次予選決勝、郷田真隆九段対村山慈明五段戦の観戦記。

観戦記に一切将棋の符号は出てこない。小説を読んでいるようである。しかし、あくまできちんと具体的な事実に即して細部の事象を何も見逃さずに再現している。しかし、きちんと事実だけを述べているにもかかわらず、どこことなく現実でありながら現実でない光景を読んでいるような錯覚に陥る。例えば、朝吹が前夜の夢の中で対局室でお茶をこぼしたら、実際に郷田がほうじ茶をこぼしてしまうシンクロニシティ。朝吹が羽生善治と「新潮」で対談した際に述べていた、「将棋の対局においてあらわれる様々な時間軸の交差」について、これも具体的な対局の進展に即して描出している。終盤に近づくにつれて、どんどん盤面の世界に入り込んでいく二人を「深海魚」と表現したりしながら。

当日は、東日本大震災の日だった。その場にいた羽生など、棋士たちの様子も克明に描き出されている。郷田は記録係に「余震が大きかったらこちらを何にせず逃げてもいいから。」と言葉をかけ、「揺れが続くなか背筋を伸ばして森下九段は笑っていた。」

郷田九段は「将棋の研究をしているとあまりによく出来過ぎているので、今生は何回目かの文明ではないかと前はよく思っていた。と後に語った。その円環的時間のことがずっと印象に残っていた。

羽生がこういうことを言うのなら、もう驚かない。でも、郷田がこんなことを言うとは。朝吹 VS 郷田対談も必要そう。

朝吹は、結局深夜の終局後までつきあって会館で仮眠したようである。名人戦第一局も現地で取材されていて、その様子がBSやネット中継でも少し見られたが、対局者や盤面を本当に食い入るように観察していた。全然遊び半分でなく本気で、ちょっと作家の狂気のようなものを感じてしまうくらいだった。本当に将棋や棋士がお好きなのだろう。棋士と通ずるものを持たれているのかもしれない。

観戦記は、このように終わる。

駒をしまおうと盤面はのっぺらぼうになる。存在していた規則も意味も失われる。一局のうちにとめどない変化を目にしていたはずだった。盤はいかなる痕跡も残さない。勝負が終われば全て消える。

ジャズのEric Dolphyの言葉を思い出した。

When you hear music, after it's over, it's gone in the air. You can never capture it again.

## コンピューター将棋

---

コンピューター将棋のことというより、人間とコンピューターについて書いています。実はそのことだけに興味がある。



ボナンザ開発者の保木邦仁さんと渡辺竜王の共著。角川 one テーマ 21 の新書本の新刊。定価 686 円 (税別)。保木さんと渡辺竜王がそれぞれ、単独で書いた (語った) 章と、二人の対談から成り立っている。

保木さんは、ボナンザ開発の経過、プログラムの具体的内容を解説している。評価関数のパラメーターの具体的内容などにも言及している。科学者の目から見た将棋というゲームの本質も。

渡辺竜王は、ボナンザ戦の舞台裏を詳細に述べている。また、プロ棋士として、(コンピューターとは違って) どのように将棋を考えて指しているかにもふれており、渡辺将棋を考える上での貴重な資料である。当然、棋士から見たコンピューター将棋についても。

このボナンザ戦については、BS ドキュメンタリー、将棋雑誌、新聞、ネットなどで、多くの情報が流れたわけだが、この本でしか知りえないことも書かれており、まとめと考えると、一読の価値は十二分にある。具体的細部の内容で言及したい点は山ほどあり、機会があったら書いてみるかもしれない。

コンピューター将棋の未来について、二人の意見は、真っ向から対立している。保木さんは、やはり根からの「科学者」である。冷静に将棋というゲームの、手の有限性や、「解の存在」を名言。当然、開発の仕方だけでは、プロを超えることは勿論、「将棋の神様」のようなソフトも生まれうるという。

渡辺竜王は、コンピューターが近いうちに人間を超えることに否定的である。今回は意外に接戦になったが、感覚的には、まだ相当に差があるそうだ、その差を簡単には越えられるとは思えないとのこと。冷静な実力差の判断以外に、プロとしてのプライドや自信を正面から堂々と主張しているのが印象的。そういえば、あの羽生さんも、意外にコンピューター将棋に関しては頑固で、コンピューターと人間が完全に異なり参考にはならないこと、そう簡単には負けないともとれるニュアンスの発言を先ごろしていた。そう、トッププロはそうじゃなくっちゃいけない。そういう気持ちでやってくれば、なおさら、今後も両者の対決も、盛り上がるだろう。

多分、合理的には保木さんの主張が正しいと思う。問題は、あと何年後、何十年後に「その時」が来るかであって、将棋というゲームの本質上、コンピューターが人間を超えたとしても、それは、決して人間の恥ではないと思う。

むしろ、人間が直観力を駆使して、読みの絶対数でははるかに勝るコンピューターに対抗していることが驚きであり、神秘的である。科学の仕事としては、ソフトを開発する以上に、将棋を指している人間の脳の不可思議を解明するのが、重大かつ難しい仕事なのかもしれない。

とにかく、この人工知能の問題は、とてつもなく面白い。将棋ファン以外にも、是非興味を持ってもらいたいテーマである。

小林秀雄の「考えるヒント」の「常識」で、小林が中谷宇吉郎博士に問う。

もし、将棋の神様同士が対局したらどうなるだろう。

馬鹿なことを言うな。

とにかくどんなに時間がかかってもいいから、もししたらどうなる。

無意味な結果になるだけだ。

先手必勝か後手必勝か千日手になるんだな。

そういうことだ。

じゃあ振り駒で決まるんだな。

無論そうだ。

もし、神様なら振り駒の結果もお見通しだな。

そうだ。

じゃあ、神様を二人仮定したのが間違いだったということだな。

(そのままの引用でなく私の要約です)

きれいなオチがついているが、これが将棋というゲームの変わらぬ本質なのである。どんなに指し手の可能性が天文学的数字で、人間にも現在のコンピューターにも計算不能だとしても、あくまで組み合わせの可能性は有限である。究極的には計算可能だし、結果も分かっている(はずの)ゲームなのである。

もし無限の時間をかけたら、人間にもコンピューターにも、答えを出すことは可能なことには変わらない。現実的には、そんな時間がないだけだ。

人間とコンピューターを対立させて考えがちだが、本質的に両者の置かれている立場は全く同じなのである。つまり、本来は有限なのだが、現実的な制約で、全てを読むことは不可能な者同士が、別の方法で「解」に近いものを手探りしている状態である。両者の手法にはなはだして違いがあるだけのことだ。

では、両者の手法には具体的にどのような差があるか。人間ならば、局面の「流れ」を読みとったり自分で構成することが出来る、ある局面を見て、その意味を数値位的でなく豊かな意味関連図として直感的にきめ細やかに把握できる。等々。一方、コンピュータのやり方は、もっと野蛮で力づくだと。

ある程度、それは正しい。しかし、実は人間の「流れを読む能力」とか「直感的な把握能力」というのは、実は突き詰めて考えると人間だけの特権ではない。現在、コンピューターが局面を評価するのはある点における「評価関数」である。点で評価しているのだから、コンピューターに流れは理解不能だ。

しかし、それはあくまで、現在のコンピューターのレベルの問題に過ぎない。人間が漠然と「流れ」と言っているものだって、細かく詳しく分割して思考過程をたどれば、具体的要素に還元するはずである。まして、将棋は芸術と違って、ルールがきちんと決まっていて、究極的には計算可能な世界なのである。つまり、人間の言語をコンピューターの言語に翻訳する手間さえ惜しまなければ、「流れ」だって、一応理論上はコンピューターにも理解可能なはずなのである。他の人間の「直感能力」についても同じことが言える。あくまで、計算可能な将棋の世界においてという限定付きだが。

人間というのは、どうしてもなく自惚れの強い生き物である。将棋という、本来人間がコンピュータに負けても、なんら不思議がないゲームにおいても、実際そうだったとしたらプライドを傷つけられるだろう。むしろ、現在人間が将棋に対して取っているアプローチには、多分には恣意的な側面があるのではないか

と思う。それまでの伝統的な指し方、「かくあるべし」とか、主観的な美意識に無意識のうちにとらわれてしまっている。将棋を指すのが現在はほとんどが日本人なので、当然日本人特有の思考様式や感性の歪みだって、知らず知らずのうちに混入しているに違いないのだ。

現代将棋において「常識を疑え」という考え方が、雪崩を打ったように現場にもちこまれている真っ最中である。それも、あくまで旧来の人間的バイアスを正そうとする、ごくごく自然な欲求に基づいているのかもしれないのだ。

そういう意味で、コンピューターは、人間の敵になるどころか、人間的な主観の誤りを正してくれる貴重な存在とさえいえるだろう。コンピューターは、「先入観」など存在しない、まっさらな心の持ち主だからである。基本的に、コンピューターは人間の敵ではなく、人間の物事の理解を正したり深めたりしてくれるきわめて有能な助手と考えるべきなのではないだろうか。

但し、そういう原理とは別に現実の問題点が存在する。それは、現在のコンピューター将棋が、必ずしも王道を行って強くなっているとは言えないからだ。現在コンピューターが使用している「評価関数」は、膨大な要素の組み合わせによって成り立ち、コンピュータ自身の「学習」によって厳密な検証作業を経ているとはいえ、まだまだ未熟である。と、少なくとも人間の私は思う。その評価関数の成熟の足りなさを、圧倒的な計算能力で補って、力技で現時点まで強くなっているのではないかと思う。(この点については、特にコンピューター将棋に詳しい人間には異論があるところかもしれないが。)

つまり、人間が経験や直感によって蓄積してくることによって、たとえ人間的な主観による過ちを内包しているとしても、少なくとも現時点では、コンピューターよりは、はるかに「正しく」将棋を理解しているのである。あくまで相対的な話だが。

もし理想を言うとするならば、人間は自らの自惚れをサッパリ捨て去ってコンピューターに謙虚に学ぶべきだ。しかし、存念ながら、現時点のコンピュータの将棋理解が、それに値していないのだ。今後のコンピュータが、正しく人間に役立つとするならば、現在の方向性で計算力を高めていく以上に、人間の思考を出来るかぎり意識化して、コンピュータの言語に翻訳するよう努めるべきといえるだろう。

渡辺明と保木邦仁の「ボナンザ vs 勝負脳」で、保木さんが印象深いことをいっていた。

面白いのは、当初、コンピューターチェスの指し手は、チェスプレイヤーたちからすれば、揶揄すべきような手であった。「あんな手を指すなんて、やっぱり機械だな」「美しくない、ただ力づくの手だ」というわけである。ところがそんな中傷に対して文字通り聞く耳を持たないコンピューターはどんどん強くなっていった。そしてディープブルーが世界チャンピオンを負かすにいたって、「コンピューターチェスの指し手には知性を感じる」という印象に変わってきたのだ。これは意外なことだが、人間というものはそんなものなのかもしれない。コンピューターにしてみれば、単なる計算結果なのだが、その一手、たとえばポーンをひとつ前に進めた手に、人間は奥深さを感じた。「渋い！」というわけである。

現在のコンピューター将棋についても、ある程度これと同じことが言えるかもしれない。人間の美意識とか価値判断能力などというものは、案外当てにならないものなので。しかし、先述したように、あくまで「人間」の判断能力によれば、まだまだ将棋はチェスレベルには達していないと思う。人間の自惚れに過ぎないことを望むが。

さて、ここまで意図的にコンピュータを評価する方向で書いてきた。あくまで、私はいわゆる(悪しき幻想としての)「人間的要素」をあまり高く評価しない立場だからである。しかし、当たり前だが人間は、コンピュータに劣る存在ではない。では、今日コンピューターになくて人間にあるものとは何か。曰く、感情、

意志の力、芸術的な構想力。少なくとも将棋という計算可能な世界から飛び出せば、そこは人間の一人舞台のように思える。

しかし、意地悪な見方をする誰かが言うだろう。感情とか芸術制作力とかいっても、現実の具体的材料や各人の肉体に制約された性向の組み合わせに過ぎない。それが自由に思えるのは人間の幻想だ。人間は、徹底的に隅々まで条件付けられた存在に過ぎないのだと。そこから宿命論や、ある種の宗教へはあと一歩である。

確かに、実は人間は自分で思うほどは自由な存在ではない。様々な条件付けや刷り込みの結果の、行動や感情の発露を、自由意志と勘違いしがちな悲しい動物である。しかし、そういう事実を徹底的に直視しぬいたところに、恐らく人間の本当の自由は訪れるのだ。自らの不自由を徹底的に知る者のみが、本当の自由を知ることが出来るのである。

その意味で、将棋の世界というのは、加算可能な有限の世界であって、究極的には「不自由」な世界なのだが、人間が「自由」を知るためには、逆説的に好条件ともいえるのだ。あくまで、限界を認識した上で、その中で人間がギリギリの何が出来るのかを生体実験できるのだから。

私は、現在のトッププロ棋士たちは、まさしく自らの身を将棋に捧げきってそういうことを行っている人たちなのだと思う。将棋に対する興味以外に、彼らに対するきわめて「人間的」な共感や憧れが根底にあるのだ。

いや、現在のトップだけではない。加藤一二三先生は、まさしく、不自由な世界で自由を見つけようとして、いつまでたっても楽しく戦い続けている勇者である。

分かりにくい文章の流れかもしれないが、私が本当に言いたかったのは、将棋に対して、決してコンピュータには不可能で、人間だけにしか存在しない特権的な「人間味」に対する徹底肯定だったのである。

今日の囲碁将棋ジャーナルは世界コンピューター将棋選手権の特集だった。勝又六段が特選譜を二局解説したのだが、改めて私程度のファンでは、もはや解説してもらわないと理解できないレベルにコンピューター将棋が到達していることを痛感せずにはいられなかった。一応、[コンピューター選手権のページ](#)で最終日決勝の棋譜だけは全部並べてみたことがあったのだが、きちんと解説してもらわないと理解できないレベルの手をコンピューターは既に指している。勝又六段によると、既にコンピューターソフトの実力は奨励会三段からプロレベル近くに達しているとのことである。

一局目は優勝した GPS と前年度王者の激指の対戦。最近のソフトは、従来の駒得重視ではなく駒の働きなども人間に近い形で判断できるようになっているようだ。形勢判断するための「評価関数」に、駒の働きの要素などを大幅に取り入れ、それをボナンザ方式の自動学習によってプロの膨大な棋譜を精密に学習させることで、長足の進歩をしたのだという。

優勝した GPS もボナンザとは違う方式の自動学習を取り入れており、一方激指の方は従来のハンドメイドソフトの代表格なので、本局は二つの大きな潮流の対決を象徴するような一局ともいえる。

図は、GPS が 5八桂と打った場面。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 馬 |   |   |   | △ |   |   | 皇 |   | 一 ▲  |
|   |   |   |   |   | △ | 將 | 王 |   |   | 二 GP |
|   |   |   | 卒 |   | 科 | 卒 |   |   |   | 三 S  |
|   | 卒 |   |   |   | 歩 | 卒 |   | 卒 |   | 四 將  |
|   |   |   | 將 | 卒 |   |   |   |   |   | 五 飛  |
| 二 |   | 歩 |   |   | 卒 | 歩 | 歩 | 歩 |   | 六 香  |
| 卒 | 歩 |   | 銀 | 歩 |   | 桂 | 銀 |   |   | 七 歩  |
|   | 卒 |   | 銀 | 桂 | 金 | 金 | 玉 |   |   | 八    |
| △ | 香 | 桂 |   | 馬 |   |   |   |   | 香 | 九    |

先手の6七の銀を取らせてしまって、「終盤は駒得より速度」を考えた手である。と言っても、この局面だけでは分からないだろう。GPSはこの先の展開についても「読みが入って」いて、なんとこの打った桂馬がこの後天使の跳躍をして、後手の急所の弱点の3四の地点まで跳ぶのである。そこまで、ソフトは想定しているのだ。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   |   |   |   |   | △ |   |   | 皇 |   | 一 ▲  |
|   | 馬 |   |   |   |   | 將 | 王 |   |   | 二 GP |
|   |   |   | 卒 | 銀 |   | 科 | 卒 |   |   | 三 S  |
|   | 卒 |   |   |   |   | 桂 |   | 卒 |   | 四 將  |
|   |   |   |   | 卒 | △ |   |   |   |   | 五 飛  |
| 三 |   | 歩 | 將 |   |   | 歩 | 歩 | 歩 |   | 六 香  |
| 卒 | 歩 |   | 驥 | 歩 | 金 |   | 銀 |   |   | 七 歩  |
|   | 卒 |   |   |   |   | 金 | 玉 |   |   | 八    |
| △ | 香 | 桂 |   | 馬 |   |   |   |   | 香 | 九    |

単に膨大な手数を読んでいるだけの泥臭い終盤ではなく、まるで人間のように美しい終盤をコンピューターが指せる様になっている事を象徴するような一局である。

二局目は、GPS 対ボナンザ。ボナンザがうまく指したものの、持ち味の強気の攻めをしすぎて GPS につけこまれてしまう。図のようにボナンザは9五玉のまま攻め続けていたのだが、ここでのGPSの9七金が必殺の一撃。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |    |
|   |   |   |   |   |   |   |   | 馬 |   | ▲  |
|   |   |   | 將 | 王 | 平 |   |   |   |   | Bo |
| 四 |   |   |   | 卒 |   |   | 卒 | 卒 |   | na |
| 三 |   | 卒 | 卒 | 卒 |   |   | 卒 |   |   | 飛  |
| 二 | 玉 |   |   |   |   | 卒 |   | 歩 |   | 角  |
| 一 |   | 歩 |   |   | 歩 |   |   |   |   | 桂  |
|   | 卒 | 銀 |   |   | 銀 | 歩 | 歩 |   | 歩 | 香  |
|   |   |   |   |   |   |   |   | 飛 |   | 三  |
|   |   | 桂 |   | 金 |   |   |   | 桂 | 香 | 九  |

同桂と取ると9四歩以下先手玉は詰んでしまう。逃げ口封鎖の手筋のお手本のような鮮やかな手を現在のソフトは指す力があるのだ。以下も見事な順で寄せきってしまった。前述のように「評価関数」が人間の棋譜を学習している効果で、センスのある終盤の手順が可能になり、なおかつ膨大な読みぬけのない読みも兼ね備えている。これは、人間にとって脅威と言えるだろう。

なお、勝又六段が「評価関数」について解説していたことを要約しておく。ボナンザの自動学習というのは、例えば囲いにおいて金の位置によって数値を変えて評価するように人間の棋譜を学習させる方法。具体的には駒の三点間を関係性を全て計算させる方式をボナンザは採用しているらしい。また、今回優勝したGPSは、駒の効きをより重視した方式を採用しているとのこと。どちらにしても、従来のように駒得ばかり重視しないで形勢判断できるように工夫が凝らされているのである。そして、従来のハンドメイドのソフトでは、そういう細かい調整が難しかったのを、全てコンピューターに自動計算させることで、人間に近いような「評価関数」が可能になったのだと。

そのことで、今回は自動学習を採用しているソフトがハンドメイドのソフトを圧倒する結果になった。それには、当然ボナンザの保木さんがソースコードを公開したことで、他のソフトがそれを参考にして取り入れることが可能になったことも大きいということである。

ということで、従来のソフトの欠点であり限界にもなっていた「評価関数」が、駒得至上主義への呪縛から解き放たれた。従って、今後も工夫の仕方次第では、さらに「評価関数」の精度が高まる可能も十分にあると言えそうである。

コンピューターが人間を追い抜くXデイも、もしかしたら意外に早く来てしまうのだろうか。

既報の通り、今回の選手権では下克上の嵐が吹き荒れ、従来の有力ソフトが下位に低迷して、GPSが優勝した。もっとも、GPSも前々からあったソフトということなのだが、今回の最大の特徴は「自動学習」ソフトが完全に席卷したことだった。GPSも「自動学習」を大幅に取り入れたことで、強くなったらしい。それには、先般ボナンザのソースコードが公開されたことが当然大きく関係している。ボナンザ複数台によるボナンザチルドレンというよりは、ボナンザ複合増殖体の文殊が、本家をさしおいて三位入賞したのも面白かった。去年まではトップの力を保っていた完全に人間の手だけによる激指とYSSは一気に決勝全体で下位に転落するという憂き目に会った。

もっとも「自動学習」といっても、評価関数の大元の部分は人間が決めて、それをどう具体的に局面に適応させるかをプロ棋士の棋譜などをコンピューターが「自動学習」というやり方である。基本のコンセプトは人間が決めて、その実務をコンピューターが担当する図式。はたしてこの方式というのは、人間の指す将棋とどういう関係性を持つのだろうか。素人には分かりにくい問題である。

当然プロ棋士の棋譜を使って学ぶのだから、人間が指すようにうまく「真似る」というのが基本だ。しかし、その大元のコンセプトはプロ棋士が設定したのではなく、必ずしも将棋をプロのように理解しているわけではないプログラマーが決めている。

今週の将棋まるごと90分に勝又六段が出演して、コンピューター将棋について解説していた。例えば、玉の近くにいる金は評価が高い、逆にそばにいる金は評価が低いということ、徹底して考えさせるようである。比喩として言っていたのは、例えば、一枚の絵画の配置で、どこに花瓶があり、果物があり、背景がありといった絵の構図を全て数値化して計算するようなものと説明していた。先ほどの金の位置のような分析を全ての駒の配置や関係を考慮して徹底的に「自動学習」させているらしい。

そのことで、従来どうしても純粹駒得至上主義で、本当に終盤の大切なところでも駒を損しないように考えすぎるところがあったのが、駒損を気にせず人間のように終盤切り込むことが可能になったのだという。ボナンザが渡辺竜王戦で、切りこんでいけば勝ちという手があったのだが、今ならその手をコンピューターが指すことも可能かもしれないとも。

要するに、コンピューター将棋の致命的欠陥だった評価関数部分が、自動学習を用いることで格段に進化して、人間の感覚にも近づいてきているということのようだ。その際、先ほど説明した駒の配置効率関係を分析するには、人間の力だけでやるのは大変で、コンピューターに自動学習させたほうが、結果が出ているということである。

さて、そういうやり方が人間の指す将棋と、果たしてどういう関係を持つのかという問題に戻る。

コンピューター将棋は、二つの原理で成り立っている。まず、現局面の形勢が良いか悪いかを数値化して判断する「評価関数」。それと、とにかく手をしらみつぶしに(あるいはある多程度選択して)、「手の組み合わせを出来るかぎり全て調べる能力」。

後者の能力で、コンピューターは人間を凌駕しているわけだ。勿論、その場合、あくまで単純に数多く瞬時に調べる能力という意味であって、人間は不必要な組み合わせを読むのを省略する能力で対抗するわけだが。

「評価関数」については、(今のところまだ)人間が絶対優位である(と思う)。人間の場合は、いちいち厳密に数値化しなくても、ここが急所とか、それは筋が悪くて駄目だとか、「ある程度は」判断できる。特にプロのトップはそういう能力に長けた人たちだ。

それに対して、現在コンピューター将棋は、プロの棋譜を学んで人間に近いような判断が出来るように学

習している。但し、その原理は人間的な曖昧模糊とした直覚的判断ではなく、あくまで理路整然とした幾何的な駒の働きや価値の評価である。

両者を比較すると、人間のほうがはるかに局面に対して柔軟に即座に反応できる、各局面ごとに考え方を变化させることも可能だ。融通が利くのである。一方、コンピューターの方は、常に首尾一貫した原理主義者である。あくまで駒の全体の価値や働きを整然と分析して、それを局面の判断基準とする。融通がきかない代わりに揺らぎがない。先ほど、人間は直感的に優れた筋を抽出できると言ったが、それは逆に言うと自らの経験にとらわれて、普通ではありえないが実は最善の手順を見逃す危険性もあるということだ。両者には一長一短があると思う。通常考えているように、その種の判断では人間が絶対的優位にあるのではなく、「先入観」の一切ないコンピューターにも長所はあるはずなのだ。

ただ、繰り返しになるが、そのコンピューターが学ぶよすがとしているのは、現時点ではあくまで人間の将棋である。だから、今言ったコンピューターの「先入観」のなさが、人間の棋譜を学ぶことで汚されている可能性だってないとは言えないだろう。

現時点では実現不能なようだが、本物の「コンピューター将棋」の純粹理想形は、将棋のルールだけを教えて、あとは「評価関数」の大元もコンピューターが自力で考えるということだろう。それと比べると、現在の状況は、出来るだけ数多く読むというコンピューターの基本的特性と、うまく形勢判断出来るように人間の棋譜を自動学習させて評価関数をなるべく人間らしくするという折衷型といえるかもしれない。徹底的に読むだけは読むけれども、判断能力については人間から学ぶと言うやり方。

だから、さらにコンピューター将棋がブレイクスルーして、人間と本当の意味で対抗する、あるいは超えるために必要なのは、いまだ残存している「人間味」を消去する知恵なのかもしれない。

無論、現在のやり方のままだと、各部分の進歩によって人間を超えてしまうことは可能なのかもしれないが、さらに未知なるコンピュータ将棋をみてみたいきもする。怖いもの見たさでもあるのだが。

先ほどちょっと書いたが、要するにコンピューターが評価関数を自分で考え出すことができるようになるかどうかというのがポイントなのだと思う。仮にそのやり方が実現可能ならば、プロの棋譜を「自動学習」するにしても、なるべくそれを真似して人間に近づくという態度でなく、コンピューターが人間の将棋を「批評」し始めるかもしれないのだ。そうなったらほとんど悪夢だ。でも、幸いなことに今のところそんなことになる恐れはないらしい。

だから、我々はせいぜい「2001年宇宙の旅」を観ながら、人工知能のハルが人間のように感情を持ち出すのを見て慄然とするくらいですむというわけである



先日、「運命の一手 渡辺竜王 VS 人工知能・ボナンザ」がNHKのBSで再放送された。この番組について、私は初回放送の際に感想記事を書いたので、ここ数日検索して見て来てくださる方がいらっしゃる。その記事自体は、私がコンピューター将棋について全く無知な状態で書いたもので、内容的に不十分だったり過ちに近い部分も多数あるのだが、最後に書いていることだけは今もその考えに変わりはない。

一方の保木さんも、なかなか魅力的な人物である。最後に述べていた言葉がとてもよかった。

「ボナンザは一秒間に四百万局面を読むが、それを軽く渡辺竜王の脳が凌駕していて、訓練された人間の脳のすばらしさを認識し、やはり人間の知性は素晴らしいと思いました。」

ソフト開発者が言うからこそ、重みもあるし感動的である。

これも以前書いたが、究極的に「計算可能」な将棋というゲームでは、ソフトが人間の名人より強くなる日もいつかは来るだろう。しかし、そのこと自体はゲームの性質上、人間にとっては決して恥ではないのだ。

むしろ、コンピューターの冷徹かつほとんど無限な計算力に、一瞬の直感等の能力をフル稼働して対抗する人間の脳の神秘、人間の能力のすごさを思う存分楽しみ、誇りに思えばよいのだと思う。

コンピューター将棋については、具体的な話題を含めて折を見て書いてきたのだが、今回は人間とコンピューターというやや漠然とした問題について論じてみる。しかし、実はこの問題についても既に一度書いている。

### [ものぐさ将棋観戦ブログ](#) 将棋における人間とコンピューター雑感

本質的な問題なので、ここに書いていることと今も考え方は変わっていない。一応今回書くことだけで完結するように努めるが、この記事に書いてあることを前提にして論じるので、余裕のある方は出来ればまずこれを読んでいただくとありがたい。

周知の通り、ここ数年でコンピューター・ソフトは飛躍的に強くなり、今やプロに迫る勢いである。そこで、この数年の変化に関連して考えていることを今回補足で書いてみよう。

一番の本質的な変化は、コンピューター・ソフトの「評価関数」の精緻化だろう。度々、自分の記事の紹介になるが、その辺の事情については、こちらにまとめてある。

### [ものぐさ将棋観戦ブログ](#) 世界コンピューター将棋選手権雑感

「評価関数」というのは、コンピューター・ソフトが局面の優劣を判断する際の基準になる関数である。これによって、自分がどの程度優勢か劣勢かを数値化してはじきだすわけである。GPSのツイッターでおなじみの、あの数字である。

古い弱いソフトでは、単純な駒の損得だけで局面を判断しがちで、そのため評価関数が人間の感覚とはかけ離れて結果的に指しても非人間的だった。

それを、二番目に紹介した記事中の勝又先生の分かりやすい説明を参照していただきたいが、駒の効率や

配置を評価関数に組み込むことが開発者のアイディアで可能になった。そのため、単なる駒の損得だけでなく、その場の形に応じたより人間的な指し手が可能になった。それは、現在のトップレベルのソフトの将棋をみれば一目瞭然である。

ただ、その際に問題点が存在する。今述べた駒の効率や配置を計算するにあたって、将棋は複雑すぎて人間の手計算では難しい。そこで登場するのがボナンザ式の「学習」である。ソフトに人間のプロの棋譜を多数データとして与え、それを自動的に学習させることで、駒の効率や配置(駒の損得)をふくめた評価関数をつくりあげる。そして、現在トップのソフトは全て何らかの形でこの「学習」方式を取り入れている。つまり、コンピューターが局面を判断するにあたって、完全にオリジナルなコンピューターだけの思考を行っているわけではないのだ。間接的にはあるが、人間の将棋を「真似」することで評価関数の精度をあげている。

そこで、テーマの人間とコンピューターの関係になるのだが、実は現在の将棋の世界においては、完全な人間とコンピューターの対立が存在するわけではない。あくまで人間の指す将棋のデータをもとにしながらコンピューターに役に立つ言語へと翻訳する方式を採用しているからだ。

一方で、人間らしい直観力や形の把握能力や流れを考える力や美的感覚のセンスなどなどがある。他方、コンピューターは完全に自前の思考ではない。あくまで、今いった人間の様々な能力が詰まった棋譜をもとに、なるべくそういう人間の判断に近づけて判断できるように努力を払っているというのが本質だ。その評価関数においては、つまり人間になるべく近づけようとしながら、一方で機械が人間を凌駕する計算力で、その差をカバーしようということである。

しかし、今の議論は単純化しすぎて、実は現在の「学習」による評価関数には別の側面もあると思う。先ほど述べた人間だけの能力というのは確かに素晴らしいものだが、その一方で人間は自分の経験に基づいて物事を先入観を持って主観的に捉えてしまう危険が常にある。将棋で言うと、いわゆる「よい筋」にだけこだわって、「異筋」の好手に気がつきにくい。

コンピューターの評価関数は、人間の棋譜を参考にして学ぶが、勿論そのままではない。コンピューターの一切曖昧なところに翻訳する。また、そうしないとコンピューターには役に立たない。だから、その翻訳の経過で人間的な細心な緻密な判断が失われるかもしれないが、その代わりに人間的な偏見やクセが消し去られるという建設的な効果も期待できるのではないだろうか。

さらに、コンピューターは手を片っ端から(実際はある程度選択しながらのことが多いが)読む。人間のように、直感で最初から大部分の手を捨ててて幾つかの候補に絞り込んだりしない。その結果、人間が習慣でつい見逃してしまう手を、コンピューターが先入観なく発見できる可能性だってある。

それは、実際に起きていることで、対局者のみが気づいて検討しているプロが全く想像もしていなかった妙手を、例えばGPSがいとも当り前のように指摘するのを何度も目撃している。

まとめると、人間には人間だけの芸術的できめ細やかで直感的な思考が可能だが、一方で経験則にとらわれて新しい非凡な発見をしにくい。一方、コンピューターは、人間と違って融通の利き思考が出来ないのが欠点だが、そのかわりまっさらな目で先入観なく新しい発見が出来る。

なるべく、具体的な評価関数の問題と関連させて論じてきたが、それは人間とコンピューターの一般的な関係について言えそう。そのことについては、最初に紹介した記事で書いているのでここでは詳しく繰り返さない。説明を省いて結論だけ書いておく。繰り返しになるが、ここまで読んで興味を持った方は記事を是非読んでください(笑)。

まず、現在の将棋において、人間もコンピューターも、将棋の「解」を将棋の神様のように理解しているわけではない点では同じである。別の方法、道をたどって、両者ともなるべくその「解」に近づこうとしている。

その際、基本時には人間の肉体的な能力が大変有効で、まだ人間がコンピューターを本質的な将棋の把握能力では優越している。コンピューターも、局面把握においては肉体的な思考を「真似」せざるを得ないのが現状だ。

一方、人間の指す将棋には、どうしても伝統的経験的な因習の限界が付きまとう。本当に客観的に将棋の神の視点でみることが、かえって肉体的な能力が邪魔になって曇らされてしまうことがある。一方、コンピューターはその能力がまだ不十分だが、偏見のない目で将棋の神様だけの知る真理に近い澄んだ見方を出来ることも稀にはあるが出来る。

2010年12月の時点で、具体的なコンピューターソフトについて、今言ったような状態になっていると私は考えている。

先の記事を書いた時には、今言ったことのようなことになれば「いいな」という書き方をしていた。しかし、現在それがある程度実現に近づきつつあるのではないかと感じている。勿論、まだ全然達成はできてないとは思いますが。

そして、私が理想として先の記事で書いたことは流石にまだ夢の夢だ。つまりこういうことだ。まず人間の素晴らしい能力がある、しかし、その能力には肉体的な弱点があるので、それを偏見のないコンピューターの視点で明らかにする。そして、そのコンピューターの力を借りて、人間が自分の能力を冷静に見つめ直して、さらさら肉体的な能力を高めていく、ということ。

私は人間とコンピューターが対立するものではなく、お互いを利すると考えている。人間が本当にコンピューターの力を十二分に活用して自分を高めることが出来た時に、はたして何が起きるのか。

人間は完全に自由になるのだ。

# 囲碁将棋チャンネル特番「コンピュータからの挑戦清水市代女流王将 vs あから 2010」感想 2011年01月17日

---

解説:勝又清和六段聞き手井道千尋女流初段、清水さんとあからの対局を解説した囲碁将棋チャンネルの特番である。

なお、以下の時間で囲碁将棋チャンネルで再放送がある。

1月23日(日)22:00 から 23:38 まで

対局当時にも色々話題になった。しかし、もう忘れかかっているところもあるので、以下、この番組で新しく知った事を含めて要点のメモ。

- ・1984年にコンピュータ将棋は小学生名人と対戦して完敗している。だいたい5級程度だった。ちなみに、当時の小学生名人は、現在の窪田六段である。
- ・「あから」は、将棋で現れる可能性のある局面数、10の224乗をあらわす「あから」にちなんでつけられた。
- ・今回、本体コンピュータ以外に使われた「クラスター」(房)について、勝又先生が分かりやすい比喻で説明。「100人の社員がいる会社の社長(親コンピュータ)が、まず読んで、有効だと思ふ手の順位に応じて60人の社員(子コンピュータ)、30人の社員(子コンピュータ)、10人の社員(子コンピュータ)と振り分けて読ませる。さらに、その子のリーダーが孫へ割り当てるという方法。有効な方法と認識されているが、多くのコンピュータを使うためにトラブルの危険があるために、今回は合議でクラスターに割り当てる票数は意識的に抑えられた。
- ・あからが採用した4手目 3三角戦法。清水さんの将棋を分析して角換わり系の将棋に弱いと判断しての選択。YSSに特別にこの戦法を強く主張するプログラムを入れたが、実は直前にバグを発見。他の戦法を選ぶ確率が低いながらあったが、その対応をプログラマーの「合議投票」で決めて、そのまま直さなかったが、無事 3三角が選ばれたという裏話も。
- ・3三角戦法は、去年の王座戦で、藤井が羽生相手に採用した。今回の大盤解説担当だった藤井は、苦笑いしていたとか。
- ・あからが採用した 2五桂ポンは、先に駒損するので、従来のコンピュータには指しにくかった。当然のように指してくるのは、コンピュータの評価関数が駒の損得だけでなく駒の効率などを考慮できるようになった証拠である。
- ・4四角は、人間の感覚だと違和感があるが、「駒のきき」を重視する評価関数の影響もある。
- ・それに清水が角をあわせて 7七同角成に清水は自然な 同金だった。藤井は 同桂として、バランスをとってコンピュータに手出ししにくく組む順を指摘。実は、コンピュータは飽和状態になった局面の指し手が苦手なところがあるので、鋭い指摘ともいえる。
- ・二度目の 4四角を見て激指の鶴岡さんは、コンピュータが勝つのではないかと思ったそうである。こういう手が出るとコンピュータは強いとのこと。
- ・4五同桂はGPSとYSSが主張。過激なボナンザは 7七角成を、大人な激指は 5三角を主張していた。ソフトの個性が顕著に出た場面。
- ・皆が驚愕した 6九金。激指はやはり大人な 4四角。GPSとボナンザが強く主張。やはり、この手も合議でもめた。

- ・ 5七角。清水の 7八金を見て GPS やボナンザはひよって受けの手を考え出したが、今度は激指が怒り出して 5七角を強く主張。さっき自分は 4四角と落ち着いて指したかったのに攻めちゃったじゃないかと。結局、激指の主張が通った。
- ・ 清水の 7七銀では 7七桂としておけば大変だった。大盤解説ではこれでむしろ先手優勢と解説していた。次に 7四桂打の、つなぎ桂が厳しい。それを、局後に、藤井、佐藤康光、勝又で検討して藤井が 7一玉を発見。それで、あからが少し良いのではないかという結論だった。さらに、それを後日に激指の鶴岡さんに確認したら 7一玉も読んでいた。すでにこのあたりでは、実際少しコンピューターがよかったのかもしれない。そして、コンピューターのこういう終盤での読みは的確である。

(以下は私の感想です)

清水さんも、 6六金など力をみせて、終盤までいい勝負をしていた。前半に時間を使いすぎたの響いて、後半惜しい着手もあったが、事前の一般の予想のことを考えれば、よく指していたといえるのではないだろうか。清水さんが、終局後のインタビューで、もっとコンピューターは意外な手を指してくるかと思っていて人間の感覚に近いと感じた、と述べていた。評価関数の改善で指しての質が変わったことは指摘されていたが、こうして公式の場でしっかり一局を指してみて清水さんが言った言葉なので説得力がある。こうして実際に人間ときちんと指さないと分からない部分もあるので、大きな収穫があった。

清水さんは白い着物がよく似合っていた。また女流名人戦でも着れば良いと思うのだが、さすがにゲンが悪いので無理だろうか。どちらにしても、清水さんは難しい役割をいつも通り堂々立派に果たされていたと思う。

はやめに 4四角と手放すのは、人間の感覚だと少し早いという印象もありプロもそうっていたようだが、逆に激指の鶴岡さんがこの手に手ごたえと自分らしさ(という表現をコンピューターに使うのもおかしいが)を感じていたというのも興味深い。コンピューターの指し手が人間的になってきたといっても、まだ中盤あたりまでは微妙な感覚の違いがあるように思う。人間側からすれば、それがつけこむ隙ともいえる。しかし、それもコンピューターらしい大局観として素直に学ぶこともできるレベルに達しているような気もする。少なくとも、 4四角は具体的に簡単にとがめることができる手ではなかったし。

藤井が、局面のバランスをとって飽和点にもってくる指し方を指摘していたそうである。そして、コンピューター将棋は、まだそういう局面が苦手と。羽生が言っていたが、プロ将棋では、お互いの手を消しあって有効な指し手が難しく、むしろマイナスにならない手を指すように工夫すると述べている。つまり、プロ将棋の高度な部分がコンピューター将棋に対抗するキーポイントになるのかもしれない。逆に言うと、そういう部分でないと対抗できないくらいコンピューター将棋が成熟してきているともいえるのだろうか。もし、コンピューターが「羽生の手渡し」のような手を指すようになったら、人間は本当にピンチなのかもしれない。

コンピューターの合議の過程での各ソフトの個性も面白かった。ボナンザと激指は対照的な個性で、その合議の過程を誰でも擬人化してのべたくなるだろう。「個性」は人間の特権だと思われているが、実は将棋で「個性」と呼ばれているのは指し手に表現されている特徴のことであり、コンピューター・ソフトに「個性」があっても不思議ではない。今のところ、総体としての「人間」と「コンピューター・ソフト」の違いはあるが、それもかなり見えにくくなってきているような気もする。将来的には、人間もコンピューターも同等に各人(各体)が個性を競う時代が来るのだろうか。もしそうなったら、ちょっとした悪夢でもあるが。藤井、佐藤、勝又の検討のことで分かるように、やはり現在のコンピューター将棋の終盤力は相当なもの

である。それは、我一般ファンも、タイトル戦での GPS 将棋のツイッターの読みをみながら薄々感じていたところである。但し、どちらかという個々の手をコンピューターが当てるかどうかで見てしまうので、線としての終盤全体ではどうなのかという疑問点もあったが、こうして清水さんと実際に指した終盤を見ると、率直に言って男士プロでも終盤については対抗するのが大変なレベルに来ているのではないかという気がする。プロの中でも、トップから色々なレベルがあるが、コンピューターかどの辺りに該当するのは、素人には分かりにくいところである。それこそ、実際に戦ってもらわないと分からない。

3 三角戦法を選択するプログラムのバグのエピソード一つとっても、コンピューター将棋を開発している技術者の方々は、一生懸命ながらもユーモアをもって楽しんで取組まれているという印象である。合議のプログラムを担当された保木さんは、倒れてしまうくらい大変だったそうだが。

将棋上では「人間」と「コンピューター」の対決という形だが、コンピューターを開発しているのは、勿論人間である。人間がその叡智をフルに発揮しなければ、例えば近年の評価関数の劇的な改善など不可能だったろう。それを、ボナンザや GPS のソースコードの公開など、お互いがライバルながら、科学者が共同研究して真理を求めるように共同して取組んでいる姿には好感が持てる。

本質的には人間 vs コンピューターではなく、人間と人間の叡智が競いあっているのだ。

# 将棋ソフトのボンクラーズが米長永世棋聖を破る (第1回将棋電王戦) 2012年01月15日

---

マスコミ報道等はこちらにリンクがまとめられています

[詰将棋メモ 第1回将棋電王戦、ボンクラーズが米長永世棋聖に勝利](#)

[詰将棋メモ米長永世棋聖、将棋ソフトと対戦 \(こちらで棋譜を再生できます。\)](#)

[ニコニコニュース米長永世棋聖「築いた万里の長城、穴が開いた」 電王戦敗北後の会見 全文](#)

さて、対決の意味等についてはこんな告知PVがあった。

[ニコニコ動画 【米長邦雄永世棋聖 vs ボンクラーズ】プロ棋士 対 コンピュータ 将棋電王戦 告知PV](#)

ホルスト

「惑星」の「火星、戦争をもたらす者」の勇壮で劇的な音楽に乗って、ものすごくカッコいいのかそうじゃないのか、真面目なのかふざけているのかよく分からない素晴らしい出来になっている。今回はニコニコ動画が中継などで盛り上げたわけだけでも、このPV一つ見ただけでも純粋将棋ファン以外の層にも訴えかけることに成功していたと思う。

将棋は先手ボンクラーズの 7六歩に対して後手の米長邦雄永世棋聖の 6二玉。昨年末に行われたプレマッチでも米長はこの手を指して惨敗したが再度採用した。

米長は対局後の会見で(上リンク記事参考)、この手を将棋ソフトボナンザ開発者(保木さん)に教わったと明かした。ボンクラーズはボナンザを元に成り立っているソフトで、評価関数(将棋の局面を判断する基準とその思考結果を数値化して優劣の判断をする関数)はボナンザとあまり変わらない。従って、ボナンザ開発者の意見は具体的根拠のある重要なものである。ツイッターで教えてもらったが具体的に 6二玉(周辺)の位置が評価関数の穴なのかもしれないということだそうである。

それと、二手目 6二玉は将棋の定跡にはない手なので、ソフトはいきなり3手目から自力で考えなければならず事前に入力してある定跡手順を利用できない。

また、局面自体が漠然とした明確な目標を設定しにくいものになるので、ソフトが考えるのに苦労する可能性がある。

そうした狙いである。実際、米長は左辺から金銀を盛り上げて制圧することに成功する。ボンクラーズは飛車で歩交換をして上下左右に移動するだけを余儀なくされた。普通の将棋ならば後手の作戦勝ちと言えるだろう。

つまり、米長の 6二玉は成功した。あくまでボンクラーズというソフト専門の戦術である。自力で判断できる人間相手には通用しない。

米長に普通の矢倉等で対抗することを期待したファンも多かったはずだが、事前に米長は数多くボンクラーズと戦って、特に短い持ち時間ではかなり苦戦したようである。つまり、ソフトのレベルがが普通に戦うとかなり厳しい強さに既に達しており、このような工夫をこらさざるをえなかったのである。

チェスの世界では既にコンピューターが人間を超えてしまっているが、人間がチェスと戦う際にもやはりこのような戦術を用いるのが普通だったそうである。

戎棋夷説 12/01/15

従って、米長の 6 二玉は、人間がコンピューターと戦う上での戦術的工夫であって別に奇策ではないということである。そして、このように一応ソフトの序盤の欠点をつくことには成功した。だから、今後プロ棋士がソフトと戦う上で重要な先例にもなるし具体的成果も残した事を素直に評価すべきだと思う。勿論、人間がごく普通に戦ってソフトに勝てるならばそれにこしたことはないのだが、現在はソフトのレベルが高くなりすぎているのだ。

しかし、局面は後手が左辺で押さえ込みに成功したとはいっても、玉は不安定な形で後手が自分から攻め込んで勝つというわけにいかない。

後手の人間が先手のソフトに期待するのは、先手が苦し紛れに無理攻めしてくれることであり、それに乗じて攻めをきらして入玉してしまうことである。実際、少し前までのソフト (特に攻めるのが大好きなボンザ系のソフト) は、無理攻めして自爆してくれることも多くて、それが人間の狙い目だった。

ところが、今回のボンクラーズは実に辛抱強かった。暴発せずに歩交換を繰り返して飛車の左右上下運動を繰り返して我慢した。勿論、コンピューターなので我慢しているわけではないのだが、今回は米長の押さえ込みが完璧だったので動こうにもさすがに動きようがなかったのかもしれないが。

逆に辛抱をきらしてしまったのは人間の方だった。 8 三玉から金を 4 二から 5 三に盛り上がった。駒を集めてきてさらに盛り上がって自然なようにも見えるが後手陣には隙が出来ていた。

6 六歩から角を 5 七に転換させる。後手の 7 五に狙いをつけたのだが金が 5 三にあがってしまったために 3 一角の受けの応援がきかない。また玉が 8 三にあがっているために 8 筋の飛車先が通っていない。仕方なく 3 四歩とするよりないが、再度 6 六歩から角交換を迫る。しかし、後手が角を交換してしまうと 7 二歩が厳しい。同飛には 6 一角、玉か銀で取ると飛車の横ぎきが消えて 2 二角と打たれてしまう。

やむなく角交換を拒否したが、今度は 7 筋に狙いをつけられて以下手早く攻め倒されてしまった。もともと玉形が不安定なので手がついたら、もうひとたまりもない。

以上、ニコ生での渡辺明竜王の解説の要約なのだが、なんとコンピューターは相手の形の隙に敏感に的確な反応しているのだろう。

まるで練達のベテラン棋士のようなのである。動けなくなったら「仕方ないよ」とばかりに気のない様子で飛車を動かし続けていて、後手が油断して隙を見せたら急に座り直して正座になって熱心に読み出して見事にとがめてくる。コンピューターなのでそういうこととは全く異なる思考回路で動いているわけだが、結果的には人間のように思えるくらいにレベルがあがっているのだ。

米長はそんなコンピューターの辛抱を「大山のようだ」と表現していた。しかし、実際は大山以上に辛抱がきくし、それを別に我慢してやっているわけでもない。さらに、先手番だから千日手を打開しないとという思想自体がないし、打開しないとみっともないという人間のプライドとも無縁なのでたちが悪い。

コンピューターは純粹に読む能力だけでも既に脅威だが、さらに今回の展開で人間的な心の揺れが皆無なのも強力な武器なのだと感じずにはいられなかった。

それと、コンピューター側で言うと、今回ボンクラーズは手の内をほとんど明かして戦っていた。24 で昼



夜問わず戦い続けていたのもそうだし、開発者の伊藤さんは米長宅に行って練習用のボンクラーズを設置したそうである。恐らく対局条件等も、ほとんど連盟主導で決められたのだろう。それでいて、この結果である。例えば、ソフト側があらゆる情報を隠して人間に事前研究させないようにしたらどうなるのか、そんなことも考えてしまった。

ニコ生で解説していた渡辺は、現在のコンピューターの実力を率直に評価している感じだった。大変客観的で冷静な見方をする渡辺が言うと、とても説得力がある。以下はその発言の内容のまとめ。

ボンクラーズは 24 で 3300 点を出している時点で 30 秒将棋では既に全然人間がかなわないのは分かっている。持ち時間 3 時間でもこれだけ指せる。但し 3 時間ならやりようはあるとは思う。今日の米長先生の序盤のように。

引退されているとはいえ米長先生に勝ったらその事実は重い。(矢内 もうプロに近いレベルですか)、いや、「プロに近いレベル」という言い方はもう当てはまらないという気がします。

ソフトがもうこれ以上強くなることはあるんですかね？」(矢内次に竜王がソフトと戦ったら勝つ自信はありますか?) 楽観はできないですね。普段の大きな対局と同じ気持ちで戦うという感じですね。

かなり危機感をもっていることは間違いなさそうだ。但し、少し前の朝日のインタビューでは、まだ人間の方が強いと思うし、将来的にもひとどく負かされることはないと思うと発言していた。だから、本当にどう思っているかは渡辺に実際に聞いてみないとハッキリとは分からないのだが。

ここまで来ると、コンピューター将棋が人間の将棋を超える X デイももう夢物語ではない。

そうなった時の人間側の反応は様々なだろうが、私の場合は単純明快である。

将棋の世界は無限に近いといっても有限で究極的には計算可能で解がある。だから、そういう世界で計算速度が人間より迅速な機械が勝っても別に驚くことではない。そのことで、直感で正しい手をつむぎだすプロの人間棋士の素晴らしさにはなんら変わりがない。チェスの世界だって、とっくに機械が人間を超えたが、それで人間のチェスが廃れたなどという話は聞かない。将棋だって同じことだ。最初はショックかもしれないが、すぐ慣れるだろう、と。

とは言っても、実は今はこれを言うべきではないかもしれない。折角、人間が強いのかコンピューターが強いのか、ハラハラドキドキできる時期なのだから、必死に人間を応援して楽しんだ方がいいのかもしれない。

それに、こんな悟ったようなことを言っても、例えば羽生善治とか渡辺明という固有名詞が、もしコンピューターに負けたら、やはりかなりショックだろうし。このお二人には是非とも我々の楽しみを少しでも長く伸ばしていただきたいものである。

それに、どんなにコンピューターが強くなったとしても、こんな素晴らしいジョークを思いつくことが出来るのは、やはり人間だけなのだ。

虚構新聞 米長、敗退...最強将棋ソフト「ボンクラーズ」に迫る

## お笑い、ネタ

---

今回読み返して、やはり私のブログ本質はここにあると思いました。ご笑納ください。

ご主人様王手です 11/23(将棋ニュースプラス)では、もはや待望?となりつつある中川・遠山の上司と部下コントを配信。なんか、今回は斬新な感じのつくりでした。中川氏の心中独白の一方で、遠山氏のご機嫌よくしゃべり続けるという構図、なかなか映画的です(オーバーだよ)。それにしても、中川先生、実にいい表情をされますなあ。昔の欽ちゃんだったら、欽ドコ(古っ)とかに引っぱりだしたいと思ったんじゃないかというくらい、いい味出しています。ちなみに、私も「KY」が分からなかったオジンです。検索かけちゃったじゃねえかよ。と、毎回このコントに釣られて喰いついてブログに書いている私が一番どんなもんかというウワサはありますが、そういうことは一切気にしないことになっております。

遠山先生、こともなげにメイドたちに「いいとも!」を強要していましたが、なかなかああいうのを恥ずかしさを、かなぐり捨ててできるもんじゃありません。さすが梅田望夫さんが、「けものみち力」を絶賛するだけのことはあって、精神的タフネスを誇ります(笑)。

しかし、藤井さんに四間飛車を基礎から教わるって、贅沢すぎます。誰か、メイドさんたちに、どれだけありがたいことなのかを教えてあげてください。私が習いたいくらいだよ。しかし、振り飛車党のカリスマも、メイド達にあっては、ただのオジン扱いです。

まゆ「藤井さんは、中川さんと仲がいいと聞いたんですけど」

ふじい「ええ、まあ昔からお付き合いがあって」

とおやま「なんか、昔ネクタイを選んでもらったことがあるそうで」

めいど「ええっ————」

まゆ「旅行にどこに行かれたんですか」

ふじい「まあ、温泉とか」

[[Puboo::BookConverter::Page::Fix::Fontescape2 りさほ「二人でですか?」Puboo::BookConverter::Page::Fix::Fontescape2]]

ふじい「いやっ、みんなで」

ブログ書きはじめて以来、初めて二倍角文字を使ってみました。

メイドに、あらぬホモの疑いをかけられてしまっていた中川、藤井両巨頭は、本当にお気の毒でした。まあねえ。大人のオトコが、大人の男のネクタイを選んであげるって、そうあることじゃないですからねえ。話の流れで。妙なことになっていました・・・。

週刊将棋のLPSA欄は、ファミリーカップの話題でした。植山、中井夫妻は、棋風が真逆で、詰ます順も夫婦で考えた手順が違って、大逆転負けを喰らったのですが、その後中井さんの極めつけのお言葉が飛び出したそうです。

[[Puboo::BookConverter::Page::Fix::Fontescape3「夫婦はしょせん他人なのよ。」Puboo::BookConverter::Page::Fix::Fontescape3]]

ブログ始めて以来の三倍角使ってみました。

けだし名言です。ファミリーカップは、既に多くの動画がアップされていますが、こういうのを聞くと、

もっといいのが残っているんじゃないのと思ってしまうんですけどね。

## 「声に出して読みたい手筋」を勝手に真似してみよう！

---

「将棋の神様～0と1の世界」さんの「声に出して読みたい手筋」が面白い。

そう、そもそも将棋の世界には特許というものがないのである。意味が違うような気もしないでもありませんが、とにかく私も勝手に真似してやってみました。勿論、私の場合は、手筋よりもあくまで妄想部分に全力集中しております・・・。

### 問題

7 一飛成 同玉  
6 一歩成 8 二玉  
7 一馬 9 二玉  
8 二金

### ノーヒント

答えはこちら

関西のプロ野球球団 XXX の監督 X と関東のプロ野球球団 YYY の監督 Y は将棋のライバルである。二人とも初段あるかないか程度の腕前だが、とにかく野球のことをすっかり忘れて、盤をはさんで指すのが楽しくて仕方ないのである。

今シーズンは、関西球団 XXX が当初は独走して、夏場には第二位の YYY に十数ゲーム差つけたのだが、XXX が息切れし、YYY は故障者も戻り猛追してきて、大詰めの今は、もうどちらが優勝するか全く分からない。

そんな時でも、なぜかこの二人は将棋をは指すのだけは、やめられないのだ。

先手が関東球団の Y、後手が関西球団の X である。居飛車対振り飛車の急戦から、今後手が 8 七銀と打って、先手玉に必死をかけたところ。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
|   | 皇 | 将 | 将 |   |   |   | 飛 | 将 | 皇 | 一 ▲ |
|   |   | 王 | 将 | 歩 |   |   |   |   |   | 二 関 |
|   | 将 | 将 | 将 | 馬 |   |   | 馬 |   | 将 | 三 東 |
|   |   |   |   |   | 歩 | 将 |   |   |   | 四 な |
| 五 | 歩 |   |   |   |   |   |   |   |   | 五 し |
| 六 |   | 歩 | 歩 |   |   |   | 歩 |   |   | 六   |
| 七 |   | 将 |   | 王 |   |   | 桂 |   | 歩 | 七   |
| 八 |   |   |   |   |   | 銀 |   |   |   | 八   |
| 九 | 香 | 桂 | 玉 | 金 | 金 |   |   | 驥 | 香 | 九   |

▲関東なし

X「ふう、ヤレヤレ、やっと逃げ切れたかのう。」

Yが、ニヤリとする。「どうですかね？」

そして、問題の手順で、一気に後手玉を詰ましてしまったのだった。

X「あちゃちゃ、そんな詰まし方あるんかいな。」

Y「イヤ、すみません。最近手筋の本で勉強したばかりなんです。」

X「ひどいわ、これ、こんなの知りたくなかったわ。あかんで、こんなの。詐欺やがな。」

ボヤクことしきりである。王座戦の木村八段のように。

Y「勝負は最後まで分からないということですよ。フフフ。」

X「ナニー、野球は、こういうわけにはいかんでー。」

Y「分かっています。お互い頑張りましょう。」

最後は、爽やかに仲良く分かれる二人であった。

さて、肝心の野球がどういう結果になったのかは、皆様のご想像に任せることにしよう。

以上、登場人物等は、現実とは一切関係のない完全なフィクションです。

なお、私は私自身に、妄想「しょうもなさ六段」を自己贈呈します・・・。

# モテる将棋女子力を磨くための4つの心得「王手飛車をかけられない女をアピールせよ」等 2011年04月29日

---

えー、自力で笑いを取る自信が全くといってないので、まずとりあえずリンクをはっておこう。

## モテる女子力を磨くための4つの心得「オムライスを食べられない女をアピールせよ」等

さてと、以下本文

こんにちは、将棋恋愛マネジメントを専攻している鷺宮嬢せきです。私は学歴も知識もありませんしブスですが、将棋恋愛に関してはプロフェッショナル。今回は、モテる将棋女子力を磨くための4つの心得を皆さんにお教えしたいと思います。

### 1. あえて2~3段(級)弱いフリをして道場やネットで指す

あえて2~3段(級)弱いフリをして道場やネットで指しましょう。そして好みの男がいたら話しかけ、わざとらしくケータイを出していじってみましょう。そして「あ~ん！ このケータイ将棋本当にマジでチョームカつくんですけどおおお~！」と言って、男に「どうしたの？」と言わせましょう。言わせたらもう大成功。「ケータイ将棋とか全然勝てなくてえ~！ ずっと一生懸命指しているんですけどお~！ 勝てないんですぅ~！ ぷんぷくり~ん(怒)」と言いましょ。だいたいの将棋マニアの男は無駄に強くなりたがる習性があるので、弱かったとしても初段程度はあってそれを鼻にかけているはず。

そこで男が「好きな戦法とかないの？」と言ってくるはず(言ってこない空気が読めない男はその時点でガン無視OK)。そう言われたらあなたは「なんかなんかあ~！ 最近ゴキゲン藤井矢倉が人気なんでしょ~!? あれってどうなんですかあ？ 私も指してみたいんですけどわかんなあぁああい!! 私かわいそ~なコ」と返します。すると男は「それって、ゴキゲン中飛車と藤井矢倉のことでしょ？ 二つがゴツチャになっているよ。本当に良くわからないみたいだね。どちらが指したいの？ 教えてあげるよ。」という話になって、次の休みの日にふたりで将棋デートに行けるというわけです。あなたの将棋女子力が高ければ、男が大山全集全三巻を買ってくれるかも!?

### 2. Twitterで><を使うとモテる

「きゃー！」とか「悲しい！」などを表現する「><」をコメントに入れると、Twitterの将棋男性ユーザーは「なんかこの子カワイいなあ」や「支えてあげたいかも」と思ってくれます。インターネット上では現実世界よりもイメージが増幅されて相手に伝わるので「><」を多用することによって、男性はあなたを可憐で女の子らしいと勘違いしてくれるのです。そういうキャラクターにするとほぼ絶対に同性に嫌われますが気にしないようにしましょう。

特に将棋男子は、島朗先生が同業のプロへの敬愛とちょっとばかりの自虐をこめて「純粹なるもの」と呼んだように一般将棋男子も概して純情で素直です。松田聖子全盛の頃でもそこまでしねーよというくらいぶりっ子を徹底してやりきってください。

### 3. とりあえず男には「えー！なにそれ!? 知りたい知りたーい」と言っておく

飲み会などで男が女性に話すことといえば勝った将棋の自慢話や訳分からないプロの高度な将棋の話ばかり。よって、女性にとってどうでもいい話ばかりです。でもそこで適当に「へえー最近松尾流 5二玉がはやっているんですかぁ〜?」とか「羽生さんの手渡しってよくわかんないですけどすごいですねえ」と返してしまうと、さすがの男も「この女ダメだな」と気がついてしまいます。ダメ女だとバレたら終わりです。そこは無意味にテンションをあげて、「えー！なに角換わり腰掛け銀同型問題って何それ!? 知りたい知りたーい」と言っておくのが正解。たとえ角換わり定跡なんて全く興味もないし、内心「てめーも本当は定跡なんか口クにしらねーんだろ」と思っても間違ってもそんなことを億尾にも出してはいけません。興味がない話題でも、テンションと積極性でその場を乗り切りましょう。積極的に話を聞いてくれる女性に男は弱いのです。

いろいろと話を聞いたあと、「ゴキゲン中飛車では星野流超速 3七銀が大流行中で、羽生さんが名人戦で指したのを藤井さんは藤井矢倉とは認めていないんですね！ 覚えたぞお！ メモメモ！」とコメントすればパーフェクト。続けて頭に指をさしてくるくる回しつつ「キュンキュンキュン！ キュンキュンキュン！」と言って、「どうしたの？」と男に言わせるのもアリ。そこで「私のハードディスクに記録しているのでありますっ」と言えば女子力アップ！ そこでまた男は「この子おもしろくてカワイイかも!?!」と思ってくれます。私は学歴も知識もありませんしブスですが、こういうテクニックを使えば知識がない私のようなバカ女のほうがモテたりするのです。男は優越感に浸りたいですからね。

### 4. 王手飛車をかけられない将棋女子をアピールせよ

男と将棋を指したら、自分より弱くても間違っても全駒にして負けたり、「てめーと指していても退屈なだけだ」と本心をもらしてはいけません。そして、相手が弱すぎて自分から王手飛車にかかりに来て、相手が気づいて「しまった」といった時には、すかさずこう言わなければいけません。「あーん！ 私、王手飛車かけられないんですよねえ〜（悲）」。するとほぼ100パーセント「どうして？ 難しくて分からないの？」と聞かれるので、「難しいけれど、一生懸命勉強したから自分で王手飛車をかけることはできるんです。でも、かけたくてもかけられないんですっ><」と返答しましょう。ここでまた100パーセント「分かっているのにどうして王手飛車をかけられないの？」と聞かれるので、うつむいて3~5秒ほど間をおいてからボソッとこう言います。「……だって、……だって、王様さんをとったらみんなが死んじゃうじゃないですかぁっ！ 飛車さんだってかわいそうですっ！ まだタテにもヨコにもビュンビュン動きたいのいい〜（悲）。龍さんになることもできないんですよ……」と身を震わせて言うのです。

その瞬間、あなたの将棋女子力がアップします。きっと男は「なんて優しい天使のようなコなんだろう！

絶対にゲットしてやるぞ！ コイツは俺の女だ！」と心のなかで誓い、あなたに惚れ込むはず。意中の男と付き合うことになったら、そんなことは忘れて好きなだけ王手飛車をかけても大丈夫です。「かけられないんじゃないかなかったっけ？」と言われたら「大丈夫になった」とか「慣れた」、「そんなこと言っていない」と言っておけばOKです。

(文=将棋恋愛マネジメント・鷲宮嬢せき)



(あらすじ)

将棋の世界は絶滅の危機に瀕していた。

カーナが所持する秘密の四間石のため政府機関に囚われの身となり秘密警察のラゴン大佐の厳しい尋問を受けていた。

カーナはラゴン大佐から、彼女がヤスハル王家の末裔であることを告げられる。

彼女の正式名称は「カーナ・イズモ・イナズマ・デ・ヤスハル」。

かつてヤスハル王家は強力な振り飛車により将棋の世界を完全に支配下においていた。そしてその秘密の鍵が伝説の天空の城ファンタに隠されている。四間石にカーナだけが知る秘密の呪文を唱えると天空の城の所在地が分かるのだ。

カーナはラゴン大佐の元からなんとか逃げ出して出会った少年タケシーの助けを借りて逃避行を続ける。

さて、話を大幅にはしょるとラゴン大佐の猛烈な追跡とカーナとタケシーの逃亡劇の末、カーナは追い詰められて秘密の呪文を唱えてしまう。

「システム・デ・イギョク・ウナギ・デ・ファンタ」

すると不思議なことに四間石が光を放ちだして天空の城ファンタの所在地を指し示すのであった。

で、なんだかんだあって、カーナとタケシー、ラゴン大佐も天空の城ファンタに辿りついたのであった。

ラゴン大佐はカーナを捕らえて、ついに秘密の巨大な四間石を発見する。

ラゴン大佐 おおお。見たまえ。この巨大な飛行石を。これこそ、ファンタの力の根源なのだ。すばらしい。700年もの間、王の帰りを待っていたのだ！

カーナ 700年？

ラゴン大佐 君の一族は、そんなことも忘れてしまったのかね？黒い石だ。伝承の通りだ。はっ、はっ、はっへ！読める、読めるぞお！100手先まで読めるぞお。

カーナ あなたは一体だれ？

ラゴン大佐 わたしも、古い秘密の名前を持ってるんだよ。

わたしの名は、ドラゴン・ナナレンパ・コクヒョウ・デ・ヤスハル

カーナ ええっ！道理であなたは私の先祖の肖像画とよく似ていると思ったわ！

ラゴン大佐 うるさい。わたしはちょっとそれを気にしているのだ。

まあよい。君の一族と私の一族は、もともと一つの、王家だったのだ。地上に降りたとき、二つに分かれたがね。

そうなのだ。ラゴン大佐もヤスハル王家の末裔であり将棋の世界を支配する力を手にしてしまったのだ。しかし、カーナはラゴン大佐に果敢に将棋でチャレンジする。カーナは自分の勝ちを犠牲にしてでも、なんとか持将棋に持ち込んでラゴン大佐を道ずれに命を落とす覚悟である。勿論、カーナの作戦は得意の四間飛車、ラゴン大佐は秘密の知識により獲得したばかりの最強、最凶の居飛車穴熊である。

カーナ これがあなたの王座ですって？ここはお墓よ。あなたとあたしの。あなたは私に王手もかけられず持将棋になって私と死ぬの。いまは、居飛車穴熊がなぜ滅びたのかあたしよく分かる。歌にあるもの『盤面のバランスをとって美しく、相手の力をつかって投げよう。時には受け潰し時にはガジガジ攻めて芸術

的に勝とう。』どんなに恐ろしい居飛車穴熊でも、どんなに穴熊の暴力をつかっても、ただ玉をかためるだけじゃ生きられないのよ！

ラゴン大佐 居飛車穴熊は滅びぬ。何度でも金銀を埋め立てて甦るさ！居飛車穴熊の力こそ、人類の夢だからだ！

そこへ、タケシーが現れる。

タケシー 何をしているんだ、カーナ。キミじゃ無理だ、ボクが代わって戦う！

カーナ 何を言っているの、タケシー。あなた、将棋なんて出来るの？

タケシー カーナ、今までキミには言わなかったが、実はボクのじいちゃん伝説の将棋指しなんだ！

カーナ はっ！それではあなたのおじいさんは、あの伝説の・・・。

タケシー ふっ。ボクの名前に聞き覚えはなかったかい？さあ代わるよ。

というわけでタケシーが颯爽とカーナと交代する。

ところがだ、タケシーはとんでもないへボだった・・・。

あっという間に形勢を大きく損ねてしまう。

ラゴン大佐 すばらしい！最高の将棋だと思わんかね。ふっはっは、見ろ！美濃囲いがゴミのようだ！！っはっはっはっはっはっは・・・

タケシー あれっ、おかしーなー。

カーナ (キレて) あんた、何やっているのよ！さっさと代わりなさいっ。

ラゴン大佐 3分間待ってやる。いや、そんなに何度も勝手に代わられたらたまらん。カーナ、きみは一手30秒で指したまえ。

カーナ ひどいわ。

タケシー なんてことをするんだ。誰のせいだ。

カーナ バカっ、あんたのせいよ。

ラゴン大佐 はっはっはっはっ。坊主、おまえは秒読みでもしたまえ。

タケシー 10秒・・・。20秒・・・。5、6、7、8・・・。

カーナ ええい。もっと優しくよみなさいよっ。

タケシー ごめん・・・。

ラゴン大佐 はっはっはっはっ。

カーナも必死に受け続けるが、何しろタケシーのファンタズリ(あっ、城の名前とは偶然の一致だ)がひどすぎたんで、ラゴン大佐得意の自玉が堅いまま細い攻めを的確につなぐ技術の前でカーナ玉は風前の灯火である。

タケシー カーナ。落ち着いてよく聞くんだ。あの言葉を。ぼくも一緒に言う。

カーナ えっ。

タケシー ぼくの左手に、手を乗せて。

カーナ はっ。

ラゴン大佐 何をごちゃごちゃやっている。

カーナ・タケシー カズキ！

二人が秘密の呪文をとなえると、どうだ、驚いたことにカーナの風前の灯火だった玉が突然生命力を帯びて受かってしまったではないか。なんという驚くべき受け師！

ラゴン大佐 うっ、それは、それはもしやヤスハル王家の伝説の・・・。

カーナ そうよ。これが秘儀「受からないと書いていても受かっている」よっ。

ラゴン大佐 あああああ。竜王がー。竜王がー。

こうしてラゴン大佐は敗れ去り、カーナとタケシーの手により将棋の世界は滅亡の危機から救われたのだった。めでたしめでたし。

ラゴン大佐が去り、二人が残る。

タケシー ねえ、カーナ、ボクと将棋指さない？

カーナ えっ、あなたの腕前はさっきよく分かったし・・・。

タケシー まあ、そう言わずにさ。ボクにはとっておきの秘策があるのさ。

カーナ 仕方ないわねえ。

二人は将棋を指し出す。

カーナ 何よ、そのヘンテコな矢倉。

タケシー いや、これは、じいちゃんから教わった・・・。

(おしまい)

・本小説は完全なフィクションであり、実在する人物等とは一切関係ありません。

時代はローラである？私は去年末のダウンタウンの「笑ってはいけない」で初体験してすっかり気に入ったのだが、ついに昨日は満を持して「徹子の部屋」に登場。詳細については、まとめ記事や動画自体を参照していただきたい。というか、それを知らない以下ドリフコントが全く意味不明だと思うので一言お断りしておいた次第である。

なお、解説役にどうしてもプロ棋士が必要なのでK村八段に登場していただいた。大変心苦しいが、私としては一番優しく心がひろくて許してもらえそうな先生を選んだのである。いやいや、間違えた。実在のモデルなど決していません。

それでは、どうぞ。

(K村八段) ハイ、対局が始まりましたね。今日は、MHK決勝です。聞き手のローラさんよろしくお願  
いしますね。

(ローラ) おっけ～

(K村八段) ……

いや、ローラさんは本当にかわいくてお綺麗ですね。

(ローラ) そんなことないよぉ～、K村さんの方が全然かわいいよぉ～(^o^)

(K村八段) いや参りますね。うまいことおだててもダメですよ。私みたいなオジサンのことを。

(ローラ) うーん、ほんとほんとー。チェブラーシカみたいだよぉー、かわいい～～(^ ^)～

(K村八段) ……

あの将棋の解説していいですかね？

(ローラ) おっけ～

(K村八段) この二人は現在の将棋界でも、最高峰のお二人なんですね。そして将棋も大変厳しい。こんな二人と戦うのは、とてもシャイじゃ出来ないことなんですよ。

(ローラ) あぁーっ、わたしも昔シャイだったんですけど、K村さんもシャイなんですか。

(K村八段) これでも昔はシャイだったんですよ。

(ローラ) 今はシャイじゃないんですかぁ～？

(K村八段) うーん、そうですねー。プロになって人に将棋を見ていただくようになって、対局料頂くようになってからシャイじゃなくなりましたかたねえー。

(ローラ) あっ、お金かぁー

(K村八段) ……

でも、ローラさんはあれですね。よくため口で敬語を使わないなんて言われてますが、ちゃんと私をさんづけで呼んでくれて敬語も話せるんですね。

(ローラ) うん！ 話せる話せるー

(K村八段) ……

もしかすると話せてませんね・・・ところで、ローラさんは話すときにほっぺたをふくらませますね。それやると、女性も絶対シワが出来ないですね。私もウチの奴に見習わせてみますかね。

(ローラ) きゃあ～。K村さんおもしろーい。(^^)これはね～、じつはわたしも意識してて、ほうれい線をけそうとおもってプクプクしてるの！

(K村八段) ほー、そうなんですか。ローラさんみたいに若い人がそんなことする必要ないのに。ところ

で、ほうれい線以外で気になる場所の対策とかローラさんをご存知ですかね？

(ローラ) きゃはは、ふいふい。

(K村八段) ちょっと、ローラさん、私のどこ見ているんですか・・・。

(ローラ) ごめんねえ～お空～(^ ^)～

(K村八段) ……

さて、そんな話をしている間に、将棋は終盤です。これは詰むや詰まざるや。緊迫した局面になっています。

(ローラ) あっ、片方の人の手がものすごくふるえたよぉ～

(K村八段) おおっ、さすがはローラさん。よくご覧になっていますね。これはですね、自分が勝ちと確信した時に緊張が解けて手が大きく震えるんですよ。これが出たらもう相手は負けを覚悟しないとイケないんです。将棋界の美しい伝説なんですよ。素晴らしいですね。

(ローラ) すごお～～い、じゃあアル中の人は将棋にずっとずっと勝っちゃうね～ふいふいっ。( ^ ^ )～

(K村八段) ……

まあ、いいや。あっ、終わりましたね。ローラさん、今日はありがとうございました。今日の将棋は、面白かったですか、どこが印象的でしたか？

(ローラ) とっても面白かったぁ～でももう全部忘れちゃったぁ～ ふいふいっ

(K村八段) ……

いつも元気なローラさんでした。お仕事は楽しいですか？

(ローラ) すごいおもしろーい。K村さんわぁ～？

(K村八段) はいはい、とっても面白いです。

(ローラ) おっけー ばいばい～(^o^)

(K村八段) ……

MHK杯の決勝をお送りしました・・・。

\*この物語は完全にフィクションであり実在する人物、団体等とは一切関係ないよぉ～(^o^)

## 囲碁

---

基本的に人間が好きなので、お隣の囲碁の世界の人にも興味があります。

やっと録画を見たが、予想をはるかに上回る面白さだった。張栩は、例によって黒系統のちょっと殺し屋風のスーツで登場。実際よく似合うのだが、「少しは強そうに見えることも意識している」と屈託なく笑って言う。イメージとの格差が張栩の面白いところである。司会の人も言っていたが、アツくて求道者風の厳しさと人間的なかわいらしさの共存が張栩の魅力なのだろう。

興味深い話はたくさんある。夢の中で本気で対局していることがあるそうである。そしてグッタリして目が覚めて、「これから対局か」と思うのだと。ちょっとこわい話である。将棋の棋士でもそういうことはあるのだろうか。

質問に答えて「囲碁の神様と二子で何とか打ちたい」と。どの程度のハンディなのかは分からないが、将棋の神様と角落で指す感じなのか。あるいはそれより厳しい条件なのか。

日本の碁界が韓国や中国に大きく遅れを取っていることについて。共同研究の重要性を説き、かつて自分でもマンションを共同で借りてやってみたが、出席者が揃わなかったり遅刻者が出て、いつの間にか立ち消えになったと。「日本の場合、向上心が足りない」とドキリとするようなことを言っていた。

しかしなんといっても、白眉は泉美夫人とのエピソードだろう。面白すぎる。ゲラゲラ笑ってみながら、こんなことも思った。

運命のめぐり合いというと通俗的きわまりない文句だけれども、本当にこの二人の場合、運命の赤い糸によって結ばれていたのだと自信を持って言いきることが出来ると。

長めになるが、エピソードをほとんど全て文字化して紹介する。何にも言い加えることはありません。ご馳走様。

出合った頃の話 (張栩 10 歳、泉美さんは 2.3 歳年上)

すごいお姉さんで。泉美さんというのは、すごく変わった人で。囲碁以外のことで会話したことが一度もないかもしれない。友達も、そんなにいない感じだし、本当に碁を勉強する囲碁バカなんですよ。完全に。—そういうところに惚れたのですか？

囲碁に対する心がけや姿勢はいいなと思っていたんですね。勉強熱心ですし。そういう意味では、ずっと好感を持っていたのですけれども。

—泉さんは囲碁の超名門の家系ですよ。そういう人によくアタックしましたね。

その通りですね。あまり泉さんを口説いた人はいなかったですね。

—なぜ出来たんですか？

どうかしてたのかな。

泉さんがビデオで初デートの思い出を語る。

それまでは碁を通じて何かしら会うことが多かったので、どういう感じかなと思って楽しみにして初デートに行ったんです。彼が用意していたのは碁の話だったんですね。地あいの正しい計算方法というのはプロでも間違ったりする難しい内容なんですけど、いきなり延々とされてですね。アツく語る人なんですけど、地あいについてアツく語ってくれたんですね。そしたら急に碁盤か碁罫紙を出して、問題を出されて「これ、何目？」と訊かれて「えっ」と思って。でも言われたら一生懸命考えて解くんですね。「出来ました。」と言うと、サッと形を変えて次の問題を出されるんですね。それがいくつか続いて、これがいつまで続くんだろうと思ったら、やっとおわって、食事に行けたんですね。最終的に帰りがけに渡されたのが、張栩詰め碁集です。張栩の詰め碁が一つの紙に四つ書いてあるんですけど、それが 30 枚くらい束に

なってクリップでとめてあるものを「どうぞ」と渡されたんです。「これで勉強してね」とすごい笑顔で言われて。「あっ、ありがとうございます。」と、もらって帰ったんですけども。

ー (スタジオに画面戻り) 面白すぎますね。

いやあ、いい話ですねえ。いや、ちょっとキャラ作っていた部分もあるみたいですね。そこまで囲碁バカではなかったという。(と明るく笑う。) 本当に囲碁だけの付き合いで、それ以外のことを話しかけても、ほとんど無視の状態で会話が成り立たなかったんですね。囲碁以外の会話は、そういうキャラだったんですね。付き合ったとしても碁の話から入るのが自然かなと。だから、文句を言われる筋合いは無いんです。(と言ってまた屈託なく笑う)

ーバレンタインデイにハート型の詰め碁をプレゼントされたことについて再び泉美さんの証言

まさか、そういうプレゼントがあると思ってなかったのでビックリしました。それによってお互いの理解を深めていく段階で、まあ、本当の意味でこの人を理解できるのは私しかないかなと。それは今でも思っているのですが。



# 藤沢秀行と坂田栄男の封じ手をめぐるせめぎあいー NHK「迷走～碁打ち・藤沢秀行という生き方～」より 2009年12月17日

---

私は囲碁のことを何も知らない。でも、NHKの藤沢秀行特番はとても面白かった。

藤沢秀行が愛したという「ベサメ・ムーチョ」をバックに、藤沢を偲ぶ会で男女がペアで踊っている。男はブラックハットを着こなしたお洒落なダンサーだ。とても優雅な動き。あっ、カメラが近づいたら、なんと武宮正樹先生だ！

というように秘蔵映像が次々に出てきて飽きさせない。

特に、相米慎二監督が撮ろうとしていたが急逝によって果たせなかったという「藤沢秀行の家族の物語」。ご家族の証言を聞くと、実際に周りにいたら大変だったろうとは思いますが、本当に誰かが映画化して欲しいと思うくらいだ。

その中から、昭和38年度の名人戦、名人藤沢秀行と本因坊坂田栄男の頂上対決における封じ手をめぐるせめぎあいを取り上げてみよう。

相米が撮ったという藤沢秀行の秘蔵映像とともに、坂田栄男もインタビューで登場する。

ボクはね、秀行のね。ちょうちん持つような番組なんか出たくないんだけどね、本当は。

秀行はね、無頼派の棋士という、最後の無頼派、無頼派っていうのは嫌いな僕は、正反対だよ。

いきなり、こんな調子である。歳をとるとともにますます内面が外面や言動にはっきりとでてきてしまっている強烈きわまりない男がカメラの前で喋っている。

名人戦当時の坂田の写真が映し出されている。既に若い時から、猛烈な勝負への執着が表情に現れていて壮絶である。むしろ、藤沢の方が、見た目だけだと普通の人である。

秀行とはね、不思議な因縁があるんだ、

38年のボクと秀行の大勝負だよ。勝った者はね、即日本一なんだよ。二つしかないんだから。「名人」、「本因坊」。

しかも秀行とワタシは仲が悪いんだよ。これも有名だったんだ。だから、両方、舌戦の、今じゃ想像できないくらい、お互いにもうそのくらい大勝負だったんだよ。

坂田が二連勝した後、藤沢が三連勝。

あのぐらい苦労したとき、後にも先にもなかったね。ボクが三連敗した時は大ショックだよ、ボクは。どうしても、このままじゃ勝ち目はないと思ってね。それからボクとしては本当に命を削ったね、次の対局までに。

そして、第六局の封じ手場面で事件は起きた。藤沢は語る。

勝負と暮っていう・・・結びつけて考えた場合に・・・。

たとえば、勝負に徹するっていうことになると、たとえば、二日でしょ、だいたい挑戦手合って。五時半なんですよ、打ちかけ(封じ手)がね。1分前ぐらいね、それまでわざと考えといて、時間引き延ばして瞬間的に30秒とか1分前ぐらいで、えらい難しい手を打ってくるわけですよ。相手困るんですよ。

当時の橋本方円子の観戦記より

チラリとまた時計を見た本因坊が、やにわに石をつかみ、白50-2.

それを見た名人に、一瞬血がのぼった。恐らく自分に封じ手をさせようとしている相手の意図が怒りを呼んだのであろう。

やにわに石をつかむなり、50-3.

ところが、本因坊は、またすぐ50-4.

ここで一言、「頭にきた」と名人が言って腕組みした時、立会いの高橋七段が定刻をつげたのである。

将棋の世界だと、かつて名人戦で挑戦者の森内が封じ手の直前に着手したことがあった。しかし、羽生は怒った様子もなく、ほどなく自然に封じ手。一切波風は立たなかった。森内にしても、盤外作戦とかいうことでなく、単に封じ手をするのがイヤだっただけらしい。

一方、この二人の様子は凄まじい。藤沢は振り返って語る。

もう、あんまり言いたくないね、もう腹が立つことが山ほどある。

だから、そういうのも神経作戦の要素に加わってくるんですよ、盤上の。相手を怒らせる・・・だって、20時間くらい顔つき合わせているわけでしょ、昔はね。(ふっふっと笑う)

坂田は語る。

あれも勝負の内だと思って・・・気合負けしちゃいかんと思うから、それでああいうバカなことをやったんだ。

そして秀行は、おそらく怒りに震える尋常ではない気持ちの状態のまま封じ手することを余儀なくされる。その一手が、大問題で、結局敗着になってしまったのだ。

藤沢

だから、オレみたいに神経がピリピリしている奴は損なんだよね。図太い奴は、そういうの乗らないでしょ。(えっへっへっ)いや、勝負っていう面から言えばね。

坂田

考えてみるとね、あの勝負でね、やっぱり寿命縮めたね。

それからはそれが最後と言ってもいいね、後で考えると、ボクが本当に碁を打てたのは、すごく心身ともに、もうガックリしちゃった、参っちゃったんだよね。勝っても。

その後の第七局では、逆に藤沢が封じ手直前に打ってお返しをするが、結果は坂田に軍配が上がった。当時の局後の坂田の笑う写真が映し出されるのだが、これがすごい。なんとというか、謙虚に勝ちを喜ぶとかホッとするとか言うのでは全然なく、してやったり、どうだみたかといわんばかりに勝ちを喜ぶ笑顔。そこには敗者に対するいたわりのようなものは、ほとんど感じられないのだが、私はそういうところに坂田の凄みを感じてしまう。勝負の鬼、本物の鬼。

藤沢も、私生活などではとんでもない人だったらしい。手のつけられない荒ぶる魂ということでは、二人とも共通しているのかもしれない。しかし、秀行には、どことなく人間的な弱さの美しさのようなものも、そこはかとなく感じてしまう。

番組中で小西泰三八段がこんなことを語っていた。

(藤沢には) 自分の形がない。虚像かもしれない。実際はすごい神経質で、自分の虚像をつくりあげること、自分の実像を保っている、そういう部分が本人の中であったという気がする。

私は門外漢でお二人のことを、ほとんどよく知らないが、この番組を観ただけでも、そういう部分は直感した。藤沢の無頼は意図的に作り上げた部分もあり、それとはそぐわない部分を内面にもっていた人のような気がする。一方、無頼は嫌いだと言い切る坂田の方に、本物の精神的無頼派とでもいうべき逞しい何者かが潜んでいたのではないかと。勿論、これは私なりの勝負師坂田に対する最大限の賛辞のつもりなのだが。当たっているかどうかは知らない。

だから、おしまいなんだ。あけが最後なんだよ、ああいう勝負は。

ああいう勝負をね、するのは僕と秀行でオワリなの。

その坂田は、藤沢を偲ぶ界に自主的に出席した。

新聞で見たから、知らなかった。オレ、通知もらわないもん。オレが来るとは思わなかったもんな、向こうは。最期だから行ったんだ。

お別れだから、お別れだ、最期の。

車椅子ながら、今でもダンディで生命力に満ちた姿の坂田が偲ぶ会に登場してくる。趙治勲が近づくと、ネクタイをしめてあげるしぐさをして、「このままギョとやったら死んじゃうかもしれない。」と相変わらずおどけている。

坂田が、藤沢の遺影に近づいて、碁の石を打って捧げている。坂田はハンカチで口を押さえている。悲しげで目の表情は確かに「泣いて」いた。

そんなかつての仇敵の姿を藤沢はどんな思いで見っていたのだろうか。

今時、無頼派なんてはやらない。周りで野次馬根性丸出しで眺めている分には楽しくても、巻き込まれた家族たちにとってはたまったもんじゃない。マルセ太郎(絶妙な猿等の物真似で有名だが、黒澤明作品のパロディ調ひとり芝居も印象的)が、無頼派なんていうものは全然かっこよくなくて、普通に家族を愛して平和に過ごすことの方がよほど大変で凄いことなのだ、かつて言っていた。その通りだろう。

しかしながらである。この藤沢秀行の妻のモトさんの本を、最初は面白半分で読み始めながら、そのあまりにも人間的なむき出しのドラマにいつのまにかすっかり引きずりこまれて、最後には秀行という台風の目の周囲にいやおうもなく巻き込まれて出来上がった人間模様に、ちょっとばかり感動してしまうのだ。本来の人間のあり方というのは、こういうものなのだ。太宰治や檀一雄の小説を読んだ後のように。たぶん錯覚なのだろう。現実はそのなかに綺麗ごとで済むものではないが、しかし本来何者にも頼れない、孤独な存在たちがギリギリの形でふれあう、どこか懐かしい根元的な人間的風景。まあ、大げさに言うとそういうことなのだが、とにかく読んでいて面白いことだけは確かだ。

藤沢モトさんというのも、相当な人だ。この本を読むと、藤沢秀行の妻になるべくしてなった人なのだと思われる。

農家で育って、子供の頃から家庭の事情で家事を一身でこなしてきた苦労人である。そして、上京して、藤沢秀行に一方的にみそめられる。御本人が言うには、器量が悪いといわれ続けて育っていたのに訳が分からない、ということなのだが、モトさんの二十歳頃の写真も本に掲載されているのだが、なんと言うか、何か人を不思議にひきつける雰囲気を持った女性である。秀行にも、何か勝負師特有の勘が働いたのだろう。モトさんは、その後本気で秀行との離婚を考えて、家を出て行こうとする、そういう時に限って普段は家をほとんど空けてばかりいる秀行がいつまで経っても家に居続けて機会を失ったそうである。秀行というのは、やはり勘が抜群に鋭い人だったらしい。

本の内容は、まさしく無頼派を地で行くもので、秀行の女性問題、酒乱、アル中、家族への暴力、父と子と相克、ギャンブル狂い、莫大な借金・・・、といった具合。メチャクチャである。

借金地獄の際には、こわい人たちや税務署からの取立てがあった様子も生々しく描写されている。しかし、モトさんは、実に堂々と隠し事なく対応したので、取り立ても税務署も拍子はずレになってしまったそうである。モトさんの友達に言わせると、「秀行さんも変わっているけど、あなたはそれ以上。宇宙人はあなたのほうよ」ということになる。

モトさん以外にも何人も女性がいた。ところが、最後はモトさんと他の女性も、仲良くして秀行の世話をみるという奇妙な関係になったそうである。秀行が、モトさんにはそんなことは一度も言ったことがなかったのに、他の女性に公の場に出る際にいい着物を着せてやってくれと頼んだりしたそうである。もはや、秀行にとって、モトさんは単なる「妻」以上の相方、連れのような存在になってしまっていたのだろう。

他の女性の子供たちとも交流があった。秀行の囲碁教室に他の女性の子供が来て、モトさんも分け隔てなく接して、その子供もモトさんをなついたりしている。三番目の女性の娘の相談に乗って、その娘もモトさんを慕っているらしい。本当に不思議に人間関係である。

そういった、客観的に見れば悲惨かもしれない生活を、不思議に明るい調子で描いている。モトさんというのは、どんな生活状況であっても、それをそのまま受け入れて軽々と生きてしまう所がある。夫も夫だが、妻の方も相当非凡なのだ。秀行は「おれはお釈迦様の掌で泳がされている孫悟空のようなものだ。」と語ったそうである。

NHK「迷走～碁打ち・藤沢秀行という生き方～」には、モトさんも、その長男も、二番目の女性の子の藤沢

一就さんも、三番目の女性の娘も登場して、それぞれ生々しい証言をしていた。あまり修羅場を見ていない方のその娘さんでも、秀行がボトルを持って頭から血を流して家に帰ってきたり、ちゃぶ台をひっくり返して(巨人の星みたいだ)、フライパンや鍋が飛びかって母親とケンカしていたのを覚えているそうである。長男も生々しい父と子の相克を語っていた。この長男は、秀行が泥酔して警察に勾留されたのを引き取りに行き、家に連れて帰ってきて、ものすごい早業で秀行を押さえつけて暴れられないように寝かせたりしたそうである。悲惨な情景なのだけれども、なぜかおかしい。

秀行が入院して、氏の数日前に、長男を知覚に呼び寄せて「かあちゃん、すきだ」と二回言ったそうである。それを聞いたモトさんの言葉。

笑っちゃいました。息子と二人で大笑い。今頃あんなこと言ったって間に合わないよねえ、って息子が言って。ほんとに……。あんなこと言うとは思わなかったし。

秀行の骨を海に散骨する際には、皆仲良く？集合していた。天気も良く、なぜか皆晴れ晴れとしたよい表情だった。

そして近頃、一就氏の娘、つまり秀行の孫娘の藤沢里菜さんが、史上最年少で囲碁棋士になった。

# チェス

---

羽生さん関連のチェスの話です。

将棋の羽生善治二冠(41)が29日、フランス・ロワール地方の古城でチェスの仏チャンピオン、マキシム・バシエ・ラグラブさん(21)とチェスで対戦し、引き分けた。ラグラブさんが羽生二冠、森内俊之名人(41)と同時に2局指す親善対局だった。

羽生二冠は終盤で相手のキングの詰みを逃し、最後は引き分けた。(朝日新聞記事より)

[羽生二冠、チェスで仏チャンピオンと引き分け\(朝日新聞\)](#)

[羽生二冠・森内名人、仏チェス王者に善戦\(読売新聞\)](#)

この記事はツイッターの将棋クラスタでも大変話題になった。私も興奮してチェス全日本チャンピオンの小島慎也さんのブログ記事など引用してつぶやいたら、なんと小島さんが気さくに話しかけてくださり、色々教えていただいた。将棋で言うと羽生善治自身にツイッターで将棋解説をしてもらうようなものである。ありがたいことである。

相手は世界ランク30位に入るプレイヤーです。

調べてみたところ Vachier-Lagrave が羽生さんのレベル(2400台)に白でドローを取られたのは、この2年で1度だけ(しかもその時は2400後半)のようです。

チェスは引き分けが多いと言われますが、それでも格上に黒でドローは簡単ではありませんし、今回は『超』格上ですからね。

(以上 [小島慎也さんのツイッター](#)より)

小島さんのブログでその棋譜も紹介されている。

[Shiny Kojima A magnificent draw!](#)

将棋ファンにはおなじみのチェス戎棋夷説さんも正統派の棋譜解説をされている。

[チェス戎棋夷説 11/10/31](#)

現地のレポート。棋譜再生が出来、写真も豊富である。

[Echiquier Tourangeau Echecs vs Shogi en simultanee a Villandry](#)

さらに、将棋ファンの [Zeirams](#) さんと仲良しの? 別人格? の [nyankomusume](#) さんもブログ記事を書かれている。チェス入門からひもついて、チェスにおける引分けの位置づけも解説し、羽生棋譜にも一手ごとの解説を加え、さらにそれをプリキュアの例などあげながら軽妙な文体で解説するという快作、怪作である。最後のオチも将棋ファンを満足させずにはいられないだろう。ものぐさは彼がチェスブログで本当によかったとひそかに胸をなでおろしたのであった。

[Chess.com](#) [ハブ](#)



最後に本局とは違うが、羽生がグランドマスター相手に後手で勝った棋譜を解説したニコニコ動画も紹介しておく。大変面白い。羽生がまるで将棋の捨て駒のような鮮やかな手を連発し、チェスの opening、openings にも影響を与えたというすごい棋譜を、とても分かりやすく解説してくれている。

[ニコニコ動画【チェス】Peter Wells vs 羽生善治【棋譜解説】](#)

日本を代表するチェスプレイヤーで全日本チャンピオンの小島慎也さんが主催したイベント Check Mate Lounge で、羽生が世界的チェスプレイヤーのナイジェル・ショート氏と二面指しながら引き分ける快挙を成し遂げた。

## NHKニュース 羽生2冠チェス名人と引き分け

対局はショートと羽生・小島が二面指しで戦う二面指しで行われ、手番は羽生、小島ともに後手の黒番。(囲碁と違って白が先手で黒が後手。)

英国人のナイジェル・ショートは世界のトッププレイヤーで、チェスの世界ランキングでは51位。一方、羽生さんは日本では1位だが世界的では2828位と大差。

チェスでは将棋と比べると、はるかに引分けが多いがこのランキング差を考えると、やはり大変なことである。

この対局の様子はニコニコ生放送でも伝えられ、当日私も見ていた。私はチェスが全く分からないのだが、当日は初心者向けに分かりやすく解説されており、その私なりの要約は以下のような感じ。

ショートは普通使われない定跡を用いて何をしてくるか分からないが、羽生相手にはわりとオーソドックスな作戦を採用してきた。

左辺で激しい駒の取り合いになり駒数が減ってお互い駒数が8個ずつになった。将棋で考えると大変な少なさで引分けになりやすい展開になったとも言える。

但し、羽生が感想戦で述べたいが、チェスの経験値がいきる展開にしてしまったようである。またショートの下左のポーンだけが残り、チェスではポーンが敵陣に到達すると将棋以上に強力な成駒になるので、それが課題として残り、ショートの方には勝ちの可能性があるが羽生は引分けがベストという展開になったと解説者の方はいわれていた。

その後、問題のポーンをわりとアッサリとショートが取られる展開になり、さらにお互いの駒数が減り、ほぼ引分けが確定。羽生が一度、引分けを提案したがショートは最後まで指すことを選んで結局引き分けた。最後、ショートが手を差し出すと羽生が会心の(いつもの)笑顔で応えて終局した。

以上は、将棋ファンが将棋ファンのために解説した当日のニコ生の要約に過ぎない。

残念ながら、小島さんは敗れてしまったが、当然ながら二面指しのプレッシャーを小島さんがショートにかけて引分けに貢献したことも忘れては成らないだろう。また、将棋ファンとしては、こういう素晴らしいイベントを見る機会を与えてくれた小島さんに感謝したいところである。

ありがたいことに、小島さんがブログで二局とも解説されているので、チェスに詳しい方はこちらを参照されたい。

[Shinya Kojima BLOG](#)

## [CHECK Mate Lounge Game Review Vol.1](#)

(小島 vs ショートの解説)

記事より。

私も d4 が落ちた際はまずいと思いましたが、本当にそうなのか、簡単に結論を出さずに疑ってかかるべきではないのか、という思考は、実は羽生さんとのこれまでの対局や、対話の中で学んできたことです。

## [Check Mate Lounge Game Review Vol.2](#)

(羽生 vs ショートの解説)

記事より。

羽生さんも彼らしい独創的な手で応戦します。一手渡して白の出方を伺う、といったところでしょうか。

チェスでも羽生得意の手待ちを使っているらしいのが興味深かった。

また、羽生と小島がチェスについて語ったラジオが Youtube にあがっていて大変面白い。将棋では考えられないくらい楽しそうな羽生の肉声が聞けるので、是非お聞きください。

## [Youtube Check Mate Lounge Radio # 1](#)

以下、簡単に内容のさわりをご紹介します。

羽生はチェスをやっていて、チェスの場合、将棋と違って相手の王様 (キング) を詰まそうという考えがないことを知って驚いたそうである。チェスを始めてかなり年数が経ってから、やっとそれに気づいた。

羽生と小島が初めてチェスを指したのは、小島の所属する慶応大学でだったが、チェスの部室がなく、学食の片隅で指していた。中には羽生に気づいて、「ちょっと、あの人羽生さんじゃない?」と思った学生もいるかもしれない。

さらに、食堂のおばちゃんがやってきて、「もう時間だから。もう食堂を閉めるから、片付けてくれる?」と言われてしまったそうである。

チェスで、羽生 vs 小島と言えば、将棋ではの名人戦の森内 vs 羽生のようなものである。それが、学食の片隅で遂行され、しかも食堂のおばちゃんには勝てなかったというお話。

今日は、チェスについて書いてから名人戦第二局も書くつもりだったのですが、長くなったのでまた明日改めてにさせていただきます。

## 観戦記

---

最後に本来の将棋観戦記を。主要な対局、忘れがたい対局をよろしければ振り返ってみてください。

森内 vs 郷田戦の「せんす事件」みたいなことが起こったら、ファンとしちゃあ、単純によるこんで大騒ぎしちゃうのが、ファン道の仁義ってもんじゃありやせんかい。ヘンにしかめっ面して「心配」するのは当事者の人たちに任せておけばいい。なので、ハシャいで記事を書いちゃうことにする。

そもそも、昔の棋士の盤上、盤外での衝突ぶりは今などとは全然比較にならないほど凄かったらしい。坂口安吾の文章による、木村 vs 升田のぶつかり合いはすさまじくて、酒席で、遠く離れた場所に座って、人々の頭越しに大声で怒鳴ってやりあったりしていたとのこと。それをまた安吾があおりにあおって、…。古きよき時代の出来事である。

打倒大山に敵対的なまでの執念を燃やす山田道美が、読みに没頭して盤上に覆いかぶさったのに対し、大山がいつにない険しい口調で「暗くしなさんな」と一括したのは有名すぎる話。当時しょっちゅう対局で顔を合わせていた加藤一二三に対して、米長が「顔はよく会うが気はあわない」といって、さすがの加藤もムツとした…。当時若き帝王だった谷川に「谷川は強くない」とかみついた田中寅彦。そういえば、最近では銀河戦で、加藤一二三の、時間ギリギリのきわどい「芸術的」な手の動きに、「正義漢」阿部が堂々と文句をつけたのは、映像できっちりと一部始終を見届けられた貴重な例だった。(もっとも連盟のXXな裁定のせいで、すっかり後味が悪くなってしまったけれど。)

こういうのは全部文句なしに「オモロイ」けれど、今回みたいに、タイトル戦で、対局を中断して三十分近く激しく言い合ったというのは、本当に前例のないことだろう。しかも、「いかにもあの人ならやりそう」というのでなく、森内、郷田だというのがすごい。

森内名人というのは、いかにも誠実で常に「何かに耐えている」という風情のある人である。将棋の強さ、チェスの例を参考に戦術を体系的にきわめようとする姿勢、最近羽生とともにある会合に顔を出した政治意識の高さ、温厚篤実な人柄、何をとっても将棋界の至宝である。

しかし、この人、結構デリケートなところもあるとともに、普段いろいろなことを耐えている反動なのかなんなのかわからないが、時々突拍子もない行動に出る。以前の名人戦で、六時ギリギリに着手して封じ手を回避して、対局相手の羽生が唖然としていたこともあった。今回の「せんすの音」もきっと、我慢に我慢を重ねて耐え抜いていたが、どうしようもなくなって立会人に言ったが、タイミング悪く郷田に伝わらなかったために、ついに堪忍袋の緒が切れたということじゃないかしら。それにしても「鼻血が出るほど興奮した」というのは斬新な表現だなあ。

一方の郷田。茫洋とした感じを受けて、あまり熱くなったり怒ったりという印象は受けない。しかし、先崎学著「フフフの歩」の「懺悔」の中に、今回のことを髣髴とさせるエピソードがのっている。ある時、滝先生とともに若手多数で酒を飲みに行き、かなり皆出来上がって話題がボーリングになり、滝氏が、ボーリングではまだまだ君たち若い者には負けないといったら、郷田がかみついたそうだ。最初は穏やかな物言いだっただのが、郷田が全然ゆずらないために、どんどん激論に発展していき、最後には「だいたい年が二十も上の人間に運動で負けるわけがない。滝先生のことは好きで尊敬してますけど、今だけは言います、こんなオッサンには負けません。」とまで言い放ったという。この勝負師根性、見上げたものである。

だから、恐らく三十分も言いあう事態になったのかも。本来郷田に非があるのだが、郷田には郷田の譲れない論理があり、一步もひかないのに対し、なぜ被害者の自分がそんなことを言われたいといけなかつと森内がどんどん激する局面図を想定してみるのだが、どうかしら。

しかし、昔の本当に敵対していた棋士と違って、二人は全然仲が悪いわけじゃないらしい。衛星放送の

深夜のダイジェストの冒頭の絵では、むしろなごやかな雰囲気感想に没頭して、郷田が「そうかー。そっかー」と何の邪気のかけらもなく言っている声が画面からもれ聞こえてきた。

今回の口論は、名人戦にかける二人の尋常ならぬ情熱、熱意の表現。熱き血潮のたぎる青春の一ページである。といっても、二人とも、もうオッサン世代だけれど。(失礼)もともと仲の悪くない二人に、無理に対立しろといっても詮無きこと。第二局以降は、この情熱のエネルギーを盤上のみにつけてくれるに違いない。

ただ、NHKの二日目の放送をビデオにとって見たのだが、(初日はとり忘れたんだよね・・・)気を使ってほとんどふれてなかったのには本当に不満。このやり取りの場面、勿論カメラが捕らえているはずである。もし本人たちが「恥ずかしいよ」というなら無論仕方ないけれども、了承を得ることが出来たら、放送可能な部分だけでも流してもいいというのが私の大局観なのだが、誰も同意してくれないだろうなあ。将棋は、頭脳を酷使する芸術であるとともに、プロレス同様の「みせて楽しませてナンボ」の格闘技でもあるのだから。

(文中敬称略)

各地で騒然としております(笑)。

まっ、いきなり水さしておく、私が指しているのなら、「世紀の大逆転」でもなんでもなくて、日常茶飯事なんだけどねー。いやっ、そうでもないか。先手玉、相当寄らないから、レベルが低くても高くても、逆転はマジありえないかもしれない。

将棋の神様が「永世名人あいならん」といって、強引に力技で介入した感じでしょうか。

とにかく、各地の騒然振りをハイライトでお伝えしましょうか。

「それでは、今日のホームラン、いや、大逆転、いってみましょう！！」by 佐々木信也(ふるっ)

チャララ、ラッララー---

BS 中継より

島八段(やっぱり名解説です。)

「 1 九龍は驚愕の一手、形作りですね。」

「 5 五角で、百回中、百回投了ですね。」

「 2 五歩は、郷田さんも無意識のうちに手が出た感じなのでしょうね。」

「勝利が落ちてましたね。実力を超えた何かがありました。」

「 2 七歩は郷田さんへの贈り物ですね。」

「つくったようなことになっていました。」

「本当に一同ビックリ。」

「かかっていたものがとてつもない大勝負だからこそ起こった大逆転ですね。」

「郷田さんがよく心が折れなかったですね。」

「ドラマでした。」

上田女流初段

「このモニターは、ウソをついているんじゃないかと。」

「本当にビックリしました。18世名人が懸かっていた一局という状況を加味すると「世紀の大逆転」でも言葉は足りない程です。僕も動揺していて、うまいことが書けません。」

[「渡辺明ブログ」](#)「[名人戦は最終局に](#)」

「何ともいいようがない・・・。森内名人の心境いかにばかりかである。最終局はどちらが勝っても劇的な感じがする展開となったようだ。勝負の悲哀と美酒は紙一重なのだろう。」

[「森信雄の日々あれこれ日記」](#)「[劇的な結末](#)」

「考えられないような大逆転で驚きました。これが名人位の重みというものなんのでしょうか。久々に将棋の怖さを見た思いで、」

[「daichanの小部屋」](#)「[リフレッシュ](#)」

「将棋の恐ろしさを知ると共に、永世名人へのプレッシャーにも思いが及びます。」

「[遠山雄亮のファニースペース](#)」「[名人戦は最終局へ](#)」

「鳥肌たったし、泣きそうになった。あの場において、良かったと思います。多くの人とドラマを共有できて、とてもうれしかった。多少なりとも将棋を知っててよかったと思った。やめちゃわなくて、よかった。うまく書けないや。」

「[船戸陽子 blog](#)」「[6/15](#)」

「なんか間違えるように誘導する力が無理やり働いたような印象で、逆転するところはライブでみることができたんですが、感動とか興奮というよりはむしろ超常現象を見てしまったような思いです。」

「[せんずふるぐ](#)」「[あの名人にして](#)」

「騒然とする会場。千葉「このタタキがありましたか」、船戸「森内さんが頭たたいているわけですね？」（会場大ウケ / 現地検討陣の森内が失着に気づいて後頭部を叩いているというコメントに絡めたギャグ）」

「[Cablog](#)」「[大逆転でフルセットに 名人戦第6局](#)」

「野球で言うと5点差でランナーなし。ピッチャーは全盛時の大魔神佐々木。満塁ホームラン打っても届かない。それを逆ってしまった。」

「[メシを食べてふと思った](#)」「[感動、感動、感動.....](#) [ありえないことが起こる](#)」

Yahoo のブログ検索「名人戦」でかけたのですが、既に70近い記事が書かれていて、そのインパクトの大きさがうかがい知れます。っていうか、こんなに将棋のこと書いてるブログあるのか、まだ勉強不足だ。

最終局、再び島八段の名言に登場していただきましょう。

「技術を超えた人間力の、人間の強さの勝負を見たいですね。歴史に残る一番になると思います。」

森内防衛の場合、将棋の神様が「イジワルして悪かったけれど、苦労した方が喜びが大きいだろう、おめでとう」ということに。

郷田奪取の場合、全く現代風でないスタイルの名人誕生の快挙、苦労が多かった棋士へのご褒美、お父様のこともあったし・・・、ということに。

どちらが勝っても素直に祝福できそうではある。

絶対見逃せませんね、とか言いつつ平気で録画ミスしかねない私・・・



祝 森内第18世永世名人誕生！ 2007年06月30日

---

本題にはいる前に、私が棋聖戦第三局について書いたことを「渡辺明ブログ」「棋聖戦五番勝負第3局。」を見たうえで「振り返ります。」

「3二飛で分かりやすいゼット」

飛車を渡すと詰むそうです。

「後手の一手勝ちに」

6九金と受けられると難しかったそうです。トッププロより早く一手勝ちを「読みきってしまった」私。(結論)プロの将棋について安易なことを言っははいけません。

さてと、気を取り直して森内永世名人の話題に。

森内、「鋼鉄流」貫き十八世名人に

名人戦 激闘から一夜明け...森内名人「やっと楽に」

第六局が夢に出てきたというのが生々しいです。

いきなりオカルトめいたことを言うと、永世名人というのは将棋の神様が決めることだと思っています。羽生さんより早く森内さんがなったのは、「認められた」ということではないでしょうか。今回も色々ありましたが、やはり最後の五局では森内名人が完全に場を支配していたわけだし、長時間の名人戦でのとてつもない強さは、やはり誰もが認めるところでしょう。

永世名人になったからには、個人的には羽生さんの永世名人に対する高い壁となって立ちほだかってもらいたいと思います。名人戦では、やはり特に序中盤では、羽生さんも相当手を焼いていたという印象があります。羽生さんも、ベストの状態の森内さんを倒したうえで、もしなるのならばなってほしいと思います。そうでないと永世名人の価値がないというくらい名人戦の森内さんには凄みがあるので。難攻不落の森内18世名人であって欲しい、多分第六局でイジワルした将棋の神様の指令もそういうことではないでしょうか。

将棋の神様については、きよきよさんも[このようなことを書かれています](#)。

最初に羽生名人に挑戦して敗れ去った時のことも良く覚えています。あの頃でも、既に内容では押している部分もありました。でも、封じ手を時間直前にしたり、終盤でのミスなど、なんとなくひ弱さとか軽さのようなものをシロウトながら感じたりもしていました。今では別人のようです。闘志を前面に押し出すというのではないけれど、なにかにじっと耐え抜いているような対局姿は一幅の絵で重厚そのものです。修羅場を何度もくぐり抜けてきた者のみがかもつ強靭さ、懐の深さのようなものを感じます。本当に経験は人を育てるのだなあと思います。昔とのイメージの違いを考えるにつけ、自然に出来上がってきたというより、鍛錬を重ねることで血と汗でつくり上げてきた個性なのだろうとも感じます。

名人戦最終局がらみのブログ記事が既に百ほど書かれています！が、結構郷田さんを応援していた人間も多かったようです。現代の棋士とは一味違う彼の個性に惹かれたのでしょうか。名人戦を通じて感じたのは、やはり先崎さんの名評「雲のような男」ということでした。新たなファンも獲得できたのだから、またこれからでしょう。

森信雄先生は、当初からこの名人戦は二人とも応援したいといわれていました。最終局についても印象的な総括をされています。

「森信雄の日々あれこれ日記」「名人戦最終局」より

「やはり将棋は、盤上で戦う盛り上がりがいちばんいいなあと思う。9時間でも持ち時間が足りないような、白熱の戦いだった。終わったのがもったいないような、そんな名残惜しい名人戦だった。」

今日の囲碁将棋ジャーナル、加藤一二三先生と森内名人のダブル解説が見られて幸せでした。

えっと、まず加藤先生について書くことをお許してください。書かずにはいられません。

「ゆくゆくは、いはゆる普通のプロを目指す（女流の）人がいてもいいと思うのですが。でも、今の若い人たちについてはまったく知りません。」

マツタク、すごくいいことを言われるかと思えば、ちゃんとオチもつけたりして・・・。

中国に加藤先生が行かれた際に結構知られていたという話を聞いて「伝説が海外までも届いているのですね」(福井アナ)

「伝説」って、そういう表現使うかよ。なかなかよいです、福井アナ。

森内名人との解説。いつも感心するのは、加藤先生の場合、ちゃんにご自分で棋譜を並べて調べた上で意見を言われることです。8三角とか6六桂とかちゃんとの的を射ているし。情報化社会なので、色々それを仕入れた上での解説が大半なので、むしろ新鮮です。また、時間おして終盤を並べる加藤先生のあの手さばき、スピード。全然頭の回転も肉体も衰えていませんね。

「(名人を獲得したのは)昭和57年の42歳のときの7月31日の夜の9時1分です。」

何分まで正確に言われるところが「ザ・加藤一二三」です。いやはや。

さてと、森内名人に話を戻しましょう。羽生さんよりも早い永世名人獲得について聞かれていました。

「名人戦に関しては、羽生さんも私も四期ということで同じだったのですが、ただ他の棋戦の実績については、比べるとすごい差がありましたので、あまり競うという感じも持っていなくて、今でも自分でなってしまうても良かったのかな、というのが、そういうところがちょっとは残っているのですが。」

「今までの永世名人の方々のような絶対的な力はありませんので、大きな数字は残せないかもしれませんが、将棋の内容ですとか他の面で頑張って、自分の存在感を示せるようにやっていきたいと思います。」

これ聞いて涙が出そうになったのは、私だけでしょうか(笑)。本当に素直に正直に言われている感じがして、全然イヤミじゃないところが人徳だと感じました。

永世名人獲得、おめでとうございます。

いやー、ネット対局、加藤 vs 千葉戦、楽しかったです。

何より。ネット対局見てこんなにハラハラしたことありませんでした。だって、本当に加藤先生の時間が切れちゃうんじゃないかと、心配で心配で・・・。

感想戦で「残り2秒になっていて慌てました」だって。現場を見てみたかったなあ、すごい勢いで指したんだろうなあ。

まず、四間飛車に振って、棒銀を受けた千葉さん、偉い！加藤先生の 9八香、「一二三の玉手箱」で読んだばかりだったので感動しました。室岡六段との対局で、新手として指されたそうです。

こういう急戦で、気合良く仕掛けて、折衝してきりあう将棋って、やっぱり面白いと感じました。プロ対局では持久戦が多いので、新鮮で。「一二三の玉手箱」を読むと、いかに加藤先生が精魂込めて将棋を指しているか、芸術作品をつくるつもりで指しているのが改めてよく分かります。そうしてみると、加藤先生の一手一手に、いつも以上に集中して見る事が出来ました。

そもそも、最後まで熱戦のいい将棋というのが、珍しかったんです。最後も、千葉さんが 6一銀の手稼ぎから、 6八金でなく、 6九銀不成、 同玉、 5七銀の勝負手があったそうです。それに対する加藤先生のリアクションが・・・。

「うーっ とうなりますね」

「へへー なるほどね」

「おおー ほどけないですか」

「おおー 困ったもんだね」

「いやいやいやいや」

だって。きっと、勝ったからさぞ嬉しそうに言われてたんでしょうねえ。

昨日ちょっと紹介しましたが、加藤先生愛聴のモーツアルトのピアノ協奏曲 22 番をかけて、気合入れて応戦していました。なるほど、加藤先生が「心が弾むような喜々とした名曲」といわれているのは、多分第三楽章のロンド主題なんじゃないかと。確かにクセになりそうな魅惑的なメロディです。この曲、他の協奏曲と比べると有名でもないし人気もないみたいだが、加藤先生のオリジナルな「耳」は確かだと、変なところでも感服してしまいました・・・。

まあ、タイトルのようなメンバーなので、これは見るっきゃありません。観戦しながら書いてます。  
羽生先手で、谷川さんの後手一手損角換わり。羽生さんの対策は、端歩突きこし型右玉。実に良く見る形ですが、シロウトから見て、なぜ良く指されるのかがよう分からん戦法ではあります。

うーん、渡辺さん、実にマメに解説してくれています。

羽生さん、どんどんハイペースで指して、7筋、5筋の歩を交換。なるほど、こうなってみると、後手がどう動くのが難しそうですねえ。やっぱ、プロ的な戦術だという気がします。

と思ったら、谷川さん 6五歩 (A図) と自分から動きました。らしい。

A図 6五歩まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 | 飛 |   |   |   |   |   |   | 皇 | ▲ 羽生 |
|   |   |   |   |   | 馬 |   | 王 | 龍 |   | 角歩二  |
|   |   |   | 歩 | 龍 |   | 馬 | 歩 | 歩 |   | 三    |
|   | 歩 |   | 歩 | 歩 | 歩 | 歩 |   |   |   | 四    |
|   |   |   | 歩 |   |   |   |   | 歩 | 歩 | 五    |
| 歩 |   |   | 銀 |   | 歩 | 歩 |   |   |   | 六    |
|   | 歩 | 桂 | 歩 |   | 銀 | 桂 |   |   |   | 七    |
|   |   | 金 |   |   | 金 | 玉 |   |   |   | 八    |
| 香 |   |   |   |   |   |   |   | 飛 | 香 | 九    |

なるほど、1六桂をうたせて 4二玉と早逃げして、桂を目的に攻め駒を攻めるですか。谷川さん、こういう老獪な指し方を実は結構されるような気がします。

うーむ、2五歩とか、8六香とか、虚々実々の応酬だー。いいゾー。

うわー、羽生さん超辛抱の 2九角 (B図)。渡辺さんもビックリ。

B図 2九角まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 |   |   |   | 飛 |   |   |   |   | ▲ 羽生 |
|   |   |   |   |   | 馬 | 王 |   | 龍 |   | 桂歩五  |
|   |   |   | 歩 | 龍 |   | 馬 | 歩 | 龍 |   | 三    |
|   | 歩 |   | 歩 | 歩 | 歩 | 歩 |   |   | 香 | 四    |
|   |   |   |   |   |   |   |   | 歩 |   | 五    |
| 歩 | 香 |   |   | 銀 | 歩 | 歩 | 歩 | 歩 |   | 六    |
|   | 歩 |   | 歩 |   | 金 | 桂 | 馬 |   |   | 七    |
|   |   | 金 |   |   | 玉 |   |   |   |   | 八    |
| 香 |   |   |   |   |   |   |   | 角 | 飛 | 九    |

なんか、すごい攻め合いになっております。でも羽生さんが攻めさせられている感じがするんですけど。なんて、書いてみたら、竜王が「どちらが勝っているんでしょうか」と。形勢判断できてねー。

すごい迫力のある終盤です、谷川さんが 3 八桂成からキメに出たんですが、ずっとお互い角が当たった状態で延々と続いている。すごいことになっている。こりゃ名局だわ。

オオーッ。羽生さん 6 五銀 (C 図)、敵の (桂の) 打ちたいところに打てだ。

C 図 6 五銀まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 |   |   |   |   |   | 銀 |   |   | ▲ 羽生 |
|   |   |   |   | 平 |   |   |   |   |   | 金    |
|   |   |   | 歩 |   |   | 將 | 科 | 杏 |   | 銀    |
| △ | 平 |   | 平 | 平 | 王 | 平 | 平 |   |   | 歩    |
| △ |   |   | 進 | 銀 | 桂 |   |   | 平 |   | 金    |
| △ | 歩 | 香 |   |   | 歩 | 歩 | 歩 |   |   | 銀    |
| △ |   | 歩 |   | 歩 | 玉 |   | 桂 | 馬 |   | 歩    |
| △ |   |   | 金 |   |   |   | 角 |   |   | 金    |
| △ | 香 |   |   |   |   |   |   |   | 飛 | 歩    |

最後は、谷川さんが時間稼ぎをしながらも、見事に詰ましました。イヤーー、期待にすぐわぬ凄い将棋でした。ゴールデンカードの名に恥じない。谷川さん、やっぱり美しい将棋を指します。これで、きっと復調してくれるでしょう。

感想戦でもすごい手が出てきました。 5 五桂でなく 6 五桂！！ (D 図)

D 図 6 五桂まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 |   |   |   |   |   | 銀 |   |   | ▲ 羽生 |
|   |   |   |   | 平 |   |   |   |   |   | 金    |
|   |   |   | 歩 | 王 |   | 將 | 科 | 杏 |   | 銀    |
| △ | 平 |   | 平 | 平 |   | 平 | 平 |   |   | 歩    |
| △ |   |   | 進 | 桂 |   |   |   | 平 |   | 金    |
| △ | 歩 | 香 |   |   | 歩 | 歩 | 歩 |   |   | 銀    |
| △ |   | 歩 |   | 歩 | 玉 |   | 桂 | 馬 |   | 歩    |
| △ |   |   | 金 |   |   |   | 角 |   |   | 金    |
| △ | 香 |   |   |   |   |   |   |   | 飛 | 歩    |

これが 7 二銀以下の詰めろになっている。 同飛は 2 七角なので 同歩だが、 2 七角 7 八飛成 6 八金で、まだ難しいとのこと。これも見てみたかったナー。

役者が揃った大満足の一局でした。

さてと、問題の NHK 杯です。私は各地で騒がれるのを知ってから、昨日録画で見たので、そのせいで多分皆さんほど感動できなかったのが残念です (笑)。

やはり、これだけ盛り上がったのは、加藤一二三先生の力が大きかったといえそうです。そういえば、中倉さんはちゃんと千敗の記録についてもふってくれていました。加藤先生によれば、「少なくとも 150 敗くらいは逆転負けで、本当は負けていない」そうです (笑)。そうですよね。いくら長くトップだったから達成できた大記録だからといっても、ご本人とすれば、そんなに素直には喜ばませんよね。

しかし、詰みを発見したときの加藤先生はサイコーでした。お得意の「ウヒョー」もでたし。さてここで問題、あの場面で何回加藤先生は「アレ」といったでしょう (笑)。

それで、中川先生はどうすればよかったかですが、実は昨日ちょっと調べて記事を書こうと思ったら、すっかり深みにはまってしまいました。 3 八玉の場面 (C 図)、プロならすぐ勝ちきれるのでしょうが、少なくとも私レベルでは超難解です。

C 図 3 八玉まで

|     |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|     | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|     |   |   |   |   |   | 金 |   | 桂 | 皇 | 一 ▲  |
|     | 皇 |   |   |   |   |   | 玉 |   |   | 二 羽生 |
|     |   |   |   |   |   |   | 王 | 歩 | 卒 | 三 銀  |
| 三 卒 | 卒 |   | 歩 |   | 銀 | 卒 | 卒 |   |   | 四 桂  |
| 皇   |   |   |   |   |   |   |   | 卒 | 歩 | 五 歩  |
| 二 卒 |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 六 飛  |
| 卒   |   |   |   |   | 銀 |   |   |   |   | 七 三  |
|     |   | 皇 |   | 歩 | 歩 | 歩 |   |   |   | 八    |
| 川   | 角 |   |   |   | 金 | 玉 |   |   |   | 九    |
| 中   | 驥 |   |   |   |   |   |   |   | 香 |      |
| ▽   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |

まず、 9 八龍とするのは、先手に対する詰めろになってなく、 3 六桂と詰めろをかけ、対して 2 四香ぐらいですが 同桂がさらに詰めろ。どうすれば後手が勝つのか分かりません。

次に 3 九金 2 八玉をを入れておいてから 9 八龍に対しては 3 九玉としたのが後手への詰めろ。8 九龍としても 3 八玉で詰みません。

直言って全く調べ切れていませんが、驚くほど後手に詰めろがかかって、先手玉が詰まない変化が山のようにあるのです。

さてと、ここで思い切って平地に乱を起こすようなことを言ってみましょう。実は 3 八玉の時点で、既に逆転していたのではないかと。

まあ、さすがに今回は、「こうすれば後手勝ち」という変化を私がウツカリしているだけだと思います。どなたか強い方、お手数ですが教えていただけませんか (笑)。

3 八玉以降の変化を棋譜分岐ファイルにまとめてみましたので、興味がある方はご覧になってみてください。(但し、詰ます作業は東大将棋に任せていて、変な詰まし方していることがありますが、そのままのせてあります。)

### 3 八玉以降の変化ファイル (左下に分岐を選ぶ欄があります。)

さてと、薬の効用書ではありませんが但し書きを一応。

これは、弱いシロウトが勝手に変化を考えてみただけなので、正しいことを知りたい方は、必ず週刊将棋、近代将

(追記)

コメント欄でご指摘があり、アッサリ疑問解決しました。

3 九金 2 八玉 2 九金 1 七玉のとき 2 六歩とっておけば、後手玉は詰まず、先手玉が詰めるで  
後手勝ちでした。お騒がわせしました。

(10/17 追記)改めて、今日いただいたコメントをもとに記事を書きました。

最近こんな記事を書いたんですが、プロ将棋について勝手読みで書いてしまって、イヤな感じが残っていました。週刊将棋を読んでみて、ああ、やっぱり。自分の読みとは違うことが書かれていました。ところが、まだ疑問が解決していないのです。

まず、復習すると 7四角とうって、守りにもきかすわけですが、相手に金の持ち駒が残っていると 3八銀と手を戻しても、

同と 同角 同飛成 同玉 4九銀 2八玉 3八金 1八玉 2九角 までの詰みです。従って、さらに王手を續けて、なんとか金合いさせる必要があります。私が考えたのは 6一飛でしたが、正解は 7一飛 (A図) だそうです。

A図 7一飛まで



6一にうたないと到底詰みそうにないと思ったのですが、目的は詰ますことでなく金合いさせることなので、7一でよければそれにこしたことはないわけです。以下週刊将棋の説明手順は

7一飛 5一桂 2三角 4二玉 3二角成 5三玉 7三飛成 6三歩 3一馬 から後手の持ち駒を使わせて、手を戻せば先手勝ちというものでした。

確かに、3一馬に対して 4二金と合駒してくれれば、以下

3八銀 同と 同角

となって、先手玉は詰まないどころか、銀一枚の持ち駒では、詰めろを続け続けるのすら大変そうで、先手勝ちのように思えます。

ただ、4二金のところで、4四玉 (B図) と逃げてしまうとどうなるのかが分かりません。

B図 4四玉まで



|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   |   |   | 科 |   | 馬 | 科 | 皇 | 一 |
|   |   |   |   | 酒 |   |   |   |   |   | 二 |
|   |   | 龍 | 糸 |   | 糸 |   |   |   |   | 三 |
| 三 | 糸 | 角 |   |   | 王 | 糸 | 桂 | 糸 |   | 四 |
| 糸 |   |   |   | 糸 |   |   | 玉 |   |   | 五 |
|   | 歩 |   |   |   |   | 歩 |   | 歩 |   | 六 |
|   | 歩 | マ |   |   | 銀 | 銀 | 歩 | 金 |   | 七 |
|   |   |   |   | 玉 | マ | 酒 | 玉 |   |   | 八 |
| ▽ | 香 |   |   |   |   | 進 |   | 香 |   | 九 |

▲久保桂歩二

いろんな手順があって、ややこしいのですが、一例をあげると

4四玉 2二馬 3三桂 4五歩 同玉 4六銀右 5四玉 6六桂 5三玉 3一馬 4四玉 4五歩 同桂 2二馬 5三玉 3一馬 4四玉 2二馬 (C図)・・・以下繰り返しの連続王手の千日手になって、どうしても後手に金を使わせることが出来ないような気がするのですが。但し、この辺の手順は、全く自信ありません。

C図 2二馬まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   |   |   | 科 |   |   |   | 皇 | 一 |
|   |   |   |   | 酒 |   |   |   | 馬 |   | 二 |
|   |   | 龍 | 糸 |   | 糸 |   |   |   |   | 三 |
| 五 | 糸 | 角 |   |   | 王 | 糸 | 桂 | 糸 |   | 四 |
| 糸 |   |   |   | 糸 | 科 |   | 玉 |   |   | 五 |
|   | 歩 |   | 桂 |   | 銀 | 歩 |   | 歩 |   | 六 |
|   | 歩 | マ |   |   | 銀 |   | 歩 | 金 |   | 七 |
|   |   |   |   | 玉 | マ | 酒 | 玉 |   |   | 八 |
| ▽ | 香 |   |   |   |   | 進 |   | 香 |   | 九 |

▲久保なし

さらに、7一飛は、私も最初すこし調べたのですが、4二玉と逃げられた場合も実はよく分かりません。少なくとも、ソフトによると詰みはないようなので、金をなんとか合い駒させるしかないのですが、一例としては

7一飛 4二玉 5一角 5三玉 7三飛成 6三歩 6二角成 4二玉 5二馬 3三玉 (D図)と右辺に逃げ込まれると、詰まないし、金など全く使わずが出来そうにないのです。また、4二玉に5二角成 同玉 7四角 (4一角)も6二玉とかわされて続かないようです。

D図 3三玉まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 |   |   |   |   |   |   | 将 | 皇 | 一 ▲  |
|   |   |   |   | 馬 |   |   |   |   |   | 二 久保 |
|   |   | 龍 | 卒 |   | 卒 | 王 |   |   |   | 三 銀  |
| 三 | 卒 | 角 |   |   |   | 卒 | 桂 | 卒 |   | 四 桂  |
| 卒 |   |   |   | 卒 |   |   | 卒 |   |   | 五 歩  |
|   | 歩 |   |   |   |   | 歩 |   | 歩 |   | 六 二  |
|   | 歩 | マ |   |   | 銀 | 銀 | 歩 | 金 |   | 七    |
|   |   |   |   | 卒 | マ | 卒 | 玉 |   |   | 八    |
| ▽ | 香 |   |   |   |   | 香 |   | 香 |   | 九    |

(10/11 追記)この形で、実は詰みがあることが分かりましたので、[こちら](#)に書いておきました。

ということで、さらに疑問が深まりましたが、まあ月刊誌でも気長に待ってみようかと思えます。今回私が書いたことにも、間違いがいっぱいありそうなので、決して信用しないでください。ただ、プロの将棋の終盤を、あれこれ調べているだけでも、結構楽しかったです。もう、懲りて二度とやらないと思えますが(笑)。

[棋譜は女流王位戦のページで](#)

先手の石橋さんが、5筋突き型角筋止めず向かい飛車(でいいのかなあ)に。竜王戦第二局の後手番の佐藤さんと、すこし似ています。何かヒントがあったのでしょうか。

清水さんが右銀を早めに進出したために、早々に局面が動きました。石橋さんは馬を作りましたが、清水さんの 3三角打ちからの攻め筋が厳しくて、一目、弱いアマでも振り飛車をあんまり持ちたくない気がします。しかし、 5五歩が好手だったそうです。

5五歩まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
|   | 皇 | 科 |   |   |   | △ |   | 科 | 皇 | ▲ |
|   |   |   | ▲ |   | △ |   | 王 | 爵 |   | 一 |
|   | 卒 |   |   | 卒 | 卒 |   | 卒 | 卒 |   | 二 |
|   |   |   | 爵 | 卒 |   | 卒 |   | 卒 |   | 三 |
|   |   | 卒 | 卒 |   | 歩 |   |   |   |   | 四 |
|   |   |   | 歩 |   |   | 歩 |   | 馬 | 歩 | 五 |
| 皇 | 歩 | 歩 |   | 歩 |   |   | 歩 | 歩 |   | 六 |
| 卒 |   | 飛 |   | 銀 | 金 |   | 銀 | 玉 |   | 七 |
| △ | 香 | 桂 |   |   | 金 |   | 桂 | 香 |   | 八 |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 九 |

この手については、[渡辺明ブログ](#)で具体的に解説されていましたよね。あの竜王が見ても、一見どうかと思うが、実は良い手というのだからたいしたもの。「定跡にとらわれない」と表現されていますが、「常識」と言い換えても良いのでしょうか。とにかく、石橋さんの将棋は、自由奔放で見ていて面白いです。それだけに、今シリーズでもありましたが、つんのめったりすることもあります。とにかく、見ているものをハラハラドキドキさせてくれて、ファンにとっては心臓に良くない将棋です(笑)。「魅せる将棋」といえるでしょう。

その後の 7七歩も、棋譜解説では「これでは苦しそう」といわれていましたが、その後 6七金と力強くあがってみると、案外後手に有効な手段がないようです。やはり、この辺も、「パッと見の感覚」にとらわれずに、しっかり読みをいれて自分の感性を信じて指す石橋流が出ていたのかもしれない。

とはいっても、このあたりは石橋さんが好手順連発でしのいでいても、なんとなくまだ後手のほうに主導権があるようにも見えるのですが、どうだったのでしょうか。

石橋さんが、後手が8筋のと金攻めで飛車をとりに来るのを相手にせずに、 7五歩と突き出して勝負に出たのが、抜群に大局観が良くて、これではっきり良くしたようです。

7五歩まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 |   |   |   |   |   |   | 科 | 皇 | 一 ▲  |
|   |   |   | 遊 |   | 平 | 平 | 王 | 爵 |   | 二 石橋 |
|   | 歩 |   | 科 | 歩 |   | 歩 | 馬 | 歩 |   | 三 歩  |
|   |   |   |   | 爵 | 歩 |   | 歩 |   | 歩 | 四    |
|   |   |   | 歩 |   |   |   |   |   |   | 五    |
| 歩 |   | 歩 |   |   |   | 歩 |   | 馬 | 歩 | 六    |
| 歩 |   |   | 桂 | 金 |   |   | 歩 | 歩 |   | 七    |
| 飛 |   |   |   | 銀 |   |   | 銀 | 玉 |   | 八    |
| 香 | マ |   |   |   |   | 金 |   | 桂 | 香 | 九    |

後手は飛車をとりきって攻めに回るまでに手数がかかり、白玉は美濃で固い一方、後手玉は壁銀で薄く、これでも振り飛車が十分戦えるということなのでしょう。結果的に考えると、振り飛車のコンセプトに忠実な指し回しといえそうですが、これだけの大一番で、冷静で的確な判断を続けた石橋さんの底力は、ファンでなくても認めてくれるところでしょう。

その後は、はっきり石橋さんが良くなったのですが、全然あせりませんでした。 9二馬のあたりでも、もう自分など、早く勝って欲しくてたまらないので、 5五馬とひいて攻めてほしいところですが、本手順のように、落ち着いて7五の銀を取ってしまうのが、分かりやすいのですね。でも、これもなかなか実戦では、出来ないのではないのでしょうか。

9二馬まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   |   |   |   |   |   |   |   | 科 | 皇 | 一 ▲  |
|   | 馬 |   |   |   | 平 | 平 | 王 |   |   | 二 石橋 |
|   | 歩 |   |   | 歩 |   |   | 爵 | 歩 |   | 三 香  |
|   |   |   |   |   | 歩 | 歩 | 歩 |   | 歩 | 四 歩  |
|   |   |   | 爵 | 歩 |   |   |   |   |   | 五    |
|   |   | 遊 |   |   |   | 歩 |   | 馬 | 歩 | 六    |
| 歩 |   |   | 桂 | 金 |   |   | 歩 | 歩 |   | 七    |
| 飛 | マ |   |   | 銀 |   |   | 銀 | 玉 |   | 八    |
| 香 | マ |   |   |   |   | 金 |   | 桂 | 香 | 九    |

この後は清水さんが受けのために 8四桂と打つようでは、さすがに苦しすぎるのですが、このあたりから、私はもう落ち着きを完全に失いつつありました(笑)。とにかく、観戦している方でも、投了するまでは決して油断しないようにしようと固く心に決めて見続けていました。ファンはファンで、これでも大変なんです(笑)。

石橋さんの 3一金で局面の進行が止まり、対局室の映像も変わらなくなりました。いったい何度リロードしたことでしょう(笑)。そして、手順再生画面が、初手に戻り、最終手に局面を飛ばすと、赤い字で「石橋女流四段の勝ち」と。ライブでテレビ映像を見ているのとは、また違った感動がありました(笑)。

今回のシリーズは、総じて両者の気合が入りすぎて、やや指し手が空回りしがちだったといわれています。石橋さんについては、LPSA ヘタイトルをという悲願があるので、そういうところもあったでしょう。でも、清水さんについてはどうでしょうか。昨日も紹介しましたが、[事前のコメント](#)を見ても実に立派で、あまり団体の対抗というようなことは念頭になく、あるとすれば、今回は注目度が高かったので、女流としてよい棋譜を残さなければという意気込みが強すぎただけではないでしょうか。

つい、部外者は団体対抗ということを考えがちですが、色々な写真を見ていると、やっぱりこの二人は師弟なんだなあという感じがしました。私は強度の偏った LPSA ファンですが、この二人の戦いについては、あまりそういうことは気にならずに冷静に見ることが出来ました。個人的に石橋さんにタイトルを取らせてあげたいなあというだけで。

とにかく、今後女流にも、さらに注目度が高まるのではないかと思うので、望みは大きく、石橋さんにも、清水さんにも、本当に男子プロと互角に渡り合えるようになってもらいたいなあ、などと思いました。

囲碁将棋ジャーナルの解説は中原十六世永世名人でした。竜王戦第六局を解説したのですが、実にポイントを的確に捉えていて、短時間の限定があるにもかかわらず、将棋全体がとても良く理解できました。

3二金から、それ以上に驚いた相中飛車の発想。さらに 3三金からの金の華麗な舞を描いた構想力と、やはり佐藤さんの創造性が序盤では目につきました。

しかし、佐藤さんが 4五銀と反攻に出た以降の中終盤、と言うか、延々と続いた終盤が、実はちょっと見ただけでは分からないギリギリの名攻防だったようです。

4五銀で、 6三銀とどちらかで守るのは、やはり一方的に攻められるのがうるさいとのこと。攻めに出たのはやはり好判断だったようです。

ただ 8五銀ときめに出たのがやはり問題だったようで、 5七桂成のほうがベターだったとのこと。但し、それでもまだまだ難しいようで、要するに本来バランスが取れた局面だったということです。

4七歩に対して、 4八成桂ととらずに、いちど冷静に 2四角と引いておいたとしても、 6一銀として、以下 7一金 8四歩 同歩 同飛 8三歩 7三歩成 同銀 3四飛としておいて、 7四歩が残って厳しい。

4七歩まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | ▲ | 一 |
|   | 王 | 歩 | 銀 |   | 馬 |   |   |   | ▲ | 二 |
| ▲ | 歩 | 歩 |   |   |   |   |   | 歩 | ▲ | 三 |
| ▲ | 歩 |   | 歩 |   |   |   |   | 歩 | ▲ | 四 |
|   | 歩 |   |   |   |   |   |   |   | ▲ | 五 |
|   |   |   |   | 銀 | 馬 |   |   |   |   | 六 |
|   |   |   | 歩 | 歩 | 歩 | 歩 | 歩 | 歩 |   | 七 |
|   | 飛 |   |   |   | 角 | 金 |   |   |   | 八 |
| ▽ | 香 |   | 金 |   | 玉 | 桂 | 香 |   |   | 九 |

BS 解説では 3六桂の評判が悪かったのですが、あそこで 2八金を先に入れても、やはりなかなか寄らないとのこと。寄せそこなったように見えたが、佐藤さんもあの局面では一番難解な手順をひねり出してベストを尽くしていたということのようです。実際、 5二飛と 7七馬の詰めろをかけながら 7五角から逃げておいて、 8七銀と打った場面では、先手も相当対応が難しい局面。

本局で一番素晴らしい手だったのは 9八飛だったようです。竜王ブログで具体的に詳しく解説されていますが、飛車あたりになるのを承知の上で香を敢えて取らず発想が柔軟でした。竜王は、ここで少ない残り時間の全てをさいたのですが、一番大切なところでちゃんと時間を使ったことになるわけです。この延々と続く難しい攻防で最重要ポイントを逃さなかった冷静な判断が素晴らしいなあと思います。

9八飛まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | ▲ | 一 |
|   | 王 | 金 | 銀 | 飛 |   |   |   |   | ▲ | 二 |
| 皇 | 歩 | 桂 |   |   |   |   |   | 歩 |   | 三 |
| 歩 |   | 歩 |   |   |   |   | 歩 |   | 歩 | 四 |
|   | 歩 |   | 歩 | 皇 |   |   |   |   |   | 五 |
|   |   |   |   |   |   |   | 歩 |   |   | 六 |
|   |   |   | 歩 | 歩 |   | 歩 | 歩 |   |   | 七 |
| 飛 | 銀 |   |   | 銀 | 金 |   |   |   |   | 八 |
| 香 |   |   | 金 | 玉 |   | 歩 | 桂 | 香 |   | 九 |

▲ 渡辺 角銀桂二

佐藤さんの本当の敗着は 7七馬だったそうです。

7七馬まで

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   |   |   | 角 |   |   |   |   |   | ▲ | 一 |
|   | 王 | 歩 | 銀 |   |   |   |   |   | ▲ | 二 |
| 皇 | 歩 | 桂 |   |   |   |   |   | 歩 |   | 三 |
| 歩 |   | 歩 |   | 飛 |   |   | 歩 |   | 歩 | 四 |
|   | 歩 |   | 歩 |   |   |   |   |   |   | 五 |
| 飛 |   |   |   |   |   |   | 歩 |   |   | 六 |
|   |   | 皇 | 歩 |   | 歩 |   | 歩 | 歩 |   | 七 |
|   |   |   |   | 銀 | 金 |   |   |   |   | 八 |
| 馬 |   |   | 金 | 玉 |   | 歩 | 桂 | 香 |   | 九 |

▲ 渡辺 銀桂二

銀ではじかれて先手玉が鉄壁になった上に、直後の 7五桂が厳しくて、この後は竜王がやっとはっきり有利になったようです。一度 7一玉と催促して 4三角成 7四飛としておけば、まだまだ難しい戦いが続いていたとのこと。BS や、ネットを見ていると、素人の私は勿論、プロ棋士もつい早目早目に判断してしまっていたようですが、開戦したあたりから、小さいミスはあっても、ここまで延々と二人がバランスを取り合って戦い続けていたわけで、渡辺、佐藤とも、とてつもなく強いということなのでしょう。

その後も、落ち着いた 3七桂があったり、香や銀が拾える形になっていたのが竜王に幸いして順当に押し切りましたが、やはり勝つようにうまく出来ていたという印象も強く受けます。

本局については、将棋世界や新聞の観戦記をじっくり読んでみたいと、珍しく殊勝なことを思いました(笑)。

今シリーズを通じて、控え室の解説や形勢判断が、全くといいほど当たっていませんでした。見ているファンとしては「しっかりしてくださいよ」と思ってしまいましたが、本局をこうして振り返ると、やはり対局者二人の読みが、並外れて深く正確だったということなのではないでしょうか。お互い終盤の大きなミスが目立って、つい戦前の不調のイメージで見えてしまいましたが、内容自体はとても高度なシリーズだったということなのかもしれません。

渡辺竜王が、初めて竜王を獲得した頃にこのブログを書き出したのですが、当時渡辺さんは8五飛戦法の

スペシャリストの研究将棋とか無類のない勝負強さという印象はありましたが、本当の地力という面では、森内さんたちには、かすかにまだ届いてないかもという印象もありましたし、本人もある程度は認めていたと思います。しかし、こうして三年経過した本シリーズを見ると、完全に佐藤さん相手に互角かそれ以上に渡り合っていたという感じがします。読みの正確さと腕力の強さでは棋界随一の佐藤さんを、正々堂々と打ち負かしたといってもいいのではないのでしょうか。

特にこの第六局は名局で、もし第七局までもつれ込んで、さらに佐藤さんが本格的に復調し、渡辺さんもベストの状態でごつかり合ったら、どんなすごい将棋になっていたか、ちょっと見てみたかった気さえします。

勝ったから、こんなことを余裕で言われるイヤな渡辺ファンです(笑)。

最近、不思議と羽生、渡辺のタイトル戦がなかったわけですが、そろそろ将棋の神様も二人の対戦を許すのではないかと、そんなことを感じさせるシリーズでした。とりあえず、棋聖戦で大事なところでぶつかる可能性があるのが楽しみです。

最後に、これだけの名局を見せてくれた佐藤さんに敬意を表して、情熱大陸の告知をしておきます。三年前に竜王戦の最中に渡辺さんもこの番組で取り上げていたのが、なんとも因縁を感じるのですが・・・。

情熱大陸 佐藤康光 明日夜 11 時より TBS 系列で



さてさて、本日のハイライトのNHK杯。

私はこうして知ったかぶりして将棋ブログなど書いているわけですが、実はあまりに色々なことを知らなすぎます。長沼七段のNHK杯の対松尾戦の記事を書いた際、「駒G」という方から、指し手についてのコメントをいただきました。私は、てっきりどこかの強い方が教えてくださっただけだと思ったのですが、なんと長沼七段御本人らしいと後になって知りました。

長沼先生関連のKomatsuboというページを、その後知ったのです。御本人の駒取り日誌や、駒G応援掲示板があるのですが、その中でも面白いと思ったのは、駒取りチェック!というページ。長沼先生には、駒取りナントカというニックネームがあって、面白いことは面白いのですが、多分ご本人にとってはイヤなんじゃないだろうかと思っていました。しかし、こんなページを作って、シャレにして楽しんでしまっているのが、いかにも関西流でいいじゃないですか。ちなみに、実際私もやってみましたが、結果は「銀」でした。って言っても、どういう意味があるのか良く分かりませんが(笑)。

とにかく、プロ棋士の方が、わざわざこんなレベルの低いブログにおりてきて教えてくださっているというのに、いくら知らなかったとはいえ、タメ口で答えてしまっていた私は、相当恥ずかしいです。

ということで、私は羽生ファンなのですが、今回ばかりは長沼応援モードで観戦。いやー、すごい将棋でした。

後手の長沼さんかせゴキゲン中飛車、先手の羽生さんは、丸山ワクチン佐藤流端歩突きの流行の対策でした。5八金右をやるのは、久保さんのようにほぼ超急戦をしてくる相手に限るなど、対策も使い分けているのでしょう。長沼さんが、向い飛車に振りなおして、機を見て2五桂と歩をかすめ取るという、よく見る将棋に。そこで、羽生さんが打った6六角が、味わい深い一手でした。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 | 科 |   |   |   |   |   | 皇 | 皇 | 一 |
|   |   | 王 | △ |   |   | △ |   |   |   | 二 |
|   |   | 爵 | 卒 | 卒 |   | 卒 |   | 卒 | 卒 | 三 |
|   |   | 卒 | 卒 |   |   | 卒 | 爵 | 卒 |   | 四 |
|   |   |   | 歩 | 歩 |   |   |   | 科 |   | 五 |
| 卒 | 卒 | 歩 | 歩 | 銀 | 角 | 歩 |   |   |   | 六 |
|   |   |   |   | 金 | 歩 | 銀 | 歩 |   | 歩 | 七 |
|   |   | 玉 | 金 |   |   |   |   | 飛 |   | 八 |
| ▽ | 香 | 桂 |   |   |   |   |   | 桂 | 香 | 九 |

右辺はさらりと受け流して、玉頭から襲いかかるということのようで、やはりこういうところの構想力はさすがです。

一方、長沼さんは、桂捨てで先に駒損しながら(笑)、馬を作って、しっかり桂損を回収。その後、いよいよ羽生さんが玉頭から襲いかかる展開に。解説の阿部さんの口調から見て、どうも羽生さんがそのまま押し切りそうな雰囲気でしたが、ここからの長沼さんの決め手を与えない粘り強い指し回しが圧巻でした。前回の松尾戦の再現のようでした。

羽生さんも、阿部さん絶賛の、4八銀をじっくり攻めに参加させるプロ的な全ての駒を働かせる攻め方をしていました。しかし、長沼さんも、狭いながらも9三玉となった形が、結構抵抗力があったようです。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 | 将 | 銀 |   |   |   |   | 皇 | 皇 | ▲ |
|   |   | と |   | 圭 |   | 歩 |   |   |   | ▲ |
|   | 王 |   | 歩 |   |   | 歩 |   |   | 歩 | ▲ |
| 八 | 銀 | 歩 |   |   |   | 銀 |   | 歩 |   | ▲ |
| 角 | 歩 | 歩 | 桂 |   | 歩 | 銀 |   |   |   | ▲ |
|   |   |   |   | 銀 | 歩 |   |   |   |   | ▲ |
| 長 |   |   | 桂 | 金 |   |   |   |   | 歩 | ▲ |
| 沼 |   | 玉 | 金 |   |   |   |   |   |   | ▲ |
| △ | 香 |   |   |   |   |   |   | 飛 | 香 | ▲ |

さらに、羽生さんが必死に迫るのですが、5八角以下の手順でプレッシャーを与えておいて、7一馬とはずしたのが絶妙のタイミングで、ほぼ瀕死状態のように見えたのが、受かってしまいました。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   | 銀 |   |   |   |   | 皇 | 皇 | ▲ |
|   |   |   |   | 圭 |   | 歩 |   |   |   | ▲ |
|   | 王 |   | 歩 |   |   | 歩 |   |   | 歩 | ▲ |
| 九 | 銀 | 歩 | 歩 |   |   | 銀 |   | 歩 |   | ▲ |
|   | 歩 |   | 桂 |   | 歩 |   |   |   |   | ▲ |
|   |   | 歩 | 桂 | 銀 |   |   |   |   |   | ▲ |
| 長 |   |   | 桂 |   |   |   |   |   | 歩 | ▲ |
| 沼 |   | 玉 | 金 | 金 |   | 飛 |   |   |   | ▲ |
| △ | 香 |   |   | 銀 |   |   |   |   | 香 | ▲ |

しかし、羽生さんも、あの手この手で迫り続けるのですが、長沼さんの8一飛が、受けにも攻めにも効いている、素晴らしい一手だったようです。阿部さんも「しぶといですねー」と、感心しきりでした。攻めても攻めてもしっかり受けとめられるという感じだったのではないのでしょうか。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 | 飛 |   |   |   |   |   |   | 皇 | ▲ |
|   |   |   |   | 銀 |   | 歩 |   |   |   | ▲ |
|   | 王 | 銀 | 歩 |   |   | 歩 |   |   | 歩 | ▲ |
| 十 | 歩 |   |   |   |   | 銀 |   | 歩 |   | ▲ |
|   | 歩 |   | 桂 |   | 歩 |   |   |   |   | ▲ |
| 角 |   | 歩 | 桂 | 銀 |   |   |   |   |   | ▲ |
|   |   |   | 桂 |   |   |   |   |   | 歩 | ▲ |
| 長 |   | 玉 | 金 |   |   | 飛 |   |   |   | ▲ |
| 沼 |   |   |   | 金 |   |   |   |   | 香 | ▲ |
| △ | 香 |   |   |   |   |   |   |   | 香 | ▲ |

その後、さすがに羽生さんもついに攻めきれなくなって、最後は完全に体を入れかえての勝ち。実に力の

こもった名攻防でした。感想戦で 8 一飛の場面をやっている、羽生さんにも他の攻め方があったようではあります。しかし、とにかく長沼さんの受けが強靱無比だったということでしょう。

対局前、駒を並べるところでは、羽生さんと長沼さんが、一つ一つ交互に丁寧に並べていたのも、ちょっと印象的でした。長沼さんは、落ち着きはらっていて、全然相手に飲まれていない感じで。

最後に、羽生さんが投了した際の、長沼さんのお辞儀の角度がすごかったこと(笑)。ほとんど、畳に頭がついてしまうのではないかと思いました。やはり、プロでも羽生さんに勝つというのは、特別にうれしいことなのでしょうね。

これで、来期のシード権も獲得。次も楽しみです。

一日経って、さすがにかなり冷静を取り戻しております。

昨日自分が書いたことを改めて見て思う。人は酒だけでなく。本当に将棋に酔ってしまうことがあるのだと。完全に酔い痴れている。私の場合は、「痴」のしめる割合が、人より若干高めなだけのことである。

[asahi.com : 羽生、50年に1度の大逆転将棋名人戦2勝1敗に - 将棋](#)

[将棋 : 羽生が激戦を制し2勝目名人戦第3局2日目 - 毎日.jp](#)

特に朝日の方は「50年に一度の大逆転」が刺激的である。これには、プロ棋士が反応しており、[渡辺竜王](#)は「これくらいの逆転は、よくではありませんがあることなので『100年に一度』は大げさな」と、[片上五段](#)は「『50年に一度の大逆転』という声もあるようですが、個人的にはそこまでとは思いません。」と冷静に述べている。

もともとのこの表現は、深浦王位の発言が元になっている。余計なお世話だが、深浦王位を勝手に擁護してみる。以下は、基本的にネット中継に書かれていた事実に基づくが、深浦氏の心中部分等は、完全に私の創作である。

記者 羽生さんが勝った場合の原稿が必要なんですが、なんて書けばいいでしょうか？

深浦 えっ、羽生さん勝ちですか。(苦笑、まあ絶対にありえないことだしな)じゃあ100年に一度の逆転劇とでもしておきましょうか(一同笑)

で、実際に局面が進行し、本当に羽生さんが勝ってしまったわけで。

記者 さっきのタイトルでよろしいんでしょうか

深浦 (弱ったな、アレは冗談だったのに、でも一応言っちゃったことだし)うーん、まあ、じゃあ50年に一度の逆転劇ということでカンベンしてください。

というような感じだったんじゃないかと推測するのだが、いかがだろうか。叩き売りも真っ青なくらい、年数が半減しているし。まあ、深浦さんも、現実的には、それほどの逆転でないことは承知しているのだろう。いや、それを受けてそのまま表現を借用した、弱いアマの私だったそれくらいは分かっている。例えば、名前を出して申し訳ないが、ネット最強線の矢内千葉戦などは、純粋な逆転度ということでは、本局など比較にならないくらいすごかったし。他に探せば、いくらでもあるのだろう。

ただ、この重要な名人戦で、森内が喰らって、羽生がすごい逆転の仕方を見せて、流れの反転ぶりが劇的だったために出てきた表現ということだろう。「言葉のアヤ」といってしまえば、身も蓋もないのだが。

さて、肝心の将棋。その深浦さんが、序盤を評して「30代にしか味の出せない、20代には指せない将棋」と評していた。確かに、本当にきめ細やかな神経戦は、見ていて疲れるくらいだ。でも、完全にそういう将棋になると、やはり森内ワールドだということを本局は証明したのではないだろうか。

8六歩から 8五歩の突き出し、 8七玉 9七角から 7四歩、さらに 5七金から 7八飛への転換。つくってもこうはできまいという完璧な構想力である。

もし勝っていれば、森内の生涯会心局となるはずだった将棋が、ああいう結末になったのは、まったく皮肉

としか言いようがない。

それにしても、本局での羽生さんの辛抱は、「おしん」も真っ青だった。4五銀に、激しく行く順もあるのに、成算がないと見て我慢した。その後作戦負け模様になった際も、一応攻めていく手段はあったようだが、角飛車を何手もかけて動かして、大きく形勢を損ねないようにした。さらに、7二歩とか6二金は、まさしく受けただけの手で、本来羽生さんが最も嫌う手のはずだ。2四角とでて歩を打たせてバックしたのもつらすぎる。

名人があのままうまく指し続けたら惨敗になったので、必ずしも正しい判断だったとはいえないかもしれないが、あまりに相手が耐え続けすぎると、局面が動いた際に、名人がやや攻め急いで、それまでのペースが乱れたという心理面は、無きにしてもあらずといえるのではないだろうか。

それを、名人に書ける執念の粘りといいたいところだが、実は棋王戦でも、佐藤さん相手に耐えられないような辛抱を続けて、最後猛烈に追いつけた(結果は負けたが)という将棋があった。こういう将棋が、もともと指せる、というか、場合によっては指すことを厭わない棋士なのだろうか。

ところで、なぜ羽生さんは逆転できたのか。直接的な原因の点は、森内名人が8六桂を見落としたからだが、その点にいたるまでの線、流れが、弱い私にはよく理解できていない。少なくとも、色々あって4五金と打たれた時点では、私(羽生ファン)は「もう駄目だ」と思った。終盤では何度もそう思ったのだが、一番強くダメだと思ったのはあの時点だ。ところが、結果的には両取りの飛車にも銀にも逃げられて、角金交換したが、角頭の守りの弱点を解消することになってしまった。あのへんなのだろうか、具体的にはどの手が悪いのかが分からない。

しかし、昨日も書いたが6九銀は羽生流だった。ああいう僻地に金銀を打つのは羽生さんのお家芸である。相手が入玉していて、自分の持ち駒も豊富ではなく、しかも駒を取れるところを、一番欲しい「金」という駒を追い回して入手できる手段。後から振り返れば実に合理的なのだが、あの急転直下の逆転模様の場面で、冷静に盤面全体を見てああいう手を指せるのは、やはりすごいと思う。はっきり言って、私はあの一手で、「泥酔状態」に陥ったのだが、プロや強い人たちは、どう見たのだろうか。

「羽生マジック」というのは、有名すぎるわりに、ちゃんとした意味を実は誰も知らないという奇怪な言葉である。羽生が指したからそう言われる、程度の意味しかない。また、マジックと言いながら、実は種も仕掛けもないという手だったりする。

6九銀を、思い切って「羽生マジック」と私は図々しく呼んでしまおう。「後から冷静に考えると、実に理にかなった当然の手なのだが、実際の生きた局面の流れの中では、一見変わっていたり奇異に見えるような手」というのが、一応ここで私が提出する「羽生マジック」の定義である。

あの一手を、私同様「羽生マジック」と呼んでいるブログ記事を紹介して終わりにする。羽生の絵が描かれているのだが、対局中に羽生からでてくる不思議なオーラがうまく表現されているのではないだろうか。

Habu Magic! - はんどろやノート

羽生には二つの顔がある。恬淡とした盤上の真理追求者、将棋という専門分野における超一流のエンジニア、世俗のことには一切関わらず研究に没頭する科学者、将棋の神に禁欲的に仕える聖職者、将棋を他ジャンルとのことと交錯させて考え、独特の比喻能力を駆使して表現する一流の批評家。

そういう超俗的で理知的で冷静な羽生とともに、実は人間的な勝負師としての顔もあわせ持つ。特に、近年はそういう勝負師的な側面は表面には出ていなかったのだが、今回の名人戦では、羽生らしくごく自然な形で表に出てきていた。

但し、勝負師といっても、自らそのことを自覚して、相手との駆け引きを意識して仕掛けるというタイプではない。むしろ、ほとんど生まれながらに無意識に、羽生の中に勝負師の魂のような生き物が棲息していて、ここぞという時に本人の意思とは関係なく、ひょっこり顔を出してくるという感じがする。だから、「つくった」勝負師よりも、もっと本質的で自然な凄みがあるのだ。

古い話だが、順位戦のプレーオフでの「上座事件」というのがあった。名人挑戦をかけて谷川と戦った際に、先輩で当時はやはりまだまだ格上感が強かった谷川をさしおいて、堂々と上座に鎮座した。谷川は黙って我慢して受け入れたのだが、そういう心理面で押されたのが影響したのか、羽生が勝利をおさめることになる。

普段は、闘争心満々に相手を挑発するようなことはまずないので、そういうごく稀な行為が突出した印象を与える。今回は、久々にそうした勝負師としての顔を見せてくれた。

特に本局の第六局は、本当に気合がすごかった。[この動画](#)を見ても、その表情の険しさに驚くし、直前の棋聖戦を現場で見た梅田望夫氏も、[このように証言](#)されている。また、羽生のことをもっともよく知るといっても良い[谷川先生も](#)、やはり同じことを感じておられたようである。

毎日の大盤解説会を担当した勝又六段は、本局二日目の、羽生のピンと立った寝癖を見逃さなかった。[Cablog](#)さんが様子を伝えてくれているのだが、「寝癖がはっきりついているというのは、対局以外のことを全く気にしていない証拠」だというのが、プロフェッサーの分析である。勝負に徹しているのだ。

また、終盤に 7 五金という、絶対に負けませんよ、もうアナタに勝つ方法などありえませんが、と相手に冷酷に宣告するような手を指した。毎日の解説会を、[即席の足跡さんも伝えてくれている](#)のだが、勝又六段は「積年の恨みをはらす」と表現したそうである。第一局の、二連続玉引きもそうだったが、やはりいつもにも増して、羽生は勝負に厳しかったというのは確かだろう。

前日の駒の選択でも、ちょっとした「事件」があった。四種類の駒があり、どれも天童ならではの名品で。両対局者は選びかねていたそうである。ようやく二つに絞り込んだのだが、羽生が口を開いて片方の駒を選ぶように主張したそうである。[動画も残っていて](#)、決して険しい雰囲気というのではないのだが、一応その場では「上位」の森内名人をさしおいて主張したところに、羽生流のほとんど無意識からほとぼり出てくる勝負師魂を感じたといったら強引過ぎるかもしれないが。前局までは、森内名人を立てて従っていたそうである。「上座事件」の、穏やかでちょっとした再現だと思った。

恐らく、羽生は「ナチュラル」な勝負師なのだ。

それにしても、本局の羽生の「銀」の動きはすごかった。3八 2七 3六 4五 3四 4五 5六 4七 3五 2四という、銀の大航海航路。特に、ひとたび4七にバックさせて、攻めに使う構想は本局のハイライトであり、いかにも羽生らしい柔軟性が出たところである。

羽生の「銀」については、[梅田氏のコラム](#)が記憶に新しいところである。本シリーズでも、第一局の 6 二銀と引いた構想、第三局の 6 九銀の僻地への筋悪な銀打ちが、そのあと生き物のように中断まで戻ってきて大活躍したのがあった。

特に羽生の銀の場合は銀が「バック」したときに凄みがある。「銀」は前進と後退、攻めと受けがともに可能な駒である。いかにも万能型でバランスの取れた羽生にふさわしい駒だという気がする。

ゴダールに「右側に気をつける!!」という映画があったが、「羽生の銀に気をつける！」

森内も、後手番ながら苦心の構想で 9 二角の遠見の角を放ち、と金を作ったあたりでは、やや森内ペースという控え室の雰囲気だったようである。しかし、鮮やかな銀の繰替えで、羽生は攻めの理想形を築いた上で、自玉も鉄壁に固めてしまった。

本シリーズでは、羽生の随一の快勝完勝譜だろう。実は、これだけスッキリ勝ったのは、本局が最初だったといえるのではないだろうか。

それだけ、森内が羽生を苦しめたということである。名人戦以外では、森内は絶不調だった。それでも、名人戦ではこれだけの戦いをしたのだから、いかに、二日制の長時間の将棋に向いているかということである。第5局でもそれまでの戦い方を捨てて、早めに動いて終盤に時間を残す戦い方に転換した。もし、最初からそういう戦いに徹していたらどうなっていたか分からない。というか、あの第三局の大逆転さえなければ、まだ終わっていなかったかもしれないのだ。結局、いくら名人戦が自分の庭の森内でも調子が悪くて羽生を負かすのはきつかったという、極めて平凡な事実だけが残る。

森内は、対局後、モノポリーなどに興じて気を紛らわそうとしたそうである。Beaver さんにいただいたコメントを読むと、2003 年の名人戦の再現で、ちょっと切ない。

この将棋の後日談を島九段から聞いたことがあります。千日手局の感想戦もお開きになって、関係者がやっと眠れるかという時に森内「前」名人が、「眠れないので、始発の新幹線で帰りたい」と言い出し、まさか失意の前名人を一人で帰すわけにもいかないのに、島さんが付き合うことに。意外にも新幹線通勤で込み合う始発の東海道新幹線が東京駅に着いて、やれやれこれでようやく寝れると思ったところへ、森内「前」名人が、「麻雀を打ちませんか」とのお誘い。「こういう時に付き合うのが仲間というものだろう」と思って一緒に麻雀を打ったとのこと。(もう一人の面子は森内さんが電話で呼び出したとのこと)「なぜか森内さんは早朝からやっている雀荘を知っているんですね」と島九段は感心していました。

局後の共同会見で羽生が森内との将棋を振り返ってこう述べていた。「一局一局が重い、根比べに負けられないようにした、第一局を踏まえて最後まで集中力を切らさないようにした」等々。

これだけレベルの高い二人が、じっくり戦うと、簡単な手段では勝負はつかないということなのだと思う。現在は多少長くても時間制限のもとで指しているし、場合によっては、本来成立しない筋で勝負がついていることも、たとえプロでも結構多いのではないだろうか。さらに、将棋を突きつめてレベルアップしていくと、簡単にバランスが崩れそうで実は形勢がかたよっていない将棋、梅田氏の表現を借りると「均衡の美」が、綱渡りのように延々と保たれる将棋がみられるようになるのかもしれない。

共同会見で、羽生はプロとして将棋を指していく行為を「マラソン」に喩えていた。「走り続けることが大切だ」と。今日はハッシー、あさってはヤスミツ、走り続けるしかないのだ。

[対局直後の動画](#)を見ると、さすがの羽生も感極まっているように見える。我々将棋ファンは、対プロ棋士を神話化するゲームに夢中になりがちだ。(オマエは特にひど過ぎるというツッコミは謹んで甘受します。)将棋の技術で一般人と隔絶して超人的なのはおもかくとして、勝負に対しても神のような意志と強い心であたっていると考えてしまいがちだ。特に、私は羽生や渡辺を、自分にはないものを全て兼ね備えた精神的ヒーローとしてつい理想化しすぎてしまう。しかし、当たり前だが、彼らだって生身の人間なのだ。渡辺が竜王に初挑戦してそのまま奪取した際、いかにも度胸がすわって堂々としていてファンを驚かせたもし、歓喜もさせた。しかし、竜王を奪取した直後は、やはり、渡辺も感極まって言葉が出てこなかったのをよく覚えている。今回の羽生を見て、あの時のことを思い出してしまった。やっぱり、この二人の戦いが観てみたい。将棋の神様は、その点に関しては、一般ファンをじらしすぎだ。ネット対局ですら決着を見せるのを許してくれない。この二人は散々戦った末に、決着をつけるものだと思っていたが、どうやらそうではないらしい。いきなり、大舞台での大勝負を、将棋の神様は準備しているのではないだろうか。お互いに永世竜王をかけた、とんでもない舞台を。





しかし、こういう見た目が悪い手が、実は後から考えると最善を尽くしているというのが羽生将棋。ここで、 2 三歩と攻め合うと深浦良しだったそうですが、本譜のように 3 四馬とひいて、 2 六角をいじめて完封、と考えるのも無理ないところなのではないでしょうか。深浦さんも、さすがにあのあたりでは「この将棋はいただいた」と思っていたはずなので、なるべくリスクは犯したくないという意識が働くのも自然でしょう。それを見越したかのような 4 二歩。羽生さんとしては、最善の粘りをしているだけなのでしょうが、結果的にはマジックのように見えてしまいます。

実際には、 3 四馬と引いた時点で、既に将棋が一気に難しくなっていたというのだから驚きです。以下、羽生さんの飛車が一気にさばけ、さらに深浦玉への強襲に成功し、後手玉への脅威になっていた馬も抜くことが出来、一気に逆転したように見えました。

しかし、実はまだ深浦さんが残っていたそうです。

図で、 3 九にいた玉を 2 八玉と逃げたのを見たら、プロでなくても、ある程度腕に覚えのあるアマなら「えーっ」と絶叫してしまうでしょう。なぜなら、あまりにも先手玉が危なすぎる形だからです。ここでは、冷静に 4 九銀としておけば、残していたようです。



なぜ深浦さんが、こう逃げたのかが不思議なわけですが、以下は単なる推測をしてみると、当然 4 九銀から考えたが、そのうち何かイヤな筋が見えて、玉逃げで残せる筋が浮かんで時間に追われて「エイッ」とやってしまったのかもしれない。また、ずっと勝勢だった将棋が急におかしくなって、平常心を失ってしまっていた可能性もあります。

以下、さらに深浦さんが自ら頓死を喰らってしまいました。

あの名人戦第三局の 8 六桂ほどのインパクトはありませんが、深浦さんクラスの一流棋士としては、 2 八玉は恐らくそれに近いレベルのポカなのではないでしょうか。

それにしても、なぜ羽生さんばかりが、このようなとんでもない逆転勝ちをするのでしょうか。森内さんも深浦さんも、我々素人から見れば、神の中の神レベルの人たちです。そういう人たちが、羽生さんにはこんなひどい目にあってしまう。

本当に、羽生さんは恐ろしい人です。

竜王戦中継サイト

生で佳境の終盤部分を見ることが出来たのですが、いや堪能しました。将棋のネット中継というのは、一度はまるとプロ野球やサッカーなどのテレビ観戦などよりも、よっぽど興奮しますよね。オリンピックも同時に見っていますが、あくまで二次鑑賞に過ぎません。

という、模範的な？将棋ファンなのですよ。私は(笑)。

さて、以下はあくまで私がどう楽しんだかの観戦記に過ぎず、あまり客観性は無いかもしれないことを最初にお断りしておきます。基本的に私はメチャクチャ大げさに騒ぐタイプだをご承知おきください。多分、強い人たちほど、もっと冷静な見方をしているはずですよ。

戦形は、「通常」の角換わりに。一手損角換わりよりも、より定跡研究が深く隅々までされていて、安易には指せない形です。かつては、この形のスペシャリストでは、丸山さんや谷川先生などは、先手でこの形、特に本局の相腰掛け銀になれば、ほとんど必勝というイメージがありました。また、先手が一方的に攻めることが多く、後手が守勢一方になりがちという印象も強かったです。かつての矢倉と似たところがあります。

しかし、最近は、そう簡単に先手が勝てるという感じではなく、後手の対策が進んで来ているようです。それも矢倉と似ています。

丸山 vs 羽生でも、去年の順位戦で、羽生さんが後手を持って勝っています。やはり、羽生さんは、相手を見てどの戦形を選ぶか考えているのでしょう。何でも指せる羽生さんだからできることなのですが、但し、基本的には研究将棋なので、研究の深さに定評がある丸山さんにぶつけるのは、特にこういう大きい将棋では勇気がいると思うのですが、そういうところで踏み込んでくるのも羽生さんらしいところです。

先手が 2九飛と引くのは、割と古い形で、実戦も多く研究され尽くしているはずなのに、まだ分からないというのが将棋の深いところ。ゴキゲンの 5八金右急戦でもそうですが、基本的には将棋は簡単には研究しきれないものなのでしょう。少なくとも、現状では。

どうも先手の攻めが細いように言われていましたが、さすがに丸山さんもなんだかんだと手をつないで、この局面に。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 |   |   |   | 馬 | 銀 |   |   | 王 | ▲ 丸山 |
|   |   |   |   |   |   |   |   | 桂 | 皇 | 一    |
|   |   |   |   |   | 歩 | 金 | 金 | 金 |   | 二    |
| 三 | 歩 |   |   |   |   |   |   | 桂 | 歩 | 三    |
| 四 |   | 歩 | 歩 |   |   |   |   | 桂 | 歩 | 四    |
| 五 |   |   |   |   |   |   |   | 桂 | 歩 | 五    |
| 六 | 歩 |   |   |   |   |   |   |   |   | 六    |
| 七 |   | 歩 | 銀 |   | 歩 |   |   |   |   | 七    |
| 八 |   |   | 金 |   | 金 |   |   |   |   | 八    |
| 九 | 香 | 桂 | 玉 |   |   |   |   |   | 香 | ▽ 羽生 |

この後は、先手は 3二金から 3三馬の狙いが分かりやすい。何より後手玉は逃げ場がありません。いわば、自玉には確実に爆発する時限爆弾が仕掛けられている状態です。したがって、その攻めが来る前に、羽生さんは丸山玉を攻めなければいけないのですが、上部開拓も見えていて、素人目には羽生さんが大変

そうだなあと思ってしまうところです。

ところが、個々からの羽生さんの手のつけ方粘り方がすごかった。まず、先手玉に尻金で王手をかけておいての 3 一歩。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 |   |   |   | 馬 | 銀 | 歩 |   | 王 | ▲ 丸山 |
|   |   |   |   |   |   |   |   | 桂 | 皇 | 一    |
|   |   |   |   |   |   | 歩 | 龍 | 歩 |   | 二    |
|   | 歩 |   |   |   | 歩 |   | 龍 | 龍 |   | 三    |
| 王 |   | 歩 |   |   |   |   |   | 桂 | 歩 | 四    |
| 歩 |   |   | 銀 |   |   |   |   |   |   | 五    |
| 玉 | 歩 | 桂 |   | 歩 |   |   |   |   |   | 六    |
|   |   | 金 |   |   |   |   |   |   |   | 七    |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 八    |
| ▽ | 香 | 龍 |   |   |   |   | 龍 |   | 香 | 九    |

羽生さん自身の感想によれば、この歩は受けなかったほうがいいそうです。ただ、私が注目したいのは、こうして攻めておいて一転受けて手を渡すということを羽生さんが繰り返すことです。

さらに、6九飛成だと4五桂で決まるので、苦心して一度3八龍と引いて歩を受けさせてからの、3六龍の二段モーション。さらに、わざわざ近づけて打つ6四角。銀で受けると、後手から強襲する順が生じるそうです。丸山さんもさすがに看破して桂を受けると、玉頭にアヤをつけて迫ってきます。この辺のやり取りは、迫力満点で息を呑みました。

但し、結局羽生さんが龍を逃げなくてはならなくなりました。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 |   |   |   | 馬 | 銀 | 歩 |   | 王 | ▲ 丸山 |
|   |   |   |   |   |   |   | 歩 | 桂 | 皇 | 一    |
|   |   |   |   |   |   | 歩 | 龍 | 歩 |   | 二    |
|   |   |   |   |   | 歩 |   | 龍 | 龍 |   | 三    |
| 王 |   | 歩 | 皇 | 銀 |   |   |   | 桂 | 歩 | 四    |
| 歩 |   |   | 銀 |   |   |   | 龍 |   |   | 五    |
| 玉 |   | 歩 | 桂 |   |   |   |   |   |   | 六    |
|   |   |   | 金 | 歩 |   |   |   |   |   | 七    |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 八    |
| ▽ | 香 | 歩 |   |   |   |   |   |   | 香 | 九    |

これも、感想では羽生さんが玉頭に手をつけたのは、上部に逃がしてやり過ぎだったそうです。但し、丸山さんにしてみれば、あの羽生さんにこのように、あの手この手で怪しくせまられたら、相当精神的にも疲労したのではないのでしょうか。で、最後にひょいと龍が逃げます。羽生さんからすれば、やむにやまれず逃げただけなのでしょうが、結果的には攻めたり引いたり、丸山さんを疲れさせる指し方になっているように感じました。

とはいえ、ここでは丸山さんが、あとはどう決めるかだけという感じの局面。持ち時間も、しっかり残してあったようです。5一の馬は、受けにきかしておきたいところですが、普通に攻めて行くのでは受けが生じるので、いきなり馬切りから行くのは、こわいけれども正解だったようです。

進んで、丸山さんが飛車を打って詰めろをかけたのに対して、羽生さんが7三角と詰めろ逃れの詰めろをかけたところ。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   |   | 飛 |   | 銀 | と | 皇 | 王 | 一 |
|   |   |   |   |   |   |   |   | 科 | 皇 | 二 |
|   |   |   | 馬 |   |   | 歩 | △ | 歩 |   | 三 |
|   |   |   |   |   | 歩 |   |   | 爵 |   | 四 |
| △ | 歩 | 歩 |   | 銀 |   |   |   | 科 | 歩 | 五 |
|   | 玉 |   | 銀 |   | 歩 |   | 驥 |   |   | 六 |
|   |   | 歩 | 桂 |   | ▲ |   |   |   |   | 七 |
|   |   |   | 金 | 歩 |   |   |   |   |   | 八 |
|   | △ |   | 歩 |   |   |   |   |   | 香 | 九 |

こちら辺では、実は私などは興奮してしまいました。「おお、こんなところで、詰める逃れの詰めるが、出たかマジック、羽生逆転か」と。でも、これは弱い素人の悲しいところ。冷静に考えれば、これくらいの詰める逃れの詰めるなら、羽生さんでなくてもどんなプロでも一目でしょう。また、羽生さん自身は、その後の展開まで読んでいて、この手ではどうしようもないとして、ガッカリしたように指したそうです。冷静に見ていた控え室も、ちゃんとその後の展開まで見えていました。

ところが、この後ドラマは起こりました。丸山さんが、 9七玉と逃げたところ。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   |   | 飛 |   | 銀 | と | 皇 | 王 | 一 |
|   |   |   |   |   |   |   |   | 科 | 皇 | 二 |
|   |   |   | 馬 |   |   | 歩 | △ | 歩 |   | 三 |
|   |   |   |   |   | 歩 |   |   | 爵 |   | 四 |
| △ | 歩 | 歩 |   | 銀 |   |   |   | 科 | 歩 | 五 |
|   |   |   | 銀 |   | 歩 |   | 驥 |   |   | 六 |
|   | 玉 | 歩 | 桂 |   | ▲ |   |   |   |   | 七 |
|   |   |   | 金 | 歩 |   |   |   |   |   | 八 |
|   | △ |   | 歩 |   |   |   |   |   | 香 | 九 |

これだけはやってはいけないという手を丸山さんが指してしまいました。先手玉に詰めるがかかっている以上、とにかく何か受けるしかありません。 8三金でも、香車を王手でとって 7五香でも受かっていたそうです。どちらも、特に妙手というわけではありません、とにかく必然的に詰めるを受けただけの手。特に、がっちり金を打って、場合によっては入玉してしまうのは、普段の丸山さんなら、得意中の得意のはずです。それが、一番あぶない逃げ方をしてしまった。

魔がさしたとしか言いようがないでしょう。前局の深浦さんも、最後に逃げてはいけないあぶない玉の逃げ方をして、勝負をフイにしてしまったばかりです。それが、こんな大事な将棋で二局も続いてしまった。棋譜解説によれば、どなたかが「何か(羽生さんに)憑いているようだ」といわれたそうですが、誰もそう感じたことでしょう。

少し強引に心理面と結び付けて考えると、羽生さんの相手を疲れさせる指し方によって、対戦相手は最後にはすっかり消耗してしまうというのは、もしかしたらあるかもしれませんが。

また、丸山さんの投了が、素人には少し早かったのも興奮を高めました。「えっ、丸山さん、投げたの」と。解説によれば、もう指す手が無いそうですが、羽生さんも驚かれたそうなので、やはり少し早いのではな

いかと思います。丸山さんは、時々こういう潔い投了があって、銀河戦でも、渡辺竜王相手に投了が敗着というのがありました。朝日杯の決勝でも、行方さん相手に急に投げていました。

丸山さんは、よく激辛流といって、厳しい勝ち方をするといわれますが、結局あれは、プロ意識を持って確実に勝てる順を選んでいるだけということなのでしょう。プロ意識が徹底しているので、指しても仕方ない場面では、いきなり投げるといったことなのではないかと推測します。丸山さんは、本当に独自のプロ意識を持った棋士だと思います。

とはいえ、丸山さんにとっては、まさしく痛恨の一局。

気の早いファンは、羽生の竜王挑戦で決まりだと思っているでしょうが、木村さんもそういう世論を感じて、最高に闘志を燃やしていることでしょう。何よりあれだけ高い勝率を上げ続けているというのは、とにかく力がある分かりやすい証拠。どうなるか、まだまだ分かりません。

ちなみに今週の週刊将棋を見たら、一二年の新人を除いて、現在通産勝率が七割を超えているのは、もう羽生さんしかいません。最高に強い相手だけとずっと戦い続けてこの数字。

やっぱりバケモンです。

「出雲のイナズマ」記念すべき初戴冠 倉敷藤花第二局 清水倉敷藤花 vs 里見女流二段  
2008年11月24日

先週の囲碁将棋ジャーナルで、倉敷藤花の第一局を行方八段が解説していた。清水さんが作戦勝ちしたが、里見さんが粘り強く受けながら、相手の飛車を召し取って攻めを間に合わせ、最後は逆に大差をつけて堂々と勝ちきった将棋だった。

行方さんは、里見さんの将棋を「相手との間合いをはかるのが非常にうまい、実戦的な嗅覚がすぐれている、男性で言うと鈴木八段のような感じ、今までの女流にはいなかったタイプ」と評していた。鈴木八段は天才型の棋士で、なかなか真似しようと思ってもああいう将棋は指せないのではなからうかと思うのだが、里見さんも、やはり持って生まれた才能を感じさせる将棋を指すと思う。

第二局は、里見先手で中飛車に。私自身、プロの流行の影響を露骨に受け、四間飛車党から中飛車党に転向したので(汗)、個人的にも興味のある戦形である。

先手中飛車の常套手段で、居飛車が飛車先を交換しても、素直に歩を受けないで 7七桂としたのに対し、清水さんが 8九角と踏み込んできたところ。



実は、この局面について、少し形は違うが最近出版された「鈴木大介の将棋 中飛車編」(マイコミ)も取り上げている。鈴木八段のおすすめも実は里見さんの指した 6八金と逃げて、敢えて飛車に成りこませる順である。

以下、鈴木本に解説してあるのとほぼ同手順に 6八金 8八飛成 6五桂 4二銀 7七角 7八角成 8八角 6八馬とすすんだ。

先手中飛車の場合、左金をどう使うかで常に苦労するのだが、こうしてその金が飛車と交換できれば、振り飛車側としてはうれしいのではないだろうか。里見さんも中飛車中心だから、当然鈴木本も読んでこの順を知っていたものと思われる。清水さんも同様だろうが、敢えてこの順に踏み込んできたのだろうか。振り飛車としては不満がないとしても、形勢自体は難解な分かれということのようである。

ただ、序盤にまだ課題があるといわれる里見さんとしては、こうして互角かそれ以上の分かれに持ち込めたのは、やはり大きかったのではないだろうか。

以下難しい形勢の将棋が続いたそうだが、清水さんが端の急所に手をつけたものの、いったん持ち駒の貴重な金を打ちつけさらに 7一步とかたく打って守りに回った場面。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |        |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |        |
|   | 龍 |   | 香 | 香 | 香 |   |   | 香 | 皇 | ▲ 一 里見 |
|   |   |   |   |   |   | 香 | 香 | 王 |   | 二      |
|   | 香 |   | 馬 |   | 歩 | 香 |   | 香 |   | 三 香    |
|   |   |   |   |   | 香 | 香 | 香 |   | 歩 | 四 歩    |
| 一 |   |   |   | 香 | 香 |   |   |   |   | 五 二    |
| 二 |   |   |   |   |   | 香 |   | 桂 | 香 | 六      |
| 香 | 歩 |   |   | 歩 |   |   | 歩 | 歩 |   | 七      |
| 皇 |   | 角 |   |   |   | 銀 | 銀 | 玉 |   | 八      |
| ▽ | 香 |   |   |   | 金 |   |   | 桂 | 香 | 九      |

金を手放してくれたので、先手としても少し安心だが、しかし後手も鉄壁の守備陣を築き上げて、「さあ、どうするのだろう」という局面。なんと、ここで里見さんは 9五馬から 6八馬と、自陣にひきつける順を選んだ。私はこのあたりをネットで生観戦できたのだが、twitter で、興奮してこのようにつぶやいている。

うわー、この里見さんの馬の二段引きは高校生ではない(笑)。でも、これ先手、負けようがなくなっただんじじゃないですか。

指されてみると後手玉も金銀がたくさん張りついているが何しろ攻撃力不足で、先手がものすごくよく見える。ああいう実戦の生きた局面でスッと手が伸びるのがすごいと思う。行方八段の言うように、実践的な将棋、局面のどこがポイントかを柔軟に把握する嗅覚が優れているのだろう。私は、鈴木八段以外に、相手玉との距離感の計測が絶妙な広瀬五段の将棋を連想してしまった。

あとは、里見さんの一方的な将棋になったそうである。ただ、その後も本当に全然あせらなかった。落ち着き払ってさらに差を大きく広げていき、間違いなく寄せきれるところで踏み込んで勝ちきった。男女プロの将棋を見比べていると、その実力差以外に、将棋の性質の違いを誰しも感じることがあるだろう。違いが性差によるものなのか、常に別の集団で指しているからなのかは分からないが、とにかく異質などころがあるのは間違いない。

しかし、里見さんの将棋を見ていると、ほとんど男性プロとの感覚の違いを感じない。それは、恐らく彼女が主にネットで実戦経験をつんできて、目に見えない男性の強豪と日常的に戦ってきたとのが、やはり大きいのではないかと思う。そういう意味でも、ネットの存在価値は大きい。目に見えない相手と指すネット将棋は、男女の性差を消失させるのだ。

里見さんには、もっともっと強くなってもらいたいというのがファンの願いだろう。現在は、女流のプロは男性棋戦に参加する機会が多く与えられている。そういう機会に単なる「ゲスト」でなく、本当に男性棋士の脅威になってもらいたいものである。

一方、負けた清水さんはこのようなコメントを残したそうである。

「今回は里見さんのいいところが出た。終盤の強さはもちろん、対局態度もしっかりしている。頼もしい後輩です」



負けたら一番つらいであろう相手に対してこのようなことが言えるのは、やはりすごいことなのではないだろうか。

決勝にふさわしい名局になって堪能した。

先手森内で、相振り飛車に。先手向い飛車、後手三間飛車で、後手の羽生が 3 筋の歩を交換してきた

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 | 科 |   | 平 |   |   |   | 科 | 皇 | ▲ 森内 |
|   |   |   |   | 王 | 平 |   | 龍 | 馬 |   | なし   |
|   | 歩 | 歩 | 龍 | 歩 | 歩 | 龍 |   | 歩 | 歩 |      |
|   |   |   | 歩 |   |   | 歩 |   |   |   |      |
|   |   |   |   | 歩 |   |   |   |   |   |      |
| ▽ | 歩 | 歩 | 角 | 銀 | 歩 |   | 歩 | 歩 | 歩 |      |
|   |   | 飛 |   |   | 金 |   | 銀 |   |   |      |
|   | 香 | 桂 |   |   |   | 金 | 玉 | 桂 | 香 |      |

藤井九段の相振りの本を読んでいると、3 筋の歩を交換してくると先手は高美濃矢倉銀冠から自由選べて損な意味があるという考え方もあるようだが、羽生は平矢倉から一つ玉を横に移動して囲いを省く形にコンパクトにまとめて、とにかく先攻していこうという作戦だったのだろうか。とにかく、相振りというのは指し方の幅が広い。定跡が以前と比べれば整備されてきたとはいっても、まだまだ新たな指し方の可能性があるのだろう。

その羽生の足早な攻めに対する森内の受け止め方がすごかった。受けるにしても、とにかく強気に形にこだわらずに相手の攻めを力で押さえ込んでしまおうという指し方。 2 六歩と受けて、相手が歩をついて攻めてくるのも堂々と受け止める。渡辺竜王が解説していたように後手からは角打ちの筋が色々あって気持ち悪いが、 4 八玉と玉自ら相手の攻めを封じにかかる。さらに、悩ましい 3 六歩にも形にこだわらず 3 六同金寄とすると、流石の羽生もどう攻めればよいのかという局面になった。森内の剛直な受けに、さすがに羽生も手を焼いている感じだった。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 | 科 |   |   |   |   |   | 龍 | 皇 | ▲ 森内 |
|   |   |   | 王 | 平 | 平 |   |   |   |   | 歩三   |
|   | 歩 | 歩 | 龍 | 歩 | 歩 |   | 角 |   | 科 |      |
|   |   |   | 歩 |   |   |   |   | 歩 | 歩 |      |
|   |   |   |   | 歩 |   |   | 歩 | 龍 |   |      |
| ▽ | 歩 |   | 歩 |   | 銀 | 金 |   |   |   |      |
|   |   | 歩 |   |   | 歩 |   |   | 銀 | 歩 |      |
|   |   |   |   | 飛 |   | 玉 | 金 |   |   |      |
|   | 香 | 桂 |   |   |   |   |   | 桂 | 香 |      |

さらに、 3 二銀と押さえ込まれ、羽生も暴れるが銀損の攻めで、流石にそのあたりでは、はっきり森内が良いのだろう。しかし、羽生もなんだかんだと手をつないで差を広げない。少しぼんやりしたような 8 五桂のような攻めでも、成り桂を作ってじっと寄っておくといやらしい。続いて、 5 六歩から森内玉の

頭上に金銀が並ぶ形になった時は、むしろ羽生が有望になったかと渡辺竜王。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 | 科 |   |   |   | 飛 |   |   | 皇 | 一 ▲  |
|   |   |   | 王 | 丕 | 丕 |   | 銀 |   |   | 二 森内 |
|   | 歩 | 歩 | 龍 | 歩 |   |   | 馬 |   | 科 | 三 角  |
|   |   |   | 歩 |   |   | 歩 |   |   | 歩 | 四 桂  |
|   |   |   |   | 歩 |   |   | 金 |   |   | 五 歩  |
| 歩 |   | 歩 |   |   |   |   |   |   |   | 六    |
|   |   | 歩 |   | 銀 | 丕 | 丕 | 歩 |   | 歩 | 七    |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 八    |
| 香 | 桂 |   |   | 玉 |   |   | 飛 | 香 |   | 九    |

しかし、森内も銀を見捨てて玉がスルスルと端へ逃げ込むと、羽生もなかなか寄せが見つからない。このあたりのどちらかに傾きそうでも持ちこたえる両者の攻防だけでも、既に見ごたえ十分だった。しかし、本局はこの後がすごかった。

森内がどうやら羽生の攻めをしのいで 5五角と攻防に打ったあたりでは、また森内優勢がはっきりしてきた。しかし、羽生も 1五角から 3七角成を見せ樂にさせないが、森内はここできめに出た。

図が本局のハイライト。森内が 5二金と迫ったの対して、羽生が 9四歩と、スツとついたところ。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |      |
|   | 皇 | 科 |   |   |   |   |   |   | 皇 | 一 ▲  |
|   |   |   | 王 | 丕 | 金 |   | 銀 |   |   | 二 森内 |
|   |   | 歩 | 龍 | 歩 |   | 龍 |   |   | 科 | 三 金  |
|   | 歩 |   | 歩 |   |   | 歩 |   |   | 歩 | 四 歩  |
|   |   |   | 歩 | 角 |   | 金 |   |   | 馬 | 五    |
| 歩 |   | 歩 |   |   |   |   |   |   |   | 六    |
|   |   | 歩 |   | 丕 |   |   | 歩 |   | 歩 | 七    |
|   |   | 玉 | 龍 |   |   |   |   |   |   | 八    |
| 香 |   |   |   |   |   |   |   | 飛 | 香 | 九    |

5二金自体は詰める。端がついてないとわりと容易に詰む。先手玉は何か駒が入れば詰むが、とてもそうなりそうにはない。ところが、端を一つ突いただけで、詰むかどうかがちまち怪しくなるのだ。詰まなければ駒を渡してしまうので、先手玉が詰まされてしまう。こんな手を秒読みで指された方はたまらないだろう。実際森内も間違えたのである。森内だけでなく、渡辺も流石に短時間では詰みを読みきれなかったようである。

図では 6二金とすればよかった。 8二玉とすれば詰まないようだが、それだと後手に駒が入らないので 6三金ぐらいで一手一手だろう。 6二金を 同玉と取ると、以下の手順で詰む。(古い東大将棋で調べた手順をそのまま書くが、もっとスマートな順もあるかもしれない。)

6一金 (同玉は 6三龍以下詰み) 7二玉 5二龍 6二桂 同金 8二玉 7三角成 同桂 6三金 9三玉 8二銀以下詰み

こう書くとさほど難しい詰みではないように思えてしまうのだが、やはり秒読みでこんな手を指されたら



## 名人戦棋譜速報

七局も立て続けに戦うと、純粋な将棋の技術の勝負の要素以外に、人間的な総合力の戦いの様相を呈してくる。羽生が、局後の共同記者会見で、次のように述べていた。(無料の[名人戦動画](#)で会見の様子を視聴可能。)

必要以上に慎重にならないように、ということをお心掛けしました。

特に時間がたくさんあるので、たくさん考えてしまうとついゆっくり指したくなるというか、手堅くいきたくなくなるというのがあるので、踏み込むところは踏み込むということをお大切にしていました。

これは、去年の森内との名人戦でも感じたことだが、激しく変化があっても、ものすごく深く掘り下げた末に見送るケースが見受けられた。それを、年齢による成熟とか、そう簡単に将棋は決まらないものだという将棋観によるものとも解釈できる。しかし、そうは言っても、早い段階で全てを読みきるのは不可能なので、場合によっては、有効な手順を逃してしまう危険性も伴う。この羽生の言葉は、「踏み込むべき」という側面について強調しているが、「慎重に指す」事とのバランスを考慮した上での発言と取るべきだろう。慎重に行き過ぎてもまずいし、かといって無鉄砲に踏み込んで危険。だが、名人戦のように、持ち時間が長い上に、とても重要な対局では、「慎重」にバランスが傾きがちなので、「踏み込み」を意識的にしてバランスをとるということなのではないだろうか。

実際、終わりの方の二局で、羽生は言葉通りの指し方を見せた。最終局では 4六歩の思い切った構想が見事だった。解説によると角が狭くなり、ちょっと見ると攻めが軽いので、プロ的には思いつきにくいし、実際にも指しにくい意味合いがあるらしい。他にも無難な定跡手順もあるのだが、敢えて羽生は新構想に「踏み込んだ」わけである。

一つ負ければ、名人失冠のピンチで、普通なら萎縮して手が伸びなくなるところを、羽生は意識的に「踏み込んで指す」ように心がけた。理にかなっている。但し実行するには、強靱な精神力がいりそうだ。追い込まれた状態で、羽生は対局に臨む心理的態度でも「正しい指し手」をきちんと選んでいたようである。一方、郷田はこの 4六歩を全く想定しておらず、初日の段階ではっきり作戦負けを意識していたとのこと。そこまでは仕方ないにしても、その後郷田は必要以上に悲観的になっていたような気がする。

感想によると、羽生が 3五銀と出たあたりで、もう駄目だと思っていたようである。実際、先手が良いことには間違いなさそうである。しかし、NHKの二日目の夕方のBS中継によると、実は先手が良さそうで、なかなかはっきりした具体的な順が見つかっていなかった。渡辺竜王が解説で、ゲストに先崎八段、杉本七段を呼んで、猛烈な勢いで具体的な手順を検討していたが、先手良しどころか、攻め間違えると後手が良くなる順が次々に出てきていた。勿論、対局者の読みが一番深くて正確なのだろうが、プロがよってたかって調べても簡単には分からないのだから、少なくとも簡単に諦めるような局面でなかったのではないだろうか。具体的には、1五角で 4七歩、1九角成でなく 3六角成、さらに夕食後も 3四歩に対して 3四同銀でなく、4四銀とかわしておく手順など。解説のニュアンスでは、それでも先手が良くなるはずなのだが、決して簡単ではないということだった。

これは推測に過ぎないが、郷田は全く予期せぬ 4六歩による作戦負けを意識し、なおかつ一方的に攻められる順になってしまったので、精神的に疲れ果てて、必要以上に形勢を悲観してしまったのではないだ

ろうか。また、七局も同じ相手と戦い、なおかつ相手が羽生、決して疲れがないとはいえない状態で望んだ最終局だったはずなので、いきなり出鼻をくじかれて、緊張の糸が切れて精神的にポッキリ折れてしまったのではないだろうか。少なくとも、第六局で、本局以上に苦しいとされていた将棋を辛抱を重ねて白熱の終盤戦に持ち込み、後一步まで追い詰めたのは、まるで別人のようだった。

最後の収束部分も、驚くべき淡白さだった。例えば最後の 4 三步では、香車を打てば一応長引くのに、もう勝ち目がないので早く楽にしてくださいと首を差し出すような手である。渡辺竜王が指摘しているように、羽生はその直後の 6 一角で、初めてはっきり勝ちを意識したのだろう。実際、BS の映像では、この手の瞬間に羽生の手はかすかに震えていた。

あの最後のあたりでも、解説の渡辺は先手良しとはしながらも、まだ難しいところもあるとして、真剣に検討を続けていた。その辺の諦めない執念が、竜王戦の奇跡の防衛の源だったのかと思った。こうして今回の名人戦を見ていて、改めて羽生相手に渡辺が竜王戦でなしとげたことの凄さを再認識せざるにいらなかったのである。

だから、この最終局では、郷田の将棋の技術よりも、精神的な面での崩れを感じずにはいらなかった。但し、今書いたことは、衛星放送の解説を見た印象で書いていて、もしかすると対局者本人の形勢判断が正しくて、早い段階で既に勝ち目がなかったのかもしれない。その辺は、これから出てくる記事類で正確なことが分かるだろう。

また、同じ精神面のことで言うと、やはり郷田の第六局での陽動振り飛車の採用も気になる。郷田は、たまに陽動振り飛車を指すようで、いわば裏芸である。だから、指したら完全におかしいというわけではないのだが、名人を奪取できるかという時に、自信を持って採用できる作戦かどうかと言うと、やはり疑問符がつくのではないだろうか。それだけ、郷田は後手番での作戦に苦慮していたともいえるが、羽生の立場からすると、いつも通りに堂々と矢倉を受けられた方が、むしろ嫌だったのではないかと思う。こうして、傍で言うのは簡単だが、ああいう精神的にギリギリに追い込まれたところで、普段通りに行動して力を発揮するのは、きっと大変な精神力がいることなのだろう。

そういう意味でも、最初に紹介した羽生の言葉は凄いと思う。将棋の技術だけでなく、メンタル面のコントロールでも、羽生は並外れているのだろう。オリンピックの臨時コーチに呼ばれる資格は十二分にあると思う。

将棋の内容自体では、郷田は羽生に全く引けを取っていなかった。こんなに面白くてスリリングでハラハラドキドキする終盤戦がな何局もあったシリーズは、最近なかった。羽生も、郷田をこう評している。

非常に細かいところまで考えているというか、きめ細かいところまでフォローしているなというのが指した率直な感想ですね。競った将棋はすべてギリギリの対局で、郷田さんの読みの深さを感じました。

だからこそ、今回最終的に勝敗を分けたのは、将棋の技術以外の要素だったような気がして仕方ないのだ。

今回は、最終局で普段以外の時間帯にも放送があった。夕方 7 時くらいのオンエアより。放送に入ったとたんに、急にバタバタと手が進んだ。聞き手は色紙に「笑顔が一番」と書いていた熊倉さん。

熊倉 はやいですね。この放送を意識している？

渡辺 いやいや、放送は意識しないです。

と渡辺が言った途端に、またしても手が進んだ。

熊倉 ほらっ。

渡辺 いや、ほらって。

こういう細かいところも楽しむのが将棋観戦の極意である。(ちがいます

竜王戦第三局は、通常角換わりで先手を持って指せると考える森内と、いや後手を持って指せるという渡辺が真正面からぶつかり合う、いわば思想対決の様相を呈した。意地の張り合いのように前例のある将棋を猛烈なスピードで辿り、初日の封じ手時点で、既に二日目の夕方のような局面になっていた。森内の封じ手が新手で、金をそっと逃げておく意表の手。いかにも用意周到に準備し、満を持しての一着という感じで、森内に見れば、渾身の研究手であり、シリーズの流れを変える会心の一手になるはずだっただけではないだろうか。しかし、その後に森内に予定変更があったこともあり、渡辺の堂々とした対応と切れ味鋭い寄せによって粉碎されてしまった。渡辺の充実ぶりがうかがわれる一局であり、単なる一勝という以上に、勝ち方の内容という点でも大きな意味を持つ一局であったように思われる。

ところで、終盤に渡辺が放った 7九銀が、控え室にいたそうそうたるプロの面々も気がつかなかった名手で、その場にもいた谷川の光速流のようだと評された手である。ところが、実は twitter でプロ将棋の解析をしている GPS 将棋がこの手を指摘していた。そのことを twitter で指摘していた人も数名いたし、またこのブログにもまとめられている。

将棋の神様～0と1の世界～ 第22期竜王戦第3局：将棋ボット三強による終盤の読み筋まとめ

ここでは、さらにもう少し具体的にプロとソフトの比較をして簡単にまとめてみよう。残念ながら私自身に指し手自体を分析する力はないので、表面的なデータの対照に過ぎないことをあらかじめお断りしておく。データとして使わせていただくのは以下の通りである。

第22期竜王戦中継サイト

NHK BS の阿部八段の解説

GPS の twitter

Bonanza の twitter

大槻将棋の twitter

93手目森内 3三角の局面

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
|   | 皇 |   |   |   |   |   |   |   | 王 |   |
|   |   | 飛 |   |   |   |   |   |   |   | 皇 |
|   |   |   | 桂 | 馬 | 歩 |   | 角 |   |   |   |
|   | 歩 |   |   | 歩 | 全 |   | 歩 |   |   |   |
| 六 |   |   | 歩 |   | 龍 |   | 馬 | 歩 |   |   |
| 五 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 四 | 歩 | 歩 |   | 歩 |   |   |   |   |   |   |
| 三 |   |   | 銀 | 歩 |   |   | 桂 |   |   |   |
| 二 |   |   | 金 | 金 |   |   |   |   |   |   |
| 一 | 香 | 桂 | 玉 |   |   |   | マ | 香 |   |   |

▲ 森内  
金歩



プロの検討例 8七歩 同金 3九飛 4九歩 2三銀でどうか。

GPS の読み [(93) 3三角] -595 3九飛 4九歩 同飛成 8八玉 7九銀 9八玉 6八銀成 同金 3八龍 7八金打 7六歩 (136sec)

いきなり 3九飛と打つ手を当てている。ただ、プロの検討では以下 8八玉 8七歩 9八玉とされた時にどうすればよいか分からないということであった。また、GPSは 4九歩と中合いして飛車の守りを消す手を考えている(それだけでも凄いと思う)が、この順はBSで阿部八段も言及してして、ここで中合いすると堂々と取られて先手は歩切れになって 2三歩と垂らす手がなくなってしまうので無効だと解説していた。先に 8七歩としてもらうと、既に一步手に入れているので中合いしても、まだ歩が残っていて攻めに使えるということである。

ちなみに、ここでGPSが余計な 4九歩を途中に入れてしまっているものの、既に 7九銀を指摘していることにも注目したい。

94 手目渡辺 3九飛の局面

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   |   |   |   |   |   |   | 王 | ▲ |
|   |   | 飛 |   |   |   |   |   |   |   | 皇 |
|   |   |   | 桂 | 金 | 歩 |   | 角 |   |   |   |
| ▲ | 歩 |   |   | 歩 |   | 全 |   | 歩 |   | ▲ |
|   |   |   | 歩 |   |   | 龍 |   | 角 | 歩 |   |
| ▲ | 歩 | 歩 |   | 歩 |   |   |   |   |   | ▲ |
|   |   |   | 銀 |   | 歩 |   |   | 桂 |   |   |
|   |   |   | 金 | 金 |   |   |   |   |   |   |
| ▲ | 香 | 桂 | 玉 |   |   |   | 飛 | マ | 香 | ▲ |

プロは前述の通り、このように先に飛車を打つと 8七歩 9八玉の時の後手の手が分からないとしている。この時点でも 7九銀はどのプロも見えていない。

GPS の読み [(94) 3九飛] -741 8八玉 7九銀 同金 8七歩 7八玉 7六桂 6九銀 6八桂成 同銀上 7六歩 2二歩 (39sec)

このようにこの時点でGPSのみが驚くことに正しい手順で渡辺の名手 7九銀を指摘していたのだ。ちなみに Bonanza と大槻将棋は 7九銀でなく先に 8七歩を入れるように推奨していて、それで後手が十分指せるという形勢判断である。さらに、形勢判断ということでは、この辺りではまだプロもはっきりしたことをいえてないが、どのソフトも二日目が始動して数手の時点で既に後手の渡辺優勢という判断を早い段階でしている。数値化しての判断なのではっきりさせざるをえないのだが、興味深いところである。

95 手目森内 8八玉の局面

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   |   |   |   |   |   | 王 |   | ▲ |
|   |   | 飛 |   |   |   |   |   |   | 皇 |   |
|   |   |   | 桂 | 金 | 歩 |   | 角 |   |   |   |
| △ | 歩 |   |   | 歩 |   | 全 |   | 歩 |   | ▲ |
|   |   |   | 歩 |   |   | 銀 |   | 馬 | 歩 |   |
|   |   |   | 銀 |   | 歩 |   |   | 桂 |   |   |
|   |   | 玉 | 金 | 金 |   |   |   |   |   |   |
| △ | 香 | 桂 |   |   |   |   | 飛 | 又 | 香 | ▲ |

プロの検討は前手と同じ状態。

ここで GPS は読みを変えてしまっている。[(95) 8八玉]-634 8七歩 9八玉 8八銀 4九歩 3八飛成 2三金 3一玉 2四角成 7七銀不成 同桂 7六桂 (171sec)

7九銀でなく 8七歩を第一候補に変更している。プロは 9八玉とされた時に分からないと言っているわけだが、GPS はこの順で後手良しと言っているわけである。どうなのだろうか。どちらにしる、人間と違って「分からない」で済まさずに必ず潔く読み筋を示してくれるのがコンピューターのありがたいところと言えるだろうか(笑)。

ちなみに大槻将棋もこの筋を読んでいる。

95 手目 8八玉まで(後手優勢) [-1287] 8七歩打 9八玉 8八銀打 7九歩打 7九銀 8七金 6八成銀 2三歩打 3二金打 2二金打 2二金 2二と 2二飛 6八銀 1九成桂 2二馬 2二玉 4五成銀

96 手目渡辺 7九銀の局面

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |   |
| ▲ | 皇 |   |   |   |   |   |   | 王 |   | ▲ |
|   |   | 飛 |   |   |   |   |   |   | 皇 |   |
|   |   |   | 桂 | 金 | 歩 |   | 角 |   |   |   |
| △ | 歩 |   |   | 歩 |   | 全 |   | 歩 |   | ▲ |
|   |   |   | 歩 |   |   | 銀 |   | 馬 | 歩 |   |
|   |   |   | 銀 |   | 歩 |   |   | 桂 |   |   |
|   |   | 玉 | 金 | 金 |   |   |   |   |   |   |
| △ | 香 | 桂 | 銀 |   |   |   | 飛 | 又 | 香 | ▲ |

ここに至ってプロは驚き感動したというわけである。詳細については棋譜解説の山崎&阿部の漫才?を参照されたい。なぜ、この手が人間プロの盲点になったかについては、[安用寺孝功六段が中継ブログ](#)で分かりやすく解説している。

寄せに入る場合、銀、桂、歩と持っているなら、普通銀はとどめに残し、桂と歩で何か手を作ってと組み立てるのがセオリーです。 7九銀は全くの逆ですし、しかも自玉が裸ならなおさらです。

つい 8七歩打などに目が行き、いきなり自玉も危ない状態で銀を捨てていくのに心理的抵抗があって最初から読まないということなのだろう。

逆に言うとコンピューターには全く先入観がないので 7九銀も読めるというわけである。今回は GPS が見事の中させたが、当然 Bonanza も大槻将棋も読んでいて上位候補には入っていたはずで、最高点の分岐にはその手が入っていなかっただけということなのだと思う。

但し、ここまでの分析だけでも分かる通り、コンピューターの場合、相当いい筋はをはずさず読んでくるが、ピンポイントで精密機械のように一筋の勝ち筋を発見するという感じではない。この後も渡辺竜王は最短の厳しい寄せで一気に森内を投了に追い込むのだが、ソフトは必ずしも渡辺のスマートな寄せをこの後も指摘出来ていない。但し、恐らくこうしても勝ちという筋はきちんと指摘しているようではある。

プロが分からないと言っていた先に 8七歩打を入れての 9八玉の変化について、人間プロがどういう結論を出すのかもちょっと知りたいところである。本譜の渡辺の 7九銀が鮮やかかつベストであることは間違いなしにしても、 8七歩打 9八玉の変化でもやはり渡辺勝ちだったのかどうか。

個人的には GPS が部分的に 7九銀を指摘したことよりも、3ソフトが口をそろえて指摘して後手が良しと判断し、人間が今ひとつ分からないとした 8七歩打 9八玉がどうだったのか、コンピューターの判断がもしかすると正しかったのかどうかということの方が大きい問題のような気がするのである。

全体的な印象としては、本当のトッププロというのは、唯一それしかないという一筋の勝ち筋を、素晴らしい直感と読みで探り当ててるのに対して、コンピューターは安定して最善手あるいはその周辺を積み重ねてくるといって感じである。そのかわり、人間のように終盤でとてつもなく大きなミスは犯さない。実際、プロの将棋をソフトが解析していて、プロが大きな疑問手を指すと、たちまち敏感にソフトが反応するのを何度も目撃した。

例えて言えば、ゴルフでプロの人間が超ロングパットを天才的に一発で沈める力があるのに対して、コンピューターは一発で入れるのは無理でも、間違いなくピンそば 50cm 以内に寄せてくるとも言うか。人間の場合ワンパットで決めることもあるかわりに、強く打ちすぎてグリーンからこぼれ落ちることもあるが、コンピューターはそういう「人間らしい」ミスは絶対犯さない。

どちらにしても、コンピューターがこれだけ強くなると、もはや無視するわけにはいかない事だけは確かである。

世間一般的にも、どんどん騒がれて欲しい。どんな騒がれ方だっていいじゃない。女子高生の女流名人でも何でもいいから、とにかく将棋ファンへの入り口になってくれれば。

しかし、将棋ファンにとっては、今回の里見香奈は、その将棋の内容があまりに鮮烈だった。将棋ファンの反応を twitter などで見ていると、皆彼女の将棋の中身に感心しているのだ。これは凄いことだ。里見香奈についての人間的な話題よりも、将棋の質の高さでファンを魅了しているということは。

それも、とても強い人たちも十分に、そしてそれほど強くない私のような人たちもそれなりにである。(昔、樹木希林や岸本加世子がそんな CM をしていたっけ。) 将棋は専門性が高いので、棋譜を本当の意味できちんと理解するのは大変だ。しかし、現在のように中継に親切な解説がついていれば、どのレベルのファンも、それぞれ自分なりに楽しむことが出来ると思う。そして、あまり棋力がない場合でも、実はある程度がどういう棋譜なのかを直感的に感じ取ることは可能なのではないだろうか。名画を本当に理解することができるのはごく一部の人間だとしても、開かれた感受性の持ち主ならば何かを確かに感じ取るのが可能なように。このテーマについては、羽生善治と梅田望夫の対談でもふれられていた。

そして、里見香奈の棋譜には、確かにそういうものがあるのではないかと思う。勿論、彼女の実力は男性プロと比べればまだまだ不十分だろう。しかし、そういう実力とは別に、見ていてプロの将棋だなあ、美しい指し方の棋譜だなあと素直に感じさせるものがあるのだ。私だけなのかと思っていたら、ネットの反応を見ていて多くの将棋ファンが似たようなことを感じているのを知って驚いたのである。

よく言われるように、男性プロと女性プロの将棋は、その実力差を度外視しても性質が異なる。それについても、多くのファン(棋力のあるなしに関わらず)何となく感じていたところである。しかし、里見の将棋は、ほとんどそういう男女差のようなものを感じさせない。序盤の作戦も、男性プロと変わらない最先端かつ自然なものだし、終盤の組み立て方も現代的でスマートである。それは、彼女がネット将棋で、相手も里見自身も全く性別を意識せず将棋と取り組んできたことも大きく関係しているのだろう。また、彼女のとてつもなく素直な性格も寄与しているのかもしれない。

今回の女流名人戦というのは、男性で言うと、米長 vs 羽生の名人戦のようなものだったのではないかという気がする。単なる世代交代にはとどまらず、将棋の質自体の転換のターニング・ポイントとでもいうべきか。素人なのでうまく説明できないが、漠然とそんなことを感じている。

そして、羽生も里見も先輩に対する素直な尊敬心に欠けていないところも似ている。羽生は、名人を取った時に米長が万歳して祝ってくれたのが嬉しかったと素直に書いている。里見も、名人獲得後のブログ記事でこんなことを述べているのだ。

一日を一言で言うと、清水さんと将棋指せるのが嬉しくて楽しくて、かつ結果も出せて夢のような一日ってこのことかって思う一日でした。

キラリっ娘のそよ風日記 v(^ ^)v より

彼女が言うと、本当に素直にそう思っていたのだろうなと納得してしまうのである。

でも、記事のタイトル自体が絵文字って、やっぱり女子高生だよな。

NHK 杯決勝は先手糸谷で、後手羽生の作戦は一手損角換わり。糸谷は角換わり系の将棋が特に得意で、後手でも多用するし先手でも受けて指す。準決勝でも後手を持って渡辺竜王を粉碎していた。関西精鋭若手たちの共同研究も脅威だろうが、敢えて羽生が踏み込んだのは横綱相撲で、どんな研究の指し方をしてくるかお手並み拝見、またそれに興味もあるといったところか。

準決勝ほどではないにしても、相変わらず糸谷の指し手は早い。 3 三銀の一見俗な攻めから飛車を成りこみ 3 二銀成とズンズン攻め込んだあたり、見ていて羽生ファンとしてハラハラドキドキだった。単純な攻めだけに、盲点になって、受けも難しいのではないかと。これって。もししかすると準決勝の二の舞なのではないかと。

しかし、羽生が一発 4 九角と打っただけで、局面の様相が一変した。・・・というように手が見えてなかった弱い素人には感じられただけで解説の谷川九段によれば当然の狙い筋ということである。金が逃げても

6 七歩成からの攻めが厳しすぎる。かといって受けもききそうに無い。羽生玉は、詰めるをかけられても一回 5 二金打としっかり受けることができる。感想戦の検討でも色々やっていたが、難しい順はあるにしても後手羽生があの時点では指せそうだと。驚いた。・・・これも弱い素人は、だが。とは言っても一手違いで、糸谷も必死に迫る。しかし、羽生の仕上げが憎いほどに見事だった。

後手も桂を渡すとあぶないので攻め方が難しい、どうするのかと言う局面で 8 五歩。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |    |
|   | 皇 | 科 |   | 王 | 銀 | 全 |   | 皇 |   | ▲  |
|   |   |   | 王 | 王 | 龍 |   |   |   |   | 糸谷 |
|   |   | 馬 | 馬 | 馬 | 馬 |   |   |   |   | 金歩 |
|   | 馬 |   |   | 馬 | 歩 |   |   |   |   | 四  |
|   |   | 馬 |   |   |   |   |   |   |   | 五  |
| 三 | 歩 | 歩 | 歩 |   |   | 歩 |   |   |   | 六  |
| 手 |   | 銀 |   | 王 | 歩 |   |   |   | 歩 | 七  |
| 玉 |   |   | 金 | 王 |   |   |   |   |   | 八  |
| 匠 |   |   | 玉 |   |   |   |   |   |   | 九  |
| ▽ | 香 | 桂 |   |   |   |   |   | 桂 | 香 |    |

こんな忙しい局面で、何を悠々とといった第一印象なのだが、これが詰めるになっている。 7 八と 同玉 6 九馬 8 八玉 8 七馬 同玉の時に 8 六歩ととりこめるという仕組みである。あとは追っていけば詰み。解説のさすがの谷川九段も指された瞬間に感心していた。

さらに、進んでどうやら後手が勝ちになったようだという場面 8 五飛。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
|   | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |     |
|   | 皇 | 科 |   | 王 |   | 銀 | 全 |   | 皇 | 一 ▲ |
|   |   |   |   | 王 | 王 |   | 龍 |   |   | 二 糸 |
|   |   |   | 王 |   | 王 | 王 | 馬 |   | 王 | 三 谷 |
| 三 | 王 |   |   | 王 |   | 歩 |   |   |   | 四 金 |
| 二 | 王 | 王 |   |   |   |   |   |   |   | 五 歩 |
|   | 歩 | 銀 | 歩 |   |   |   | 王 |   |   | 六   |
|   |   | 玉 |   |   | 王 | 歩 |   |   | 歩 | 七   |
|   |   |   |   | 王 |   |   |   |   |   | 八   |
| ▽ | 香 | 桂 |   |   |   |   |   | 桂 | 香 | 九   |

これもかっこよく決めようとしたのかと思ったら、普通に 6七成桂だと、5二銀成 同金 5一馬 同玉 4一龍 6二玉 6一金 6三玉 5二龍 6四玉であぶないという解説だった。しかし 6八馬が4六にきいて詰まないの一応大丈夫なのではないだろうか。とにかく本譜の場合だと 8五飛がないと上述変化手順以降 7五銀以下詰むので、詰める逃れの詰めるにはなっていたということである。同じく 6七成桂でも詰める逃れの逃れで後手勝ちのような気がするが、ちょっと私の棋力だと自信ない。少なくとも、ちょっと油断するとすぐ逆転する局面だったし、将棋の終盤が恐ろしいことだけは確かだ。

対局前に糸谷五段のトークもきけた。いかにも頭の回転が早そうで、あんな調子で彼が興味があるという難解をもって知られるハイデッカー哲学について猛烈な勢いでまくしたてられたら一般人には理解できないこと請け合いである。谷川九段によると、なれないトークのせいか、盛んにため息をついていたそうである。

対局開始の際には、ご丁寧にも「よろしく願いいたします」といっていた。「お願いします。」でなく「お願いいたします」の律儀さにはちょっと笑ってしまった。さらに表彰式でも、羽生が表彰されるところで、気を遣ってなのか巨体を思いのほか素早くササッと動かしてカメラの外に去っていったのも妙におかしかった。失礼な言い方になってしまうが、絶対に「いいヤツ」なんだと思う。

大和証券杯では中井さんが見事連覇。普通早指しだと若手が有利なはずなのに、中井さんが手厚い指し回して作戦勝ちしてそのまま確実に押切って圧倒する将棋がめだった。里見戦といい、この決勝といい。秒読みの将棋でも全くあわてずに確実に寄せていく技術、鍛えの立った筋のよさを感じた。さすがである。解説では羽生名人が登場。羽生名人の解説は実に明晰で勉強になる。聞いているだけで、香車一本くらい強くなったような錯覚に陥るくらいだ。

しかし、言っていることは実はすごく基本に忠実だ。「相手がかためているところに攻めていってはいけない。」とか「中段玉は寄せにくいので、あせらず遠巻きに働きかけるのがいい。」とか、言っていることは当たり前なのだが、それを実際の局面にうまくあてはめていくセンスが抜群なのである。「手があたらない」と言って嘆いていたが、羽生に手を指摘される対局者の方が大変である。こういう解説を聞いていても、いかに羽生が漠然とではなく、明確な意図をもって指しているのかの一端が理解できる。それはたとえプロであっても、実際にはすごく難しいことなのではないだろうか。

棋譜コメントより

本田小百合 > まずは本日NHK杯優勝されたそうでおめでとうございます

羽生善治 > さきほど、渋谷から駆けつけました。ははは、まあそんなことはないんですけど(笑)

こういうノリツッコミのようなことをほするイメージはあんまりないので、一番の意表の一手であった。

今、棋王戦の第四局で久保棋王が勝利して最終局に勝負の行方がもつれこんだところである。よかった、「二日天下」で終わらなかったのも、王将奪取記念記事が書きやすくなった。

さて、第六局は、最後のところで羽生さんが詰むと思ったのが詰まないという結末だった。しかし、よく話を聞くと、あの不詰みはほとんど芸術的な順だったらしい。棋譜解説より。

「3連続限定合駒（7三銀合、5三銀合、8五角合）が実戦で実現するとは奇跡的。トリプルルッツです」（行方八段）

(王将戦中継サイト 棋譜コメントより)

これを、かなり前から読んでいた久保が今回は凄かった。勿論羽生にすれば不本意だろうが、少なくとも分かりやすい錯覚、ポカということでは決してないようである。

控え室も GPS も、ほとんど先手勝勢を疑わずにいたところ、5九金から6九金の詰めろで迫る順を狙っていた久保が冴えていた。もし、逆に羽生がこの順を指していたら間違いなく「マジック」と呼ばれていたであろう。

ゴキゲン中飛車の5八金右急戦は、最近振り飛車が良いのではないかとされていた。順位戦の谷川 vs 藤井で後手の藤井が快勝して、なおさらその流れは強まっていたように思えた。それを、羽生が敢えて採用。しかも、少し前に羽生の久保の二人で意地のように戦って羽生が全て勝っていた因縁の形。しかもカド番で。いかにも羽生らしかった。しかも、また本譜は、少なくとも先手が良いか互角に戦えそうな分れだった。

それを、久保が終盤に絶妙の指し方で逆転。第五局で羽生がしたことを久保がやり返したわけで、タイトル獲得にふさわしい名局だったといえるだろう。

この二人は明らかに将棋がかみ合う。どの将棋も実に面白い終盤になった。高い実力同士でも、うまくかみ合わないで一方的になるケースもままあるのだ。全体を通じて文句なく名シリーズだったと思う。

本シリーズを通して、先手では石田流、後手ではゴキゲン中飛車というスタンスでした。久保「日程的に結構ハードだったので、自分の相棒に頼ってしまったということもあった。いろんな将棋も指せばいいなと思っていたが、最後は頼ってしまった部分もある。違う将棋もこれから指したいと思っている」

(王将戦中継ブログ 共同インタビュー より)

「相棒」という言い方に、石田流やゴキゲンに対する愛着を感じる。現地に行かれていた勝又六段の twitter によると、こんな発言も飛び出したようである。

「ゴキゲン中飛車はですね。プロ野球で言えばダルビッシュです。ようやく出てきたエースピッチャーですね。」BY 新王将。



カッコいいですね。

さて「相棒」と言えば(なんてベタな展開)、このお方も久保ファンだそうである。

久保新王将誕生に水谷豊も「おめでとう」(スポニチ)

他にもスポニチは精力的に興味深い記事を提供してくれている。

局面を見た瞬間にセンサーが作動する、感覚だと、理屈ではないことだけは、はっきりしている。まさにアーティストだ。

久保新王将 さばけるか否か“センサーで感知”(スポニチ)

カッコよすぎるが、実際に久保流の捌きは他のプロは真似できていないので、単なる読みではない一種の嗅覚的直感が働いているのは間違いないだろう。人間の指す将棋の面白さである。

王将戦スポニチ写真は最後まで独特だった。

「これは皆からのプレゼントの駒だ。向こうでは趣味の将棋もホドホドにね。」「ハイ」(本社栄転営業課長 34歳)

「けっ、ああは言ったけど将棋をやめる気なんて全くないぜ。東京に行ったら将棋を指しまくらせて、神様お願い。」(無頼派営業課長 34歳)

最後に twitter 将棋クラスタで話題になっている久保さんの似顔絵イラストと久保テーマソング?を紹介しておこう。おじさんは知らなかったが宇多田ヒカルの「ぼくはくま」が元歌だそうである。

ぼ く は く ぼ

渡辺 vs 羽生の竜王戦第四局の最終盤、渡辺が入玉含みで猛烈に粘るものの、やはり自玉がつかまってしまいそうで、渡辺はちょっと諦め気味だった。次の指し手を羽生がすぐに指したら投了も考えていた。その時、羽生がコップの水を一杯飲み干す。その間に渡辺はふと気付く、もしかすると自玉が打ち歩詰め筋で逃れることが出来るのではないかと。再びやる気を取り戻して懸命に読み出す。実際に打ち歩詰め筋が出現して渡辺が奇跡的な逆転勝ち。三連敗四連勝して、竜王防衛、初代永世竜王の名誉も獲得する。もしも、羽生がコップの水を飲んでいなかったとしたら・・・。

将棋は基本的に実力勝負の世界である。運とかアヤの入り込む余地は限りなく小さい。しかしながら、人間同士の勝負なので時としてほんのちょっとしたことが勝敗にとてつもない影響を及ぼすことがある。まるでプロ野球で、ちょっとした打球の飛んだ位置や、些細なエラーが勝敗を分けて、結果的にあらゆる出来事が勝者に都合よく起こることがあるように。

今回の名人戦第三局もそうだった。

中盤、三浦に 9 五金という打ちにくい金を打つ妙手があった。・・・ように見えた。渡辺竜王がすかさず指摘し、他の豪華解説陣も同意していた。羽生もずっと 9 五金を打たせる余地を残して指していたので、もしかすると軽視していたのかもしれない。三浦の逸機か。そうではなかった。三浦はその手に気付いていた。しかしながら、その後に、豪華控え室の誰も気付かなかった羽生側の妙手が見えてしまっていた。なので、9 五金をも見送ってしまった。

もしも、三浦が余計な好手に気がついてしまわずに指すことができていたら・・・。

羽生優勢とされた将棋だったが、三浦が猛烈な追い上げを見せた。と言うよりは、実は羽生が若干よいにしても、そんなに形勢は離れていなかったのではないかと。控え室では、三浦の 7 七桂から 4 六香の評判がとて悪かった。しかし、本譜の進行を見ると、実は勝負のアヤを求めるなかなかの指し方だったのかもしれない。今回の控え室には渡辺竜王や深浦王位といった猛者たちが顔を揃えていた。しかも、全員将棋の筋に明るいタイプだ。彼らからすると、特に 4 六香は違和感があるのかもしれない。それは素人でも何となく分かる。しかし、三浦には形にこだわらずに徹底的に読みを掘り下げて自分の信じる手を指す強さがある。他のトッププロとは違う一種不器用なまでに突き詰める姿勢は、むしろ三浦の長所なのではないだろうか。

しかし、三浦が猛烈に追い上げたが、どうしても後一步届かない。羽生玉が詰まない。三浦いつもの超前傾姿勢で、目を充血させながら大きく見開き、時に左上に空間にある三浦のマイ脳内将棋盤を猛烈に動かしながら必死に読み耽っても、どうしても足りない。

羽生が正しく 3 三銀と合い駒していればジ・エンド。しかし、羽生も人の子、錯覚する。自玉を限りなく危うくする敗着となりかねなかった 3 三角合い。控え室は騒然とする。一番驚いたのは三浦だろう。棋士の本能で羽生玉を詰まそうとする。しかし、詰まそうとせずに羽生の桂二枚を抜いて、詰める逃れの詰めるをかけていけば勝ちだった。もしも三浦が角合いを最初から読んでいたなら、もっと冷静に考えることが出来たかもしれない。しかし、思いも寄らない羽生のミス。冷静にいろと言うのが酷である。もしも、三浦が詰ましにいかずに、冷静に勝つ方法を考えていることができていれば・・・。

再びもう三浦に勝ちはない。控え室が 7八と、と金を取る手が詰めるだと指摘する。難しい詰めるのかけ方だ。中継を見ていて私などはプロの読み筋の凄さに半ば笑ってしまった。しかしながら、三浦もその筋で負けだと読んでいた。ここでも三浦はちゃんと読めていたのだ。しかし、羽生が指したのは、一見普通で自然に見える玉の縛り方。しかし、またしてもこれが問題だった。三浦はここで投了したが、実はその銀を抜いて粘る筋があった。羽生良しにしても、まだまだ将棋は続いていた。双方持ち時間がほとんど残っていたので何らが起こっていてもおかしくはなかった。

終局場面がBSの深夜で流れだが、三浦は一分将棋で、59秒まで読まれて何かを指そうとしていたが、間に合わなかった感じで「負けました」と投了の意志を告げていた。

もし、三浦が正しい詰めるに気付かず、最初から羽生の 3三銀を本線で考えて対策を考えていることが出来たとしたら・・・。

今回、三浦がきちんと読めていたのが全てマイナスに働いてしまったようである。なんと勝負の運命の神は意地悪なことをするのだろうか。

三浦のひたむきな姿勢は、我々ファンだけでなくプロ棋士たちの心も打っているようだ。

囲碁将棋ジャーナル解説の佐藤康光九段も羽生に12連敗した経験があるそうだ。

ひたすら貫くしかないでしょうね。自分の殻を破るために、ひたすら自分を信じてつき進んでほしいと思いますけれどね。

深夜のダイジェストの鈴木環那女流初段

対局姿勢からも感じ取れるように、本当に全力で全身で戦っているという感じがあります。

## 竜王戦中継サイトより第一局の棋譜

あまりに凄い将棋だったので久しぶりに個別の将棋について感想を書いてみる。

先手久保で石田流、対する後手の羽生は 4 二玉から、わりと温和な対策。佐藤康光が久保式石田流に対して真っ向から叩き潰そうかとするような対策を採用しているとは対照的。羽生もそういう最前線の激しい対策に進んで踏み込むタイプなのだが、そういうのは佐藤に任そうということなのか、あるいは最初から飛車角乱舞の順が石田ペース久保ペースになるので好ましくないと思っているのか。

とはいっても羽生も早々に仕掛けたのだが、それに対する久保の対応がまず第一の驚愕であった。いきなり穴熊のふたの部分の歩をとらせて馬をつくらせるとは。

最近の将棋、特にゴキゲン中飛車では平気で馬をつくらせる順もよく生じる。7 八金型の定跡もそうだし、久保も谷川との順位戦の指し直し局でいきなり馬をつくらせる順を採用していた。馬をつくらせたら無条件にまずいという従来の常識が崩壊しつつあり、久保はゴキゲンの使い手としてそのような「普通でない」感覚の指し方が得意なのだ。

しかしながらである。今回は馬を作らせる場所が場所だ。さすがに今回ばかりは、この指し方に共感するプロはいなかったようだ。そうでなくては困るという感じもする。そして、実際に久保も少し困っていたようだ。

ところが、それでも進んでみるとそんなにはっきり居飛車がよいという局面にはならなかった。羽生にも後悔する手があったようだが、むしろ振り飛車に攻める権利があり、なおかつ十分指せそうな展開になったから驚きだ。本当に現代将棋は訳が分からない。

そして第二の驚愕。本局最大の驚愕、羽生の 3 六歩！！

羽生のこうした種類の意表をつく手には我々だってある程度は慣れている。それにしても今回は凄すぎた。いくらと金が出来るとはいっても、角がタダで取れるではないか。さらに手抜いていくらでも攻めることが出来そうではないか。羽生側の陣形だってお世辞にも安定しているようには見えない。羽生が指しているにしても、これはいくらなんでもムチャなのではないか、本当に大丈夫なんだろうか、そう多くのファンも思ったはずだ。私も正直そうだった。

[中継ブログの記事](#)によると「おかしいでしょ、こんな終盤で手を渡すなんて」という感想もあったとのこと。羽生が得意中の得意とする手渡し、この手は攻めてはいるので純粋な手渡しではないかもしれないけれども、先手に手抜きして攻められる危険が十分にあるし、角を入手されてしまうかもしれない。要するに先手に、どうぞあなたのお好きなようにどうぞでもしてくださいという大胆不敵な手なのだ。

ところがよく調べてみると、どのようにやっても実は羽生玉が見かけとは違ってそんなに簡単には寄らない事が判明する。このクソ忙しい終盤において、下手をすると緩手中の緩手になりかねないこの 3 六歩が間に合ってしまうのだ。久保は、手抜いて攻める順を選んだが、それが即敗着になってしまった。角を取っておけば難しかったようだが、それでも全然久保勝ちという感じではない。こんなある種の挑発をされれば、気分的には手抜いてとがめたくなるだろう。それが負けを早めてしまったというのだから皮肉すぎる。ところで、羽生はどうやってこんな手を思いつくのだろうか。羽生の感想コメントによると、直接急いで攻めていく手だと、全然手がつながらないということである。

つまり、推測するとこういうことではないだろうか。羽生だって、さすがにまず厳しく攻める順から読ん

で調べた。しかしながら、どうしてもうまくいかない。ならば、何か攻めのスピードを緩めて相手に手を渡すような種類の指し方をするしかないではないか。ということで「必然的に」 3六歩しかないという結論に達したと。

我々は羽生の指し手に皆例外なく驚愕していたわけだが、羽生はこう言いたいのではないだろうか。

――いえ、だって厳しく攻める順がないんだから、こうするしかないじゃないですか。

羽生マジックと周囲は騒ぎ立てるけれども、今回も羽生からしてみれば種も仕掛けもない必然手を指しただけということなのだろうか。

明日から第五局。仕切り直しの三番勝負である。

まず、懺悔から始めなければいけない。私は勝手にツイッターでした事前予想で、深浦 4 - 広瀬 0 のストレート防衛を自信満々に予言していたのである。第一局でいきなり大ハズレ、その後も一進一退の攻防が続いている。

とにかく王位戦の深浦では、羽生名人との死闘の印象が強烈すぎる。羽生相手でも深浦はすこしも気合負けすることなく、それどころか攻撃的に序盤から切り込んでリードを奪い、終始羽生にペースを握らせなかったという印象が強い。大変な序盤巧者であり研究も深く思い切りもよい。百戦錬磨の羽生でもなかなか作戦勝ちできていなかった。羽生も[玲瓏管理人氏のインタビュー](#)でこのように述べている。

深浦さんは序盤から主導権をとるのがうまいんです。今回の棋聖戦ではうまく主導権を握られないように出だしから慎重に駒組の工夫をしたというのはあります。

だから、広瀬もなかなか作戦勝ちできずにリードを奪われて、持ち前の終盤力で追い込んでも届かないという展開になるのではないかと考えたのだ。さらに、広瀬得意の振り飛車穴熊にしても、そもそもすこし苦しみなところを逆転する将棋だと鈴木八段も指摘していたし、なおかつ深浦王位も徹底的に対策を講じて二日制をいかしてじっくり指すだろうから、どうだろうかと。

しかし、広瀬の振り飛車穴熊は予想以上に奥が深かったし、その終盤力も想像以上だった。私の予想なんてどうでもいいのであって面白いことになった。

広瀬挑戦者は初タイトルなのに、ほぼ普段通りに実力を発揮しているようだ。大物である。読みも深い。将棋世界の自戦解説で、第一局の終盤で実際には現れなかった水面下の深い読みを披露している。実に終盤で手がよく見えるし緻密に細心な読みをしている。第三局でも、一目寄ってしまいそうで実は自玉が寄らない順に誘導したようなところもあって、穴熊王子の終盤には本当に天才を感じる。

広瀬が順位戦で指した「[神の寄せ](#)」について私も記事で紹介したことがあるので興味のある方はご覧頂きたい。ど派手な一手が飛び出すのだが、それよりも徹底的に緻密に読みきっていることに驚嘆させられる。

私のような羽生ファンにとって、正直言って深浦さんは当初敵役だった。王位戦で二年連続のフルセットで羽生を倒した。しかも、深浦の場合、かなり闘争心が正直に表に出るタイプだ。羽生ファンとしては、どうしても負けて欲しくない相手だったのである。

しかし、王位戦やその後の羽生戦を含めた深浦の戦いぶりを追って行くにつれて、まず何よりその将棋の質の高さ、厳しさ、プロフェッショナルな取り組みに感心させられる。将棋の内容自体で、否応もなく説き伏せられ、深浦の実力を納得せざるをえなかったのだ。

さらに、現在の将棋界のトップには世俗離れたタイプが多くてそれもある種の良さなのだが、深浦はとても人間的なタイプである。すこし正直すぎるところもある深浦の人間味にも、ある種新鮮な魅力をいつの間にか感じ始めていた。

簡単に言うと、段々深浦のことが棋士としても人間としても好きになってきたのだ。

今回の王位戦では、いつもの通りカメラの静止画像の中継があった。そこに映し出される深浦は、常に真剣そのもので集中しきっていて、まさしく将棋に「喰らいつく」ような姿勢を終始一貫徹底していた。そして、最終盤になると、集中のあまりに表情が赤鬼のように紅潮し、終局後もそれがしばらくおさまらない。素晴らしいプロの対局姿であった。

最後の二局は周知の通り、素晴らしい死闘になった。両方とも千日手になり、なおかつ千日手指し直しは二局も掛け値なしの名局になった。特に最終局は、広瀬の穴熊全く手付かずの状態から、深浦が決して折れない心で猛追して、ギリギリのところまで追い上げた。最後は深浦玉が「桂頭の玉寄せにくし」の連続でどうしても寄らない奇跡のような玉形になった。ついに、深浦が追い抜いて勝ちになったとも思った。深浦玉は入玉含み、広瀬の攻め駒、持ち駒には飛車角香車桂馬しかない。金気が全くない。押さえがきかない。普通ならもう深浦玉を捕まえるのはもう無理だ。ところが、まるでつくった詰め将棋のように広瀬は深浦玉を網の目の中に収めてみせた。全くそれに気づいてなかった私は愕然とする。深浦も広瀬の最後の方の5三角をうっかりしていたそうた。その角が7五に成り返って馬になると深浦玉はどうしても逃げきれない。まさしく名局だった。

第五局も第六局もあまりに内容が濃密すぎて、まだよく分からない部分が多すぎる。まさしく「専門誌の解説を待つ」しかない、今回は将棋世界誌の責任がとてつもなく重い。

それにしても広瀬の終盤力は本当に見事だった。どんなに賞賛しても賞賛し足りない。やはり、終盤力だけで言うと深浦さえも首の皮一枚う上回っていたという印象である。

静止カメラに映し出される姿も深浦とは対照的だった。どんなに難しい局面でも、苦しそうなところでも、どことなく飄々としている。広瀬の周りにだけは、常に涼しげな風が吹いているようにも見えた。余計なことを考えずに、とにかく読みに没頭できるのが広瀬の強さなのだろう。かなり心臓が強いタイプだという気がする。

かしながら、そんな広瀬でもやはり二日目の夕食は少なめにしていたようである。大変なプレッシャーの中、若くて経験も浅いのに激闘を戦いぬいた広瀬の精神力も凄まじいというべきだろう。

振り飛車穴熊を武器に勝ち取った王位だけれども、やはりその魅力は何と言っても底知れぬ終盤力だろう。これからも、いまだに終盤力では他を寄せつけない羽生世代との激闘が本当に楽しみである。

それにしても、今回の深浦といい、木村といい、三浦といい、なんでこんなに敗者たちが皆魅力的なのだろうか。現在の将棋界のトップには、本当に素晴らしい奴らが揃っている。我々が過ごしている俗世間のことを考えると、ほとんど奇跡と言っても差し支えないだろう。

当たり前のように見てしまっているが、現在のプロ将棋を観戦出来ている我々ファンは、最高に幸せ者なのだ。



八「もう、何にも話したかねえな。」

熊「まあ、そう言うなよ。とにかくラーメン屋の屋台から始めたのが、ついにタイトル戦でお披露目にまでなったんだからさ。」

ご隠居「そうぞ。矢倉の革命、新藤井システムを短期間で先生がほとんど独力で作りあげられて、それがタイトル挑戦にまでつながったんだからな。それだけでも実は大変なことなんだぞ。」

ご隠居の奥さん「そうよ、八。だいたい将棋だけが全てじゃないよ。八、おまえ、あの左官屋の娘のおキクはどうだい。ほら、ちょっとポワーンとしてかわいくて気立てが良くって。おまえの好きな熊倉さんにもちょっと似ていてさ。なんなら私が世話してやるよ。」

八「えーい、おれに優しい言葉をかけるなああああああ。同情するなら勝ち星をくれ！」

熊「おめえも古いな。安達祐実の「同情するなら金をくれ」なんて、もう今時の若い連中は知らねえぜ。」

八「いちいちダジャレを説明すなああああああ。」

ご隠居「まあ、それだけ元気なら大丈夫じゃろう。なんと言っても今回は藤井先生が先手での矢倉、早囲い含みの片矢倉、新・藤井システムが注目じゃった。羽生先生も、相振りにしたりせずに矢倉を受けてたっとな。藤井矢倉に興味があったのかもしれないし、ある種のリスペクトなのかもしれない。もっとも、それは結果論で羽生先生の場合は本当になんでも指されるので相振りになっていてもそれはそれで納得じゃったんだが、オールラウンド・プレーヤーの羽生先生の強みじゃな。」

熊「[勝又教授](#)もツイッターで、「寅屋と脇屋の味付けを取り入れた鰻屋本舗オリジナルの駒組になりましたね。予想通りの駒組で、来月号の将棋世界で取り上げます。」といわれてましたな。」

ご隠居「そうだな。とらやといっても、「男はつらいよ」の団子屋じゃないぞ。田中寅彦先生がよく用いられていた片矢倉のことで。脇屋というのは本局でも先手の片矢倉をのぞくと部分的に似た形の矢倉脇システムのことじゃ。藤井流の矢倉は素人には理解が難しいところもあるんで勝又教授の講義が楽しみじゃな。それと、今回は ustream 中継もあって楽しかった。もともと[西尾先生](#)が始められた企画で、現在も技術的な面など中心にされているようじゃな。それに[野月先生](#)がプロデューサー的な役割で参加されているようじゃ。今回はゲストで森下先生と千葉先生が参加されていた。録画で今でも全て見られるようじゃよ。[その1](#)、[その2](#)、[その3](#)。」

熊「森下先生、面白かったですねえ。」

ご隠居「そうじゃな。特に、対局後の野月先生との対局後の総括感想戦は勉強になった。その3の7分くらいから始まるんで、これはおすすめじゃよ。森下先生といえば矢倉の森下で高名じゃが、それまでの筋金入りの矢倉党からみた藤井矢倉について相当率直に語られている。例えば、藤井矢倉は押したり引いたりではなく、振り飛車の藤井システムのように縦から攻める特徴があるとか、従来の矢倉のようにねじりあいでも押し引いたりするのではなく激しく攻め込んでスカッと勝つ矢倉だとか、私のような体で覚えた矢倉でなく戦略としての矢倉だとか、片矢倉は正直言ってうすすぎて全く勝てるイメージがないとか、でも片矢倉で角の打ち込みをなくして攻め倒すのが藤井流だとか、問題視された 6 四角は矢倉党からみると違和感があってここはとにかく 4 一銀と攻め合わなければならず藤井さんの矢倉の経験の少なさがでてしまったとか、その辺で感覚のズレを感じたとか・・・。」

八「ちょっと待ってくださいよ。言いたい放題じゃないですか。ひでえなあ。」

ご隠居「いやいや、矢倉をずっと指してきたプロ棋士として率直な感想を述べられていただけだな。勿論、藤井さんの悪口とかいうのでは全然なく率直な矢倉の考え方を専門家として言われていただけなんで大変

勉強になった。森下先生はああいう裏のない正直な素晴らしいお人柄なんで誰もこういうことを言っても悪く思わないじゃろう。森下先生にしてみれば、全然悪気などなくて単に正しいと思うことをそのまま言われていただけなんじゃろう。森下の言うところに正義ありじゃな。」

熊「森下先生をフォローされているんでしょうけど、最後のご隠居のお言葉も結構辛辣ですぜ。」

ご隠居「いや、わしにまで森下流がちょっと移ったかな。はっはっはっ。でも口の悪い人は「森下先生の辛口ラーメン批評がよかった」とか言っていたようじゃよ。

ところで、対局の感想では藤井先生は 2 四歩が敗着で 6 四馬とすべきと言われていたようじゃ。 6 四角の場面だと先手玉にもう火がついていてそんな攻防手では間に合わないと言われている。森下先生も言われていて、もっとはやく 6 四の急所に馬か角をきかせておまくというのは理にかなっているな。谷川先生も 6 四角をみて、ここでこう指すなら 2 四歩のところを 6 四馬としたかったと即座に指摘されていた。そして、やはりとにかく 4 一銀としたかったとも、森下先生と符号して、やはり矢倉党の感覚はそういうものなのかもしれん。」

熊「なるほど。やっぱり指しなれた形の感覚ってあるんですねえ。ところで、ust でも検討していましたが 6 四角で 4 一銀と攻めあったらどうだったんでしょう?」

ご隠居「素人のわしにそれは分からんな。あまり感想戦ではふれられなかったみたいなんで、やっぱり先手がそれでもちょっと苦しいのかもしれないがアヤはあったのかもしれないな。また専門誌で分かるところじゃろう。」

八「あっしも ust を観ていたんですが、羽生先生の 3 九銀が厳しくてこれで決まったかという雰囲気になったんですね。でも今回の ust はすごい視聴者数で、盛り上げなければということで先生方も必死に手を探して 8 七玉としたらどうかという話になったんですね。」

熊「そうだな。あれを観ていておれも羽生先生もちょっとミスしたのかと思ったよ。」

八「それでも苦しいようですが、あっしもすこし気を取り直したんですね。そしたら野月先生が、森下先生に具体的に 8 七玉としたとしてどれくらいの形勢かと聞いたんですね。あっしもそれを知りたかった。どれくらい縮まったのかと。」

熊「森下先生の答がすごかったよな。野球に喩えると 8-0 くらいで羽生リードかと。」

八「ほんとずっとこけたよ。それじゃ全然ダメじゃんか。」

熊「しかも回は 8 回くらいだと。満塁ホームランが 2 本くらい必要だと。相手は羽生先生だけ、投げてるのが絶好調のダルビッシュで 8 回で満塁ホームランを二本打てと。」

八「ほんとにガックリきたぜ。もう絶対ダメってことじゃん。」

熊「羽生先生のことを少し心配したおれは大笑いさ。」

ご隠居「だから言っただろ。森下先生の言うところに正義ありなんじゃよ。間違いない。」

[竜王戦中継サイト](#)。

竜王戦は、渡辺明が防衛して見事に七連覇の偉業を成し遂げた。

その記事を書いたのだが、あまりに長くなりすぎたので二章に分けた。最初に第六局や今回の竜王戦について書いて、次に今後の将棋界全体について書いたので、各自興味のある部分だけを読んでいただければと思う。

勿論、全国約 3 名のものぐさファンの方には全部読んでいただきたい。

## 1. 再度「2 手目 8 四歩問題」

第四局の時に、[同じタイトルで書いた](#)ので、その繰り返しである。その時うっかり書き忘れたのだが、タイトルは梅田望夫の「どうして羽生さんだけが、そんなに強いんですか?」(以下「どう羽生」と略させていただく)に収録されている第 81 期棋聖戦第一局のリアルタイム観戦記のタイトルを使わせていただいている。

渡辺後手で、また通常角換わりになった。その意義については第四局の際に書いたので興味のある方は参照されたい。

この竜王戦の前に実に興味深い伏線があった。A 級順位戦の対郷田真隆戦でも渡辺は後手をもって角換わりを指している。その際、相腰掛け銀同型に進めて、驚天動地の、と言いたくなるくらい大胆な 8 一飛という新手を見せた。本来定跡では別の手がほとんど当り前の局面で、なおかつ感覚的にもものすごく考えにくい手だった。

しかし、先手の郷田も後手で角換わりを受けて立つスペシャリストで、何とこの手を考えたことがあり、優秀な対策を提示して将棋は郷田の快勝に終わる。

ちなみに、その郷田は A 級順位戦で後手で三浦弘行相手に角換わりを指し、自分が大胆な新手を披露したが、三浦がその場での確な対応をして、やはり快勝した。

つまり、「どう羽生」で、羽生善治が述べているように角換わりの歴史は後手の対策が次々にダメになって消えていく歴史である。また、羽生がどこかで言っていたが、プロの場合新手を出しても、相手がほとんど必ず的確に対策を示してくるものなのだ。特にトッププロの場合は。

さらに、その前に王将リーグでは、渡辺が後手で羽生相手に相腰掛け銀同型で新工夫をした上で、第四局では早い時点で変化した。そのような色々なことがあっての第六局だったので、勝負の行方以外にも、将棋の内容、渡辺の対策にも大いに注目が集まったわけである。

とはいえ、7 六歩に 8 四歩としても角換わりが確定するわけではない。先手は矢倉にも出来るので羽生の作戦が注目されたが、結局角換わりを選んだ。羽生は大事な将棋では、総力戦で力を出しきれぬ矢倉が多いという印象もあるので、そうするのかと個人的には考えていたのだが、今まで述べたような流れを受けて、つい羽生も好奇心が勝って大事な将棋であることとも関係なく角換わりが指したくなってしまったようにも思えた。

そして、渡辺が選択したのは 6 五歩とする指し方だった。その後 6 四角と据えるのを故村山聖先生が良く指していたし、何年か前にもよく指されたが最近「消えた戦法」になりかかっていたそうである。

そして、渡辺のその後の新工夫というのが、実に地味というか玄人好みというか渋い着想だった。この形に

すると、先手から全面攻撃されがちで、後手が苦しめとされていたところを、手を待つ金の位置を 5二にすることで、先手が最善のタイミングで仕掛けることができないようにしたのだ。そして、羽生も激しく攻めることが出来ず、後手番の作戦としては成功した形になった。

ここからは私の推測だが、郷田戦と羽生戦での渡辺の作戦選択は次のような感じだったのではないだろうか。どちらも大切な将棋だが、一応やはり竜王戦の方が比重が高いとする。その場合、8一飛の方は、見た目は派手でインパクトは抜群だが、何しろノーガードで先手の攻めを許す大胆な手なので、失敗すると酷い目にあう可能性もある。だから、実験的な新手の方は順位戦の方で思い切って使ってみる。そして、5二金の方は地味そのものだけれども、それで急に後手がつぶれるということはなく、本局でもそうだったが細かい神経戦になる方法だ。竜王戦という大きい将棋、なおかつ時間も長い将棋で用いるには8一飛より明らかに適している。

以上は私の仮説に過ぎないが、どちらにせよ、渡辺はこういうことを細心に考慮した上で戦術を緻密に組み立てて選択したような気がする。そして、実際に成功した。やはり、今回も2手目8四歩とした正統派の側面と、その上で戦略を張り巡らせる実戦派的側面がうまく噛み合ったといえそうだ。竜王戦全体を通じて、渡辺の作戦の組み立て方は見事だった。

そうはいても、後手ははっきりよくなったわけではなく、二日目も難解な戦いが続いたが、本局もそうだが、渡辺の大胆かつ手厚い指し回しと受けに羽生が手を焼くという展開が、竜王戦全体を通じて目立った。簡単に言えば渡辺の地力がすごくて、最近になっても力を伸ばしたということなのだろう。羽生がこんなに苦しむのも本当に珍しかった。

しかし、渡辺の強さを率直に認めて敬意を払う一方で、今回の羽生が最後までどこがおかしくてちくはぐだった印象を与えたのも事実だ。今回で言うと、3五歩と早めに動いたのが波紋を呼んで、結局羽生は端をつめられてしまい、最後までそれが響く形になった。初日に渡辺流の5二金の手待ちの有効性を認めて4六角と手放して、さらにあまりれ打ちたくなさそうな4五歩も打って、辛抱して見事に局面の均衡を保った(こちら辺は羽生の柔軟な大局観のよさが出ていたように思う)のだから、ここでも自然に5六歩と突いて息長く辛抱強く指せばどうだったのだろうかと、素人ながら素朴に感じた。感想戦の棋譜コメントには今のところ言及がないし、5六歩だと何かイヤな筋があったのかもしれないが。

この順に象徴されるように、今回の竜王戦全体を通じて、羽生が攻め急いだり、単調になったり、短気になる局面が多かったように素人なりに感じた。一番目立ったのは、第二局で桂馬を馬で食いちぎって激しく攻め立てたことだが、まるで羽生は何者かに追い立てられているのかのように錯覚するようなところもあった。

羽生も第三局から第五局の終盤で見せたように、鬼気迫る的確な追い上げぶりはいつもらしかったが、そこに至る中盤から終盤の入り口の組み立てにややあせりめいたものを感じられたのだ。一昨年の竜王戦も死闘になったが、あの時は両者とも存分に力を発揮しているという印象で、どちらかの状態が悪いなどは全然思わなかった。

勿論、そのように仕向けた渡辺の手厚い指し回しが絶品だったし何よりも褒めてしかるべきなのだろうが、やはり今回の羽生は万全のベストだったとは言いがたいように感じる。渡辺の方は充実しきっていて、特に竜王戦では存分に力を発揮するので、羽生も万全の状態でもう一度戦わせて見たいと、どうしても考えてしまう。

立会いの桐山清澄先生が、BSで今回の羽生さんを第一局からテレビで見続けていて、いつもと違って勝ちたいという気持ちが強く出すぎているように感じたと言っていた。まさしく、そのような感じである。一昨年のももあり、「永世七冠」もかかっている。いくら感情のコントロールの達人の羽生でも、手に余る部分があったとしてもおかしくはないだろう。

以下はごく個人的な話になって恐縮だが、かくいう私も、羽生ファンの一人として今回ばかりは「永世七冠」だけはとにかくなんとか獲得してもらいたいと思って、今までになかったくらい勝敗にこだわって応援してしまっていた。いくら羽生といえども、そんなにしょっちゅうチャンスがめぐってくるわけではないので。

しかし、そういう考え方がよくなかったのかもしれないとも思う。羽生は今まで七冠を初めとしてありとあらゆる記録をなし遂げてしまった。物理的に年月のかかる勝ち星をのぞけば、もう永世七冠くらいしか残っていない。だから、早くその記録を決めてあとは気楽に戦ってもらいたいなどと考えたのだが、そういう目標は一つくらい残しておいた方が動機付けになっていい。パズルの最後の一枚は楽しみにとっておけば良い。

勿論、私はいつになるかは分からないが羽生が必ず永世七冠を達成すると信じている。しかし、万が一の万が一、ほとんどありえない話だが、羽生が永世七冠を得られなかったとしても、私が伝記映画「HABU YOSHIHARU」を撮る際には、「市民ケーン」のラストのようになぞめいた伝説的なエピソードとして使うことが可能ではないか。

羽生さんにも、そう考えてもらって次は永世七冠のことなんか、これっぽっちも考えないで戦っていただきたいと思う。あくまで、対戦相手との戦いを存分に楽しんでもらって。「3月のライオン」で、宗谷名人がライバル隈倉九段のことを、「お互いにお互いが相手のことを、力いっぱいブン回しても壊れないおもちゃだと思っている」ように。

## 2.「これからの10年間」

竜王戦の最中に、豊島将之が過酷極まりない王将リーグを抜け出して挑戦を決めた。ついに、渡辺よりも、さらに若い世代のタイトル戦登場である。

さてタイトルの「これからの10年間」は、やはり梅田の第80期棋聖戦第一局のリアルタイム観戦記「割れる大局観」の中の第一部から使わせていただいた。（「どう羽生」にも収録）そこで梅田は棋士を世代別に「羽生世代」「ちょっと下の世代」「渡辺竜王を中心とする世代」「もっと若い世代」に分類している。つまり、「もっと若い世代」に属する豊島が、いよいよ檜舞台に立つ日が出現したわけである。

王将リーグは、羽生、森内俊之、佐藤康光の「羽生世代」3人、深浦康市、三浦弘行の「ちょっと下の世代」2人、渡辺の「渡辺世代」が1人に豊島が加わった7人だった。この総当りリーグで豊島が挑戦したのは画期的な出来事である。かつての羽生世代ダイナスティに陰りが見えてきたところに、一気に一番若い世代の人間が突き抜けてみせた。最終局は、「羽生世代」の佐藤を豊島が破って挑戦を決めるという劇的な結末になった。「世代交代」を象徴する出来事とも解釈したくなるだろう。

しかし、事はそんなに単純ではない。豊島は別として、王将リーグの結果を振り返るとまさに星の潰しあいである。羽生は豊島に敗れ、渡辺は豊島に勝ったが、その渡辺は、佐藤や三浦というそれぞれの世代の棋士に敗れていて、その関係は実に込み入っている。どの世代がどの世代に強いとは言えない関係なのだ。つまり、普通の「世代交代」というのは若い者が年老いた者を追いやるのだが、現在の将棋界においては、各世代の実力が均衡して大差がない、まさに「戦国時代」なのである。

なぜそういうことになるのか。要するに「羽生世代」が歳をとっても強いからだ。普通は歳が上のほうが衰えるのだが、将棋に対して若い頃から真摯にかつ現代的な科学的な方法で一番ストイックに取り組んできた人たち＝「羽生世代」がいる限り、それより若い世代は決して楽が出来ない仕組みになっているのである。不惑の年齢にさしかかりつつある彼らは、今までのように栄華を一身に集めることは不可能でも、相変わ

らず将棋界の一番のキー・ジェネレーションでありつづけるだろう、というのが私の見方だ。

とはいえ、王将戦以上に世代交代的な現象が顕著だったのが棋王戦である。挑戦者決定トーナメントのベスト8に羽生世代が一人も残らなかった。但し若手だけで占拠されたというわけではなく、羽生世代より上の「谷川世代」に近い高橋、あるいは「ちょっと下」の丸山、若い世代より上の窪田の3人が残っている。これも、世代交代というよりはやはり「戦国時代」と解釈した方が正確そうだ。

そして、王将戦も棋王戦でも「羽生世代ではない」挑戦者を受けて立つのは「ちょっと下の世代」の久保利明である。この世代は常に板ばさみで苦勞が多そうだ。

つまり、現在の将棋界は、若い世代の猛烈な押しあげが起きているが、単純な若返り現象ではなく、各世代が均衡しつつ、むしろそれぞれの世代から抜け出す個が光を放つ戦国の個人武将の時代なのだ。むしろ、世代別による勢力均衡図がどんどん無効化され、個人の力だけがものをいう時代になりつつあるのかもしれない。そして、その傾向は「これからの10年間」で、どんどん加速していくのではないだろうか。これからは、世代ではなく個の存在感や個性の時代だと私は考える。そして、伸びゆく若い世代には勿論、逆に羽生世代にも全ての優れた棋士にはチャンスがあるのではないだろうか。

さて、そういう時代において羽生と渡辺はどのような位置を締めることになるのだろうか。

まず、渡辺は、文句なく新時代の最有力の天下統一武将候補になるだろう。実力は今回の竜王戦で示した通りである。現在は竜王位しか保持していないが、その実力を考えると、複数タイトルを獲得するのは時間の問題のようにも思える。何より若くてこれから一番脂がのった時期を迎えるのが強みだ。今までの、木村時代、大山時代、中原時代、羽生時代の次に来る名前の最有力候補は勿論「渡辺明」である。

しかしながら、渡辺にとって苦しいのは、今まで述べてきた通りに、他の世代にあまりにもライバルが多すぎることだろう。古い時代に遡るほど、第一人者の実力が突出していて、彼らはごく少ないライバルを徹底的に叩き潰すことだけに専念すればよかった。それだけで、自分の王座は安泰だったのだ。しかし、羽生時代以降は、将棋が個人芸でなく共同的な科学研究にも似た世界になり、その叡智が共有化されたために、棋士のレベル差が著しく小さくなり第一人者も倒さなければいけないライバルが山ほど多くなってしまった。そして、その事態は時代を追うごとに加速化していく。なおかつ、羽生時代以降は年齢による衰えが小さい。従って、渡辺にとっては厳しい条件ばかり揃いすぎている。つまり、木村時代と現在の時代では、棋士を取り巻く環境があまりにも違いすぎるのだ。その中で渡辺が、どの程度「渡辺時代」を築けるかにも大いに注目したいところである。

一方の羽生、そういう意味では今まで僅差の実力差に取り囲まれながら圧倒的な実績を羽生が残してきたことにこそ、一番驚くべきなのかもしれない。つまり、それまでの第一人者の時代とは違い、羽生自らが先頭に立って将棋の研究体系化を推し進め、将棋を個人芸から知識共有型の科学に変えてきた。しかも自分の得た知識をある程度意識的に開示して、周りのレベルをお引き上げ、その力を借りてさらに自分のレベルを上げることを行ってきた。自分が独占的な第一人者でいられる条件を、自分からどんどん放棄してきたようなものだ。それなのに、なぜ圧倒的な「羽生時代」を築き上げることがなぜ出来たのだろうか。「どう羽生」はやはり簡単に解明できるような問題ではなさそうだ。

それでは、これからの羽生はどういう位置を占めていくのだろうか。不惑を迎えて、当然今後は体力という基本要素との戦いが付き纏うだろう。そして、渡辺をはじめとして今までよりも強力な若いライバルに多く直面することにもなるだろう。しかし、羽生はそういう事態に対処する能力を持ち合わせていると思う。羽生の最近の発言を考えても、あたかもこういう時が来るのをあらかじめ予測して、その対処方法を探ってきたようにも思える。

ある時は、現代の徹底的な研究将棋を逆手にとって、その定跡の穴を突いたり（竜王戦の最初の二局で見事

にやってみせたように)、逆に定跡のない道の将棋に天才的な局面の初期把握能力を発揮したりしてくれるだろう。

今月の将棋世界の糸谷哲郎の自戦記で、羽生が実戦では現れなかった意外な手を感想戦で指摘し、その研究外の手がパッと見の印象と異なり実に有効なのに糸谷が驚いたことを率直に書いていた。一昨年の竜王戦第一局が有名だが、羽生の他の誰にも真似できない独特の深い大局観も、今後大きな武器の一つになっていくはずだ。

羽生が時代の大きなうねりに直面しながらも、むしろめそれを楽しむかのようにどのように対応してくれるかが私は楽しみでならないのである。

先ほど、第一人者の時代について触れた。勿論、木村も大山も中原も偉大この上ない棋士だし、渡辺もその列に自分名前を連ねることになるかもしれない。しかし、羽生はそうした第一人者達の中にあっても特別な存在である。将棋自体の質を根本的な転換し、なおかつ羽生善治という存在にしかありえない唯一人だけの個性を輝かしく放っている。将棋界においてのみならず、羽生はワン・アンド・オンリーな稀有な存在なのだ。たとえ、今まで通りのような独占的な「羽生時代」ではなくなっても、その圧倒的な存在感は羽生が将棋をやめるまでは決して失われないはずである。

最後にまた少しだけ個人的なことを書いておこう。私は羽生ファンである。「どう羽生」で梅田が最終的に誰もが「将棋界全体」を愛するようになればいいと書いていた。そのことと個人の棋士だけを愛することは果たして矛盾するのだろうか

そんなことはない。人間を全体として皆愛していても、それぞれが特別に深い結びつきや関わり持ち付深く愛する特別に人を持ち、その両者が消して矛盾しないゆように。

羽生のことだけを特別に愛するという行為は、むしろ将棋の世界全体を深く愛することを可能にするはずだ。誰かを深く愛しないと、人類全体を愛することなど不可能なように。

最近痛感するのだが、結局私は羽生世代のことが一番好きなようである。羽生世代全盛時には、それが当り前すぎて見えなかったが、先にも述べたように、将棋に対する常にストイックな姿勢や、島朗の名言(というか本のタイトル)のように「純粹なるもの」たる他には見られないような澄みきった人間性。それでいて、人間味がないわけではなく、明るくてユーモア溢れるとてつもなく気持ちのよい人たち。いわゆる「ちょっとした世代」も羽生世代に近親憎悪的な屈折的な感情を抱きながらも、基本的には羽生世代の影響を色濃く受けた素晴らしい人たちだ。そして、それらを代表するのが羽生なのである

たまたま、私の場合は、それが羽生であるだけだ。それぞれの将棋ファンが、それぞれ愛する棋士をみつけて、とことんその棋士を深く愛せばいい。そうすることでこそ、あるいは、そうすることによってのみ、本当に将棋の世界全体を愛することが可能になるだろう。

地球は愛の惑星なのだ。

## 朝日杯中継サイト

木村一基八段が、渡辺竜王と羽生名人を連破して優勝。朝日杯を獲得した。

朝日杯は二次予選以降全て生中継していたが、実は木村も危ない苦しい将棋もあった。以下簡単に優勝への軌跡(笑)。(棋譜リンクをはっておきます。)

### 二次予選

#### 木村一基八段 対 遠山雄亮四段

遠山先手で石田流。難しい分かれから、木村が意表のソッポに桂を成ったのが好手で、以下木村が相手にあせらせて攻めさせる「らしい」展開になって結果的には快勝。

#### 木村一基八段 対 飯島栄治七段

これは私も生で見ていたが、終盤色々飯島に勝ちがあつて木村がすごく危なかった将棋。横歩取りで木村先手。終盤木村が決める手を逃し、さらに攻め間違えて飯島が的確に受けていればきれていた。その上、飯島が王手竜取りのやさしい筋を逃してしまう。木村もウッカリしていた。木村が急死に一生を得た感じの将棋。こういうのを勝たないとなかなか優勝は難しいということか。

### 本戦トーナメント

#### 深浦康市九段 対 木村一基八段 [asahi.com 観戦記](#)

先手深浦で後手木村の一手損角換わり。先手が早繰り銀から果敢に攻めたが、木村の 5 五角が名手でほとんど決まってしまったらしい。とはいえ、終盤難しそうどころもあったが、木村が冷静に読みきって勝ち。快勝、会心譜である。

#### 丸山忠久九段 対 木村一基八段 [asahi.com 観戦記](#)

丸山先手で、やはり後手木村の一手損角換わり。木村の構想が巧みで優位に立ち、丸山も辛抱して 2 八歩と 8 八歩と打つ珍形になったが、木村はおかまいなしに強襲して一気に寄せきってしまった。完勝。木村が攻めのきれ味をみせた将棋。

そして今日の準決勝と決勝。

羽生 vs 郷田は、先手羽生で後手の郷田が急戦矢倉。若き日の二人の戦いを髣髴させるような壮絶な斬りあいになったが、羽生が一手早く相手玉にたどり着いた。

#### 渡辺明竜王 - 木村一基八段

先手渡辺で相矢倉から、渡辺が先行したが、途中からは渡辺が木村のお株を奪って受けて木村があせらされている感じになった。竜王戦でもそうだったが、渡辺の手厚い受けは強力だ。渡辺が自玉を堅くしてから満を持して反撃に移った時は勝負あつたかにも思えたが、木村も決して諦めずに玉を早逃げして粘る。それが功を奏して、最後はきわどくなくて渡辺が木村玉を詰ますことが出来ずに投了。くわしい感想コメントがまだないので分からないが、渡辺に勝ちがありそうな将棋を得意の受けで粘ってうっちゃった感じか。



決勝の解説で、渡辺は最後詰むと思ってしまったことを、相変らず正直に告白していた。

### 羽生名人 - 木村八段

木村先手で通常角換わり。羽生は後手でも角換わりを指すが、最近横歩取りが多かったのでちょっと新鮮だ。羽生が趣向をこらして9筋をつきこさせる間に攻撃態勢を築いて後手ながらも先攻。羽生の攻めが厳しくて強烈なように見えたが、そこから木村が「千駄ヶ谷の受け師」の本領を発揮。7七を銀でも角でもなく意表の金で取ったのも力強かった。それでも、あせらずに攻めれば羽生がよかったという感想があるところを、実際には普通に鋭く攻め込んだが、9筋を突きこした木村玉に予想以上に生命力があった。終盤は、解説の渡辺と行方も頭を悩ます難解で手に汗握る大熱戦に。木村らしく7六金打とがっちり受けて、3六桂の捨て桂で自玉を緩和して、相手に詰めるをかけて自玉がきわどく詰みを逃れて勝ち。決勝戦にふさわしい将棋で優勝を決めた。

予選の飯島戦をなんとか切り抜け、深浦と丸山という実力者を一手損角換わりで切り捨てた。特に深浦には王位戦のプチ・リベンジを果たした。そして今日は木村らしい受けと粘りの将棋で、竜王と名人を連破。文句のない優勝といえるだろう。

というわけで、木村先生はああいういいキャラクターをされているので、ここはスポニチさんに管轄外でも勝者罰ゲーム写真を執り行っていただきたいものである。ダメっすか？

[NHK 杯 HP\(棋譜閲覧可能\)](#)

二人の対局者が大層魅力的で、久々に本当に将棋だけに集中して楽しむことが出来た。ありがたいことである。

後手の糸谷の一手損角換わり。糸谷の作戦は、郷田戦でもみせた「相早繰り銀」。一手損では、先手が早繰り銀、腰掛け銀、棒銀のどれを採用しても、後手は腰掛け銀にするのが普通である。それが通常の角換わりと違うところで、一手損している上に相早繰り銀にすると、攻め合いになると後手はなお困るはずだが、そういう常識が通用しないのが糸谷流。糸谷が、この作戦をとるのにも当然彼なりの理論的根拠があるはずだ。前回のように感想戦で講義して欲しかったが、残念ながら時間が足りなかった。

糸谷が先攻したが、羽生は局面を収めてじっくりとした展開に持ち込んだ。解説の森内が指摘していたが、激しい展開は糸谷のペースになりがちなので、そういうのも羽生は意識した指し方だったのかもしれない。糸谷も、決勝だということを別にしても、やはり若干普段の自分のペースでは指せていない感じだった。羽生は、そのように相手に応じて敏感に柔軟に対応するところでも卓越しているのだ。

とはいえ、随所に糸谷らしさは満載だった。だいたい、初手からして読み上げが終わらないうちに指しそうになって、何とか我慢していたし。考慮時間に入ったことを告げられても、お構いなしに着手。森内も「時間は減らないんで、いい終わるくらいまでは待ってもいいと思うんですけどね。」苦笑していた。勝負所でも、お得意の完全ノータイトム指しが何度も炸裂。それが糸谷ペースなのだが、羽生相手にやるのはかなり勇気がいると思うのだが、糸谷は平気である。本当に観ていて楽しい。

将棋は、羽生がうまくやったが、糸谷も懸命に粘って羽生も少々手を焼いていた感じである。森内が、自分が糸谷に中段玉にされてうまく粘られて困った事を述べていたが、羽生ファンからすると竜王戦の渡辺の中段玉のことを思い出して、ちょっといやな展開だった。糸谷の将棋の本質は「受け」といわれるが、それがよく出ていたと思う。6二銀打とかも、多分上の世代は仕方なくても打てないと思う。やはり感覚の相違があって面白い。

しかし、最後は羽生がやっと攻めきって勝ち。1六歩と、じっと突いたあたりは羽生流だった。4二歩成の時に、はっきりとではないけれども手が震えかけていた。あの辺りでは、素人でもやっと羽生が勝ちになったと分かったところである。

感想戦でも、糸谷流。すぐに、羽生に「逆転したと思ったんですけども。」問いかける。表現はよくないかもしれないけれど、我々アマチュアが、負けて素直に悔しがるのとあんまり変わらない。そのように正直に感情表現するところが大変好ましい。以下も、感想戦を主導して、「こうするべきだった」と熱心に喋りまくっていたが、矢内が申し訳になさそうな時間切れを告げると、羽生も森内も笑うしかなかった。

節目の第六十回目の優勝は羽生。三連覇で優勝回数も単独一位の九回。やはり羽生が将棋界の第一人者であることを、これでもかというばかりに再確認させられるような大会になった。

次に優勝して十回だと「名誉 NHK 杯」だそうである。重いカップをかかえながらのインタビューだったが、「カップも本当に重いですけども、大変思い記録なので一生懸命やって目指したいと思います。」と軽いジョークを交えて抱負を述べていた。糸谷も「最後負けると準優勝でも悔しいので、次は重いカップを持てるように頑張ります。」と、カップネタをちゃんと受けた上で、素直に悔しさを表現した上で優勝を目

指す宣言をしていたのが、いかにもらしかった。

来年の今頃は、何ら憂いも心配事もなく、NHK 杯の決勝を楽しめるようになってもらいたいものである。

## 久保二冠堅持 王将戦第六局 vs 豊島挑戦者 棋王戦第四局 vs 渡辺挑戦者 2011年03月22日

---

久保利明二冠にとっては、本当に大変な時期の防衛ロードになったが、見事な内容で難敵二人を退けた。現代的な将棋の風潮をまったく意に介さないかのような奔放な久保流の振り飛車が爽快だった。

### 王将戦中継サイト

王将戦第六局は、久保先手で石田流。豊島は、やはり本石田に組ませる作戦に出た。久保は第四局同様 6五歩の仕掛けだが、前は 7八金型、今回は 5八金型と常に微妙に形を変えてくる。何度か書いているが久保の振り飛車の研究は、同じ形を突き詰めて優勢にしようとする居飛車的な研究と違って、次から次へと指せそうな形を繰り出して、あとは力で勝負するということがあるような気がする。きわめて現代的な振り飛車だが、伝統的な振り飛車の水脈と確実につながっているものがあるのだ。

本局では、9八銀の辛抱から、見事な捌きと辛抱とを組合わせた緩急自在な指しまわしで、いつの間にか振り飛車必勝の局面を築きあげてしまった。本シリーズを通じて、序盤研究では互角かあるいは豊島の方が少し深い、また終盤では豊島も久保と完全に互角に渡り合っていた。しかし、中盤のいわゆる棋士としての独創的な「大局観」が必要とされる局面で、他の棋士には決して真似することができない独特な感性を發揮して、その部分では完全にシリーズを通じて豊島を圧倒していたように思う。「捌きのアーティスト」の看板に偽りなしで、まさに久保にしか出来ない個人芸の世界で、さらに最近それが進化して達人の境地にまで至ったような充実振りだった。

豊島の局後の感想が、それを分かりやすく物語っている。

(豊島は)「中盤のよくわからないところで差をつけられることが多かった」と語っていた。久保王将の印象を聞かれると、「すごい強かったです」。あどけなさが残る顔で、さわやかに笑っていた。

そう、久保は「すごく強かった。」その通りである。そして、それをきちんと言える豊島にもなんとも好感が持てた。

久保の今回の震災についての言葉も素晴らしいので、ここに全文引用して記録に残しておこう。

(大震災後の対局について)「正直、ここで対局していいのかという思いもありましたけれど、対局をやると決まったら、自分のできることをやるしかないのです。粛々と対局に臨もうと思っていました」(久保王将)

「私も兵庫県出身で、阪神・淡路大震災の際には大変なことがありました。東北地方の方々には頑張っていたきたいなと思っていますし、私も何かできることがあればやりたいと思っています」(久保王将)

### 棋王戦中継サイト

久保もハードスケジュールで大変だったが、渡辺も東京在住で、大きな被害はなかったものの、様々な混乱や不安要素のある中、なかなか万全の調整というわけにはいかなかった筈である。勿論、本人はそれを言

い訳にはしないだろうが。

後手の久保のゴキゲンに、渡辺は超速 3七銀。快勝した超急戦を採用しなかったのは、自身の研究で何か不安があったのか、それとも具体的な問題ではなく研究だけで決まりかねない形なので、連採するのは避けたのか。

よくある飛車銀交換になる形になりそうだったが、渡辺が新研究を披露。以下、渡辺が 5七銀の好手から快調に攻め立てたが、こういうところからの粘り方が現在の久保の一番の特徴である。王将戦でも述べたように、とにかく久保の中盤は一筋縄では行かない。

飛車交換に持ち込んだあたりでは、難しくなったそうである。しかし、渡辺も終盤戦の競り合いの強さを発揮して、妙手順ではっきり勝ちの場面にまで持ち込んだ。これも、竜王戦などで渡辺がみせつけていた強さであって、両者の持ち味が発揮された将棋になった。

ところが、最後に落とし穴。 7六玉が詰める逃れの詰めるで、劇的な逆転劇。無論、渡辺にすれば本意きわまりないのだろうが、久保がなんやかやとアヤをつけて簡単には勝ちにさせなかったために生じた逆転劇とも言える。竜王戦で、羽生が渡辺を最後のところでうっちゃった将棋とも、ちょっと感じが似ていると感じた。

羽生と渡辺が現在覇権を争っているわけだが、久保も将棋の内容、強さで全然この二人にひけをとっていない。現に、「二冠」なのは羽生以外では久保だけなのだ。しかも、「振り飛車」という武器がある。そして関西。ますます、その存在感を増した二冠防衛だった。

そして、渡辺は相変わらず、局後に正直だった。

(「(101手目は)ずっと 7二龍で勝ちと思っていました。指す直前に 6三龍もあると気付いたんですが、いろいろ考えるのはよくないと思って 7二龍と指しました」(渡辺竜王)。逆転負けの心理を吐露。さすがのサービス精神だ)(中継ブログより)

普通なら悔しくて言えないようなことを、サラッと口にしてくれる。こういうところが渡辺の魅力である。

それにしても、今回の二つのタイトル戦での久保の将棋は本当に個性的で面白かった。魅せる将棋である。是非、プロ棋士の皆さんには深い久保将棋分析を期待したいところである。

## 名人戦棋譜速報

実は我々が存在している世界だけが唯一存在しているわけではない。パラレル・ワールド。我々の世界と同時並行して、類似のあるいは全く異なる無限の世界が同時存在しているのだ。そして、それらの世界は決して別個に切り離されたものではない。本当のところ、各個人が毎瞬間毎瞬間に、どの世界を選択するかを自ら決定し無限の各世界を行き来しているのだ。

世界は実在しているわけではない。じつは各個人 あなたやわたし の本人も気付かぬ巨大な空想力が生み出したフィクションに過ぎない。西欧哲学の唯我論や仏教の唯識がかりうじてその事実にかすって気付いているがまだまだ生易しい。我々はその真相によろやく本当に気づきつつある、あるいは気づかされつつある。

従って実は世界にはありとあらゆる可能性がある。だから、今回羽生が名人を失ったのも、単なる一つの或る世界での出来事に過ぎぬ。他の世界では羽生が四連勝して名人を防衛していた。いや、あるいは羽生が二回目の七冠の栄華にひたっているどこかの世界だって存在する。勿論、森内七冠だって、渡辺七冠だって、深浦七冠だって、藤井七冠だって、そういう世界は実在する。渡辺が羽生に竜王戦で四連勝したのも単なる夢に過ぎないのだ。

ここで誤解しないでいただきたい。世界は「私」が創り出したものだが、あなたがた各個人は決して私の勝手な創造物ではない。あなたがたも、私同様確かに実在している。あなたも、無限に存在する世界のうちから「私」が今所属しているのと同じ世界をたまたま選択しただけだ。あなたも、羽生が名人を失うことを自ら「選択」しただけのことである。森内ファンや極端なアンチ羽生 実例をだして申しわけないが例えば憎っくき Zeirams のような がそういう世界を選ぶのは納得出来るだろう。しかし、羽生を愛してやまないわたしやあなたが、なぜこんな世界を自ら選択したのか不思議に思うかもしれない。しかし、それはあなたや私が、心の深いところでそういう羽生を望んでいたからだ。試練に会う羽生を見たかったからなのだ。その責任は徹頭徹尾、わたしやあなたに存在する。

但し、同じ意味でこれから羽生がどうなるかも、わたしやあなたの選択ひとつにかかっている。羽生時代が静かに終焉の時を迎えるのか、あるいはこれけから再び羽生が七冠を獲得するのは・・・。

羽生七冠の現在の一応の最短の可能性は、来年の名人戦である・・・。

・・・とホルヘ・ルイス・ボルヘスの三流の焼き直しのようなミニ小説を私が書いたのは、それくらい私にとって羽生が名人でないという事実が現実的ではなく受け入れがたいからだ。要するに現実逃避のSF小説をしたためてグチっただけのことである。付き合い合わせた読者の皆様には心より同情申し上げます。いや、私の反応パターンは昔からちっとも変わっていない。渡辺が羽生に竜王戦で四連勝した際にも、やはり私は**現実逃避のSF小説**を書いている。今読むと自分でも大笑いだ・・・。

まあそんなことは、どうでもいい、名人戦第七局は本当に素晴らしい将棋だった。

そして振り駒の意味の大きさ。森内の先手でも強さ、特に持時間の長い将棋での強さは驚異的である。羽生も、今回は先手の矢倉で森内を完璧に葬り去っている。この二人のレベルだと、一手の差が限りなく大きい。まるで、将棋の神様同士の勝負が振り駒の時点で決してしまうかのようだ。ただし、将棋の神様は振り駒の結果まで予測可能だが、今回はその大任が渡辺愛生奨励会員の手にゆだねられた。振り駒の結果、

森内先手。その瞬間、今回の名人戦は終わった。

いや、私は羽生ファンとして悔し紛れでいっているのではない。それくらい今回の先手の森内の指し回しが素晴らしかったのだ。今回の森内のような先手での指し方をされたら、一体羽生でなくても誰が勝てるというのだろう。

戦型は予想通り後手の羽生の横歩取り。但し羽生は、最近流行の 5二玉型ではなく 8五飛プラス 4一玉型を選択した。そもそも、松尾流の 5二玉型が出現した理由は、今回森内も採用した新山崎流対策のためである。居玉のまま激しく先手が攻め込む形で、後手もそれをまともに喰らうと3筋からの先手の攻めがきつすぎる。だから玉を 4一でなくあたりの弱い 5二に据えておいて、先手の新山崎流を牽制するというのが基本コンセプトである。その辺の事情は将棋世界の勝又教授の講座や最新の横歩取りの定跡本に詳しいので各自参照されたい。

しかし、敢えて羽生は旧型の 4一玉を採用。これは「新山崎流はこわくないですよ、対策がありますよ。」という意味である。しかし、森内も堂々とその新山崎流を選択。今回は森内は後手でも「堂々と」二手目 8四歩で矢倉を(出現しなかったが角換わりも)受けてたつた。森内の素晴らしかったところだ。

当然、羽生の対策が注目されたが、最近では先手が指しやすいとされている 8六歩以下の定跡手順をたどる。そして、王将リーグで先手羽生、後手羽深浦の対局の進行に絞り込まれた。

その対局の結果は先手の羽生勝ちだったが、羽生は後手でも指せるのではないかとひそかに考えていたのだろう。そして、 3六歩以下の修正手順を提示した。

一方、森内も似た形の経験があった。 [ツイッターの藤田麻衣子](#)さんのつぶやきで知ったのだが、彼女が観戦記を担当した、先手杉本、後手森内の今年の竜王戦1組のランキング戦である。やはり、横歩取りの将棋で先手の杉本が新山崎流を採用。形はかなり違うのだが、杉本がやはりあるタイミングで今回と同じように決行 5三桂左成を決行。結果は森内がなんとか勝ったが、感想戦で森内は 5三桂左成を軽視したと嘆いたそうである。

今回の本譜とは全然形が違うので比較できないが、森内はある条件では 5三桂左成が有効だとは感じたに違いなく、今回の名人戦に影響が皆無だったとは言えないだろう。

実際は封じ手は 5三桂左成と 8二歩の二択とされていた。どちらかということ、じっくりいく 8二歩の方が森内好みであって、激しく 5三桂左成と踏み込むとのっぴきならない局面になる。この決断のよさが結果的に功を奏した。ただ、やはりその背景には杉本戦などの過去の研究の蓄積がものをいったような気がする。やはり現代将棋では研究が重要なウェイトを占めるのではないかと痛感したのである。

とはいえ、プロ将棋の場合、少しくらい模様がよくなっても、そこから勝ちきるのが本当に大変である。二日目の二人の攻防は掛け値なくトップ二人の攻防であり素晴らしかった。

森内の予定の 4五銀に対して、飛車交換になりそうな 3二飛でもなく攻め込む 5六桂でもなく、ちょっと辛抱する感じの 3五飛が、いかにも逆転を狙う羽生流だった。シリーズ前半では急ぐ手が多かったという印象なので、最初からこんな風に指してくれればと、つい思ってしまう。

以下、羽生が粘り強く指してなにやら難しそうに。二人の当然の読み筋とはいえ、金を取って龍をつくれるのを我慢してじっと歩を払う 8二飛などいかにも名人戦である。あのあたりでは、控え室も形勢不明と評していたようである。

但し、森内の 4四角の決断が素晴らしかったそうで、確かにその後の展開を見ると随分先手だけしっかりしていて後手がバラバラで、いかにも先手が勝ちやすそうな形になった。

全体を通じて必死に羽生が手段を尽くして粘るが、森内が冷静に突き放してどうしても差が縮まらないという展開である。最初に述べたが、森内が先手の利を最大限に生かして、本当にトッププロの高いレベルで、その一手の差をいかしている将棋という印象だった。

その後も、森内に 1六飛という渋い巧手が出る。夕方の BS 中継では残念ながらこの手は全然検討されなかった。今回に限らず、控え室の検討が全く当たらず、二人だけが雲の上を行くがごとく。まさに名人戦だった。

羽生が二枚の角を使って必死に防戦するのみ見応えがあったし、羽生ゾーンに二度も銀を打ち込むなど執念をみせたが、ことごとく森内が冷静にかわした。名局だけれども、結果的には森内の完勝という将棋だった。

森内は、勿論若い頃から強かったけれども、失敬な言い方をすると正直に言うと少し人間的にちょっと深さを感じないようなところもあった。しかし、厳しい勝負を経て本当に人間的にも申し分なく重厚で素晴らしい。対局姿を観ていて、ちょっと西郷隆盛のようだとも思ったのである。最初から人間的にも出来あがっていた羽生と違って、年月を経て徐々に深い味を熟成してきたのが好ましく感じる。

そんな森内だが、最近亡くなられたた児玉清さんが司会をつとめた[クイズ番組「パネルクイズアタック25」](#)に出演する際に、森内はクイズマニアとしても有名である、その練習相手をつとめたのが羽生だそうである。結果に関係なく、とても爽やかな名人戦だったのは当然である。



## 棋聖戦中継サイト

千日手指し直しの激闘になり、二局目も相穴熊の 200 手超えの訳が分からない将棋であった。今の所、何が起きたのかよく分からない。本当に二人とも将棋が好きである。深浦は、NHK 杯で野月が言ったように「諦め悪い将棋」だし(こうしてプロ棋士がサービス精神で言った言葉をファンは悪用し続けるのだ)、羽生も名人戦が終わったばかりなのに将棋が好きで好きで仕方ないようだ。但し、これだけは言える、もし対局者が島朗だったら、もっとあっさり決着がついていただろう、と。

第一局は、これも難しい将棋で、阿久津は「形勢判断不能」と言っていた。ただ、先手が指せるのではないかという声もあり、例えば棋界随一の投了魔、島朗は 48 手目でこんなことを言っている。

「 9 九銀 9 七香 8 八銀は、指されたら投げたくなりますね。ね、佐藤九段」(島九段)

言われた佐藤康光先生も困惑気味である。なぜなら、つい先日の達人戦でもこの二人は対局しており、佐藤が良さそうだが、他のどの棋士でも絶対投げないであろう局面で投了美の巨匠？島朗がアッサリ投了して周囲を驚かせているからである。佐藤は「もうちょっと調べてみましょう」と島をなだめるのに必死だったのであった。

ところがである。羽生はアッサリ千日手にしてしまった。島が(羽生に対して)投了しようとしている将棋を羽生は難しいので「もう一局」とのたもうたわけである。いかにも羽生らしい。

最近の NHK 杯で、永瀬四段が先手と後手で二連続千日手にして話題になった。永瀬の独特の千日手哲学？については、[私の記事](#)を参照していただきたいが、実は若き日の羽生も隠れた千日手王？だった。現在の羽生では考えられないことだが、あまり序盤はうまくなく、終盤の(言葉は悪いが)クソ粘りで次々にベテランを痛い目に合わせ続けていたのである。もしかしたら、羽生は今の永瀬を見ていて、ちょっとばかり自分若き日を思い出して共感しているのかもしれない。(そんなわけではないというツッコミはごもっともである。

とにも角にも千日手になったのだが、後手になった羽生が採用したのが、なんと藤井流角道オープン四間飛車、角交換穴熊レグスペ 正式名称がないけれども、とりあえず後手版新藤井システムだった。

はっきり言って今の所藤井以外誰も指さない戦法を羽生がタイトル戦で採用したわけである。羽生は名人戦でも、先手でいわゆる「藤井矢倉」のような形を用いていた。(厳密には藤井矢倉とは違う形で藤井本人も、ささやかな抗議の意味をこめて「あれは藤井矢倉ではない」と述べたそうである。)

羽生は明らかに藤井の作戦クリエイターとしての才能を認めている。そして、口の悪いファンは、藤井の独創的な作戦を、羽生の絶対的な終盤力で引き継げばそれはもう無敵だと言う・・・。

とはいえ、今回は後手がうまくいったとは言えず、相穴熊でお互いに全く手出しが出来ないような、異常な相穴熊戦になった。先手の深浦が駒得をしたが、自分の金が遊んでしまっている。なおかつ、全ての筋に歩を打ってしまっているために、穴熊攻略の急所になると金づくりが出来ない。後手の羽生も、やはり歩切れで駒損で攻めの糸口をつかめそうにない。要するにどちらも、どうやって勝てばいいのか分からない将棋になってしまったのである。

そして、再び島朗が勇躍登場したことは言うまでもない。

「手を渡された方が困りますね。指す手がないか。私が代わりに投げたいです」(島九段)

「将棋は精神の勝負ですね」(島九段)

「 7七銀と上がれば千日手ですね。シンプルだ」「私の願望、絵空事です。いや、疲れてきたので願望とまではもう言えません(笑)」(島九段)

島がこの将棋を見て、自分の辞書にはありえない将棋だと思ったのか、あるいは自らの投了哲学?を改善して、とことんまで指そうと決意したのかはご本人に問いただしてみないと定かではない・・・。

深浦が、現場にいた杉本顔負けの、「自玉のリフォーム」を何度も何度も繰り返して粘り抜いたが、羽生の 5 四角が、自玉をいわゆる Z どころか詰めるも絶対からない「詰める Z」(造語)の好手で、再度の 5 四角引きが詰める逃れの詰めるで、大勢決したようである。

羽生のスタミナもすごかったし、深浦の決して折れない心もすごかった。トッププロが将棋に勝つというのは、これほどまでに大変なことなのである。

深浦は前夜祭でこんなことを言っていたそうである。

「こちらは芝生が多く、私はサッカーファンなので見事な芝生だなと興奮してくるのですが、明日はあまり興奮せずに(笑)」

第一局でも、作戦について去年が三局で終わったので作戦のストックがあるので、と自虐ギャグで笑いを誘ったそうである。どうして、藤井といい深浦といい羽生のライバルたちはどうしてこうも魅力的なのだろう。

ただ、羽生から王位を奪取した頃の深浦は、もっとストレートに闘志満々で羽生を倒すことだけひたすら考えていたようなところがあった。もっとギラギラしていた。深浦の人間的な成熟と魅力を素直に感じながらも、勝負師という職業の難しさを感じる今日この頃である。

## 王位戦中継サイト

まずは、広瀬さんのことから。私を含めて終局後に羽生ファンの喜びが爆発したようだが、要するにそれはそれだけ広瀬に苦しめられて大変厳しいシリーズだったからである。

第一第二局で見せた終盤の正確な読み、切れ味。今まで羽生を負かしたり苦しめたりした棋士はたくさんいるけれども、少なくとも終盤では羽生がやはり一番（少なくとも相手と互角以上）ということには揺るぎがなかった。しかし、広瀬に関して言うと、場合によっては純粋な終盤力でも羽生より首の皮一枚上回るのではないかと思わせるところすらあった。

そして言うまでもなくノーマル四間飛車穴熊という特殊な武器、技能。第五局では完膚なきまでに羽生を叩きのめした。という表現は適切ではないかもしれない。全く相手の力が出せない状態に追い込んで自分だけスイスイ指して勝ったという感じである。

かと思うと第四局のように前例をたどってあっさり負けたり、第三局も似た感じで「なんとかなる」と思っていたらどうにもならずズルズル負けたりする。もともと振り飛車党というのも関係しているのかもしれないが、わりと大らかに大局観で局面を把握して指して、うまくいかない時は完敗というケースも多いように感じる。

要するに、強い時もあれば弱い時もあり、強みもあれば弱点もあって、まだ棋士として完成されていないということである。逆に言うと、そういう状態でこれだけ羽生と戦ったポテンシャルの高さを感じずにはいられない。まだまだ伸びしろがありそうな未完の大器なのである。

その点、若くして完成していて隙のない渡辺と比べても、未恐ろしい存在である。多分、現在と比べてどんどん精度をあげつつも、やはりある程度は波のあるタイプであり続け、その変わりに調子のいいときは誰も手がつけられないというタイプになっていくのではないだろうか。

さて、最終局は第五局の裏返しのような一方的な将棋になってしまった。相穴熊はえてして一方的になりがちなのだが、それにしても極端な将棋が二局出てしまった。

広瀬が 4五歩と仕掛けたタイミングが恐らくポイントで敢えて金を4九の位置のまま仕掛けたのには形に通曉する広瀬の深謀遠慮があったはずである。

それに対して、普通は 8六歩を入れて飛車が走れるようにしておきたいところを、アッサリ 4五歩と取って角を打ったのが羽生の工夫で、それが少し広瀬の意表をついたのかもしれない。

結局、羽生の飛車は9二に逃げこんだので、8六歩は不要になったが、羽生は長考を重ねてかなり先のところまでの図式を思い描いていたのだろう。

最近の二日制での羽生は、どうも序盤から中盤にかけてあまり良く出来ずに、少し苦しめの終盤を持ち前の力でなんとかするという展開が多かったような気がする。

その点、今回はその後の 4一香もいかにも感触の良さそうな一着で、その後の 4二飛の転換とあわせて実に中盤をうまく組み立てることに成功した。立会いの森先生もこの手を指摘していて、指された時には「ほらほらほらほら～」とわが意を得たと喜ばれたそうである。他にも「あやややや」という不思議な擬音を発しておられたそうである。まさしく加藤一二三先生と並び称されるべき存在である（意味不明）。

広瀬も馬をひきつけたり 3七銀と埋めて穴熊の再構築をはかった。後手が先手以上に鉄壁なので、羽生がいいにしても、アマチュアならどうこの穴熊を攻略するのか途方にくれてしまいそうところだが、4八

の地点を清算して 4七歩と叩くのがいかにも急所の攻めで、と金が出来てはさすがに勝負あった。ちなみにGPSはこの攻めをしっかりと指摘していた。この程度はプロならすぐ見える筋かもしれないが、しっかりしたものである。

広瀬もさすがに相穴熊テクニックを発揮する余地は全くなかった。一回悪くすると挽回がきわめて困難という相穴熊の特徴に、スペシャリスト広瀬自身が泣くという皮肉な結末になった。一方、羽生は相穴熊を避けずに挑んでいったのが好結果をもたらすことになった。

これで、羽生は大山康晴十五世名人の持つ通算タイトル獲得 80 期 (歴代 1 位) に並んだそうである。中継ブログに羽生のインタビュー - が掲載されているのだが、これが大変素晴らしい。

## 王位戦中継ブログ 記者会見

最近、羽生は書籍も多数出しているし、インタビューも多い。それだけに、さすがの羽生も同じ内容を繰り返すことが少し多くなってきたのだけれども、今回のインタビューで若手棋士、現代の将棋について述べている部分が大変新鮮で興味深かった。

「この王位戦もそうですし、王座戦もそうなのですが、若い 20 代の人たちが台頭していて、一局勝つというのが最近は大変だなとしみじみと実感することが多いです。もちろん記録が懸かっているというのはあるのですが、それ以上に私自身も新たにいろいろと研究・勉強しながらいまの将棋を理解して、それにプラスして自分の個性を出せたらいいなと思っています」

「戦術的なところで昔の将棋と今の将棋は変わってしまっているんで、その辺のところを意識的にマスターしていくというか、知っていくということをしないと置いていかれてしまうという感覚があります。たとえば今期の王位戦では、広瀬さんの振り飛車穴熊という非常に強力な作戦がありました。棋譜を見ても分からないところがあるので、実際に真剣勝負で対局していく中でしっかりと感覚というか戦術を自分なりにマスターしていくことになると思います」

この若手や現代将棋に対する、謙虚とも言え、柔軟とも言え、貪欲ともいえる姿勢はどうだろう。

今回の広瀬や渡辺、あるいは関西の豊島や糸谷や菅井など、現在は若手が猛烈な勢いで実力をつけ存在感を増してきている。基本的に世代交代の真っ最中という見方も可能だろう。

その中で羽生は、彼等と戦うと同時に自身の年齢とも戦わなければならない。当然厳しい状況である。

しかしながら、こうした羽生の発言を聞いていると、そうした状況をむしろ楽しみながら自分が進化するきっかけにしようとしているようにも思える。

今回の王位戦でも、広瀬穴熊の威力や、強烈な終盤力を体感しながら、いつの間にか広瀬(若手)将棋のよさを戦いながら吸収して、自分の栄養にしてしまった感すらある。しかも結果まで残してしまった。

普通なら、年配者は若い者によって乗り超えられてゆく宿命にあるのだが、羽生の場合は逆に若い人間の強さや勢いをすべて吸い込んで、さらに強大になっていくような柔軟さがある。若い人間が強くなればなるほど、それに逆らわずに便乗して強くなっていくしたたかさともいえるべきか。

年を取ると、普通は自分の価値観に固執して自己が硬化していきがちなものだが、羽生の発言を聞いていると、年を取ってますます好奇心旺盛で柔軟で形をかえていきそうである。羽生は実際には 40 代なのだが、全く「ベテラン」という雰囲気ではないのも、その辺が関係しているのだろう。

恐らく、今後の羽生のさらなる進化のキッカケとなり力を与え、結果的に最も助けることになるのは渡辺

や広瀬といった若手棋士たちなのだ。

[王座戦中継サイト](#)

少し前に朝日新聞の「be」(9/10)に掲載された渡辺明特集記事。そのインタビューより。

(対局のない日の過ごし方) 息子が小学校に行ったあと、朝8時から夕方5時くらいまで将棋の勉強をしています。夜にも3時間くらい、棋譜を並べたり、詰め将棋を解いたり。あとは「最新型」の研究です。対局が近ければその準備も必要。なんだかんだとやることは多いですね。研究なしでも将棋は指せますが、それじゃあ楽な仕事ということになる。日々の研究くらい、会社勤めの方々と同じくらい家でやらないと申し訳ないです。

(東日本大震災について) あのかときは将棋の研究をしていてどういう意味があるのかといろいろ考えました。結局、自分にできることはそれくらいしかない、10万円×対局数を寄付することにしました。

三浦弘行の勉強量の多さはつとに有名である。一日10時間と聞くと誰もが驚く。しかし、渡辺の場合、仮に昼食休憩1時間としても、計11時間である。対局と仕事のない日は多分毎日そうしているのだろう。三浦の勉強量が有名になったのは、多分彼が正直者でウソがつけないからだろう。恐らく言わずにもっと勉強している棋士は結構いそう。そして渡辺がこうしてアッサリ公開したわけである。三浦とは別の種類の正直者である渡辺らしい。

また、その理由が「一般社会人に申し訳ないから」というのも渡辺らしい発想である。棋士によっては自由業であることを満喫して自由気儘に過ごそうと思うだろうし、それは別段責められるべきこととも思えない。しかし、渡辺は「棋士」という一つの職業者としては社会人と同じくらいやるべきだと考えるのである。大変「社会性」を意識している。

但し、私も一番忙しい時には一日12時間くらい毎日会社勤めしていたこともあるが、実は12時間本当に働きづめということではなく無駄な時間もかなり多い。そうでなければとてももたない。しかし、渡辺の場合、本当に集中力と根気のいる将棋の勉強を長時間行っているようである。これはプロ棋士でも誰もが出来ることではないだろう。やはりイチロー同様、渡辺も努力することが出来る天才なのだ。

寄付についても渡辺の「社会性」がよくあらわれていることは言うまでもないだろう。しかも、勝利対局ではなく対局数にしているところに自分に厳しい渡辺らしさが出ていると思う。

こう書くと、ものすごく隙のない真面目な人物のように思えるかもしれないが、「妻の小言」に見られるように実はものすごく隙があったりするの面白いところである。

そんな渡辺が羽生からストレートで王座を奪った。一応は、将棋界における覇者の交代(につながるかの始まり)と言えるかもしれない。

かつて、木村義雄は大山康晴に名人を奪われた後の会見で「良き後継者を得た」と言い残して将棋界から身をひいた。勿論、羽生の場合はまだまだ巻き返しもあるし戦い続けるだろうから、そんなことを言うはずもない。また、言ってもらっては困る。

また、渡辺も竜王連覇と羽生に対する強さ以外では、まだ「渡辺時代」といえるような実績は残していない。それは渡辺自身も十分承知だろう。

しかしながら、最初の記事を読んでいただいた方なら、渡辺が少なくとも「覇者」としての資格が十分ある人間であることは認めてくださるだろう。

だから、ここでは私がオマエ一体何様だといわれるようなのをかえりみずに羽生ファン代表としてこう言ってしまう。

「良き後継者を得た。但し、まだまだ戦わせ続けてもらうからね。」

第三局は大変な死闘になった。この二人の場合、時々こういうことになる。初対戦の竜王戦の第四局、第七局、去年の竜王戦の第五局。そして結果的には全部渡辺が勝った。

この渡辺の羽生に対する勝負強さは一体何なのだろう。ちょっとした隙を見逃さない強靱な粘り、抜群な手の見え方、どんなに将棋が長引いてカオス状態になっても崩れない鉄の心。羽生ファンとしては、なんで羽生相手だとこんなに強いのか、まるで前世で何か深い因縁でもあったの难道うかと泣き言を並べたくなる。しかし、それらの名局を比べても、やはり少しずつ内容に変化が出てきて、特に今回の王座戦では全般的に渡辺が押していたと思う。もともと手が見えるタイプだけれども、ますます精度が上がって、相手が少しでも隙をみせると的確にそれをつく迫力があつた。要するに着実に強くなっているのである。

一方、羽生も相変わらず人並み外れた終盤力であっても、細かいところでミスしたり集中力がきれる瞬間があつたようにも思える。盤の前で長時間座って集中して考え続けるというのは、多分素人には想像もできないような過酷な作業のはずである。羽生の年齢を度外視して考えることは出来ないような気もする。やはり今回は、若い方の充実ぶりと勢いが上回っていたという印象をぬぐうことはできない。羽生は一度時間をおいて体勢を整えなおして、再び渡辺と対峙することになるのだと思う。

さて、今後の羽生、羽生のついては[第二局の記事](#)で既に十分述べてしまった。とにかく今まではずっと「第一人者」の重みを肩に背負い続けてきた。しかし、今回渡辺という存在がさらにクローズアップされたのは、時期的にもむしろ羽生には喜ぶべき出来事ではないだろうか。

もう少し肩の力をぬいて、むしろ渡辺をはじめとする若手たちとの戦いを実験的にいい意味で遊戯のように大胆に行うことが出来るようになるのではないだろうか。

羽生がこれから武器にするのは経験による「大局観」、独特の局面に対する嗅覚だろう。だから、今までのように相手と正面から渡り合っただけでガツプリ四つで消耗戦を行うのではなく、軽やかに盤上を戯れ、モハメド・アリのように「蝶のように舞い蜂のように刺す」戦い方。実力十分の若手がいつの間にか体勢を損ねて、しかも理由が分からずに「なんでだろう」と首をかしげるような将棋。私は、そんな羽生善治を見てみたいのだ。

具体的には、先日のA級順位戦の渡辺戦のようなイメージ。渡辺が「仕方ない、仕方ないとやっているうちに非勢に陥った」と述べていたのが実に印象的だった。まさにあの将棋は羽生の「大局観」の勝利だった。第二局の時にも述べたが、中原誠というベテランになってからの変身の格好の見本もいる。羽生は羽生善治にしかさせない将棋の方向性を目指して若手と対抗しつづけてくれるものだと私は信じている。

羽生はプロとして将棋を指し続ける行為をよくマラソンに喩えている。常に先頭を走り続けるのは不可能でも、トップから一時的に遅れたり追いついたりしながらも、とにかくトップ集団につけ続けることが大切だと。だから、仮にこれから渡辺がトップを走り続けるのなら、彼をペースメーカーにしてその背後にピタリとつけて走り続けられればいいだけのことだ。そして、先頭のプレッシャーがなければ、より大胆で実験的な走りを試すことだって可能だろう。だから、渡辺明のような存在が出てきた事は、決してランナー羽生にとって悪いことではないはずだ。

そもそも、ランナー羽生は既に偉大な業績を残している。多分、数字だけだと羽生を超えるランナーが出

現する事は、まずあるまい。時代が違うので数字が異なるが、大山と羽生がやはり最も偉大な二人のランナーである。

だから、我々ファンはもうこれからは羽生には好きなように走らせてあげたらいいのだ。羽生がどんな新たな魅力的な走り方を発明するのかを思う存分楽しんでしまおうではないか。

昨晚、私はなかなか寝付くことが出来ず、寝てからも次々に夢をみた。その中に羽生善治も登場した。なにか広々とした草原のようなところで、羽生が仰向けになって実に気持ち良さそうにスヤスヤ寝ている。それを私は遠くから見守っていた。

激闘が終わってゆっくり休んでいるのだろうか、あるいはしばらくゆっくり休んで英気を養っているということだろうか。

しかし、私はこういうことなのではないだろうかと思った。昨日の将棋は実に羽生にとっては過酷なものだった。羽生の表面上の自我は、当然それを苦しいと思っている。だが、羽生の深いところの自我 真我 - は、そういう苦しい行為を実は心から楽しんでいるのではないだろうか。これからも恐らく続くであろう羽生の困難な闘いを、深いところの羽生は心の底から楽しみにしているのではないだろうか。そのあらゆる苦しみを含めて。

そして、それは渡辺などの他の棋士にとっても同じことのはずである。いや、この地球上で生きている人間ならば、それがどんな幸福な境遇を享受しよう、逆にどんな苦しみに堪えて生きていようと、本質的には完全に平等にいえることであるはずだ。



将棋世界2011年11月号の山岸浩史氏による王座戦第一局観戦記「衝撃の新手破り」が大変面白い。以下にその感想メモを書くが、詳しい内容については現在発売中の将棋世界を参照ください。

羽生の 9三桂が新手だったが、それは同型の棋聖第三局の後に若手の研究会では重要課題として議論の対象になっていたという。ところが、渡辺は、この手(の研究課題の重要性)を知らずに 三五歩を指してそれが結果的に素晴らしい手で、ほとんどこの対局を決めることにもなった。そして、若手の研究ではこの 三五歩は全く検討されていなかったという。

渡辺の大局観が素晴らしかったわけだが、山岸氏は渡辺と羽生の将棋を正反対だと指摘する。

いわゆる羽生マジックは、普通の棋士なら切り捨てる異筋の手まで拾い上げる特異な能力がもたらす妙手だ。渡辺の場合は「定跡になるならこの一手」「受けを考えても意味がない」と読みを極端に絞り込むことで、本筋に一直線に向かっていると思う。(中略) 拾い上げる羽生と絞り込む渡辺、おそらく方向性は正反対なのだ。

確かに渡辺の場合は、本筋の手を決して逃さずに発見する嗅覚があるような気がする。但し、渡辺の場合は手を絞り込むのにあたって、いわゆる大局観による読みの省略という手法ではなく、むしろ徹底的に具体的に手を読み込んだ上で絞り込んでいるような気もする。

大局観と読みというのは、決して無関係ではなく不即不離の関係にある。読みの裏づけがあって大局観も成立するし、大局観がないと読みを絞り込めない。多分、渡辺の場合はまず基本としては具体的な膨大な読みがあって、その上での大局観だという気がするのだが、どうだろうか。

渡辺が 三五歩を読んだ過程もこの観戦記で明かされているが、その思考過程はきわめて具体的かつ合理的である。決して感覚的になんとかかなりそうというのではなく、常にきちんとした根拠がある。渡辺のリアリストらしいところである。

手を絞り込む大局観の持ち主として谷川の名前もここであがっている。しかし、谷川と渡辺では明らかにその性質が異なっていて、谷川らしい美意識に裏打ちされた手の絞込みに対して、さらに渡辺はそれに加えて合理性を追求しているともいうか。

渡辺は現代棋士の典型のように言われるが実はそうでもない。確かに戦いながら玉をかためて細かい攻めをつなぐというスタイルは現代的そのものだが、それを遂行する過程の上での思考プロセスにおいては意外に古風なのかもしれない。

羽生は渡辺将棋についてこのように評価しているそうである。

谷川さんに似ていると思います。

自分の価値観や美意識などを基準に読む手を絞っているところが似ているなと思いました。若い人の感覚ってもっとわからないものかと思っていましたが、そうでもないのだなと。それに気づいたのが去年の竜王戦の最大の収穫でした。

この話で思い出すのは、渡辺が修行時代に谷川の棋譜を実際に盤に並べてしっかり考えて理解しようとし

たという話である。渡辺はパソコンも駆使して棋譜を調べる現代棋士の典型のようなところもあるが、その一方で最初からこういう「古風」な勉強法を取り入れていた。

恐らく、渡辺には二つの側面が共存しているのだろう。現代棋士の側面と伝統に則る棋士、デジタルとアナログ、大局観と読みのバランス、感覚面と合理性等等・・・。

そして、それが他の一般的な若手と渡辺の差になっているような気がする。本局の 3五歩を若手の共同研究は発見できなかった。それを渡辺は独力でその場で発見した。

渡辺が最近どのような研究会をしているか知らないが、インタビューを見ると自宅で一人で長時間盤に向かう時間も多きようである。現在は共同研究が全盛だが、渡辺はそうした風潮に対しても、けっして否定するのではなくある程度距離を置き始めているのだろうか。やはり独特のバランス感覚があるような気がする。羽生将棋についてはこれまで様々なことが語り尽くされてきた。しかし、渡辺将棋の本質については、まだ十分語られていないように思うし、そもそも渡辺将棋をきちんと理解できている人間がいないのかもしれない。

そして、羽生だけがようやく渡辺将棋の本質を理解しはじめているのかもしれない。

J T将棋日本シリーズ決勝結果 (棋譜再生可能)

( J T将棋日本シリーズトップページ )

今更だけれども。

渡辺明の先手で 7六歩に対して羽生の二手目は 8四歩。しばらくはずっと二手目 3四歩だった羽生が最近 8四歩も指し始めている。

先日の王座戦第一局でもこの出だしだったが、その時は先手の渡辺が角換わりを選んだ。今回は矢倉。この二人は去年の竜王戦第二局やNHK杯で先後逆で矢倉を指している。その時は羽生の 4六銀 3七桂型に対して渡辺は 9五歩型だった。

今回は渡辺が先手でも後手でもよく指して高勝率を残している 4六銀 3七桂型に対して羽生は 8五歩型を選択。先手が穴熊に組み替えるのが定跡になっている。

この形は今年の名人戦の第四局と第六局で 羽生 vs 森内でも指されていてどちらも羽生が快勝している。名人戦では61手目 3五同角としてそれが定跡とされていたようだが渡辺は 1五香とした。不勉強でこれが純粋な新手なのかは知らないが、名人戦の後にも当然研究が進んでいるのだろう。

さらに、その後も渡辺は香車を突っ込んで成り、羽生が飛車をおさえこみにきたところも飛車を見捨てて猛攻を続けける。

自玉は穴熊で堅い形ではないにしても遠く、その状態で細い攻めを巧みにつなげるという渡辺お得意のパターンで大優勢になった。

しかし、羽生も 8八歩で穴熊から玉をひっぱりだして必死に食らいつく。渡辺がしっかり受けてやはり玉型が大差過ぎて先手勝ちと思った瞬間に羽生の 6七金の鬼手がとんてきた。歩のきいているところに金をただ捨ててである。 同歩なら後手の飛車と角が先手玉に直通してくる。 6八金などと更にくいつくのだろうか。

渡辺は 同金として以下 5七歩成に 3四馬から 7一銀としたが、これが敗着になったそうである。今週の週刊将棋によると、 5七歩成を 同金とはらい 6八飛成には 7八金とがっちり受ければ先手が優勢を保てたと書かれている。

しかし、(この後の部分が私が今更記事を書く気になった理由なのだが)、実は 7一銀のところでは 7五桂以下後手玉に即詰みがあったそうである。

ツイッターである方がこの将棋を激指ソフトで棋譜解析した結果をつぶやかかれていて、詰み手順も教えていただいた。

手順は 7五桂打 同歩 7四銀打 同玉 7五銀 8三玉 7四銀打 9三玉 8三金打 同飛 同銀成 同玉 6一馬 7二銀打 8四飛打 9三玉 8三金打 同銀 同馬まで

もし感想戦で出ていたら週刊将棋にも当然この詰みが載るはずだから、対局直後の時点では二人とも詰みに気づいていなかっただろうか。或いは、詰みにも後で気づいたが(羽生は対局の時からかも)前述のきっちり受ける順がより確実な勝ちという意味なのだろうか。多分その辺は将棋世界の観戦記で明らかになるだろう。どちらにしてもソフトにかかるとういう詰む詰まないが一発で分かってしまうのは恐ろしくも味気ない話である。

さて、とはいえとてもその後、詰むとは思えない先手玉を鮮やかに詰ました羽生はやはり見事だった。あ

るプロも一目だとあれが詰むようには見えないと言っていた。

週刊将棋によると渡辺は 6 七金に「びっくりして分からなくなった」そうである。いかにも正直な渡辺らしい感想である。ちなみにソフトだと決してああいう鬼手にも驚いてはくれないわけだが・・・。

現地で解説していた豊川孝弘の講評が終盤の凄まじさを分かりやすく表現している。

大げさに言えば、今日の観客の皆さんは歴史的な対局を目撃したことになる。(中略) 後世の語り草になるような勝負だった。

NHK杯の羽生 vs 中川を彷彿とさせるような信じられないような終盤の逆転劇だった。

先日の王座戦を見ていて私はこう思った。羽生善治をこんな負かし方をすることが出来るのは渡辺明しかない、と。しかし、今回の将棋を見たら今度はこうも言いたくなる。渡辺明をこんな負かし方をすることが出来るのは羽生善治だけだ、と。

## 竜王戦中継サイト

後手丸山の作戦は今回の竜王戦の命運をかけた飛車先不突き一手損角換わり。第三局の進行を辿って丸山忠久が先に変化した。さらに 8 筋の突き捨てから 7 五銀と動いてきたところに渡辺明が打った 4 六角が好手だったようで、丸山は 7 三角と手放して受けざるをえなかった。

渡辺は 4 六角にも、さほど時間を使ってないが本局に限らず（相対的には）定跡が整備されてない飛車先不突き一手損の形で、その場うまく適合する指し手を決断よく導き出して毎回初日からペースを握った。丸山が戦前予想された横歩取りを捨てて竜王戦で採用した秘策ともいえる飛車先不突き一手損だったが、渡辺の対応力の前に全く効果を発揮することが出来なかった。定跡が隅々まで整備されている横歩と比べると、この飛車先不突き一手損は採用者も多くはなく（あくまで相対的には）未開分野で力勝負になりやすいが、むしろ渡辺の局面把握能力の明るさを引き出してしまっただけで逆効果だった。やはり横歩の定跡の穴とか裏をつく作戦の方が良かったのかもしれない。というのは結果論だが。

後手三局でいずれも初日から先手優勢（気味）になったのでは、現在の渡辺の充実ぶりを考えると、あまりにも苦しかった。戦術的には、これが今回の竜王戦の一番のポイントだったと思う。

また、激しく行く 5 五角と穏健な 3 五角の二種類あるところで、腰をおとして考えて封じ手にしたのも、渡辺らしい「封じ手巧者」ぶりだった。

両方あるので丸山は両者の対策を考えなければいけないし、渡辺は 5 五角と決めておいて本譜のように激しく一気に決めに行くか 2 五桂とするかなど一晩熟慮出来る。

二日目は、いつ将棋が終るかという雰囲気だったが、丸山も意地と底力を見せて 5 一金など独特な粘り方をみせてかなり追いつけた。8 三飛のところで 8 六歩としておけば難しかったそうである。但し、難しいにしても今回の渡辺の終盤の切れ味を考えると、やはり竜王に分があったような気もするが。

結果的には渡辺のいいところばかりが目立った磐石の防衛劇になった。丸山は、先手の角換わりのスペシャリストとして序盤の駆け引きでは渡辺を少し上回ったようにも思えるが、それが直接勝ちに結びつく形ではなかったのが惜しかった。6 五歩型は、ベストの形で仕掛ける、あるいは仕掛けさせない為のせめぎあいだけれども、例えば相腰掛銀先後同型のような勝敗に直結するところまでの一直線の定跡ではない。渡辺の角換わり後手での 6 五歩型も、やはり手強いという印象が残った。

これで渡辺は八連覇。これからさらに脂が乗り切ってくる年代で、どこまで連覇が続くか分からないような竜王戦での強さである。

しかし、渡辺も最初からこんなに強かったわけではなく、森内から竜王を奪取した際には、まだ当時では実力的には少し森内が上かというところを 8 五飛戦法を駆使して、また若さに似合わぬ度胸の据わり方と勝負強さでワンチャンスを見事にものにした感じだった。

同じく将来を囑望されていて既に実力もトップクラスと思われる豊島将之が昨日の王将戦プレーオフでチャンスをものに出来なかったのと対照的である。やはり将棋の実力以外にメンタルなどを含めた総合的な人間力が大切なのかもしれない。もっとも、豊島はその実力の高さは誰もが認めるところなので、単に出世のスピードが遅れただけに過ぎず、必ず頭角を現してくるはずである。

さて、渡辺はその後も羽生世代の挑戦を次々に受けてきたが、特に初期は毎年挑戦者有利の前評判だった。今の渡辺では考えられないことかもしれないが、それを毎回実際には、深い研究や封じ手、持ち時間の使

い方などを含めた細かい意識的な戦略や、持ち前の勝負度胸を用いて、その力を余すことなく発揮することで毎回下馬評を覆してきた。それを積み重ねるうちに、いつの間にか現在の誰もが認める力を蓄えてきたのだ。

だから、渡辺は天才型というよりは、むしろ努力型なのかもしれない。なぜ竜王戦だけで勝てるのかと久しく言われ続けて来たが、それは単純に言うと実力がそれくらいだったのだが、毎年他棋戦の結果にめげずに精進を続けているうちに本当に竜王にふさわしい実力を涵養してきたのだと思う。具体的には、羽生世代よりも一時期本当に苦手にしていて全く勝てなかった久保や深浦を最近は内容的にも圧倒しているのがその証拠と言えそうである。

逆に言うと、竜王戦の初期の厳しい状況を毎年乗り切ってきたのも渡辺らしい。二日制なので、封じ手、時間の使い方、思考のペース配分、食事やおやつのとりに方に至るまできめ細かく意識的に戦略をたててそれを実行してきた。本来持つ実力以外に補うことが出来る部分を全て出し切っているような気がする。先ほどの話の総合的な人間力が渡辺の場合は高く、世代交代といわれつつも今でも本当に羽生世代を倒しているのが彼一人というのもその辺と関係しているのだろう。実力だけなら彼とほぼ遜色ない若手もいるが、彼らとは人間的な線の太さに差を感じてしまうのである。

そういう、もともと人間的な力では申し分ない渡辺が、ついに将棋自体の実力も上り詰めて来た。本当にこれからが恐ろしいような気がする。

さて、一方の丸山挑戦者。

渡辺とは全く別種の人間的総合力で我々を魅了し続けてくれた。竜王戦と言え渡辺の庭である。対局上我が家のようにリラックスして振る舞い、時には率直過ぎる物言いで対局相手を苦笑させ（特に初期）、傍若無人ともいうべき大胆な振る舞い、肉料理をがつつり食しおやつにはケーキをしっかりと平らげる食欲等々で、盤外ではすっかり竜王ペースになるのが通例であった。

しかし、今回の挑戦者には全く渡辺の流儀が通用しなかった。渡辺のはるか空の上を行く食欲で度肝を抜き、対局態度もマイペースそのもの。と言うか食べ物の話ばかりで恐縮だが、丸山にとって深刻な苦しい場面でもカツサンドや南国の果物で栄養補給することに余念がないのだった。

例えば、第四局の夕方のNHKBS放送で、島朗と山崎バニラさんが解説している間に、丸山が夕食代わりのレーズンパンをモグモグする姿が映し出された。カメラが大盤に戻って島の解説が続いて無事終了。

さて、カメラが対局上に戻ると、丸山はまだ食べ続けていて新しいレーズンパンに手を出しているではないか。島が急遽、丸山の食事の解説も始める。

「これが結構終盤の急所の一打になるんですよ。これがですねえ、渡辺さんが結構苦手としている丸山さんの旺盛な食欲なんですよ。食べっぷりもいいですねえ。この時間帯は棋士の食欲が一番落ちる時間ですねえ。終盤で。ここでものを食べるなんて考えられない人が多いと思いますよ。丸山さんの強みですよ。しかも、楽しそうにおいしそうに食べていますからね。渡辺さんの視野の先に丸山さんの食欲が入っているでしょうから。丸山さんは意図していないんで盤外戦術ではないです。でも気にはなると思います。竜王がかつてなかった相手であることは間違いないですね。しかし、すごいもんですねえ。この一番大変な局面でこれだけ食に集中できる精神力はすごいですよねえ。」

島朗、渾身の名解説である。将棋の解説よりはるかに冴えていたと言ったら怒られるだろうか。しかも、そんな島の名解説をあざ笑うように丸山は延々とモグモグし続けたのであった。記録の門倉啓太がチラチラと丸山を見やり、丸山が食べ続ける前で渡辺が前傾姿勢で必死に読むシュールな絵であった。

第四局では朝にふぐちりを食して驚かせた丸山だが、本局でも昼食に蟹の丸揚げを含む中華フルコースを注文した。後手の丸山が相当苦しいとされていて、しかも負ければ竜王戦が終る局面である。さすがに、私

もあまり食べられないしおいしくはなっかただろうと思ったのだけれども、鳥解説を敷衍すると、実はおいしく悠々と平らげたのかもしれない。

しかし、丸山は夕食になると豪華な食事にもあまり手をつけずに飲み物をとるくらいだったそうである。つまり丸山は単なる食いしん坊の大食漢ではなく、あくまで将棋の思考の為の栄養補給であって、食べようと思わなければ食べないでもいられる鉄の意志の持ち主なのだ。そして、周囲の目など一切気にせずに対局の為ならどんな手段も講ずる。冷えピタだって頭に三枚貼るのだ。本人にとっては、ベストを尽くして対局に専念するための真剣そのものの行為である。ただ、それが見ている周りの人間たちにとっては、たまらなくおかしいだけである。上質なコメディの条件である。そして、観る者は思い切り笑いながら、そのコメディを演じている人間の真剣な極上の芸にひそかに敬意を抱くのだ。決して馬鹿にした笑いではない、健全で根源的な笑いである。

丸山自身は常に真剣である。だから、笑いを呼ぶこともあれば、感動を呼ぶこともある。例えば、伝説の村山聖との深夜にまで及んだ順位戦の激闘。村山の体調は最悪だったが、丸山は厳しい指し手を延々と続けた。見守っていた村山の弟弟子の増田裕司には丸山が鬼に見えたそうである。しかし、結果的にあの対局は伝説として語り継がれている。

丸山にとっては、夕食代わりにカツサンドをモグモグやるのも、村山と死闘を繰り広げるのも、全く同一次元の真剣そのもの営為なのである。

今回もまた丸山が真のプロフェッショナルであることを改めて確認したシリーズであった。勝負には負けたが、多分或る意味では渡辺が初めて完敗した挑戦者だったといえるだろう。

[将棋・初代女流王座に16歳「棋士」めざす奨励会1級\(朝日新聞\)](#)

[将棋：奨励会員が女流王座 16歳・加藤1級、初タイトル\(毎日新聞\)](#)

[将棋・女流王座、加藤桃子が初獲得...奨励会員初\(読売新聞\)](#)

[奨励会の加藤1級が初代女流王座 将棋リコー杯16歳\(日本経済新聞\)](#)

[未恐ろし天才少女！JK初代女流王座/将棋\(1/2ページ\)\(サンケイスポーツ\)](#)

[未恐ろし天才少女！JK初代女流王座/将棋\(2/2ページ\)\(サンケイスポーツ\)](#)

若干16歳の加藤桃子が、将棋リコー杯女流王座戦で清水市代女流六段を五番勝負の末、3対2で破ってタイトルを獲得した。

将棋リコー杯女流王座戦は今年度から始まった女性参加の大型棋戦で、加藤はいきなり女流将棋界のトップの地位を占めることになった。(もう一つマイナビ女子オープンという同格の棋戦もあり現在女王位を保持しているのは上田初美。)

現在、将棋界は羽生善治などの男性棋戦と清水などの属する女流将棋界に分かれている。部分的に交流はあるものの、基本的には羽生などが正式の「棋士」であって、女流棋士は地位的実力的にはその棋士の世界に対して従属的な立場と位置づけられてきていた。

但し、正式の「棋士」になる資格は男性に限定されず、女性も可能なのだが今まで実際になった人間はいない。

棋士になるためには、その養成機関の奨励会に所属して、級位段位を徐々に上げて厳しい競争を勝ち抜いて四段まであがると、はじめて正式に棋士の地位を獲得する。加藤もその奨励会に所属して修行中の身であり、現在奨励会一級である。他にも里見香奈など数名が所属しているが、男性と比べると圧倒的に少数派なのが現状である。

そして、今まで奨励会に所属する女性は「女流棋戦」に参加することが許されていなかったが、最近制度変更があって、女性の奨励会員が女流棋戦に参加することが可能になった。逆に女流棋士が奨励会に参加することも許された。きっかけは若手女流棋士の代表的存在である里見香奈三冠(女流名人女流王将倉敷藤花)が奨励会で修行する決意を固めたことだった。里見も現在、奨励会では加藤と同じ一級である。

さらに、リコー杯女流王座戦の主催者が、全ての女性に開かれた棋戦というコンセプトを打ち出し、女流棋士、奨励会員、アマチュアが全て参加可能になっていた。

トーナメントを勝ちあがったのが加藤と清水である。清水は長年女流将棋界のトップとして君臨し続けてきた代表選手である。従って、奨励会員で年齢も若い加藤との対決はきわめて象徴的な意味合いを有するものにならざるをえなかったのである。

## [リコー杯女流王座戦中継サイト](#)

まず、作戦面で加藤は清水が得意とする先手の相掛かりを受けるなど真っ向勝負していた。それには、やはり奨励会での研究の裏打ちの自信もあるのだろう。また、普段は指さないらしいゴキゲンを用いるなど、やはり精神的に少し余裕があるのかということも感じさせた。

一方、清水も得意の相掛りや右玉で対抗したが、女流タイトル戦でよく用いる右四間は封じていた。右四間も強力だが、攻めが単調で男性プロでは中川など少数しか指す棋士がない。もしかすると清水は奨励



会の研究を警戒したり、加藤相手だと受け止められると思ったのかもしれない。作戦面でも加藤の方が伸び伸びとやっているという印象があった。

将棋の内容としては清水が経験をいかして序盤で優位に立つことも多かったが、中終盤の力で加藤が勝負に持ち込んで抜け出して勝つという印象だった。将棋は序盤でよくなっても、そこから勝ちきるのが大変で終盤でひとつでも間違えるとすぐ逆転するゲームである。

清水も終盤の大変強い棋士でそのために長年女流のトップであり続けたところもあるのだが、奨励会で男性に混じってもまれている加藤が、さらにそれを上回っていた。

中終盤の手の見え方には、加藤の個人的な才能も感じるし、またプロ棋士の卵たちと将棋を日常的に指しているゆえのセンス それは男女差など関係ない種類のものを感じることも多かった。

但し、第四局では完全に勝ちになったところからウツカリで大逆転を喫したし、最終局も 6 四銀から強引に攻め込んで力でねじ伏せたけれども、例えば相手がプロ棋士なら的確にとがめられてしまいそうな危うさも感じさせる指し方だった。要するに、まだ若くて勢いもあるが荒削りなところもあるようだ。それは 16 歳という年齢を考慮すれば、むしろ当然だろう。

しかし、そうしたところも加藤の魅力になっていた。私のような素人にも明らかに才能があるのが感じられたし、彼女の真の目標である奨励会抜けに希望も抱かせる内容だった。但し、奨励会は本当に厳しくて加藤のような才能がゴロゴロしている鬼の世界である。本当にこれから勝負なのだろう。

今回は奨励会一級という将棋界での実力の位置づけが明確な加藤が登場することで、従来やや曖昧だった女流棋士の実力が図られる結果になってしまった。そういう意味でも清水にもプレッシャーが大きかっただろう。

しかし、その問題については、従来の制度構造を考える必用がある。そもそも、奨励会というのが、例えば囲碁と比べて「プロ」になるのが限りなく狭き門の世界である。従って、特に昔に絶対数でプロ将棋を目指す女性が少なかった状況では、女性が男子プロを目指すこと自体大変困難だった。昔も奨励会にチャレンジする女性はいたが、今とは比較にならないくらい男性社会度がひどくて女性は身の置き場もない雰囲気だったらしい。

従って、女性がプロを目指すならば実質女流棋士になるしかなく、結果的に男性プロの世界と離れた世界で将棋を指さざるをえず、情報の共有化もままならず、それが女流の進歩を遅らせてきた側面もあるだろう。清水の名誉のために言えば、例えば清水が現在の加藤と同じ年齢で奨励会で修行していれば今よりはるかに強かったはずである。そういう素材なのである。

だから、遅まきながら奨励会と女流の両立が認められたのは大変結構なことである。特に若い女性は、まず奨励会で修行しながら女流で指すというのが当たり前になるとよいと思う。そうなれば、女流の実力の進歩は現在よりさらに加速されるはずである。

今回の加藤の戴冠は女流の世界にとっては厳しい面もあったが、そのように建設的に考えてみたらどうだろうか。

清水については、ツイッターで Zeirams 氏が、最終局の日の朝と終局後につぶやいていた言葉を紹介しておこう。

清水さんは「背負う人」。あからの前に、奨励会員の前に。女流棋士の歴史と体面を一手に引き受けるかの如く、凜として戦いの場に赴く。戦国時代の姫もかくやと思わせるような凄絶さすら感じる。

そんな清水さんが今日、初代女流王座を懸けた最後の戦いに挑む。

里見、桃子、といったあたりに何度となく「斬られ役」になってしまう清水さんだけど、何度斬られててもしゃんとしている。勝者の価値を高めるのは、美しい敗者の有り様なのだと思います。捲土重来を期待します。

何も付け加えることはない。

加藤について。将棋も勿論だが、その人間も魅力的である。素直な明るさと伸びやかさと、勝負師の卵らしい垣間見せる強気と、少女らしいお茶目の混在。何もかも自然でフツーなのだけれども、それが得がたいキャラクターの非凡になって眩い光を放っている。ある方はツイッターでこのように表現されていた。

ももこちゃんって、小学校を休んだ日の夕方、宿題のプリントとか給食のパンとかを届けにきてくれる同じ町内の同級生っばい。なんかなつかしい感じがする。

加藤については、将棋世界などで最近とりあげられているのだが、彼女も 谷川や羽生同様 素晴らしい家族の支えがあったようである。最後にそれらを幾つか紹介しておこう。マスコミが食いついて彼女の邪魔にならないか心配だが、将棋連盟は彼女が本当にプロ棋士になるまではそれらの攻勢から彼女を守る姿勢で奨励会に専念できるように配慮していただきたいものである。

(おばあちゃんとは) よくケンカするんです (笑)。お互いにガンコで気が強くて、すぐカッとなります。ケンカはするんですが、いつも私のことを応援してくれていて、家事全般も祖母がやってくれています。

(お父さんとは) 親子でペアマッチに出場したのがよい思い出です。不安だった私の手をずっと握ってくれていました。小学校 5、6 年生くらいの時です。

私がガンコで戦法のこととちょっと言い合いになったときには、あんまり言うことを聞かないもので、素直になれって、生涯ただ一度のピンタをされた思い出があります。(以上将棋世界 12 月号より)

(奨励会入りはお母さんの意見も大きかった。) 私はまだ小学生だった桃子の人生を女流棋士として決めてしまうのは早いと思った。主人がそうだったように、奨励会なら、いずれ将棋をやめるという選択肢だってある。その方が道が広いと思ったのです。(将棋世界 1 月号より)

毎朝、父の遺影に手を合わせて家を出る。前は「がんばります。力を貸して」と呼びかけたのが「勝ってきます」に変わってきた。(朝日新聞 12/13 より)

(あくまでもプロ棋士が第一目標ですか?) はい。父との約束ですし当然です。(将棋世界 12 月号より)

局後の記者会見で、彼女は「趣味は将棋なので……。ええと、好きなことは、食べること歌うこと寝ることです。」と言っていた。

加藤桃子 16 歳。

## 王将戦中継サイト

### 第一局棋譜

遅くなりましたが、あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いたします。

さて、王将戦開幕。久保利明二冠が、佐藤康光、郷田真隆と純正羽生世代の連続挑戦を受けることになった。それぞれ、豊島、広瀬という若手代表格を負かしての挑戦。一時期は世代交代の流れが加速されるかとも思ったが、羽生世代の地力、底力には驚くばかりである。

二人とも逃げなくて独自の工夫のある居飛車党である。従って、久保振り飛車との真っ向からのぶつかり合いが予想される。

久保は先手石田流、後手ゴキゲン中飛車の黄金コンビで二冠を獲得したといっても過言ではないが、最近不調を囁かれている。その原因は、本人の調子以外に、特にゴキゲン中飛車に対する居飛車側の研究が徹底的に進んで以前のようにゴキゲンで自由奔放に指せなくなっているが大きいような気がする。

現在のゴキゲンを見ていると、かつての藤井システム同様に研究され尽くした爛熟期(人によっては末期と捉えるかもしれない)のようにも思える。但し藤井システムについては、それを支えるのが藤井一人で藤井大將が倒れればシステムも崩れるという状況だったが、ゴキゲンに関しては久保の専売特許ではなくてスペシャリストが何人もいる。だから、居飛車グループとゴキゲングループの共同研究の争いなのだが、やはり数的にも上位棋士の顔ぶれでも居飛車党が圧倒的に優勢で、一時期は居飛車党でもゴキゲンを採用していたが現在は本当のスペシャリストしか採用しない感じである。それも、藤井システムが辿った歴史と似ている。

久保もこうした現状を踏まえて、2月号の将棋世界でこのように述べている。

ゴキゲン中飛車に対する居飛車の作戦はいろいろあるが、最近は超速と居飛車穴熊の2つに絞られてきた印象だ。それだけこれらの戦法が有力と見られているわけだし、振り飛車側も対応が迫られているのである。

従って、佐藤の対策よりも久保がそうした居飛車研究にどう対抗して新機軸を打ち出すかが注目される。

本局で佐藤が採用したのは超速。それに対する久保の対策は菅井新士の 4 四歩。将棋世界の久保講座「さばきのエッセンス」でも前述した言葉に続いてその「振り飛車側の対応」として紹介されていた。王将戦に久保がぶつけてきた最新対策である。

本譜のように激しいことになる形なのだが、佐藤がグイっと 5 七玉とあがったのが、そういう激しい流れを玉自ら出陣して受け止めて先手の歩得を主張しようという形にとらわれない力強い一手。

さすが、独創的な佐藤将棋、といたくなくなるどころだけれども渡辺明ブログによると、この手まで(酒の席ではあるが)研究されていたそうである。(但し 3 二銀型)。本当に現代の研究はおそろしい。

### 渡辺明ブログ 王将戦とか。

但し、「誰かが「さすがに 5 7 玉はないよね」 酔っ払いの一同、笑う」ということだったようで、研究

はしても実際にこれを堂々としかもタイトル戦で指せるのはやはり佐藤だけなのかもしれない。  
控え室には宮崎アニメの熱烈なファンで「天空の城ラピュタ」を何度も繰り返し見ているという神谷広志がいた。以下棋譜コメントより。

記者「神谷先生は大変ラピュタが好きだとうかがっていますが」

神谷七段「ええ（笑）」

記者「 5七玉は天空の城という感じがしますか？」

神谷七段「ラピュタねえ（笑）。最後は崩れるんですけどね（笑）」

神谷の軽口ではないけれども、さすがに先手がまとめるのは難しいというのが普通の感覚なのだろうが進行を見ると先手も指せるし、少なくともハッキリ悪くなるということではなかったようである。

その後も久保が銀得を果たすが、佐藤はその代償に2三にと金をつくって後手は歩切れという主張である。いかにも人間的な大局観だと思うのだが、ソフトのGPSや（私個人所有の）激指は5七玉の局面でも銀損したあたりでも互角か少し先手が指しやすいと捉えていた。

5七玉についてはソフトは「こわさ」を知らないので分かる気もするが、銀損の場面でも先手よしと判断できるのは、もはやソフトが駒の損得だけでは局面を把握していない証拠と言えるだろう。

とは言っても、まだまだ形勢は難しいように見えたのだけれども、局面が進むにつれてどんどん佐藤がよくなっていき最後は大差になってしまった。

佐藤の指し手を振り返ると、あくまで2三のと金をいかして2二歩から駒損を回復して相手をあせらせつつ、久保の動きに自然に対応しているだけである。ということは、やはり5七玉の構想が素晴らしかったのだろうか。

感想戦では、後手は封じ手のあたりまで遡って工夫するべきだったということである。つまり、その後別に後手に大きい悪手があったわけではなくて、5七玉の将棋の作りがよかったかもしれないということだから驚きである。佐藤流の大局観が正しかったのだろうか。

久保も戦力を中央に集めて必死に迫り、我々のようなアマチュアなら慌ててしまいそうなところだが、あっさり7七玉とかわすのが冷静で勉強になるし参考にしたいところだった。最後も7四桂以下かっこよく決めて結果的には佐藤の快勝。

局後の感想で、佐藤は5七玉について「これしかないと思いました。」と言いきったそうである。佐藤の新手は有力でも誰も真似する人がいなくて本人も嘆くのだが、この天空の城流を真似する棋士は果たして誰か現れるのだろうか？

佐藤はおやつに好物のキウイのジュースを連投していた。どうしても竜王戦の丸山のパイア、マンゴーを連想してしまう。もし、この二人がタイトル戦を戦う事になったら、思い切り二人に食べてもらうために南国の地で対局したらどうだろう。現地で果物を調達すれば経費節減にもなるし（なりません）。

さて、王将戦名物のスポニチさんの勝者罰ゲーム、今年は前日から入念に準備されていたようである。

[スポニチ 3連覇狙う久保王将 佐藤九段は「自分らしい将棋を」](#)

[王将戦中継ブログ 見参！ 掛川城！](#)

というわけで、私も恒例の？「写真でボケよう」を一応やっておこう。

新作映画「7人のオタク戦国武将」主演男優

明日の朝には勝者罰ゲームも公開されるはずなので、こちらも見逃せない？

棋王戦中継サイト

第二局棋譜

久保利明の初手 7六歩に対して郷田真隆は 3四歩で、久保得意の石田流を受けてたつた。二手目 8四歩だと先手中飛車になってそれも久保の得意形だが、最近はそれに対する居飛車の研究が進んで、なかなか久保も石田流を指させてもらえない印象があった。

勿論、どちらも大変有力な戦法だが、やはり久保のきわめて個性的でユニークな石田流のイメージが強烈である。

それに対して郷田も王将戦で挑戦中の佐藤康光も、相手の最強作戦を受けてたつて撃破したがる場所がある。二人とも猛威をふるっている丸山忠久の先手角換わりを一時期堂々と受け続けていた。

しかも、王将戦第四局の佐藤も本局の郷田も早々に 8五歩と突きこす形。これは久保得意の空中戦、乱戦になりやすく、最近では飛車先を突くのを保留して先に玉を囲うケースも多い。二人とも挑戦者が正面突破型なので面白い将棋を観ることが出来ている。

王将戦第四局と同様に進んだが、先に手を変えたのは久保だった。いきなり 7四歩と突っかけて 5五角。こんな単純な攻めでいいのだろうかという思い切った仕掛けである。しかし、こういう一見素人っぽい攻めが出現するのが現代将棋だし、軽いフットワークで動く久保将棋の特徴でもある。

久保も当然十分研究した上での採用なのだろうが、郷田がそれに対して出した答えが見事だった。

6四銀に 8四飛とはまた過激だが、ツイッターで教えていただいたところによると「久保の石田流」にもほとんど同じ形でこの変化が書かれていて、以下 同飛 2二角成 4四角 同角成 同歩と本譜と同様に進んで以下 9五角 8二飛打 2二銀で、先手が少しいいという久保の判断だそうである。

実は控え室の山崎隆之もこの順を指摘していたが、ニコ生解説の森下卓は「山崎流の 2二銀もなんか切ないですね。さすがに後手がイケてると思うのですが。私は後手持ちです。」と評していて面白い。

これはどちらが正しいかということではなく大局観の問題である。むしろ「普通の」感覚、特にある程度の年代以上の居飛車党なら森下の意見に組するのではないだろうか。しかし、久保はこういうあまり筋がよろしくない変化もきちんと踏み込んで考えて指せると考えられるのが強みなのではないだろう。どちらが勝つかは、久保 vs 森下で実際に戦ってみていただくよりない。

久保が 9五角としなかったのは、少し後の感想コメントで 9四飛とされて飛車を取りきれないとあるので、それを嫌って 2二角と変化したのかもかもしれない。

2二角に対して森下解説では、まず 3三角 同角成の後同じように王手飛車をかけて取ったあとに 2一飛とすれば先手もまずまず、従って 2二角には 4二金とするという解説だったようだ。以下、1一角成に 3三桂としておいて、先手は銀香と角の二枚換えだが後手も馬を閉じ込めてどうかということころだろうか。それでも、普通の感覚だと後手をもって十分指せそうな気もする。

しかし、郷田の思い描いた構想は全く異なっていた。

まず、8六歩を入れておいてから、がちり 1二飛と自陣飛車で受けて馬を追い払う。こうすれば先手は当然桂馬も香車も拾うことが出来ず駒損確定である。

しかし、それだけでなく郷田は十字飛車の筋を活用して飛車を盤面一杯に転換して 4二に据えて久保玉の玉頭を直撃する形をつくりあげた。

単に自陣飛車を打って受けるだけでなく、盤面全体に目配りして支配する形に仕立てあげたセンスはちょっ

としたアートである。いかにも本格居飛車正統派の郷田らしい美しい対応だった。

久保も、時としてこういう思い切ったことをするのが長所だが、こんなに見事な答を出されては脱帽するしかないだろう。

残る課題は、1 二の飛車をどう働かすだけだが、それも郷田は3筋をのばして二枚の飛車を綺麗に活用して、あとは郷田が久保玉を粉碎するのを見守るだけになってしまった。

郷田の会心譜である。

二人とも全く逃げないタイプなので次局以降も潔い将棋が観られそうである。

ニコ生解説の質問コーナーで、森下が丸山忠久の健啖ぶりについて話していた。竜王戦での旺盛な食欲も記憶に新しいところである。

森下が直接聞いてみると、丸山はあれはストレスのせいだと答えたそうである。確かに丸山は、対局後はドリンクを口にするくらいであまり食べなかったと聞いた。

つまり、人間には二通りあって、ストレスがかかると一切ものが喉を通らなくなるタイプと、逆に過食してしまうタイプがいる。実際に絶食症と過食症という対極の症状が存在するのだ。

だから、竜王戦で朝ふぐちりを食したのも昼食で中華フルコース蟹の丸揚げ付きを注文したのも、猛烈にパイアマンゴを平らげたのも、ヒレカツサンドを既に夕方からモグモグやっていたのも、全て対局の過酷なストレスゆえだったのかもしれない。すっかり面白がっていた私はちょっとばかり反省させられたのである。

しかしながら、待てよ。本当にストレスと言うなら、並の人間なら将棋で負けてしまったら、その後ヤケ酒ヤケ食いに走るのがむしろ普通ではないか。丸山は負けても恐らく顔に微笑を浮かべて静かに飲み物のみとっていたのだろう。豪華な食事類とアルコールの強烈な誘惑に囲まれながら。

丸山のストレスによる過食というのは決してウソではないだろう。しかし、恐らくそれは自分でコントロール不能なものではないのだろう。対局時のみは仕方ないからどれだけ食べてもいい、しかしそれ以外ではきちんと節制するという鉄の意志が一貫して働いている。

その辺が我々凡人と丸山のような一流棋士たちを分かつ点なのに違いない。



まるで二日制のタイトル戦で二日目の朝に初日の棋譜を再現するかのよう、羽生善治と渡辺明が淀みなく指し続けていく。違いは読み上げているのが記録係の三段ではなく女流の藤田綾であることだけだ。彼女の読み上げでリズムを取るかのよう、指し手が読み上げられると、ほとんど間髪をいれずに二人が指し続ける。

しかし、これは初日の指し手の再現ではなく、NHK杯の決勝なのだ。まるで儀式のように淡々と指し手が進んでいくが、画面からは異様な緊迫感が伝わってくる。一体どこまで指し手が進んでしまうのだろうか、どこで止まるのだろうか。所作の静かさと裏腹に、二人の間で眼に見えない猛烈な火花が散っている。見ている我々も猛烈な胸騒ぎがする。

しかし、さすがに前例のある将棋だ。二人には因縁の過去のある形である。一昨年の竜王戦第二局で二人では初めてこの形を指した。相矢倉で後手の渡辺が 9五歩型に対して羽生は 6五歩の宮田新手という定跡形を辿り、羽生が見せたのが本譜でも出てくる 1五香の新手。このタイミングで香車を走るのが盲点で先手が優勢になったと言われた。しかし、将棋は渡辺が鋭い端攻めの勝負手を放ち羽生も乱れて渡辺の逆転勝ち。

さらに、二人は昨年のNHK杯の準決勝でも全く同じ形を指した。その時は本譜でも出てくる 6四銀としたのが竜王戦との違い。竜王戦でも感想で有力とされていた。しかし、その時の感想コメントで先手良しとされる順で実は後手良しの変化が潜んでいた。渡辺の仕掛けた罠。が、羽生はその順を回避する改善手順を披露して攻めをつなげて勝ちきった。その後手勝ちの順を感想戦で二人が指すシーンもきわめてスリリングだった。羽生は罠を見抜いており、渡辺はバレていたかという表情（のように私には見えた。）そして一勝一敗の末について今回三度目。二人とも相当意地っ張りで負けず嫌いである。二人の間での因縁のテーマ図。ちなみに前回の対局では、羽生は 7一馬のところで一度 3四桂を入れていた。その後去年は 7一馬としたところで確か渡辺が飛車の逃げ場所を間違ったと悔いていた。別の場所に逃げていれば後手も指せていたかもしれないと。

そのような経緯を受けて先に手を変えたのは羽生。今述べたようにいきなり 7一馬としたのだが、その手も文字通りノータ임だった。新手まで「研究済みですよ」と言わんばかりに。さすがにそこで渡辺の手が少し止まったが、小考して 4二飛。さらに羽生もそれ程考えないで指し続ける。未知の局面に入っても勢いが止まらないかのようなだった。

渡辺が 3九から飛車を打つ。普通は3八から先手玉にきかしたいが、感想戦によるとそれだと 2七銀 3七飛成 3六金と強引に飛車のききを止めて 3四桂の王手飛車を実現する。

それを考えての 3九飛だが、それでも羽生は 4八銀。基本的に同じ意味である。一見奇異に見えるが、二人ともそうした筋が当然のようにみえていたようである。

しかし、渡辺が 4五歩と催促したのがうまく、羽生も 3四桂とするしかなく後手陣も一息つく。渡辺も当然簡単には攻め潰されない。

羽生も急な攻めはなくなって馬で香車を拾って、今度は渡辺が 8六歩と玉頭に綾をつける。羽生は手抜きしながら受ける強気の対応。渡辺も桂馬を8六と9五に据えて先手玉にプレッシャーをかける。

対して羽生は 2六桂から8六の桂馬を拾って 3四桂のつなぎ桂での王手飛車の筋を狙って踏み込む。受けにくそうだ。羽生がうまくやったか。

と思った瞬間に渡辺の 6二飛。解説の森内俊之も気づいていなかった。ハッとさせるが指されてみればナルホドの手。飛車を逃がしつつ馬に当てて 6七金も睨んでいる。こういう勝負手の好手を逃さないの

が渡辺の強さである。羽生も何度もこういうのにやられている。

しかし、羽生の方も冷静だった。馬を見捨てて 9五銀ともう一枚の桂馬を払った。先手玉も安全になり攻めるための持ち駒も豊富になった。この辺のやり取りはまさに最高峰である。しかも早指しで二人ともこうした高度での確な順を逃さない。

以下も際どかったが、羽生が渡辺玉に必死をかけ、あとは羽生玉が詰むかどうかという局面に。渡辺も持ち駒が豊富で先手もこわいが、後手は上部におさえる駒がなく詰みはなかったようである。羽生が逃げ切って優勝した。

序盤の二人のこだわりのテーマ図から、お互いに厳しく目的のある手で手段を尽くしての攻防。本当に将棋自体にピンと張りつめた緊迫感があったいい将棋だった。間違いなく現在のベストカードはこの羽生 v s 渡辺である。

結局先手が僅かながら良くて、それを羽生が守りきって勝ったということのようだが、その僅差をめぐっての攻防が実にハイレベルで並みの棋士なら軽く逆転していたのではないだろうか。

感想戦でやっていたのは、9六歩のところから4九角として以下7九香3八角成5七銀として、以下後手が入玉を目指す展開。渡辺もそれを少し考えていたそうである。しかし、さすがにそれは実戦では指しにくかったのかもしれない。

これで羽生はNHK杯四連覇20連勝で名誉NHK杯の資格を得た。なんと10回優勝である。他の棋戦での永世資格にあたるが、条件が厳しすぎるので、もしかすると羽生以外にこの資格を獲得する棋士はもう現れないかもしれない。

今年の王座戦では渡辺が羽生の20連覇も20連勝も止めた。言うまでもなく羽生の永世竜王と永世七冠を現在止めているのも渡辺である。そのように節目節目で常に羽生のストッパーになってきた渡辺だが、羽生は渡辺を直接たたきこむことで大記録を樹立した。

今まで何か二人の間に何か前世のカルマがあるかのように、ことごとく勝負どころの激闘を渡辺が制してきたが、これでその呪いも解けたことだろう。また今年の王座戦で一部で囁かれていた第一人者交代の流れも断ち切ることに成功した。やはり本局も大変な大勝負だったのである。

とは言え、今後もこの二人の戦いはまだまだ続いていくことだろう。我々双方のファンとしては一番見ていてしんどいカードでありしびれるカードである。また、今述べた様々な記録とか因縁とかとは関係なく、二人にとっても一番指していて指しがいいのある将棋を共同して創作できる相手なのではないだろうか。

本局も私は録画を見ているだけで疲れ果てた。勿論勝負に対する関心もあるが、二人の将棋自体が具体的に語りかけるものの質の高さ緊張感のせいというよりは、おかげである。

私的なことを言うと羽生ファンの私としては、どこかで羽生には渡辺に大きいところでやり返して欲しいと思っていたが、これでもうかなり満足した。これからは少しは二人の戦いを冷静に見ることが出来そうである。

いやいや、そんなのは多分ウソだ。実際に二人が戦ったら、また今回のように熱狂して夢中になってしまうに違いない。

将棋ファンとしてこれ以上幸せなことは、果たしてあるだろうか？

[名人戦棋譜速報 \(有料\)](#)

[将棋名人戦チャンネル](#) [ニコニコチャンネル](#)

将棋世界 6 月号の名人戦第一局観戦記 (山岸浩史氏) の冒頭に森内俊之のミニインタビューが載っている。森内の昨年末の 11 連敗、年度勝率三割台の成績について厳しい質問をされているのだが、森内はさほど気にしている様子もなく、むしろ羽生善治との名人戦に向けての高揚した気持ちを語っている。「あ、でもモチベーションはいま、私も高いですよ。去年の復位以来、このときを待っていましたから。子どもの頃から背中を追いかけてきた羽生さんと 400 年という大きな節目で戦えるのは本当に感慨深いですし、やりがいがあります。」

「面白いシリーズになると思いますよ。」

森内は大変繊細 (ナイーブ) な部分と同時にいい意味で鈍感な部分を持ち合わせている棋士、人間なのだと思う。

普通なら去年の悲惨な成績に精神的に参ってしまいそうなものだが、「もう済んだこと」と気持ちを切り換え、なおかつ小学生の頃からのライバル羽生との大舞台での再戦を、(まるで小学生そのままのように)、心待ちに楽しみにしている。遠足の前の晩のように。

羽生に対する一種の尊敬を全く隠そうとしないのも森内流だ。このインタビューに限らず、羽生に対する敬意を常々口にしている。

そんな羽生相手だから、何も遠慮もせずプレッシャーもかからず、全ての力を思い存分ぶつけることが出来る。今回の森内の戦いぶりは、まさしくそんな感じだった。

例えば、対戦相手が渡辺明だったら、こうはいかないだろう。世代が下で自分が竜王を奪われた相手に対して大変なプレッシャーのもとに戦うことになるだろう。そういうナイーブさが、多分森内が渡辺や羽生と違うとても人間的な (魅力的な) ところだ。羽生や渡辺なら、相手に対する思い入れなど捨て去って目前の勝負に徹底するだろう。

第六局は角換わりの将棋に。第二局と同じ形で、森内の工夫は前例のある 4 六金 (王座戦で後手の羽生が採用したが先手渡辺の名手 3 五歩が出た形) から、新手 2 六角から 3 六金とした。

3 六金が森内の指したかった手で、いかにも森内流の手厚い手である。後手は角と銀と金のスクラムを中段に築き上げ、また先手が黙っていると 4 六歩や本譜の 4 六桂の押さえ込みをみせている。

今シリーズは、後手が常に苦戦し、なおかつ有効な新手、新機軸を二人とも出せないでいたが、やっとな程度は手ごたえのありそうな対策を森内が出した感じである。

とはいえ、局面はまだまだ難しいし先手も十分指せるはずだったが、羽生の封じ手後の構想が羽生にしては今ひとつ冴えなかった。

5 一龍がひねった順である。羽生のことだから当然一晩綿密に検討したうえでの方策だと思う。

ところが、感想コメントによると 2 一龍のあと 1 一龍としてその後 3 九飛とする変化ならば先手も十分指せた様だ。羽生はそれを指摘されて素直に肯定したようだ。

今回の控え室には、三浦、深浦、橋本、豊島といった猛者が揃っていて大変優秀だった。しかし、それでもそういう控え室の検討のはるか上に行く順を見つけ出してくるのが羽生だ。ところが今回は残念ながら違った。

さらに、形勢を損ねたのが 6九銀。すかさず 7五歩とされて長考しているようでは明らかに変調だ。先手陣に手がついて 1七角とぶつける余裕がなくなってしまった。

これも当然すぐに 1七角だとまずい理由が羽生にありそうなものだが、検討陣の手順を聞かされてまとも素直に納得していたらしい。

本局の羽生は勝負どころで調子がよくなかったと言わざるをえない。

以下は後手が明らかに優勢になったが、6三とが羽生流の勝負術。普通はこんなと金では間に合いそうにないが、指されてみると後手も難しい。検討でも一直線の攻め合いでは大変かもしれないと言われだしていた。

しかし、森内は敢えて 3八桂成の一直線の攻め合いに踏み込んだ。この一手に森内の羽生に対する態度、というか逆に信用が現れていたと思う。

6三とは羽生流の勝負術で、このように堂々と「やってこい」と言われるとむしろ怯んでしまいがちだ。実際本譜の攻め合いの順は大変難解できわどい。しかし、森内は羽生との幾多の対戦を重ねてきて、恐らくこういう時にひいてしまうとダメで、勇気を持って踏み込まないと羽生には勝てないことを経験的に熟知しているのではないだろうか。

この本局の手順に限らず、森内は羽生の指し手に最強の順で応じることが多かったような気がする。最初のインタビューの話とも関連するが、森内の羽生に対するある種の信頼と力を思い切りぶつけようとする姿勢が好結果を生んでいたようにも思える。

とは言っても、本譜の順もほんの少しでも後手が間違えれば一気に奈落の底へ転げ落ちるこわいギリギリの順だ。だが、森内は全く間違えなかった。

ニコ生解説の渡辺も、控え室の三浦や豊島や橋本も、あまりに森内が正確無比なので、最後は検討するのをやめて森内を賞賛していた。

本局は森内が完璧な終盤で僅差のリードを守りきって完勝。名人防衛にふさわしい素晴らしい将棋だった。

本シリーズでは本局以外は全て先手勝ち。しかも、内容的にも先手の完勝が続いた。

将棋世界の第一局や第三局の観戦記では、羽生の準備不足も指摘されていた。確かにそういう側面もあったのかもしれない。

ただ、具体的に見ると第一局では先手の森内が最新型を回避して、去年の名人戦以来出ていない形に誘導した側面もある。羽生は最新型なら何らかの準備があったのかもしれないが、指されなくなった形まで研究が及ばずその場での対応を余儀なくされたところもあるかもしれない。

第三局の羽生後手の急戦矢倉でも先手の指し方に色々分岐があって、問題の 3三銀はその場で考えたそうだった。

羽生も当然研究はしているだろうが、先手の様々な変化を隅々まで研究していたわけではないようだ。勿論、将棋の変化自体が無限で全てを研究するのは無理だ。ただ、羽生の場合は、研究しつつも実戦で考えてその場で最善手を見つけ出すタイプというところもある。またその能力も抜群に高い。しかし、この長時間の森内相手の名人戦では羽生のそういう個性が弱点になって綿密きわまりない森内の研究に屈した側面もあるような気がする。

もっとも、森内も後手では苦戦していた。しかし、少なくとも第二局では 2七金という明確な狙いがある手を指したし(不発に終わったが)、第四局も矢倉のマイナーな形をつく戦術をとった。これも羽生の 3六歩を見落として非勢に陥ったが指し方によっては難しい将棋だったかもしれない。

そして、最終局は(本人は苦しい分かれだったと述べているようだが)もある程度は後手でも指しがいのあ

る形を提出することには成功していたと思う。

つまり、事前の十分な準備ということでは、やはり森内がやや上回っていたような気がしてならない。短時間の将棋なら羽生は何とかするのだろうが、長時間で森内が相手だと苦しかったように思う。結果的には森内完勝のシリーズのように感じられた。

先手の9時間将棋の有利について、渡辺が[ブログ](#)でも語っていた。基本的に先手が有利で「一度間違えてもまだ大変」という感覚で、まして長時間だとさらにミスしにくいとい分析である。

さらに今回のニコ生解説で、先手は野球で言うと最初から「2-0」でリードして後手が頑張っても最後は「2-1」で先手勝ちという言い方もしていた。野球ファンならお分かりだと思うが、最初から「2-0」というのは相当大きいハンディである。トッププロが先手、後手でそのような感覚で戦っているのだとしたら驚きだ。

羽生について言えば、序盤戦術は別として不利な局面からの猛烈な追い上げするテクニックは相変わらず圧巻だった。第三局は二日目昼で投了してもおかしくない局面から、本当にあと一歩まで追い上げた。

第五局も終盤あやしくなったが、最後勝負手(厳密には勝敗不明だがむしろ後手にチャンスが大層と言われた) 4三桂を逃して、一直線に負けのコースを選んでしまった。恐らくあれが今シリーズ最大の分岐点で、あそこでもし勝ちを拾っていたら全く展開は変わっていただろう。羽生がそういうチャンスを大事な対局でことごとくものにすることを目撃しつづけていたので、かえって珍しい場面でもあった。

それと何といても、羽生の場合は二日制での序盤戦術が(本当に我々素人にとっては高すぎるレベルの話だけれども) 課題だろう。森内相手でも、渡辺相手でも、基本的には主導権を握られて、それを圧倒的な終盤力で何とかしているという印象だ。だが、森内や渡辺相手だと結局一歩届かずに終わってしまう。

いくら羽生でも序盤で有利か互角程度にしないと厳しいレベルに現代将棋はきているのかもしれない。

ニコ生初日の解説は飯塚祐紀だった。大変人柄がよくて魅力があって私の好きな棋士の一人である。今期は順位戦で昇級してB級1組で戦う。

将棋世界7月号では加藤一二三先生の対談相手もつとめている。なんでも長時間にわたり、一生懸命しゃべったつもりだが結局加藤先生がほとんど喋っていたそうである。

将棋自体も加藤参考にして棒銀も用いるし、金銀をよく使う点など似ていると自分では思っているが誰にも指摘されたことはないとのこと。

その飯塚七段は棒銀の本も書いている。加藤先生がニコ生出演時に、自分の棒銀の本はあるが現在入手困難と述べられていたが、棒銀に興味のある方はこちらをどうぞ。

また、加藤先生にも教えてあげたいところだ。それとも、対談のときに話したのだろうか。何となく加藤トークに圧倒されて、話す余裕がなかったような気がするが・・・。

## 棋聖戦中継サイト

### 棋譜

私は本来徹底したネガティブ思考で一番悪いことからまず考える。

王者羽生が二連勝して若武者中村相手に貫禄を見せつけた。普通は誰でももう決まったと思うだろう。

しかし、棋聖戦は今でこそ羽生が五連覇、その前は佐藤康光が六連覇したものの、さらに遡ると毎年のようにタイトル保持者が猫の目のように変わる波乱のタイトル戦だった。

また、実は二連勝のあとの三連敗とか、王手をかけた後の連敗が実に多い。一日制で持ち時間も短めなので勢いで一気に流れが変わることが多いのだ。

そして、そのキッカケになったのが羽生七冠に三浦弘行が挑戦した第 67 期。羽生が先に王手をかけて誰もが七冠の勝利を疑わなかったところから三浦が連勝して七冠の一角を崩した。

三浦は当時から斬り味鋭い終盤に定評があって一直線の読みあいになるととんでもない力を発揮した。それは今と変わらない。但し、厳密に言うと三浦の総合的实力は当時よりも現在の方がはるかに上で、まだまだ若さの荒削りもあった。しかし、それが逆に勢いとなって当時最強の羽生を負かした。

実は私は現在の中村太地に、当時の三浦とちょっと似たものを感じていた。特に後手の横歩取りでの研究の深さと、鋭く踏み込む思い切りが良くて力強い指し回し。最近も深浦や森内や行方といった強靱で粘り強い猛者たちを一刀両断に斬り捨て続けていたのである。

現在の勝率は決してフロックではないと思っていた。

だから、もし第三局で一局でも入れると大変な事になると私は踏んでいた。別の例としては、言うまでもなく伝説の竜王戦、羽生 vs 渡辺。実力以上に若さというものは本当にこわいのだ。

だから、今回の第三局は本当に大切だと私は勝手に思いこんで一人ですこぶる緊張していたのである。

将棋は予想通りに横歩取りに。先手の羽生が 9 六歩と注文をつけた。前例の少ない形だが、実は中村が先手でも後手でも経験がある。敢えて羽生はその形を採用した。第一局も後手で中村が経験のある形を羽生は採用していた。横歩取り激しい変化が多く終盤の詰む、詰まないまで研究がしやすい戦形である。それなのに羽生は相手の経験のある形にした。これは果たして単なる偶然なのだろうか？ ちょっとこわいのであまり考えたくない。

中村が棋風通りに、決してひるまず鋭く踏み込む。44 手目 7 七角成としたあたりではもう先手に受けがなくて将棋が終っているのではないかとも言われた。ニコ生解説の屋敷伸之も「いやー、どう受けるのでしょうか。」とか言いながらきちんと本譜の 2 七金を見つけ出して指摘していた。変な形だがこれが唯一の受けで、しかも驚くべきことにハッキリせず、それどころか先手の方が有望という評判である。

この辺りが丁度午後のおやつの時間帯で、羽生が飲み物をすする姿がニコ生にも映し出されていた。当然羽生はこの筋で難しいと考えていて中村もそれは分かっていた様である。

他の順もあったが、中村はらしくこの激しい難解な順に踏み込んだ。今回は屋敷の解説が実に正確で、実際まだまだ難しかったようである。

特に 3 三金が気づきにくい強気な受けの好手で後手もやれるという評判だった。ところが、感想コメントを見ると羽生は 4 二金から敢えて飛車を成らせて 4 一金打とはじいて馬を守りにきかず順を指摘し

ていた。確かにそうなると思えば後手の守備力がすごくて先手も大変そう、むしろ苦しそうだ。中村の好手 3 三金をさらに上回る順を読んでいたら羽生の凄みを感じた。

さらにきわめつけは羽生の 3 六飛。激しい斬り合いの順が続いていたので誰だって 3 四飛といく順ばかり考えてしまう。ところが、それだとダメと羽生は冷静に読んでいて、突然チェンジペースしてじっと飛車引き。しかも、そうされると後手に案外有効な順がない。これは中村の立場からするとこたえただろう。時間切迫で厳しいところに、いきなり肩透かしを食らった上に具体的にどう指せばいいのかも分からない。終盤で慌てずに相手に手を渡す羽生流の面目躍如の名手だった。(私が全く理解できずに、ここで飛車をひくようじゃ羽生さんやばいと思ったのはここだけの秘密だ。)

以下、急に形勢がハッキリして羽生勝ちに。本譜だけでなく水面下の読みでも羽生のすごさがめだった。ちなみに日曜日のネット最強戦の糸谷戦もすごい将棋だったが、感想コメントでの羽生の終盤の手の見え方が尋常ではないので興味のある方はどうぞ。

常にレベルの高い羽生の中でも、どうもここ数日はピークの手の見え方の状態だったような気がしてならない。

中村は対局直後に[ツイッター](#)で以下のようなコメントを残していた。

「なかむらたいち @banibanilla

今日は大きな勝負に負けましたが、当然明日からも棋士生活は続いていきます。頑張ります。今後ともよろしくお願いします。」

中村は王座戦では既に挑戦者決定戦に進出を決めている。相手は羽生 vs 木村一基の勝者である。

羽生はこれで 81 個目のタイトルを獲得して、大山康晴の記録を抜いた。丁度将棋の盤の枡の数 81、盤寿で達成とは話が出来すぎだ。

[中継ブログ](#)のインタビューにあるように羽生は棋士生活をマラソンと考えていて、その一つの成果 とてつもなく偉大な到達点 である。

渡辺明が[ブログ](#)で「四冠でも 20 年かかる」と述べていたが、そう考えるといかに途方もない数字なのかがよく分かる。一方で、そのように具体的に考える渡辺にらしさと志の高さを感じずにはいられなかった。

ニコ生解説は屋敷伸之。

まだ奨励会時代に、鈴木大介と研究会で一日に 3、40 局指して、当時年齢も実力も上だった屋敷が一つも負けずに勝ち続けたことがあるそうだ。鈴木はそのことが忘れられず、いまだにトラウマになって屋敷が苦手だとか。

それに対する屋敷のコメントがちょっとすごかった。

「いつまでもやめないなあと思っていました。」

プロ棋士根性として負けても負けてもやめようとしないうちの鈴木の方はまだ分かる。それくらいの根性がないとプロにはなれないのだろう。

それよりも、残酷に平気で手加減せずに負かし続け、「やめないなあ」とか平然と思っている屋敷にプロの凄みを感じずにはいられなかった。

屋敷は人格円満で温和で平和なああいうキャラクターだが、本質にある勝負師的資質にはもやはりとんでもないものがあるのだろう。・・・そう思った。





将棋は文学である……という話を、これからしようと思う。

「ものぐさ将棋観戦ブログ」によって昇華された将棋の世界は、まごうことなき文学作品であるという話を。将棋を楽しむことと文学作品を楽しむことは、とても似ているのだという話を。

そして、優れた文学との出会いには人生を変える力があるのだという、そんな当たり前の話を。

まずは、出会いの話から 。

## 一. 竜王戦の伝説

2008年9月頃。ネット上にこんなお触れがたまわっていた。

将棋の羽生さんが何かすごいことをやらかすらしいぞ。

その頃の私は、将棋界のことと言えば羽生のことしか知らなかったし（これは今でも熱心な将棋ファン以外の人にとってはそうかもしれない）将棋自体にも、とりたてて興味があったわけではない。ただ「永世竜王」とか「永世七冠」という言葉に、ただならぬ高揚感のようなものを感じて、しばらくそのニュースを追いかけていたことを覚えている。

正直、情報の量に驚いた。素直に驚かされた。将棋連盟の公式サイトや新聞サイトの伝えるニュース以外にも将棋に関するホームページ、ブログがこんなにあるのかと。世の中には、こんなにも将棋が好きな人がいたのか、と。

そうやってネットで竜王戦の情報を拾っているうちに、私はいつしかそれとは気づかぬうちに「ものぐさ将棋観戦ブログ」に出会っていたのだった。

私にとってのあの伝説の竜王戦は、ものぐさ氏のこの一言から始まる。

『物語の発端はこうだ 』

[ 羽生と渡辺の物語が長い中断を経て今再び始まる 2008年09月13日 ]

第21期竜王戦の開幕前に、この対決が世紀の対決であることを真に理解していた人がどれだけいたのだろうか？確かに情報は存在した。渡辺明竜王が現在4連覇中。勝てば「5連覇で永世竜王」という規定を満たす。逆に羽生が勝てば「獲得通算7期で永世竜王」。将棋界には過去、永世竜王はまだ誕生していない。つまり今回のタイトル戦を制したものが「初代永世竜王」の資格を得ると。

大勝負の気配は何となく伝わってくる。だが、これだけの情報で盛り上げられるのはある程度将棋や将棋界のことを知っている「既になりにコアな将棋ファン」という層だけではないか、とも思う。将棋の世界でどれだけ数多くのドラマが展開されていたとしても、伝えられる断片的な情報からそれを体感することはとても難しい。

情報は、単なる情報でしかなく。

資料は、単なる資料であるに過ぎない。

本エントリーでものぐさ氏は、中原誠のエピソードを紹介している。それは奨励会時代の渡辺明を評した言葉であり、そして今も続く「羽生 v.s. 渡辺」の戦いについての、あまりにも因縁めいた一言だった。

『中原誠は、渡辺の活躍ぶりを知って目を輝かせていった。「羽生さんは、この子に倒されるんだね」』

ものぐさ氏はこの言葉に続けて、渡辺明が頭角を表して以後の「羽生&渡辺」にまつわるいくつかのエピソードを紹介していく。そして読者は理解していくのだ。初代永世永世竜王を賭けた戦いが『将棋の神様』によって周到に準備されたと思えないような舞台設定となっていることを。それは長期に渡って熟成されてきた宿命的な決戦であることを。

ものぐさ氏の脳裏に強く記憶されていたに違いない渡辺の台頭を予見した中原の言葉は、ものぐさ氏の語りによって、いつしか読者の脳裏にも突き刺さっていく。

「記録よりも記憶に残る……」とはスポーツの世界でよく使われるフレーズだ。曰く「記録よりも記憶に残る選手になりたい」。

記憶に残る、とはどういうことだろうか？スポーツ選手、例えば野球選手であれば、通算安打数、打率、本塁打数、盗塁、投手の通算勝利数……すぐれた記録は長く語り継がれていくのであろう。しかし専門家や熱心な野球ファンならともかく、多くの人の心に残るのは「数字」ではなくあくまで「シーン」である。それは、めったに見られないような印象的なプレーかもしれない。あるいは自分自身の体験とリンクした試合の思い出であるかもしれない。

死に別れた父に、初めて連れていってもらったプロ野球の試合であったり。挫折しそうになった時に、下積み時代の長かったサッカー選手の奇跡的なゴールシーンを見て勇気づけられたことだったり。試合後のインタビューや雑誌の取材で知った、それまであまり好きではなかった選手の意外な一面や印象的な言葉だったり。

そこには必ず「物語」が介在している。語られた物語が、記憶されていく。そうしていくつもの物語が語り継がれ、語り繰り返されて、人々の脳裏に染み渡っていくのだ。スポーツ選手は数字を残すためにプレーしているのかもしれないが、ファンの中ではやがて記録と記憶の主従の逆転が起こり、そこではもはや記録は単なる参考情報でしかなくなっていく。

我々は年表や史書を読んで、源義経に同情したり織田信長を畏怖したり、坂本竜馬に憧れたりしているだろうか？年表の記述など、専門の学者や好事家以外の人々にとっては、単なる文字の羅列に過ぎない。多くの人は、歴史小説を読んだり大河ドラマを観たりして「歴史を記憶する」のではないか。

西郷隆盛と大久保利通は、司馬遼太郎の言ったように「翔ぶが如く」幕末を駆け抜け、「宮本武蔵」は吉川英治の語るとおりに自己を確立していった。

それはあくまでフィクションであると但し書きが付いていてもなお。

そこには脚色があることを知っていてもなお。

人は物語を通して初めて、史実を認識する。

記録された文字や数字、その他情報の価値に疑いの余地はないけれど、それが多くの人の心に刻まれるためには、物語として昇華される必要があるのだ。

奨励会時代の渡辺は『大山二世とも呼ばれていた』という。中原は十六世名人であり大山とはその前の十五世名人だ。歴史に名を残す偉人は、自らの行為だけでなく言葉によっても歴史を継承する責任を負っているのだろうか。中原がかつて大名人を倒して新時代を築き、やがてその座を谷川・羽生へと明け渡したように、史上最強とも言われる羽生にもいずれ落日の時が訪れるのだと、そう中原は預言したのだ。今もなお続く「羽生 v.s. 渡辺」の戦いが、長い将棋の歴史の延長線上にあるのだということを教えられる。戒められる。

こうした、棋士の発した何気ない一言を拾い集めたり、散逸する棋界情報をまとめあげていくものぐさ氏の手腕には目をみはるものがある。

いや、まとめているのではない。紡いでいるのだ。

継ぎ接ぎでしかなかった数々の棋界情報が「ものぐさ将棋観戦ブログ」上で鮮やかなキルトとなって編み込まれていく。

記録が、物語となって。

言葉が、魔力を持ち、そして文字は依り代となって。

いつしか「ものぐさ将棋観戦ブログ」で語られる将棋の世界の虜になって。

こうして私は、梅田望夫氏の言うところの「観る将棋ファン」となったのだった。

このエントリの最後はこう結ばれている。

『将棋の神様がこう言っているのだけは間違いない。「とにかく、この勝負だけは見逃しちゃダメだぜ」と。』

これからも永く語り継がれていくであろう、あの伝説の戦いの始まりを告げるファンファーレが、高らかに鳴り響いた瞬間だった。

[将棋の勝ち方教室 by Dr.Habu 竜王戦第三局 渡辺竜王 vs 羽生名人 2008年11月15日]

高らかなファンファーレとともに幕を開けた第21期竜王戦であったが、期待に反して(?)七番勝負は羽生が圧倒的な強さを魅せつけて3連勝してしまう。形勢に圧倒的な差が付いていたわけではない。むしろ一局一局の将棋は密度の濃い戦いだったはずだ。ただ、多くの人(対戦相手の渡辺明をも含めて)が羽生の大局観 羽生将棋の次元の違いに圧倒され声を失っていた。勿論、私自身が棋譜を見てそのことを理解したわけではなく、ものぐさブログや竜王戦中継サイトでの解説、観戦記等でそれとなく感じただけである。

棋力のない者が、棋譜だけを見てその内容を理解することは出来ない。プロによる懇切丁寧な解説を聞いてすら意味が全くわからないこともある。だが棋譜を理解できない者は、果たして将棋を楽しむことは出来ないのだろうか?その資格はないのだろうか?決してそうではない。ものぐさ氏の功績は、棋譜よりもむしろ将棋を指している棋士の姿そのものを物語の舞台に引き上げ、それを将棋に詳しくない読者にも判るような形で提供したことである。棋力に関係なく将棋を楽しむ術があるのだと、ものぐさ氏は読者に語りかけてくれる。しかもそれはインターネット上で無料公開されているのだ。「ものぐさ将棋観戦ブログ」の登場によって、将棋と棋士の魅力の可視性が飛躍的に高まったのは間違いない。

『非情なまでの勝負術だが、二日目を通じて羽生はどうやれば将棋を確実に勝ちきれるのかを実地でレッスンしているかのようなようだった』

棋譜を並べても判らない、プロの解説を聞いても意味の判らない、それほどに難解な勝負でありながら、結果と印象は羽生が渡辺を圧倒している。そんな有様をこうも見事に表現したものぐさ氏の観察力に脱帽する。そして当時、竜王戦第3局までの空気をこれほどまでに残酷に描写した記事が他にあったらどうか?この記事を読んだ時の私は、今では全くもって考えられないことではあるが「ああ、やっぱり将棋の世界で

は羽生は圧倒的に強く、渡辺明など、まるで、全く、これっぽっちも、もしかすると未来永劫、下手をすると生まれ変わった来世でも、羽生の足元に及ばないのだろうな」と本気で感じたものだった。

この時、ものぐさ氏は羽生の竜王復位を確信していたことだろう。私もそう思った。確信した。何しろ当時の私は「ものぐさ氏の言うことには一片の間違ひもない」と信じきっていたのだから（というより、氏のことを匿名のプロの将棋ライターだと思っていた）。

『次の第四局で、勝負以外にも何かをつかむような将棋を期待しようではないか。』

この一文は、最終的な結果を知っている今となっては、羽生ファンであるものぐさ氏にとって悔しすぎる伏線だったとしか言いようがない。

勿論、戦いは羽生と渡辺によって行われたのであって、ものぐさ氏の創作ではない。しかしながら、この羽生サイドから見れば余裕綽々の、しかし事実を表現していると思えないような一文が記された時、運命の女神がようやく蠢動しはじめたのだと誰が知りえただろう。悪戯好きの女神が、この一節をあえてものぐさ氏に書かせたとしか今となっては思えない。歴史の糸車を回す麗しき運命の女神は勇者に微笑み、そして語り部をも選ぶのである。

## 二. 竜王戦会座

第2期竜王戦は将棋界初となる3連敗からの4連勝による大逆転。渡辺明が竜王戦史上初となる5連覇と初代永世竜王資格の獲得という幾重にも劇的な形での幕切れとなった。あの興奮を今も強烈に記憶している将棋ファンも多いことだろう。七番勝負が終わった後もしばらくの間、心の震えが止まらなかった。それは余韻冷めやらぬというよりも、むしろ（こういう表現に対して、今もまだ不謹慎との批判があるかもしれないが）余震が続いているかのようですらあった。

[竜王戦第七局をめぐる幻想 渡辺明と羽生善治に捧げる 2008年12月19日]

『二人の勝負を見守っていたのは人間だけではない。将棋の歴史上、最大の勝負が行われるという噂を聞きつけて、天に住む神々も、阿修羅も、畜生も、餓鬼も、地獄の住人も、こぞってかけつけてきた。普段は永遠の責め苦しむ地獄の住人たちも、こういう特別な時だけは、神々の計らいによって一時の休息を与えられ、六道の世界全ての生きとし生ける者たちが、二人の勝負を見守ったのである』

このエントリは、諸経の王と言われるほどに多くの人の信仰を集める「妙法蓮華経（法華経）」の靈鷲山会座のシーンを彷彿とさせるような、荘厳なる書き出しから始まった。

靈鷲山会座、それは……天界を統べる帝釈天が、月の精霊・月天子が、地上の支配者シヴァ神が、創造神・梵天が、魔界を率いる阿修羅は幾百千の鬼神を引き連れて。彼らがみな、靈鷲山に馳せ参じ、釈迦牟尼世尊の周囲に着座し、その説法を受けたという伝説だ。

将棋界の靈鷲山に集会した神々たちの役目は『勝負をある程度までは見守り、最後のところでどちらが勝つかを決めること』である。さて、彼ら鬼神たちに、二人の棋士によって盤上で展開された数々の説法の深意は、果たして理解できたのであろうか……。

この記事で、ものぐさ氏が神々の様子を借りて竜王戦が行われていた当時の観客（TVの前だったり、

ネットだったり)の様子を描き出していることに注目して欲しい。あの鬼神たちと同じように、我々無責任な外野のファンは『ボコボコにしてしまえ！やってまえ！』と叫び『将棋を理解認識する能力を奪われているのだが、周りの普通でない雰囲気だけは感じ』『気に入らない点を見つけて、口々にののしり』だしていた。

しかし時間が経過するにつれ、棋力のある者もそうでない者も、羽生ファンも渡辺ファンも、小さな、それでいて無限の空間を内包する将棋盤を挟んで対峙する二人の求道者の姿に、次第に声をなくしていく。

『六道の世界に生きる全ての生き物の、思考や考え感情は、巨大な雲になって、二人の対局者の上に黙々と立ち上って』

そして我々は感動の渦の中に埋もれていったのだった。

あの感動は何だったのか？将棋盤の上で何が起こっていたのか？羽生と渡辺は何をしたのか？本当に将棋を指していたのか？

本質的なことは、言葉では捉えられない。

本質的なことは、体験することでしか捉えられない。

それ故に……人に真理を気づかせるトリガーとして、法華経は一見して荒唐無稽としか思えないような比喩的表現を多用……いや、むしろ濫用してすらいる。数多くの比喩を用いながら、人間の「生」を肯定する。どこまでもどこまでも肯定する。高度な哲学を講義するよりも、人間が生きるこの世界の有り様を肯定する。法華経とは、あらゆる仏典の中でも最高の人間賛歌の経なのである。

生きることの理由や存在の真理について、理屈を積み上げて説明することは出来ないけれど、比喩を使って「気づき」を与えることは出来る。何かを体感することは出来る。頭で判らなくても、心で判った気になってもいい。それで人は救われるのだから。幾百の言葉を連ねて褒められることよりも、優しく握られた父や母の手のぬくもりの方が、人に「自分は生きていていいのだ」という安心を与えてくれるのだから。

だから、法華経は理論ではなく比喩で説く。

その比喩の先にこそ、物語の先にこそ、ホントウの姿がある。

このエントリ 「竜王戦会座」の比喩の先に、伝説の竜王戦のホントウの姿が、見えてはこないだろうか？

ものぐさ氏は、竜王戦のこの戦いの本質は、決して観戦記や評論では語れないと、直感的に悟ったのかもしれない。あるいは、この戦いを演出した羽生と渡辺の姿が、ものぐさ氏に閃きを与えたのかもしれない。いずれにせよ、氏が将棋に深く心酔し、かつ棋士に心から学ぶ姿勢があればこそ、この素晴らしいエントリは生まれたのである。

「竜王戦会座」の比喩が語る教えは、読者にきっと多くの気づきを与えてくれるだろう。

将棋の世界の劫の広がり。将棋道を行く菩薩のような棋士たちの生き様を。ものぐさ将棋観戦ブログの根底に流れる決してぶれないもの。「棋士たちへの限りない人間賛歌」が凝縮された物語。それがこのエントリだ。

戦いが終わり、神々たちは天界へと帰っていく。そして天界の神はポツリと呟くのだった。

『人間って、すごいな。』

誰もが、この言葉に共感したことだろう。あの伝説の竜王戦について語る言葉として、これ以上ふさわ

しいものがあるだろうか？ものぐさ氏が語る言葉には、多くの将棋ファンの心を共鳴させずにはいられない不思議な力が満ちている。

さて。

法華経の話が出たので。出してしまったので。出してしまったついでに。もう一つものぐさ氏の人間賛歌をご覧いただきたい。

### 三. ものぐさ氏の「読棋眼」

白隠禅師は16歳の時に法華経を読み、そのあまりの荒唐無稽さに一度は愛想をつかした、と伝えられている。

ところが。

禅師42歳の折り、故あって再び法華経を読経していたところ、石畳の上で鳴くこおろぎの声を聴く。その声を聞いた禅師は、初めて『法華経』の深意を悟ったという。

自然の実相（ありのままの姿）は何も包み隠してはいないことに。山川草木から人の営みに至る全ての姿の中に、真理はそのまま現れているのに、人間の眼にそれが映っていなかったただけだということに、こおろぎの声を聞いて、はっと気づいたのだという。

法華経は自然を、人間を、この世界を祝福しているのだ、と。赤ん坊の笑顔は何も包み隠してはいないけれど、見る人の心を和ませ幸せな気分にしてくれる。この赤ん坊の笑顔こそが仏性だ。人間を祝福するということは、実はなんでもない日常の中にあることだったりする。そこに難解な哲学や教義など、本来は不要なのである。余計な知識や知恵は人の目を曇らせるだけだ。

古来より学問的知識のみで法華経を批判した学者は多く、若き日の白隠禅師もその一人だったわけだ。経典は、作り話として読むのではなく、その比喩の先に示されているものを読みこなさなければ、その深意は決してはかれない。

法華経は難しいとも難しくないとと言える不思議な経典だ。どちらかと言えば「詩」に近いとも言える。深淵な哲学が記されているわけでもなく、有難い教えが述べられているわけでもない。ひたすら「譬喩」……喩え話が書かれているだけなのだから。だからこそ、比喩の中に秘められた真理に気付く感覚が研ぎ澄まされていなければならない。深意を読み解く眼力がなくてはならない。

この、経典を読みこなす眼力を「読経眼」という。

さて。

この祝福された自然の有り様と同じように、将棋盤の上では全ての情報が開示されている。対局の様子はネットで配信され、プロ棋士の解説や観戦記者のレポートによってさらに詳細な情報が提供される。では、誰もが同じように将棋の対局やその裏に秘められたドラマを解読できるかというと、実はそうでもない。

白隠禅師がこおろぎの声を聞くまで、法華経が説く真理に気づけなかったように、将棋盤の上の戦いや棋士たちの姿の「相」を読み解くのに、それなりの眼力が必要なのではないか？

ものぐさ氏は「読経眼」ならぬ「読棋眼」ともいうべき眼力を持って、棋士たちの戦いの深淵に迫ろうとする。

[2010 王位戦 深浦王位 vs 広瀬挑戦者 第四局までを振り返って 2010 年 08 月 23 日]

当時「羽生キラー」と言われタイトル戦線を賑わせていた深浦が、若武者・広瀬を挑戦者に迎えた王位戦七番勝負の最中のエントリであった。

深浦は、「将棋世界 2007/12」で『「なかなかタイトル戦に出られない時、いつも常連の羽生さんには「ずるい」と思ったし、自分から挑戦権を奪い去っていく佐藤さんには「にくい」とも思ったことがあった』と語ったそうである。だから……と、ものぐさ氏は言う。

『だから、深浦王位が今回もなんだか超然として大物っぽい若き天才にたいしてひそかに闘志を燃やしていてもおかしくはない』と。

一方、広瀬はと言えば、自分が負けた対局の後でも『ところが、対局後に大盤解説上に両対局者が挨拶に行った際に、広瀬は「深浦さんの地元ですから」とアッサリと笑って言ってのけた』。深浦の煮えたぎるような闘志など、どこ吹く風である。

こんな些細なエピソードすら、ものぐさ氏の読棋眼は見逃さない。深浦の心理の揺れに焦点を当てる。当ててみせる。ブログの読者に、棋士たちの人間的な魅力を伝えようと筆を振るう。

超然とした広瀬の言葉を、『「あまりに人間的な」(ニーチェ) 深浦はどのように聞いたのだろうか』そして、どれだけの熱量で持って闘志を燃やしたのだろう。

『徹底した努力の人、闘将深浦王位と、超然とした若き天才、大物の新人類広瀬挑戦者の対決という人間的な側面も今回は見逃せない』

このエントリは「ものぐさブログ」の中ではやや地味な印象を受けた読者も多かったかもしれない。しかし深浦という人間味溢れる棋士の奥底にある『純なる天才』たちへの、恐れと畏れを射抜いた、ものぐさ氏らしい好記事だったと私は思うのだ。

実は私は、このときの王位戦に、始めの頃は全く興味が持てていなかった。タイトル戦の中継も何となく眺めていただけだったとっていい。私に二人の将棋を理解する棋力がないから？……いや、それは別にこのときの王位戦に限った話ではないのだ。要因は別にあった。何のことはない、私には深浦と広瀬が戦っているその姿から何かを感じ取る「読棋眼」がなかったのである。二人の姿から物語を読み取ることが出来なっただけなのだ。生々しいまでに素晴らしい人間同士の戦いの物語が、そこにはあったのに。その物語は羽生世代のスター棋士たちが繰り広げるタイトル戦と比べても何ら遜色のないものであったのに。ものぐさ将棋観戦ブログのこのエントリを読んだこの時まで、そのことに気づきもしなかったのだ。深浦も広瀬も、二人は何も包み隠してなどいなかったというのに！

そう、このエントリはまさに、私にとっての「こおろぎの声」だったのである。

この記事以降の王位戦、私は深浦の一手一手の底に秘められた情念や葛藤、といったものを妄想しっぱなしだった。たった一つの記事で、将棋のタイトル戦の風景を一変させてしまう。ものぐさ氏の語り部たる所以である。この時私は、やはり自分は「観る将棋ファン」なのだと思った。いやむしろ「読む将棋ファン」なのかもしれない。ものぐさ将棋観戦ブログを通して将棋を観たとき、そこには明らかに、それまでとは違う風景が広がっている。

この期の王位戦はフルセットの激戦を制して広瀬新王位誕生で幕を閉じる。「(羽生との) 番勝負は恋愛

に似ている」とまで公言するほどに、憎々しく愛した羽生から奪い、そしてその羽生を相手に防衛までしてみせた虎の子のタイトルを、深浦は失ってしまったのだった。

深浦の心中、いかばかりであったか。

[深浦との死闘を制して広瀬新王位誕生一千日手続きの激闘 2010年09月03日]

この記事にて『私のような羽生ファンにとって、正直言って深浦さんは当初敵役だった』と語る、“あまりに人間的な”ものぐさ氏はまた、敗退した棋士たちに対して『なんでこんなに敗者たちが皆魅力的なのだろうか。現在の将棋界のトップには、本当に素晴らしい奴らが揃っている。我々が過ごしている俗世間のことを考えると、ほとんど奇跡だ』とも語りかける、限りない人間賛歌の人でもあるのだった。

#### 四. ものぐさ流書評

上達を目指す将棋ファンにとって棋書は欠かせないアイテムだ。しかし将棋の本のレベルは様々で、自分のレベルにあった本を選ばないとあまり効果は得られないものだ。幸い、ネット上には将棋の本の書評をまとめたサイトがいくつかあって、購入の際にはとても参考になるものだ。ものぐさ将棋観戦ブログでもいくつか書評を書かれており、それを読んで将棋の本を購入された経験のある方も多いのではないだろうか？

[里見香奈「好きな道なら楽しく歩け」(双葉社) 2010年08月03日]

言わずと知れた女流四冠であり、奨励会初段(平成24年7月現在)の、里見香奈のフォト&エッセイ集。これを購入したときの、ものぐさ氏の顛末が記された私小説風味の一編。本を一冊買うだけのことでこんなドタバタ劇を演じるものぐさ氏……只者ではないな……。

さて、この本の購入をとくに決めこんでいた氏は颯爽と書店に飛び込んで『もしかすると高校生の写真集なんで、オジサン将棋ファンはちょっと店頭で買いにくいのではないかも言われたりもした』が、『そんなことは、これっぽっちも気にせず』『この一冊だけ持ってそそくさとレジへ向かった』そうである。そして『レジには若い女性店員が待ち受けていたが、そんなことは気にも留めなかった。』と。

さすが『私は酸いも甘いもかみわけた立派なオヤジである』。しかし『無意識のうちに裏表紙を上にして、本を店員に差し出していた』あたりは、初めて本を買った男子高校生みたいで微笑ましい。ものぐささんは、まだまだお若いですね。そんなものぐさ氏の心理を知ってか知らずか、この女性店員は『本を表に向け直すと、満面の笑みで「ありがとうございます。」』。この一言をきっかけに『被害妄想が繰り広げられ』たわけであるが、詳しくは本編をご覧いただきたい。

ところで、この時ものぐさ氏に應對した女性店員というのが、実は私だったのです。……  
……………というのはさすがに冗談だが、このときのものぐさ氏の挙動を生で見えたかったと思ったのは、一人私だけではあるまい。

このエントリを読んでさすがだなと思ったのは、こんな一見してふざけたような内容であっても、ものぐさ氏らしさが失われていないことだ。流麗で教養深さを損なわない文体はそのままに笑いを組み立てていくその筆力。辣腕というか、ここまでくるともはや豪腕である。



あえて言おう。このエントリーは、「夏目漱石：吾輩は猫である」の笑いを超えたと。

書評としてはいささか異端すぎる記事ではあったけれども、こうした自虐的というか、自分を決して飾らないところも、ものぐさ氏の魅力であろう。twitterでの氏を知る人なら判ると思うが、相手（フォロワー）の趣味・嗜好、レベルに合わせて、時には気さくに時には大まじめに、時にネタ全開で、意見を発信し、交流を深めておられる。懐の深い人間性はブログの記事にも、そして140文字のツイートの中にもにじみ出るものだ。

だから、この本を買ったものぐさ氏の感想が『個人的なベストショットは表紙をはぎ取るとあらわれる、里見がはじけて走る姿である。これだけでも買った価値はあったと思った』であっても、氏への尊敬の念は晩秋の風にそよぐススキの穂ほどにも揺るがないのである。

里見さんは多くの方が応援したくなるような独特の空気を持っている。将棋に打ち込む姿、心から将棋が好きなんだな、と思わせる数々のエピソード。師匠譲りの「出雲のイナズマ」と呼ばれる終盤力に象徴される将棋そのものの魅力。森師匠曰く『「夢は、羽生善治三冠を負かして名人だ」』……その高い志とそのためへの努力を惜しまない姿勢に人は声援を送るのだろう。だから、『将来振り返って、これが伝説の本になるのではないか、あるいはなって欲しい』と思い、ものぐさ氏はこの本を購入されたという。決して「女子高生のフォト&エッセイ集」に釣られたわけではないのだ。ないはずだ。

一編の書評であってもブレることのない「ものぐさ将棋観戦ブログらしさ」を堪能されたい。それは、氏が、棋士のことをとてもとても大好き（棋士がであって女子高生がではない。繰り返す、女子高生・里見香奈が好きなのではなく棋士・里見香奈が好きなのだ。……女子高生ではなくて、あくまで棋士が大好きってことなんですからね。……大事なことから三回言いました）……という純粋な気持ちなのである。

ちなみに、この書評を読んだ直後の私が、谷川光速流並みの速さでこの本を購入したことは言うまでもない。もちろん Amazon で。

## 五. 直感精読

人生は選択の連続であり、多くの方は目の前に道がなくて悩むのではなく、どの道を歩むべきか途方にくれて苦しむものである。

この道の先がどうなっているか判らない。だから。

どの道も選びたくない。

そして人は逡巡する。人生の選択権を他人に委ねたり、責任を他人や社会に転嫁しようとしたり。

清沢哲夫は「道」という詩でこう喝破している。

「此の道を行けば どうなるのかと 危ぶむなかれ 危ぶめば 道はなし  
ふみ出せば その一足が 道となる その一足が 道である  
わからなくても 歩いて行け 行けば わかるよ」

しかしながら、行けと言われても、やはり最初の一足で気後れするのが人というものだ。選ぶ道を迷っ

た時、論理を積み上げて結論を出せない場面に遭遇した時、自分の背中を押してくれるものは何なのだろう？

勇気か、決断力か。洞察力か、智慧なのか。

[加藤一二三九段 1000 敗の不滅の金字塔記録に寄せて 2007 年 08 月 25 日]

『将棋は盤面を見た瞬間に、次の一手が浮かんでくる。読む価値のある手は 5 通りくらいあるがそのうち一番よい手は一つしかない。(中略) 直感を重んじ、正確さを求め、深みを増すために、直感精読の心得が大切と考える。』

「勘」は誰にでも働くが、「正しい直感」はそうではない。加藤九段はさらりと流しているようだが、そもそも「正しい直感」は厳しい修行の末に磨き上げられた技術と洞察力の上にしか存在しえないものである。加藤九段が『直感を重んじ』ることが出来るのは、自分の才能を信じるとともに、大変な努力の裏付けがあるからなのだと思う。

しかし直感を重んじるだけではなく、さらに深みを増すために『精読』するのだと言う。直感が優れた人間は、ともすれば自分に溺れやすいものだ。成功体験は人に自信を付けさせるけれども、驕りを生む原因ともなりうる。「私、最近ツイてるから大丈夫！」……と言って十分な準備を怠り、結果として失敗してしまった経験はないだろうか？

直感 だけではダメで。

精読 をしなくてはならないのだ。

加藤九段には「此の道を行けば どうなるのかと 危ぶむ」ことはないのであろうか。危ぶむことなく一足を……一手を選択し決断してみせる、加藤九段のその直感に至る途方も無い修練の厳しさを思う。精読し深淵な世界に潜りこむその峻厳さを思う。

ものぐさ氏の語る加藤一二三像には、聖職者の如き清廉な薫りが漂う。

『加藤一二三は「喜び」の人である』

『対局中に大変な高揚感を覚える、モノを創造する人間にしか分からない心の動き』

『加藤一二三にとっては、将棋を指すことも、モーツアルトを聴くことも、信仰も、生きることは全て、それ自体で充足したとてつもない喜びなのではないだろうか。』

『1000 敗は、その喜びの行為の結果に過ぎない』

「直感精読」 この言葉の価値を、今一度噛みしめたい。それは、ものぐさ氏の twitter アイコンにも書かれた、次の世紀にも伝えたい真理の言葉であり、そして才能と努力と人間性の結晶のような尊い教えだと、そう思うからだ。

加藤一二三九段の言葉に「その人に対して愛情がないと、正しく評価することはできない」というものがある。批判し、揚げ足を取り、欠点だけを粗探しして他人を評価した気になっている人間の多いこの世の中で、何という慧眼であろう。私はこの言葉に本物の哲学を感じる。そしてこの言葉は、まさに「ものぐさ将棋観戦ブログ」の根底に流れる哲学そのものでもあるのだ。氏が twitter のアイコンを作成される時に、この真に価値ある言葉を選び抜いたという事実。この真贋を見極める眼があればこそ「ものぐさ将棋観戦ブログ」は将棋の世界の数多ある物語を、鮮やかに描き出すことが出来るのであろう。

## 六. 順位戦叙事詩

A 級順位戦最終局の日。

それは「将棋界の一番長い日」と呼び習わされている。実際に長い。あらゆる棋戦の本戦・予選の中で最も長い6時間という持ち時間で行われるためか、戦いは深夜に及び時には日付が変わることもある。いや、持ち時間だけの問題ではない。棋士たちが文字通り精魂を傾け死力を振り絞るからだ。棋士たちはどの棋戦のどの対局であれ全力を尽くしていることに違いはないだろう。しかしながら、やはり順位戦こそ本場所であるとの認識は、棋士にとってもファンにとっても共通のものであろうと、そう思う。意識的にせよ、無意識的にせよ。

長い長い、途方もなく長い時間、一緒に苦しみ続けることになる我々ファンにとってもまた、この日は「将棋界の一番長い日」なのである。ものぐさ氏は、毎年 [将棋界の一番長い日~] というエントリでもって、この日をレポートしている。氏はこの一日をどのように見ているのだろうか？

『NHK の BS は、対局者が将棋会館に入ってくるころから撮影することになっている』  
恒例となっている選手入場のシーンである。人は何を思うだろう？何を連想するだろう？受験会場に入っていく学生の姿だろうか？昇任試験や業務査定を受けるサラリーマンの姿だろうか？

順位戦は昇級者の一方で降級者をも選ぶ。人を選別する。篩にかける。上を向いて戦う者がいる一方で、篩の目に指をかけてしがみつくなかのような生々しい生存競争が繰り広げられてもいるのだ。あるファンにとって、棋界最高レベルの棋譜が生産されていく喜びと興奮の場であるこの闘技場は、また別のある人にとっては心臓を締め付けられるような、あるいは何かに祟られてでもいるかのように、目を背けたいのに目が離せない悪夢のような修羅場でもある。

数あるものぐさ将棋観戦ブログの記事の中でも [将棋界の一番長い日] シリーズは、割と淡々と綴られることが多い。ものぐさ氏が自身の視点で見た事実をストレートにレポートしている風でもある。「観戦記らしい」と言えば確かにそうかもしれないが、棋士に対して深い愛情を注がずにいられない氏にしては、とても素朴な印象を受ける。普段のものぐさブログのエントリが叙情文ならば [将棋界の一番長い日] シリーズのそれは叙事詩的、とも言えるだろう。

とは言うものの.....この [将棋界の一番長い日~] が、これほどまでに人の心を揺さぶるのは何故だろう？背景にある将棋の世界は、そして順位戦の世界が内包する物語は、それほどまでに豊穡なのであろうか。

神話の世界、英雄伝説、そして民族の戦い.....。歴史を後の世に伝えることを使命とする語り部たちは、しばしば、それを叙事詩という形で語り伝えてきたものだ。棋士たちの姿をありのままに伝え、読者を感動させずにはおかない、まるでギルガメシュ叙事詩を思わせるような [将棋界の一番長い日] シリーズ。韻文の形式にこそなっていないけれども、棋士という英雄たちを物語る、これは紛れもない叙事詩なのである。

物語の終わりには、名人挑戦権あるいは残留を勝ち取った栄光の勝者の姿とともに、偉大なる敗者たちの姿がそこにはあって。激闘の後には、痛々しさと、清々しさと、静けさがあって。

まさに 「兵どもが夢の跡」なのだった。

悲喜こもごも、喜怒哀楽、鬼哭啾啾。どんな言葉を並べても、この日の戦いを目撃したファンの心に燃え盛る火はなかなか消えてはくれないけれど。

そんな余韻に浸りながら。

長い一年間の激闘に想いを馳せながら。

『将棋界の一番長い日』は、ものぐさ将棋観戦ブログのエントリを持って終了するのである。

## 七. 人生を変える一冊「ものぐさ将棋観戦ブログ集成」

おおよそ読書をする人間であれば誰も「人生を変えた一冊」に出会った経験があるはずである。一冊の本との出会いをきっかけに人生観が変わったり、新しい趣味が出来てそれが生活の一部となったり。行き詰まっていた仕事や人間関係の悩みが解消されるきっかけを掴んだり。今ではそれは「本」ではなく、電子書籍であったりブログであったりするかもしれない。メディアは何でもいい。重要なのはテキストなのだから。

私は「ものぐさ将棋観戦ブログ」と出会ったことによって、将棋が自分の人生の中に確かに根付いた。正確に言うと、将棋を指したりプロの対局を観戦することよりもむしろ、本やブログそして twitter 等様々なメディアのテキストを読むことが、たくさんの将棋の物語に触れることが好きになった。人生の一部になった。

「ものぐさ将棋観戦ブログ」に綴られていた物語に魅せられ、将棋の世界に興味を持った人は私以外にもいるはずだ。この世界には、ゲームであるとか勝負であるとか、そういった次元を超えたものが確かにあるとものぐさブログによって啓示を受けた人が、数え切れないほどいると、そう確信する。

先に私は、自分は「読む将棋ファン」なのかもしれない と言った。将棋雑誌や将棋関連ブログ、twitter、あるいは将棋をテーマにした文芸作品等、いくつものメディアで語られる将棋を舞台にした物語はそれほどまでに魅力的だ。タイトル戦のネット中継や TV 中継、ニコ生動画なども勿論魅力的ではあるけれども、文字によって書き起こされ昇華された物語には、他のメディアにはない深みと醍醐味があると思うのだ。

そして将棋テキストの中でも「ものぐさ将棋観戦ブログ」は、その速報性、記録性、分析力、何より将棋と将棋文化と棋士への深い愛情と洞察力において群を抜いている。

今回上梓されたこの「ものぐさ将棋観戦ブログ集成」は、将棋ファンへの素晴らしいプレゼントとなるであろう。もしかすると、この電子書籍をきっかけに新しく将棋の世界に足を踏み入れるファンもいるかもしれない。この書籍が「人生を変えた一冊」になる人がいるかもしれない。そう、かつての私のように。

そうであることを切に願う。新しい将棋ファンが増えることを切に願う。そして将棋と棋士を愛するファンが少しでも増えることを心から願わずにいられない。将棋、そして棋士たちへの深い愛情 それは、ものぐさ氏がもっとも伝えたいことであるはずなのだから。

引用文献： 『道』 清沢哲夫：「無常断章」法蔵館(1966) より

## 少し長めのあとがき

---

本書は私がネット上で細々と書き綴り続けてきた「ものぐさ将棋観戦ブログ」から記事を選んでテーマ別に編集してまとめたものである。

現在弊ブログにおつきあいいただいているが過去の記事は知らない方々に読んでいただいたり、あるいは今まで全くご存知なかった方々が新たにプロ将棋の世界に接していただく機会になればと思っている。

本来これだけであとがきとしては十分用が足りる。しかし、ここでは「序」と「解説」と「表紙」について書かせていただく。

元々は自分の記事を編集してまとめて無料の電子書籍にするだけのつもりだった。しかし、それだけでは何だか寂しいと考えて序と解説と表紙を、私がネット上 主にツイッター で知り合った方々をお願いすることにして快諾していただいた。

「表紙」をお願いしたのは、まるぺけさんである。ツイッター上でも有名な「将棋女子」のお一人でアイドル的な存在である。将棋文芸誌「駒 zone」の表紙、挿絵等も担当されている売れっ子だが、ご覧の通り、私のブログの本質を一目で理解していただける素晴らしい表紙を書いていただくことが出来た。

と言っても、ブログや私をよくご存じない方は分からないだろう。私は普段から、ツイッターでも将棋観戦をしながらつぶやいているが、夜はほとんど(いや毎晩)お酒をひっかけながらである。そして酔ってクダを巻いたり、そのまま寝落ちしたり醜態を夜毎繰り返している。ブログ記事にしても、正直に告白するとそのほとんどが一杯ひっかけながらゴキゲンにいうのが実態である。

というわけで、この表紙のように、本来は「ものぐさ将棋観戦ブログ」ではなく、(黒澤明に「酔いどれ天使」という素晴らしい映画があったが)「酔いどれ将棋観戦ブログ」とするべきだったのかもしれない。

「序」をお願いしたのはネット上で「チェス戎棋夷説」というHP で主にチェスを書きながら時折将棋のことを書かれている方。

将棋ファンにも氏のHP のファンは多い。深い教養と知識に裏づけされた格調高い論考を展開されるかと思うと、私小説的に奥様も登場する絶品なユーモアの文章も書かれる。どう考えても私とレベルの違う方なのだが、なぜか私のブログも面白がって読んでいただいているようなので今回思いきって序文をお願いした。

序文で書いていただいたように、棋士あるいは人間の「二面性」を私がちゃんと描ききれているかどうかは自分ではよく分からない。でも、そう指摘して頂くと、私が棋士という純粋で不思議で人間性の善悪や長所短所が端的に表現されている人間像にどうしようもなく惹きつけられているのはその通りだと思う。

そして、私はそういう人間的な「二面性」をそのままの形で肯定したいのだと思う。

将棋ブログではあるけれども、そういう人間の姿を描こうとするのが私のブログの本質なのかもしれない。そう納得させられた。

ブログをしていて様々な方から色々な感想、コメントはいただくが、まとめた形でどう思われているのかを聞く機会というのは実はほとんどない。

だから、こうして戎棋夷説さんから私のブログの本質に関わるお言葉をいただいたのは新鮮な驚き、感動だった。「こんな風に思って読まれていたのか。」と。

他にもブログを通じてツイッターなどでたくさんの知り合いが出来たが皆さんがどう思って読んでいるのかいちいち問いただきたい誘惑にかられてしまう。

「解説」をお願いしたのは Zeirams さん。この名前のアカウントをツイッターで持ちチェスのブログなども書かれている。

私よりも恐らくかなり若い方で、その関心範囲はチェス、将棋、妖怪、オカルト、仏教、今時のアニメ (私はよく知らない) など大変多様である。私のような旧世代とは多分全く違う形の知性や感性を持たれていてそれが新鮮である。

駒 zone 3 という将棋同人雑誌に書いていた「小説」でも、全く小説の枠におさまらない氏らしい乱雑で疾走する軽やかな知性・感性が遺憾なく発揮されていた。

そんな氏がどんな解説を書いてくれるのか大変楽しみだったのだが、まずご覧になられた通り大変な分量である。

それだけで感激なのだが、私のブログの特徴をうまく章に分けて構成して説明してくださっている。(褒められすぎているのはこの際度外視しておく。) とにかく、色々な本の著者が「解説」を書いてもらったと思うが、これほどまでの解説は滅多にないのではないだろうか。私は本当に幸せものである。

特に私が面白いと思ったのは、深浦 vs 広瀬の記事と関連した白隠の「こおろぎ」の章。ここでも、戎棋夷説さん同様に私の棋士の人間を見る目について指摘していただいている。

全くタイプの異なるお二人にかなり共通することを言われていて私は驚いた。そう、結局私は棋士の人間性の「二面性」をそのまま描こうとしたり、その「あまりに人間的過ぎる」姿をなんとか深いところで肯定しようとしているのかもしれない。

私は将棋のブログを書く時は、一切何の思想も意図も持たずに書いている。本当に何も考えずに将棋や棋士を面白がって書いているだけなのだ。

でも、それとは関係なく私が現代という時代を生きながら、人間の善悪をふくめた深い業をとにかく健康的にアッサリ肯定してしまいたいと祈るように考えている。現実があまりにも、その逆の批判や否定や冷笑や皮肉ばかりだから。

もし、私の将棋ブログが (意識してそう書いているわけではないけれども)、プロ棋士という人間たちの姿によって私の普段のささやかな祈りが届くことに役立っているのならば、これほど幸せなことはないと思う。そして、全くタイプの異なるお二人が似た評価をしてくださったので、もしかすると読者の方々は皆さんそのようなことを感じているのではないかと今は勝手に考えているのである。

ものぐさ将棋観戦ブログ  
<http://p.booklog.jp/book/50363>

著者 : shogitygoo

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/shogitygoo/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/50363>

ブックログ本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/item/3/50363>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社 paperboy&co.